

---

# 東方灰猫円舞曲

風神玲衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方灰猫円舞曲

### 【Nコード】

N1221N

### 【作者名】

風神玲衣

### 【あらすじ】

少年は、独りでした。

少年の隣には猫がいました。

少年は猫に語りかけました。「ねえ、連れて行ってよ」

最後に、少年は独りではなくなりました。

そんな最後だったはずなのに。

目が覚めれば、そこは大樹の穴の中でした。

え？まさかのリスタート？

## 1：「灰色の目覚め」（前書き）

本作品は東方Projectの二次小説となります。

いかな駄文であろうとも『気にしないぜ！』的な人はどうぞ。

『いや……遠慮しとくよ』的な人はバツクしてください。

でも読んでくれたら嬉しいなあ……嬉しいなあ……。

## 1：「灰色の目覚め」

「……………ん」

目を開く。薄く、薄く。

いつも始まりはこうだ。

ゆっくりと目を開き、容赦無く窓の外から突き刺してくる朝日を視界に受け入れて、そこでようやく僕は朝が来た事を実感する。

「……………?」

しかし、違う。何がって?それは……………そう。光がないんだ。いつもなら、薄く、細く開いた世界から光が入ってくるはずなのに。今は、それがない。

「暗い……………」

光が来ないことを理解した僕は、それでもゆっくりと慎重に目を開いた。癖だ。こうしないと光をもろに食らってしばらく目が利かなくなるから。

しかし、今はそうなることはない。そもそも光、太陽光が存在しない。

「なんだ、ここ……………」

言いながら、身体を起こす。そこは、いつもの窓際の、目を開いたら太陽が直接目に入る位置にあるベッドではなく。

「……………木、か?木の、中?」

そう。僕がいたのは、昨夜横になったベッドではなく、木の中。大樹に開いた穴の中だった。

「……………」

寝ぼけて、いるんだろうか。

しかし、その割には周りの雰囲気リアルに感じる。

風に吹かれて囁くような木の葉。

どこからか聴こえる虫の声。

そして、清々しさすら感じられるこの空気。

「夢、だな。そういうことにしておこう」

僕は強引にそう納得し、また横になった。もしかしたら、自分でも知らない内に現実逃避しているだけかもしれないけど。

まあ、寝て起きたらわかるでしょう。

『……君は、幸せだったかい？』

僕は、目の前に横たわる『彼女』に向かって話しかけた。

『彼女』は、ちらつとこちらを向いて、その尻尾をふらりと揺らす。

『そっか……。僕も、幸せだったよ。特に、君と出会ってから』

手を伸ばし、『彼女』の頭を撫でる。『彼女』は嬉しそうに目を細めると、僕の腕を伝って、横たわる僕の身体の上に座った。

『彼女』は、猫だ。

何時からだろう、気がつけば開かれた窓際に座っていて、僕を見つめていた。

ほとんど誰とも会わなくなった僕は、一日の大半を『彼女』と見つめあつて過ごしていた。

『君は……物好きだねえ』

笑って、灰色の身体を撫でる。

『彼女』が現れる少し前ぐらいだっただろうか。

僕は、余命宣告を言い渡された。

持って半年……。早ければ明日にでも。

心臓に開いた穴のせいだ。

決して穏やかではない現実を、しかし僕は穏やかに受け止めていた。

『……もう、いいや』

医療費で生活が苦しく、会いに来るたびにやつれていく親。

なんかかなる。

そう言っつて僕を励まし、僕の笑顔を見て複雑な表情をする医者。

僕は、いるだけで周りを苦しめていた。

『ねえ……。君は、自由に生きてる……。？』

僕の上で、じつと僕を見つめている『彼女』に、僕は語りかける。  
もう、眠たくなってきた。

『ねえ……。連れて行ってよ……。』

次に起きたら、何もかもから解放されて。

『ねえ……。君と、一緒にさ……。』

そんなありえない物語を望んで、僕は『彼女』を見つめる。

そして、その灰色の瞳に吸い込まれるような感覚を覚えながら、僕は眠りに落ちた。

「……………あれえ？」

混乱。

さっきまで見ていたのは夢？

それとも、この大樹の穴で目が覚めた方が夢？

自分の身体を見てみる。あのやけに軽く薄っぺらい患者服ではなく、灰色の甚平が身体を覆っている。もちろん、上半身に張り巡らされていた点滴用のケーブル等も見当たらない。

甚平をつまんでみて、自分の手の爪がやけに鋭いのにも気が付いた。

「……………まあ、いいか」

その一言で片付ける事にした。

夢なら夢でいい。



とにかく、自由に動けるんだからそれを満喫しようじゃないか。

「とっつー!!!」

とりあえず穴から出ることにする。下を見ずに。

すぐに後悔した。

高かった。

ビル何階分だよ!とツッコミたくなる高さだ。

「わああああー!!!」

頭の中冷静。しかし外見大慌て。そろそろ頭の中もパニックに陥りそうだなので。

「フツ……。この程度」

外見も装ってみました。

とかやってる内に葉っぱがもった地面はすぐそばに。腹を括って着地を試みる。

「……………っ!」

スタン。

……………あれ?

固くつぶった目を、恐る恐る開いてみる。僕は四つん這いの体勢になっっていた。

パシッ、と舞い上がった葉が顔を叩いた。

「……………」

立ち上がる。足は痛くない。

まるで猫のように着地してしまったな、と頭を搔こうとして、違和感。

頭に、なんかある。

「まさか…………な」

フニヤフニヤとしたそれは、僕の言葉とは裏腹に確信を促す。

まごつことなき猫耳である。

今考えてみれば、確かに音の聴こえ方がおかしいな、とは感じていたが…………。

猫耳（多分）を触るのを止め、本来耳があるはずの箇所、こめかみの横に手をあてるが、

「ない…………」

やはり、なかった。

これは本格的におかしい。

僕は現実逃避も出来なくなってきた。

「……………っ！」

瞬間、僕は駆け出した。恐ろしいスピードが出て、けれどそれに驚いている余裕も無くて。

先程から聴こえていた水の音に向かって全力疾走。

ザザッ！と草村から飛び出して、目の前にあった透き通る湖に近寄る。

天然の鏡は、見慣れた僕の顔に、いろいろと追加した姿を映し出した。

まず、灰色の猫耳。次に、灰色の髪。そして、灰色の瞳。

僕は、理解した。

湖に映った僕の姿は、波紋で揺れ動く。僕はそこに、『彼女』を見た。

「……………連れてきて、くれたのかな？」

僕は、頬に流れる涙を拭かずに、ただ笑って呟いた。

1：「灰色の目覚め」（後書き）

さて、最初は暗めでしたが……。

次回からはパツと明るくなります。

大丈夫、主人公はポジティブです（笑）

## 2：「新しい選択肢を」

ひとしきり涙を流した後、妙な爽快感を感じながら湖の水で顔を洗う。

そういえば、最後に泣いたのはいつだったか。本当に久しぶりだ。

「ぶっっ」

ぶるぶるぶるっ、と頭を振り、顔に残った水滴と髪についた水を振り払う。何故か身体まで震わさったが気にしない。

「やっ……」

目を擦りながら周りを見渡してみる。

なんのことはない、辺り一面森である。

どうやらここは森の中にぽつんとある小さな湖らしい。いや、沼か？どつでもいいけど。

波紋が収まった湖に、もう一度自分の顔を映した。

やはり、そこには猫耳がついた灰色の髪をした自分がいる。

「……………」

湖から離れ、そばにあった木に腰掛ける。何となく髪を触り、「痛っ」爪が肌に突き刺さった。

爪を見て、シャキシヤキと擦り合わせてみる。やはりどう見ても人間の丸爪ではない。

「……………」

熟考。

「僕、人間じゃない……？」

そんな答にたどり着いた。

深く考えずとも、直に猫耳がついている人間などいない。では自分  
はなんなのか？

「猫耳……猫……猫又？」

頭についた猫耳。鋭い爪。そしてあえて無視していたがそろそろ認  
めざるをえない尻の辺りにある違和感。

そういえば、猫又は尻尾が二又に分かれている、と何かの本で読ん  
だ気がする。確認するしかあるまい。

「……………わ」

そこには予想通り、二本の尻尾。しかも自由に動かせて、触れば結  
構気持ち良かったりもする。

「……………まあ、猫又かどうかは別として、人じゃないことは確かかあ」

空を仰ぎ、切り替える為に口に出してみた。うん、空は青い。

何故か丁度よく開いていた穴に尻尾を通し、今度は周りの確認に移  
ることにする。

見渡す限り三百六十度森なのは確認済み。ならば、と僕は来た道を  
逆走する。

一体どんな走り方をすればこうなるのか、と自分でツツコミたくな  
るような跡があるので、迷わずにあの大樹の元に辿り着けた。

「出来るかどうか……勝負ッ!!」

瞬間、膝を最大限まで曲げ、バネのイメージで跳躍。景色が縦に流れていく様はなかなか拝見出来るものではないが、僕は正にそれを体験中。まるで絶叫マシーンに乗ってるみたいだった。

ガサツ、と森から飛び出し、「わわっ、跳びすぎっ」  
飛び出し過ぎた。

他よりも随分背が高い大樹すら飛び越えてしまった。が、そのお陰で辺り一面を一望出来た。

「あれは、村かな」

先程の湖の更に向こう、だいたい一キロぐらい先に集落じみたものを視界に捉える。どうやら視力も上がってる模様。

一瞬無重力状態になり、僕の身体は重力に捕まりはじめる。

大樹の枝にバシツと捕まり、宙ぶらりんの状態で考えた。バサバサと葉が暴れ、何かの実が落ちていく。

「せっかくだし、行ってみようかな」

もう、これが夢かどうかなんてどうでもよくなっていた。

夢なら夢で、『ああ、いい夢だった』で終わらせられる。

現実なら、この世界に連れてきてくれたであろう『彼女』に、僕の中にいる『彼女』にお礼を言って、生きていく。

今はどちらにしろ、こうして生きているのだ。一度は生きることが諦めた人間にとっては、余裕でお釣りがくるほどの有り難さがある。

僕は、死にたかったわけじゃない。

ただ、死ぬことしかできなかつただけで。

「君がくれた新しい選択肢。僕はそれを進んでみるよ。何より……僕が君に望んだんだし、ね」

身体を揺らし、振り子の要領で反動をつける。その力を使って、少し前にある枝に飛び移る。

「じゃあ、行ってみますか!!」

久しぶりに、心からの笑顔を出せた気がした。



### 3：「初めての鬼」

「つと」

ガサカサ、と音を立てながら木の枝に着地。一応乗っても大丈夫そうな枝を選びながら進んでいるけれど、どうもこの身体は超人的な身体能力が備わっているみたいだ。

まあ、人じゃない事は明白なので『超人的』という言葉は正しくないのだけれど。

走ればまるでジェットコースターに乗っているようなスピードで移動出来るし、ちよつとやそつとじゃ息切れは起こさない。今度どこまで全力で走れるか試したいところ。

垂直跳びなら十メートルは軽く越す。怖いのでまだ全力で跳んではないが、こちらもいつかは試してみたい。

「あれ、道が塞がってるや」

枝を跳び移りながら進んでいくと、いきなり目の前に巨大な岩石が出現。岩の下には川があり、どうやら水がそれによってせき止められているようだ。

溢れ出した水は横にある大穴に貯まっていき、そこから更に他の穴へと流れていく。

もしかしたらあの湖もこうして出来たのだろうか、と考えを巡らせながらも、先に進もうと適当な木に跳び乗り

「つ！？」

その木が、いきなり根本からへし折れた。

慌てて他の木に跳び移り、めきめきと音を立てて倒れていく木を見る。木の根本には、巨大な岩が。

とっさに先程の川をせき止めている岩を見るが、それではない。ならいつたいどこから、と考えた、その時。

「おやあ？人間かと思えば……見慣れない妖怪だねえ」

川の上流から、妙に間延びした声がした。

見れば、そこには大人の女性。魅力溢れる身体つきをしたその女性は、掛値なしに美しいと言えた。

言えるの、だが。

「完璧に不意打った、と思ったんだが……。アンタ、何者だい？」

『片手で木をへし折りながら』、『頭にある角を触りながら』言う女性に、どうしてそんな浮いた考えができようか。

「っ」

動揺を隠せず、僕は木から飛び降りる。

どうやら、『彼女』はとんでもない世界に連れてきてくれたらしい。

「答えな。アンタは何者だい？」

「……そういう君は？」

「アタシかい？アタシは鬼さ。この角が見えないか？」

「見えるけど……」

「ならいいじゃないか。ああ、一応名乗っておこうか？」

「いい。こっちまで名乗ることになるから」

僕の言葉に、そうかい、とクツクツ笑う鬼。

「なら……」

笑いが止まり、空気が締まる。髪の毛が逆立ち、自然と体勢が低くなる。

「名乗らないなら、消すまでさ！」

ブワッ！と身体が圧される感覚。瞬間、僕は空中にいた。一瞬前まで僕がいたところを、丸太もどきが通り過ぎていた。

「やるじゃないか」

かなりの高さまで跳び上がっていた僕を、鬼は着地が終わるまで黙って見ていた。膝立ちの状態で尋ねる。

「なんで？」

「すぐに終わっちゃつまらないだろう？」

笑顔で答えられた。美しいが、見とれている暇はない。

「っ！！」

「っ、速いねえ……厄介だ」

一カ所に留まっては相手の思いつぼだと感じた僕は、全力全開で木々の間を跳び回った。上下左右、とにかくランダムに移動。

「チッ」

鬼が舌打ちしたその瞬間、鬼の背中を視界に捉えた。好機！

「ハアツ!!！」

「がッ!？」

思い切り鬼の首をへし折る勢いで膝蹴りをぶつけた。

スピードを全く抑えずに直撃させることが出来た。常人なら首の骨がへし折れる程の威力。

ミシミシ、と骨が砕ける音が聞こえた。

「……っ!？」

「たいした速さだね。反応が追いつかなかった」

「なっ、あぐ!？」

しかし、鬼は吹き飛びもせず僕を叩き落とした。

砕けたはずの首の骨をバキバキ鳴らしながら、苦痛に顔を歪めてい  
るであろう僕の傍に屈む。

僕は距離を取ろうと跳び起きようとして、

「あうっ!？」

転んでいた。右足、先程膝蹴りを放った方の足に力が入らない。

(あの音は、こっちの骨が砕けた音だったのか)

ギリギリと音がする程歯を食いしばる。

片足だけでも、思い切り地面を蹴れば少しは離れられるはずだ、と  
左足を抱えるように縮め、

「させると思っかい？」

「ぐっ！」

身体を乗せられ、左足ごと地面に押し付けられてしまった。これでは逃げようにも逃げられない。

手を背中後ろに回され、なんとか伸ばせた左足は押さえ付けられる。右足は問題外。

……これは、本格的に危ないかもしれない。

「さて、そんなに弱い妖力でよく頑張ったもんだね。けど、アタシの縄張りに入ったのが運の尽きさ。……どうせなら、楽に殺してやるよ」

「……ぐ……！」

ギリギリと引つ張られていく両腕。引き千切ろうとしているのは明白だった。

「冗談じゃない。こんなところで、死んでられるか！」

「っ！？何を……！」

「っ……っらぁ……！」

バキツ！と頭の芯に届く音。同時に左肩に響くふざけた痛み。

無理矢理に左肩の関節を外し、どうでもよくなった左肩を無視して身体を半回転。皮が裂けた気がするが、それもどうでもいい。

僕の突拍子もない行動に驚いたのか、鬼は残った右手も放してくれていた。

腹に蹴りをくれてやり、鬼が屈んだその隙に距離を取る事に成功する。

「……無茶苦茶だね、アンタ」

「それは褒めてるの？ だったら、あんまり、嬉しくないな」

「ただ呆れ返ってるだけさ。それにアンタ、そんなボロボロの身体でまだ勝つ気でいるみたいだしね」

「……………」

頭をポリポリと掻き、呆れながらも楽しそうに笑う鬼。

そんな鬼を見る僕の顔は、いったいどんな表情をしているのだろうか？ 視界が狭くなり、唇の端が吊り上がる。

一体どうしたというのか、僕は鬼の言う通り勝つ気でいる。

普段の僕はこんな事は考えない。最初だって、逃げる事を前提に戦って、いや、まず戦うことすら考えていなかったのに。

けれど、今の気分は最高にハイになっていて、まるで、何かのスイツチが入ったかのような感覚すらあった。

そしてなぜだろう。

鬼の感情が僕に伝わってくるのだ。何を考えているかまではわからないけれど、漠然とした感情が、僕に流れ込んでくる。

今の鬼は、とても楽しそうだった。

「その目……正に獣って感じだねえ……。いいよ、アンタ。面白いじゃないか！」

ダン！と地面を蹴り、鬼は僕に突撃を仕掛ける。

もの凄い勢いで迫ってくる鬼は、けれどとてもゆっくりに見えて。

「あああああ！……！！！」

僕は、残った足で地面を蹴り、鬼に真正面から向かっていった。







「……………うん……………うん……………うん……………ん？」

最初に思ったのは、ここがどこかということだった。

パチリと目を開き、しばらく瞬きを繰り返している内に頭がハツキリとしてきた。

結局、あの後はその鬼に吹き飛ばされて気を失ったのだった。

身体は……あまり動かない。左腕に違和感があるが、無理矢理関節を外したのだからしょうがない、と納得。

しょうがないので首だけを動かして左を向く。

「おや、起きたのかい」

左腕が捕まっていた。

見なかったことにして右を向いてみる。うん。右腕はそれとなく動くみたいだ。

「無視か」

「痛い痛い痛い！肘関節は無事だからやめて」

「なら反応してくるたっていいじゃないか。少し悲しいぞ？」

「いや、それよりもなぜ僕の横に寝て」

「嬉しいかい？」

「いや別に痛い痛いってだから肘は健全だからそっちは曲がらないって」

「嬉しいだろ？」

「嬉しい嬉しい！結構本気で嬉しかったりするからだからマジで許してそっけなくしたことは謝るから！」

「それでいい」

満足げに頷いた鬼は、そこでやっと僕の腕を解放した。危なく左腕が逆くの字を描くところだった。

「で……」

「なぜ殺さなかったか、か？それともここはどこか、か？」

「いや、なんで隣に君が寝ているか」

「気に入ったから」

「さいですか」

軽く流すことにした。

「冗談だ。アンタが暴れるから押さえ付けてたのさ。固定しとかないと治らないだろう？」

感謝せい、と笑いながら言う鬼。綺麗だから無下に怒れないのが腹立たしい。

「まあ、起きたのなら大丈夫だね。ここはアタシの住家さ」

立ち上がり、伸びをしながら言う鬼。

どうやらここは洞窟みたいな場所のようで、僕が寝ているのはやたらに積まれた葉っぱやら草やら、とにかく柔らかめの植物で構成されたサバイバルベッドだった。

身体は起こせないので、寝たまま話しかける。

「じゃあ、もう一つの方は……」

「ん？なぜ生かしたかって？」

いつの間にか向こうを向いていた鬼は、軽やかにクルリと回り、二

ヤリと笑って、

「気に入ったからさ」

そう言った。

「そつえば名乗ってなかったね。アタシは魅王みおう。桃鬼とうま。ここに—  
人で生きてる、気楽な鬼さ」

### 3：「初めての鬼」（後書き）

いろいろと迷った挙げ句、初対面は鬼にしました。

うー、主人公。負けてていいのか！？

まあ、これぐらい強くないとね。強くしすぎた気もしないでもないけど。

#### 4：〔能力〕

洞窟の外、朝日を浴びて思い切り身体を伸ばす。  
あれから一週間。

信じられないことに怪我は全て完治していた。ついさっき何気なく起き上がってみたら、普通に動けたからそのまま外に出てみたのである。

「桃鬼は……まだ帰ってきてないのか。いろいろと世話してもらったし、お礼言いたいんだけどな」

本当にいろいろと世話になった。

身体が起こせない間は食事を取らせてくれたり。

身体が起こせるようになってからも食事を取らせてくれたり。

いきなり担がれてどこへ行くのかと聞けば、『水浴び』とだけ答え、まだ傷が閉じていないのに湖に投げ飛ばされたり。

（その時なぜだか非常に水に対して嫌悪感を覚えたので、やっぱり僕は猫又なのだろう）

『添い寝をしてやろうじゃないか』とか言って寝ている僕の隣に来たと思えば、寝ぼけた桃鬼に投げ飛ばされて必死で戻ってきたり。

「……………うん。まあ、感謝はしてるよ？」

本当だよ？多分普通にしてれば四日ぐらいで治ってた気もするけど。

「さて、どこに行ったのか。高いところから見ればわかるかな」

キョロキョロと周りを見渡し、最終的に洞窟がある崖を見上げる。僕は特に迷うこともなく駆け上がり、崖の頂上から森を見渡してみた。

すると、遠くにある集落　この前見つけたものだろうか　から、黒い煙が上がっているのが見えた。

「ふむ」

尻尾をパタリと地面に下ろす。

桃鬼がいるかもしれないし、やることもないのだから行っても損はないだろう。

僕はその煙に向かうことにした。

いざその場所に着いて見れば、大したことではなかった。

なんのことはない、桃鬼がこの集落に物を奪いに来たのだが、抵抗を受けたので蹴散らしたところ松明が倒れて家（竪穴式だった）が一軒燃えただけだった。

というより今は西暦何年なんだろう？服が下半身だけの時点でなかなか昔であることはわかるが、歴史だけは苦手でそれこそ常識中の常識しか知らない。

「で？何しにきたんだい？」

「こつちが聞きたいんだけど。何取ってきたの」

「肉」

「そ」

一言返して会話を切ることにした。

現在僕らは石の雨に曝されている。早い話、桃鬼が僕を巻き込んだのだ。

木の葉に紛れて桃鬼の略奪行為を見物していたところ、僕に気付いてあるうことが声をかけてきたのである。

「どうするのさ」

「ん？逃げるけど？」

「どうやって」

石の雨に槍が混じり始めた。見れば僕らは囲まれていて、見る人全員が僕らを殺そうとしている。

「面倒だね、何人か」

「殺すの？それは……」

「なんだい、嫌なのかい？」

コクリと頷く。桃鬼は不思議そうに僕の顔を見て、少し笑って髪を掻き上げた。

「わかった。そんな顔しないでくれよ。その代わりに、手伝ってくれ」

「何を？」

僕が聞き返すと、桃鬼はぐつと拳をつくる。すると、キーン、と音がして、桃鬼の指の隙間から長い針が飛び出した。

「アタシを持って、跳んでくれ」

「……？わかった」

石が未だに飛び交う中、僕は桃鬼を抱き上げる。

「いくよ」

「いつでも」

そして、全力で跳躍。

せいぜい五、六メートル跳べればいい方だろうと考えていたが、甘かった。

忘れていたんだ。僕は、全力で跳んだことがなかったことを。

「ちょっと、跳び過ぎだよコレは！」

「申し訳ない。加減がわかんなかった」

「これなら最初から跳んで逃げた方が早かったんじゃないかい……  
？まあ、いいけども」

軽く二十メートルは超してしまった。

ハツハツハ！人がゴミのようだあ！（だつたっけ？）なんて笑うことはなく、僕は桃鬼を抱く腕を放した。

桃鬼は器用に空中で体勢を変え、足を下にする。

そして、針を握った拳を振り上げると、

「死にはしないから、安心しな」

僕らを見上げる人に向かってぶん投げた。



少しすると、声こそ聞こえないが叫びながら人が倒れていくのが見えた。

着地した時には既に円は崩れていて、僕と桃鬼は特に焦ることもなくその場を後にした。

「ねえ、桃鬼」

「ん？」

肉を豪快に食いちぎりながら、桃鬼は返事をする。美しいと不思議となんでも様になるから腹立たしい。

「さっきの、何？」

「さっきの？……ああ、これのことかい？」

僕の質問に、桃鬼は持っていた肉を置き、髪を掻き上げる。そして、その手をギュッと握ると、またしてもキーン、と甲高い音がして針が飛び出した。薄い桃色の、桃鬼の髪と同じ色の針だ。

「これは、アタシの能力さ。『硬度を操る程度の能力』っていつて、その名の通り物の硬さを操ることが出来る。これは、アタシの髪を硬くして針にしたものさ」

「『硬度を操る程度の能力』……？」

「そ。別に硬くするだけじゃなくて、軟らかくすることも出来るのさ。……こんな具合に」

桃鬼はそう言うと、足元に転がっていた石を拾い上げる。そして、僕の手に乗せた。

「……………?」

「握ってごらん」

言われた通りに握ってみる。すると、

「わ……………」

石がぐにゃぐにゃになって千切れてしまった。まるで粘土のようだ。

「凄いな……………」

「まあ、いいことばかりでもないんだけど。硬くし過ぎれば簡単に壊れたりするし、軟らかくし過ぎても粘土みたいに千切れちゃう。やり過ぎると、結局物としては弱くなるんだ」

「へえ〜」

「それに、結構加減が難しくくてね。髪の毛みたいに、アタシの身体の一部なら簡単なんだけど、それ以外は失敗する方が多いぐらいさ」  
能力、か。

「僕にもあるのかな」

「さあねえ。私は気付いたら持ってたから、案外アタにもあるんじゃないかい？」

そんなことを言われたら、なんだか期待をしてしまう。

そんなわけで、考えてみることにした。

(能力……能力か)

そういえば、初めて桃鬼と会った時不思議なことが起きていたことを思い出す。

あの時は、桃鬼の感情が直接僕に流れ込んでくるような感覚がして

……。

「感情……」

「ん？」

「感情、を……操る程度の能力」

「ほお。それがアンタの能力かい」

「え？」

勝手に口をついて出てきた言葉。

しかし、妙にしっくりくるものがあって、これが僕の能力なんだと勝手に認識していた。

……けれど、何が出来るんだ？これ……。

#### 4：「能力」（後書き）

能力自覚の巻！

まあ、どんなことが出来るかは次回で。

主人公がイロイロと模索するのが案外楽しかったり。

## 5：「能力 パート2」

「準備はいいかい？」

洞窟の前、木々が無く開けた場所で、僕と桃鬼は向かいあっている。桃鬼は角を触りながら僕に聞いてきた。

「準備っていつか……」

「なんだい、歯切れが悪い」

「いや、ホントにやるのかと」

こうして僕と桃鬼が向かいあっている理由。それは、まあ、僕に原因があるといえはそうなるのだけど。

「はあ……聞かなきゃよかったかな」

尻尾を一振り。僕は、空を見上げてこうなった理由を思い返す。

三ヶ月程前だろうか。能力を自覚したはいいものの、イマイチ活用法が見出だせなかった僕は、ごく自然な流れで桃鬼にこう聞いていた。

「能力って、どうやってたら使いこなせる？」

僕の尻尾やら耳やらをフニャフニャして遊ぶ手を止め、桃鬼は僕の肩に顎を乗せた。彼女、こうしたスキンシップを多用する。最初の頃はいちいち顔を赤くしていた僕がいたが、すっかりなれてしまった。

「そうだね……。アンタの場合、能力に頼らなくても充分闘えてる  
とは思うんだが」

「……………」

うーん、と桃鬼の顔がある方とは逆に首を傾げる。

確かに、この身体の身体能力は凄まじいものがある。

おそらく妖怪であろうこの身体。妖怪だから、というだけでも充分納得は出来るのだけれど、それでも元人間、しかも病人だった僕からすればとてつもない力がこの身体にはあるのだ。

初めて桃鬼と闘った時の様に、全力全開を出せば抵抗ぐらいはできたのだし。

ちなみにこの鬼、歳はもうすぐ五十になるらしい。なのにこの見た目。反則だろう。

逆に桃鬼から歳を聞かれたのだが、僕はすぐに答えられなかった。それというのも、猫又としての歳がわからないのである。人間だった頃なら答えられるが、それでは意味がないだろう。精神年齢ならともかく。

面倒だったので零歳と答えると絶句していたが、それならその妖力も納得出来る、としきりに頷いていた。

ついでに、と名前も聞かれたが、こちらはわからないということにしておいた。おいおい考えればいいだろう、とポジティブに考えた結果である。人間だった頃の名前をそのまま使いつもりはない。

「でも、せつかくの能力だし。使えるようにはなっておきたい」

「使えてるじゃないか」

「いや、そうじゃなくて……」

また僕の耳をいじり始めた桃鬼を他所に、僕は腕を組んで考える。

この『感情を操る程度の能力』。果たしてどれ程のキャパシティがあるかがわからない。

桃鬼いわく、能力は使っていけばだんだんと応用出来るようになるらしい。桃鬼の能力『硬度を操る程度の能力』も、最初は自分の身体にしか使えなかつたらしい。それがだんだんと、自分の身体のみ切り離れた身体の一部（髪の毛） 身体に接する物 視界に入つた物、と使えるようになったと言っていた。

そう考えると、この『感情を操る程度の能力』は、最初の時点ですぐに出来るのか。

真つ先に試したのは自分の感情を操ること。まあ、喜怒哀楽の四種類程なら自由に変えることが出来た。ただ、まだ力が上手く使えていないのか、それなりの理由がないとすんなりと感情が移らない。何の理由も無しに怒りの感情にしようとしても、なかなか上手くいかないのだ。それでも頑張れば出来るけど。

自分に使えることはそれでわかったが、次の問題は自分以外に使えるのかどうか。

こればかりはどうしようも出来ない。

桃鬼のように相手が『物』ならともかく、僕の相手は少なくとも『心』を持った相手がいないと成立しない。

桃鬼に試してもいいのだけれど、その後が怖い。もし怒りの感情を植え付けて元に戻せなかつたら大惨事である。

と、それを踏まえて桃鬼に話をする、返ってきた返答が。

「なにを遠慮してるんだい。アタシにやればいいじゃないか」

である。果たして僕の話聞いていたのか疑問が残る。

その後、勝手に話を『試し』から『決闘』に昇格させた桃鬼の思考回路も甚だ疑問である。

「もっとストレートに言えばよかつたんだろうか」

「何をぶつくさ言ってるのさ。準備はいいのかい」

気が付けば桃鬼は角を触るのを止め、その手に石を持っていた。

「これが地面に落ちたら始める。用意はいいかい？」

「……いつでもどうぞ」

僕の言葉を聞き、嬉しそうに口の端を吊り上げる桃鬼。

多分桃鬼は闘うこと自体が大好きなんだろうなあ、と考えている内



に、石が宙に舞っていて。

それが地面に着いた瞬間、僕の身体に向かって針が飛んでいた。

「っ！」

一瞬で全開、僕は崖の中腹に跳び移る。口に入る液体からは鉄の味。頬に出来た切り傷を触り、僕は前と同じように跳び回り始める。

「相変わらず早い。……けれど、いつまで避けていられるかな!？」

一瞬前までいた場所に髪の毛の針が突き刺さっていく。

動きを止めた瞬間に串刺しコースだが、動きを止めなければいい話。僕はギアを全開にして、桃鬼の隙を伺う。

しばらくはその攻防、といっても防戦一方だけでも、桃鬼は全く隙を見せなかった。やはり二度目ともなれば警戒されている。

さてどうしようか、と針を避けながら考えていると、桃鬼が突然攻撃を止めていた。

その表情は不敵な笑みを映していて、それが僕の不安を煽る。

なにを、と聞こうとして木に着地。その瞬間、僕は理解した。

針が、僕の足を貫いていた。

「ぐっ……!!?まさか……!!」

「そのまさか、さ。もう跳び回れないよ」

ドサツと音を立てて地面に倒れながらも、僕は周りを見渡した。どこを見ても、薄い桃色の針だらけ。これが狙いだっただか。

「さあ、どっするっ？」

「くっ……」

足に刺さった針を抜き、それを桃鬼に投げる。が、針は桃鬼に刺さる前に失速、ハラハラと地面に舞い落ちる。やはり、髪に戻された。

ならば、と僕は身を屈めてジャンプ。崖の上へと飛び上がり。

「無駄だよ。そら」

「なっ！！」

着地した瞬間、地面がぐにやりと沈み始める。

慌てて飛び降りると、崖は少し歪んだ状態で固まった。

桃鬼め、崖の硬度を下げやがった。

どうやら、彼女は直接勝負をお望みらしい。

なら、試させてもらおうじゃないか。

「さて、もう逃げることは出来ない。どっするっ？」

「っっするわ。」

「フーツ、……フーツ……！！」

「……！？」

ザリ、と後ずさりする桃鬼。無理もない。

今の僕の姿は、いきなり見れば皆そんな反応をするはずだから。

『感情を操る程度の能力』。

自分の感情を操り、怒の配分を多く、けれど理性は残しながら。自ら怒りを誘発させ、身体を無理矢理戦闘モードに移行させる。

瞳孔が広がり、四つん這いの体勢になる。全身の毛が逆立ち、爪が地面をえぐり返す。

こうなれば、僕に逃げの思考は生まれない。

言うなれば、軽い洗脳。

「 シッー! 」

「 つ! ? 」

桃鬼が戸惑っているのがわかる。それを見逃さずに真正面から突撃、力を籠めた爪を繰り出す。

ガキィ! と音がして、針で防がれたと理解した。反撃される前に身体を翻して空中にエスケープ。

( 危ない危ない。最初の目的を忘れるとこだった )

そのまま、桃鬼の感情を『探る』。やはり、漠然とではあるが、わかる。

今は……驚嘆? 僕のいきなりの豹変に、驚いているみたいだ。

「 なら……! 」

手を桃鬼に向け、グツ、と握る。そして、見えない糸を引っ張るように右に引っ張る。

「 ……! ? なっ …… 」

すると、桃鬼はフラリと身体を揺らし、ぺたりとその場に座り込んだ。同時に、辺り一面に張り巡らされた針のカーテンが姿を消す。針から髪に戻ったのだろう。

僕は自分の感情を平常に戻し、桃鬼に歩み寄る。

「……………アンタ、何をした？」

「少しばかり感情を悲しい方に引つ張った。どんな感じ？」

「何が、少しだけ……………！なんか知らないけど、すごく、せつないよ……………！」

グッ、と自分の服を握りしめながら言う桃鬼。

……………うう、そんな潤んだ瞳で見上げられたら、罪悪感が……………。

「……………ごめん。やりすぎた」

「そう思うなら、早く、戻して……………！」

「わかった、えーっと……………あれ？」

……………どうしたのだろうか？桃鬼の感情が操作出来ない。

と、僕はそこで気が付いた。桃鬼の感情が流れ込んでこないことに。そして理解。

この能力、他人に使う場合は、まず相手の感情がわからないと使えないみたいだ。

その時の相手の感情を読み取り、その感情を原点として操るので、原点がないと操ろうにも操れないのである。

結論。

懸念していたことが、若干ズレて現実となりました。

「……ごめんなさい」

「な、なにを謝ってるんだい。は、早く……」

「いやだから、ごめんなさい」

「まさか……戻せない、とか？」

「ま、まあ一時的な感情だから？時間が経てば治るよ多分」

「じ、冗談じゃないよ！こんな、こんな感情……どうしたら……」

あたふたしながらもどこか弱々しい桃鬼。

どうやら自分では立てないようなので肩を貸し、とりあえずベッドまで運ぶ。

寝て起きれば治るよ、なんて適当なことを言って寝かしつけることにする。

……それにしても、なんでいきなり使えなくなったんだ……？

「ね、ねえ……」

「うん？」

「その……あの……ち、近くに……いて……」

「……あう」

ちなみに、この状況は三日間続いてしまいました。

## 5：「能力 パート2」（後書き）

主人公の名前は、もう少しで出てきます。

さて、この『感情を操る程度の能力』。考え方次第でいろいろと使えそうですが、それなりに制約もあります。今回も一つ出てきましたが、まだあります。

うーん。桃鬼が艶、いや強い。

## 6：「フタツデヒトツ」

僕がこちらの世界に身を置いてから、早十年が経っていた。

この十年、特に何もやるべきことがなかった僕は、とりあえずこの世界のことを調べていたのだが、まあなんとというか予想通りいろいろと奇想天外な事実が飛び出してきた。

まず、ここは過去の日本だということ。まあ、これは予想が出来ていたのであまり驚きはしなかった。むしろここが現代とか言われたらその方が驚く。

次に、この世界、というか時代では、僕や桃鬼のような妖怪が当たり前のように存在していることがわかった。

というのも、僕が目覚めた頃はさほど数がいなかった妖怪も、人類の増加によってここ最近をよく目にするようになったからそういう結論に至ったのだが。この間なんて森に迷い混んだ人間を僕の目の前で食おうとした妖怪がいたぐらいだ。勿論その妖怪は少し痛い目に遭ってもらったが。

とまあ、他にもいろいろとあるのだが、大きなことはそれぐらい。それでも十分僕は驚きを隠せなかった。疑うことはしなかったけれど。

そして最近、僕に二つ名が出来た。名前自体まだ無いのに二つ名もあつたもんか、とも思ったががついてしまったものはしょうがない。その名も『灰色の風』。

カツコイんだかわるいんだかわからないのが微妙なところである。この二つ名の由来は、僕の闘い方にあつた。妖怪が増えたことにより、必然的に他の妖怪とも接する機会が増えたのだが、いかんせん

好戦的な奴が多すぎて否応なしに闘いに発展してしまうのである。そして迷惑なことに、だいたいが桃鬼の名を聞いて闘いを挑みにきた鬼なものだから、力でぶつかれば苦戦は必死。そんな中僕が武器に選んだのが、スピードだった。木々の間を縦横無尽に飛び回り、相手が隙を見せた瞬間に首に一撃。そんな闘いばかりしていた結果、あのような二つ名が付いたのであった。

「で、アンタはいつになったら名前が出来るんだい？」  
「うん？」

僕を膝の上に乗せ、撫でながら聞いてくる桃鬼。  
ちなみに今は純粹な猫の姿。

この十年で妖力なるものが増え、いわゆる変化と隠行なるものが見えるようになっていた。

二又の尻尾をクルクルとねじりながら、僕は考える。

「名前、ねえ」  
「二つ名があるのに名前がないのは流石に変だろっ」  
「まあ、ね」

確かにそうなのだが、とポテンと顎を桃鬼の手に乗せる。

「どっつけければいいのかわからない」  
「見た目からつけければいいじゃないか」

至極真つ当な桃鬼の言葉。なるほど、見た目から連想出来る名前を付ければ、覚えてもらうのも楽かもしれない。  
と、いっしょとで。



「よっ」

桃鬼の膝から飛び下りて、人型に戻る。  
自分の名前に使えそうな特徴は……………。

「灰色かな」

「灰色だね」

やはり、それぐらいしか見当たらない。

灰色の瞳に灰色の髪。更には灰色の着物（気分を変えてみた）。

灰…………ハイ…………はい、かあ…………。

「ごめん、思い付かない」

「早いよ」

即座に桃鬼に突っ込まれ、僕は再度頭を悩ませる。自分の名前にご  
こまで悩むとは思わなかった…………。

「ま、別に灰色にこだわる必要もないがね」

「あ、そうか」

「…………アンタ、真面目に考えてるのかい？」

「考えてなかったらこんなに悩んでないんだけど…………」

僕は胸に手を当てて、『彼女』を思い浮かべる。このしつかり刻ま  
れている鼓動は、『彼女』がいなければとつくに止まっていただろ  
う。

「命…………ミコト、なんてどうかな」

「アンタがいいならアタシは何も言わないよ。……ミコト、ね」  
「うん、決めた。これから僕は『ミコト』。猫又のミコトだ」

改めて言葉にして放つ。すると、

「っ?」

一回、一回だけ。

まるで僕の身体じゃないかのように、鼓動が身体全体に響き渡った。

そして、口が開き、勝手に言葉が紡がれる。

「『命を感じ取る程度の能力』……?」

「!?!」

桃鬼が驚いたようにこちらを向く。それすらあまり気にならず、僕は自分の胸に手を当てたまま動かずにいた。

だって、聞こえたんだ。

確かに、言った。

『彼女』が、僕に向かって。

とっても優しく、嬉しそうな声で。

僕は、目をつぶって、一度だけ思い出す。

最初で最後の気がする、『彼女』の声と、言葉を。

おつちやく、一つになれたね

## 6：「フタツデヒトツ」(後書き)

能力がもう一つ覚醒しました。

さて、この能力。

名前からもわかるようにあまり戦闘には向きません。  
現時点では、主人公と『彼女』の絆のアカシ、と考えてくれればあ  
りがたいです。

主人公と彼女、フタツが合わさって『ミコト』。命です。

はい、言いたかっただけです。自己満足です……。

## 7：「時は流れて」

僕が『ミコト』となった日から、しばらくは何もない平穏な日々が続いていた。

朝起きて、桃鬼と談笑して、たまに手合わせして、人間に悪戯をして、たまに一緒に寝たりして。

そんなこんなで、百年が過ぎていた。

僕はちょうど百歳。桃鬼は百五十に近い。しかし互いに見た目は変わらない。百年前は反則だるとか言っていたが、今では僕も同じ立場に立ってしまった。

妖怪というのはやはり歳を経た個体ほど強くなる傾向にあるらしく、現在真つ当に戦って桃鬼に勝てる者はこの辺りにはいない。

彼女本来の強さと相まって、能力がこれまた厄介なのだ。能力持ちはそれだけで他の奴とはスタートラインが違う。

実際、発生したばかりの能力持ちの妖怪がそこの妖怪を蹴散らして桃鬼に襲い掛かることもあった。だがそこは流石の魅王桃鬼。彼女に傷を負わせられるのは数少ない。ほとんどが秒単位でその場から消えている。

彼女自身の妖力もかなりのものだが、『硬度を操る程度の能力』から昇華させた『掴み取る程度の能力』がこれまた厄介。これは彼女が硬度を弄ったものを距離関係なく掴み取ることができる。

雑魚妖怪などはそいつ自身の硬度を限界まで下げられ、掴まれた時点で潰されてさようなら、だ。

ある程度の抵抗力（妖力？）がある相手には使えないらしいが、恐ろしいことこの上ない。強くなったものだ。

もちろん、僕だって成長している。  
今まで身体能力だけで行っていた高速攪乱移動。妖力をうまく使うことで更に早く動けるようになった。  
更に爪。こちらも妖力を充満させて殺意をもって使えば、自らの硬度を上げた桃鬼にだって傷をつけることが出来るだろう。実際にやったらこちらの爪も犠牲になるだろうが。

能力に関しては、より細かい感情の操作が可能になった。

喜怒哀楽だけでなく、歓喜、混乱、恐怖、驚嘆、絶望などより具体的に調整することが出来る。

ただやはり、自分以外の者の感情を操作するには、その場その場で相手の感情を読み取らなければならない。しかもこの読み取り、読み取っているというよりは、相手の感情を『取り込んで』理解しているらしく、軽い気持ちでやると取り込んだ感情にこちらが支配されることもある。

全く面倒くさい。

更には心をしっかりと持った相手、閉ざした相手は感情が取り込めないので、そういう場合はまず相手に揺さぶりをかけて心に隙間を作ってやらないといけない。

全く以て面倒くさい。

もう一つの能力『命を感じ取る程度の能力』は、その名の通り『命』を感じ取る能力だ。

こちらは未だに使い方がよくわかっていなく、結局気配を探る時ぐらいしか使っていない。

と、暇だったので分析を試みたのだが、桃鬼最強じゃね？  
いや、間違いなくここらでは最強なのだけれど。

現に、彼女は二十年程前からここら一帯の鬼のトップに座っている。  
確か、『鬼神』とかいったかな？『灰色の風』とは大違いである。

さて、その鬼神様だが、現在僕の耳をフニャフニャしながら唸って  
ばかりいる。

唸りながら触るのは正直止めて欲しい。何となく耳もヘタリとして  
しまう。

「どうしたの」

「おお、聞いてくれ」

待つてましたとばかりに僕によしかかってくる桃鬼。両手が僕の首  
にからまる。はずい。

「アタシの下にいる奴らのことなんだけどなあ」

「その彼らならさつきから痛いぐらいに僕を睨みつけてきてるから  
くつつくの止めて」

「なあにを今更。でな？流石に頭数が多過ぎて、アタシの目が届か  
なくなつてきてるんだよ」

「ほお」

「でだなあ、どうにかして減らすか分けるかしたいんだが……あ、  
そつだミコト」

「嫌だ。僕だつて鬼以外の妖怪抱えてる」

桃鬼が鬼のトップなら、僕はその他連合軍のトップだ。

まあ、大体が温厚な人畜無害な妖怪やら妖獣やら妖精なんだけれど。

「そう言わずに〜」

「甘えた声出してもダメ。下っ端にだって腕の立つ鬼いるんだから  
そいつらに任せればいいじゃん」

「おお」

「思いついてなかったのか」

そうかそうか、と僕の肩に顔をのせたまま頷く桃鬼。痛い痛い、角  
が刺さる。

「となると、そいつの力を皆に示さなくてはならないな……。ミコ  
ト、何かいい手はないかい？」

「決闘させれば？そこなら広いし、被害少ないでしょ」

「ほう」

「一応人間がここら一带に近寄らないように、僕と妖精達で結界張  
るし」

「ほうほう」

「万が一暴動が起きたなら、桃鬼が一人で抑えつければいい。そう  
すれば逆らう奴はいなくなると思うよ？」

「流石っ！ミコトは頭いいなあ〜！いい子だっ！」

「わあっ」

いきなり押し倒されて頭やら耳やら尻尾を撫でられる僕。力は桃鬼  
の方が強いので一回捕まればなされるがままである。

ああ洞窟の外からの鬼の視線が痛い……。

ついでに言うが、僕の懐に入っていた妖精さん、何を顔を赤くして  
いるんだい？

かたや百歳の老猫に百五十近い鬼の頭領だよ？

何も色気づいたことはない……といたいだが、実は自分で感情を操



って恥ずかしさを抑えているだけだったりもする。

ああ、こんなところで使えてしまう能力。

便利だからいいけど。

7：「時は流れて」（後書き）

なんか本格的に桃鬼が最強になってきた……。

い、いや！これも計算の内さ！

ここらで感謝の言葉を。

お気に入り登録を下さった方々、恐縮です。ありがとうございます  
ます。

どうかこれからも私の駄文に付き合ってくださいれば、幸いです。

感想、ポイント、どんどん下さい。

不自然なところもどんどん教えて下さい。

では。

## 8：「百鬼闖夜祭・前」

さてさて、僕は今妖精さん達と共に結界張りに勤しんでいる。

結界といっても、「あれ？見えない壁みたいので進めん」みたいなものではなく、「なんかいきたくないなあ……」と本能的に思わせる、洗脳系の結界だ。

万が一それを抜けてしまった人間は、少し可哀相だが結界で閉じ込めて同じところを延々と歩き続けてもらう。

僕は前者の担当で、妖精さんが複数で作り上げたここら一帯を覆う結界に能力を使用、結界の範囲内に入った人間に恐怖の感情が込み上げてくるようにする。

一応人間用に力を弱くしてあるが、力の弱い妖精さんは先程から僕にくつついてプルプル震えている。しょうがないので着物の内側に入ってもらっているが、数がだんだんと増えてきている気がする。

流石にすこし鬱陶しい。

後者の結界は他の妖精さん（それなりに力がある）を森の至る所に配置し、結界に入りなおかつ進もうとする人間を見つけ次第結界をかけてもらう。

それでも進んでしまい、運悪く洞窟の前の広場に着いてしまった人間に関しては、ご愁傷様と申し上げるしかない。

流石にそこまで面倒は見きれない。助けられたら助けるけど。

「じゃあ妖精さん達、お願いするよ。無駄ないたずらはしないように」

「……はい……」

うん。素直でよろしい。

ここの妖精さん達はいたずら好きが多いが、そのいたずらもかわい  
いものばかりなので特に気にすることはない。他の妖怪、妖獣もし  
かり。

中には僕や桃鬼までとはいかないまでも、かなりの力を持った個体  
も存在するのだが、僕のところにいる奴はいたって温厚。  
危ない奴らは全て桃鬼の方についてしまったからな。理由が『強そ  
うに見えない』だったから少しカチンときたが我慢した。

「桃鬼。終わったよ」  
「おや、ありがとさん」

小高い丘で呑気に酒を飲んでいる桃鬼の横に座り、辺りを見渡して  
みる。

そこには沢山の鬼。角だらけである。  
皆、桃鬼（となんか馴れ馴れしく座っている僕）を見ている。おそ  
らく、桃鬼の言葉を待っているのだろう。

桃鬼は空になった酒の容器を投げ捨て、立ち上がる。  
そして、よく通る声で鬼達に言った。

「お前達にはこれから闘ってもらおう！勝ち残った奴にはそれなりの  
褒美をやるう！その力、このアタシに見せてみる！」  
「「「「オオオオオオ！！！！」「」「」」

地鳴りのような鬼達の雄叫び。

るくな説明もなしにこの盛り上がり、流石は荒くれ者が集まっただけはある好戦的な奴らばかりである。闘うこと自体が好きなコイツラにとっては、今回のこれはお祭りみたいなものなのだろう。

僕は丘から下りて、桃鬼から少し離れたところで立ち止まる。

「闘いが嫌な奴はミコトのところに行け！無理に闘う必要はないぞ！」

ピタッと雄叫びが止まる。

……なんだよコノヤロー、そんなに僕が気に入らないか。なんなら今ここで桃鬼と闘ってやろうか。そうすればコイツラも認めざるをえまい。

とか考えていると、僕の懐に入っていた妖精さんがトントンと僕の身体を叩いていた。

何かと顔を下げれば、そこには僕より頭一つぶん小さな鬼の女の子。

「……………どうしたの？」

「……………」

女の子は僕の質問には答えず、僕の着物をキュッと握っていた。

「他にはいないな？ならば、始まりだ！方法は対一！勝った方は自信があるなら続けて闘っても一度抜けてもかまわない！その代わり、負けたらそこで終わりだ！破った者には制裁を与える！最終的に最後まで残っていた者を勝者とする！場所は……………」

桃鬼が大きな声で簡単にルールを説明している。その間、女の子はずっと僕の着物を握っていた。

9：〔百鬼闖夜祭・中〕

ヒュン、と僕の耳元で風切り音。その直後に、バキゴシャメキリ、と木がへし折れる音。

僕は、隣にいてずっと僕の着物を握って離さない鬼の女の子を抱えて横っ飛び。数秒後、僕等のいた場所には大木が倒れ込んだ。

その大木の下には、先程僕の真横を吹っ飛んでいった一本角の鬼の姿。あれは気絶してるな。

「ウオオオオオオ!!!」

一方、広場のご真ん中で勝利の雄叫びを上げている図体の大きな鬼。特に能力は持っていないはずだが……鬼にもやはり力の差もあるらしい。当たり前なのだけれど。

「……!」

「あ、ゴメン。びっくりした?」

「……………」

フルフルと横に首を振る女の子。

先程からずっと気になっているのだが、彼女は頷いたり驚いたりと反応は示してくれるのだが、なぜか言葉を喋ることはしない。

何か理由があるのだろうか。もしかしたら単なる口下手なだけかもしれないので、聞いてみることにする。

「ねえ、なんで喋らないの?」

「……………」

心なしか、着物を握る手に力が籠った気がする。訳ありかな?

「志妖は自分から喋ろうとはしないよ。いや、出来ないって言った方がいいかね」

「桃鬼。……あ、と。その体中にくっついていている妖精さん達は……」

「森の中を歩いてたらくつついてきたのさ。『ミコトさんの二オイ……』なんていいながら」

「……また増えたか」

ため息混じりで呟く僕。妖精さん達は僕を見た途端に僕に突撃。数にして総計六匹の妖精さんが僕の着物に入りこんだ。

「なんなんだい、そいつら」

「いや、少しね……」

着物の内側でプルプル震えている妖精さん達。ちなみに流石に定員オーバーになりかねないので、僕の周りだけ小さな結界を貼って能力を遮断しておいた。

あと数分もすれば出てきて僕の周りに漂いはじめるだろう。

「で？志妖……だっけ。この子は何で話せないの？」

「ああ。志妖、教えてもいいかい？」

コクンと頷く志妖。

「じゃ、教えて」

「いいだろう。まあ結論から言うと、その子は能力持ちなんだ。その能力がちよつと厄介なモノでね、そのせいで声を出せないのさ」「ほう」

能力持ちだったのか、と僕は志妖を見る。志妖は僕の着物から顔だ

けだしている妖精さんをつつついていた。

「で、その能力とは」

「『波動を生み出す程度の能力』さ。その名の通り、彼女はその身体から波動を生み出すことが出来る。その気になれば、そこらの木なら簡単に薙ぎ倒せるはずさ」

「……………」

恥ずかしそうに僕の着物に顔を埋める志妖。あ、そこはダメ妖精さん潰れちゃう。

「で、それがなぜ声を出せないということに？まさか……………」

「多分ミコトの考えは合ってるはずさ」

「……………能力の制御が出来ていない、と？」

「少し違うね。志妖は完全に制御出来ないわけじゃあない。……………ただ、少しだけ穴があるというか……………。後は声だけなんだけどねえ」

「……………」

角を触りながら苦笑いする桃鬼。志妖は少し落ち込んだように下を向いている。

どういうことなんだ？

「志妖の能力はね、器が広いというか……………」

ときおり、うーんと唸りながら、桃鬼が説明をしてくれる。

つまりは、こつこつこつとらしい。

彼女、志妖の能力『波動を生み出す程度の能力』は、応用が利きすぎてしまう、ということだ。



桃鬼の能力は、今でこそ『視界に入ったモノ』全ての硬度を操れるが、最初は『自分の身体』にしか能力を使えなかった。

僕の能力は、自分の感情はともかく、他人に使う場合はまず相手の感情を取り込んで理解しなければならぬ。

どちらも一応明確な『使用条件』があり、それを満たさなければ能力は使用出来ない。

だが、志妖の能力に関してはその『使用条件』が曖昧で、『波動を生み出すような行為』ならば、能力が使用出来てしまうらしい。

早い話、それがなんであれ波動が起きそうな行動なら実際に波動が起きてしまうのだ。

例えば、歩くだけでも踏み出したその足が波動を産んでしまう。

例えば、手を突き出しただけでも波動が飛んでいってしまう。

例えば、声を出しただけでも、その声が波動となり辺り一面に襲い掛かる。

「なんて不便なんだ……」

思わず呟く。応用が利くと言えば聞こえはいいが、これは下手すれば無差別攻撃に発展してしまう。

「一応アタシが面倒を見て、声以外なら波動を操れるようにはなったんだけど……」

「……………」

「まあ、確かに声はなあ……………」

正直、声を出すことが波動を生み出す行為なのかは疑問だが。

「でも、志妖はまだ生まれて間もないだろう？」

言葉の代わりに、志妖の指が三本上がる。

「三歳？」

フルフルと首を横に振る。ならば三十年は経つのか。

「それなら焦る必要はないよ。僕や桃鬼だってそのころは能力を今ほど使えなかったんだ。時間をかけてゆっくり練習すれば、いつかは普通に喋れるようになるさ」

ね？と頭を撫でて笑顔を見せる。

すると、志妖は少し驚いたような顔をして、でも直ぐに笑顔になった。

綺麗な笑顔だ。これからはもっとそれを出せるようになって欲しい。志妖の感情が読み取り辛いのは、おそらく心が閉じかけているからだろう。

言葉という感情表現が使えないのだから、無理もないのかもしれないが、それでは志妖が少し可哀相だ。もっと自信をつけてほしいと思う。

と、考えていると突然耳にチリチリとした感覚が。

「……………ん？」

「どうしたんだい？」

「いや、少し嫌な感情が……。これは……………怒り、かな」

しかも逆ギレに近いものがある。もしかすると……。

「グアアアア！」

「なっ!？」

顔を上げると、先程吹き飛ばされた鬼が巨大な岩を持ち上げて叫んでいる。

感情の方向は広場の真ん中、図体の大きな鬼に向けられている。

「ミコト!間に合うかい!？」

「わからん!硬度は下げられないのか!？」

「あれだけデカイと芯まで力が届かないよ!！」

「クツ!」

全力で疾走、走りながら桃鬼と話すがどうやら打つ手が無いみたいだ。

僕ならぎりぎり間に合うかもしれないがあそこまで巨大な岩をどうにかする力は無い。桃鬼の能力は一定以上の大きさを超えると能力が芯まで届かない。あくまで『視界に入ったモノ』は力の範囲が広がっただけで、直接触れないと巨大なモノは硬度操作が全体にいきわたらないのだ。

しまったな、もっと近くで待機しておけばよかった。というより先程からやけに右腕が重たい。なんだ？

「……………」

「なっ!志妖まだ握って、いやよく放さずに掴んでるなオイ!」

「……………」私か」

「え!？」

「私が、やります。危ないので、止まって下さい」

下手をすれば、風を切る音で聞き逃してしまいそうな小さな声。けれど僕は、瞬間的に桃鬼の腕を掴んで止まっていた。

「なんだい!今は止まってる場合じゃ……ムグウツ!」

桃鬼の口を塞ぎ、僕は悠然と立つ志妖の姿を見る。

志妖は、両手で筒を作るように丸め、その口に当てる。

そして、今この瞬間に空を舞い、広場を押し潰さんとしている巨大な岩に向かって

「……………!!」

声の波動を、ぶちあてた。

その瞬間、ゴガン!と岩は砕け散り。

波動の残滓が辺りの木を薙ぎ倒す。

「……………!!」

僕は、咄嗟に妖精さんが作り出した結界に妖力を注ぎ込んで身を守っていた。

「ッぷあっ!……フンツ!」

砕けちった岩を、桃鬼が片っ端から硬度を下げていく。それを次々に握り潰し、やがて音が何も聴こえなくなった時、志妖はペタンと座り込んでいた。

「志妖！」

結界を解き、志妖を抱き留める。

「……………」

「……………ああ。大丈夫。ゆっくり眠りなよ」

「……………」

よほど疲れたのか、志妖はすぐに眠りについた。とても、いい笑顔だ。

「……………今なら、感情が少しは読める。頑張ったご褒美だね。……………いい夢を」

僕は志妖の感情を操り、いい夢が見れるようにする。夢を見るかどうかはわからないが、少なくとも気持ちのいい眠りにはなるだろう。

「にしても、あの大きな岩を一撃かあ……………。志妖、あなどれん」

しかも鬼どもは何事もなかったかのように闘いを続けている。闘いに夢中で気がつかなかったのだろうか？

とりあえず僕は志妖を抱き上げ、洞窟へと向かう。しばらくは様子を見たほうがいいだろうし、それに。

「こんな笑顔、滅多に見れないしね」

ちなみに、桃鬼はボロ雑巾と化した鬼を引きずりながら洞窟へと帰ってきた。

自業自得とはいえ、酷いものである。

ま、同情はしないけどね。

9：「百鬼闖夜祭・中」（後書き）

新キャラ、能力発動。

なんか、ミコトのまわりは強いのがっかり。

大丈夫。いいことあるぞ。頑張れミコト。

10：「百鬼鬪夜祭・後」

さて、僕は今ある鬼と向き合っている。  
ん？鬼って誰のことかって？  
やだなあ、わかってるくせに。

「何時ぶりかねえ、本気でミコトとやり合っつのは」  
「殺し合っつ、間違いないじゃ？」  
「そうだねえ。今までよく死ななかつたもんだ。お互いにね」

ハイ。桃鬼です。角を触るその姿にはデジャヴュにも程がある。  
デジャヴュついでに、どうせだから聞いてみようか。

「ねえ」  
「ん？」  
「ホントにやるの？」  
「当然。逃がしはしないよ」

ですよ。わかってたけどさ。

僕と桃鬼が向かい合い、その周りを鬼達を取り囲む。  
まるで闘つのが当然のようなこの雰囲気。  
さて、どうしてこうなったのか、思い返してみようか。





あれが直撃すれば僕も、むしろ桃鬼だって危ないかもしれない。未  
恐ろしい娘だ。

尻尾を一振りして、視線を戻す。

「ん？」

桃鬼が僕に向かって手招きをしている。

僕は妖精さん達を着物の内側に収納してから跳び、桃鬼の目の前に  
着地。

言葉の代わりに首を傾げ、何か用かと思表示。妖精さんも首を傾  
げている。シンクロ？

「とりあえずあの四人に鬼達をまかせることにしたよ」

「ほお。で？」

「いやねえ？勝った褒美は何が欲しいかと聞いたらさ、アタシとミ  
コトの闘いが見たい、なんて言ってきたから」

チラリと鬼達が集まっている場所を見る。

なにあの表情、めっちゃ楽しみにしてるよ。感情読むまでもないよ。

「それにさ、アタシもなんだかムラムラしてきたんだ」

「ほほお」

違う意味に聞こえた僕は間違っではない。

「ってことで」

「何が『ってことで』だよ」

「なんだいいきなり」

「別に？」

そっけなく、しかし厭味たっぷりで答えを返す。桃鬼が怪訝そうな顔で睨みつけてきたが無視。

桃鬼が僕に闘いを申し込んだ翌日の昼、つまり今、僕らを囲む鬼達の異様な熱気に少し腹が立っているのかもしれないな。

「方法は？」

「アタシの闘いにルールなんてあったかい？」

「……………わかった」

桃鬼の返答に、僕はため息混じりで頷いた。

ここまできたら腹を括って闘わないと、こちらが死ぬことになる。

現に、先程から耳が痛いぐらいにチリチリしている。

桃鬼は僕と全力で闘うのが本当に嬉しいのか、まだ始まってもないのに妖気が僕に襲い掛かってきていた。

「志妖」

「？」

志妖を呼び、鬼の大群の中から出てきた彼女に結界ごと妖精さん達を移動させる。

「お願いね」

志妖はコクリと頷いて、また鬼の大群の中へと突っ込んでいった。前にいればよかつたろうに。

「ミコト」

「？」

「手を抜いたら……殺す」

ぽつりと呟き、桃鬼はその手から石を放り投げた。

そして、地面についた瞬間。

「がッ!？」

僕は桃鬼の一撃を顔面に喰らっていた。

なんだ？なにが起きた？

「……ッ」

一瞬頭がフリーズしかけるも、僕はその場から真上に跳躍。はるか上空へエスケープ。

「いつてえな畜生……。桃鬼め、なにを……?」

言いながら着物を直して、違和感を覚える。

僕の着物は、こんなにパリパリしていただろうか？

「……………！まさか、っあ！」

ガクン、と急に下降を始める僕の身体。まだ上昇を続けていたはずなのに。

「やってくれたな」

明らかに自然落下よりも速いスピードで落ちて、いや、『引っ張られて』いく僕の身体。

僕は、僕に向かって拳を握りしめている桃鬼を見た。

「桃鬼め」

ズドン！と腹に一撃。景色が大回転を繰り返す。上に下に、左に右に。

しばらくして背中に衝撃が響き、そこでやっと大回転が止まった。

まあ、実際に大回転していたのは僕だったことに気がついてはいたけれど。

「ぐ……………うっ……………」

途端に襲い来る、強烈な不快感。

頭が揺れ、視界がぶれ、思わずガクリと下を向けば、ゴボリと音を立てて這い出してきた赤色が着物を染めた。

むせ返りたくなる血の匂いと鉄の味。

（考えたな……………桃鬼め）

溜まった血を吐きだし、むせながらも立ち上がる。フラフラするの

は仕方がない。

「僕の着物の『硬度を変えて』……っ、それを『搦んだ』わけか」

騒然となる鬼達。

それは、もちろん桃鬼の強さに驚いたのもあるだろう。

しかし、鬼達の視線は桃鬼を含めほとんど僕に注がれている。

「……………！」

桃鬼の息を呑む声が聞こえた。

なにを今更。僕を本気にさせたのは桃鬼なのに。

「……………フーツ、フーツ……………！」

さて、桃鬼。

覚悟はいいか？出来ていなくても、もう遅いけど。

「なっ！？速っ……………！」

ガギーン！と鳴り響く金属音。僕の爪と桃鬼の髪針が激突した音だ。今のに反応する桃鬼は、やはり一筋縄ではいかない。ぎりぎりと押し合う爪と針。

「っ！」

「チッ」

普段滅多にしない舌打ちをして弾かれたように離れる。

やはり、力では敵わない。

なら。

「シャアッ！」

「っ、消え……あうっ！」

妖力を使った『超』高速攪乱移動法。

更には妖力を籠めた爪で桃鬼を切り刻む。

「ぐっ、あっ、いつ、うあっ！」

上下左右ランダムに襲い来る爪に、桃鬼はその場から動けずに、倒れることも出来ずに立ち尽くす。そして、攻撃で跳ね上がった右腕を虚しく握りながら、桃鬼はグラリと後ろに倒れ、

「これで終わりだ」

僕は、桃鬼の首を掴んで押し倒した。崖の下、桃鬼は腕を上げたまま苦しそうに僕を睨みつけ、

ふと、笑った。

「確かに、終わりだよ」

その後は、聞こえなかった。

口だけが、動いていた。

アタシの勝ちだね。

そう動いた気がして、咄嗟に振り向くと、

目の前には、巨大な岩があった。

「……………うん……………」

草のベッドで、彼が苦しそうに唸る。

アタシの能力で作ったフカフカベッドに寝ておいて失礼な奴だ、と冗談ながらも呟きながら、彼の顔を覗き込む。

彼　ミコトは、真っ赤に染まった着物のまま、アタシのベッドで眠っている。

「アタシはちゃんと忠告したんだけどねえ。『手を抜いたら殺すってさ』」

ミコトの耳がピクリと動く。しかし、起きはしない。まあ、それだけのダメージはあるだろうから当たり前だろう。

ミコトは、今まで一度も本気で闘ってくれたことがない。いや、本人は本気のもりなのかもしれないが、いかんせん甘い。

今回だって、アタシの土俵である肉弾戦に自ら仕掛けてきたり、最初の一撃はともかく、空中に逃げ出した時は既にアタシが何をしたのかわかっていたはずなのに、避けようとしなかったり。



そもそもアタシの感情を操ってしまえばそこで終わりのはずなのにそれをしない。アタシがミコトの豹変を見て動揺したのにも気付いていただろうに……。

「……アタシに勝ちたいなら、本気で来なよ、ミコト」

アタシはミコトの額に口づけをして、彼の隣に横になる。

ミコトは、いつかアタシと本気で闘ってくれるのだろうか？  
くれるとしたら……怖いけど、楽しみだねえ。

けど、当分は遠慮しよう。

アタシだって、『キレた』ミコトは怖いのだ。

普段はかわいい顔してるんだけどねえ。

まあ、おやすみ。

10：「百鬼闘夜祭・後」(後書き)

なんか負けちゃうミコト。

強いんだけど、なんか勝てない。

その裏にはあんな事情があったりしなかったり。

まあ、なんだかんだ言っつて、桃鬼を殺す気なんておきなかったんですね。

まだ、良くも悪くも人の心。

11：〔攪乱〕

「ニコトー！」

「ん？」

崖の上から森を一望していると、下から僕を呼ぶ声がある。言わずもがな、桃鬼である。そもそも僕を呼び捨てにするのは桃鬼ぐらいしかない。

「よっ、と。どうしたの？」

「いや、少し気になることがあってね。来てくれ」

珍しく真剣な顔付きで言っ、僕に背を向ける桃鬼。

なんだろうかと思いつながら、僕は桃鬼についていった。

「これは……」  
「ヒドイもんさ。森の入口に倒れてたのさ」

洞窟の中に入ってしまった桃鬼についてきてみれば、そこには自分の目を疑う光景があった。

そこにあつた、いや、いたのは、無惨な姿で倒れている鬼だった。角はへし折られ、右腕は肩から存在せず、足はわけのわからない方向へ捻曲がつて。

極めつけは、身体中に開いた小さな穴。息は、もうしていない。ただ、悔しそうに未だ歯を食いしばっているばかり。

顔を見て、彼はあの決闘祭で勝ち残り、『四天王』となった者だと気付く。

「ミコト。コイツはね、四天王の中でも一際成長が大きかった奴なんだ。あの決闘からもう五十年経つ。コイツをここまでできる奴は、アタシか……ミコト、アンタしかいない」

「……何が言いたい？まさか、僕がやつたつて言いたいのか？」

「そんなわけないじゃないか。アタシはアンタを昔から知ってる。アンタはこういうことをする奴じゃない。……ただ、アタシは疑ってなくても、他の鬼はそうはいかないんだ」

真剣に、けれど少し辛そうな顔で言う桃鬼。

「なあ、ミコト。言ってしまうけど、他の鬼達はアンタを疑ってる。

皆で『こんなことが出来るのはアイツしかいない』と。アタシがどれだけミコトは違うと言っても、聞かないんだ、アイツら……」

俯き、申し訳なさそうにしている桃鬼。

むう、と僕は考える。

森の入口で倒れていたというこの鬼は、僕や桃鬼に及ばないとはいえ他の四天王達を置き去りにするほどの強さを誇っていた。その彼をここまで叩きのめすことが出来るのは、確かに僕か桃鬼しかないだろう。そして、鬼達は桃鬼に絶対的な信頼を寄せている。僕が疑われるのも無理は無かった。

桃鬼が本当に申し訳ないと思っているのが感情として伝わってくる。

「気にしないでよ、桃鬼。……けど、そうだな……。このまま僕と

桃鬼が一緒の場所にいたら、桃鬼にまで……、？」

「どうしたんだい？」

「いや……まさか」

ピクリと耳が動き、僕は一瞬で洞窟を飛び出した。

僕のもうひとつの能力、『命を感じ取る程度の能力』で感じ取った、大量の二つの命の固まり。

一方は非常に大きく、一方は掠れて消えかかっているような、弱々しい気配。

その正体は、広場にいた。

「な……止める、おまえら……！」

反射的に叫ぶ。

仕方ないだろう。

目の前で鬼達に追い詰められている妖精さん達を見て、止めに入らない方がどうかしてるはずだ。

「なんだい、なんの騒ぎだこれは」

僕の着物を能力で掴んでいた桃鬼が、少し遅れてやってくる。よかった、僕だけではこの場は収めきれない。

「桃鬼様！止めないで下さい！コイツら、俺達の仲間を……！！」  
「違います！ミコトさん、私達は何もしていません！」

桃鬼は鬼に、僕は妖精さんに言われてたじろぐ僕達。

「何の話だ。妖精にはお前ら鬼をどうこうする力は無はずだけど」  
「そうだよ。アンタ達、頭を冷やしな」

「しかし……！もう『今回』ので六人目！これ以上コイツラと一緒に過ごすのには堪えられない！」

「『今回』……？桃鬼、前にもあったのか、あんなことがあったのか……？」

「白々しいぞ、貴様！妖精には確かに出来ないかもしれないが、貴様には、いや、貴様だからこそ出来るだろう！」

「なっ……ぐあっ！」

「ミコトさん！？」

鬼に胸倉を捕まれ、そこから殴り飛ばされる。

妖精さんが心配そうに飛んでくるが、それを手で制して立ち上がった。

桃鬼をちらりと見る。彼女は、腕を組んだままこの僕から目を逸らしていた。

そうか。桃鬼もわかってるんだな。  
なら、ここらで区切りを付けさせてもらおう。

「くっ……！くっ、ハハハハッ！まさかこんなに早く気付かれると思わなかったよ！」

「なっ……！」

僕を殴り飛ばした鬼が、目を見開いて僕を見ている。  
その鬼の右腕を、僕は何気ない仕草で、切り付けた。

「グッ……、き、貴様ッ！」

「アハハッ！お前らに僕が勝てる訳がないだろう！」

鬼の拳を鼻先で避け、僕は首根っこを掴んで押し倒す。  
鬼から流れ込んでくる、激しい感情。

僕はそれを無視し、自らの爪に妖力を込め。

「ミコトッ……！」

「……！」

桃鬼が、僕を殴り飛ばしていた。

木に背中を打ち付けた僕は、グラグラする視界の中で桃鬼を睨みつける。

桃鬼の表情は、それこそ感情が読み取れない、複雑な表情をしている。

「出ていけ、ミコト……！」

喉の奥から絞り出すような声で、それだけ言った。いや、それだけ

しか、言えなかったのかもしれない。

僕は、ふらふらとした足取りながらも立ち上がり、狡猾な笑みを桃鬼に見せ付けてから、背を向けた。



真っ暗な夜。僕はあの大樹の中で目を閉じている。

僕は、あの後生き残っていた妖精さん達を引き連れてここへ来た。た。

悲しいことに、他の妖精や妖獣達は、鬼達にその命を奪われていた。ある意味仕方のないことなのかもしれないが、それでも守れなかったのは悔しい。

「ミコトさん……」

「？」

一人の妖精が、フヨフヨと穴の中へと入ってきた。なんだか悲しそうな表情だ。

「本当に、ミコトさんが……？」

僕の足元にちよこんと座り、上目遣いで聞いてくる妖精さん。そんな妖精さんに、僕は。

「そんなわけないじゃん」

しれっと、答えた。

妖精さん、ポカン。

「僕が鬼をどうこうしたって何の意味もないし、理由もない」

「な、ならなんで!？」

「あのままじゃ、桃鬼が危なかったからさ」

少し無理矢理過ぎたかもしれないけど、と付け加える。

最初、洞窟で桃鬼から話を聞いた時は、うつすら考えただけで、こんなに早く実行する気は無かった。

「どう転がったとしても、僕はこうするつもりだったんだ。桃鬼率いる鬼組と、僕が収めるその他妖怪勢。この二組は、別々に分けるべきだって」

しかし、実際に鬼達の感情を取り込んで考えが変わった。

予想以上に、鬼達は切羽詰まっていたのだ。

何人も仲間を殺され、しかし明確な犯人はわからない。ならば、犯人らしき相手だけでも消しておきたい。

次は誰か。大事な仲間か明日は我が身か。

「下手したら、僕らは收拾がなくなつた鬼に全滅させられていたかもしれない。そして、そうなつたら、僕も向こうを全滅させなきゃならない。仮に辛うじて鬼達が踏み止まつたとしても、自分達の頭が仲間殺しかもしれない奴と仲良くしてたら、いい気分じゃないだろ？」

「……なるほど」

「どつちにしろこの森の妖怪はほぼ全滅に陥る。そうなるのは、嫌だから」

その為にわざと悪者を演じ、桃鬼が僕を追い出しやすくしたのだが……。

実は桃鬼自身、僕を疑っていた。

口でどれだけ言おうとも、感情までは騙せない。

まあ、だからといって桃鬼を責めようとは思わないけれど。むしろそれは当然な感情だ。

「まあ、今重要なのはそこじゃない。重要なのは、どこのどいつが鬼達をやったのか、ってとこだ」

「……はい。正直、あの鬼を殺すとなると……」

妖精さんは僕をちらつと見て、慌てて目をそらす。  
気を使ってくれているのだろうか。いい子だ。

「別にいいよ。確かに僕なら出来る……。ということは、鬼をやった奴は僕ぐらい強いかもしれない」

「……そんな妖怪、ここにいますでしょうか……?」

「いや、妖怪とは限らない」

「え?」

そう。犯人は妖怪とは限らない。

しかし……果たして、彼等にそんな力があるのだろうか?  
僕の知る限り、そんなことはありえないんだけど……。

「……僕は寝る。何かあったら、呼んで」

目をつぶり、考えるのをやめる。

明日は人里にいかなきゃならないな、と最後に一人呟いた。

11：「攪乱」(後書き)

なんかごちゃごちゃしてしまった……。

指摘、感想があれほどござ。

## 12：「少女と化け猫」

日の光が入り込まないこの場所なのに、相変わらず僕の癖は健在らしい。

ゆっくり慎重にまぶたを開き、当然そこに太陽は無いことを再確認してから息を吐いた。

ぱちぱちと何度か瞬きをしてから、さあ体を起こそうかと力を入れる。

「ん……」

起き上がれない。

どうした、僕の身体。昨日の一撃が案外効いているのかと視線を自分の身体に向ける。

「……てい」

「あう」

僕の身体に引っ付いていた妖精さんを引っぺがす。片っ端から。あらかた剥がし終え、妖精さん達を木の外に放り投げる。

「よし、行くか」

妖精さんの安否は気にしないで木の穴から飛び降りる。今日は人里の様子を見に行かなければならない。

「ミコトさん、ひどいです……」

ぼつりと聞こえた呟きはもちろん無視して、僕は駆け出す。

フカフカの木の葉の上に落としたんだから痛い訳無かるう。全く。

「な……………」

木の上で絶句する僕。目の前の光景が信じられなかった。確か僕が直接最後に人里を訪れたのは六十年程前。その時はまだ人間は原始的な生活を送っていたはずだ。獣を狩り、魚を採って、叩き割った石で調理をしているような、そんな生活を。

だからこそ、僕は目の前の光景が信じられなかった。

「……………どこの繁華街だよ」

そこにあつたのは、街だった。集落でも村でもなく、街。

僕が前いた時代となんら変わらない、いや、むしろそれ以上に発達した文明が、僕の目の前にある。

僕は、しばらく見開いた目を閉じることが出来なかった。

(しかし、近くで見ると更に凄い。この建物なんて何で出来てんの？コンクリートですらないし……………)

猫の姿に変化をし、街中を練り歩くことにした僕は、必要以上にキョロキョロしていた。

猫だからこそ大して不自然では無いが、人型ならただの挙動不審者である。猫で良かった。いや、そもそも人型でここを歩いたら挙動不審以前に捕まっていると思うけれど。

（服は……僕の知ってるものと大して変わらないのかな。材質は違  
うみたいだけど）

子供に抱き抱えられながらそんなことを考える。やめて引っ張んな  
いで、尻尾が千切れる。

それにしても、これはどう考えてもおかしい。

子供の腕からスルリと抜け出してエスケープして尻尾をクルリ。す  
ると、子供は首をかしげて僕の隣を通り過ぎていった。  
幻術って便利。

（さてさて……。僕の記憶じゃ、人間はたかだか数十年じゃここま  
でこれないはずだけど）

歴史なんざ詳しいことは忘れたが、僕の言っていることは正しいだ  
ろう。人間の文明は少なくとも数千年、数万年単位でゆっくりと進  
歩していくものだ。それも、人間自体の進化過程も加わる原始時代  
となればなおさらなはず。

（な、はずなんだけど）

ただいま僕の目の前に居るのは、なんともスマートな鉄の塊（もし  
かしたら鉄ですらないかも）を持っている屈強な成人男性。  
簡単に言おう。

銃持ったオッサンである。

「……………」

オッサ、男は僕を見下ろしたまま黙りこくっている。



なんだ、なんか用かオッサン、なんて言えるはずもなく（まず猫だから話す時点でおかしいんだけど）、僕はじっとしていた。動いたら撃たれそう感じたしさ。流石に銃撃たれたら身体に穴開いちゃう。……ん、穴？

「……………ふむ」

オッサンは銃を地面に置いて僕を抱き上げた。なんだい肩なんかに乗っけて。

僕を肩に乗せたオッサンは、銃を拾って歩き出す。時折撫でてくれるので、単なる仏頂面な人なただけだとわかった。ダンディ。

僕は抵抗せずになされるがまま。ダンディなオッサンの肩に乗ったままじっとしている。

（それにしても、穴、ねえ……。やっぱり当たりかな）

「開ける」

「はっ」

オッサンの一声で、目の前にある扉が開かれる。偉いんだね、この人。

そんな他人事な考えをしている内に、オッサンはどんどん進んでいく。長い長い廊下を歩き続けて、辿りついたのは少し小さめな扉の前。

「……………」

そこでオッサンは、僕を肩から下ろした。僕を見つめる視線からは、何かを託されたような、頼まれているような、そんな感情が読み取れる。

オッサンが扉の横にあるボタンを次々と押していく。

（パスワードかよ……ますますおかしいな）

最後の一つを押し終えたのか、扉からガチャリと音が聞こえてきた。

同時に背を向けたオッサン。  
その大きな背中をじっと見送った。

「誰?……あら」

扉を開けて出てきたのは、小さな少女。少女は僕を見て、少しだけ微笑んで部屋の中へと招き入れた。

部屋の中に入り、僕は周りを見渡す。大量の本以外は変わったものはないな、とか考えていると、不意に少女が声をかけてきた。

「さて、もう正体を見せても大丈夫よ、妖怪さん」  
「!」

当たり前の様に話し掛けてくる少女。しかしその視線は本に向けられていて、何かのついでのように呟いただけのような印象を受けた。

「……なんでわかった?」

「なんとなく、かしら」

「……なんとなく、で僕の変化が見破られるなんて。理不尽過ぎる」

姿を人型に戻し、ベタリとその場に座り込む。

そこで初めて、少女は僕を真つすぐに見た。

「へえ……」

「不思議？」

「ええ、とつても。貴方、名前は？」

「ミコト。猫又のミコトさ」

「いい名前じゃない。私は永琳。八意永琳よ」

ふうん、とそっけない返事を返す。

永琳は、また本に視線を戻していた。気になったので横に行つて覗き見てみる。

「……わかるの？」

「ええ」

三秒で挫折、そして永琳がいわゆる『天才』と呼ばれる人種だと言うことがわかった。

近付いたついでなので、気になっていたことを聞いてみることにする。

「怖くないの？」

「どうして？」

疑問形で返されてしまった。どうやら怖さを隠している訳ではないようだ。

「僕は妖怪だよ。人間の恐怖から生まれた存在。普通、妖怪を見た人間はもつと慌てるはずだけど」

「貴方は人を襲うの？」

「いや別に」

「ならいいじゃない」

つい正直に答えてしまった。

しかし、やはり僕は妖怪にしては怖くないのだろうか、と若干自分の見た目に想いを馳せてみる。

無意味なのですぐに止めた。

そんな僕の横で、永琳がペラリと本をひとめくり。何気なく言った。

「それとも、仲間が殺されたから、八意家の一人である私に復讐でも？」

「……………！」

「あら、当たらずとも遠からずってところかしら」

クスリと笑う永琳。

彼女が言った言葉を、頭の中で反芻させる。

やはり、鬼を殺したのは。

「……………やはり人間だったか」

「ええ、やったのは私達人間よ。私は詳しいことは知らないけど、ね」

そう言つて、また本に視線を戻す永琳。

僕は頭をポリポリと掻き、眉間にしわを寄せる。

人間が妖怪を恐れるのは当たり前のこと。しかもこの時代は僕がいた時代とは違って妖怪が普通に存在していて、普通に人間を襲っているのだ。ある程度力を持った人間が駆除に乗り出すのも、また当然かもしれない。

「そうか……………。それだけわかれば充分だ」

「いいの？私達は近いうちにあなた達に直接仕掛けるのよ？」

「なら、こちらも対応の対応をするだけさ。僕は帰る。むざむざ潰されるつもりもないし」

扉を開き、猫の姿に変化。人がいないことを確認して、前足を外に踏み出す。

「十年よ」

「？」

声に振り返ると、永琳が本を閉じて立っていた。

「十年後に、私達は妖怪を殲滅しにかかる。覚えておいて」

「……何故教える？」

「さあ？わからないわ。……でも、貴方みたいな妖怪もいることがわかったのは、幸運だった」

ニコリと笑う永琳。

その笑顔を背に、僕はそこから去った。

さて……これからどうしたものか。

12：「少女と化け猫」（後書き）

永琳登場！

……ようやく、ですね。はい、すみません。

なかなか口調が掴めず、書きあぐねましたが、うまく書けてますかね？

質問、あったらどんどんどうぞ！

ポイントも入れてくれたら、嬉しいなあ……（ー・ー）

### 13：「元・人間は何を思う」

「むう、これからどうしたら」

僕は、湖のほとりて一人悩んでいた。

永琳と出会い、あの話を聞いてから丁度五年。後五年すれば、永琳の言葉が正しいとしての話だが、人間が妖怪を殲滅にかかる。

ため息をついて、石ころを湖に投げる。石ころは湖の丁度半分辺りでピタリと止まり、垂直に湖にポチャンと落ちた。

この湖は、鬼と妖精を分ける境目、国境のようなものだ。

一応、境目としての形を持たせるために軽い結界を張っているが、鬼のような基本能力が高い妖怪なら問題なく素通り出来るレベルなのであまり意味はない。本当に形だけの結界である。

「ま、それでも侵入してくる鬼がないのは、よほど僕が嫌われたか、桃鬼が何かしてるか……。ま、十中八九嫌われたほうだとは思っけれど」

パタリと尻尾で地面を叩いてみる。

仕方ないとはいえ、嫌われるのはいい気分じゃない。正直、嫌だ。

「でも、な。ああでもしないとこじれて大変だったろうし……。犯人候補は僕だけで充分だしな」

「誰に喋ってるんですか」

「そりゃあもちろんこれは独り言っていうそれはそれは寂しい行動……って、なんでここに居るの、志妖」



僕の独り言に勝手に返事をしていたのは、志妖。いつの間に隣にきたんだ？

志妖は僕の尻尾を触り、少し懐かしそうに笑う。

「そういえば、普通に喋ってるけど、能力は？」

「大きな声を出さなければ大丈夫になりました」

「そか、よかったな」

尻尾でポンポンと頭を叩いてやると、少しくすぐったそうに目を細める志妖。

しかし、しばらく見ないうちに大きくなったものだ。

たかが五年、されど五年。

身長が高いとは言えない僕の身体だが、それでも百七十五ぐらいの身長はある。

試しに志妖を隣に立たしてみると、驚いたことにあまり変わらない。若干僕より低い程度である。角も心なしが大きくなったようだ。

「で、なんて言っていたんですか？」

「いや別に」

「犯人はミコトさんではなかったんですね」

「しっかり聞いてたんじゃん」

なんだか性格が桃鬼寄りになってきていないか？

「犯人は」

「人間だよ。その証拠に、まだ被害は出てるんでしょう？最近は大丈夫みたいだけど」

コクリと頷く志妖。

当たり前だ。犯人は僕ではなく人間なのだから。

「そっちはまだ僕を犯人だと思ってる？」

「またも頷く。

それを見て、若干安心する僕。そうでなければ、わざわざ犯人面した意味がない。

もし、鬼が自分達の仲間を殺した犯人が人間だとわかれば、すぐにも襲撃をかけにいくだろう。

それはいい。

問題は人間が、もはや襲い掛かってくるだけの鬼など簡単に殺せるだけの科学力を持っている、ということだ。

五年前ですら得体の知れない銃で何体も餌食になっている。

そして五年経った今。もはや僕の記憶にもないような、超未来的武器まで大量生産されている始末。特にここ最近の文明の発展具合は、異常の一言につきる。

この間街を見に行ったら、なんとシエルターまで設置されていた。街ですらなくなった。もはや都市である。

そんな場所に戦略も何も無しで特攻を仕掛けたらどうなるか？

言わずもがな、全滅である。

それを避ける為にも、あちらには犯人が僕であると思っただけでもらわなくてはならない。

我ながら損な役回りを選んだものだ、と苦笑した。

「どうするんですか？」

「ん……。今は特に何も。でも、志妖にお願いがある」

「なんですか？」

「僕を、悪役のままでもいいさせて欲しい。その為に……」

僕は爪に軽く妖力を込めて、志妖の前に掲げる。

認めてるよ。僕が最低だったことぐらいはさ。

「……ハイ」

志妖は、僕の前に立ったまま目を閉じた。

その志妖の顔に、そつと手を添えて、

「っ」

勢いよく、手を引く。志妖の頬に、一筋の赤い線が生まれて、その赤がだんだんと下へと流れていく。

ああ、最低だ。

未だ目をつぶったままの志妖に、僕は能力を使用。

ぐっ、と志妖の前で手を握り、ぐいっつと右へ引っ張る。

その先にある感情は、底しれない、恐怖。

「行け」

「っ！」

その目にかすかな滲みを見せ、志妖は結界を超えて走り去った。

これで、向こうさんは僕をまだ犯人として見てくれるだろう。志妖が何か言ってしまうかもしれないが、それを信じる奴はいない。なぜなら、志妖の服の隙間に僕の毛を挟んでおいたから。あの灰色を見て、僕を連想しない奴はいないはずだ。

「ふう」

ゴメン、志妖。

でも、これは皆を守る為なんだ。

膝を曲げ、跳躍。木の頂点に着地して、シェルターに囲まれた都市を見る。

「あと、五年……」

いつしか決めていた、今回の結末。

鬼は、人間が犯人だとは知らない。勿論、攻めてくることも知らない。

それに、僕が消えても、犯人が消えたと喜ぶだけ。

妖精さん達は、僕がいなくてもまあうまくやるだろう。

なんだかんだで生き残る種族だ。心配はいらない。

「あと、五年続けて……」

誰にも教えず、誰にも知らねず、誰にも語られず。

そんな形で、決着をつけてやるうじじゃないか。

待っているよ。

あなたたちと元は同じ種族だった妖怪が、ね。

#### 14：「孤独を選んで」

「や。十年振りだね」

「貴方は……」

十年前よりずいぶん大きくなった少女、いや、今は女性と言つべきか。

永琳は、いきなり部屋に現れた僕を見て目を見開いていた。

「どうやってここへ？」

「なに、少しばかり手伝いをしてもらつてね」

そう言つて、僕は虚ろな目をしている男を部屋の外へと座らせる。

少しばかり幻術を使わせてもらったのだ。

昔と比べて数が限りなく増えたパスワードも彼に打ってもらつた。

このパスワードを知っているということは、かなり偉い人だったのかもしれない。が、そんなのは関係ない。

ベタリと床に座り込み、永琳を下から見上げる。

「僕の聞きたいことはわかるだろう？」

「ええ。まあ」

「なら、教えてくれ」

「どうして？」

「答える必要があるのか？」

「なら、教える必要はあるのかしら？」

耳がぴくりと動く。

全く、妖怪を目の前にしてこのふてぶてしさ、呆れを通り越して尊

敬すらしてしまう。

さて、どうやって聞き出そうかと考えようか。

「尻尾」

「ん？」

「尻尾を触らせてくれたら、教えてもいいわ」

「……は？」

いきなりそんなことを真面目な顔で言い出した永琳。

ゆっくりと僕の背後に周り、

「どうかしら？」

「いや、別に尻尾ぐらいいいけどさ。それで教えてくれるの？」

「ええ。では……あら、思ったよりフワフワ……フフ、気持ちいいわね」

しばらくの間、尻尾を触って楽しむ永琳。

確かに僕の尻尾は自分でも気持ちいいとは思うが、そんなので情報をくれるのか？だとしたら、尻尾万歳。

「で、いつなんだ？触りながらでいいから答えてくれ」

「いいわ、教える。確か……妖怪殲滅を開始するのは三日後だったはずよ」

「本当に？」

「ええ、本当。……別に教えても私には影響はないし、すぐ教えてもよかつただのだけれどね」

「……ならなんで」

「一度触ってみたかったのよ」

「評価の程は」

「抱きまくらにしたいわ」

「そ」

「三日後、だつたな」

あの後軽く三十分は尻尾を弄られ続けた僕は、若干毛のダメージを心配しながら永琳に聞いた。  
永琳は、椅子に座って分厚い本をめくっている。

「ええ」

「わかった。……じゃあな」

「生きていたら、また会いましょう」

本に目を向けたまま言う永琳に、言葉は返さずに手を振ってその場を後にした。



そして、三日後。

僕は森の入口付近の木に乗って、都市の様子を眺めていた。  
今丁度、シエルトーに小さな穴が開いて、中からぞろぞろぞろぞろ  
ぞろぞろぞろぞろ………

「おいおい、さすがにあれはないだろ」

思わずうんざりした表情になる僕。

さすがにあの人数はないだろう。数えるのも面倒くさくなる。

「総力戦、ってやつか」

ポツリと呟く僕の周りには、誰もいない。

当然だ。教えてないのだから。

というより、こられたほうが僕としては困る。

僕は桃鬼達にも、妖精さん達にも、無駄な戦いをしてほしくない。

戦うのも、

殺すのも、

死ぬのだって、僕だけで充分なのだから。

「……………きた」

耳がピクピクと反応する。

歯を剥き出しにして、爪に妖力を込める。

感情は既に操作済み。今の僕は純粹な戦闘狂。故にこの状況に楽しささえ覚えても、引こうとは微塵も思わない。

ギリギリと音を立てて歯を食いしばり、身体にも妖力を充満させる。

そして。

「あああああ！！！！」

木を踏み台にして、武装した人間の山に突撃を仕掛けた。

14：「孤独を選んで」（後書き）

短くてすみません。

そのかわり、次回は長くなると思います。

15：「灰色世界の終末は」（前書き）

今回は少し残酷な表現が目立ちます。  
苦手な方は、お気を付け下さい。

## 15：「灰色世界の終末は」

爪に残る不快感。

僕はそれを無理矢理飲み込み、更に自らの爪を振るう。

レーザー銃らしきモノを構えた三人の男達の腕を、レーザー銃ごと一瞬で切り落とす。

返り血が僕の頬に当たり、直後に断末魔が耳に突き刺さっていた。

両腕を失った男達のこめかみに、爪を一突き。それを三回繰り返すと、辺りは静かになっていた。

「ふう」

空を見上げ、息を吐く。

僕を中心としたここら一帯は、大量の『人間だったもの』で赤く染められている。

一体いくら、殺してしまったのだろうか。

かつて生きることを諦めた存在が、今こうして他の命を刈り取っている。

それは、酷く滑稽なようで。

僕を得体のしれない感情でいっぱいにしていた。

「う……」

戦いはまだ終わりを告げていないのに、僕の身体は終わりを望んでいるみたいだ。

ボロボロになった着物の下には、ものの見事にレーザーで貫かれた身体がある。さらには、先ほどから音の聞こえ方がおかしいと思え

ば、左耳が一部吹き飛んでいた。そこから流れ出た血が固まり、穴を塞いでいるようだ。

「…………この程度で済んでるほうが、不思議なくらいだな」

尻尾を力無く振り、呟く。

当たり前だ。圧倒的な科学力を身に纏った人間を何百何千と相手にして、死なないほうがおかしい。

「しばらくは…………大丈夫かな」

能力で辺りを探ってみる。

この近くには、もう人間はいないみたいだった。

まあ、ここら全ての妖怪を殲滅しに来たはずが、たった一匹の猫妖怪に何千人もやられてはさすがに向こうも考え始めるだろう。今は、丁度その時間かもしれない。

僕は、足元にあった赤いペンダントを拾い上げた。元の色は…………確かめる意味もないので、気にしない。

パチンと音がして、開いたペンダントの中には、見知らぬ少女の笑顔があった。

「……………」

目を細め、ペンダントを握り締める。

せめて、あとかたもなく…………。

そんな間違っているのかもしれない考えで、握り砕こうとした、その時。

「ミコト……」  
「っ！」

背後から聞こえた、聞き覚えのある声。  
僕は勢いよく振り向く。  
そこには、桃鬼がいた。

「……ミコト」

再度、僕の名を呼ぶ桃鬼。森の入口にいる彼女の表情は、木の陰に隠れてわからない。

「……桃鬼？」

なぜかこの空気に耐え兼ねた僕は、彼女の名を読んでいた。  
何も反応が無かったら、僕は彼女を森の中へと戻そうと思っていた。  
勿論、事情を話して。  
だが、その予想は、悪い意味で裏切られた。

「……アタシの名を、呼ぶなアッ！」  
「！……？」

瞬間、木々がざわめいた。

僕は、何が起きたかわからなかった。

気がつけば、僕は桃鬼に押し倒され、首をわしづかみにされていた。

「アンタは違うって……そう、思っていたのに……！結局、アタシを最初から騙していたのかい……！」

「……………!？」

ギリギリと僕の首を締め上げる桃鬼。  
なんのことだかわからない。  
桃鬼は、何に怒っている？

力が抜け、『ペンダント』を握っていた手から、一部砕けた『角』  
が零れ落ちていた。

……………え？

角、だって？

「がつ……………っ！」

「あっ！」

無我夢中で首の手を振り払う。桃鬼から距離をとり、僕は周りを見  
渡した。

そして、自分の目を疑った。

「なん……………だよ、これ……………！」

そこに広がっていたのは、先程までと同じ地獄絵図。  
命を無くした肉塊が、赤く赤く染め上げられている。

違ったのは、ひとつだけ。

だが、そのひとつがあまりにも大きすぎている。

『鬼の死体』が散らかっているなんていう、笑えない冗談のよ



うな、そんな違いなんて、信じたくなかった。

いや、信じない！

「これは……ホログラフィーか？」

ホログラフィー。

レーザー光線を使い、空間に立体を生み出す光科学。

僕の知っているホログラフィーは、映像だけで触れはしない。

もしかしたら、知らないうち頭に直接『刷り込まれた』のかもしれない。

「くそっ」

能力を自分に使用。無理矢理感情を平常心にリセットする。すると、『鬼の死体』は『人間だったもの』に戻っていた。

やはり、なにかしらの手段での洗脳。そこにホログラフィーを使つてリアリティを高めている。

そこらの木に装置が仕掛けられているはずだ、と僕は視線を森に向け、

「アアアアッ！」

「っ！」

その場から飛びのく。

一秒前に僕がいた地面は、桃鬼の拳が粉碎していた。

「やめろ、桃鬼！」

「……一体どうしたらそんなに軽々しくアタシの名を呼べる。アンタには、罪悪感がないのかい！」

「違う！よく見るんだ、これは鬼じゃない！」  
「これ、だって？ふざけるんじゃないよ、コイツラはアンタに殺された鬼達だ。それをこれ扱いとは、いい身分じゃないか。……反吐が出る」

ダメだ、今の桃鬼には何を言っても聞きはしないだろう。  
ならば、直接感情を操作して……。

「なっ……感情が、つく」  
「今のアタシの感情を操れるなんて思わないことだね。知ってるよ、アンタの能力の弱点。強すぎる感情は操ることが出来ないってことは！」

地面を蹴り上げ、髪針を手に僕に突進を仕掛けてくる桃鬼。僕はそれを真正面から受け止める。

「くっ……、ダメだ、桃鬼！」  
「なにがだい？アタシは、アンタの存在の方が許せないのさ！」  
「ぐ……！」

桃鬼と組み合い、押し合う。

妖力を総動員しても、僕の足はザリザリと後退を許してしまう。  
身体から血が吹き出て、一瞬目が眩み。

その瞬間、僕達の横を、大量の人間が走り抜けていた。

「な……」  
「!？」

マズイ、森の中には入らせてはいけない。

くそ、目眩が……！身体が、動かない……！

均衡していた力が崩れ、僕は桃鬼に吹き飛ばされる。

一本の木を薙ぎ倒し、二本目で止まった僕の身体。

ガシャン、となにかが壊れる音が生きている耳に聞こえた。

「……あ……」

桃鬼が、ほうけた声を上げていた。

ホログラフィーが解除され、桃鬼の視界から鬼の死体が消えたのだらう。

これで、桃鬼は僕に攻撃はしてこない。

だが、もう遅かった。

次々に森へと流れ込んでいく人間達。

それに反比例して、ひとつ、またひとつと、命が、消えていく。

動かない身体。僕を支配するのは、絶望と、虚無感。

世界が、灰色に、染まっていく。

「ああ……」

許せない。

許せない。

許せない。

許せない。

何が？

自分が、人間が、僕が、あいつが。

パチンと、なにかが、ハジけた音が頭に響いた。

「……………！」

瞬間、流れ込んで来たのは強烈な感情の激流。

ブルブルと身体が震え、全身の毛が逆立つ。

砕けそうなくらい歯を食いしばり、動かなかったはずの身体を、噴き出す血を気にせず動かし立ち上がる。

この感情は、果たしてなんと呼ぶのだろう。

ふと、森から出て来た一人の人間が目に入った。

そして、理解した。

これが、殺意なんだと。

「ウ……………ウアアアアアアアア！……！！！！！」

瞬間、僕は駆け出していた。

一瞬でその人間の命を刈り取り、妖力を全包围に撒き散らす。

「なっ……………！総員、集まれ！くじっ！」

僕を見て驚愕した人間の首を撥ねる。

もはや、止まらない。

「あ……ああ……」

アタシは、動けなかった。

あまりの恐怖に、足が震えて立っていることすらできない。

周りには、人間らしき死体がゴロゴロと頃がっている。

先程まで、アタシには確かにこれが鬼に見えていた。

それが、アイツ……ミコトを吹き飛ばして木が倒れたかと思ったら、突然それは鬼ではなくなっていた。

ガチガチと、歯がぶつかる。

嫌な予感がして、森の入口に来て。

そこで見たのは、ミコトが角を砕いたその瞬間で。

信じていたのに、と。

裏切られた、と。

実はどこかで少なからずミコトを疑っていた自分を棚に置いて、一方的にミコトに襲い掛かった。

そして、今になって、理解した。

全ての黒幕は人間で。

ミコトは昔のまま。

勝手に勘繰っていたのはアタシの方で。

ああ、やっぱりまだ混乱してる。

けど、これだけはわかった。

ミコトは、アタシ達を守ろうとしてくれていて。

アタシは、そんなミコトに襲い掛かり、邪魔をして、ミコトを……壊してしまったんだと。

目の前で繰り広げられる、一方的な惨殺劇。

ミコトは、赤い涙を流しながら爪を振るっていた。

「……………」

気がつけば、周りには誰もいなくなっていた。

鬼も。  
妖精さんも。  
人間も。

けれど、まだ世界は灰色のままだった。

まだ、許せない。

なにかが、許せない。

何を、何を、何を？

ガクン、と首を曲げる。視界の中には、桃鬼の姿。桃鬼は、まるで何かに怯えているかのように、涙を流しながら、僕を見ている。

ああ、わかった。

「……僕は、自分が一番許せないのか」

自分のことなのに、今更気付くなんて。本当に、救いようがない。

無駄な戦いをさせたくないなんて言って、一人で戦おうとした結果がコレ。

森の中には、命がひとつも感じられない。

こんな結果に追いやったのは、間違いなく、自分。

僕は、なけなしの妖力を右手の爪に込める。

そして、自分の首に突き立てて、そのまま突き刺し。

「……………」

刺さら、ない。

見れば、僕の爪がフニャフニャになってしまっている。  
なんだコレは、と目を見開くと。  
その瞬間、僕の視界は真っ暗になっていた。

「!?!」

なにか柔らかいものに包まれる感覚。  
なぜだかとても心地好く、懐かしい匂い。

「……………ゴメン……………」

耳元でポツリと呟かれた言葉。その声も、聞き覚えがある。  
というより、僕の爪をこんなふうに出るのは、一人しかない。

「桃鬼……………」

「……………」

グッ、と抱かれる力が強くなる。微妙に震えている身体。泣いてい  
るのか？

桃鬼から流れ込んでくる、暖かく、そして柔らかな感情。  
灰色が、薄くなっていく。

「桃鬼」



「……………」

「泣かないで」

「泣いてなんか、ないよ」

「嘘だ」

「本当、だ」

「なら、顔見せて」

「……………嫌だ」

「お願いだから」

「……………」

ゆつくりと、桃鬼が身体を離す。

世界には、色が戻っていた。

僕は、少し紅くなっている桃鬼の頬に手を当てる。

「ゴメン。でも、ありがとう」

「なんで、ミコトが謝るんだい……………。アタシが、アタシ、が」

桃鬼を抱き寄せ、僕の身体に顔をうずませて続きを言わせない。  
悪いのは、僕なんだ。

だから、それなりの報いを受けなければ。

「っは……………。ミコト？」

「僕を引き戻してくれてありがとう、桃鬼」

今度はしっかりと、お礼を言う。

そして、桃鬼に結界を張った。

「なっ、ミコト!?!」

「桃鬼には、生きててもらいたいからね」

空へと舞い上がっていくロケットの姿。

そして、シエルターが完全に閉まりきった都市内に蔓延している、白い煙。恐らく、可燃性のガス。

簡単に言うのなら、超巨大爆弾がそこにあった。

被害はとてつもなく広がるだろう。

人間め、随分と粹な置き土産を残して行きやがった。

生き残った人間も妖怪も関係無しに根絶やしにするつもりか。

「ミコト！出せ、出すんだよ！」

「残念だけど、それは無理。桃鬼には、生きていて欲しいから」

世界は広い。

人間がいる限り、妖怪は消えない。

だからこそ、桃鬼に生きていて欲しいんだ。

白い煙が朱に染まり始め、爆発的に内部気圧が跳ね上がる。

僕はギリギリまで、桃鬼を覆う結界に力を込め続ける。

そして、最後になるであろう、能力使用。

桃鬼の感情を操作。

僕が死んでも、哀しまないように。

笑い飛ばして、簡単に忘れられるように。

「ミコト！ミコト……」

「バイバイ。ありがとう」

それが最後。

瞬間、僕の目の前は真っ白になっていた。

15：「灰色世界の終末は」（後書き）

毎日更新の目標が早くも敗れ去った……。

でもいつもより長かったからいいよね！

はい。すみませんでした。

16：「夢を魅させて」

真っ白。

清々しい程、真っ白。

憎らしくなる程、真っ白。

僕は、この白さを知っている。

限られた人以外誰も訪れない、閉鎖空間。

出ることも叶わない、僕を縛り付ける空間。

そう、ここは。

「僕の、病室……」

僕はベッドに横たわり、ただ真っ白な天井を見つめていた。

本当に真っ白。

飽きる程に真っ白。

美しい程に真っ白。

くだらない程真っ白。

「……帰って、きた……？」

手を見つめ、握って、開いて。

そこにはあの鋭い爪はなく、人間にしては白過ぎる肌の指に人間の平爪がついていた。

「いや、最初から夢だったのかも、ね」

耳や尻尾は確かめる気にもならず、僕は手をパタリとベッドにほり投げた。少し揺れるベッド。

なんだろう、この気持ち。

残念なような、それでいて何も感じないような。心に穴が開いてしまったような……。

「なんだか、眠たいな……」

今回は、『彼女』は来ないみたいだ。

ただの眠気とは違う、まるで全てが吸い取られていくような眠気。僕は、死ぬのか。

そう考えると、先程の感情が更に大きくなった。

あれ……僕、泣きそうだ。

「そうか……わかった」

案外早く流れ始めた涙を拭い、僕は少し笑った。寂しいんだ、これは。

まるで、あの世界から僕だけ弾かれたような気がして。それだけの話なのに、僕はとんでもなく寂しいんだ。おかしいな、独りには慣れてるはずなのにさ。

「しっかり！しっかりしなさい！目を開くんだ！」

僕を揺さぶる誰か。誰なのかはわからない。この視界の滲みは、溜まっっている涙のせいなのか、それとも。

頬を流れる涙の量が増えた。なぜかなんて、わかりきっていた。

「……しにたく、ない」

勝手に零れ出た言葉。

一瞬、僕を揺する動きが止まった。

「……………!!……………!!」

ああ、もう何を言っているのかすら聴こえない。

ああ、ごめんなさい。

少し、願うのが遅すぎたみたいです。

でも、神様。

果たしてあなたが存在しているのなら。

早く願っていたとして、その願いを叶えてくれましたか？

こんな馬鹿な僕の願いでも、叶えてくれましたか？

もし叶えてくれていたのなら、その一回をここで使わせて。

僕に、もう一度だけ、夢を、魅させて。

「っ！」

ドクン、と身体が鼓動を打った。

真っ白な世界は、一瞬で終わっていた。

わけがわからず、周りを見る。

そこは、あの真っ白な病室ではなく。

「な……」

無惨にも焼け焦げた、大地があった。

だんだんと思い出してきた。

そう、僕は。

妖怪に戦争を仕掛けてきた人間達と戦って。



人間の罨にかかった僕は桃鬼とも戦って。その隙に他の妖怪や妖精さん達が殺されてしまっ。暴走した僕を、桃鬼が引き戻してくれて。その時、巨大爆弾と化した都市が目に入って。それから桃鬼だけでも守ろうとして……。

あれ、なんで僕が生きている？

今更ながら、僕はその疑問にたどり着いた。見れば、僕の立っている周辺の大地は、周りのように焼け焦げてはいない。なぜだ、と顔を上げる。

瞬間、僕は言葉を失った。

「……………!!」

そこには、一人の妖怪が立っていた。

頭から生えた角には黒く煤がこびりつき。

その服はところどころ焼け、開いた隙間から覗く肌は赤く爛れていて。

それでも、その身体は揺らぐことが無く。

僕の着物を掴んで離さなかった、今では僕と同じ位大きくなった彼女の背中が、そこにはあった。

「志、妖……………」

「ケホツ……。大丈夫、ですか？」

僕が彼女の名前を呼ぶと、彼女はクルリとこちらを向いた。

改めて見てみると、志妖が立っていた場所から後ろは、放射状に拡がる形で全て無事だった。

つまり、あの絶望的な爆発を志妖がなんとかしたということになる。

「ミコト！出せ！」

「え？あ、ああ」

いきなり声を出した桃鬼に驚きながらも、彼女を包んでいた結果を解く。

すると桃鬼は、いきなり僕に頭突きをかました。

「つあ……！！」

「アンタは馬鹿かい！？なんて無茶するんだい！！」

「いや、無茶っていうか……」

「死ぬつもりだったって言うのか！だったらもつと馬鹿だよ！」

「うっ……！！」

肩をガシリと掴まれ、僕は反射的に目をつぶってしまった。

額に来るであろう痛みに備え、歯を食いしばる。

が、予想していた頭突きは来ず。

「……アタシがどれだけ、悔しい思いをしたと思ってるんだい」

フワリと、桃鬼の香りが僕を包んでいた。

「桃鬼……?」

「勘違いでアンタを追い詰めた挙げ句、肝心な所で助けてあげられない……。それどころか、死に向かうアンタに、近づくことすら出来なかった。これがどれだけ悔しくて、苦しかったか……」

血に汚れるのも気にせずに、桃鬼は僕の身体を抱き寄せた。

「……ゴメン」

「謝ったって、許しなんかしないよ。勝手に死ぬことなんて絶対に許しやしないんだから」

言葉と共に、桃鬼の腕は僕を逃がすつもりは無いみたいだ。

しっかりと抱き締められた僕は、しょうがないのでそのまま気になっていたことを口に出した。

「そつえば、志妖。どうやってあの爆発を……」

「あ、ハイ……。ただ、全力で、こう……」

志妖は言いながら手を前方に突き出している。アバウトなジェスチャーである。

つまりは、全力で波動を撃つたのだろうか……。

「……それだけ?」

「あ……でも……」

ジェスチャーを止め、指先を擦りもじもじとし始める志妖。え、恥ずかしがる要素あった?

と、いきなり桃鬼が僕を解放した。

「『生み出した波動を操る程度の能力』だろ?」

「あ、ハイ」

桃鬼の言葉に、もじもじを止めて頷く志妖。

「あの、私が生み出した波動を、一カ所に纏めて……」

「バーン、と平坦な声でジェスチャー発動。

つまり、波動を集中させて爆発にぶつけたって事らしい。

ああ、まあ、あれだ。

志妖めっちゃ強い。

「っと……」

「ミコト？どうしたんだい」

「……？」

急にフラフラして、足元が定まらなくなってきた。  
どうした、僕の身体。  
あ、そういえば。

「……限界、かな」

思い返せば僕の身体。かなりの重傷だった。

血を流し過ぎたみたいだ。

「ゴメン……。少し、寝る……」

そのまま僕は仰向けに倒れ込んだ。

空には、一筋の白い線。

「ミコト！ミコト、冗談は止めておくれよ！」

誰も冗談なんか言っていない。

悪いけど、今死ぬつもりはこれっぽっちもなくなってしまった。

目を閉じて、僕は考える。

これは、果たして僕の願いが叶った結果なのだろうか。

それとも、大量の命を奪った罰を受けさせる為に、死ぬことを許されなかったのだろうか。

正直、どうでもよかった。

自殺したら地獄行き。そんな話をどこかで聞いた。

殺人をすれば当然地獄行きだと思う。

どちらにする地獄行きならば、僕はまだ生きてみようと思う。

たとえそれが自分勝手に自己中なこじつけだったとしても。

とりあえず、今は寝よう。

次日覚めた時、またこの世界に目覚めますように。

16:「夢を魅させて」（後書き）

ふう〜……ようやっと戦いが終わりを迎えました。

なんと爆発から二人を救ったのは彼女だ、ということ……。。

今更ですが、この物語は多分に事故解釈（誤字にあらず）と歴史改変が含まれます。

それが気に入らない方は、……でも読んで欲しいのが本音です（笑）。

ここらで感謝の意を。

お気に入り登録数100件突破！本当にありがとうございます！

より一層頑張つて参りますので、感想、指摘、その他諸々、ポイント、よろしければお願いします！

では。

17：「神様訪ねて三千里」

「じゃあ、行ってくるよ」

「ああ。気をつけるんだね」

「……それでは」

僕は洞窟の前、二人の鬼に見送られて歩き出す。

いきなりだけど、僕は今日から、旅に出ます。

あの戦争が終わった後、僕達三人は、偶然生き残っていたあの洞窟にそのまま住むことにしていた。

それから数千年は平和そのもの。いつの間にか復活していた人間達をそこそこに脅かしながら、まあ特に何の障害も無く暮らしていたのである。

ちなみに人間はどこから来たかは全くわからない。あの爆発で少なくとも辺り一面焼け野原、地平線が見れるぐらいになっていた。近くの間人が移住してきたわけではないみたいだ。勿論文明は底辺まで落ち込んでいて、最初に見かけた人間は正に原始人。驚かそうと考えていたのに、思わず黙って見送ってしまったぐらい驚いた。

吹き飛んだ森は、洞窟周辺に生き残っていた木々が少しずつ広がっていき、今では爆発のダメージは見られないほど。自然ってスゴイで、そんなこんなで僕が感じたことは。

「神様っているのかな」

いきなりの発言に鬼二人は固まり、今度はなんだこの馬鹿はと言わんばかりの視線を送ってきた。桃鬼はともかく志妖にまで。傷付く。

「……でも、私聞いたことはありません。ここらの人間が、たまに話していますので」

「え、ホントに？」

「ハイ。でも、この辺りにいるわけではないみたいで……。私が聞いたのも、『なんだかって神様がいるらしい』っていう会話だけです。……」

昔より随分声を出せるようになった志妖が言う。だが人間よ、僕はその『なんだか』が知りたいんだけど。果たして人間がアバウトなのか志妖がアバウトなのか、僕には判断がつかない。

「ふうん……」

「まさかアンタ、会ってみたいとか言うんじゃないかな」

「いや、その通りなんだけど」

「なら、行ってくればいいじゃないかい」

「え、いいの？」

「行かないのかい？」

不思議そうに首を傾げた桃鬼に、僕は少しだけ考えた。けどまあ、ここまで話が進んだのだから。



「じゃ、行くのかな」

てなわけで、旅に出ることにしたのである。

いつ帰ってくるかはわからないことを二人には言っている。僕は気兼ねなく遠出出来る。

旅と聞き、桃鬼と志妖もなんとなくそわそわしていたので、もしかしたらあの二人も旅に出るかも知れない。

まあ、あの二人なら簡単に野垂れ死ぬことなどあるまい。なんせ片は鬼神、片はあの爆発を退けた化け物である。

「むしろ、こつちが心配だよなあ」

他人事のように呟く僕。危機感が足りないのかもしれないが気にしない。

「まずは……人里だな」

手頃な枝に跳び移り、尻尾を一振り。

最初こそ原始人だった人間も、数千年経てば文明も進歩する。

前みたいに二段飛ばしどころか十段飛ばしのような進歩の仕方ではなく、今回は緩やかな進み具合である。なんだかホッとす。

「よし、行き先が決まれば、まずは行動だ」

灰色の風なめんなよ、と寂しい独り言を最後に、僕は跳んだ。

それから数年かけて人里を巡り歩いた。

時には猫の姿で。  
時には人間の姿で。

こうして旅を試みれば、いかに自分が狭い土地で過ごしていたかがわかる。井の中の蛙とは正にこのことだ。

「お、人里発見」

前の人里を離れて数日。

割とゆっくり移動していたのだが、もう次の人里を発見してしまった。いいけどね。今回は猫で行こうか。

「よっ」

木から飛び降りると同時に猫に変化。スタンと着地して、

「うにゃ」！

踏まれた。

人里に入りいきなり踏まれるとはツイてない。過去に何度かあったけど。

(ははあ……なんだか臭うなあ)

前足で顔を擦りながら考える。

この人里は今までの人里より幾分大きく、それでいて何か雰囲気が違う。

これはもしかやと思いながら先へ進むと、

(おお！)

思わず声を出しそうになってしまった。猫が驚嘆の声を上げたら気味の悪いことこのうえない。気をつけなければ。

そこには、随分と立派な神社があったのだ。

元はと言えば神様に会いたいが為に始めたこの旅。なんだか神社を見付けただけで満足してしまいそうである。

(さてさて、ここからは人の姿で……)

一度家の影に飛び降り、人の姿へと変化。といっても、猫又の姿から耳と尻尾を無くしただけで、僕を知っている人が見れば簡単にバシるのだけだ。

「すみませんね……っと」

お参りなのかなんなのかわからないが、神社へと向かう人の流れに

身体を割り込んで、後は身を任せる。  
数分もしないうちに神社に着き、僕は人混みから出た。

「しかし、近くで見ると更に立派だ。これは余程崇拜されてる神様  
なんだろうなあ」

「そんな神様の敷居に入り込んだ妖怪よ。何か用か？」

「いや、ただ一目見てみたいなと思って」

「ほお。それはつまり消されたいと」

「いや、別にそういうわけじゃ。というか誰？」

僕は、鳥居に背中を預けて立っている女性に言った。

先程から僕に話し掛けているのは彼女だ。明らかに人間ではない。

「その会いたがっていた神だと言えは？」

まさか。

まさかとは思ったが本当に神様だった。

いや、背中にでかいしめ縄しよってる奴が人間だとか言い張っても  
信じないけれども。

「見ない顔だけれど、どこから来たんだ？まさかとは思うけど、私  
に喧嘩を売りに来たわけじゃないんだろう？」

「まさか。ただ本当に顔を見に来ただけだよ。神様ってのはどんな  
顔してるのかなってさ」

周りからの視線が痛い。それもそうだ。端から見れば僕は一人で社  
に向かって話し掛けているのだから。  
気にしないけど。

「予想外に美人さんで驚いたけど」

「ハッハッハ！言うじゃないか。アンタ、名は？」

「ミコト。猫又のミコトだ」

「私は神奈子。八坂神奈子だ。中へおいで。ゆっくり話そうじゃないか」

神奈子はそう言うと背を向けて社の中へと消えていった。

17：「神様訪ねて三千里」（後書き）

原作キャラ二人目はあの方でした！

くそ……口調が桃鬼にとりよったり……じゃなくて似たり寄ったりだ。

どうしようっ？

18：「猫に驚いた神」

神奈子の背を追い、僕は神社の中へと足を踏み入れる。もちろん隠行を使い、参拝に来ている人間には気づかれぬように。

「こつちだ。座りな」

神奈子に勧められるままに、彼女に向かい合う形で座った。

ここで僕は隠行を解き、ついでに変化も解く。尻尾をフリリと揺らし、耳を動かして首の骨を鳴らした。なんだかんだでこの姿が一番落ち着くのだ。

「ほう。猫又、とでも呼ぶのかな」

「まあね」

僕の背後でフラフラ揺れる二又の尾。若干神奈子の視線がそれに合わせて右往左往しているように見えるが、気のせいだろう。

「神に合うのは私が初めてか？」

「一応。見つかるつもりはなかったんだけどね」

「私をナメるんじゃないよ。どんな小さな妖力でも、人間に混じれば特別目立つ。……しかし、ミコト。アンタは何歳だい？」

「ん？」

「いや、あまりにも妖力が小さすぎたのでね。そんな力でよくまあ……」

頬杖をついて僕をなめ回すように見る神奈子。

実は人間に紛れやすいように妖力を最大限押さえ込んでいるだけなんだけど……。



「ん、僕は生まれたばかりの新参妖怪だから」

なんだか面倒だったので、流れて嘘をついてみた。特に意味は無い。なんとなくである。

実際はそろそろ千の桁から万の桁へと乗ろうとしている僕の歳。妖力も昔と比べだいぶ増えているのだが、桃鬼には敵わない。アイツは僕の二倍は妖力を持っている。化け物である。ちなみにもう一人の化け物、志妖は僕とどっこいどっこいの妖力。でも多分そろそろ抜かされる気がしないでもない。

「どうかしたか？」

「いや、なんでも」

不思議そうに僕を眺めていた神奈子にごまかしを入れ、逆に神奈子を見つめ返してみた。

うん。やはり美人……じゃなくて、神様というだけあって何か雰囲気気が他とは違うものがある。

妖怪とも人間とも違う『命』。僕の耳はその新鮮さにピクピク動いている。どうやらこの耳、能力を使うと勝手に動く癖があるみたいだ。

少し気をつけないと能力を使っていることが簡単にはれてしまう……ん？

「……………」

立ち上がり、後ろを振り返る僕。今のは……。

「おや……今日はまた随分とお客が多い日だ」

やれやれと言わんばかりに立ち上がる神奈子。  
やはり、勘違いではないらしい。

「近くの森の中かな」

「わかるのかい？」

「まあ」

「……不思議な奴だね。まあいい。私は行くとするよ」

「あ、僕も行く」

社の裏口らしき扉から出ようとする神奈子は、僕の言葉に振り返り一瞬止まる。

しかし、またすぐに前を向いて外へと出て行ってしまった。つまりは、勝手にしろということか。

「神様の力、拝見させてもらいましょうか」

空を飛んで移動していく神奈子に、僕はいつも通り跳んでついて行く。発音は同じなくせに一文字違うだけで全く違う。

くそ、神奈子の奴なんの障害もなくスイスイ飛んでいきやがる。それに遅れずについていける僕も僕だけだ。

「あいつらか」

隠行を使って木の上で見物を決め込むことにした僕は、周りより背の高い木に立ってそう呟いた。

向こうではしめ縄を背負った神様と妖怪の軍勢が対峙している。しかし、妖怪の方は小妖怪ばかりのようで、神奈子には到底敵いそうになかった。

「お、始まった」

どうやら交渉は決裂。神奈子の周りに太い柱のようなモノが現れる。(ちよいちよい聴こえてくる会話では、そもそも交渉にすらなっていないかった。言うことを聞かない妖怪共に神奈子がしびれを切らしたと思われる)その内の一本を右手に持ち、他の柱は妖怪に向かって投擲、いや発射。

柱に触れた妖怪は跡形もなく粉碎。運よく当たらなかった妖怪は神奈子自ら手に持った柱でホームランしていく。

間違つて飛んできた妖怪の一匹を叩き落とし、獅子奮迅の勢いで妖怪を吹き飛ばしていく神奈子を眺める。なかなかの強さだ、やはり神様は侮れない。

なんて頭を掻きながら考えていると、不意に耳がピクリと動く。強めの妖力が神奈子の近くから感じられ、僕は首を傾げた。

これは、明らかに小妖怪の纏う妖力ではない。

「ん……」

どうやら神奈子は気付いていない様子。もしかしたら気付いているのかもしれないけれど、あの数を相手にしては……。

「面倒だね」

もう一度周りに柱を展開。

神奈子は、この一撃で終わらせようとして集中する。

そして一斉に柱を放とうとした瞬間、後ろからガサリと音が聴こえていた。

嫌な予感がして振り向いた神奈子の視界に、他の奴らとは明らかに違う妖力を纏った妖怪の姿が目に入る。

（しまつ、防がなければ！）

咄嗟にそう判断した神奈子だったが、この瞬間を狙っていたのか前にいる小妖怪達も神奈子に突撃を仕掛ける。

単体の力は弱くとも、数が多ければそれは巨大な力へと変貌する。

軽いパニックに陥った神奈子は、それでもなんとかしようと身体に力を込め。

「シッ！！」  
「！！！！？」

更に大きな妖力を纏った妖怪が、目の前の妖怪を引き裂いていた。

僕は隠行を解くと同時に妖力を解放、一瞬で神奈子の側に跳び、襲い掛かるうとしていた妖怪を縦に引き裂く。  
振り抜いた腕の力に逆らわずに、クルリと一回転して柱に着地。

「な、アンタ」

おお、驚いてる驚いてる。

神奈子だけじゃなく小妖怪も驚いてその動きを止めてしまっている。

気持ちにはわかる。僕だって、いきなり自分の何十倍の力の妖怪が現れたら固まると思う。けれど、戦いの最中に動きを止めるということは、死亡宣告に等しい行為な訳で。

「神様、後は宜しく」

僕はそう言って神奈子の頬をぺチンと叩き、柱から全力で跳躍。次の瞬間、複数の柱が妖怪達を襲っていた。

「神奈子〜!!」

「？」

「受け止めて〜!!」

「なっ!はうっ!~!!」

妖怪を殲滅して数十秒、僕は神奈子に向かって落下していきました。

神奈子の首に腕を引っ掛けて落下停止。おお、堪えた。

「アンタは……何者だい？」

いきなりの衝撃に顔をしかめながらも神奈子はそう聞いてきたので、僕は神奈子の身体にぶら下がりながら答える。

「ああ……なんなんだろじね」

18：「猫に驚いた神」(後書き)

ホームラン。



## 19：「第\*次鬼猫大戦」

「結局アンタは何歳なんだい」

「ご想像におまかせします」

はて、このやり取りはこれで何回目であろうか。

神奈子のところに訪れて早四年、こんなに長居する気はなかったのだが…… 光陰矢の如しとは良く言ったものである。

「いいかげん教えてくれてもいいじゃないか」

「いいかげん諦めてくれてもいいじゃないか」

「……………」

ゴスツ、と頭に鈍痛が走る。神奈子の柱で頭を小突かれたみたいだ。オンバシラといったか、しかし神奈子。君は軽く小突いただけかもしれないが僕にとってはなかなかの威力なことを理解して欲しい。

僕、打たれ弱いんだよ？ ホントだよ？

「……………なんでそんなに僕の歳を聞きたがるのさ。この四年間、毎日毎日聞かれるこっちの身にもなつてよ」

「知りたいものはしょうがないじゃないか。この私を子供扱いするような妖怪、ザラにはいないんだからね」

「むう……………」

腕を組んで言ってくる神奈子を見て、僕は頬をポリポリと搔いた。現在神奈子の前では妖力を隠してはいない。勿論、全開にしているわけではないのだが、神奈子にしてみればそれでも充分脅威な力らしい。

桃鬼の妖力に比べたら、僕なんて半人前もいいところなんだけどねえ。

「まあ、それを聞き出すのはまた今度にしよう。今からやることがあるからね」

「やること?」

「そうさ。ミコト、アンタにも来てもらおうからね」

やけに重装備していると思ったら、出かけるのか。

果たして今度はどんな相手をするのやら。

と、不意に背を向けていた神奈子がこちらを向いた。まるで、こちらの考えていたことがわかっていたかのように。

「行くよ。神同士の戦い、とくと目に焼き付けるがいい」

へ?

「神奈子」

「ん？」

「もしかして、あれ？」

「ああ、そつち」

神奈子の傍らに浮かぶオンバシラに乗り、僕は手を望遠鏡に見立てて目に当てる。

そこには、神奈子の神社に負けず劣らずの立派な神社があった。

「はあく。これは激しい戦いになりそうだと、これは……？」

「どうした？何か気になることでも？」

「あ、いや……」

僕の耳がピクピク動いているのを見て、神奈子がそう聞いてくる。言葉を濁してはみたが、僕自身よくわからない。いや、わかってはいるのだけれど、その理由がわからないのだ。

「……ふむ。神奈子、何か羽織れるものない？出来れば全身が隠れるぐらい大きなやつがいい」

「？何に使っただ、そんなもの」

「どつやら、あちらさんに僕の知り合いがいるみたいだね。なに、ただの気まぐれさ」

「……ふうん」

怪訝そうに僕を見る神奈子。けれどすぐに僕に向かって黒い布を被せ、その上からコッソソと一撃。

「行くよ」

「あいさ」

「……来たね。八坂神奈子」  
「待たせたか？ 洩矢諏訪子」

あちらさんの神社の上空、僕はピリピリとした空気を肌で感じている。

神奈子が『洩矢諏訪子』と言った、同じように空を飛んでいる相手を見て、コイツは神奈子と同じ神だと理解。  
理解したのだが。

「……小さいな」

「むっ！ 何か言った!？」

「いや、何も」

どうやら気に障ったようなので謝罪。いやけど、流石にあれはないだろう。

まず見た目が少女そのまま、次に目を引かれるのはその帽子。何故目があるんだ、知りたい。けどなんか知りたくない。

「……で、やっぱりいた」

半ば無理矢理帽子から視線を外し、神社の方を見る。  
そこには、見知った人影が二つほど。

まあ、桃鬼と志妖なんだけどさ。

「神奈子、僕は下りるから」

「ああ。手出し無用だからね」

それだけの言葉を神奈子と交わし、僕は身を翻して空中へと身を投げ出す。

僕の身体を覆う黒い布がバサバサとはためき、二人がいる場所へと急降下。

「っ！？桃鬼様、何か来ます！」

「知ってる」

流石桃鬼。微動だにしない。

スタンと軽やかに着地して、乱れた布を直す。

「『始めまして』。お二方」

「……何者」

「……」

警戒して身構える志妖と、堂々と仁王立ちしている桃鬼。

というか、なんだかこの四年で更に強くなってる気がする。気のせいだと思いたい。志妖の妖力が僕を超えているような気がするのも、あくまで気のせいだと思いたい。現実逃避？なにそれおいしいの？

「……ハハア」

くだらないことを考えていると、志妖の後ろで桃鬼がニヤリと笑った。

あ、これもう気付かれた。

しかし、志妖は僕に警戒しているせいかなそんな桃鬼には気付かないチャンス。

「随分と強いみたいだな、鬼の嬢ちゃん。……次は、君をもらおうかな」

「……なにを」

「先に言っておこう。俺の能力は『身体を奪い取る程度の能力』だ。俺は、この能力で様々な身体を奪い取ってきた」

必死に笑いを堪えている桃鬼。

やはり無理があるか……？口調も変えているけれど、これでは志妖にもばれてしまうかも……。

「…………！」

あれ、案外信じてるっぽい。いけるか？

「この声に、聞き覚えはないか？志妖」

「……なに、を」

志妖の表情に、少しだけ歪みが生じる。あと一押し。

僕は、今まで身体を包んでいた布を後ろに投げ捨てた。

志妖の目が見開いたのを見逃さず、僕は最後の台詞を言い捨てる。

「ぶん……。奪い取ったはいいが、なにぶん妖力が少なくてな……」

「……ミコト、さん？」

「ほう、そんな名前だったのか、この身体は」

わざとらしく言う僕を、志妖は信じられないといった表情で見つめている。

しかし、そこには僕はもういない。

「邪魔者は消さないとな」

そう言った僕の腕は、桃鬼の身体を貫通していて。

瞬間、とてつもない衝撃が僕を吹き飛ばしていた。

「うあっ！」

神社に激しく身体を打ち付け、前のめりに倒れそうになるところをなんとか堪える。

顔を上げれば、そこには明らかに僕よりも多い妖力を纏った志妖が居て。

そんな志妖を見て、僕は笑った。

口に溜まった血を吐き捨て、志妖、ではなくその後ろの桃鬼を見る。桃鬼の身体には当然傷一つ見当たらない。それどころかドカリと座って傍観体制ときた。

幻術を使い、志妖にあたかも僕が桃鬼を殺したように見せたのだが、ここまで上手くいくとは思わなかった。

まさかいきなり波動を食らわしてくれるとは。いろんな意味で予想外だった。

上空ではすでに戦いが始まっていて、鈍い音が僕の耳に聴こえてくる。



意識を戻して前を見れば、立派な大妖怪となった志妖の姿。

本当は、僕のいないところでの二人の姿や振る舞いが見たかっただけなのだけれど。

ふと、僕は今まで本気の志妖と戦ったことがないのを思い出していたわけで。

「ぬるい」

「!?!」

「本気でこないと、死ぬぞ?」

志妖はその性格のせいか、僕や桃鬼には手合わせで本気を出せない。他の妖怪に襲われても、どうしてか一瞬躊躇してしまい、その隙に僕や桃鬼がそいつを倒してしまう。

まあ、早い話僕は本気の志妖と戦ってみたいだけだ。おかしいな、感情も操ってないのにさ。

「!?!」

志妖の目がカツと見開き、僕が居た場所を何か大きな力が通り過ぎる。次の瞬間、神社に風穴が空いていた。

僕は空中で考える。

むしろ僕の方が危ないんじゃない?

自業自得とは、正にこのことかもしれない。

19：〔第\*次鬼猫大戦〕（後書き）

文章が不自然な気がするよ？……なんだ、気のせいかな、ハッハッハ！

……ふう。

神社から離れ、僕は縦横無尽に辺りを走り回っていた。

「さすがに、神社が壊れるのは、罪悪感があるし、さっ」

僕が走り去ったルートをなぞるように地面がえぐれていく。このままじゃミステリーサークルができるかもしれない。

まだ妖力を使っていないので全力の半分以下のスピードではあるのだが、志妖は僕を未だ捉え切れていない。これが桃鬼なら、走る道を読み取られて地面の硬度を下げられて終わりだ。

「つとお！」

痺れを切らしたのか、志妖が巨大な波動を飛ばしてきた。瞬間地面を蹴って真横へとエスケープ。波動は地面を削りながら木々を薙ぎ倒し、やがて消滅した。

「逃げてばかり……！」

ビリビリと伝わってくる怒りの感情。手を抜いている様子は微塵も見られない。そうこなくては。

さて、今度はこちらから行こうか。

「ふん、ならこちらから行かせてもらっぞ、って……」

前傾姿勢を取った瞬間目の前に現れたのは、柱。

「つくぬー！」

「!!」

身をよじってなんとか回避、したのだが。僕の身体に、鉄球でもぶつけられたような衝撃が重く響いた。今度は吹き飛ぶことはなく、その場に膝をついてしまう。

「今のは……オンバシラ？」

歯を食いしばり、空を見上げる。

そこでは幾重にも鉄輪を腕に重ねて投げ付けている洩矢諏訪子と、それにオンバシラで対抗している神奈子の姿。なるほど、今のは単なるとぼっちりかコラ。

なんてことを少しだけ（今は少しだけ）考え、視線を落として志妖を見る。先程の一撃は志妖の波動だろう。あの瞬間に迷い無く攻撃してくるとは、なかなかやる。

「え、あれ……」

本人は予想外にダメージを受けている僕に驚いている様子。

今の僕は妖力を抑えている。打たれ弱さ絶賛上昇中の僕には、あんな一撃でも致命傷になりかねないのだ。実際、かなりヤバイ。

「ケホツ……くっ」

立ち上がり、頭を振る。

何をしてるんだ、僕は。自惚れるのもいい加減にしなければ。

僕是最強でも無敵でもなんでもない、ただ長生きなだけの妖怪なんだ。しかも相手は生まれつきポテンシャルが高い鬼。元から手を抜いて勝てるような相手ではない。

「いいだろっ」

「っ!？」

「くだらないことはやめだ。本気で行こう」

妖力を全力解放。僕のそれは量こそ志妖より少ないが、そんなことは関係ない。

僕の真のスピード、お見せしよう。

「なっ……!」

おそらく志妖には目で追えてすらいらないはず。それも当然、僕のスピードだって四年前よりかは上がっているし、志妖の前では見せたことがないのだから。

「!」

脚、腕、腰、肩、ランダムに切り付けていく。

志妖はそれに対してただ歯を食いしばって堪えていた。しかし、僕は攻撃を止めない。情なんてもの、ついさっき消してしまったから。何百回目かとなる一撃で、志妖の身体がぐらりと揺らぐ。それを見逃さずに、僕は志妖の首を掴んで片手で持ち上げた。予想外に、軽い。

「おっと。お疲れ」

「あ〜っ〜……負けちゃったよ〜」

視界の端で、桃鬼が落ちてきた洩矢諏訪子をぼすんと受け止めていた。桃鬼の腕の中で、小さな神様がその目を見開く。少し遅れて降りてきた神奈子も、僕らを見て同じように目を見開いた。桃鬼はいつも通りの表情であり、つまりは神様二人は僕を見て驚いていると

思われる。

「これで終わりか？志妖」

「私の、名を……」

どこかで聞いたことのある言葉の始まり。ドクンと心臓が高鳴り、身体が固まった。あれ？

固まった僕を余所に、志妖は震える手で円を作り、その口に当て

「呼ぶなあっ！！！！！」

「！！！！！！！」

志妖の咆哮が、僕に襲い掛かった。

200...「アリア」(後書き)

短いですね………すみません。

今日中、もしくは日付が変わる時にまた更新する予定でいますので、  
お許しください。

21：「心縛」

目を見開いたまま、僕は動くことが出来なかった。  
辺りを包み込む静寂。

髪の毛が数本パラパラと舞い落ちていくのを視界の端で捉えながら、  
ダラリと両手をぶら下げた志妖を見る。

僕の数メートル後ろでは、ミサイルが着弾したかのように巨大な穴  
が開いていた。

「……………できない」

「？」

「やっぱり、できない……………」

僕に首を掴まれたまま、苦しげに、しかしそれとは別に辛そうに志  
妖が呟いていた。流れ込んでくる感情が、痛い。

「たとえば、敵だとしても、ミコトさんを殺すなんて、できない……………  
！」

「……………！？」

僕は本当に驚いた。

殺らなければ殺られるこの絶体絶命の状況下で、志妖はそんなこと  
を言ったのだ。

僕の手で冷たいものが落ちる。志妖は、泣いていた。  
思わず歯を食いしばる。なんて甘いんだ、この娘は……………。

「なら、ここで殺されても文句はないな」

ギリ、と首を掴む手に力を込める。



ビクリと志妖の身体が跳ね、けれどそこから抵抗はしなかった。

それを見て、僕は。

「……仕方ない、奴だなあ」

そのまま志妖を引き寄せて、この身体に抱き留めた。  
なにがなんだかわからないのか、志妖は僕の腕の中に抵抗なく収まっていた。

「えっ………え!?!」

数秒遅れて声を上げ、抵抗を始める志妖。けれど、逃がさない。更に抱く力を強めてやる。

そんな僕に、首から洩矢諏訪子をぶら下げた桃鬼が近寄ってきた。呆れたように大きく息を吐いて、僕らを見ている。

「全く……騙す方も騙す方なら、騙される方も騙される方だよ」

まさか、あの演技を信じるとはねえ、とくつくつ笑い始める桃鬼。志妖は首をグルッと回して、痛っ、角が刺さっ……。

「ど、どういうことですか」

「まあ、全てはその悪戯猫の仕業だよ。大方、本気のアンタと戦いたかったとかだろうけどさ」

ねえ?と桃鬼は僕を見る。つられるようにして志妖も僕を見た。

「ま、まさか」

「そのまさか。僕は身体を奪われてなんかいないよ」

「……………!!」

ぱくぱくと口だけが動いている志妖。珍しい、志妖にもこんな一面が。

「けど驚いた。まさか、志妖が僕のことをあんなに考えてくれてるなんて思ってたから、さ」

「……………!!」

だんだんと赤くなっていく志妖の顔。

しばらくしていきなり、ボスツ、と僕の身体に顔を埋めてきた志妖だが、それ自体恥ずかしい行動だと気づいてすぐに離れようとするけど、させない。

志妖の頭の後ろに手を回し、少し強めに抱き寄せる。

「ゴメンね。少し悪戯が過ぎたみたいだ。けどまあ、なんだ……………」

その、ありがとう、ね」

「……………!!」

耳元で囁くと、志妖はぐいっと身体を寄せて僕を押し倒した。傷だらけの身体を包み込むように抱きしめる。

途端に罪悪感が込み上げてくるが、殺されていたかもしれないのはこちらと同じ。言い訳はしないけど、理解はして欲しい。

「……………妬けちゃうねえ」

「ん？」

「なんでもないよ」

背を向けた桃鬼に首を傾げ、僕は空を見上げる。

まあ、いい気分といえば、そうなのかもしれない。

けれど、僕は考える。

『私の、名を……』

志妖がそう言った瞬間、僕はまるで何かに縛られたように動けなくなった。

まるで金縛り。実際に遭ったことはないが、多分あのような感じなのだろうと思わせるほどに、動くことが出来なかった。

能力を使ってもどうしようも出来なかった。

思い出すだけで、胸が苦しくなる。

あの言葉を、僕は知っている。

そう、あれは。

「ミロト、さん？」

「なんでもない……なんでもない……」

「……？」

21：「心縛」(後書き)

エラーが起きて一度文章がぶっ飛んだ過去にも負けず書き上げた！  
ハッハッハッ！

## 22：「鮮烈な初対面」

「……はて」

僕は今、少しへこんだ地面に座っている。

首を傾げ、尻尾を と、今は隠しているんだった。ポリポリと頬を掻きながら、周りを見渡す。

家。人。時代劇みたいな家。僕を見て驚いていく人。

「1111は……」

聞いて驚くことなかれ。なんともここは平安京（多分）である。

いや、一番驚いているのは僕んだけどね。

さて、なんで僕が平安京（多分）にいるのかと言えば、少し時を遡らなくてはならない。

僕は立ち上がり、着物を払って歩きだした。

「じゃあ、僕は行くよ」

「え、もう行くの？」

「神様に会うつっていう目的は果たしたからね。次は気ままに旅を試みたい」

寝転がったまま聞いてくる諏訪子に、僕は立ち上がりながらそう答えた。

あの戦いから約一年。

神奈子と諏訪子の戦いは神奈子の勝ちに終わり、その後信仰がどうのこうので散々話し合う様子を僕はじつと眺めていたのだが、どうやら『洩矢』の名を擦って『守矢』に変えることで万事オーケーに収まつたらしい。

これで諏訪子への根強い信仰が神奈子に流れるようになるのか。正直僕には訳がわからない。

「桃鬼と志妖はどうする？」

「アタシはもう少しここにいますよ。といっても、この神社からは出るけどね」

「私は桃鬼様と」

「そ。じゃあまたしばらくはお別れだ」

尻尾をクルリと回して、僕は社の戸を開く。  
時は夜。

人間の恐怖が濃くなる夜は妖怪の力が強くなる。旅立ちにはいい環境だ。

「またね、神奈子。気が向いたら顔を出すよ」

「ああ。いつでもおいで」

その言葉を最後に、僕は跳んだ。

それから長い間、僕は辺りを旅してまわった。  
たまに桃鬼達と鉢合わせになることもあったが、基本自由な一人旅。  
寂しくなれば人間を装い人里に顔を出し、一人になりたくなれば妖  
怪として辺りを旅した。

で、数百年経った、ある日。

「はじめまして、ミコトさん」

「……………」

森の中のとある木の枝でのんびりしていた僕の横に、にゅっと女性  
が現れました。嘘ではない。けど嘘の方がよかった。

「どちら様？」

「あら、申し遅れましたわ、私は八雲紫。スキマ妖怪よ」

「聞いたことがありますか」

「貴方が私を知らなくても、私は貴方を知っているわ」

「貴女が僕を知っていても、僕は貴女を知りません。では」

瞬間枝をへし折り逃走を計る。

ヤバイ。あの女、いや妖怪か、とにかくヤバイ。

地面に足がつくと同時に地面を蹴り上げ、爆発的な土煙を上げて加  
速。しかし。

「どうかしましたか？」



「なっ!」

いきなり目の前に逆さまになって現れた。急ブレーキをかけて止まる。

「いきなり逃げ出すなんて、ひどいお方」

「いや、逆さまで現れる貴女もなかなかだけど」

僕の言葉に、どこからか取り出した扇で口元を隠して笑う八雲紫。  
うわぁ、胡散臭い。

「……で、なんの用?」

「いいえ、特に何も。ただ会ってみたかっただけですわ」

「そ」

話せば話す程胡散臭さが滲み出てくる。

というより、

「そのわざとらしい敬語と、嘘つくのやめれば?」

「……………」

感情を読み取ってみれば、コイツ僕を嘲笑ってやがった。さすがにカチンときたので、こちらも気を遣うのを止めて真っ向から向き合うことにした。

扇を口元から離れた紫は、もう笑っていなかった。

「なんでわかったのかしら?」

「その漏れだしてる妖気に聞いてみなよ。戦ってみたいって言ってるようなもんじゃないか」

「あは」

わざとらしく反応する紫。なんか腹立つ。

「で、なんで僕の名前知ってるの？」

「知らないのかしら？結構有名だけど……。『灰色の風』さん」  
「懐かしいなオイ」

まだそれ続いてたのか。それを付けた妖怪勢はあの戦争で全滅したはずなんだけど……。

「っ……………」

いきなり身体が強張り、心臓の鼓動が苦しく感じ始める。

この間自覚した、僕のトラウマらしきもの。やはり、あの戦いは僕に多大な傷を残していったみたいだ。

紫を見ると、あの胡散臭い笑みが戻っていた。  
コイツ……。

「どうかしたのかしら？」

「……………趣味悪いこと、してくれる」  
「なんのことだかわからないわね」

そう言いながら、紫は空間の裂け目からズルリと落ちて地面に着地した。

スキマ妖怪と自分で言っていたので、あれがスキマというものが。中に大量の目が見えたが、今はどうでもいい。

「すごい汗ね。病気？」

「さてね……。心当たりはないけど」

「嘘おっしやい」

ピシヤリと切られ、僕は言葉に詰まる。

「私の能力『境界を操る程度の能力』で、少し記憶を探らせてもら  
ったわ」

「わかってるなら、なぜ構う」

いい加減止めてほしい。本当に苦しいんだ。

僕の質問に、紫はしばらく考えていた。そして、返ってきた答えは。

「面白いから、かしら」

……………は？

人の（妖怪だけど）記憶を漁った拳げ匂、トラウマを見つけ出して  
更にはその傷をえぐり出すような真似をして。

その理由が、面白いから、だと？

汗が引き、代わりに妖力が噴き出した。

「……………!？」

ふざけるのも大概にしろ。

僕にだって、我慢の限界というモノがある。悪いが、今ので完全に振り切れてしまった。

紫に向かって手を伸ばし、ぐっと手を握った。

「っ、なにを」

「堕ちろ」

言葉と共に思い切り右に引っ張ってやる。

「……………!？」

瞬間、紫はガクンと膝をついた。やがてガタガタと震え始める。感情を恐怖一色に染め上げたのだから当然だ。

「あ……………つあう……………!」

呼吸が不規則に乱れ、自らの胸に手を当てる紫。人間ならとうにシヨック死しているだろうに、タフだな。

しかし、本当の地獄はこれからだ。

「うっ!」

近付いて首をわしづかみ、顔を上げさせる。いい感じに恐怖に侵された顔だ。

「……………っ!?!」

彼女の額に、僕の額を合わせる。

数秒して、僕は額を離した。

紫は僕が何をしたのかわからないのか、少しだけポカンとした顔をして。

「っ!?!?あ、いやあああああああ!?!?!?!」

耳を塞ぎたくなるような悲鳴が、辺りに響き渡った。

「どうだ?何千人もの恐怖を、絶望を、悲鳴を、断末魔を、その身で一度に感じるのは」

僕的能力は、相手の感情を取り込むことで発動準備が整う。それは別に意識しなければ読み取れない訳ではなく、強い感情ならこちらの意思とは関係なく入り込んでくる。

そして、僕はそれを忘れることが出来ない。恐らく永遠に、背負い続ける。

僕は先程、あの戦争で殺した人間の感情を、一息に紫に流し込んだ。

到底耐え切れるものではあるまい。

「う、あああつ！」

と、思った瞬間、僕の地面にあのスキマが開いていた。

まだ能力を使う余裕があつたか、底知れない。

あれなら僕の流し込んだ感情も境界とやらを操ってなんとかしてしまうだろう。

そんなことを考えながら、僕はスキマへと落ちていった。

「やり過ぎた……」

思い返して、非常に自己嫌悪を起こしてしまった。

いくら頭に血が上っていたとはいえ、あれを流し込むのはやり過ぎた。

「次会ったら、謝ろう……」

その時は有無をいわず殺し合いに発展しそうだけど。

とにかく、この自己嫌悪が収まるまで歩き回ることにした。

22：「鮮烈な初対面」（後書き）

はい、紫が好きな方々、ごめんなさい。

いやでも、あ、痛い止めて石痛ッ、刃物は危なっわあああああ！



23 : 「再会して。」 (前書き)

シリアス。

### 23：「再会して。」

自己嫌悪から八割方脱出した僕は、この都の大きさに驚いていた。今まで見てきたどの人里よりも大きい。

「はあ……。時の流れって凄いなあ」

他人事のように眩き、僕は聞き耳を立てながら歩き続ける。

なんだかんだで人の姿で歩くのはかなり久しい。たまに、悪戯心が走り人里に猫又の姿のまま現れたりもしたが、今のように何の気もなく人に混じり歩くことはなかなかないのだ。

ちなみに僕は人間の恐怖で力を保っている。いや、僕に限らず妖怪は皆そうなのかもしれないが。

かくいう僕も、なにもしなければ消滅しかねないので、時たま人間を驚かしたりする。

桃鬼や志妖によれば、人間を食べれば手っ取り早く妖力も回復するし、力も増すらしい。僕の妖力が長く生きている割に少ないのは、人間を食べていないからだと思われる。

「いや、けど……」

目の前にいる人間を見ても、僕は別に食べようとは思わない。てか思えない。

妖怪にとってみれば、人間でいう豚や牛、それらと同じように人間も『食べ物』に入るみたいだが。

ブンブンと頭を振り、考えるのを止める。

僕は人間を食べない。食べたくない。自己満足かもしれないが、そ

れだけは嫌だ。

「……………果物食べたいな」

半ば無理矢理に果物を頭に思い浮かべ、その味に思いを馳せる。病室で食べた林檎の味が懐かしい。

……………林檎って、どんな味だっけか。

ピタリと立ち止まってしまう僕。たかが林檎と思うなかれ、気になるものは気になるのだ。  
と、そこで。

僕の耳に、聞き捨てならない会話が聞こえていた。

「……………今夜なんでしょう？」

「ええ……………かぐや姫が、今夜……………」

かぐや姫、だと？

林檎のイメージが一瞬で吹っ飛び、僕はその会話に利き耳を立てた。が、話していたと思われる女性二人が建物の中に入っていった。続きを聞くことは叶わなくなる。

だがしかし、今の会話は僕の興味に火をつけるには充分過ぎた。

「かぐや姫……………ねえ」

詳しい内容は覚えていないが、昔話に出てきたことは覚えている。  
実在していたのか？

しかも今夜どうのこうの、ということとは、月の迎えが今夜ここに訪れる、ということの間違いないだろう。

「竹取の翁……だっけ。ふうん……」

なんだかワクワクしてきた。

まずは翁の家を探そうか。竹取、というのだから、こんな都の中心部には家はあるまい。

「なら、竹林の近く、かな？よし」

キョロキョロと辺りを見回し、誰も見ていないことを確認。僕は家と家の隙間に入り、変化を解く。

この姿になれば、人間に気付かれない速さで移動出来る。さながら鎌鼬のように、だ。

僕は、首の骨を二、三度鳴らし、土煙を上げて移動を開始した。

「おお………？」

夕刻時。

森に紛れて隠行をしながら、僕は目の前の光景を眺める。

本当は昼過ぎに翁の家自体は見付けていたのだが、考えてみれば月の迎えが来るのは夜、それも多分深夜。

それに気付いた僕は、木の上で一眠りしていたのだが……。

「凄いな……これ全部かぐや姫の護衛か？」

翁の家の回りには、総勢五百人は超えようかという兵隊の方々。

確か、この時代の偉い人がかぐや姫を護ろうとして遣したんだっけ。

「ふうん……………」

まあ、とにかく夜にならなければ動きはない。

僕はもう一眠りすることにした。

で、夜。

ここで初めて、僕はかぐや姫をこの目で見る事が出来た。

なるほどかなりの美人さん。求婚が絶えないのもわかる気がする。

兵隊の何人、いや何十人かはチラチラとせわしなくかぐや姫を見てはそわそわしていた。あんたらそんなんで護衛できんのか。同じ男としてわからなくはないが。

僕は自分の目を手で少し隠しながら（暗闇だと光って目立つから）

事態を静観する。

「!?!」

気がつけば、突然まばゆい光が辺りを包み込んでいた。目を隠していたぶん、反応が早く出来た僕はすぐに目を開いた。と、あれは……………。

「っ……………!?!」

おそらくは、月からの迎え。

それはわかる。わかるの、だが。

僕は、どこかであの雰囲気を知っている。その証拠に、心臓がうるさいほど内側から胸を叩いていた。息苦しい。辛い。

「あいつらは……………」

そうだ。見た目は違えど、僕はあいつらを知っている。

。そう、あいつらは、あの戦争で、妖怪達を破滅に追いやった。

瞬間、プチンと何かがキレていた。

かぐや姫の腕を引いていた『人間』を、一瞬で引き裂く。

「なっ……………!?!」

かぐや姫だけではなく、人間も、『人間』も皆驚いていた。瞬間、僕が居た場所に三本のレーザーが通り過ぎる。

その一瞬で、僕はレーザーガンを構えていた三人の『人間』の腕を切り落とす。

「こ、コイツまさか！あの時の!？」

一人の『人間』が僕を指差して言った。今更気が付いたのか。けれど、もう遅い。

だって、僕の世界はもう、

灰色に、染まってしまったのだから。

目に入るのは、赤。赤。赤。

気が付けば灰色の世界は、色を取り戻していた。

「く………」

グラリと揺らぐ足元に、表情を歪めながらもなんとか踏み堪える。

ふと周りを見渡せば、またしてもいつか見たような真っ赤な大地。こんなところまで再現しなくてもいい。やったのは僕なだけ。

しかし、一応あんな状態でも僕に一抹の理性は残っていたらしく、人間には手をかけていなかった。ケシタのは『人間』だけだ。

兵士は皆、倒れてはいたが気絶しているだけだった。果たしてこの凄惨な状況に堪えられなくなったか、僕が気絶させたのかはわからない。

「う……う……」

一度は踏み堪えたものの、強烈な負の感情の残滓に堪え切れずに膝をつく。ビチャリと音がしていた。

また、殺した。

僕の頭の中を巡る言葉。

血濡れの両手を見つめるも、僕を支配するのは、虚無と、ほんの少しの、後悔。

「あなた……」

ビチャビチャと音を立てて近寄って来る誰か。

僕はそれに対して、首だけ曲げてそちらを見た。そして、驚いた。

「永琳……?」

「ええ、そうよ」

無表情で答える永琳の後ろには、かぐや姫の姿。

それを見て、僕の空になっていた心に、激流となって感情が押し寄せた。



罪悪感、自己嫌悪、自己卑下。

泣き出したくなるような感情が、僕を支配する。

瞬間、僕はそこから逃げ出していた。

とにかく今は永琳のそばにいたくなかった。

あんな姿を見られたくなかった。

責められたくなかった。

見捨てられたくなかった。

僕はこんなに卑屈な性格をしていたらどうか？

ああ、けれど。

今はとにかくここから離れたかった。

「待ちなさい」

だがしかし、永琳に着物の襟を掴まれ、逃げ出すことが出来なかった。

そして、今度は無性に情けなくなっていた。

これだけやらかしておいて逃げ出すなんて。

やっぱり、僕はどうしようもなく最低。

「しっかりなさい」

パチン。

「あ……え？」

頬にジンジンとした感覚。

それが痛みだと理解する前に、永琳は僕の顔をその両手で包んだ。

「あなたは、そんなに弱い妖怪だったかしら？少なくとも、私の知  
っているミコトという妖怪は、もっと堂々としていたはずだけれど」  
「……………」

「なにか勘違いしているようだけれど。私はあなたを責めたりする  
つもりはないわ」

そこまで言って、永琳は僕の顔から、血塗られた手へとその手を移  
す。

「もう一度言うわ。しっかりなさい。あなたは、そこまで弱い妖怪  
じゃない」

ギュツと包まれた手から、永琳の温もりが伝わってくる。

そこで僕は、不覚にも涙を流していた。

それを見た永琳はクスリと笑い、おもむろに懐から取り出した試験  
管らしきものを、赤い大地に投げ付ける。

すると、その試験管を中心に、あの鮮やか過ぎる程の赤が薄くなっ  
ていき、やがて消えた。むせ返りなくなる匂いも、肉片までも、消  
えていた。溶かした、のか？

「面倒だから細かい説明はしないけれど……。あなたがしたことは、  
本当は私がしようとしていたことなの。だから、あなたが気に病む  
ことはないわ。妖怪なら妖怪らしく、過ぎたことを気にするのは止  
めなさい」

永琳はそう言うと、後ろでじっとしていたかぐや姫に近付いていく。あれだけの惨状だった場所が、ものの数十秒で何もなかったかのようになり平穩へと戻っていた。

かぐや姫と永琳は、二言三言会話を交わすと歩きだして竹林へと進み出す。

永琳がふとこちらを振り向いていた。

「悪いと思っているのなら、後始末をお願いするわ。やり方は任せるから」

「あ、蓬萊の薬……」

「置いていきましょう。あれはもう必要ありませんから……」

そんな会話を交わしながら、永琳も竹林の闇へと消えていく。

「……………」

ジンジンする頬をさすり、涙を拭って立ち上がる。妙にスッキリした気分だ。

「今すぐに整理はつかないけど……今は、やるべきことをやってしまおうか」

おもむろに倒れている兵士に近づき、結界幻術を使って夢を見せる。『奮闘虚しくかぐや姫は月へと連れ去られ、かわりにかぐや姫から不死の薬を受けとった』という内容の夢を。

それが終わると、僕はすぐにその場から跳び去った。

落ち着いて考えられる。  
そんな場所に、行きたかった。

23：「再会して。」（後書き）

今回、シリアス風味大增量。

私個人としてはこういうほうが得意なのですが。

しかし私は気にしない！

勿論後悔もしていない！

しかし常に反省はしていたりする。

24：「無意識なる否定」

カサカサと木の葉が揺れる音。

「……………」

僕は大きな山の麓、森というよりは樹海の木の枝に身体を預けている。

もう、かなりの時間をこうして過ごしている。

ここに訪れたのは東の空が白み始めた頃。今はもう太陽が申し訳程度に少し顔を出している程度である。少なくとも半日はここでじっとしていたことになる。

「ふう」

割と独り言が多い僕ではあるが、今は口を開いても溜め息しか出てこない。

かといって何かを深く考えているわけでもない。考えていないわけではないのだが、考えることが出来ないのだ。果たして何から考えればいいのかわからず、結局時間ばかりが過ぎていった結果が、今だ。

もう何に悩んでいるのかすらよくわからなくなってきた。

人間を殺したこと？

永琳のこと？

トラウマのこと？

自分のこと？

脈絡がない考えばかりが頭を巡る。

果たして僕は何に悩み、何に苦しみ、何が許せないのか。

『あなたが気に病む必要はないわ。妖怪なら妖怪らしく、過ぎたことを気にするのはお止めなさい』

永琳の言葉が、ふと頭を過ぎった。

「妖怪なら妖怪らしく……か」

何気なく手を見る。鋭い爪がそこにはあった。

こめかみ辺りを触ってみる。そこに耳は無く、その代わりに猫の耳が頭にあった。

尻尾を触り、手を離して一振り。

「……僕は、妖怪」

そう。僕は妖怪、猫又。それは理解している。

だが、果たして納得はしていただろうか？

心のどこかで、まだ人間だという気持ちが残ってはいないだろうか？

「そうか……そうだ、な」

そろそろ、一区切りする必要があるのかもれない。いや、しなければならぬのだらう。

人間の感覚で物事を考えているから、こうした矛盾が生まれるのだ。いい加減に、認めなくては。

僕は妖怪。人間の恐怖から生まれた存在。

「……………ん」

クルリと身体を転がし、枝から自由落下をする。スタンと四つん這いで着地をして、二本足で立ち上がる。

不思議と身体が軽い。直接悩みが無くなったわけではないのに、自らを妖怪だと認めただけで楽になった。

それもそうだ。自分からも認められない身体なんて、自由に動くわけがない。やはりどこかで、僕は自分にリミッターをかけていたのかもしれない。

過ぎたことは気にしない、とまではいけないけれど、クヨクヨと悩むのは止めましょう。悩んだって過去は変えられないのだ。どうせ悩むのなら、これからについて悩もうじゃないか。

過去より未来。全くもってその通りだ。

「……………過ぎたことに悩んだって答が出ないのは当たり前じゃないか。なんで気付かなかったんだ」

思い切り身体を伸ばし、ついでに妖力も解放。今はなんとなくいろいろと解放したい気分だ。

「……………おお？」

で、気付いた。

妖力の絶対量がかなり増えているではないか。

「まさか、こっちにまでリミッターがかかっていたとか……………そんな



感じ？」

これならもしかして桃鬼に肉弾戦で勝て……いや無理だ。夢を見るのは止めておこう。しかし志妖の妖力には追い付いただろう。ちょっと嬉しい。

妖力を抑え、さてこれからどうしようかと考え始めた時に、トクンと胸が鼓動を打った。トラウマの時とは違う、とても優しい鼓動。久しく感じていなかった。

これは、『彼女』の鼓動だ。

「そうか……。僕は、君まで否定して認めていなかったんだね」

ゴメン、と胸に手を当てて『彼女』に言う。すると、もう一度だけ鼓動を打って、それきり何も感じなくなった。

なんとなく胸が暖かくなった僕は、そこで初めて山の方向に大量の命を感じ取った。

空を見上げてみれば深く染まった黒の色。瞬くように輝く星の側には、満月から少し欠けた月の姿があった。

「なんだ……？あ、そうか。ここ富士山だ」

ザクザクと歩きながら能力を使って命を感じ取り続ける。

この大量の命は人間だろう。かぐや姫が残していった不死の薬を埋めに来たのか。

それならまだ理解出来るのだが、一つだけ引つ掛かる点が。

「一つだけポツンとある命はなんだ……？」

おそらく隊列を組んで山を登っている兵隊達の後ろ、一つだけ孤立している命があった。  
単純に遅れているだけか、それとも……。

「しかも、なんだろ。この命だけ……何か、違う」

考えていても始まらない。とにかく、行ってみようか。

「ん！？なんだ、命が……！？」

山の中腹辺りに差し掛かったところで異変が起きた。  
山頂辺りで固まっていた命が、一つ、また一つと消えていく。  
やけに力強い命が、他の命を刈り取っていく。

「……！」

「これは……!?!」

妖力を使って山を駆け上がり、一気にその場所まで来た僕を出迎えたのは、

「うわああああ!!」

「ひゃあああ!!」

「くそっ!この……化け物め!」

小さな戦争、だった。

兵隊の方は約五十人弱。しかしすでに何人かはやられてしまっている。

僕なんかには目もくれずに戦っている辺り、かなりの緊急事態と見て取れた。

一体何が起きているのかと、兵隊達の視線を追っていく。

「!?!」

瞬間、僕は息を飲んだ。

そこにいたのは、人間の少女。着物を着込んだ、可愛い見目の女の子。

髪が白く、目が朱く染まっていることを除けば、の話だけねど。

しかし、本当に驚くのはこれからだった。

一人の兵隊が放った矢が、彼女の左胸を貫く。  
終わった、と僕は思った。

が。

「あああああああ！！」

あろうことか、彼女は自らの心臓を貫通した矢を強引に抜き取ったのだ。

グチツと嫌な音が耳に届いて、思わず顔をしかめてしまう。

その瞬間に、また一人の兵隊の命が消えていた。

彼女の手に持たれた小刀は、今日だけで錆びるのではないかと思う程に赤く染まりきっていた。

さて、僕はどうしたらいいだろうか？

なんてのんびり考えていたら、兵隊が全滅してしまうな。

「ふっ！」

僕は妖力を解放、ここら一带に結界幻術を発動させる。

一瞬で人間達の動きが止まる。ちなみに、彼等は今一面の花畑を見てもらっている。感情の鎮静化が目的だ。

その一瞬で少女の背後に周り、

「失礼」

首筋に一撃。

そのついでに一瞬感情を取り込んで見たが、どうやら何かしらの原

因で暴走状態にあった模様。

ガクリと意識を失った彼女を担ぎ、幻術を解除と同時に僕はその場から跳んだ。

ものの数秒で山を下り切り、樹海の中へと突撃。

さて、これからどうしようか……。早速、悩まなくちゃならないみたいだ。

24：「無意識なる否定」（後書き）

文章がグダグダしてたような気が……。

ここで感謝の意を。

PV100000、ユニーク10000突破！本当にありがとうございます！  
ございます！

これからも頑張ってますので、どうかよろしくお願いいたします！

感想、質問、ポイント、随時受け付けておりますので、暇な時にもどうぞ。作者が涙目になりながら喜びます。（案外真実）

25 : 「仇」 (前書き)

THE・捏造。

25：〔仇〕

「つとと、ここらでいいかな」

少し開けた森の中、地面を削りながら止まる。それでも三十メートルほど止まらなかった。猫は急には止まれ……いや、止めておこう。

「起きてるんでしょう?」

「……ん」

担いでいた少女に話し掛けると、彼女は小さく頷いた。感情に波は見られない。どうやら、気絶した拍子に暴走も止まったらしい。

地面に降ろし、彼女の手にある小刀に手をかける。抵抗されなかったのでそのまま取り、彼女の手を僕の着物で拭っておいた。

「あ……う……」

僕を見て、少しだけ後ずさる少女。怖がってるのか?というか、それ以上後ろに行ったら……。

「あっ!」

「つと……怖がらなくていいよ。別に君をどうこうする気は無いから。でも……そうだな、出来れば、何があったのかを教えて欲しい」

地面に出ている木の根に踵をぶつけ、転びそうになった彼女を抱き留めながら、なるべく優しく話し掛ける。ついでにちょっと感情を操って恐怖を消しておく。

で、キョトンとした彼女が僕を見て口を開いた。



「……………猫さん？」

猫ですがなにか？

「ふむ……………」

尻尾を一振りして「あうっ」「あ、ゴメン。  
考える。」

彼女 藤原妹紅の話は、なんだかいろいろと複雑だった。でもまあ、簡単に言えば仇討ちと嫌がらせである。

彼女の父親はどうやらかぐや姫にぞっこんだったらしく、一度は求婚を申し込んだ。が、敢え無く失敗。

しかしそれでも恋心は燃え尽きることは無く、今回かぐや姫が月に帰ると知り、かぐや姫を守りに行く、と翁の家に行つたきり今度は帰ってこない。

心配になり父の安否を知ろうと、家の人間に尋ねた妹紅に返ってき

た言葉が、父の最期を表す言葉だった。

妹紅にしてみれば、かぐや姫がいなければ父は死ななかつたと思うのも当然。しかも、当のかぐや姫は月に帰り、復讐の手すら届かない。

（本当は月には帰らずにどこかに逃げているのだから）  
ならばせめて、と手を出したのが、かぐや姫の残した不死の薬だった。

「……………」

ちらりと妹紅を見る。

妹紅は僕の尻尾を触って遊んでいた。

髪は白く色が抜け、その瞳は朱く染まっている。そして、心臓を貫かれても死ぬことのない、不死の身体。

「……………どうかしました？」

「いや」

前を向き、更に考える。

妹紅の父親があそこにいたということは……………。

頭に過ぎるのは、最悪のシチュエーション。しかもあの時の自分はほぼ暴走状態、記憶なんざすっぽりと抜け落ちてしまっている。

世界に色が戻ったときに月人以外には手を出していないと勝手に決め付けてはいたが、実際はわからない。

何人かはこの手にかけているかもしれない。その中に、妹紅の父親が含まれていないとは言い切れない。

もしかしたら、妹紅の仇は、かぐや姫ではなく……………。

「参ったな……」

言うべきか、言わないべきか。  
ここは。

「妹紅、これからどうするつもり？」

「……はあ、京には戻れないですよ、ね……」

「そっか。なら僕と来ない？」

「へ？」

目を丸くして驚く妹紅。

笑うなら笑え。これが僕の出した答だ。

「次、いつまた暴走するかわからないだろ？僕が力の使い方を教えるよ。少なくとも、そこらの妖怪に負けにくいぐらいになるまではね」  
「はあ……。妖怪、ですか」

尻尾を触る手を止めて、妹紅は悩んでいた。しかし、すぐに僕の前  
にきて、

「……行きます」

「ん。なら、行こうか」

「え？早速ですか？」

妹紅の横を通り過ぎて、ザクザクと音を立てて進んでいく。  
僕の足音の他に、ひとつ小さな足音が追加された。

今はまだ言えない。

けれど、もっと妹紅が成長して、しっかりと自分の考えが出来るようになったら。

その時は、僕の口からしっかりと告げよう。

たとえその結果、妹紅と敵対することになっても。

ああ……… 凄く、複雑。

25：「仇」（後書き）

やってしまったとは思つ。

後悔はするかどうかわからない。

26：「罪と責任」

「はあっ！」

「ん」

「わ、ああっ!?!」

繰り出される連撃。その中の一つを選んでつかみ取り、勢いそのまま後ろへ投げ捨てる。すぐ近くにあった木に背中をぶつけ、妹紅はその痛みですこしだけ顔をしかめた。

「痛がる暇があつたらすぐにその場から離れるか迎撃体勢をとる。でないよ、死ぬよ」

その瞬間に爪を妹紅の首に押し当て、固まった妹紅に言う。

「参りました……」

「ん、今日はここまで」

全く妖力を込めていない爪を引き、妹紅に手を差し出す。妹紅は今日も悔しそうな顔をしながらも、素直に僕の手を取って立ち上がった。

妹紅と行動し始めてから早三十年。妹紅もだいぶ考え方が大人になつてきたというか、人外に近付いてきたというか……まあ、ともかく成長した。

「なら、次は弾幕で」

「……ええー」

「どうしてそこで嫌そうなんですか」

「だって、僕飛ぶの苦手だしさあ」

「何を言ってるんです、弾幕だって飛び方だって、ミコトさんが教えてくれたんじゃないですか」

「それはまあ」

腕を組んで言ってくる妹紅に、僕は頭を掻きながら目をそらす。

この三十年で、なんと妹紅は妖力の使い方を心得ていた。教えたのは僕なんだけれど。

弾幕、というのは、単純に言えば妖力の塊を弾に見立てて縦横無尽に張り巡らす戦法。これ自体は前々から考えていて、暇潰しに弾を作って木に当てて遊んでいたら、妹紅がえらく興味を持ったのでそれを機に実用化。ちなみに僕の弾の形は爪のような円柱状で、自分で言うのもなんだがかなり早いスピードで飛んでいく。だが、僕自身密度の濃い弾幕を張ることが出来なく、弾同士の間かなりの隙間が出来てしまうのでプラマイゼロな感じは否めない。

空の飛び方は、気まぐれで妹紅に空を飛ばしてみたらなんと成功。

負けじと僕も試行錯誤の上で空を飛ぶ術を考え出した。

妹紅の方は、どうやら感覚的な問題で割と簡単に飛べるらしい。

それに対し、僕は『空を飛ぶ』というよりは『空を跳ぶ』と言った方が正しいと思う。それというのも、僕は妖力で強化した脚力で空に跳び、自らの弾幕の一つに跳び移りながら空中を移動するからだ。一つの弾につき三秒と持たずに霧散するため、次々と跳び移らないとあっという間に墜落である。ただでさえ少なめの弾だというのに、効率が悪いにも程がある。

単純に移動するだけなら走った方が速いし、あの方法だと常に妖力も消費するので無駄に疲れる。ハイリスクローリターンである。

しかし、やる気になってきている妹紅を無下にすることも出来ないので。

「一回だけね」

「はい。負けませんよ」

結局、こうなるんだよね。

で、更に時は流れ。

僕は今、独りで湖のほとりでじっとしていた。

考えるのは、もちろん妹紅のこと。

あれからも毎日毎日手合わせを続け、最初の目的通りに妹紅はそこらの妖怪相手なら片手で捻れるぐらいに強くなっていた。

弾幕勝負なら僕とでも良い勝負になる。といっても、僕は性格上本気になりにくいようで、本気で戦ったらどうなるかはわからないけれど。

手元にある石を拾い、湖に放る。

ポチャンと清らかな音が響き、僕の心を微かに揺らした。

「……………」

目をつぶり、身体のを抜く。



とうとう、この話をすべき時がきた。

妹紅はどんな反応をするのだろうか。

大体予想は出来ている。優しい娘だ、無理にでも僕を許そうとするかもしれない。

けれど、僕は知っている。

妹紅の心の底にある、ある意味美しく、それ故に消えることの無い強烈な二つの感情を。

父を愛する愛情と。父を奪った相手への、憎悪。

その小さな身体からは考えられない程に大きな感情が、常に妹紅を苦しめているのを、僕はずっと見てきたのだから。

「……何の用？スキマの妖怪さん。悪いけど、後にしてくれないかな」

「あら、気付いてたの」

僕のすぐ横に、スキマ妖怪こと八雲紫が現れる。リベンジに来たのかと思っただが、どうやらそうではない様子。

「特に理由は無いわ。ただ、何をしているのかなあって」

「別に何もしてないよ。見ればわかるでしょう？」

「あら、私には何か思い詰めているように見えるのだけれど。どう？」

「残念、ハズレ」

「嘘ね」

「嘘だよ」

傘を片手に優雅に地面に降り立った紫を視界の端で捉えながら、僕はもう一度石を湖に投げ捨てる。が、石は湖を奇妙に跳びはね、また僕の手に戻ってきた。隣では口元を隠した紫が、しかし笑い声は隠さずにクスクス笑っている。うっとうしい。

あ、そうだ。

「八雲さん」

「紫でいいわ」

「ん。これから、暇？」

「……？」

「あ、ミコトさん!!」

妹紅が僕を見つけ、少しだけ表情を緩ませて駆け寄ってきた。が、しかし僕は数メートル手前で妹紅を制し、足を止めさせる。

「ミコトさん？」

「なあ、妹紅」

いつもより少し低めの声色に、妹紅は訝しげに僕を見ていた。

「妹紅は、僕をどう思っている？」

「……え？」

「何も聞かずに答えてくれ。僕をどう思ってる」

「えっ……と、そんなこと、急に言われても……」

少しだけ頬を染め、妹紅は下を向いてしまふ。それを見て、僕の胸はさらに苦しくなった。

「……昔話をしよう」

「？」

地面に座り、僕は目をつぶった。

妹紅の姿を見ていたら、喋れない気がしたから。

「あるところに、とても美しい姫がいた。そして、その姿に見惚れた一人の男がいた。男には、それは可愛らしい娘が、いた」

言葉がうまく繋がらないのは気にしない。ようは、最後まで言い切ればいいのだから。

「ある日姫は、月に帰らなければいけなくなった。それを聞いた男は、なんとしてでも姫を守ろうと兵隊と共に姫の元へと向かう」

妹紅の感情が僕に入り込んでくる。一度歯を食いしばり、その感情を拒絶した。

「時を同じくして、一匹の妖怪が姫の元へと向かっていた。理由は簡単、ただ単に姫の姿を見てみたかった。それだけだった。いや、それだけのはずだった」

あの時の感情が、トラウマが蘇る。  
堪える、堪える、堪える！話し続けるんだ！

「時は流れ、とうとう姫に月の迎えが来た。男は姫を守ろうとするも、不思議な力で一步も動くことが出来ない。男が自分の無力さに憤りを感じて、それでもなお姫を守ろうと抵抗しようとした。その時だった」

脳裏に蘇る赤。

駄目だ考えるな、今は口を動かすことを考える。

「あの妖怪が、姫を連れ去ろうとする月の迎えの一人を、無惨にも縦に引き裂いていた。その妖怪は正気の沙汰ではなく、その場にした月の迎え全員を、赤色に染まる肉塊に変えた」

妹紅は今、どんな表情をしているのだろう。

「正気に戻った妖怪は考える。『兵隊には手を出していないはず』と。何の根拠も無いその考えに、妖怪は浅はかにも納得してしまう。それ故に、兵隊に混じっていた男の姿が無いことに、愚かな妖怪は気付かなかった」

ここで僕は目を開いた。

妹紅の紅い瞳を真っ直ぐに見て、最後の一言を言い放つ。

「妖怪がそのことに気が付いたのは、白い髪と紅い瞳を持つ娘に話を聞いたとき。妖怪……いや、僕は、そのときようやく、自分の犯したかもしれない罪に気が付いた」

その紅い目を見開いている妹紅。

拒絶を止め、妹紅の感情を受け入れて読み取る。

しばらく、妹紅は僕を見つめたまま動かずにいた。なんら、変わった様子は見られない。

しかし、それは見た目だけの話だ。

時間の経過と共に、妹紅の感情は怒りと憎悪で染まっていく。しかしそれをぶつける場所がわからずに、それはどンドンと溜まっていく。このままなら、妹紅の心は簡単に壊れてしまうだろう。

そこで、彼女の出番だ。

「紫」

「はいな」

「なっ、誰だお前っ!?!」

いきなり現れた紫に、妹紅は僕以外の人間や妖怪と接する時のように口調が変わっていた。

紫はそれを気にも止めずに、妹紅の額を優しく撫でる。

「なっ……!?!」

紫の手が離れた瞬間に、妹紅はガクリと膝をついていた。

「言われた通りに境界を弄っておいたわ。じゃあ、後は一人で頑張るって」

「ああ。ありがとう」

スキマに消えていく紫。

次の瞬間、妹紅の殺意が僕の全身を突き刺した。どうやら、成功のようだ。

先程紫には、妹紅の『本能と理性の境界』なるものを弄ってもらい、妹紅が僕に向かってその溜まりに溜まった感情をぶつけられるようにした。

僕的能力では強すぎる感情は操り切れない。そこで、彼女に協力してもらったのだ。

「ミ、コトオ……!？」

「さあ、妹紅。我慢することなんか何も無い。お前の復讐相手がこのにいるんだ、全力で殺しにこい」

そう。全力でなければ意味がない。

あのままじゃ、いずれ爆発してしまうのは目に見えていた。

罪滅ぼしではないけれど、僕は妹紅に壊れて欲しくはないから。

まずは、その溜まった鬱憤を晴らして。

僕をどうするかは、その後に決めればいい。

「……………来なよ。全部、受け止めるから」

例え、死んだって。

26・・・「罪と責任」(後書き)

やはりやらかした感はある。

そろそろ本気で反省しないといけないかもしれない。



## 27：「化け猫が零した雫」

不愉快な臭いが鼻につく。自分の身体が焼け焦げる臭いなどあまり嗅ぐ機会はないが、ここまで不愉快だとは思わなかった。

そんなことを考えながら、僕は地面に頭をこすりつけていた。

「うっ……！」

妹紅の唸り声が耳に留まる。

苦痛に喘ぐ身体を無視し、僕は立ち上がってその姿を視界に入れた。

「……どうした。この程度なのか。お前の父への想いは」

「……やめ、ろ……私は、こんなことしたく……！」

必死に本能に抗おうとしているようだが、言葉とは裏腹に妹紅の周りには燃え盛る火の玉が浮かび上がっていた。

一体どれだけの時間が経ったのか、既に朝日は三度登り、今はその太陽も顔を隠してしまっていた。

流石に、ヤバいかな……。

火傷で使い物にならなくなった右足を軽く上げながら考える。

僕は、今の今まで妹紅の攻撃を受け続けてきた。避けることも、こちらから攻撃することもしなかった。

当然だ、これは戦闘じゃない。妹紅の溜まりに溜まった感情を、僕という『道具』にぶつけさせるのが目的。

つまるところ、僕はサンドバッグの代わりである。サンドバッグは

避けもしなければ攻撃もしないのだから。

「っ！」

一瞬、強い熱風が僕を襲った。思わず顔を逸らすも、すぐに視線を戻す。

妹紅の背後には、巨大な火の玉が存在していた。

「いや、いやっ……！」

頭を振り、ブツブツと呟いている妹紅。

感情から見ても、妖力の具合から見ても、これが最後の一撃だと理解した。

一瞬、妖力を全開にして防御姿勢をとりかけたが、止めた。死んだって受け止めると決めた以上、この身体で受け止めるのが筋だろう。

「避けて、避けてええええ！！！」

叫びと共に、火玉は飛来した。右足を地面に下ろし、力を抜いて目をつぶる。

「いやああああああ！！！！！」

妹紅の叫び声だけが、僕の耳を満たしていた。

「えっ……………」

妹紅が、こちらをキョトンとした表情で見つめていた。  
なんて顔してるんだ。

まあ、僕が妹紅の立場だったら、同じ様な顔をするとは思っけれど。

「全く……こんなことだろうと思った。馬鹿ね、貴方」

「うるさいな、余計なことしてくれて」

「あら、じゃあ何もしない方が良かったかしら？貴方が死んだら彼女、それこそ地獄の様な永遠を過ごすと思うのだけれど」

「……………」

宙ぶらりんの体勢で言う僕に、紫は呆れたように扇を閉じた。妹紅は相変わらずキョトンとして、空中にいる僕の姿を見つめている。紫は僕を地面に降ろすと、そのまま妹紅の額をサラリと撫でた。境界を戻したのだろう。

僕はベタリと座り込み、火傷した足に妖力を込めた。こうすると痛みが和らぎ、心なしか治るのも早くなるからだ。

「ミコトさんっ！！」

「うわっ」

あらかた妖力を込め終わった瞬間、妹紅が抱き着いてきていた。もう、あの見ているだけで辛くなる感情は小さくなっていった。消えた訳ではないが。

黙ってその頭を撫で、長くなった白髪を指で梳く。所々赤い色がこびりついていて、その感触が指の間を通り、僕は目を細くする。

少し、辛い思いをさせすぎたかもしれない。

妹紅の震えを身体で感じる度に、先程の紫の言葉が深く胸を突き刺すのを感じる。

僕の背後では、黒く焼け焦げた大地が煙りを立ち上らせていた。

「さ、妹紅」

「……………はい」

震えが止まった頃を見計らい、妹紅に声をかける。

妹紅は、ゆっくりと身体を離して、僕の前に立った。

「さっき言った通り、僕は妹紅の父親をこの手にかけてしまったか

もしない」

「……けど、それはまだ」

「聞くんだ。確かに、そうじゃないと考えることもできる。僕だつてそう思いたい。……けど、そうは言い切れないのが、現実なんだ」

僕の言葉に、妹紅は顔を下に向けた。

「だから、考えて欲しい。安易に答を出さないで、自分の納得できる答を出してほしいんだ。だから……」

ここで、僕は立ち上がった。つられて顔を上げる妹紅。すでに、涙が顔を濡らしていた。何かを感じとっていたのかも知れない。

僕は妹紅に背中を向けた。だって、これ以上妹紅の涙なんか見ていたら……。

「しばらくの間、さよならだ」

歩きだした先には、普段の胡散臭さが見られない紫の姿。なにもない空間にスキマが開き、僕はその中に足を踏み入れる。

「っ、ミコトさん……」

それが、最後。

おそらくはスキマに駆け出していたであろう妹紅の姿を一瞬だけ想像して。

「……………」

振り返った時には、そこに妹紅の姿は無かった。

ポタリと滴った透明な雫を見ても、何も言わないでいてくれた紫に  
少しだけ感謝した。

27：「化け猫が零した雪」(後書き)

最近、あとがきのネタが無くなってきた。

え？んなもんいらない？

はっはっは、それを言ったらおわりだろう？

280 「マヨヒガにて」

「落ち着いたかしら？」

「……………うん」

僕は少しだけ拗ねた感じで返事をした。

今僕がいるのは、この八雲紫の家　マヨヒガだったか　の中の、紫の膝の上だ。

念のため後半部分をもう一度。

紫の膝の上、だ。

「もう大丈夫だ」

「ダメよ。まだ治りきってないでしょう」

「うにゃ……………」

「フフ、おとなしくしなさいな」

何回目かの脱出を試みるも、わしっと（別に乱暴にされたわけではない）捕まって膝の上へとリターン。

「なんでこんなことに……………」

「いい加減理解しなさい。貴方はその姿の方がなにかと都合がいいの」

「いや、わかってるけども。僕が聞きたいのは、なんで膝の上なのかってこと」

「たまには和みたいの」

「……………さいですか」

ただいま僕は尻尾が二本なのを除けば純粹な猫の姿。そんな僕を膝



の上に乗せ、上機嫌で撫で続ける紫。なんだこの状況。

「それにしても驚いたわ。貴方、急に猫の姿になるんだもの」

「むう……僕も驚いた。しかもあれからかなり経つのに、能力は使えないわ人化は出来ないわで大変」

「私としてはこのままでも文句はないのだけれど」

「やめてくれ。というか、何を企んでるんだ？僕、今にも殺されるんじゃないかと思って尻尾が落ち着かないんだけど」

これ本当。どうも僕は感情が尻尾やら耳やらに出してしまう癖があるようだ。

実際紫は自業自得とはいえ、地獄のような精神攻撃を受けたのだ。今あの時の報復をされたら、抵抗すら出来なく僕は殺される。

しかし、紫はそんな僕にあくまでも普段通りの口調で。

「私は別に貴方を殺そうなんて考えてないわ。私、貴方のこと結構好みなの」

妖艶な笑みで言いやがった。それは友人としてか。そうなのか。

「途方もなく長い時間を生きてきた大妖怪、いや妖獣かしらね。そんな貴方は、時折私には理解出来ない行動を選び取る……。そんな貴方が、気に入ったのよ」

まるでずっと僕を見ていたかのような口ぶりで話す紫。いや、実際に見ていたのかもしれない。その程度、彼女の能力ならたやすいだろう。

落ち着かなかった尻尾がふわりと下りて、僕は紫の手の感触を感じ

ながら目を閉じた。これ以上紫のことを考えても無駄だ。嘘はついていないみたいだし。わからないけど。

「怪我が治れば姿は元に戻るはずよ。多分、貴方の身体が本能的に危険を感じて、一番安全な状態になっただけだと思っから」  
「ほっ」

こちらの心配を読み取ったのか、紫は何気ない感じで言った。  
なるほど、確かに僕の身体はかなりズタボロだった。ほぼ全身に大火傷を食らい、右足　今は右後ろ脚　に関しては消し炭かと勘違いした程だ。

今、僕の身体は安全装置がかけられているのだろう。身体が万全になるまでは、妖力変化能力その他は完全封印って訳だ。

「あとは右足だけだから、少し我慢すれば元に戻るはず。けど治ったら、私の頼みを聞いてもらっわ」

「治ってから聞く。拒否権は保持で」

「善処するわ」

クスクスと胡散臭い笑みをする紫の膝で、僕は眠りについた。

28:「マヨヒガにて」(後書き)

繋ぎ的な意味で更新しておきます。

紫の頼みとは一体？

「さあ、そろそろいいんじゃないやなくて？」

「ん？ああ、じゃあ早速」

あれから数時間経っただろうか、僕は紫の言葉で膝の上から飛び降りた。

まあ逆に言えば、あれからもずっと紫の膝の上で過ごしていた僕。

不思議と居心地は良く、暑くなることもなかった。もう少しそこに居たかったのは秘密。

着地と同時に人化。少し懐かしい二本足の感覚はこちらも心地好く、特に右足はあの火傷が嘘のように治っていた。今更だが、この身体は便利である。

「さて、今まで守ってくれてありがとう」

「礼には及ばないわ」

「そう言ってくれると助かるよ。で？頼みってなに？」

「ええ。貴方には、これを着けて欲しいの」

紫はそう言って、自らの右手首に着けていたリボンを外して僕に差し出した。

「？そんなところにリボン着けてたっけ」

「貴方を助けた時に着けたのよ」

「……………ふーん」

とりあえず受け取る。ほう、紫の妖力がありありと感じられる。

「これつけたらどうなるの？」

「私の式になるわ」

「……………式？」

「そう、式。簡単に言えば……………そうね、使い魔みたいなものね」

「ええ……………」

露骨に嫌な顔をしてやる。だって、紫の使い魔なんかになったらどうなるかわからないし。

「そんな嫌そうな顔しないで。どの道、私は貴方を完全に式にして縛ることなんか出来ないんだから」

「なんで？」

「単純に貴方の力が強すぎるからよ。貴方を完全に式にしようとしたら、それだけで私の力の半分以上は持ってかれるんだから」

溜め息をついてそっぽを向く紫。もしかして悔しい？

「じゃあこのリボンは？」

「それは、簡単な封印と、式の媒体みたいなもの。まあ簡単に言えば、貴方の力を抑えて、その上で擬似的に式の術を組み込む為のものね。あくまでも擬似的なものだから、式になってもあまり大したことはないわ。せいぜい妖力が抑えられるのと、そうね……………私の式、という肩書きがつくぐらいかしら」

「それ以外は？」

「私の呼び出しには逆らえなくなるわ」

どうして一番重要そうな箇所を抜かそうとしたんだ。

「どうせ、一度着けたら僕の意思じゃあ外れないとか言うんでしょ？」

「いいえ？自由に外せるわ。それに、悪いことばかりじゃないわよ」  
「例えば？」

「私の能力を少しだけ使える、とかかしらね。まあまずは着けてみなさい。その方がわかるわよ」

「……外せなかつたら恨むから」

握り締めたリボンを、半ばやけくそで右手首に結ぶ。なんだかんだで紫には世話になったのだ。一つぐらい向こうの頼みは聞いてやらなければ僕の気が済まない。  
あまり圧迫しない程度に結びつける。

「……これ、もう封印とやらが発動してんの？」

「妖力を出してごらんなさい」

特に何も感じなかった僕は紫にそう聞き、言われた通りに妖力を放出、しようとしたのだが。

「うわ……なんだこれ、すごい出しづらいんだけど」

まるで妖力の出入口が狭まったかのような違和感。

半分程解放しようとしたのに、実際は二割程しか妖力が出せなかった。

試しに全開にしたが、予想通り半分が精一杯。なるほどこれが封印か。

「すごい不愉快」

「そつでしようね。けど、それだけ抑えないと式に出来ないの。じやあ最後に聞くわ。貴方、私の式になつてくれないかしら。嫌になつたらいつでも辞めてくれていいわ。どうせリボンを解けば式は剥がれるのだし。……頼めるかしら？」

紫の言葉に、僕は少し考える。  
多少感情を読み取らせてもらったが、嘘はついてないと思われる。  
付き合い自体は短いが、なんとなくプライドの高そうな紫がこつも  
下手に出てきているということは、何かしらの事情があるのだろうか。  
それになにより、彼女には借りがある。

「……………ミコト」

「はい？」

「これから使役する式ぐらい、名前で読んで欲しいし」

「なら」

「早くしないと、気が変わるかもよ？」

「……………ありがとう」

扇で顔を隠しながら、紫は僕の右手首のリボンに手を当てた。その  
扇の先には、どんな表情があるのだろうか。

「うっ……………？」

「これで、貴方……………ミコトは私の式になった。これからよろしくね、  
ミコト」

何かが紫と繋がったような感覚。契約みたいなものか？

というか、これは……………。

「あの、もしかして照れてる？」

「……………どうして？」

「いや、なんでか紫の感情が常に僕に流れてきて……………時折言葉ま  
で……………」

「っ……………」

背中を向けていた紫は、僕の言葉にビクリと身体を震わせたかと思  
うと、真っ赤な顔を隠しもしないで僕に詰め寄ってきた。

「遮断なさい」

「いやでも」

「いいから遮断しなさい」

「えっ、と」

「早く」

「ハイ」

あまりの剣幕に紫の感情を拒絶。

「……聴こえてたのかしら？」

「なんのことでしょうか？」

しっかりと聴こえていたが、面白いのですっとぼけてやった。  
で、紫に背を向けてポソツと呟く。

「……」 『頼めば一緒に寝てくれ』 いやあっ……！

「一緒に寝る？」

「……………じっ……………」



……案外、紫の傍にいるのも楽しいかもしれないと感じた僕だった。

29・・・「マヨヒガにて・と」(後書き)

晴れて)？(紫の式となったミコト。

しかし、しっかりと反抗する術も手に入れたミコトでした。

### 30：「後始末は全力で」

さて、今僕はのんびりとお茶を啜っていたりする。あまりお茶は飲まない方だったが、ここのお茶はなかなか美味しかったりする。

「はふう……」

「年寄りくさいわね」

「いや、実際年寄りだし」

僕の隣でくつろいでいる紫に呆れられた。鶴は千年亀は万年、というがここには万年生きている猫がいる。事實は小説より奇なりだ。

「で、この封印にも大分慣れたんだけど。そろそろなんかないの？」

「そうね……。貴方という優秀な式もいることだし、そろそろいい頃かも知れないわね」

「半分しか妖力出せないけど」

「充分よ。半分といっても、私と遜色ないじゃない」

「うそ」

「本当よ。ミコトはもう少し自信を持つべきね」

はあ、と溜め息をつかれてしまった。悪かったな弱気で。

けれど、長い間本物の化け物二人と一緒に過ごせばこうなるのも仕方ないと思う。片方は最強の鬼神、片方は巨大爆発を退けた爆弾娘である。

考えてみれば、僕はその二人どちらとも戦っているんだよな。うん、よく生き残ったもんだ。

「それはいいとして、何をするのさ。説明して」

「……まあいいわ。自信があるうとなかろうと、貴方の強さに変わりはないし。じゃあ、行くわよ」

「は？いや、だから先に説明を」

「論より証拠、よ」

「微妙に使い方を間違えてなあっ！」

言葉の途中でスキマに落とされた。ああ、お茶を最後まで飲ましてくれてもいいじゃないか。

「っと」

いきなりのスキマにも対応して、落とされても難無く着地。いや、身体能力に感謝。

「で、ここどこ？」

「ここは幻想郷。人間と妖怪が同じ地に住む場所ね」

「同じ地に……。大丈夫か？」

「今のところはね。まあ、私が説明するよりは自分で見た方が早いでしょう。しばらくそこらを歩いてみなさいな」

「え？ちよつと」

声をかけるまえにスキマに引っ込んでしまった紫。相変わらず自分勝手というか、自由奔放というか……。

まあ確かに百聞は一見に如かず。とりあえず歩き回ってみましょう

か。

なんて思ったのもつかの間。

「うわぁ……なにこの覚えがありすぎる妖気」

遠目になんとか目を惹かれる山があったので気まぐれに能力を使用して見たのだが、明らかにそこらの妖怪とは違う妖気が突き刺さってきた。僕の知る限り、こんなふざけた妖気を持ち合わせる妖怪など一人しかいない。

言わずもがな、桃鬼である。

「ここに来てたのか、もしくは最近来たのか……。わからないけど、なんか嫌な予感がする。いってみよ」

ガサリと木の枝に跳び移り、目的地を最終確認。妖力を脚に込め、僕は跳んだ。

全力の半分以下のスピードに泣きたくなったのは本当。

山の麓にたどり着き、けれど止まらずにそのまま山を駆け上がり始める。

「なんだこの山……妖気が」

少しスピードを落とし、能力を使用。やはり、山自体から妖気が感じられる。不思議だが、妖怪である僕にはなかなか心地が良い。人間には毒だろうけど。

そんなことを考え、やがて歩きだしていた僕の目の前に、空から黒い羽が舞い落ちてきた。

「これは……鴉の羽？」

「また知らない妖怪の姿。今日は千客万来ですかね」  
「？」

同時に頭上から聞こえてきた声に、僕は空を見上げた。  
そこには、立派な黒の翼をもった女の子の姿が。

「ここらじゃ見ない妖獣さん。貴方は何の用？」

「なに、知った妖気を追ってきただけさ。立派な翼の女の子」

「あやや、お上手で。しかし、知った妖気と良かったですか。もしかして、よそ者の鬼のこと？」

「多分そう。嫌な予感がしたものでね」

フワリと地面に降り立った女の子。

まだ年若いと見えるな。せいぜい三十といったところか。

「君、その鬼がどこに行ったかわかる？」

「はあ、この上にある鬼のところへ向かいました」

「なんか言ってた？」

「私を一撃でのめした後に『もっと強い奴はいないのかい？』と。いや、強かったです」

確定。絶対桃鬼だ。

あの戦闘狂、面倒なことしてくれる。

「そこまで案内頼めるかな。えーっと……」

「名前ですか？鴉天狗の射命丸 文と申します」

「猫又のミコトだ。じゃあ、案内よろしく」

「はい」

バサリと翼を羽ばたかせ、文は空へと舞い上がっていく。

「あ、あんまり高く飛ばさないで。僕飛ぶの苦手なんだ」

「あやや。これは失礼」

「いや、わがままでゴメン。じゃあ今度こそ」

低空飛行に入ってくれた文の背中を見て、僕も地面を蹴って三本程で隣に並ぶ。

どうやらトップスピードは同じのようでホッとしていた僕に、文は驚いていた。

「ミコトさん、でしたか。速いですねえ」

「いや、本当は……。なんでもない。文こそなかなか」

「この辺りじゃあかなり速い方なんですけど。走りでは並べたのは初めてです」

「そりゃあなあ……」

本当はもっと速い、と言おうとしたが、止めておいた。説明が面倒だから。

数分すると、坂が無くなり少し開けた場所に出た。そこには沢山の鬼の姿があり、さらに奥の方に薄い桃色を発見。

「ありがとう……っっていないし。なんだ、そんなに鬼が怖かったのか」

ここに近づくにつれスピードが下がっていたので、文はおそらくあまりここには近寄りたくはないのだろう。感情も恐怖ばかりだったし。

「あ、ミコトさん」

「久しぶり、志妖。で、あの馬鹿は何してんの？」

「なんでも、この鬼神と戦いたい、と言い出して……」

「……はあ。それ、今日じゃなきゃダメなんだろうか」

「私は、止めても無駄でした」

確かに、志妖に桃鬼は止められないよな。

僕としてはできれば、後日、もしくはもっと後にしてほしいところなのだが。

せめてこの幻想郷を回り切ってからにしてほしい。

「来たばかりでトラブルもやだし……。しょうがない。桃鬼！」  
「？」

四人程の屈強そうな鬼に囲まれていた桃鬼は、僕の声にあっさりと振り返った。いや、さすがに不用心だろ。



そんな考えを尻目に、桃鬼は堂々と広場の中央を横切ってきた。

「ミコトじゃないか。どうしたんだい？」

「無理を承知でお願い。鬼神との戦い、後にしてくれない？」

「いいよ」

「いいの!？」

あまりのあっさりさに声を上げてしまった。僕の隣では志妖も目を見開いて驚いている。

「いやね、強い鬼がいると聞いてきたはいいんだが、どうやら今は留守らしくてね」

「あ、そういうこと」

全くつまらない、と心底つまらなそうに呟く桃鬼。

「帰ろうか、志妖」

「あ、ハイ」

僕の隣を通り過ぎ、桃鬼は志妖の肩を叩いてから山を降りていく。志妖は慌てて僕に手を振って、桃鬼の背中を追っていった。

「少し拍子抜けしたけど……。まあいいか」

とりあえず僕も、と鬼達に背中を向け、歩きだす。

「待てよ」

が、ガツシリと肩を掴まれて引き留められていた。

参ったな、最初から跳んでいけばよかった。

「なんですか？」

「なんですかじゃないだろう。いきなり喧嘩を売ってきて、なにもしないで帰るのはないんじゃないか？」

一本角の鬼が、口を歪ませてそう言った。

それに対して、僕は。

「しょうがないですね……。じゃあ、僕が相手になります。面倒な  
んで、全員でかかってきて結構ですよ」

その様子を、文は空からじっと眺めていた。

「あやや……大変です……！」

口に手を当て、どうしようかと空中をフラフラさ迷い始める。だが、視線はしっかりとミコトを捕らえて離さない。

文から見て、ミコトからは別にそこまで強さは感じなかった。だから、てつきりあの脚を生かして逃げるものだとばかり思っていたのだが。

「しょうがないですね……。じゃあ、僕が相手になります。面倒な  
んで、全員でかかってきて結構ですよ」

その瞬間、文は自分の耳を本気で疑った。

だが、次の瞬間には自分の目まで疑うことになった。  
なぜなら、

「あれ、消えた……」

ミコトのいた場所に土煙が上がったかと思うと、

「……………え？」

十秒後には、その場にいた鬼全員が倒れていたのだから、それも仕  
方ないことかもしれない。

しばらく文は自分の目を擦りつづけ、それでも目の前の光景が変わ  
らないことに思わず空から落ちそうになった。

「ぶっっ」

右手首にリボンを結び直し、大きく息をつく。  
やはり、封印があるのとないのとは大違いだ。一応気絶で収めて  
おいたから、大事にはなるまい。  
そう考えながら山を降りていくと、いきなり目の前に文が現れた。  
ずいぶんと急いでいたのか、肩で息をしている。  
え、やっぱり飛んでも疲れるの？

「あ、貴方、何物ですか!？」

「ん？」

「鬼を、しかもあんな、大勢を、一瞬でなんて、ありえない……」

ゲホゲホと咳込みながら言う文の背中をさすりながら、僕は言った。

「なに、単なる長生きなだけの妖獣さ」

そういえば、いきなり外しちゃったけど大丈夫かな……？

30：「後始末は全力で」（後書き）

眠い……

### 31：「狐と猫」

射命丸と別れ、僕は山から無事に出ることが出来た。  
次はどこに行こうか、と手頃な木に跳び移って、太めの枝に腰掛け  
る。

「で、早速外したわけだけど」

右手首に結ばれたりボンをまじまじと見つめる。

封印は生きているらしく、僕の妖力は今も半減中である。

問題なのは、外してしまったことで式でなくなってしまったかもし  
れないこと。現在近くに紫の気配は感じられないので、本人に聞く  
のは無理。と、なる。

「えい」

能力を解放。拒絶していた紫の感情が意図せず感じられれば、僕は  
まだ式ということだ。  
目をつぶり、少し待つ。

「……うわぁ、なんか幸せそう」

結論。

式は剥がれていなかった。

どういう仕組みかは知らないが、このリボンをつけている間は式で  
いられるようだ。なんだか凄く幸せそうな感情が流れ込んできて、  
こちらも少しだけ表情が緩んでしまう。

このままではニヤニヤしている不審者にも見られかねないので、と  
りあえず感情を拒絶しておいた。

目を閉じて、首の骨を二、三度鳴らす。

「ん……」

その瞬間に、違和感を感じた。

目を開く前に後ろに跳びのく。目を開くのと、岩が地面に減り込むのは同時だった。

弾けとんでくる小さな石から身を守りながら、周りを見る。

おかしい。何故、僕はまだ山の中にいる？

「ふんっ！」

即座に感情を操作、自らの心を平常心に引っ張り込む。

直撃する寸前だった頭上の岩は消え、風景が掻き消えていく。ただの森に戻ったそこには、

「誰だ、お前」

「私の幻術から逃れるとは、なかなかやるみたいだな」

輝かしいまでの九本の尾を持つ、一人の女性が立っていた。

しかし、今幻術と言ったか。どうやら僕は化かされたみたいだな。

すぐに気付いたから良かったものの、あのまま気付かなかつたら延々と降り注ぐ岩と戦い続けるところだった。

「九本の尾……。狐か？」

「そういうお前は猫だろう？ なかなか強力な妖気だが、私に抗うには少し弱い」

「……まあ、確かに」

コイツの妖気を感じた瞬間に、僕は無意識に妖力を出していた。リボンは解いていないために、本来の半分も出ていれればいいところ。ていうか、なんだか封印が強くなってないか、これ。半分どころか二割ぐらいしか出せないんだけど。

だが、それをおいてもコイツの妖力は力強い。九本の尾は伊達じゃあない。

だがまあ、別に僕は危険は感じてなかった。なんでかって？まあ、見てればわかる。

「うん？お前、その右手首……」

「あら、なかなかいい子じゃない。知らせてくれてありがとう、ミコト」

僕に向かって一歩踏み出した狐の背後から響く声。数秒前まで誰もいなかったその場所に、確かに存在するその妖怪。その名も我が主人（一応）、八雲紫である。

パクパクと口を動かしている狐。わかるよその気持ち。

そこからは紫の独壇場、というか狐の足元にスキマが開いて落ちていっただけなんだけれども。

「あいつも式に？」

「ええ、そのつもり。というか貴方、早速外したわね？」

「不可抗力です。てか封印強くなってるとんだけど、どうしてさ」

「貴方が式を解いた時に封印を強くするようにしておいたのよ」

「なぜ」

「気まぐれよ。それ以上は強くないから安心なさい。それに、それぐらい力が抑えられればそれをつけるだけで式になるし」

気まぐれで力八割持つて行かれたらたまったものじゃないぞ、なん



て言ってもどうせ聞きやしないので言わないでおく。  
それに、リボンをつけるだけで式に戻るなら、いつ外しても良い  
わけだし。

「それに貴方、私と繋がっている間は私の能力を使えるのよ？すべ  
てとは言わないけど、スキマぐらいなら開けるはず」

「へっ？」

そういえばそんなことを言っていた気がしないでもない。

「どうやれば？」

「念じればいいのよ。そうね……開け、とでも」

なかなかアバウトな説明が飛んできた。まあ、能力なんてそんな  
ものか。

あ、出来た。

「へえ、便利だな」

「一応言っておくけれど、私と繋がっていない時は当然使えないし、  
私が認めなくても使えない。覚えておいて」

「了解。で、さっきの狐はどうする？」

「なかなか賢い子みたいだし、話をしてみるわ。多分大丈夫でし  
ょう」

扇で含み笑いを隠す紫。

どうせ断られたって無理矢理式にするのだろう。なんだか急にあの  
狐が可哀相になってきた。

「じゃあ、私は行くわ。それ、外すのはいいけど無くさないように

ね

「わかってるよ」

スキマに消えていく紫を見送ってから、僕は改めて歩き出した。

さて、次はどこに行こうかねっと。

31：「狐と猫」(後書き)

狐と猫。

きつねとねこ。

きつねこ。

そんなくだらないことを口走っていた数秒前。

### 32：「再・妖怪の山」

「さ、どこからでも来なさい」  
「……………」

向き合うは二匹の妖獣。片は狐で片は猫。

狐の名は八雲藍。この間晴れて式となり、八雲の姓を名乗り始めた。果たして名乗り始めたのか名乗らられてるのかは不明。

猫の名はミコト。一人称、僕。

「やあっ…」  
「おっと」

腹部に迫る藍の拳を紙一重で避け、半身になっている藍の背中に肘を落とす。が、それは藍の回し蹴りによって弾き返された。

「くっ……………」

悔しそうにしている藍。それを見て距離をとる僕。僕等を見て呑気にお茶をすすする紫。

「紫？」  
「なにかしら？」  
「ちよっと前にも聞いた気がするけどもう一度聞く。これ、何の意味が？」

「言ったでしょう？修業よ、修業。これから貴方はその妖力でいることがほとんどなんだから、その状態でも戦えるように慣れておかないと、いざという時に困るでしょう？」  
「いや、いざという時にはこれ外せば」

「貴方じゃなく、私の『いざという時』よ。なにか問題が起きて、その時にミコトが式を解いていたら呼び出せないじゃない」  
「……そっちな」

ため息をついて、紫には言うだけ無駄だと悟って藍を見る。

「藍も思わない？ 無駄だろこの戦い」

「はあ……まあ、確かに言え」

「藍？ 油揚げが待つてるわよ？」

「てません！ やはり修練は積むべきかと！」

「情けない……」

せめて初めて会った時のような高圧的な言葉遣いならまだしも、藍は僕が万年を生きる妖獣だと知るや否や敬語になっていた。なので、尚更今の発言は情けない。

「わかったよ畜生、本気でやればいいんだろ本気で！」

半ばヤケクソに陥りながら、僕は妖力を全開。二割しか出ていないので全開とは言い難いが、封印があるので仕方ない。

「覚悟しろよ藍、本気で来ないと痛い目見るよ」

「……むう。ですがしかし、私とて最強と呼ばれた九尾の狐。あぶ

……誇りにかけて負けられません！」

今なんて言いかけたよオイ。なんかそこから負けてる気がするよ藍。

「っ……！」

「はあっ……！」

真正面から激突する僕等。

その刹那、紫が湯飲みをコトリと置くのが見えた。

で、なんだかんだで時は流れ、僕もこの妖力にすっかり慣れて、自由気ままに散歩をしていた。

スキマを使えば移動は楽だが、やはり歩いて移動するのも捨て難い。

「お」

何気なく右を向くと、そこには以前訪れた山の姿が。確か、妖怪の山とかいったはず。

特にやることもなくぶらぶらしていただけの僕には、些細なことも行動に直結する。

というわけで、妖怪の山へ行ってみることにした。

「ははあ、前来た時より強力な妖気がある。……鬼神が帰ってきてるな」

山の入り口で耳がぴりぴりとしたので能力を使ってみると、案の定の結果が。そういえば桃鬼はこの鬼神とは戦ったのだろうか？まあ、戦ったとして桃鬼が負けるはずはないだろうが。

ザクザクと足音を立てながら山を登って行く。

そこで、不意に何かの気配が。

「……誰だ？」

気配は上から、なかなか強力な妖気を放つ妖怪みたいだ。というか、封印のせいでも相手の妖力が大きく見えてしまう。どうしたものか。

「動くな」

「!？」

突如、僕の喉元に現れた銀色の得物。僕は驚き、身動きが取れなくなる。

そんな僕の耳元で、背後にいるその妖怪は言った。

「この領域に許可なく入るとは、度胸があるのか馬鹿なのか……。即刻出ていけば、何も悪いことはしない」

ふむ、馬鹿ときたか。

プツンきたよ？

どうやら、式の業務にストレスが溜まっているみたいだなあ、僕。少し可哀相だけど、相手をしてもらおうかな。

「……嫌だと言ったら？」

「この場で殺す」

「……そう。なら……」

僕は左手で右手首のリボンを解いた。

何かが外れ、全身の毛が逆立つような感覚に満たされる。そして、

「やれるもんなら、やってみな!!」

妖力を込めた爪で剣を弾き、地面を蹴ってその場から離脱。地面が大きくえぐられたのを見て、僕に剣を突き付けていたそいつは驚愕の表情を見せる。

そんなそいつに、僕はニヤリと笑って。

「僕の遊び相手が出る？かわいいかわいい子犬ちゃん」

「……………!!」

瞬間、頭から犬の耳を生やした彼女は、剣を片手に襲い掛かってきた。



さて、久しぶりに全力で跳び回ってみようかな。

32：「再・妖怪の山」(後書き)

最近眠くてあまり多く書けない……。

はっ！まさか成長期か！？

……わかってるよ、それこそ夢だっただことぐらい。

### 333：「鴉と白狼と猫と」

「はっ！」

距離を取っていた僕に対し、彼女は数秒目を閉じたかと思えばいきなり切り掛かってきた。爪で受け流し、逆の手で剣を地面にたたき落とす。同時に僕はその場から跳び、近くの木に乗る。先程まで僕がいたその場所に弾幕が良い勢いで過ぎていき、何本か木を薙ぎ倒した。

「そついえば名前は？聞いてなかったけど。ああ、天狗なのはわかるけどさ」

頭に小さな帽子みたいな乗っけてるし。射命丸文が頭に乗っけていたのと似ている、というか同じものだし。

「名乗って何の得になる」

「……いや、別にそつというのは無いけど」

軽くあしらわれているのが気に食わないのか、彼女はなかなか怒っているみたいだった。耳がチリチリする。

彼女はたたき落とされた剣を拾い上げ、はぁ、と溜め息をついてから呟く。

「文さんは最近ボツツとして手に負えないし……。全く、何が猫又ですか」

ボソツと聞こえた声。口調が違うので、もしかしたら僕に対する言葉遣いは仕事用的なものかもしれない。

ん、文？猫又？

「その文ってのは、もしかして射命丸文のこと？」

「……だったらどうした。盗み聞きとは、趣味が悪い」

やっぱりか。なんだ、文の知り合いだったのか。

「どうしたもこうしたも、ソイツと僕は知り合いなんだ。その猫又っていうのも僕のことだよ」

「なっ……！貴様が！？」

一瞬にして彼女の感情が驚きに支配されていた。うん、驚いた時の顔は皆同じ。

「いや、だが……」

「なにしてるんです、椀……あ！ミコトさんじゃないですか！」

「おおっ！？」

突然空から舞い降りて来たのは勿論、射命丸文。パタパタと自分を扇いでいた団扇らしきものを、驚きの声と共に僕に突き付ける。瞬間、僕はぶっ飛んだ。突風が僕を吹き飛ばしたのだ。

そのままどこまでも飛んでいきそうだな、と他人事のように考える。

「っ……！！」

「す、すいません。まさか椀と一緒にいるとは思わなくて……。ですが、軽いですねえ」

と、先回りしていた文が僕を受け止めていた。軽々と受け止められた僕。男としては微妙な気分である。

「所詮猫だしね。人型するときでも猫のときでも、体重は変わらないんだ」

言いながら、僕は猫の姿になって文の肩に乗った。流石に女の子にお姫様抱っこされ続けるのは情けなさすぎる。

「はあ……。でも、どうして椀と？」

「椀っていうのか。いや、暇つぶしにここに入れてみたら、いきなり剣を喉に突き付けられたもんだから少し遊んでやるのかな、と。あ、ついでだしこれ結んで」

口にくわえたりボンを文に渡し、右前足に結んでもらう。とたんに身体が重くなった気さえするが、まあ慣れたものだ。

「はあ……。あの子はたまに融通が利きませんから。昔からなんです」  
「昔？」

「ええ。ちなみにあの子はまだ五十そこそこ、私はもう五百を過ぎますかねえ」

「五百!？」

なんてことだ。文は僕の予想の十倍以上生きていたことが発覚。

いやでも、あの時封印解いてないし。感覚が鈍るのも当たり前だね。そういうことにしておこう。じゃないと軽くへこむ。

「まあ、とにかく降りましようか」

「乗っけてって」

「はいはい、と」

「本当にすみませんでした……」

「いや、いいよ。それが仕事なら尚更責められない」

呆然としていた椛に文が事情を説明すると、頭の耳をペタンと倒して椛が謝ってきた。

その可愛さに若干キュンときながら、僕はそれを気楽に許した。言わないが、あの程度で何かがキレた僕も僕だしね。

「私は、白狼天狗の犬走椛です」

「椛は哨戒天狗をやっているんですよ」

「僕は猫又のミコト。まあ、文ともどもよろしく」

ぺこりと頭を下げると、二人も頭を下げて返してくれた。いい子達だ。

「にしても……ここに入るのにいちいち許可とるのも面倒だなあ。

……ねえ椛、天狗で一番偉いのって誰？」

「天魔様ですが……。ミコトさん、まさか」

「ん、そのまさか。その天魔様とやらのところに連れてって」

「ええ！？で、出来ませんよそんなこと！」

僕の横でブンブンと首を横に振る椛。

「そか。じゃあ勝手に行くから場所だけ教えて」

「な……！」

「この先を真つすぐ進めば屋敷がありますよ。私の名を出せば通してくれるでしょう」

「あ、文さん!？」

「椛。この方は言って聞く方じゃありませんよ?ではミコトさん、私達は先に戻っていますから」

椛の手を引いて飛び立つ文。成り行きで連れていかれた椛の表情が複雑そうで頭に残ったが、今はどうでもいい。

「天魔様、かあ。どんな人なんだろ」

ザク、と一步踏み出す。

なんだか僕、後先考えなくなってきたな。どうしたものかねえ。

33：「鴉と白狼と猫と」(後書き)

なかなか捏造。

感想、批判、あねばどござー！



### 34：〔天魔対面〕

二人の天狗と別れてから数分。

文の言う通り真つすぐ進んで行くと、何やらお屋敷的な建物の姿が。そういえば最近は時間の流れを気にせずにごろごろしていたが、果たして今は西暦でいうと何年にあたるのだろうか。かぐや姫の話は確か平安時代に書かれたと言いが（起きた時代と書かれた時代が同じとは限らないが）、それを踏まえればもう千何年になるか？平安京らしき場所もあったことだし（しかし、あれは本当に平安京だったのだろうか？わからん）、僕が致命的な勘違いをしてなければそこまで大きな間違いでもあるまい。式になって大分経つし。

門番的な天狗に文の名を告げ、難無く中へ入る。どうやら文はなかなかに偉い様子。

門番天狗が僕を値踏みするように見て、馬鹿にするような笑みを浮かべた時はイラツときたが我慢。

「や、来ましたね」

「来ましたとも。さ、案内してくれ」

中で待つていてくれた文の後についていき、キョロキョロしながら進んでいく。

「立派な建物だね。驚いた」

「はは、普段は天狗以外滅多に入らないんですけどね。さ、着きましたよ。この先に天魔様がおられます」

一つの扉の前で立ち止まり、文が少しだけ表情を引き締めた。

僕は尻尾を一振りして、いつでもいいよと文に言う。「コクリと頷いた文は、

「天魔様、射命丸にございます」

「入れ」

「失礼します。さ、どうぞ」

扉を横に滑らせ、文について中へと踏み込む。瞬間、

「文、そやつは何者だ？」

強烈な妖気が僕を包んでいた。さすがに天狗のトップ。椀とは比べものにならない。

第一印象はあまりよろしくない様子なので、ここはひとつ遜って…。

「お初にお目にかかります、天魔殿。私はしがない一匹の妖獣でございます」

膝をつき、頭を下げる。

しばらく重たい沈黙が場を支配した。

むう……こんな言葉遣いしたことないから、何か失礼なことを言ってしまったかも。

なんて考えながら尚も頭を下げ続けていると、

「ふむ……どうやら、天狗に仇なす者ではないみたいだな。頭を上げい」

そんな言葉が聞こえて、同時に耳のチリチリ感が引いていった。

内心ホツとしながら、僕は頭を上げて天魔を見る。そこには、立派な白い翼を携えた初老の男の姿。どことなく威厳が感じられるその姿は、成る程、天狗のボスに相応しい。

「何か用があつてきたのだろう？」

「あ、はい。えつと……」

「彼をいつでも此処に連れて来てよろしいでしょうか？」

「えつ？」

今まで黙っていた文が、僕の言葉に被せるようにそう言っていた。僕が口を開けてポカンとしている間にも、文は話を進めていく。

「彼はあの鬼を退くことが出来る力の持ち主。親しくなっておいて損はありません」

「む……。他でもないお主が言うのならそうなのかもしれないが。しかし、な」

「大丈夫です。ミコトさんは好き勝手に暴れるような妖怪ではありませんよ。ねえ？」

「え？あ、うん」

確かにところ構わず暴れ回る程戦いに飢えてはいないが……。なんで、文はこんなに僕を援護しているんだ？

そんなことを考えている僕を余所に、天魔は顎に手を当ててウンウン唸っている。が、やがて何かを閃いたように目を見開いて僕を見た。

「ミコトとやら」

「はい？」

「お主に、この天狗の屋敷に入る許可を与える」

「本当ですか？」

「が、ひとつ条件がある」

ニヤリと笑う天魔。なんだか嫌な予感が。

「お主、最近この山に住み着いた二匹の鬼を知っておるか？」

「二匹……ですか。はあ、知りはしませんが、心当たりなら」

しかも確信出来る程のね。もう先が読めてきた。つまりは、

「最近そやつらが決闘と称して天狗を倒して回っていてな、こちらとしては困るばかり。で、だ」

「わかりました。その鬼をなんとかすればいいんですね？」

「その通りだ。期待してるぞ、ミコトとやら」

またしてもニヤリと笑い、その白い歯を覗かせる天魔。ただのお茶目なじいさんに思えてきたが口には出さず、僕は一礼してその部屋から出た。

「本当に大丈夫ですか？」

「ん？あぁ、多分ね」

長い廊下を渡りながら、ひよこひよここと隣をついてくる文にそう返す。

二匹の鬼とは、ほぼ確実に桃鬼と志妖のことだろう。しかし、決闘

云々の問題は桃鬼が勝手にやっているだけで、隣にいただけの志妖はただ巻き込まれているだけだと考えられる。不敏な娘である。

「ま、問題はどうやって二人を見付けるかなんだけどさ」

「そうですね、手伝いま」「鬼だっ！あの鬼が現れたぞ！！」

「力の弱い者は逃げる！クソツ、白狼天狗集まれ！！」

ビュンツッ！！と僕らの横を突風を巻き起こしながら天狗が通り過ぎていく。

バサバサと着物がはためき、僕は風が巻き起こる中、眉をひそめた。

「……探すまでもなかったか」

「あやや……」

風が収まり、僕は尻尾を一振りする。

じゃあ、あの馬鹿にキツイお灸を据えにいきますか、と。

34：〔天魔対面〕（後書き）

今日の夜にもう一度更新する予定でいます。

35：「天秤はどちらに傾く」

椀は考える。

「あんたじゃ役不足だよ。見逃してやるから出直してきな」

あまりにも強大な力を持つこの相手に、どうすれば打ち勝てる？

「それは出来ない」

刀を構え、刀芯を真つ直ぐに。

真正面からぶつかれば、間違いなく圧倒される。ならば。

「いざ！」

天狗であるこの身を生かし、機動力で圧倒する！

「欠伸が出るねえ……。言っただよ、出直しなっ」

「がっ!?!」

鬼の背後に回ったはずが、地面に突っ伏していた。背中に鈍痛が響いていることに気が付き、そこでようやくたたき落とされたことを理解した。

「今ならまだ見逃してやる。とつとと失せな」

「……………!」

刀を地面に突き刺して何とか立ち上がる椀に、桃鬼はそう言い捨て

た。

屈辱。

私ではどうあがいても、この鬼に勝つことは出来ない。

そんなことはわかっていた。

だが、勝つことは出来なくとも、時間稼ぎぐらいは、と単身鬼に立ちほだかったというのに。

それすら出来ない、圧倒的な力の差。

しかしそれが、逆に椛を意固地にさせた。

「……断る」

その一言が死亡に繋がることに薄々感づいていながら、椛はそう言っってしまった。

「……そうかい。なら」

強大な力が、今度こそ椛に近づいていく。

椛は、今更ながらに、震えていた自分に気が付いた。

怖い。

怖い。

死にたく、ない！

本当に、今更。

椛は、ようやく自分の発した言葉の意味を理解して。



「恨むなら、自分を恨むんだね！」

振り下ろされたその腕を、ただじっと見つめていた。

「……………」

僕の腕の中で、椀は目をつぶっていた。

それを見た僕は、尻尾で頬をツンツン突く。

「……………え？」

「や。先に言っとくけど、まだ君は生きてるからね」

屋敷の屋根の上で、ポカンとしている桃鬼を視界の端に納めながら  
言う僕に、椀はしばらく目をぱちぱちさせていた。

「私、確かに……。あの攻撃が当たる寸前まで、見ていたのに……」  
「あまり僕を舐めないで欲しいね。あの程度の距離、一秒の一割あれば余裕でいける」

椀を降ろし、僕はそのまま飛び降りた。

僕の目の前には、ひどく狡猾な笑みを浮かべた桃鬼が立っている。

「ああ、これは予想外だ。まさかミコトが相手になってくれるなんてねえ」

「僕も予想外だよ。桃鬼と戦うなんて、もう二度とないと信じてただけど」

言いながら、僕は能力を使用。桃鬼の感情を取り込み、それを基準に操作しようと試みる。

が、やはり無理だった。あまりにも堅すぎる。

「志妖」

「はい。残念ですが、今の桃鬼様は私にも止められません」

今まで空にいた志妖が僕の隣に着地して、なかなか残念な情報を言ってくれた。

しょうがないので椀のそばに居るように頼み、僕は改めて桃鬼と対峙する。

「最近暇で困ってたんだ。このモヤモヤ、ミコトなら解消できそうだねえ」

好戦的な笑みを隠しもしない桃鬼。

僕は瞬間弾かれるように後ろに跳び、屋敷の壁に着地した。

ちらりと自分の『動かなくなった右腕』を見て、すぐに桃鬼へと視線を戻す。

ま、あの距離を無傷で助け出すなんて、無理に決まってる。

せいぜい、一撃『食らってから』助け出すのが関の山。

今回は、それが右腕だっただけ。

そう、右腕だけで済んで良かったと思え、僕。

椀の命か、僕の右腕か。

天秤にかけるまでもなかったのだから、仕方ない。

勝利か、死か。そんなふざけたものが天秤にかけられた戦いが、始まりを告げた。

35：「天秤はどちらに傾く」（後書き）

眠くてこれが限界だった……。

次回！

またしても鬼神と灰色の風がぶつかり合う！？  
果たして天秤はどちらに傾くのか……？

え？短いだつて？

………すいません。

### 36：「舞い踊る灰色の風」

桃鬼の妖力から逃げる様に跳び回る僕を、執拗に追い掛ける鬼神。全く、一体どれだけストレスが溜まっていたのか知らないが、尋常じゃない妖力だ。

「っ！」

「！！！」

一瞬の隙を見て、僕は自分のスタイルに持ち込む。妖力を使った超高速移動術から高速連撃。

ガガギガガガッ！と音が重なって辺りに響き渡る。一秒に二撃、あるいは三撃打ち込むも、そのうち桃鬼に当たるのは一撃ぐらい。全く、ふざけた対応能力だ。この近距離で僕の動きについてくる相手は、後にも先にも桃鬼だけかもしれない。

「アハハハッ！良い、良いぞミコトツ！アンタとの戦いはやはり楽しい！」

「この戦闘狂め……！！」

余りの速さに、髪針と爪が交差する度に火花が散りはじめる。

「くっ！！」

ガギイン！！と何百回目となる交差。

瞬間、爪に違和感が。

その隙に桃鬼の蹴りが腹に直撃。僕は瞬くまに屋敷の屋根まで吹き飛ばされた。

「ぐる……くそ、何だ……爪が割れてやがる」

左手の爪、薬指と小指を除く他三本の爪が、根元からへし折られた。深爪もいいところだ、全く……。

思わず歯を食いしばり、僕は今まさに飛び掛かってきている桃鬼に視線を向ける。

その時、隣からガラガラと音が聞こえた。

「だ、大丈夫……!？」

「椀ッ……!？クソッ!!」

僕は反射的に椀の身体を覆うような体勢をとっていて。

次の瞬間、桃鬼の拳により屋敷の一角が吹き飛んだ。

「だ、大丈夫か？」  
「は、はい……」

濛々と立ち込める土埃。僕は実質片手で身体を支え、下にいる椀を瓦礫から守っていた。とは言っても瓦礫は落ちてこず、取り越し苦労だったけれど。

「僕等の戦いに近付くなんて……。命知らずにも程があるよ」  
「で、でも……」

「僕なら大丈夫。こんなのしょっちゅうだから」

しょっちゅう屋敷の一角をぶっ飛ばされても困るが。

そんな考えが頭に浮かんで苦笑いする僕。が、よくよく今の体勢を考えたら、椀を押し倒したような体勢ではないか。

「ゴメン、すぐにどけ……椀？」  
「この、右腕……まさか」

退けようとして、椀の言葉に僕は固まった。自分の右腕、手をつくだけの形をとっている右腕を見る。

二の腕辺りが明らかに歪み、そこだけ灰色の着物が黒く染まってい

る。見てはいないが、多分折れた骨が皮膚を突き破っているんだろ  
う。

迂闊だった。すぐに離れば良かったな。

「まさか、コレ……私を庇った時の……？」

呆然とした表情で僕の右腕に手を伸ばす椀。  
体勢を変え、椀の横に膝をつく。身体を起こした椀は僕の右腕を恐  
る恐る触り、その感触に目を見開いた。

「やっぱり……！私を庇っ、んっ……」

椀の口到人差し指を当て、やんわりと黙らせる。驚いたような表情  
の椀に、僕は笑顔で返した。

「文、志妖」

「はいっ」

「はい」

「椀をよろしくね」

まるで忍者のように着地した二人にそう告げる。

土煙が晴れていき、僕は立ち上がって三人に背を向けた。

「さ、続きをしようか」

「そここなくちゃねえ」

爪を二本無くした僕に、もはや肉弾戦では万が一にも勝機は無い。



というわけで僕は空に跳躍、大量の弾幕を展開してその内の一つに乗る。

「あまり多くは作れないけど、無いよりマシか。紫に感謝しなきゃ」僕が弾に乗ると、その弾はなぜだか三秒と経たずに霧散してしまう。封印状態に慣れるための修行の際にそのことを紫と藍に突っ込まれた僕は、その弱点を克服するために考えた。

それが、今僕が乗っているこの特殊な弾。

他の弾よりも多い妖力で出来ているこの弾は、糸のような妖力を複雑に絡ませることで弾の形を成している。そうすることで霧散するのを防いでいるのだ。

無論多くは作れないが、攻撃には使わない為に五つ程あれば充分。以前より遥かに移動しやすい。

「ほう、弾幕か」

ふわりと飛び上がる桃鬼。僕は桃鬼に手を翳し、照準を合わせる。無数の爪が桃鬼に切っ先を向いた。

桃鬼は動かない。

自信があるのだろう。その強烈な妖気なら、確かに僕の弾幕を食らっても致命傷にはなるまい。

あるいは、それが狙いか。大量の弾幕を食らってもダメージを受けない事を見せつけて、精神的なダメージを僕に与えるつもりか。

「どうした？撃たないのかい？」

「後悔するよ」

僕の言葉と共に、桃鬼に弾幕が襲い掛かった。

「どうだ……?」

時間にして三十秒間。僕の弾幕は一発残らず桃鬼に直撃した。まさか本当に避けもしないとは。

これならさすがに……と考えた、その時。

「これで終わりかい?」

頭の角を触りながら、桃鬼は身じろぎ一つせずにそこにいた。ありえない、無傷だ。

僕の表情を見て、桃鬼は勝ち誇ったような表情を浮かべる。

「終わり……。僕の攻撃は、あれで最後。この戦い、結果は見えた」

僕の言葉に、桃鬼の感情は愉悦に染まる。  
はて、何を勘違いしているのやら。

僕は桃鬼に向かってポロボロの左手を突き出して、握りしめる。  
そして、口の端を吊り上げて言っただけだ。

「僕の、勝ちだ」

桃鬼の反応を見る前に、ぐいっと右方向に左手を動かす。

「……なん、で？」

その言葉を最後に、桃鬼はグラリと身体を揺らし、

「つと」

落下を始めた所で、桃鬼の身体を受け止めた。

そのままゆっくりと下降し、地面に着地。

気を失っている桃鬼を降ろし、右腕の着物を破る。血で張り付いて  
気持ちが悪かったから。

溜息をつくくと、力が抜けて倒れかけ、そこを誰かに支えられた。睡  
眠欲を感じながら、つい先程の事を思い返す。

最後の弾幕、実は少しだけ細工していた。

ただの弾幕では、能力を使用していた桃鬼にダメージを与えること  
は難しい。それでも全力で妖力を込めた弾幕なら効きはしただろう  
が、決定的なものにはならない。

肉弾戦では勝ち目が無い。

弾幕ではダメージが期待出来ない。

僕に与えられた最後の手段は、能力だった。

弾幕を作り出し、それに能力を付随した薄い結界を張り付ける。

様々な感情が張り付いた弾幕を真正面から食らえば、どんな屈強な心にも揺らぎが生じる。そうやってしまえば、僕の勝ちだった。

結果、僕の思惑に気付かなかった桃鬼は真正面から弾幕と激突。本人ですら気付かない心の揺らぎを見た僕は、勝利を確信したのだ。

「……しんど」

思わずでた本音。

今更ながら左手の指先と右腕の痛みがひどいことに気が付いた。

そつえば僕を支えてくれてるのは誰だろう、と眠る寸前に振り返る。

視界が暗転する瞬間に見えたのは、白い犬のような耳だった。

ああ、死ぬかと思った。

本当に。

36：〔舞い踊る灰色の風〕（後書き）

桃鬼大暴れ。

ミコト、頑張ったね！！

37：「一時の……」

「ううん……」

何だか妙に寝苦しい。

どうしたことが、と寝返りを打つ。何か暖かいものがあつたので、無意識に抱き寄せた。

「ふわっ……」

耳元で艶っぽい声が。

いや、気のせいだろう。今はとにかく、このやけに暖かくて気持ちいい抱きまくらに身を任せていたい。

そんな本能から、更に身体を寄せて擦りついた。ああ、すごく……落ち着く。

「椀、ミコトさんの様子は」

スツ、と扉を開く音がして、文の声でした。

ん？椀？

僕が一抹の疑問を覚えると同時、抱きまくらがびくりと動いた、気がした。

「あ、文さん！？ここ、これは違いますよ！？決してその、私がミコトさんの布団に入っていた訳では」

「つまりは誘惑に負けて布団に入ったら寝ぼけたミコトさんに抱きしめられたと！！こ、これは滅多に無い特大ネタです！！」

「文さん！？た、頼みますから新聞になんて載せないで下さいね！

？」

「否定しないということはそうなんですかあ！！」犬走椛、鬼を打ち倒したあの妖獣にその身を許した！？『見出しはこれで完璧ですね。アハハハハ！！』

「文さん！？私の話を聞いてますかあ！？」

ドタドタバタン！と騒がしい音を最後に、また周りは静かになった。すっかり目が覚めて、現在自分が行っている行動を話の内容から理解する。ヤバい、冷や汗がダラダラと流れ出して来た。

僕はゆっくりと腕の力を抜き、椛を抱きしめていたであろう体勢から脱出。はやる気持ちを押さえ付けてゆっくりと反対方向に寝返りを打った。

「あつ……。す、すごい汗……。もしかして、不安、なのかな」

布か何かで僕の額の汗を拭き、椛はそんなことを呟く。当たり前と言えば当たり前。

「えっ、と……。安心させれば、いいのかな。でもどうすれば……。あ」

まるで何か思いついたかのような最後の一言。ズリズリと這うような音が聞こえる。

「文さんは……。まあ、ここまできたら同じですか。いざとなったら開き直れば……。」

まさか？

「で、では……。失礼して」



一体何を失礼するのか、なんて聞く暇もなく、僕を包む柔らかな感触。薄く目を開くと、椀の来ている白い服が見えた。

すぐに目をつぶると同時、頭に回された腕が僕を抱き寄せる。リラックスどころか、身体は強張る一方である。

サラリと髪をすく、椀の指先。

「綺麗な髪……。それに、なんて細い身体。この身体で、私を守って戦ってたんですか……」

ギョツ、と身体が抱きしめられ、同時に椀の感情が流れ込んでくる。

それは、とても暖かくて、優しい感情。もっと相応しい言葉があると思うけれど、僕の頭はその感情にいつしか支配されて、それ以上考える事が出来ない。

身体の強張りはいつの間にか消えていた。

まあ、もうしばらくはこのままで……。

37:「一時の……」(後書き)

短いですが、どうしてもここで一区切りを入れたかったので更新しました。

権かわいいよ権。

38：「天魔の羽」

すっかり治った右腕をそれとなく動かし、生えて元通りになった左手の爪を擦り合わせる。  
すっかり本調子である。

「うーん。空に輝く太陽が一段と眩しい」

そう呟く僕は、現在屋敷の屋根の上。さんさんと大地を照らす太陽光を全身に浴びて寝転んでいます。  
早い話、ひなたぼっこなんだけど。

「あやや、こんなところに居ましたか」

「ん、文か。どうかした？」

「いえいえ。ただなんとなく捜してみただけでして」

翼をたたみ、隣にちよこんと座る文。何を言う訳でもなく、じっと僕を見つめている。

「なにか？」

「あ……。いや」

「質問があるならどうぞ。よほどのこと以外なら答えてあげる」

たたんだ翼を触りながら、僕はくだけた調子でそう言った。  
うーん、いつ見ても翼ってカッコイイ。憧れる。

「あの……。一体どこにあんな速さを生み出す力が、と」

「へ？」

「実は私、この間は『かなり速い方』なんて言いましたけど、天狗

の中では一番速いんです。ですから、こっ……あの戦いのミコトさんを見て驚いたというか」

もじもじとしながら言う文。

確かに、あの時の僕の身体はかなり『キレて』はいたが……。

「まだ、あれはマックスではないかなあ」

「まっくす?」

「ああ、いや……。そうだな、あれはまだ本気のスピードではないというか……」

「なっ……まだ上があるんですか!?!」

「いてっ」

「あ、す、すいません。興奮して……」

いきなり開かれた翼が顔に直撃。顔をさすりながらどう説明しようか考える。

「でも、今のミコトさんからはあそこまで強い妖力は感じられませんか?」

「それはこれのせい。これをつけてると、普段の妖力の二割しか出せないんだ」

怪訝そうに見上げてくる文に、右手首のリボンを見せる。

あの戦いの最中、よく無くさなかったものだ。

「はあ……普段の二割、ですか。なら、それを外せば全力が出せる、と」

「理性が許すぐらいの全力はね」

「?」

これまた怪訝そうな表情を見せる文。それはそうだ、この言葉だけで理解されてもこちらが腑に落ちない。

それから僕は、自分の能力と、その使い方について文に説明した。

「ははあ……。つまり、その『感情を操る程度の能力』で自分の感情を操れば、あれより速く動けると」

「ま、そんなところかな。一歩間違えれば大惨事になるから、あんまり使わないけど」

「大惨事、とは？」

「……聞きたい？」

恐る恐る、と言った感じで聞いてくる文に、僕は少し低めの声で返した。

ゴクリと唾を飲み込んで、文は小さく頷く。

僕は、そんな文の耳元に手を当てて……。

「……ふう〜」

「ふひゃあー!!」

息を吹き掛けた。ビクビクツと身を震わせて、文はパタリと倒れた。

「その先は知らなくてもよろしい。好き好んで知るものでもないしね」

「わわわ〜……」

「……ふむ、ちょっと強すぎたかな」

耳元に手を当てた際に、少しばかり『快感』の感情を加えてみたけれど……。

「てい」

「痛ッ、はっ！今は……！？」

「よかったな。僕的能力を直に体験できて」

ぺちんと頬を叩き正気に戻す。はっとした感じで身を起こした文は、ふやけたようにまた倒れた。

まるで先程までの余韻に浸っているようだ。

「凄い……。凄すぎます……」

……うつとりしているように見えるのは、気のせいというようにしておこう。

目の前にスキマを開き、その場を後にした。

「あ、いたいた。文さん、ミコトさんを知りませんか？天魔様が話があるそうで……」

「……はふう……」

「………？」

「つと。なにか？」

「……突拍子もないのお。ついさっき白狼の者を使いに出したばかりだというのに」

いきなりスキマから現れた僕に、呆れた顔で呟く天魔。

「いえ、なぜだか呼ばれた気がしまして」

これ本当。

最近、あの『命を感じ取る程度の能力』が発展してきたようで、意識していなくても常時発動、更には少し集中すれば感情も読み取れるというスグレモノに。

「まあよい。ミコト、お主にここを自由に出入り出来る権利を与える。いつでも気軽に来るがいい」

「有り難いことで。感謝します」

「敬語もやめい。お主、この天魔よりも遥かに永く生きているようではないか」

「はあ……しかし」

「対等に話せる相手が欲しかったところだ。遠慮するな」

「……なんて呼べば？」

「天魔でよい」

「じゃあ……またくるよ、天魔」

「ああ」

ぱたんと音を立ててしまる扉。

なんてこった、天魔と肩を並べる立場になってしまった。

更にはその証として天魔の羽までもらってしまった。

「……どうせなら身につけておきたいな。紫なら何か持ってるかなあ」

僕はそう呟きながら、スキマを開いた。

「紫様？」

「残念、僕だよ」

「ミコトさんでしたか。出来るだけ玄関から入ってきて欲しいものですが」

「次からはそうするよ。紫は？」

「さあ？紫様の行き先など知りません」

皮肉っぽく呟く藍。同じ式として同情しちゃうよ、全く。

だがしかし藍。僕は口の周りにミカン汁を付けた九尾を初めて見たぞ。

「うん？それは……」

「ああ、そうだ。これ天魔の羽なんだけどさ、どうにかして身につけられないかな」



僕の言葉に目を見開く藍。まあ、その反応は正しい。いきなり天狗のトップの羽を持ち帰ること自体おかしい。だが、藍はすぐにいつもの表情に戻り、少し待ってください、と言うと家の奥に引っ込んでいった。

「こんなのはどうでしょう?」

戻ってきた藍の手にあったのは、直径十センチ程の金属で出来た輪。

「さ、座って下さい」

僕の肩を押し、炬燵の前に座らせる。

鼻歌を歌いながら藍が僕の手にある羽を取り、どこから取り出した細い針で羽の根元、芯の部分に穴を開けた。天魔の羽だけあつてもそのサイズがデカイために芯も太く、そこから裂けることもなさそうだ。

「~~~~~」

藍はおもむろに自分の尻尾から一本の毛を抜き、それを羽に開けた穴に器用に通した。あんなに細いのに、藍の毛は金色に輝いている。

「これをこうして……。少し痛みますけど、我慢して下さいね」

「え? つて痛ッ!」

その鮮やかな作業に目を奪われていると、不意に藍は手にとったハサミで僕の左耳を切った。思わずビクリと身体が震える。

「痛いのは今の一瞬だけです。後はここに……」

藍は、あの金属の輪に金色の糸を通した羽を結び付け、耳の切れた部分に入れる。不思議と痛みは無く、血も出ていない。

「」

聞き取れないぐらいの小さな声が藍の口から放たれ、同時に切れた耳が少しだけ熱くなる。

「終わりです。さ、どうですか？」

嬉しそうに藍は言って、僕に鏡を向けた。

金属の輪は見事に僕の耳を貫通しており、穴が開いている部分は金属で覆われて補強されている。

輪自体に重みはほとんど無く、違和感は全く感じない。

さらには、輝く金色の糸で結ばれた純白の羽。

「おお……」

思わず息を呑む。

これは、予想外に……良い。

「ありがとう、藍。気に入った」

「喜んで頂けたみたいでよかったです。簡単には壊れたりしませんので、そういった心配はしなくても大丈夫ですよ」

「いや、ありがたい。じゃあ、また少し出掛けてくるよ」

もう一度礼を言ってから、スキマを開く。

あ、そうだ。

「口、拭いた方がいいよ」

そう言って鏡を手渡してから、僕はスキマに入るのだった。

38：「天魔の羽」(後書き)

ミコト は てんまのはね を てにいった!

いきなりですが、人気投票じみたことをやろうかなとか。

ミコト、桃鬼、志妖、この三人の内誰が一番お気に入りか感想やらメッセージでお送り下さい。

一票が入ったキャラで、一つ話を作ってやろうかという魂胆であります。

お暇があれば、ぜひ一票。

39：「平和とは平穩で」

新たなアクセサリを身につけた僕は、上機嫌でスキマから降り立った。

ちよつと目に入ったのは、桃鬼が一撃で吹き飛ばした屋敷の一部。そこに、二人の鬼の姿が。

「あーんもう！どうして私が天狗の屋敷を直さなくちゃ行けないんだい」

「いや……壊したのは桃鬼様ですし……」

「そつだ。壊したのは桃鬼だぞ？」

「あつ、ミコト！いい子だから手伝っておくれ」

何がいい子だ、と言いながらも、僕は大工道具を手を取った。

まあ、こうなつた原因は僕にもあるわけだし手伝おうかと。あとは気分いいしさ。

「さ、とつとと終わらせてのんびりしよう」

「さすがっ！やっぱいい子だなあミコトは！！」

ええい、頭を撫でるな尻尾を触るな。

そんな意味を込めて突き放そうとするが、なにぶんやはり力では敵わない。あれ、なんかデジャヴユ？

「や、止めてあげてください。私も手伝いますから」

「ん？アンタは……」

一瞬桃鬼の手が止まり、僕は押さえられていた顔を上げた。そこには、耳を少しシュンとさせた椀の姿。

ははあ、桃鬼が怖いんだな。殺されかけたんだから無理もないか。

「桜、そんなに緊張せずとも。桃鬼は理由もなく暴れる鬼じゃないさ」

「そうとも。あの時だって殺すつもりは無かったし、すぐに逃げていればあんなことにはならなかったんだよ？」

隣で踏ん返り返って言う桃鬼の横っ腹に肘を入れる。原因の原因が何偉そうにしてやがる。

「でも、手伝ってくれるのはありがたい」

「は、はい！喜んで！」

「？喜ぶことじゃない気もするけど、まあ、よろしく」

「……………っ、何するんだいミ」

「お前はとつとと働く」

「あれ、ミコトさん。その羽は……」

体重が軽いことを活かし、骨組みの上に乗って作業していた僕に椀が話し掛けてきた。ちなみに椀は飛んで僕に材料を届けてくれます。

「うん？ああ、これは天魔の羽さ。貰ったんだ」

「天魔様の羽、ですか？」

「そ。友人の証、とでも言うのかな」

「天魔様と友人、ですか！？それはまた……」

「伊達に歳食っちゃいないから。僕より長く生きてる妖怪は、あの桃鬼ぐらいかな。その次に志妖」

僕の言葉に開いた口が塞がらない、といった様子の椀。なんでもいけど、そこでその材木落したりしたら、桃鬼に直撃して修理どころか建て直しの域に入るかもしれないから止めてね。

「あれ、言ってなかったか。僕と桃鬼と志妖、三人共一万歳はとっくに過ぎてるけど」

「……………！！」

「ま、僕はどうでもいいんだけどね」

驚いたまんまの椀を余所に、僕は作業を続けた。

で、空が朱く染まり始めた頃に、ようやく形が出来上がった。ようやくといてもありえないスピードだが。

僕は扉がない部屋の縁側に座り、スキマから出したお茶を啜っている。いや、スキマって本当に便利。

桃鬼と志妖は屋根の上でくつろいでいる。椀は僕の隣でもじもじしている。

「ああ……平和」

そう、心の底から呟いた。

の、だが。

「……………つえ」

常時発動している能力により、なにやら門の向こう側に不吉な気配



を感じていた。  
これは……。

「うわあっ！鬼が来たぞっ！」

ええい、考える暇ぐらいくれ！

なんて叫ぶことは当然無く、門の扉ごと吹っ飛ばして侵入してきた鬼二人を視界に入れる。  
ふむ、一本角と二本角か。

「到着、と。さて、桃鬼はどこにいるのかね」

「多分そこらにいると思うよ？だって桃鬼だし」

「それもそうか」

おやおや、豪快な入り方をした割にはなかなかふてぶてしい態度。

「椀。裏に行つてな」

「え、ええ！？」

構えていた椀の足元にスキマを開き、落とす。

無駄な戦いは避けたいからね。

僕は茶を飲み干すとスキマに湯呑みをほうり込み、侵入者をまじまじと見つめる。

「……封印は解かなくていいか」

「うん？誰だアイツは」

ようやくこちらに気が付いた様子。一本角の鬼が僕に近付いてくる。  
ほお、これはまた桃鬼に負けず劣らず……じゃなくて。

「お前、ここに来た鬼を知らないか？」

「ん。屋根の上にいる馬鹿なら勝手に連れてって。もう用は無いから」

「……酷い言い草だねえ」

僕の前にズダツと着地する桃鬼。ワントンポ遅れて志妖もスタンと着地した。

うん、着地一つとっても性格って出るんだね。

「桃鬼、どうだった？」

「なに、いい発散になったさ。久しぶりに全力で戦ったからねえ」

「え！？桃鬼が全力を出したのか！？なら、相手は今頃冥界かあ…」

…」

いや、バッチリここで生きてるけど。

なんてことは言わない。言ったが最後、また面倒なことになるに決まってる。

「ん？いや、ここにいるさ。コイツと戦った」

「「え？」」

「バカヤロウ！！」

思わず立ち上がって叫んだ。いや、こうなるかもとは薄々感づいてはいたけど、全くその通りにならなくてもいいじゃないか！

「いや、桃鬼。それは嘘だ」

「私もそう思う。だって、コイツ桃鬼どころか私達でも勝てるよ」  
「……………む」

若干腹は立つが、なんだか予想外の方向に話が進んでいる模様。

「こじは。」

「そうそう。こんなしがない妖獣、鬼様相手じゃ粉も残りません」

我慢だ、僕。ここを堪えれば平穏が待っている。

と、いきなり僕の横にスキマが開いた。そこから出て来たのは、当然、我が主人。

「あ、ミコト。リボン借りてくわね」

「え？いや、ちょ」

「じゃあ。羽、似合ってるわ」

その言葉を最後にスキマに引っ込んだ紫。

だが僕は確かに見たぞ、あの最後の明らかに楽しんでいるような表情を。

あの野郎……事の顛末を見てやがったな。それでまた面白いからとか理不尽な理由で封印であるリボンを奪ったに違いない。

封印が解かれ、反動で妖力が噴き出す。おかしい、僕は意識してないのに妖力が………これも紫か!?

ちらりと鬼二人を見てみれば、驚きの中にすごく嬉しそうな感情が流れ込んできた。

……平穩、まだかなあ。

39：「平和とは平穩で」（後書き）

人気投票、よろしくお願いします！

タグにバトルを追加しようと考えている今日この頃。

この小説の六割は戦闘で出来ています。あとは優しさ  
t e r a 。 c e

#### 40：「二匹の化け猫」

「いや、こんな美味しい酒はいつ振りかねえ」

「まあ、長い間一緒には飲んでなかつたし」

ここは妖怪の山にあるとある洞窟。桃鬼と志妖がねぐらにしているらしい。

僕は若干懐かしさを感じながら、瓢箪に入っている酒を少しだけ口に流し込んだ。

「うう〜！やっぱり納得いかない！ミコト！もっかい勝負だ！」

「止めなよ萃香。何回やつても同じだって」

自分の名を呼ばれ振り返ると、そこには今にも飛び掛かってきそうな小さな二本角の鬼と、それを後ろから押さえ付ける一本角の鬼。小さい方は伊吹萃香。押さえ付けている方は星熊勇儀。どちらも女だ。

「うう〜」

「そんなに悔しいかね、僕ごときに負けたぐらいで」

「うあっ！その余裕が腹立つっ！」

「どっどっ。ミコトの旦那も、あまり萃香をからかわないでやってくれ」

「はは、楽しくてね」

萃香が何故ここまで憤っているかと言えば、原因は一重に僕の戦い方にあった。

まあ、僕の常套手段である高速移動からの首に一撃。それで呆気なく萃香は倒れてしまった。

まあ、妖力全開の僕の一撃を食らって平気でいられるのは一人しかいないから当たり前なんだけど。ん？誰かって？聞くなそんなこと。萃香は自分が何も出来ずに負けてしまったことが気に入らないらしく、あれから何回も僕に喧嘩を売り、その度に僕は秒殺で終わらず。だって下手に手を抜いて一撃でも食らったらキツイし。まだまだ若いとはいえ一端の鬼。そんな奴の攻撃を、何の理由もなく受ける義理なんかない。

「勇儀はいいじゃん、一発でも当てれたんだし」

ぶすつとした面持ちで呟く萃香。

その言葉に、僕はわざとらしく腹を抱えて痛がってみせると、勇儀は苦笑いしていた。

勿論勇儀とも戦ったわけなんだが、不覚にも先手を取られて一撃食らってしまったのだ。

それだけならいいのだが、勇儀の能力が少しばかり予想外だった。

『怪力乱神を持つ程度の能力』。

詳しくは知らないが、文字から読み取るに身体強化系の能力だろう。それゆえに勇儀の一撃は食らった本人すら笑ってしまう程（引き攣った笑いだ）馬鹿らしい威力があり、自分から後ろに跳んで威力を逃がしていなければ死にかけていたかもしれない。なんてったって打たれ弱さには定評がある僕だ。

「久しぶりのミコトの耳尻」

「……………」

なんてことを考えていたらいつしか耳と尻尾が桃鬼に弄ばれていた。いや、別にいいけど。久しぶりなんだから許すけども。ただ、控え目ながらに尻尾を触るのはやめて志妖。くすぐったいから。触るなら堂々と。

「じゃ、行くよ。あんまり無茶苦茶しないように」

「わかってるとも」

「志妖。頼んだからね」

「はい」

翌日の朝。

洞窟の前で桃鬼に注意を促すも、すごい不安を感じた僕は志妖に全てを托すことにした。

頭を撫でて、その笑顔を目に焼き付ける。いや、綺麗になったものだ。

「じゃあ。天狗と仲良くやるように」

それだけを言い残して、僕は跳んだ。実は一番名残惜そうにしていた桃鬼にキユンとくるものがあつたが、我慢して跳び続けた。



で、特に行く当ても無くただひたすら森の中を跳び続けていると）  
ちなみに耳と尻尾は隠している。人間と会ってしまったもいいように、手の平サイズの何かを発見。

「…………妖精さんだ」

思わずその場に止まって、ふよふよと飛んでいる妖精さんをしばし見つめる。妖精さんは僕に気付くと、慌てて草村に飛び込んで身を隠していた。  
でも羽が見えてる。

「さすがに僕を覚えてるのはいいないか。…………いや、そもそも場所からして違うし、当たり前だな」

昔を思い返そうとして、少し胸が痛んだのですぐに止めた。  
それをごまかすように木の枝に跳び移り、その場を後にする。

「…………？」

が、三本目の木に跳び移った辺りで僕的能力が何かを捉えた。妖精  
さんにしては大きすぎる。

「……この近く…………いや、そこか？」

木から飛び降り、耳をピクピクさせながら草村を掻き分ける。  
そこにいたのは。

「あっ……………」

「……………」

一瞬、言葉を失った。

そこにいたのは、一人の少女。

少女の頭には、耳。

そして、おそらくは腰の辺りから伸びている、二本の尻尾。

右足を顎のような罫に挟まれ、身動きがとれないでいるようだった。  
身につけている赤い服も、ところどころ汚れている。足搔いてはみ  
たけれど、といった感じが。

……………固まってる場合じゃない。とにかく罫を。

「失礼」

「あ、……………痛ッ」

「よし、これでいいな」

かなりきつく挟まっていたので、無理矢理自らの手でこじ開けた。  
妖獣の力なめんなよ。

「歩けるか？」

「……………」

そう問い掛けると、右足を引きずりながらも彼女は四つん這いに構  
えた。

むう、多分同じ猫又だというのに、なぜこんなに警戒されて……………。

「あ、そうか」

尻尾とか隠したままだった。これじゃあ警戒されて当然だ。彼女にしてみれば、自分を畏にかけたかもしれない人間がきたのだから、それは警戒する。

「ん、これでどうだ」

「あ……」

変化を解いて耳と尻尾、ついでに爪も出す。

驚いた様子の彼女は、けれど警戒は解いてくれたみたいだった。

「うーん。初めて他の猫又にあつた……じゃないや、とにかく手当てか」

「え？ひゃっ！」

ひょいっと彼女の身体を持ち上げ、お姫様抱っこ。実はちょっとしてみたかっただけというのもあるが、かなり軽くて驚いた。軽さなら僕も負けてはいないが。

「マヨヒガなら、藍がいるかな」

「??？」

「じつとしてね」

不思議そうに僕の腕の中から見上げてくる彼女。うわ、かわいいなオイ。

スキマを開き、足を踏み入れる。彼女にしてみればいきなり目だけの空間に連れ込まれたのだから、怖いだろう、キュツと目をつ

ぶって身体を寄せてきた。

「っくあ……。やばい、なんという破壊力……」

思わず抱きしめたくなるのを能力を使って必死で堪え、僕はマヨヒガへとスキマを繋げた。

スキマを開くと、果物をモキュモキュしていた藍がいた。

……今度はりんごかい？藍様よ。

40：「二匹の化け猫」（後書き）

人気投票、現在志妖が一步リード！

皆さん、どんどん票を！

既に入れてくださった方々に、多大な感謝を！

## 41：「二匹の化け猫・2」

りんごを飲み込むのを待つこと約三十秒、妖獣としては最高峰に位置する九尾の藍様は若干顔を赤くして僕等に向き直った。

「…………げ、玄関から入って下さいと言ったはずですが」

いや、それとこれとは話が違う。

「…………まあいいです。で、その娘は？どうやら、ミコトさんと同じ化け猫のようですが…………」

え、そつちが許す方なの？とツッコむ前に、藍は立ち上がって未だ僕の腕の中にいる少女を見下ろした。またしてもギョウツと身体を寄せてくる少女。

「…………また随分と懐かれていますね。どこで？」

「森の中で罨にかかっているのを助けたんだ。で、足を怪我して動けそうになかったから連れてきた」

「はぁ…………ですがその娘、もう動けると思いますが」

「え？」

「考えてもみて下さい。その娘は私達と同じ妖獣。紫様のような妖怪に比べて肉体的な損傷を受けると復活が厳しい私達ですが、それでも人間とは比べものにならない程の回復力があります。故にその程度の傷、痛みはあれど動けない程ではないかと」

「…………そっか」

よくよく思い返せば、確かに僕に警戒したときにバッチリ動いていた。

なるほど、今回の僕はお節介を焼いただけだな。

「……まあしかし、怪我をしているのも事実。治るまでは私が面倒を見ましよう」

「おお！さすが！」

流れから断られると思ってなかなか言い出せなかったが、藍の方から言ってくれるとは嬉しい誤算。

僕は少女を降ろそうと屈んで、

「……あら」

少女が、僕の着物から手を離さない。

参ったな、そんな表情で見つめられたら……。

「大丈夫。彼女は怖くなんかないよ。しばらくしたら戻ってくるから、それまで我慢だ」

少女の頭に手を乗せて、僕はなるべく優しくそう言った。

そこで能力を使用、少女から生まれた微弱な『安心感』を増やして。

「お休みなさい」

僕が手を離すと、少女の手から力が抜けて、倒れる少女を藍がフワリと受け止めた。

「九尾顔負けの幻術ですね」

「ん。こういう力の使い方が僕の中じゃあ一番理想的だから」

戦いや騙しに使うよりよっぽど有意義だと思う。

だからといって戦いや騙しに使わないわけではないが。

「じゃあ、しばらく頼むね。何かあったら呼んで」

「わかりました。あまり無茶はしないでくださいね」

「はいはい」

さって、お次はどこへ行こうかね。



41：「二匹の化け猫・2」(後書き)

短いですが、区切りということとで……。

投票は今月一杯まで続けますので、どんどんきってください！

42：「気に入らない。けれど」（前書き）

一日寝かして、旨味を増してから投稿……。

嘘です。すみません。

## 42：「気に入らない。けれど」

「あ、あの……」  
「うん？」

ミコトさんがスキマへと消えて行くのを見送ってから数分。私は残っていたりんごを少しずつつ口に入れながらのんびりと過ごしていると、少女が不意に声をかけてきた。今度は嚙下するのに数秒もかからず、すぐに返事を返す。

少女は、ミコトさんが消えていった、今は何も無い空間を見つめながら口を開いた。

「あの方って、もしかして」  
「知っているのか？まあ、確かにミコトさんはあれで強力な妖獣だけれども……」  
「ミコト、ミコトってやっぱり……。あ、あの方が、伝説の化け猫の！？」  
「で、伝説？」

急に騒がしく喋り始める少女の尻尾は、二本ともピンと立っている。それにしても、ミコトさんが伝説？

「詳しく教えてくれないか？ミコトさんが伝説だって？」  
「はい！巷の猫の間では有名なんです！すごく昔から生きていて、最強の化け猫だって……！」  
「ほう……」

まるでずっと憧れていた……いや、事実憧れていたのだろう、少女の尻尾はちぎれんばかりにブンブンと振られている。

わからなくもない、確かにあの方には何か惹かれるモノがあるし、実際とてつもなく強い。もはや妖獣の域を超えているような存在なのだから、同族の彼女にとっては英雄のような存在なのだろう。……まあ、長く生きている割には子供っぽいところもあるのだが。

「あの方が……わあ……」

目を輝かせながら呟く少女。

しかしなんだ、少しばかり嫉妬もしてしまう。

私とて妖獣の中では最高の位として扱われる九尾の狐。それに正直、こんなに可愛い娘にあんなに懐かれて……。いやいや、今はそれよりも。

「私は八雲藍という。見ての通り、九尾の狐の妖獣だ。君は？」

「き、九尾の狐……！あ、えと、橙です」

「橙、か。成る程……」

見れば見るほどに可愛らしい。

なんだか、このまま手放すのは惜しい気さえしてきた。そうだな……。

「なあ、橙」

「はい？」

鼻歌混じりで人里から少し離れた獣道を歩く。はて、メロディーは覚えているのに曲名や歌詞が全く思い出せない。

「……当たり前か」

考えてみればこの身体になる前の曲だ。逆にメロディーを覚えてい  
る方がすごいのか。

「……ん？この場合、未来の曲になるのか？」

「なにがかしら？」

「いや、こつちの話」

「……驚かないのね」

「いるのわかってたし」

横から現れた我が主人こと八雲紫がつまらなそうに呟く。いちいち驚いていたら身が持たないことを理解して欲しい。

「で？今回は何の用？」

「ええ。単刀直入に、一時的に貴方の式を剥がすから、それを言うに」

「式を？またなんで」

「最近、人間と妖怪のバランスが崩れてきてるの。人間の数が増えて、妖怪の勢力が押されてきていてね」

「……？」

首を傾げる。確かに最近人里が賑やかだとは感じていたが、それがなぜ式を剥がすことに繋がる？

「何故、って顔ね」

「いまいち理解が追いつかなくてね」

それもそうね、と紫はスキマから飛び降りた。傘をさしながら僕の隣を歩き始める。

「ようは、妖怪の数を増やしたいのよ。そのために少し力を使うから、貴方に使っている力を戻そうと思ってね」

「僕にそんなに力を使って？」

「いいえ。封印のお陰でほとんど。でも念のために、ね」

「ふうん……」

てくてく歩いていく僕等。

それからどうやって妖怪を増やすのかの説明を聞いたが、どうやらなかなか画期的。

それは、此处、幻想郷の周りに『幻と実体の境界』なるものを創り、幻想郷自体を一つの『世界』としてしまおうというものである。

そして、幻想郷の中を幻の世界、外の世界を実体の世界とすること  
で外で幻となつた妖怪をこちらに呼び込もうということらしい。

「スケールがでかい話だ……。一つの世界を創り出すなんて」

僕の言葉に、フフ、と小さく笑みを零す大妖怪。

それを見て何となく溜息をつくど、僕は右手首のリボンを解いて紫に手渡した。しばらくはスキマが使えなくなるが、致し方ない。

「ありがとう。じゃあ、私はしばらく留守にするわ。藍をよろしく頼むわね」

「はいはい」

飄々とした面持ちでスキマへと消えていく紫を見送り、僕は今日も青い空を見上げた。

と、一息入れる間もなく。

「ミコトさん」

またもスキマが開き、中からは藍と先程の少女が出て来た。今度はなんだ。

「どうしたの？」

「紫様から話は聞きました。その件で私も紫様の手伝いをするので、この娘……橙をしばらくお願いしたいと思ひまして。ほら、橙」

「あう……その、あの」

「橙？そんなに畏まる必要はないんだ。ほら、さっきみたいに」

「はい……」

おい、なんだその仲よさ気な雰囲気は。僕がいなくなってからなにがあった？猫は非常に気になってます。

「あ、兄様！」

なんてくだらないことを考えていると、いきなり彼女、いや橙がそう叫んだ。え、兄様って僕のこと？

「し、しばらくの間、や、よろしくお願ひしましゅ……」

噛み噛みになりながら言う橙。

その可愛らしさに若干ながら心を揺さぶられ、これはいけないと頭

を振る。反則だろう、これは。

「では、よろしくお願いしますね。あ、出来れば橙に戦い方や妖術を教えてあげて下さい」

「え、ちょ」

橙の可愛さにやられている隙に、藍はさっさとスキマに消えていつてしまった。

残されたのは二匹の猫又。

「……これからどうしるよ？」



で、正直なところ明確な目的も無かったので。

「ニャン？」

「ミーミー」

「フミヤー！」

「ニャンニャン……」

普段橙が主体となっていて猫グループに会わせてもらった。ちなみに今のを訳すると、

「この方が？」

「そうみたい」

「感動だー！」

「カッコイイ……」

といった感じ。

どうやらリスペクトされているようだが、そんな覚えは全くないんだけれど……。

「兄様は、猫の間ではとっても有名なんです！伝説なんです！」

総勢十四匹の猫がズラッと一列に並んでいるある種異様な光景を眺めている僕に橙は言う。

はて、僕が伝説？

「伝説ねえ……。特に何をしたわけ訳でもないのに」

「何千年も昔から生きている最強の化け猫で、あの鬼を打ち負かしたという兄様を知らない猫はいません！」

「むう……事実だけど。というか橙、兄様って？」

先程から気になっていたことを橙に聞く。別に悪い気はしないけれど。

すると橙は、少しだけ顔を伏せて小さな声で呟く。

「だ、だめですか……？」

「ぐっ………！」

上目遣いの橙に何かが弾けそうになった。が、そこはなんとか踏み堪える。

全く、感情を操る僕をここまで揺さぶるとは。橙、侮れん。

「いや、別にいいけど」

「本当ですか！？わーい！！」

「おわっ」

なるべくクールに答えた僕に、喜び勇んで飛び付いてくる橙。これは狙っているのか、それとも純真無垢な感情の表れなのか。後者なら嬉しい。だがそれゆえに破壊力が凄まじい。

その後、背中に張り付いて離れない橙をぶら下げながら辺りを歩き回った。

「……ん」

「どうかしましたか？」

「いや、終わったみたいだな、と。そろそろ迎えに「来たわよ」……  
…迅速な行動どうも」

依然として背中に引っ付いたままの橙を剥がし、前方から現れた紫  
に向き直る。と、

「ととっ、どっしたのさ」

スキマからズルリと抜け落ち、そのまま地面に向かって倒れていく

紫を抱き留めた。

僕にしがみつく紫の表情は、いつもの胡散臭い笑みはかけらも存在しない。

「少し力を使い過ぎてね……。でも、計画は成功したから大丈夫よ」「心配の方向が違うだろうに。そんなに無理するくらいなら……」

やらなければよかったのに、と言いかけて、その言葉をすんでのとこで飲み込んだ。

代わりに体勢を入れ替え、上半身を抱えたまま地面に座る。

「寝れば治る？」

「妖力が少なくなっているだけだから、時間が経てばね。大分時間はかかるけど」

「どれくらい？」

「わからないわ。少なくとも、一日二日じゃ無理」

いつもの口調で、けれど若干弱々しく感じさせる声で言う紫。

……ええい、まどろっこしい。

「頼みがあるならさっさとええ。紫らしくない」

「……！」

「僕的能力、忘れたの？隠し事なんかすぐにわかるんだよ。だから、早く」

語尾が情けなく小さくなってしまったが、別に気にしない。

そんな僕を見て、紫はクスリと笑って、右手首を僕に差し出した。そこには、リボンが。

「これを？」

「ええ……。これを付けると、貴方の封印されている妖力が私に流れ込む。けれど」

「そか。じゃあ早速」

「え……。ちよつと」

紫が何かを言う前に、僕はリボンを解いて自分の右手首に結び付けた。

途端に身体が重くなり、

「うん……。！？」

力が抜けて、抱き留めていた紫の身体にのしかかってしまった。いけない、と無理矢理身体を起こし、なんとか持ちこたえる。

「成る程……。これは、また……」

封印とは一味違う、段違いの脱力感。

「貴方も大概、人の話を聞かないのね」

「……。初めて言われたよ、そんなこと」

「そうかしら。少なくとも私は……。いえ、やっぱりやめておくわ」

紫は僕の腕から離れ、何事も無かったかのように立った。紫の身体には元通り、いや、数倍力強くなった妖力が感じられる。

「……。どう？」

「ええ。とてもいい気分で、かなり最悪な気分」

「……。は？」

矛盾してる、とは言わなかった。言えなかった、の方が正しいけれど。男のメンツで馬鹿みたいに仁王立ちしてはいるけれど、気を抜けば今すぐに世界がひっくり返りそう。

「……疑問だわ。妖怪は得てして自分勝手に行動するもの。なのにどうして」

「……………」

鋭い視線が僕に突き刺さる。

橙は、いつしか現れていた藍の陰に隠れていた。

しかし、どうして、か。

「さあね……。でも、妖怪は妖怪らしくなきゃいけないの？」

「？」

「別にいいじゃないか。妖怪だからといって妖怪らしくなきゃいけないなんて、息苦しいじゃん。妖怪らしく、人間らしく……？そうじゃない。人間だろうと妖怪だろうと、『自分らしく』行けば、それでいいんじゃないの？」

やば、本格的に倒れそう。

けれど、せめて喋り終えてからにしよう。じゃなきゃ格好悪い。

「僕は、僕が考える通りに行動しただけ。あんな辛そうな紫見てらんなかったから」

「……………私が、貴方を騙していたとしたら？全部演技だとしたらどうするの」

「そんなのは関係無い。僕が行動した結果がそうだとしても、僕は後悔なんかしないよ」

後悔なんて、何も生み出さない。  
そんなことは、ヘドが出るほど思い知ったから。

「後悔するぐらいなら行動なんかしない。紫だって、そう考えていたから今回行動したんでしょ？」

「……………」

「なんにしろ…………あれ、何の話だったか、ああ、そうだ」

ぐらりと視界が揺らぐ。長話も場所と場合を選ばなきゃいけない。でも、最後に。

「元気になってよかった」

視界が暗転した。意識が薄くなり、僕は倒れていくのを感じながら気を失った。

「……！」

いきなり後ろに倒れていく彼を、私は無意識に抱き留めていた。彼は予想外に軽く、いや、軽すぎるほどの身体に驚く。

「……わからないわね」

彼から流れ込んで来る妖力のおかげで、今の私の身体はとても軽かった。

しかし、それとは裏腹に、腹が立っていた。勿論、彼に対して。

自分勝手に行動する妖怪は、自分の命を投げ出してまで他の妖怪を助けたりなどしない。いや、そんな妖怪もいないわけではないが、彼のようにしょっちゅう命を投げ出すような馬鹿は捜してもなかなか見つからないだろう。

何故、そこまで出来る？

何故、もっと自分のことを考えない？



別に彼が嫌いなわけではない。むしろ、尊敬に値するであろう妖怪だ。

しかし、なんだろう。

彼に向けるにはお門違いな怒りが、私の中にある。

こんな感情は、初めてだ。

彼を想うがあまり、その彼のある意味『自分勝手』な行動に腹が立つ。

相反する二つの感情は、私の中にある何かをグシャグシャにまぜっ返してなお暴れ回る。

気付かない内に感情を操られたのだろうか。そんな考えすら浮かんでしまう。

「……わからないわね」

嘘だけれど。とっくに気がついていて。

そもそも、どうでもいい相手に怒りなんか覚えるはずがない。

良かれ悪しかれ、相手に興味があるからこそそんな感情が生まれるのだ。

そして、私がその『良し』と『悪し』、どちらに属しているのかは。

「行くわよ、藍」

「はい」

私の表情を見てクスリと笑った藍には、ばれてしまっているのだろう。

ああ、全く気に入らない。けれど 悪い気は、しない。

42：「気に入らない。けれど」（後書き）

やっとここまで来た……。

途中経過。

現在、ミコトが巻き返して志妖に並んだ雰囲気！

桃鬼頑張ってる！

### 43：「永遠たる者達」

目が覚めると、目の前には橙がいた。

「……………」

「……………に？」

「……………に！」

「ふみゆう……………」

「みゃあ？」

「ミーン」

「にゃんにー」

「ミャツ」

「……………何をしているの」

悪ふざけしていたら、紫が止めてくれた。よかった、あのままだと永遠に続くところだったよ。

「で、また猫の姿と」

「あら、もう戻れるはずだけれど。貴方が意識を失ってから大分経っているから」

「いや、それはわかってる」

わかっているのだが……………どうにも。

「減ったなあ……………」

「妖力のこと？」

「まあ」

人型に戻り、首の骨を鳴らす。妖力は精々全盛期の三割といったと

ころか。癖でつい右手首を見るが、そこにはあのリボンが存在しない。

「封印は？」

「今の貴方にあの強力な封印をかけたリボンなんかしたら、たちまち消滅してしまうよ？リボンならここ。ちなみに貴方からもらった妖力は、別の場所に保管してあるわ。いざという時の為にね」

膝の上に頭を乗せてゴロゴロしている橙に癒されながら、話を聞いていると、ふと気付く。

髪が伸びていた。腰辺りまで。

「……ねえ、僕どれくらい寝てたの？」

「ざっと三十年ぐらしかしらね」

……参った、生まれてこのかた、三十年も熟睡していたのは初だ。

というか三十年寝てこれしか妖力が回復しないととなると、全開までは何百年かかるのか。気が滅入るとはこのことだ。

妖力だけなら紫には勿論、藍にも負けている。さすがに橙よりは多いけれど。橙にも負けていたらもう三百年ぐらいふて寝に入るところだ。

「ふう……。僕が寝てる間に何かあった？」

「そうね……。まず、予定通り妖怪の数が増えて均衡が保たれたわ。これは貴方のおかげね。ありがとう」

こちらを向かずにそっけなく言う紫。

何か気に入らないことでもあったのだろうか、と首を傾げると、藍がこっそり近付いてきて、

「正直じゃないですねえ」

なんて、僕に聞こえるように呟いていた。  
なんのこつちや。

「私からもひとつ。橙が、私の式神になりました」

「へえ、橙が」

「はい！ミコトさんのお傍にいられると思って！」

「そ、そか。まあ頑張って」

目をキラキラさせて言う橙と、それをホワホワした顔で見つめる藍。  
橙の可愛さにやられたな。気持ちはわからなくてもない。

「本当に大丈夫？ただでさえ妖怪の数が増えているのに……」

「心配なんて珍しい。ま、大丈夫でしょう。元々僕は妖力に頼った  
戦い方じゃ無かったから。少し危険な修行気分さ」

「……まあいいわ。何かあったら呼びなさいな。暇だったら行って  
あげる」

スキマから飛び降り、そんな会話を交わしてから僕はスキマに背中  
を向けた。

が、なかなか紫の気配が消えないので何事かと振り返ると、

「っ！」

心配そうにこちらを眺める紫の姿があり、しかしすぐにスキマが閉じて気配が消えた。

……少し嬉しい。

「おお……なんだこれは」

遙か昔を思い出しながら、身体能力のみで高速移動（瞬間時速百キロメートルぐらい）を続けていると、なんとも巨大な竹林が目の前に現れた。

そういえば筍食べたいなあ、とか思いながら中へ突撃。が、すぐに立ち止まり考える。

「なんだかすぐに迷いそうだ……。ここは」

目を閉じて能力を展開。かなり範囲は狭くなったが、それでも半径五十メートルは捕捉できる。

その範囲内で命を探ると、小さな命がぼつぼつと感じられた。近くにいたひとつの命に近付き、正体を確認。

「……兎さんか。筈かじってるよ」

カリカリと音を立てて筈をかじっている兎さんを発見。抱き上げてこちらを向かせると、真っ赤な目がこちらを見つめていた。可愛い。

兎さんを降ろし、しばらく兎さんを辿って歩き続ける。

すると、二十七匹目を抱き上げたところで僕の耳がピクリと動いた。これは、人間の命だ。

「こんなところに、人間か」

僕は跳び、三角跳びでその命に向かうことにした。歩くの疲れたし。

「これはまた……立派なお屋敷だこと」

目の前に建つ屋敷に目を奪われ、僕はしばらくその場に立ち尽くした。

こんな竹林の奥深くに屋敷とは、想像もしなかった。しかも全く古びた様子が見えない。となれば、誰かが住んでいると言えるだろう。

「さてさて、どんな人間が住んでいるのか見てみましょうかね」



耳と尻尾、それに爪を隠して屋敷に向かって一歩……踏み出せ、ない。  
何事かと下を見ると、大量の兎が僕の足を膝まで覆っていた。  
モコモコハザード、ここにあり。  
片っ端から引っぺがして、遊び心で綺麗に一列に並べてから先に進んだ。

「ごめんくださいなあっ!!」

先に言っておこう。別に元気いっぱいおじゃましますの勢いで突撃したわけではない。  
襖を開けた瞬間、僕の眼前に一本の矢が迫っていたのを全力で回避しただけである。  
パラパラと髪が舞い散るのを視界の端で捉えながら、僕は矢を放った犯人を見る。

「……永琳!？」

「……! 貴方は……ミコトじゃない。驚かせないで」  
「いや、こっちのセリフなんだけど」

「いや、本当に久しぶりだ」

「そうね……。それにしても貴方、随分と弱体化してるみたいだけ  
ど」

諸事情があつてね、と僕はお茶を啜った。

ここ 永遠亭に暮らしているという永琳。どうして幻想郷にいる  
のかは面倒なので聞かなかったが、どうやらかぐや姫もここで暮ら  
している模様。

「で、そのかぐや姫は？」

「寝てるわ」

「さいですか……」

今は真昼間のはずなんだけれど……。

僕はもう一度お茶を啜り、依然として身体に纏わり付く兎と戦いを  
始めた。どうしてかこの永遠亭、兎の数が半端じゃない。永琳が言  
うには普通の兎よりは賢く、それなりに言うことを聞からしいので  
使っているらしいが……ええい、服の中に入ろうとするな。

そんな平和な時間を過ごしていると、不意に嫌な悪寒を感じた。

「永琳、これは」

「……また来たわね。よくあきないこと」

その会話の直後、外で爆音が響いた。纏わり付いていた鬼が一目散に逃げ、僕と永琳は立ち上がって襖を開く。

そこには。

「毎日毎日、本当にしつこいわね？」

「は、なら逃げるがいいさ。別にかまわないぞ？」

「……冗談」

焼け焦げた大地に立つかぐや姫と、それを見下ろす、空に浮かんだ白髪赤眼の女の姿。

いやはや、これはどう反応すればいいのやら。

43：「永遠たる者達」(後書き)

勉強を

しなきゃいけない

でもしない

ただの我が儘。

#### 44：「変わらなかった答」

「……あいつ」

僕は、空に浮かぶ彼女の姿から目を離すことが出来ずにいた。彼女の名は、藤原妹紅。かつて共に旅をした、僕にとってはとても大切な人間の一人。妹紅の背後に沢山の炎が浮かび、

「ぐっ……」

その熱気に、思わず僕は自らの妖力を解き放っていた。隠していた猫又としてのパーツが現れ、そんな僕に妹紅が視線を向ける。

「……!!」

目を見開いて、妹紅は炎を消して地面に降り立った。ゆっくりと僕に向かって近付いてくる妹紅に、かぐや姫は、

「私との戦いは」

「黙ってるお姫様。私はコイツに用があるんだ」

眼前に現れた炎に、かぐや姫は齒を食いしばって飛びのく。その間にも、妹紅は僕に着々と近付いてくる。

僕はまぶたを下ろして思い返す。

かつて、僕は妹紅に父親殺しであるかもしれないことを告げた。果たして、あれから妹紅はどんな答を出したのか。

「ふむ」

トン、と縁側から外へと飛び降りる。

そこで目を開き、すぐそこにいた妹紅と目を合わせた。赤色が僕を射ぬく。

「ミコトだな？」

「いかにも。早速だが、答は出たのかな？」

「ふん……。昔から変わらない」

「っ!？」

妹紅が手をかざしたかと思うと、そこから火玉が顔面に飛んできた。咄嗟に顔をそらすも、その熱風だけでも皮膚が焦げる。

それに驚いた瞬間、妹紅は僕を担ぎ上げていた。

「え、ちよっ」

「コイツは借りていくぞ！文句無いな！」

言いながら宙に浮かび、そのまま妹紅は飛んだ。

いや、かぐや姫に許可取る前に本人に許可取れよ。

というかさつきまでのシリアスな雰囲気はなんだったんだ？

なんて考えている間にも、妹紅はどんどん飛んでいく。その速さは昔とは比べものにならない。

そんな風に妹紅の成長を風と共に感じていると、不意にスピードが緩まり、少しずつ下降を始めた。どうやら目的地に着いたらしい。

「っつ」

しっかりと着地し、辺りを見回す。どうやらまだ竹林の中のようだ

が、ここにはぽつんと一軒家が建っていた。  
その一軒家を二秒程眺め、妹紅の存在を思い出し振り返る、と。

「うわっと」

妹紅が、僕に飛び付いてきていた。背中に回された腕が、ギョツと僕を抱きしめる。

「妹紅……妹紅？」

そのまま着物に顔を埋めて顔を上げない妹紅。  
一体どうしたのか、と首を傾げ

「……………!!」

微かに、その身体が震えていることに気が付いた。流れ込んで来るのは、妹紅の感情。

……………ああ、そういついことか。

「……………妹紅」

「っ……………はい」

「……………ただいま」

「っ!」

頭の後ろに手を回し、優しく、けれど力一杯抱き寄せる。

妹紅の答は、あの時からずっと変わっていなかった。

「本当に、馬鹿だなあ」

妹紅も、僕も。



44：「変わらなかった答」(後書き)

妹紅すげえいい娘になった……。。

## 45：「モコモコ」

「落ち着いた？」

「はい。……けどまだ、このままで……」

「どうぞ、気が済むまで」

場所を外から一軒家 妹紅の家らしい の中に移し、壁に腰掛けて妹紅の身体を抱き寄せる。長い髪に指を通すと、妹紅も僕の長く伸びた髪を指で梳いた。

「伸びましたね」

「ここ三十年程寝てたから」

「なんですかそれ」

「僕もよくわからん」

ゆったりとした、幸せな時間。妹紅の身体の重みが、今はなにより心地好い。

だが、一つだけ聞かなくては。

「妹紅。本当のところ、どうなんだ？」

何が聞きたいのかわかったのだろう、妹紅の身体がほんの少し強張る。

妹紅は少し間を置いて、ささやくように喋り始めた。

「……………私は、ミコトさんを恨む気にはなれません。例え貴方が父を殺した張本人だとしても、ミコトさんは私にとってはかけがえの無い存在。……それに、父もあれで藤原の男。いざという時の覚

悟もあつたはず」

「けど……………」

「ミコトさん。正直な話、これは理屈ではなく感情の話。理屈では確かに憎しみを抱いてもおかしくない。けれど、感情では貴方を憎むことができません」

「その感情が、僕に操られていたらどうする？言いたくはないけど、そんなのは簡単なんだよ？」

「言いたくはないが、ってことはやってはいないんでしょう？なめないで下さい、ミコトさんが嘘をついたらすぐにわかるんですから」

それに、と妹紅は続ける。

「貴方は、もう充分過ぎる程に償いをしてくれた。本当に父を殺したかどうかわからないのに、です。私はそれで充分」

肩に頭を寄せ、愛しげに僕の髪を触る妹紅。

参ったな……。そんなこと言われたら、もう何も言えないじゃないか。

「じゃあ、どうする？お前、あのかぐや姫と何回も戦っていたようにだけ」

「あれはほとんど遊び。互いに全力で戦っても死ぬことが無いから……。それに、体裁もありますから」

「体裁……………」

「アイツと戦い続けることで、私はまだ父の娘でいられる気がするんです……。それに、アイツずっとあの屋敷に籠ってるんですよ？運動させてやらないと」

クスクスと笑いながら言う妹紅。それを見て思う。

ああ、本当に良い娘に育ってくれた、と。

「さ、この話は終わりにしましょう。その代わり、ミコトさんの話をしてください」

身体を離し、笑顔で言う妹紅。

その姿が、僕にはとても輝いて見えたのは、錯覚ではないだろう。

で、先程の空気から一変して朗らかな雰囲気の中、僕と妹紅は椅子に座り、丸い机を挟んで向かい合っていた。

「そっぴや妹紅、あの言葉遣いは？」

「え？あ、あれは……」

あのかぐや姫に向けていた言葉遣い。あれは確か、他人と接する時に使っていたものだ。

不思議と違和感が無かったので今まで忘れていたが、ついなので聞くことにする。

「……な、なめられたらいけないと思って……」

「へ？」

「私、見た目がこれだから、ミコトさんと別れてから妖怪に襲われることが多かったです。そんな時に今みたいな話し方してたら、

向こうが調子に乗ってくるのがあって……」

顔を赤くして言う妹紅。

ははあ、それで思い付いたのがあれだったのか。納得。

「……ん？てことは、僕にだけかな、その話し方は」

「え？あ、はい。なんでしょうか、ミコトさんにはこの話し方しかできないというか……」

ちよっぴり優越感。

「ミコトさんこそ、その羽は？それに、随分と、こう、弱っているというか」

「む……。この羽は、天狗の頭の天魔のもの。妖力に関しては……、まあいろいろとあってね。妹紅が僕に気付いた時があったろう？あれが限界なのさ」

皿にある筍の煮付け的な物をカリカリと音を立ててかじる。美味い。

「は、はあ……。ですが、今なら私でも勝てそう……？」

「恐怖のどん底、見てみたい？」

「じ、冗談ですよ！けど……そうですね。あの薬師なら、もしかして……」

「妹紅？」

筍を咀嚼していると、不意に妹紅が立ち上がる。で、まだ筍を飲み込んでいない僕を後ろから抱え、

「ついです。行きますよ」

「どっへ」

飲み込んでそう言った瞬間、開いている窓から飛び出していた。随分と行動的になったもんだ。風圧で涙が出ちゃう。僕、実は空飛ぶこと出来ないから結構怖いんだ。

「あら、お帰りなさい」  
「ただいま」

上空で妹紅に離され、でも予想はしていたので軽やかに着地。本日二回目の永遠亭である。どうやら縁側でのんびりしていたらしい永琳に迎えられ、僕はちらりと空を見る。

「……またな」

妹紅はそう呟いて、竹林へと消えていく。案外あの言葉遣いも新鮮だ。というか、何のついでだ。

「で、何の用？」  
「ああ。ちよつとね」

相変わらずマイペースな永琳に、僕は妖力のことを相談することにした。

「つまりは、妖力を手っ取り早く元に戻したいと」

「まあ」

永遠亭のとある一室、沢山の引き出しがある部屋で永琳は一枚の紙を前にぶつぶつと呟いている。

永琳の能力は昔から知っている。

確か、『あらゆる薬を作る程度の能力』だったか。

確かに、永琳なら僕の減った妖力を戻す薬を作れるかもしれない。

「そうね……。出来ないことも無いけれど……。一過性のものになるわ」

「詳しく」

「作る前から詳しく語れるわけが無いでしょう。けどまあ、少しの間なら本来の妖力にはなるでしょうね」

「あ、だったらいいよ」

元々高望みはしていなかったし、いざという時の切り札的なものになればいい。

そういう意味なら充分だ。

「わかったわ。でもその代わり、貴方の血液と身体の一部……髪の毛でいいわ。少し頂くわよ」

その後、念のため、と若干多めに血液を取られ、髪型はセミロングになった。と思っただけで伸びて今度は足元まで伸びた。なんのこっちゃ。

で、薬が出来るまで少しかかると言うので。

「モコモコ〜モコモコ〜モ〜コ妹紅〜」

縁側で総勢三十二匹の兎と戯れることにした。ここまできると僕が兎で遊んでいるのか、兎が僕で遊んでいるのかわからなくなってくる。端から見れば襲われているようにも見えるかもしれない。

実際、動きを止めた瞬間に僕は兎の山に埋まる。まさにモコモコハザード。

「な、なにこのウサギの山っ!?!」

「モ〜コモ、ん?」

突然聞こえてきた甲高い叫び声。

なんだ、事件か!いや、この白い塊に驚いているのは百も承知だが。



「な、な、」

「いや、驚かせたみた、うっ、すいませ、っぷ」

ええい、空気を読めモコモコが！

なんとか顔面にはりついた兎を剥がし、微弱ながらも妖力解放。一目散に逃げ、竹の陰に隠れてこちらを伺う三十七匹のモコモコ。ん？増えてない？

「……まあいいや。すいません、驚かせたみたいで」

五匹の誤差は無かったことにして、目の前で尻餅をついている人……いや、人じゃあないな。

頭からウサ耳を生やしている人間はいない。

近づいて、彼女の顔を覗き込む。ほお、瞳も赤い……。

「だ、駄目ッ！」

「うん……！？」

彼女の瞳を見た瞬間、心臓が跳ねる。

「……、これは……！」

この感情は知っている。これは……！！

「くっ！」

即座に能力を発動、無理矢理に感情を押さえ込む。寸前に平常心に戻り、僕は一つ息を吐いた。

「あ、あれ？」

「僕はそう簡単にはいかないよ。……まあ、少し危なかったけど」「ミコト、薬が出来たわよ……あら、貴女は」

「あ、あなた何者なの……！？私の目を見ても大丈夫だなんて！」「そうでしょうねえ。なんたって感情を操る規格外の妖獣だもの」「……………へ？」

薬の入った小さな箱片手に、永琳は事もなげに言う。

対してウサ耳の彼女は、その言葉を聞いてほうけた声を出していた。

「ミコト」

「おっと」

「一度の服用で約半刻、貴方は本来の妖力に戻ることが出来る。ただ、連続で服用したらどうなるかはわからないわ。覚えておいて」

「ありがとう。じゃ」

「あ、ちよっと待っ……………」

なんだかややこしくなってきたので、僕はその場から跳んだ。さて、次はどこへ行くこうか。

「あの方は、一体……………」

「さあね。彼のことは、私も良くわからないわ」

「っと、ここは……」

ありつただけの妖力を足に込め、道のりなんかめちゃくちゃに進んでいると。

そこには、沢山の向日葵がありました。

「ちょうどいいや。いい眺めだし、ここらで休憩しよう」

もう昼過ぎもいいところ、夕方に差し掛かろうとしている時間。

僕は小高い丘に座り込み、沢山の太陽を眺める。

「こんな場所があったのか……。知らなかった」

「でも、いい眺めでしょう？」

「まあねえ。知らなかった今までが少し損に思えるぐらいに」

「あら、お上手なこと」

「いやいや、本当に。それで、ひとつ相談があるんだけど」

「なにかしら」

「逃げさせて頂いても？」

「断るわ」

瞬間、僕は全力でその場からエスケープ。丘が吹き飛んだその場所には、優雅な笑顔の女性の姿。

「素敵な笑顔だ……。逃げ出したくなる程に」

「もっと近くで見てもいいのよ？こんな風になっ！」

「っ！」

いきなり目の前に現れ、額がくっつきそうな距離まで彼女の顔が近付いた。

速い……！

……いや、違う。

「僕が遅いのか」

次の瞬間、僕の身体は彼女の一撃で吹き飛んでいた。

45：「モロモロ」(後書き)

題名に意味はあまり無い。

## 46：「一陣の風に舞い散る花びら」

「伝説の化け猫も、所詮はこの程度かしら」

傘を一振り、私は呆れてそう呟いていた。

前々から噂は聞いていた。途方もなく長い時間を生きた伝説の妖獣。その妖獣とは思えない妖力と類をみない圧倒的速さで、鬼すら打ち倒すことが出来たと。

もしかしたら、この私よりも強いのかも知れない。そう考えていた矢先に現れた彼は、

「期待ハズレ……。伝説なんてそんなものかしらね」

今、遙か向こうの森の中に吹き飛んでいった。

言うほど速くは無かったし、もしかしたら伝説自体眉唾、いや、まずアイツは偽物だったのかも。そう考えれば納得出来るし、何よりまだ楽しみがあるということ。

私はそう思うことにして、踵を返して家に戻ろうとした、が。

「……何か用かしら」

「いいえ？ただ、まだ終わりではないのではないかと思ってね」

いつの間にかそこに存在していた大妖怪の姿。私は舌打ちをして彼女に向かいあった。

戦ってもいいが、コイツの能力は敵に回すと厄介だからだ。

「もう終わったわよ。あんな妖力じゃ、私の一撃には耐えられない」

そう。あの程度の妖力では、どう足掻こうと耐えられない。死なな

いにしても、すぐに立ち上がることは出来ないだろう。  
だが、目の前のコイツは私の言葉を聞いて、あるうことが笑っていた。

「何よ。何か間違っているかしら」

「フフフツ……いいえ、『知らない』って幸せね」

クスクスと笑う。

さすがに少しいらついた私は、傘をコイツの喉元に突き出そうとして、

「っ!!!?!」

瞬間、全身に鳥肌が立っていた。

なに、この強大な妖力は!?

思わず振り向いたその先には、先程あの化け猫を吹き飛ばした森の姿。

まさか。

「精々頑張りなさいな。言っておくけど、貴女の想像以上に恐ろしいわよ?……敵に回したら、ね」

「くっ!」

言いようのない恐怖感に駆られながらも、私は背後に傘を突き出す。しかしすでに、八雲紫の姿は無かった。

「……………面白いじゃない!」

ギリギリと、歯が砕けそうになるほどに食いしげな。

認めない。

この私が、他の妖怪に対して、

××しているなんて　　。



「……やっってくれるじゃんか、風見幽香」

木に寄り掛かるようにして立ち上がり、口に溜まった赤色を吐き捨てる。

話には聞いていた。

風見幽香。

その圧倒的な妖力と身体能力で、邪魔が入れば人間妖怪関係無く滅ぼしにかかるという恐怖の存在。

「あの様子じゃあ、戦いに恐怖を覚えたことが無いみたいだな」

確かに身体能力は凄まじい。油断していたとはいえ、僕が一瞬見失う程のスピード。

まあ、たとえ見えていたとしても、今の僕では身体の方が追い付いてこなかっただろうが。

「それにしても……」

込み上げてくる鉄の味を飲み込み、遙か向こうにいる風見幽香を睨みつける。

いきなり襲われ、さらには一撃食らって黙っている程僕は優しくはない。相手がそれなりの実力者なら、尚更だ。

「試しもかねて、早速使わせてもらっよ、永琳」

着物の内側に忍ばせていた小さな箱を取り出し、開く。  
中には灰色の小さな丸薬が、ミッシリ。

「……………今はいいや」

ツッコミたくなかったが、グツと堪えて、そのうちの一粒をつまんで口にほうり込む。

奥歯でかみ砕き、そのまま嚥下。

喉元を何か熱いものが過ぎていき、胸辺りでさらに熱さを増すそれ。

パチン！と何かが弾けた音が、頭の中で響いて。

「……………懐かしいねえ」

身体に満ち溢れる妖力を惜し気も無く解放。

僕は、狡猾な笑みを浮かべて森を飛び出した。

「なっ……………」

風見幽香が驚きの声を上げた時には、僕は既に懐に飛び込んでいた。額がぶつかりそうになるギリギリの距離で、僕は言う。

「怖いのか？」

「っ…！」

驚きとも怒りとも取れる表情で拳を突き出す風見幽香。

だが、遅い。

何も無い場所に拳を突き出している彼女の背後、肩に顔を乗せて、もう一度。

「怖いんだろう?」

ギリ、と歯を食いしばる音。その瞬間には、僕はもうそこにはいない。

半ば瞬間移動じみた速さに、風見幽香は歯噛みしている。

これは初速がほぼ最高速に近い僕だからこそ出来る技。妖力で身体を強化しないと、止まる瞬間に脚がイカれてしまうので今しか使えないのが少し残念だが。

「くっ……！まだ終わりじゃないわ！」

「終わりだよ。お前が僕に恐怖した時点で、ね」

右手を突き出し、風見幽香の感情を掴み取る。

すでに恐怖に染まり掛かっている感情を、僕は。

「墮ちろ」

「……………っ！」

思い切り、右に引く。

瞬間崩れ落ちそうになる風見幽香だが、そこはプライドが許さないのか倒れはしなかった。

だが、まだ終わらない。

今の僕は、ちよつとばかり残虐なんで。

「これ、お前の前にも食らった妖怪がいたんだけどね」

「……………!?!」

額をつけ、目を閉じる。

「大丈夫。ほんの二、三秒で千回程死ぬただだから」

「……なっ」

「じゃあ　良い夢を」

「……っは!?!」

「あ、目が覚めた?」

僕の膝の上で、額に汗をじっとりとかいた風見幽香、幽香でいいかもう。

幽香が、目をパチパチとさせている。

うん、まあ当然の反応。

「わ、私」

「良い夢見れた?ていうか、随分酷かったねえ、夢の中の僕」

何が起きたのかわからないのか、幽香は起き上がりもせず、いや、起き上がれないのかもしれないが、下からじっと僕を見上げている。こうしていればかなり綺麗な人なのに。妖怪だけど。

ちなみに今は夕方を通り越して夜寸前。

「……何をしたの？」

「ちょっとばかし夢を見てもらっただけ。どこから夢かは自分で考えてみて下さいな」

「じ、じゃあ、あれは全部……」

「どこから言ってるかはわからないけど、後半はだいたい夢だね。ちなみに、細工して君の感情が直接夢の内容に影響するようにしたから、あの僕は君が思い浮かべた僕そのものだ」

実は能力と幻術の応用なので純粋な夢とは言えないが。ちょっとセリフも弄ったし。

「どうして殺さないの？」

「理由が無いから。確かに少しいらついたりはしたけど、その分はお返ししたからね。それに、寝顔が綺麗でしたから」

「……おかしな妖獣」

「名前はミコト」

「知ってるわ。ついでだから、私を家まで送ってくれないかしら。お茶ぐらい出すわよ」

やはり起き上がることが出来なかったらしい。

僕は幽香を抱き抱え、幽香の指差す方向へと歩き始めた。

首を垂れた向日葵。

それがまるで今の幽香のように見えて、不思議な気持ちになったのは秘密。

46：「一陣の風に舞い散る花びら」（後書き）

勉強しなきゃいけないのに。

あ、試験明日だ。

もう関係ねえや、ハハハハハッ！

ちなみに、現在人気投票は志妖がトップ！

むう、やはりあの人畜無害な性格が……？

#### 47：〔副作用の副作用〕

「……ん」

ゆっくりと目を開き、朝日の光が目に入るのを感じてさらに瞼の動きを緩める。

まだこの癖は健在で、しかし今回は役に立ったようだ。いきなり目を開いていたらしばらく目が利かなくなっていたかもしれない。

……そういえば、いつ僕は眠りについたらのдарう。

「………ん？」

ふと感じた、自分の身体への違和感。まるで誰かに抱き着かれているような。

ん？抱き着かれて？

「………っ！」

瞬間、一気に目が覚めた。

脇から通され、しっかりと僕の身体を捕まえている誰かの両腕。

背後から感じる柔らかな感触と、フワリとした良い香り。

首だけを動かし、なんとか後ろを見てみれば、見えたのは鮮やかな緑色の髪だった。

「………！？」

え、なんで？僕は一体何をしてこんな状態になった？

思い出せ、昨日、僕は何をしていた！？



「あ

………思い出した。

僕は昨日、幽香をこの家まで連れてきて。

「よいしょ

「………まるで私が重たかった、みたいな掛け声ね」

「いや………そんな訳じゃないけど………なんか、こつ

「……？貴方、顔色が悪いわよ？」

幽香をベッドに降ろした僕は、妙なけだるさ、と言うよりかは、具合の悪さを感じていた。

つい先程まではただひたすらに眠たかっただけなのだが……これは。

「まさか、薬の……？」

そつだ。

永琳は『連続服用してはいけない』とは言っていたが、僕はそれだけを聞いてすぐに移動してしまったために細かい作用については聞いていない。

よくよく考えてみれば、いや考えずとも、これだけ強力な薬だ。副作用があつてもおかしくはない。もとより無理を言つて短時間で作つてもらつたものだし。

「あ……れ……」

考えていると、不意に身体の力が抜けて、

「……なかなか大胆ね、貴方」

「ち、違……！」

僕は、幽香に覆いかぶさるように倒れてしまっていた。

すぐに起き上がるうとするも、全く身体に力が入らずに動くことすらできない。

それどころか。

「あ、れ」

「……………」

僕の意志とは関係無しに能力が発動していた。しかも、何の感情を操ろうとしているのか、自分でもわからない。

このままでは、直に触れている幽香にこの得体の知れない感情が流れ込んでしまう。

「幽香、離れ、て？」

「……そ、そんなことを言われてもね……。こんな身体にしたのは誰だったかしら？」

駄目だ、すでに幽香がなんだかおかしい。

しかも、そろそろ意識が限界に……。

「う……………」

「ミ、ミコト？しっかりしなさい！このままじゃ、私……………」

「……………」

自分の事ながら、開いた口が塞がらなかった。

まさか副作用らしきもので能力が暴走を起こすとは。

もしかしたら、あの状態になる前の強烈な眠気は、警告のようなものだったのかもしれない。

いや、そんな考察は後でいい。今は、この状況をどうするかを考えなければ。

「……………」とりあえず、抜け出して……………」

副作用はとっくに治まり身体も動くようなので、まずは幽香の抱擁から脱出することを試みることにする。

「……………くっ、んっ……………」

が、抜け出そうとした瞬間に腕の力が強まり、さらに身体が密着。事態悪化である。

というかもとより力では敵わないのを忘れていた。愚策にも程がある。

「くそ……もう策が無くなってしまった」

自分の頭の悪さに苦惱。

しかし、背中に感じる柔らかな感触のせいで頭が回らないのも事実である。

二時間程経つただろうか、抵抗を諦め、男ってなんて馬鹿なんだろう、とか考えていると、不意に回された腕の力が緩まっていた。ここぞとばかりに僕は脱出、ベッドの隅に転がりながらエスケープ。

しようとしたのだが。

「どこへ行くの？」

「ふにゃっ!?!」

身体が幽香に向いた瞬間、僕は凄まじい力で幽香に捕まっていた。思わず猫ボイスが出てしまい、しかしそれで降声を出すことは叶わない。

なぜなら。

「もうしばらくはこうしていたいのよ。逃げることは許さないわよ？ミコト」

「？！」

どれだけ叫んでもくぐもった声しか出せない。僕は、幽香の胸に顔を押し付けられているのだから。

同時に流れ込んでくる、幽香の強い感情。

瞬間僕は、昨日幽香に流し込んだ感情が何なのかを理解した。

それは、愛情、情欲、それらを引くくるめた恋愛感情だった。

……………なんてこったい。

47：「副作用の副作用」(後書き)

やってしまったとは思う。

後悔はして……いない。

#### 48：「人里の守護者」

「……だから、今幽香が抱いている感情はね」

「関係無いわ。貴方にその『感情を操る程度の能力』とやらでこの感情が生まれたんだとしても、それが今まで続くわけじゃない。とつくに貴方の能力は切れているし、私は貴方のことを気に入ったのも事実よ？」

「む……でも」

「何かしら」

テーブルを挟んで幽香と向かい合う僕は、思わず俯いてしまう。その原因は、今現在持っている僕の妖力にあった。

明らかに、どうかんがえても、何度確認しても、増えている。

割合で言えば、全盛期の半分、五割まで増えているのだ。つまり、その意味するところ、僕は、幽香と。

「うわああ！何をしているんだ僕はあ！！」

「い、いきなりどうしたの」

自分の考えに堪らなくなつて、思わず立ち上がって叫ぶ。あ、椅子倒れた。

「ゴメン、現実から一瞬逃げたくなった」

「何を言っているのかわからないけど……。ミコト、貴方何か言うことは？」

「へ？」

「貴方の妖力を少しばかり増やしてあげた私に、何か言うことはな



いのかしら」

幽香の言葉に、僕は机に手をついたまま固まった。

え、それってそんなにはつきり言っていていいことなの？

もしかしたら僕の想像とは違う方法だったのかもしれない、と思った時、幽香は立ち上がり僕の身体を抱き寄せた。

「え？え？」

「もしかして、覚えていないの？なら、もう一度だけ実践ね」

「あ、ちよ」

逃げられない。

そんな事を考えた時には、僕の唇は、幽香によって奪われていた。

「……なるほど、こういうことでしたか」  
「ええ。そういうこと」

膝と手をついて床と見つめ合う僕に対し、幽香はツヤツヤした表情で口を拭いていた。

若干ながらまたしても増えた妖力を感じながら、気持ち切り替えて立ち上がる。

口の中には、幽香のものであろう血の味が残っている。

「まあ、予想外というか、予想通りだったというか……」

「あら、もしかしてこれいじ」

「勘弁して下さい。というかそろそろ行かせていただきます」

長くここに留まる理由も無いし。

いろいろ思うところもあるが、もっといろいろと見て回りたい。人里とか。

「引き留めはしないわ。また戦いましょう」

「ん。まあ、なんだ……一応、ありがとう」

「フフ、どういたしまして」

幽香の家から出て、僕は増えた妖力を脚に込めて跳躍。

なんとも言えない感情を無下に消すことも出来ず、風を切って走り続けた。

「あそこが人里、かな？」

背が高い木のとっぺんに立ち、向こうを眺めながら呟く。

とりあえずは妖気を抑え、猫の姿に変化。まだ離れている人里に向かい、ぺたぺた歩いて向かうことにする。特に意味は無いが、猫の視点というのはこれでなかなか新鮮なものなのだ。

三十分程歩いただろうか、里の入口に到着。門番らしき男が二人程立っているが、今は猫の姿なので気にせずスルー。むしろ門番は僕の姿を見て和んでいたように思えた。うん、平和。

なかなか賑わっている様子の人里に感嘆しながら、いち猫としてひたすらに歩き続けていると、ひとつの建物の前で人間の子供達が集まっているのを発見。子供達が元気に遊んでいるのを見るとこちらもなんだか優しい気分になる。歳とつたな僕。

「ほらー！休み時間は終わりだ、勉強を始めるぞ！」  
「「「「はーい！」「」「」」」」

建物から顔を出した女性の一声で、あくまでも元気に子供達は中に入っていく。

勉強、ですと？

これに興味を惹かれてしまった僕は、当然ながらその建物に足を運ぶのだった。

開かれている窓に跳び移り中の様子を見ることにした僕。

そこでは教壇らしき場所に立っている先程の女性が、教科書らしき本を片手に沢山の子供達に話をしているところだった。

なんといったか、確か寺子屋だったかな。多分そんな場所なんだろうなあ、なんて臆げな記憶を辿って考えていると、先生であるう女性が一瞬こちらを見て、表情には出なかったものの一瞬驚きの感情が読み取れた。

なんだい、灰色の猫はそんなに珍しいかい？

そんなことを思いながら尻尾を一振り。ついでに一鳴き。

すると女性は視線を僕から外し、何事も無かったかのように授業を

再開した。

時は過ぎて、夜。

屋根の上に座りながら尻尾を振る。

「満月か。綺麗だねえ」

空を見上げ、なんとなく桃鬼風味に呟いてみる。ちなみに姿は猫のまま。

夜の闇の中、灰色に光る眼に言葉を喋る猫が一匹。気味悪いことこの上ない。

しかし、先程から僕の耳がしきりに動いているが、僕になにか用でもあるのだろうか？

まあ、仕掛けてきたら応戦すればいいだけ

「そのの妖獣。人里に何の用だ」  
「にゃ……」

下から聞こえてきた女性の声。気配は明らかに人間のものではない。猫の姿のまま、光る眼で声の主を見下ろす。そこには、寺子屋にいたあの女性の姿があった。

ただ、頭にあんな角は無かったように思うけど。

「答える。場合によってはお前を」

「はいはい、今行きますよって」

大分ピリピリとしているようなので、下手に逆らわずに屋根から飛び降りる。着地と同時に変化を解き、妖力を臨戦態勢程度に解放。量で言えば半分、全盛期の二・五割程。ややこしい。

405

「別に何かを起こすつもりは無かったんだけどね……」

「疑わしいな」

「じゃあなんだい。期待通りに子供の一人でもさらっていつか？」

「……………!」

「冗談だよ。何もする気は、っと!」

瞬間、鼻先を掠めていく相手の拳。

思わず向こうを睨みつけ、

「危ないな……本当にさらっていつか」

「さらえるものならさらってみるがいい。ああ、さらえるのなら、  
だがな」

「何？」

向こうがそう言ったその時、信じられないことが起こっていた。人里が、きれいさっぱりその姿を消していたのだ。反射的に能力を使用するも、なんの命も感じられなかった。ただひとつ、僕の目の前にいる彼女を除いて。

「……何者だ、あんた」

「これから消える貴様に教えるような名は持ち合わせていない！」  
「っ、なんでこうなるかな？」

確かに挑発はしたが、あれは向こうも悪い。だってなにもする気は無いと言っているのに殴り掛かってくるし。

そりゃあ確かに人里に妖怪が入ってくれば警戒はするだろうけど、友好的な妖怪もいることを理解して欲しいところだ。

地面を蹴り、明らかに人外のスピードとパワーで殴り掛かってくる相手。

「……正当防衛だ。文句はないよね」  
「なっ！」

一瞬だけ妖力を全開、それを脚から地面にたたき付けて、僕は空へ舞い上がった。

向こうは僕を見失っているようで、僕はそれを見て彼女に向けた手を握り締める。

「どうぞせだ、試させてもらっつよっ」

そしてその手を、思い切り『手前に引き抜いた』。

ぐらりと彼女の身体が揺らぎ、先に着地した僕はその身体を支えた。

「うまくいった。これなら、変な後遺症も残らないし、人間にも使えるな」

「……な、にを……？」

「おや、意識があるか。さすがにタフだ」

いきなり姿を現した人里を見て、僕は彼女の額に自分の額をつけた。

「んっ……」

先程『引き抜いた』感情を彼女に返し、一息ついた。

別にいつものように恐怖一色に染め上げて気絶させてもよかったのだが、あれはどこか後味が悪い。本気で憎い敵相手なら遠慮はしないが。

そこで思い付いたのが、この感情の『引き抜き』である。

相手の感情の一切を思い切り引き抜くことで、喪失感や虚無感を増やし戦う気力を失わせる。人間なら気絶で済むし、引き抜いた感情を戻せば後遺症も無く元通り。

……まあ、向こうの感情を一時とはいえ預かるのだから、こちらも楽とは言えないのだけれど。

「お前は、いつたい……」

「なに、ただの長生きなだけの妖獣さ」

何回使ったかわからない台詞を吐き、彼女を抱き上げる。

「なっ」



「どうぞせ動くのは辛いでしように。家まで連れていきますよ」  
「……………」

その後、何も言わない角が生えた彼女は、指差して道順を教えてくださいました。

しかし、女性ってなんでこんなにかわら…………いや、止めておじい。

48：「人里の守護者」(後書き)

ワー、ハクタクウ!

……特に意味はない。

## 49：「最強の妖獣」

「う……ん……」

ゴロリと寝返りを打ち、

「痛っ」

何かに頭をぶつけて目を覚ました。額をさすりながら目を開けば、そこは小さな机の脚。足の小指ならぶつけたことはあれど、頭をぶつけたのは初めてだ。

「……えと、まだ寝てるのかな……？」

三メートル程向こうで寝息を立てている彼女を見て、欠伸をしてから歩み寄る。

昨晚あつた二本の角は無くなっており、そこにあるのは綺麗な長髪。なんといいのか、銀色に青が混ざったような輝かしい色をしている。

「綺麗な色だなあ……。それに比べ、僕の髪は……」

長さなら負けてはいないが、僕のそれは灰色。輝かしさなんて微塵も感じられない。

「……ん？」

髪から目を戻し、彼女の顔を見ると、髪が口にかかっている。

何の気無しにその部分をつまみ、顔にかかりそうな髪を耳にかけておく。

「しかしまあ……髪の色もさることながら、綺麗な顔なこと」

筋が通った鼻。

飾らずとも長い睫毛。

みずみずしい唇。

どこをとっても美人さんである。

「う……ん……」

「あや」

彼女は布団の中でもぞもぞと動き、その際に先程耳にかけておいた髪がまたしても顔にかかる。

しょうがないなあ、と顔を優しく撫でるように髪を掬い、改めて耳にかける。

「……起こしちゃ悪いかな。散歩でもしてきますか」

音を立てないように立ち上がり、猫の姿に変化。少しだけ開かれた窓に跳び移り、少し幸せな気分を外に跳んだ。

「…………ふう」

目をつぶったまま溜息をつく。

全く…………寝ている、と思い込んでいても、恥ずかしいことをズバズバと言ってくれる。

実は最初から起きていた、なんて言ったら、あの妖獣はどんな顔をするのだろう。

「…………どうしてだろうな」

見ず知らずの、昨日会ったばかりの妖獣に髪を触られ、頬を撫でられたというのに。

全く、悪い気持ちはしなかった。いや、それどころか。

「っ」

ぼふっ、と枕に顔を埋める。どうかしている。そうだ、まだ名前も知らない間柄だというのに。きつと昨日の内に何かされたんだろう。そうに決まっている。

「…………それにしても」

ハクタクと化した私を簡単にあしらったあの妖獣。  
光る瞳は灰色で、灰色の長髪に、灰色の着物を纏っていた、あの妖  
獣。

「……………まさか、な」

……………稗田家が代々纏めてきた資料の中の、最強の妖獣と特徴が一致  
しているような気がするが……………。

まあ、それはないだろう。

私は布団をかぶりなおし、もう一度眠りにつくことにした。なぜか  
はわからないが、今はとても幸せな気分です。

どうせ、今日の寺子屋は休みなのだから存分に眠るとしよう。

へえ、なかなか賑わってるんだな。

屋根の上を歩きながら、僕はそんな感想を心の中で呟いた。  
なにせ今は猫の姿、喋る猫など存在　してるけど。やはり堂々と  
喋ることは出来ない。

しかしなににせよ、ここなら久しぶりにのんびりと出来そうだ。  
屋根の上で、ひなたぼっここといきましょうか。

「にふう……」

気の抜けたような声を出して、僕は目をつぶった。

が、

「大変だあ！妖怪が現れたぞお！！」

なんだいなんだい、そんなに僕を平穩から遠ざけたいのかい？

溜息をつきながら目を開き、下でパニックとなっている人間に目を

向ける。  
皆一様に左手に逃げていることから、どうやら妖怪は右の方にいる様子。

「……まあ、知らんぷりしても構わないんだけどさ」

隠行を使い、猫又の姿に戻る。

先程平穩がどうのこうの言っただけだが、本音と建前は違うもの。平穩は欲しいが、周りをほおって置いてまで望んでいるわけではないもので。

僕は屋根から飛び降り、着地と同時に土煙を上げて走り出した。

「おやおや、大群なことだ」

数秒で里の端に辿り着いた僕は、目の前に広がる魑魅魍魎にそう言った。

ほとんどが小妖怪、紛れ込むようにして中妖怪がぽつりぽつり。耳を動かしながら相手のポテンシャルを把握していく。

「数は二百……いや二百五十ってところかな」



よくまあ集まったものだ、と敵ながら感服。

妖怪共は僕の姿を見て、あいつは！だの、何故ここに！？だの、皆似たり寄ったりの反応。

さすがに僕も大分有名になっているようで驚いたが、向こうが僕を知っているのなら好都合。

能力を展開させ、恐怖の感情を撒き散らしながら歩み寄る。

「さて、もう満足しただろうか？おとなしく帰ってきてくれるとありがたいのだが」

僕の発する恐怖の感情に、小妖怪はわなわなと震えて後ずさる。

これ以上恐怖を強めるとあちらが消滅しかねないのでこれが最大。

藍や橙のような妖怪相手ならそんなことはありえないが、精神的ダメージに弱い妖怪にとつて、僕の能力は下手をすれば死に直結してしまう。実際、初めて紫に会った時に使った『あれ』なんかは、ここにいる妖怪全部の命を刈り取っていくだろう。

「ミコトさんじゃありませんか。どうしたんです」

「藍？なんでここに……」

と、いきなり現れたスキマから藍登場。

藍の姿を見た妖怪共は、さすがに万が一にも勝機は無いと判断したか一目散に去っていった。

まあ、巷では最強の妖怪と謳われている僕に、あの八雲紫の式神にして九尾の妖怪である藍。このコンビに喧嘩を売る相手はちよつとしかないだろう。

ああ、ちよつとはいる。

「……で、なんでここに？」

「少しばかり伝えたいことがありましてね」

「……………さも偶然あったかのように現れたくせして……………。で、なに？  
紫から？」

「いえ、私から個人的な用件……………というか、頼み、ですかね」

「頼み？……………というか藍、なんか痩せた？」

口調こそ変わらないものの、藍の顔がどこかやつれているようにも見える。スキマから覗く尻尾も、どこか元気が無いようだ。

「はあ、わかりますか……………。実はですね……………」

「大変だあ！妖怪が現れたぞお！！」  
「っ！！」

聞き捨てならない台詞が外から聞こえ、私は飛び起きた。  
玄関に走り出し、靴を履いて扉を開け放つと人の波が現れた。

「……………！！」

これだけの人数が逃げ出すとは、一体どれだけの妖怪が、と考えている内に人の波は過ぎ去っていた。私は外に出て、不穏な気配がする方向に身体を向けて、

「……………まあ、知らんぷりしても構わないんだけどさ」

そんな声が聞こえたかと思えば、灰色の影が土煙を残して気配がある方向へと走り出していた。

「あいつ……………！！」

遅れて地を蹴り、空を飛んで先を急ぐ。

「なんとという速さだ……………！！」

遅れたといっても秒単位の遅れ。しかし、あの妖獣の姿はすでに見当たらない。なおさらあの『最強の妖獣』に当て嵌まる。

まさか……、と疑問を持ちはじめながらも、私はさらに風を切った。

「なるほどね……そんなことが」  
「はい……」

スキマから降り、シヨボンとしている藍の頭をポンポンと叩く。ちなみに帽子は外して膝の上に置いている。案外、レアだ。

「わかった。短い旅だったけども帰るとしましょう」  
「本当ですか!？」

「ん。このまま藍にはかり任せてもいられないし」

倒れていた耳をピコツと立て、ガシツと僕の両手を掴む藍。僕はそれに答えてブンブンと腕を縦に振る。しかし、藍がここまで喜ぶとは……。どれだけ追い詰められていたのか。

「……っ、コホン。じゃあ、行きましようか」  
「ああ」

散々二人で騒いだ後、顔を赤くした藍がスキマを開く。別に嬉しいなら隠さなくてもいいのに。

とは言わず、僕はそれなりに久しぶりとなるスキマに足を入れ。

「待て!!」

「？」

「きゃん!!」

いきなりの声にバランスを崩し、バランスを保つ為に藍の尻尾に倒れ込む。ごめんよ。

「君は……」

僕を呼び止めたのは、昨日戦ったあの女性。空を飛んできたのか、さほど息は切れていないようだった。地面に降り立ち、僕に歩み寄る彼女。

「名は？」

「ん？」

「名前は、何と言った？」

「ああ……でも、聞いてどうするの？」

「確かめたいんだ。私が知っている妖獣と、貴方が同じ存在なのかどうか……貴方が、あの『最強の妖獣』なのか」

「……………ふむ」

どうやらこの人も、僕のことを知っているらしい。本当に有名になったものだ。

「君は？君の名前」

「私か？私は上白沢慧音。気付いているとは思いますが、私は純粹な人間ではない。私は」

「ああ、いいよ。今少し急いであるから」

慧音に背を向け、改めてスキマに足を入れる。藍の手を取り、思い切り引き寄せて抱き留める。

「ああ、名前だったね。僕はミコト。猫又だ」

それを最後に、スキマは閉じていた。

「……………あのお、なぜこの体勢に？」

「なんとなく」

奇怪な空間の裂け目が閉じ、何もない空間をただ見つめる。

参ったな、まさか本当にあの『命』だったとは。

「……はは、おかしなこともあったものだ」

また会えるだろうか。

もし会えたら、いろいろと話を聞きたいものだ。

そんなことを考えながら、私は後ろから走ってくる子供達を抱き留めた。

49：「最強の妖獣」(後書き)

勢いで書き上げた為におかしな文章があるやも。

感想、指摘、どんどんお願いします！

(あと、あればですが志妖短編の要望も)

藍は苦勞人。



50：「鬼の行く末」

「あら、お帰りなさい。早かったのね」

「いや、たまには帰りたくなることも」

「兄様っ！？兄様じゃありませんかっ！」

「久しぶり橙。元気だった？」

「おかげさまで！」

スキマから降り立ち、珍しく座つてくつろいでいる様子の紫を、身体に擦りついてくる橙の頭を撫でながら眺める。なんだか疲れていゝるみたいだが、やはり先程藍から聞いた話は本当らしい。

「で？鬼が言うこと聞かないってどういうことさ」

「ああ、それで帰ってきてくれたの……藍？」

「はい。私から頼んで来てもらいました。このままでは私……いえ、紫様も大変でしょうから」

一瞬本音が出たように思えたがスルー。とにかく続きを聞くことにする。

「藍から聞いたのは、鬼が今の状況が気に入らないとかなんとかで文句を言っている、までなんだけど」

「ええ。どうも今の平和な幻想郷が気に入らないらしくてね……。果ては我慢出来なくなった鬼が私や藍にまで挑んでくる始末よ」

当然どこかへ送ってやったけれど、と疲れた表情で続ける紫。はたしてどれだけの鬼がスキマ送りにさせられたのか。

「でね……ダメ、眠たいわ。藍、後の説明頼んだわよ」

「えっ」

同じく疲れた表情の藍が、紫の言葉に一瞬驚いた表情になる。しかし、その時にはすでに紫の姿は無く、溜息をついてから藍が僕の正面に座った。

「ふむ……。つまり、地底に鬼を送りこんでしまおうと」

「はい。端的に言えばそうなります。細かいことは紫様が行うそうなので、ミコトさんには」

「兄様、ミカン食べます？」

「後でね。わかった、僕が鬼達を説得すればいいってわけだ」

「お願いします」

「ん」

話が一段落し、橙からミカンを受け取った僕等は三人、いや三匹仲間良くミカンを口に運ぶ。

「ほら橙、あ〜ん」

「ら、藍しゃま、恥ずかしいです……」

「何を今更。ミコトさんがいるから恥ずかしいのか？」

「うみゆう……。兄様にはやらないのですか？」

「ミ、ミコトさんにつ！？そ、それは……」

ミカンを口に運びながら、僕は一人考える。

詳しい事情はともかく、僕はあの鬼達を説得すればいいだけの話。後はなんだかんだいって紫が上手くまとめてくれるだろう。

確かに今の幻想郷は、鬼達にはつまらないのかもしれない。自分達を退治しにくる人間も少なく、だからといって人間を襲い過ぎては自分達の存在自体が危うくなる。

「しかし……説得、ねえ」

どうしても、どうせ僕の予想通りになるんだろうなあ、とか考えてしまう。

そういえば、桃鬼と志妖はどうするのだろうか。桃鬼は自由奔放唯我独尊な性格だが、志妖は鬼にしては珍しく温厚な性格。もしかしたら二人の意見が割れるかも知れん。まあ、その時はその時なんだけれども。

「……なるようになるか」

鬼には鬼の考えがあるだろうし、こちらにはわからない事情だってあるだろう。早い話、あちらとこちらの利害を一致させればいいのだから。

考えるのを止め、ふとミカン一個を食べ切ったことに気が付く。どうせだからもうひとつ、と顔を上げ、

「……あ、あ〜ん」「」

「……………」

狐と猫の予想外の攻撃が僕を襲っていた。

半ばヤケクソで乗ってやったよ、可愛かったから。

「わかった。そちらの言うことを聞こう。他ならぬ魅王の知り合いよ」

「それはありがたい」

後日、妖怪の山にて。

途中で出会った桃鬼と志妖を引き連れ、僕は現鬼神と向かい合っていた。どう考えても桃鬼と志妖の方が強いのだが、桃鬼は「柄じゃないからねえ」、志妖は「え？何の話でしょう？」との理由（志妖の理由は理由にあらじ）で鬼神になることを断ったらしい。

「で、だ。ミコトとやら」

「なんででしょう？」

鬼神（女）が立ち上がり、僕を見下ろす。

むう、やはりか。

「我等が地底に入れば、おそらくは地上に戻ることはない。そこで、

最後になるかはわからぬが、思い出が欲しい」

「……わざわざ遠回しに言わなくても。私は元からこうなると思っ  
ていましたので」

「ならば、いいのだな？」

鬼神の表情が歓喜のものへと変わる。

どうせ駄目だと言っても聞かないくせに、とか思いながら僕は頷い  
た。

それを見た瞬間、周りの鬼が一斉に沸き立った。

「少しばかり準備がありますので、私は少し席を外します。私が戻  
ってきたら始めとして頂いて結構ですので」

「いいだろう。なるべく早く戻ってきておくれよ？」

鬼神に背を向け、桃鬼がいる方へと向かう。そこには志妖の他、萃  
香と勇儀の姿もあった。

「桃鬼と志妖はどうする？やるなら拒否はしないけど」

「いいや、アタシ達は地上に残るからいいよ。それに、ミコトの本  
気は恐いからねえ」

「笑いながら言われてもね……。わかった、終わったら飲もうか」  
「楽しみにしてるよ」

くい、と杯を傾ける仕種をして笑う桃鬼。

それを見て、いつまでたっても変わらないな、と思いつながら僕は跳  
んだ。

行き先は、天狗の屋敷だ。

木々の間を跳んでいると、なにやらワナワナと震えている天狗二人を発見。

弾を作り、空に飛んでいる二人の前に立つ。

「文じゃないか。椀もどうした？」

「ミコトさん！？どうした、じゃありませんよ！なんですか今の鬼達の雄叫びは！」

「ああ……。別に天狗を潰そうとか考えてるわけじゃないよ。これから始まる祭に沸き立ってるだけさ」

「祭、ですか？なんの祭を」

せわしなく尻尾を振っている椀がそう聞いてくる。どうでもいいが、尻尾だけを見ていると飼い主を見つけた犬みたいである。そんなくだらないことを考えながら、僕は答える。

「一匹の猫又がね、鬼達の思い出作りに戦うのさ」

さて、天魔の所に行って、近いうちに鬼がいなくなることを伝えてこなくては。

弾をほどこき、自然落下。走った方が速いからね。

「ちょっと、ミコトさん！？それはどういう……！！」

「あやや……また無茶なことをする御仁ですねえ」

そんな呟きが聞こえたが、無視して跳んだ。

元から無茶苦茶な生活してきたんだ、今更だそんなこと。

50：「鬼の行く末」(後書き)

さあ、これから戦闘描写が続々と入ってくるぜ！

……難しいんだけど。



51：「百鬼鬩夜祭・幻 伊吹萃香」

天魔に話をつけた僕は、何故かついてくる文と椛を引き連れて戻ってきた。

「さ、文と椛はここにいてね。大丈夫、桃鬼と志妖の傍にいれば安心だ」

「は、はあ……」

「おや、天狗のお二人。よく来る気になったねえ」

「こちらにどうぞ。いざとなれば私が守りますので」

「あやや、これはご丁寧にすみません。ですが、自分の身なら自分で守れます。ねえ？椛」

「もちろんです」

そんな会話を聞き、僕は安心して四人に背中を向けた。

桃鬼や志妖は種族云々は全く気にしないし、文と椛も基本は温厚、椛に関しては桃鬼の強さが身に染みてわかつているので下手な真似はしないだろう。まあ、喧嘩を始めたら僕が両成敗に乗り出すけれど。

「さて、死なない程度に頑張ってくださいか」

「能力は使うのかい？」

「自分には使うかも知れないけど、向こうには使わないよ。純粹に肉弾戦でいくさ」

「鬼相手に、ですか。これはまた……」

首の骨を鳴らしながら言う僕に、呆れたように呟く文。

僕はそれには反応を返さずに、広場の中央へと足を進める。

向こうからは、意気揚々と一人の鬼が歩いてきていた。

所定位置に付き、鬼を見据える。

「始め！」

鬼神の掛け声がかかり、

「オオオオオ！！」

向こうさんが僕に向かって一直線に向かってくる。

僕はその場から動かさず、鬼の拳が振りかぶられたその瞬間、改めて首の骨を鳴らし、

「悪いけど、これから何十と戦うんで、ね」

鬼の拳は空を切り、首に一撃を喰らった鬼は勢いそのまま前にめり倒れていった。この程度、妖力を解放せずとも余裕である。

僕は視線を鬼の集団に向けて、尻尾を一振り。

「どんどん来なよ。負けない自信がある奴からね」

「ふう……。これで残るは、あのくせ者共か」

数えるのも面倒くさくなるほどに鬼を打ち倒すこと一時間。残る鬼は、桃鬼、志妖を除く三人。つまり、萃香、勇儀、鬼神である。

「さて、誰から来る？」

「私から行くよー！」

元気良く飛び出してきたのは、ちびっこ鬼萃香。全く身長は伸びていないが、前回会った時よりも妖気が力強い。

さすがに、ここからは全力で行かないと命を落とすことも考えられる。

と、いうわけで。

「萃香、全力の僕と戦いたい？」

「もちろん！」

「なら、遠慮なく」

着物の内側から小さな箱を取り出し、中にみつしりと詰まっている灰色の丸薬を口に放り込む。

「桃鬼」

「なんだい？」

「僕が暴走したら、問答無用で気絶させて欲しいんだけど」

「……簡単に言ってくれるねえ。暴走したアンタを止めれる奴なんてそうそういないっていうのに」

「だから桃鬼に頼んでるんだけど。まあ、頼んだよ」

「ハイハイ。萃香なんかに負けるんじゃないよ」

熱い何かが胸で弾け、途端に身体中に溢れる力。僕はそれを抑えることなく、爆発的な勢いで解放した。

僕の妖気に驚きながらも、そうでなくては、と言わんばかりの笑顔

を見せる萃香。

「始め!!」

鬼神の声と同時に、僕は萃香に突撃を仕掛ける。  
先手必勝、妖力を込めた爪での一撃。

「っ!!」

萃香はそれを皮一枚で避け、僕のどてっ腹に拳を突き出した。それを同じく妖力を込めた膝で弾き返し、それでも押された僕は空中で身を翻して着地。

同時に、脚に妖力を込め、

「どれだけ成長してるか……勝負ッ!!」

「っ!!」

かなり久しぶりとなる、『超』高速移動術。

萃香は、なんとか僕の動きを読もうととしてあつちを向いたりこつちを向いたり、とにかく背中を向けるのを嫌がっている。

「どうした!? それじゃあ前回と同じ結果しか生まれないぞ!」

「……それはどうかな?」

僕の言葉に、意味深な笑みを浮かべる萃香。

なんだ? 何を企んで……。

「わぷっ!!」

考えながら移動を続けていると、いきなり砂煙に突っ込んでいた。

思わず地面を削って立ち止まり、何かと周りを見渡す。が、

「……これは、萃香がやったのか？」

何も見えない。

なぜなら、そこから一面土煙で覆われているからだ。

しまった、萃香の能力を忘れていた。確か、あいつの能力は

「すきあり！でえい！！」

「ぐあつ！？」

背後からの一撃。全く予想していなかった萃香の一撃は、僕を軽々と吹き飛ばす。

「ぐつ……！！」

それでもなんとか体勢を立て直し、四つん這いの体勢で地面を削って踏み堪えた。

顔を上げて前を見れば、依然として土煙に覆われている広場。

どうやら今の一撃で土煙から抜け出したらしい。

僕は歯を食いしばり、パニックになりかけた心を平常心に戻す。

「『密度を操る程度の能力』か。……参ったな、僕が舞い上げた土煙を利用されるなんて。……しかも、これはもしかして」

能力を使用して萃香の命を捜すも、何故か位置が特定出来ない。いや、違う。

萃香め、自分の身体の密度を薄くして土煙に紛れたな？

「厄介な応用しやがって……」

さて、どうするか。

このままではこちらから仕掛けるどころか、きっかけすら掴めない。このまま土煙の外に居たとしても、萃香から仕掛けてくることは無いだろう。こちらとしてもじり貧は避けたいのでそれは却下。

感情を操って情緒不安定にさせれば、能力が解除されて萃香も姿を現すのだろうが……。

「……ふむ」

僕は口に溜まった、少しザラザラしている血を吐き捨てて土煙の中へと足を踏み入れる。

能力は使わずに五感だけに頼ることにする。今はこの『命を感じ取る程度の能力』は無駄だ。どうせそこから中から萃香の命の気配がして混乱するだけだろうし。

「よし、来いよ萃香」

僕はそう言って目を閉じる。

これは一種の賭けだが、上手くいけばどうにでもなるだろう。

視覚を捨て、能力を使用。人としての意識を薄め、獣としての野生の感覚で勝負する。

何発で捕まえられるか。我慢勝負だ。

「ふむ……考えたね」

広場の端、アタシは一人呟いた。目の前には、萃香が密度を操って纏めた土煙。

一度ミコトが弾き出され、しばらく何かを考える様な仕種をしてもう一度中に入ってしまったが、どう萃香をあぶり出すのか見所だ。

「動きがありましたね」

「ああ、この音は……萃香がミコトを攻撃してるようだねえ」

ミコトが土煙の中に入ってすぐ、鈍い音が連続して聞こえてきた。ミコトの攻撃方法は基本的に爪なので、萃香の拳をミコトが存分に浴びているのだろう。

全く、全開の妖気とは言え、自分が打たれ弱いことを自覚しているくせにねえ。

「あやや……聞くに耐えません」

「大丈夫でしょうか……」

「うん？あぁ、おまえさん達はミコトと付き合いが浅いんだね？」

不安そうな顔の白狼天狗を見て、アタシはその娘の頭をぽんぽんと叩いてやる。

何をいらない心配をしているんだか。

「あの程度でやられる位なら、アイツはとっくの昔に死んでるよ。多分、他でもないアタシの手で、ねえ。そら、煙が晴れてきた」

アタシはそう言って、徐々に風に吹かれていく土煙を眺める。そして、そこに立っている妖怪の姿を見てほくそ笑むのだった。

「ぐう………！」

一気に勝負を決める気なのか、萃香は連続で攻撃を仕掛けてくる。



萃香の戦法は、攻撃の瞬間だけ密度を戻し、またすぐに煙に紛れるヒットアンドアウェイ。厄介だ。

「……………」

偶然当たらなかった一撃の後、訪れたのは静寂。

次で決める気なのか、もしくは息を整えているのか……………どちらにせよ、

「……………次、だな」

目を閉じ、野生の感覚を極限まで研ぎ澄ます。

身体の芯を細く、尖らしていくイメージ。邪魔な感情を削ぎ落とし、剥き出しの神経で全ての違和感を逃さない。

「ふっ！！」

「！！」

次の瞬間、僕の右手は萃香の腕を捕まえていた。

動揺したのか、萃香は完全に実体と化している。それを見た僕は、咆哮と共に萃香を地面に投げ付けていた。

地面がへこみ、萃香の身体が一度びくんと跳ね上がる。

「勝負アリ、だな」

「……………またかあ。なんでわかった？」

「強いて言うなら風、かな。どんな一撃を狙ってたか知らないけど、風が流れるのを感じたから」

実際ほとんど反射だったけれど、と付け足しておく。

風を感じた瞬間、僕は何も考えていなかった。ただ、きた瞬間に掴んでいただけ。

「敵わないなあ」

萃香がそう呟くと、あのいくら動いても散らなかつた土煙が風に吹かれて呆気なく流れていく。やはり、萃香がまとめていたらしい。

萃香を抱え上げ、

「私の攻撃効いてないの？」

「桃鬼の攻撃に比べればね」

煙が晴れて、やっぱりな、といった感じで笑っている桃鬼の元へと歩いていく。

桃鬼の横に萃香を寝かせ、僕は次の相手を振り向き様に見据えた。

「連戦お疲れ様。疲れてはいないだろうね？」

「余計な心配する前に、自分の心配した方が良くないんじゃない？手加減なんて出来ないからさ」

「……言ってくれる」

星熊勇儀。次はコイツだ。

「十五分ぐらい経ったかな……ということとは、せめて二十分でコイツを倒さなきゃいけないわけか」

薬の効果は約半刻。つまり一時間。

正直、遊んでいる暇など全く無い。

僕は広場の中央付近、開始位置に立って、大きく息を吸い込んだ。

空を仰ぎ、右手で自らの顔を覆う。

久しぶりに、本当の戦闘モードに入るとしよう。

「フーツ、フーツ……!!」

歯が自然と剥き出しになり、全身の毛が逆立つ感覚に身体が振るえる。

二本足で立つことを止め、両手を地に付き四つん這い。爪が地面をえぐり出した。

「おやおや、ミコトが本気になった」

「本気って……まさか、あれがミコトさんの本来の姿とでも!?!」

「うるさいねえ、耳元で叫ぶもんじゃないよ。そうさ、あれがミコトの本当の本気。理屈は知らないが、自らの感情を操ることで甘い考えを排除、情け無用の戦闘狂になるわけさ」

それにしても、まさかあれまで使うとはねえ。よっぽど急いでいるんだろっけど。

アタシは頭をポリポリと搔き、傍らで震えている天狗娘二人の頭を抱き寄せる。

隠してはいるが、あのミコトを見て恐怖しない妖怪なんてザラにはいない。身体が震えているのが伝わってくる。

実際、アタシだってあのミコトは怖い。

「ああなったミコトを、妖獣だなんて思わないことさ。アタシからみりゃ、あれは　　鬼、だねえ」

さ、勇儀には悪いけれど、ああなったミコトはアタシでも簡単には止められない。

「勇儀！」

「どつした、桃鬼」

アタシは、ミコトの正面で身体を震わせて、しかし口の端を吊り上げている勇儀に声をかける。

アタシから言えるのは、これだけ。

「少しでも気を抜いたら

死ぬよ?」

51：〔百鬼鬩夜祭・幻 伊吹萃香〕（後書き）

姐御肌、桃鬼。

52：「百鬼鬪夜祭・幻 星熊勇儀」

「うああああああ！……！」

「はあああああああ！……！」

目の前で繰り広げられる戦いに、私はただ魅入ることしか出来なかった。

「どうしました？ 椀」

「いえ……」

文さんの呼び掛けにも、そんな答しか返すことしか出来ない。

それ程までに、この戦いから目が離せない。気が付けば、私はこんなことを口走っていた。

「カツコイイ……」

「うん？」

「はい？」

怪訝そうな反応を見せた桃鬼さんと志妖さんに気付かない振りをして、私は目で追えないとはわかっていつつ、ついつい彼の姿を見ているのだった。

「チツ……………！」  
「……………」

勇儀の空振った一撃の風圧を感じながら、地面を蹴って距離を取る。まだあちらの一発はこちらには当たっていないが、何しろ能力故に威力が威力、一瞬足りとも気が抜けない。

「ちょこまかとうつつうしいね……………」

「あの野郎、随分とタフじゃないか」

同時にもらす相手への愚痴。

しかし、正直どちらかと言えば僕の方が不利な状況にある。

スピードと手数で勝負している僕の攻撃は、今まで幾度となく当ててきているのに効いた気が全くしない。

それというのも、僕はこの戦いにおいては、本来攻撃に回すはずの妖力も移動に回しているからなのだが。

なぜかと言うと……………。

「ふん！」

「っ！！」

勇儀が僕に向かって跳躍、振りかぶった拳を僕目掛けて振り落とす。



瞬間、地面を弾けさせて横っ跳びするも。

僕が弾けさせた地面は、勇儀の拳によって爆砕していた。

「一撃の威力が反則だろう……！」

先程の理由はここだ。

こんな馬鹿げた一撃、間違っても食らうことは許されない。

だからこそ、いつもなら爪やら拳やらに込めている分の妖力を使つてまで機動力を上げているのだが、何分これではこちらの攻撃がこちらに伝わらない。ただでさえ時間が無いと言つのに。

「残りは三十分有るか無いか……。さて、どうする」

能力を勇儀に使えば手っ取り早いんだけど、それではあちらが満足しないだろう。この戦いは、あちらさんの専門分野で存分に戦ってもらつてこそ意味があるのだから。

勇儀が巻き上げた土煙に紛れ、速さに任せて腹に五発。鼻先ギリギリで反撃を避け、それでも土煙ごと吹き飛ばされた僕は四つ足で着地する。

「く……。そんなチマチマした攻撃じゃあ、私は倒れたりしないよ」

「……だろうね」

やはり、目立ったダメージは与えられない。

こうなれば、あまり気は進まないが……。

「……？なんだ、戦闘放棄か？」

いきなり膝をついた僕に、勇儀は怪訝そうにそう呟いていた。残念だが、そうじゃない。むしろこれはそれとは真逆の行為。

理性を極限まで削り、本来自然にかけられている身体のリミッターを強引に外す。

故にこれまでのような『思考』そのものが難しくなるが、その分身体能力は格段に跳ね上がる　　！！

「っ、

！！！！！！」

「！！！？」

「……………！！」

ミコトさんの咆哮が広場に響き渡り、一瞬地面が揺れた気さえた。そして、そこからは一方的。更に速さを増したミコトさんの動きは、遠目から見てようやく影が見える程度。ここから見てそれなのだから、相手の鬼に見える道理は無かった。

「あれはアタシでもキツイかねえ……………」

私の傍らで、初めて聞く口調で呟く桃鬼さん。その表情は呆れているように笑っていて、その気持ちは私にも簡単に理解出来た。あんなのを見せられたら、呆れて笑うしか出来ない。

「っ、このっ！！」

いつしかその肌に赤い滲みが見えはじめた鬼の身体から、一際大きな妖気が放たれる。そしてその身体が思い切り擦れ、振りかぶられる拳。

それが間違った選択だと、私はすぐにわかった。

「終わったね」

桃鬼さんが呟いた瞬間、相手の鬼の身体は真上へと吹き飛んでいた。

「ふっっ」

全妖力を込めた一撃を放ち、僕は溜まった息を一息に吐き出した。全く、寿命が縮まるにも程がある。

「っつ」

落ちてくる勇儀を抱き留めて、その顔を覗き込む。どうやら完全に気絶している様子。

……一応、真正銘全力の一撃だったんだけれど。気絶で済んで喜ぶべきか、自分の力の弱さに悲しむべきか微妙なところ。

例の如く桃鬼の所へ向かい、既に復活して酒を呑んでいる萃香の横へ勇儀を寝かす。

「……ゆっくり寝て下さいな」

額に額を付け、感情を流し込む。寝ている相手でも身体が触れていればこちらの感情を流し込めるのだ。

勇儀の表情が心なし緩み、僕はそれを見てから、

「……どうかした？ 椀」

「あっいえその」

「うん？ ああ、あの僕を見るのは初めてか。怖かった？」

「怖かったよ」

「初代鬼神が何言つてやがる。桃鬼には聞いてないよ」

「酷い扱いだ、怖かったのは本当だと言つのに」

「はいはい、これ終わったら気が済むまで相手してあげるから」

しなを作ってわざとらしく言う桃鬼に背を向け、僕は最後の一人を視界に入れた。

残り時間は多めに見積もって二十分。

さて、実力も不明なら妖力も不明。これで能力持ちだったら笑うしかないな。

「貴女の出番ですよ。鬼神殿」

「……鳴雷」

「はい？」

「夜美夜 鳴雷じゃ、ミコト。敬語ではなく、対等に接しておくれ」

「……まあ、貴女が望むなら」

「うむ。では……魅王！」

「はいはい。双方用意はいいね？じゃ……始め！」

後ろで纏めていたらしい長い金髪を振りほどき鬼神、いや、鳴雷は半身の体勢を取る。ふむ、どうやら鬼神の名は伊達じゃあない。

「そなたの能力は『感情を操る程度の能力』だったか」

「その通り。それがどうかしま………した？」

「フフ、敬語が抜け切らんか。まあよい」

楽しそうにそう言った鳴雷は、不意に片手を空へと掲げる。神がフワリと舞い上がり、神々しい金色が輝きを見せる。それに一瞬だけ目を奪われ、

次の瞬間、僕の身体は落雷に貫かれていた。

「……っ！！！？」

「我が能力は『雷を操る程度の能力』。さあ、楽しませておくれ」

52：「百鬼鬩夜祭・幻 星熊勇儀」(後書き)

新キャラ登場。

地味にお気に入りのなので地底に入れるかどうか迷っていたり。

ちなみに志妖より強かったり。

53：〔百鬼鬩夜祭・幻 鬼神・夜美夜鳴雷〕（前書き）

今回は少し遅れてしまいました………すみません。

くそ………なんて厳しい就職活動。



53：〔百鬼鬨夜祭・幻 鬼神・夜美夜鳴雷〕

「……………!!」

突然の落雷。数秒間身体が硬直し、僕は身体から煙をあげながら空を見上げる。

先程まで晴れていたはず。なのに、そこには黒々とした雲の姿が。

「……………雷雲だと？」

「よそ見している暇はあるのかえ？」

「!?!」

声に反応し、視線を落とす。

そこには、すでに鳴雷の姿があり。

「があっ!?!」

とん、と腹に手を置かれたかと思えば、鳴雷の手から激しい電流が流し込まれていた。

僕は無我夢中で地面を蹴り、全力で距離を取りにかかる。ここまでくれば大丈夫だろう、と顔を上げ、

「無駄だよ」

「っ!!」

すでに僕へと向けられていた右手から、僕の努力を嘲笑うかのような雷撃が放たれた。

避けれる筈もなく、それでもとっさに結界を張る。

瞬間、右足を横に出し僕は跳んだ。もちろん、全開だ。

雷相手にどれだけ距離を取っても無駄にしなければならない。ならば、接近戦で圧倒するしかない！

そう思い、横っ飛びからいきなり方向を変えて鳴雷に突撃。

鳴雷に勇儀の様な一撃必殺の攻撃は無ければ大丈夫。妖力だけを見れば志妖より下なのだから、おそらくそんな一発はあるまい。

ならば、攻撃に妖力を回しても問題無い。スピードが多少落ちようが関係あるか、一方的に攻めて終わらせる。

僕の目が鳴雷の背中を捉え、爪に妖力を充満させる。

食らえ!!

「そつくるか。なら、速さ勝負といこう」

「なっ……」

瞬間、僕は思わず動きを止めていた。

爪を突き出したその場所に、居るはずの鳴雷がいない。

さらには、後ろから聞こえてくる電気のスパークの様な音。

「……参ったな」

この僕が、完璧に相手の姿を見失うなんて。

どうやら、僕は鳴雷の強さを計り違えていたらしい。桃鬼や志妖より間違いなく弱い？何を考えていたんだか僕は。

妖力の多さと強さはイコールでは繋がらない。そんなの、とつくの昔に理解していたはずなのに。

突き出したままの腕を下ろし、ゆっくりと振り返る。そこには、身

体に電気を纏わし、帯電した金髪を空中に浮かべている鳴雷の姿。

僕は考える前に感情を操り、ギアをトップに入れ替えた。

相手は鬼神、自惚れるている場合じゃない。相手が強いならこちらも全力を出すだけだ。

「シャアッ!!」

「ツッ!!」

「信じられませんねえ……」

灰色の影と、金色の閃光が入り乱れる光景を見ながら私は溜め息をついた。

私とて、天狗の中では最速として名を馳せてきた故に速さには自信がある。

だがどうだ、目の前の鬼神と妖獣は、私には及びもつかない速さで戦っているではないか。

「しかし、桃鬼殿？」

「なんだい？」

「ミコトさんは、勇儀殿と戦った時の様にはならないんですかね？  
その方が断然速いと思うのですが……？」

「ああ、あれかい？確か、『身体の負担がデカイ』とかであまり乱用はできないらしい。理屈は知らんがねえ」

身体の負担が大きい、ということとは、やはりあれだけの速さ。それなりの反動は覚悟して使っている、ということか。

「でもま、心配はいらないさ。ねえ、志妖？」

桃鬼殿は、傍にいる志妖殿と目を合わせてニヤリと笑い、また戦いに視線を戻す。

そして、楽しそうに呟いた。

「ミコトにだって、『誇り』があるだろう。特に『速さ』に関しては、ねえ」

一体どれだけ着地と跳躍を、そして攻撃を繰り返しただろうか。最早回避のことは考えていなかった。

避けているように見える雷撃も、攻撃の為に移動を繰り返しているだけで結果的に当たっていないだけ。

「シッ！」

「はっ！」

カガギガバチィ！と、一回の接近で何撃もの攻防が繰り広げられる。

「く……」

身体に電気を纏わせながら、僕とほぼ同じスピードで移動している  
鳴雷。

まだ足りない。

「……………っ！」

息を吸い込み、蹴り足に力を込める。

まだ速く。

更に速く。

限界まで速く。

限界を超えて速く！

速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く！！

「……………な」

鳴雷の姿が消える。

景色が溶け、物の形がわからなくなる。

僕は鳴雷の背後にまわり、一度そこで立ち止まった。地面が盛大に  
削れ、土に紛れていた石が跡形もなく碎け散る。

「最後の一発だ。これで勝負をつけようか」

「……いいだろう。ミコトよ、そなたの速さには驚いた。さすが、伝説の妖獣じゃ」

そんな会話を交わし、僕はニヤリと笑って地面に手をついた。爪が地面をえぐり返し、『なけなしの妖力』を解放。

対する鳴雷は、一際大きな雷電を辺りに撒き散らす。全力なのだろう。表情でわかる。

これが正真正銘最後の一撃。  
結果なんざわかりきっている。

地面を蹴る。

同時に飛び出してくる鳴雷。

それよりも遥かに、僕のスピードは遅かった。

「はあああああ!!」

一瞬で接近され、雷を纏った拳が振りかぶられる。  
そして当然、その拳は僕に放たれ

ズドン!!と、雷が地を揺らしていた。

「…………あれ？」

間の抜けた声を出したのは僕。苦し紛れに突き出した腕は、何かに固定されたように動かない。

視界は、鳴雷の一撃による閃光で全く利かない。

「…………あつついねえ、こんなの食らったら今のミコトじゃあ危ないところだ」

「…………その声、桃鬼？」

すぐ傍から聞こえてきた声は、紛れも無く桃鬼のものだった。イマイチ状況が掴みきれない。

「魔王！なぜ邪魔をする！」

次に聞こえてきたのは、鳴雷の声だった。桃鬼の向こう側から聞こえるので、僕と鳴雷、その間に桃鬼がいるみたいだ。

声色からするに、鳴雷はお怒りの様子。

するといきなり、おそらくは桃鬼に掴まれていた腕が解放された。バランスを崩して倒れそうになり、しかしぽふんと僕の身体はなにか柔らかいもので支えられた。

「夜美夜。アンタ、今のミコトを倒して満足かい？」

「…………どういことじゃ」

ぐいっと身体が引き寄せ、いや抱き寄せられ、懐かしい香りに包まれる。あ、これ桃鬼に捕まえられてるのか。

それにしても、桃鬼には気付かれていたらしい。全く、敵わないなあ。

「全く、なんで気付かないかねえ……。最後の最後、なんでミコトがアンタの背後で立ち止まったと思う？アンタがミコトを見失ってるのは端から見ても一目瞭然、ミコトだって当然気付いてるだろうさ。なのに、わざわざコイツは立ち止まってアンタに姿を曝した」

「……………まさか」

「ああそうさ。ミコトはあの高速移動をやめたわけじゃない。『やめるしかなかった』のさ。それっぽい言葉でごまかしてはいたけど、アタシにはすぐに分かった。あれだけの妖力がいきなり半分以下になれば誰だって気付く。おおかた、萃香との戦いの前に飲んだ薬で妖力を戻していたんだろう？どうしてかは知らないが、ミコトの妖力は昔より大分少なくなっていたからねえ」

「……………ご名答。薬の効果は、立ち止まった時には切れてたよ。でも、戦いを途中で止めるわけにはいかないし」

「馬鹿ミコト。それで死んだら元も子もないだろうに」

コツン、と頭に軽い一撃。フワリと身体が浮き、桃鬼に抱き抱えられたと判断。

というか、激しく眠たい。おそらくここで素直に寝ておけば、能力の暴走はないはず。

「決着は付かなかったけど、思い出にはなっただろう？それとも、納得いかないかい？」

「……………いいや、確かに良い思い出になった。満足じゃ」

「よかった。これ以上アタシのミコトを傷つけられても困るからねえ」

心地好い揺れの中、僕は意識をゆっくりと手放していく。

何か聞き捨てならない台詞があったようにも思うけど、まあ別にいいでしょう。



53：〔百鬼闘夜祭・幻鬼神・夜美夜鳴雷〕（後書き）

やはり桃鬼は強かった（笑）

## 54：「最後の宴会、そして」

「う、ん……」

何やら騒がしい雰囲気の中、僕は頭を抱えて身体を起こした。開き切らない眼、細い視界で辺りを見回す。

「目が覚めましたか」

「……志妖」

すぐ傍にいたらしい志妖の声に応え、頭を振って頭の覚醒を促す。目を擦って一度目をパッチリと開くと、志妖の背後ではお祭り騒ぎが開かれていた。

「地上最後の大宴会、らしいです」

「そっか……。僕はどれくらい寝てた？」

「いいえ、さほど。今、夜になったばかりですから」

宴会の様子を眺めながら言う志妖につられ、僕もそちらに目を向ける。皆、楽しそうに酒を飲んで騒いでいる。

「地上最後の、か」

口にして、少しだけ申し訳ないような気持ちになった。

地底に追いやる立場として、少なからず感じるころはある。今更気にしていてもしょうがないのだけれど。

「ミコトさん……」

「文、椀」

翼をはためかせ、空から天狗の二人が慌てたように降りてきた。て  
いうかこの鬼だらけの広場にまだ入れたのか、宴会だからか？

「何を慌てて。何かあったの？」

「そ、それがあ……………」

「私達では手に終えないお二方がですね……………」

「手に終えない……………？」

立ち上がり、身体を伸ばしながら繰り返す。

そういえば、桃鬼はどこだ？

「志妖」

「……………迂闊でした」

やり取りはそれだけ。

たったそれだけの会話で、僕と志妖の間には通じたモノがあった。

「二人共、案内して」

「は、はい!!」

「だからあゝ、ミコトはアタシのだって言ってるだろっ?」  
「聞いとらん。飲み過ぎじゃ魅王……おや、そこにいるのは」

案内されてたどり着いたその場所には、悲しくなってくるほど酔っているのがまるわかりの桃鬼と、それに絡まれている(二重の意味で)鳴雷がいた。

鳴雷は、僕の姿を見るなり笑顔を見せて桃鬼を引きずりながら歩みよってきた。

なんだ、呼んだのは鳴雷か。てっきりまた桃鬼が大乱闘引き起こしたのかと思ったよ。

「ミコト。我等は明日より地底に向かうことにした」

「明日……ですか」

そんなに急がなくても、と言おうとしてやめた。それは僕が言っている台詞ではない。

「ですが、全員が地底に行くわけでもないのでしょうか?」

「うむ。コヤツや志妖、それに萃香も残ると言っておる。何かあったら、助けてやってくれ」

「……もちろんです」

そう答えた僕を見て鳴雷は満足げに頷くと、次は僕と志妖の後ろにいる天狗組に視線を向けた。

それに気付いた僕は横にずれる。二、三歩歩いた鳴雷は、二人の前に立つと椀と文の顔をしばし見つめてから口を開いていた。

「鴉天狗に白狼天狗。天魔に伝えよ。そなたらにこの妖怪の山を任せ、とな」

「は、はいっ」「」

二人の答えに、また同じように満足げに頷く鳴雷。  
そして今度は僕の方を向いた。  
先程までの、どこか凜々しさを感じさせる表情ではなく、くだけた  
ような柔らかい表情。

「さて、飲もうとしよう」

「……はい」

で、数時間後。

「ミコトく？」

「暖かいのう……。良い気分じゃ……」

「どうしてこうなった……」

相変わらず飲めや騒げやの宴会ムードの中、僕は頭を抱えて大きな  
溜息をついていた。

右肩から首にかけて桃鬼が絡み付き、反対側には鳴雷が絡みついて  
きている。

どちらも救いようがない程に酔っ払っており、元から過剰なスキン  
シップに磨きが掛かって手に負えない。

どうしてこうなったか、思い返してみる。  
と言っても、僕はその場面を見てはいないのだが。

鬼にしては珍しく酒を全く飲まない志妖に、馬鹿みたいに酒に強い文と椀と話している後ろでこんな会話が聞こえてきたのだ。

『ほら、鳴雷も飲みなよ』

『やめ……ん？こら魔王！随分酔うのが早いと思ったら、その酒は  
んむうっ！？』

『……ぶはあっ。ふふ、こんな時ぐらい思い切り酔おうじゃないか  
い』

「ミコトの耳尻尾」

「む、妾にも」

「駄目だねえ、ミコトはアタシのだって、言った、はず……」

「誰が決めたのじゃ、そんな、こと……」

「ちよつと、寝るならちゃんとした所で」

「むい」

「うわっ」

「妾に逆らうでない……ふふ、気持ちが良いの……」

桃鬼に押し倒され、盛大に頭をぶつけた僕を気にも止めない鬼二人。カラン、と顔の横で音がしたのでそちらを見ると、酒瓶らしきモノが転がっていた。

「『鬼殺し』で……またベタな名前の酒だな。……う、匂いだけで酔いそうだ」

瓶から顔を背け、いつしか眠ってしまった桃鬼と鳴雷の顔を見る。二人共すっかりと僕の身体にしがみつき、それでいてなんて幸せそうな表情。

「フフ……」

おしとやかに笑う志妖。つられて笑ってしまう僕。

こんなに幸せそうな表情を見せてくれるなら、今夜ぐらいなら抱きまくらも悪くはない。というか、あんなの見たら無下に起こせないし。

「……ふう」

息を大きく吐き出した。身体力が溶け出すように抜けていく。まだまだ身体は疲れているみたいだ。もう一眠り、いこうとしよう。

そういえば、能力の暴走は起きなかったみたいだな。やはり、あの強烈な眠気がセーフティラインのようだ。

「……いいや、今は寝よう……」

深く考えようとして、まぶたが重たくなってきたのであっさり止める。そのまま、僕は眠りについた。

「では、行くでしょう。ミコトよ、願わくばまた、そなたと話したいものじゃ」

「きつとまた会えます。その時はまた、昨夜のように飲みましょう」  
「……ああ。きつとな。その時には敬語は無し、じゃぞ？」

クスリと笑い、鳴雷は背を向けた。  
隣にいる紫が手を翳し、地面にスキマが開く。

「さらば。伝説の妖獣よ」

「また会いましょう」

瞬きをした瞬間、もうそこには誰もいなかった。  
僕は目を細め、少しだけ胸に芽生えた寂しさを感じながら、何も無い地面を見つめた。

「またの機会に……だな」

どうしても抜け切らなかった敬語。最後くらいタメ口で行こうかとも思ったが、最後の別れと認めるようなのであえて敬語でいった。長い別れにはなるが、いつかはまた会うことを信じて。

「さ、て。天狗の二人はそろそろ戻った方がいいんじゃないかい？  
天魔にも伝えなきゃならないし」

「ええ。私と椋はここでおいとまさせて頂けます。では」



「ミコトさん。あまり無茶はしないで下さいね」  
「善処するよ。天魔によろしく言っておいてくれ」

黒の翼がはためき、二人は勢い良く飛び去っていく。

ヒラヒラと舞い落ちてきた黒と白の羽を掴み取り、耳飾りに天魔の羽が無いことに気が付く。しばらく見つめて着物の内側にしまった。後で藍に結び付けてもらおうか。

「鬼の三人はどうする？」

「アタシと志妖は今まで通りあの洞窟で過ごすさ。萃香はどうする？一緒に来るかい？」

「……そうさせてもらおうかな」

「なあにを落ち込んでるのさ。また会えるさ。ねえ、志妖」

「……行こう、萃香」

萃香の手を取り、志妖は僕に軽く頭を下げる。その頭を軽く撫でてやると、普段無表情に近い志妖が柔らかい笑顔を見せてくれた。うん、良い表情だ。

「さ、じゃあ行くでしょう。ミコト、用があればいつでも呼びな。アンタの為ならどこでも飛んでいくからさ」

「うん。また」

さりげに恥ずかしいことを言って、桃鬼は森の中へと姿を消した。相変わらず豪快というかなんというか、桃鬼らしい。

「志妖？おいてかれるよ？」

「……桃鬼様といえど、譲れませんか」

「え？」

思わず聞き返すも、志妖は答えずに笑顔のまま歩いて行った。どうしてだろう、笑顔のはずなのにどこか違うものを感じた。

「お疲れ様。よくやってくれたわ」

「紫」

今までずっと黙り込んでいた紫が、ふと隣で口を開いた。

口元を扇子で隠し、やはり胡散臭い笑顔……ではない。

視線が下を向いたまま、僕に向けられない。

「……………紫？」

「ミコト」

思わず顔を覗き込むと、紫は意を決したかのように扇子をパチンと閉じた。

そして、僕に真っすぐ向き直り、

「頼みがあるの」

そう言った。

僕は、なんだいきなりと呟いた。

「なにさ、僕にできることならやるけど」

何の気無しにそう返し、紫に背を向けててくと歩き始める。

けれど僕の足は、次に発せられた紫の言葉によって地面に縫い付けられた。

「死んでくれないかしら」

……はい？

54：「最後の宴会、そして」（後書き）

………あとかきのネタが無いZE！（キラーン）

番外編と平行して書いている為に更新が遅れがち。  
ただでさえ短いのに速さまで落ちたら私に何が残るのか。

## 55：「命の結界」

視線は目の前の森に固定されたまま、僕は数秒前に放たれた紫の言葉  
を頭の中で何度も反芻した。

たった数秒、それぐらいのものなのに、もう何分もこの体勢でいる  
よう。

「…………もう一度、お願い」

渴いた喉からようやく声が出て、僕は身体を紫に向けた。  
確認なんて要らない。それなのに、僕はそう言っていた。  
紫は、どこか悲しげで、けれど真っ直ぐに僕を見詰めていて。

先程の言葉が聞き間違いではなく、ましてや冗談でもないこと  
を訴えていた。

「……………詳しくは、家で話しましょう」  
「……………」

開かれたスキマに、僕は何も言えずに足を踏み入れる。

頭の中では、相変わらずあの言葉が繰り返しリピートされていた。

「あ、紫様……ミコトさん  
「兄様！お帰りなさい！」

スキマから降り立った僕等に、藍はいつものように……いや、僕を見て少しだけ視線を泳がす藍と、こちらは本当にいつものように擦り寄ってくる橙。

「藍。橙と外に行つてなさい」

「……はい。ほら橙、行こうか」

「はい！兄様、また後で！」

「うん。後でね」

藍に手を引かれ、無垢な笑顔で言う橙を見送り、僕は紫に向かい合う形に座り込んだ。

しかし、身体は向かい合つてはいても、目が合うことが無かった。早い話、紫が僕を見ようとしないのだ。

「紫？」

「……わかつてるわよ。けれど、なんで貴方は平然としていられるの？」

「もっと慌てて欲しかった？……それは残念だったかな」

「はぐらかさな」

「はぐらかしているのは紫の方。早く、詳しく話を聞かせて。慌てるのも悲しむのも、怒るのもそれからするよ」

「……酷い人」

ぽつりと呟いた紫。僕は尻尾をふらりと揺らし、壁にもたれ掛かった。

紫が口を開いたのは、それからしばらく経ってからだった。

「幻想郷の危機……」

「ええ。まだそこまで大きな影響は出ないでしょうけど、このまま  
いっただら、近い内に間違いなく幻想郷は崩壊する」

重苦しい雰囲気の中、伝えられた現実はこれまた重いものだった。

外の世界は、僕の計算が狂っていないければ大体、西暦千六百年から  
千七百年の間。勿論ズレはあるかもしれないが、大体は合っている  
だろう。

人間の進歩は凄まじく、それと同時に強大な力も人間に備わってい  
く。

科学の力が実証され、更にそれが僕が知っている程に認知されてい  
くのは、人間にとってそれは素晴らしいこと。すなわち、繁栄へと  
繋がっていく。

しかし人間の繁栄は、妖怪の衰退と同じ。

人間が科学を信じ始めれば、神の存在は無意味となっていく。

自然現象が科学で立証されれば、それに恐怖する人間は少なくなり、  
妖怪を否定し、その恐怖を糧とする妖怪は最悪消滅してしまうだろ  
う。

幸い（妖怪の視点からすれば、だが）幻想郷に住む人間は外界から遮断された生活を送っているので進歩の仕方は限りなく遅い。だが、それにも限界がある。

もし何かの弾みでこの幻想郷の人間も文化の発展を遂げ、妖怪を否定し始めれば、それは人間と妖怪が共存する幻想郷そのものを破壊してしまうだろう。

「あと百年もすれば、外の人間達は私達を完全に否定し始めるでしょう。その頃には妖怪も力を失い、なす術もなく消えてしまう」

「話はわかった」

ついでに次の会話の内容も。

向こうから言われたら少しショックなので、この際こちらから言うてしまおうか。

「で、その危機をなんとか乗り越えるには、僕の命が必要な訳だ」

「……なんでそんなにあっさりと言えるの？信じられないわ」

「愚痴はいいから先をよろしく」

「誰の為の愚痴だと……。いいわ、まずは説明を終わらせる」

どこか吹っ切れたように紫は言った。開き直った、の方が正しいように思える。

「結論から言ってしまうえば、幻想郷と外界を切り離してしまえばそれで解決なの。その為に、この間と同じように私の能力を使って境界の結界を張る。外界を常識の世界。ここ、幻想郷を外の非常識の世界にする、『常識』の結界をね」

「お前のことだ、抜かりなく計画立ててるんだろうから心配はしてないよ。僕が知りたいのは、僕の『命』の使い道さ」



「……ええ。この結界を張るには、どうしても『大きな力』が必要になるわ。その為に貴方のその妖力と、貴方の『身体』が必要になる」

「身体……?」

「ええ。まず、貴方の妖力を利用して結界を完成させる。その際に、完成した結界が安定するようにあるモノを結界に組み込む。……それが、貴方よ」

「……………」

思わず黙ってしまった僕。確かに、それは死ぬことと同じ。俯いた僕に、けれど、と紫は続けた。

「結界自体がしっかり安定して、安定剤を必要としなくなれば、結界は不純な物質を自ら吐き出すわ。つまり、いつかは……」

そこで紫は言葉を切った。

言い切らないということは、それも希望でしかないのだろう。

「妖力はどうする?今の僕は……」

「皮肉なことに、前回貴方が私に譲ってくれた妖力が残っているわ。あれだけあれば、貴方自身の妖力は使わずに済むし、今の貴方の妖力でも安定剤としては充分過ぎる」

「……で、紫の式となった僕なら、比較的安全に結界を安定させられる、と」

「……!」

僕の言葉に、驚いたように目を見開く紫。

優しい奴。僕でなければならぬ理由を、少しでも隠していようだなんて。

僕は紫に近付き、何気ない仕種から額を合わせた。そして、離れてから一言。

「隠し事は無し、ね。全部教えてよ、紫」

「……………なんで」

「僕の能力知ってるくせに」

「そうじゃないわよ、なんで貴方はいつも……………!!」

膝の上で握りしめられた手。

僕に掴みかかろうとして、けれど寸前で堪えているのがまるわかりだった。

堪えている、というよりは、僕が堪えさせているんだけれど。

「……………く、貴方、能力を……………!？」

「さてね。さ、続きだ」

先程までと同じように壁にもたれ掛かる。ピクピクと動く耳は無視だ。

「早く」

「……………結界が完成すれば、当然貴方はこの幻想郷から姿を消すことになる。そうなると、突然姿を消した貴方を捜そうとして外界に出ようとする者……………つまり、結界を破壊しようとする妖怪が出てくるかもしれない。……………だから、私は結界が完成した後、貴方に関する記憶をすべて封印するわ。……………貴方は、友好関係を広め過ぎたのよ。じゃなきゃ、こんなことをする必要も無かったのに……………」

身体を震わせながら言う紫。

確かに、僕の友人達は力の強い妖怪ばかりだ。顔が広いことがあだとなるとは……………わからないものだ。

「ほら藍様、早く早く！」

「こら橙！まだ中には……！」

バタバタと音が家の中に響く。

瞬間、紫は後ろを向いて扇子を開いた。

「ただいま、兄様！！」

「おっと」

扉が開き、飛び付いてくる橙を抱き留めて頭を撫でる。

顔を上げると、複雑な表情をした藍の姿。

この様子じゃ、橙はこの事を知らされてないみたいだな。

「私は寝るわ。藍、後は頼んだわよ」

「はい」

スキマを開き、その中へと消えていく紫。その顔は扇子で隠されていて、表情を読み取ることは叶わない。

スキマが閉じて、僕の耳はおとなしくなっていた。

「ミコトさん……」

僕の近くに腰を下ろした藍は、申し訳なさいっぱいの声色で僕の名を呼ぶ。

そんな藍に、僕は胸元から二枚の羽を取り出して藍に手渡した。

「取れちゃったんだ。悪いけど、つけ直して欲しいな。その黒い羽

も一緒に」

「……ハイ」

今にも涙が零れそうな笑顔で、藍は返事をしてくれた。

55：「命の結界」(後書き)

捏造少し含みました。

56：「紫色の感情」(前書き)

少し遅れてしまいました……すみません。

## 56・「紫色の感情」

「藍、貴方はどうするの？……彼のこと、忘れたいかしら」

「……紫様は」

「私は……忘れることはできないわね。責任の意味でも、理性的な意味でも。それに、いつか彼が帰ってきたとき、私が覚えていなければたら封印が解けないから」

「そうですか。……では、私の記憶も紫様が戻してください」

「……いいのね」

「そうでもしないと、仕事が手に付きそうにありませんから」

私の目の前で、無理矢理な笑顔で藍は言った。

出来上がった結界をしばらく眺め、私に向き直り目をつぶる藍。

私は、彼女の頭に手を翳し、藍の中にある彼の記憶を心の底に閉じ込める。

もう、何度この作業を繰り返してきたらう。

ふらりと揺れる藍の身体を抱き留め、橙の横に寝かせる。

私は、屈んだ体勢から立ち上がり、彼の雰囲気がありありと感じられる結界を細い視界で見つめた。

「……本当に馬鹿。どうしてそうなのかしらね、貴方って」

もしかしたら何か答えが返ってくるのではないか。

ありえない希望は、当然ながら沈黙で消し飛んだ。

無意識に扇子を開き、見ている者など存在しないのに口元を隠す。

「ここよ」

「神社か……」

結界の基点となる博麗神社。

彼は、自分が死ぬその場所に到着し尚、いつも通りに振る舞っていた。

虚勢や空元気などではない。本当に、いつも通りに。

「すでに式化は済ましたから、後は結界を創り始めるだけよ」

「ねえ、一つ聞きたいんだけど」

「何？」

「結界に僕を組み込むってことはさ、僕自身が結界になるってことだよな？」

私はその問いに、言葉は返さず頷くことで答えた。

ここで、私はてっきり後悔の言葉が聞けると思った。

『怖い』

その一言でいい。

それが聞ければ、私は彼が逃げ出そうと構わなかった。

彼の表情を見ようと、私の横に立つ彼の顔を横目で見る。



「……………！」

私は信じられなかった。

「そっか……。僕が結界ね……………」

彼は、笑っていた。

「つまりは、僕が幻想郷を守る礎になるんだろ？なら、僕の『命』も捨てたもんじゃ……………っ!？」

「やめてっ!！」

瞬間、私は彼を突き飛ばし、倒れた彼の上には乗った。

彼の両肩を掴み、揺する。

今の今まで溜まっていた感情が、とうとう溢れてしまっていた。

「どうして、どうして貴方はそうなの!!前もそうだった。なんの躊躇いもなく私に力を分け与えて、結果貴方の力が数分の一に落ち込んでも貴方は気にもしない!!人のことばかり考えて、そのくせ自分のことは何一つ考えないで!!！」

「……………」

「どうしてそんなことができるの?どうして簡単に自分を捨てられるの!!……………っ、正直に言いなさい。死にたくないでしょう?生きていたいでしょう?怖いんでしょう!?言いなさいよ!?!?言ってくれさえすれば、私は……………!?!？」

いつしか流れていた涙。

それが彼の頬に落ちると、彼が私の口に指を当てたのは同時だった。

「……なんでよ」

指が口から離れ、呟いたのは私だった。

なんで、笑うの？笑っていられるの？

言葉にならない叫びが、うまく表に出せずに嗚咽となって私を苦しめる。

「怖くないよ。紫」

肩を揺さ振っていた私の腕には、すでに力は籠っていないかった。

彼はすんなりと起き上がり、私の身体を抱き寄せる。

「怖くない。だって、皆を守れるんだ。幻想郷を、幻想郷の皆を守ることができるんだから」

「っ、……死ぬ、のよ？」

「……ああ、死ぬ。けど、意味がある。『死ぬことに意味がある』んだ」

優しく、背中に回された腕が私を包む。

彼の身体は、震えてなんていなかった。

「僕はね、紫。僕が逃げることで、この幻想郷が危なくなることの方がよっぽど怖い。おかしくて、正しくないとしても、死ぬよりそっちの方がもつとずっと怖いんだ」

「……なんで」

「はは、聞いてばかりだね、今日の紫。……言い方を変えようか。僕は、自分が何も出来ずに生きているのがなにより嫌いなんだ。生

きて迷惑かけるくらいなら、死んで周りの負担を無くす。そんな考え方してるから」

「……………?」

腕の力が強くなる。

もしかして、今の言葉は。

「……………何か、昔にあったのかしら」

「さあね、忘れたよ」

嘘だ。

証拠に、口調とは裏腹に私を抱く力がどんどん強くなっていく。

先程の、やけに具体的な言葉。

もしかしたら、昔にそんな状況に陥ったことがあるのかもかもしれない。

生きていることで周りに負担をかけ。

結果、彼は生より死を望んだ。

そんな、私には想像がつかない状況に。

彼は不意に私を抱き上げて地面に下ろし、立ち上がった。私も、立ち上がる。

「さて、気が変わらないうちに済ませてしまおうか」

私の中にある、彼を助け出したい感情が薄まっていた。

彼は自分の耳飾りを外し、私に手渡す。

これに彼を封印し、結界に組み込む。数秒前まで考えたくもなかったことが、今はすんなりと頭に浮かんだ。

彼の耳が、ピクピクと動いていた。

「じゃあ……いくわ」

ぎゅっ。

「さっすま」

ぎゅっ。

「……また、会える」

ぎゅっ。

「当然」

ぎゅっ。

「さよなら。我が主人よ」

カラァン！と、耳飾りが床に落ちる。

もう、そこに彼はいなかった。

「……………どろろ……………どろろ……………」

膝をつき、流れる涙を拭いもせずに。

「わああああああああ……………！！！！！！」

ただ、泣いた。

「う、ん……。あれ、私……」

「ようやく起きたのかしら？主人を置いて昼寝とは、良いご身分だ  
こと」

「へ……？……はっ！す、すみません紫様っ！！ほら橙、起きろ！  
うにゃ……」

「早くしなさい。大結界に反抗する妖怪どもをなんとかしに行くわ  
よ」

「はい」

スキマを開き、予想通り沸いてきた小、中妖怪達の目の前に現れる。

私には、立ち止まっている暇などない。

今はただ、押し寄せる感情に負けないように  
。

「 そんなに急いでどこに行くのかしら？」

私は私のできることをしていこう。

56：「紫色の感情」(後書き)

上手く描けただろうか……。

そこはかかない不安が私を襲った。

57：「時を経た幻想郷 首を傾げる天狗達」

「うん……」

「？」

幻想郷、妖怪の山。

鬼の姿が消え、天狗が住んでいるこの山の上空をいつもの様に飛び回っていた鴉天狗 射命丸文は、首を傾げて空中で止まった。

「……気のせいですかね」

小さなうめき声のような音が聞こえた気がしたのだが、と再度首を傾げ、改めて飛び立とうと翼を広げる。

今日は新しいネタを求めて幻想郷を飛び回る予定だし、と心の中で呟いて、

「うん……」

「……気のせいではないみたいです」

飛び立った方向から急旋回し、森の中へと飛び込む文だった。



「うう……」

「おやおや……これはまた珍しい」

翼をたたみ、声の主に近付いていく。

遠目から確認出来たことは、灰色だということ。

少し近付いてわかったのは、人間ではないということ。

また少し近付いて、猫らしき耳と尻尾が目についた。女の子であることもわかった。

そしてすぐ近くまできて、彼女がボロボロであることが確認できた私は、

「……？」

少しだけ心にひっかかるものを感じ、気が付けば彼女を抱き上げていた。

どうしてか、彼女を殺す気にも放って置く気にもなれない。たどえここが天狗の領地で、彼女が勝手に傷付いて倒れていただけだとしても、見殺しには出来なかった。

とても軽いその身体を抱き上げたまま、私はすぐに飛び立った。

「あれ、文さん」

「うあ、椛！」

「なんですかその反応は……。というかその娘、もしかして」

「あややや、では……！」

椛に見つかる前に、と考えた瞬間に出会ってしまつとは運が悪い、いや椛の前に彼女を見つけることができた時点で幸運なのか。椛の能力は探索という点では抜群の力を発揮するのだから。

しかし、幻想郷最速と謳われた私に追い付き捕まえられる者など……

…。

「……………?」

いた……………のだろうか。

いや、私に速さで勝てる妖怪なんて少なくとも私は知らない。なら人間、いや人間こそありえない。ただの人間が私に追い付くような速さを出したらその時点で命を捨てることになるだろう。ただの人間なら、だが。

「……………まずはこの娘を安全な場所に連れて行きますか。考えるのはそれからにしましょう」

「……………うん……………?」

「目が覚めましたか?」

「っ!」

「あやや、そこまで警戒しなくとも」

私の部屋、布団の中で目が覚めた彼女は、私を見るやいなやかけ布

団を蹴飛ばして四つん這いで私を睨みつけた。二本の尻尾がピンと立ち、あからさまに敵対心を見せる彼女に私は苦笑いする。

「こんなとき、あの方みたいな能力があれば楽なんでしょうね」

やれやれと立ち上がり、どうしたら警戒を解いてくれるかを考える。

……ん？

「あの方とは、誰だったか……」

「……？」

自然と呟いた先程の言葉に違和感を覚え、彼女に向けて踏み出した足が空中で止めた。

そういえば、杖を撒いた時にもこんな違和感を感じた気がする。だがしかし、やはり思い出そうとしてもかけらも思い出せない。

「あの」

「！」

片足を上げたまま腕を組んでいる私をじっと見つめていた彼女が、いつしか正座の姿勢へと変わっていた。

そこで自分の体勢がかなりおかしなものだと気付いた私は、たはは、と笑いながら足を踏み出した。

結果オーライ、彼女の警戒は緩んだようなので良いとしよう。思い出そうとしても思い出せないものは、ふとした時に思い出すものだ。別に思い出せなくても死ぬわけでもなし、深く考えないことにする。私は怪訝そうに見つめてくる彼女に苦笑いを返し、彼女の前に腰を下ろした。

「全く……逃げ足はぴかーですね。いえ、速さそのものがぴかーな  
んだけれど……」

一目散に飛び去った文さん。彼女を追いかけるのは無理だ、と諦めた私は、割とゆっくりと屋敷へと帰っていた。

私の能力、『千里先まで見通す程度の能力』で侵入者を見付けて飛んできたはいいが、そこにはすでに文さんがいた。

彼女の腕の中には見知らぬ灰色が目立った妖獣らしき少女の姿。なんの妖獣かは確認出来なかったが、二又の尾と私と同じ様な耳が見られた。あれは、スキマ妖怪の式の式である（ややこしいが事実なので仕方がない）化け猫のものと似ていたので、もしかしたら猫の妖獣かもしれない。

「灰色の猫の妖獣……?」

屋敷が見えたところで、私は動きを止めた。

何か、ひっかかる。

「……まあ、一目見ればわかるでしょう。文さんの部屋にいるみたいですし」

少しだけ芽生えた焦燥感。

私は、自分が焦る理由もわからないまま飛ぶ速さを上げて屋敷へと向かった。

「文さ、ん……」

「あ、椀!」

「?」

私は勢い勇んで文さんの部屋へと繋がる襖を開けた。スパァン!と小気味よい音を立てて開いた襖の先に居たのは、

「……何をしているんですか?」

「あやや……いや、これは、ですねえ……」

文さんの黒い翼を、不思議そうな顔でちまちま触っている少女の姿があった。

予想もしてなかった光景に、思わずポカンとしてしまう。今、私の顔はなかなか間抜けなものだろう。

気を取り直し、私は二人の近くへと歩み寄る。

「も、椀！」

「どうしました？」

「い、いやあ……その」

途端に慌てふためいた文さん。灰色の少女を庇うように私の前へと踊り出る。

私はそんな文さんに目を見開き、しかし彼女の考えていることがわかって表情を緩めた。

「別に彼女をどうこうする気はありませんよ。……ただ、気になることがあります」

「へ？」

文さんの横を通り抜け、私の姿を見てビクリと身体を震わせた少女を見つめる。

やはり、なにかがひっかかる。

「……なにか、どこかで知ってるような……。とくに、この灰色の姿が……」

「……椀ですか？」

「文さんも？」

振り返り、腕を組んでいた文さんを見る。

「ええ。それでこの娘を見捨てるのが出来なかつたんですよ。……まあ、何がひっかかっているのかはさっぱりですがね」

そう言う文さんから視線を戻し、改めて彼女を見つめる。

私よりも頭一つ小さい身長。身長割に子供っぽく見えるのは、どこかビクビクとした雰囲気の子供だろうか。

足まで届く灰色の髪に、灰色の瞳。そして、そして少女の身体には少し大きめの着物。袖は手が隠れてしまっているし、裾は内側に折り曲げて金属の輪で留めていた。こちらまで灰色。

じっと見つめていると、彼女は不思議そうにこちらを見て首を傾げていた。

「……少しモヤモヤしますが、まずはいいでしょう。貴女、名前は？」

考えてもわからないものは仕方ない。

とりあえず、彼女と意思の疎通をはかって見ることにしてそう聞いた。

が、彼女は首を横にふるふる振っていた。

「名前がわからないの？」

ふるふる。

「……？じゃあ、忘れたの？」

ふるふる。

「なら……」

「桜、彼女には名前が無いらしいです。貴女が来る前に私も聞いたんですが、名前という概念そのものが無いみたいで」

「名前の概念が、無い？」

「はい。それに、喋れないわけでも無いみたいですが、答えたくないことにはただ首を振るばかりでして……。ただわかるのは、彼女が猫の妖獣であるということだけ。他は答えようとしません」

それが答えたくないのか、本当にわからないのかはわかりませんがね、と文さんは続けた。

それに少し不安を覚えた私だが、まあ見た限り強大な力を持っているわけでもなさそうだし、そもそも事件を起こすようには見えないので大丈夫だと判断。

頭を切り替え、彼女に話しかける。

「身体は大丈夫なの？」

「……………」

コクリ、と頷く彼女。確かに、最初見た時はボロボロだったが、今はそれが全く見られない。

「これからどうするの？」

「……………」

「行くの？」

またも頷く。私は立ち上がり、文さんと顔を見合わせた。

「どうします？」



「山の外まで送ってあげましょう。他の哨戒天狗に見付かったら厄介ですから」

「……ですね」

そんな会話を交わし、私は彼女に近寄った。

そして話の顛末を彼女に話す。コクリと頷いた彼女の尻尾は、嬉しそうに揺らめいていた。

「ここまでくれば大丈夫。どこへ行くかは知らないけど、気をつけ

てね」

「……ありがとう」

それだけを言っで頭を下げ、彼女は見た目に反する速さで私達の前から消えた。

私と文さんは、その見覚えのある速さを見て同じように首を傾げればかりだった。

57：「時を経た幻想郷 首を傾げる天狗達」 (後書き)

少女の正体は……。

58：「時を経た幻想郷 守護者の疑問」(前書き)

更新遅れました……。

58：「時を経た幻想郷 守護者の疑問」

人里のとある寺子屋。

誰もいない教室を見渡し、彼女 上白沢慧音は大きな伸びをして息を吐いた。

今日の寺子屋は午前中で終わり。授業を受けていた子供達も今は元気に遊んでいることだろう。妖怪が人里では人間を襲わなくなったために、今ではそんな心配は無用。人里の守護者である彼女としては安心の一言である。

が、しかし警戒を怠るわけにはいかないわけで。

「うん……？」

人里に見知らぬ妖気を感じ取った彼女は、いつもと変わらぬ足取りで寺子屋から出ていくのだった。

「アイツか。なんというか……地味な色合いな癖に目立つ妖怪だな」  
通りに出て気配のする方向へと顔を向けると、そこには案の定妖怪の姿があった。

大結界が張られてからは、妖怪も普通に人里に出入りするぐらいだから別に何も珍しいことではない。

しかし、その妖怪、いや妖獣の姿はある意味異質だった。簡単に言えば灰色。

難しく言っても灰色である。

「灰色と言えば、アイツを思い出すな……。うん？アイツ？」

……自分で言った言葉に疑問を覚えた。疲れているのだろうか。

だがその言葉に疑問を拭い切れない私は、しばらくその灰色を眺めて考えに耽った。

どこかで見たような、しかし全く覚えがない不思議な感覚。

「そういえば、資料の中に同じような灰色の妖怪がいたな。それか？……いいか、そういうことにしておこう」

私の資料、稗田家が代々纏めてきたものの中に、あの妖怪と同じ灰色の妖怪が記されている。

伝説の妖獣であり、速さでは他の追隨を許さない。曰く人の感情を自在に操ることが出来たという化け猫だ。

しかし、大結界が張られてからはその姿を見た者はいないと言う。

それどころか、その化け猫の姿を見た、という情報すら無い。記録には残っているが、記憶には残っていない。まさに伝説の妖獣となっている。

「いや、今はそんなことはどうでもいい」

私は軽く頭を振り、店先に並んでいる林檎をじっと見つめている彼女に近寄った。

私の接近に気が付いた彼女は、二本の尻尾をピンと立てて驚いてい

た。

「見ない顔だな。名前は？」

「……………」

「どうした？」

当たり前障りの無い言葉を選んだつもりだが、彼女は尻尾をフラフラと揺らしながら私の顔を見つめていた。まるで何かを確かめるように、だ。

「私の顔になにかついてるか？」

「……………」

ふるふる、と首を横に振る彼女。

むう、と思わず腕を組んで唸ってしまった私だが、やはり彼女は私の顔を見つめ続けていた。

こうしていてももちが開かない、どうせだから家にも招待しようか、と考え、

「あうっ！」

私の後ろで、小さな子供が転んでしまっていた。

子供は俯せの状態から身体を起こして座り込み、涙目になりながら擦りむいた膝を眺めた。

土が付いた傷口から血が滲み出て、なんとも痛々しい。

「……………」

すると、相変わらず何も喋らない彼女がふらふらと子供の所へ歩い

ていく。

何をするのか。もし危害を加えるようだったらその場で消し飛ばすことも考えながら私も後を追った。

「……痛い？」

しゃがみ込んだ彼女の問いに、子供は今にも泣きそうになりながら頷いた。

それを見た彼女は、うつすらと微笑みを顔に浮かべ、血が流れ始めた傷口に手を伸ばす。

「……『分けて』あげる」

そして、彼女がそう言った時。

「……！」

神々しい、それでいてどこか柔らかな光が彼女の手から現れた。思わず息を呑む。

「痛い？」

彼女がそう言いながら手を離す。

信じられないことに、傷口は無くなっていった。

驚いている子供は、それでもすくっと立ち上がり、彼女にペコッと頭を下げた走り去った。

「……」

子供が走り去った方向をこれまたじっと見詰める彼女。



その身体が、不意にフラリと揺らぐ。

「お、おいつ!?!」

驚きで身体が固まっていた私は、それを見て慌てて彼女を抱き留めた。トスンと右腕に受け止めた彼女の身体は驚く程に軽く、またしても私を驚かせる。

「大丈夫か?」

「……………」

薄く開かれた眼でコクリと頷く彼女。全く、信じられるわけがなからう。

「すぐそこに私の家がある。休んでいくがいい」

返事を聞かずに彼女を背負う。その際、フラリと揺れる尻尾が見えた。

彼女を部屋に降ろし、壁に寄り掛からせて座らせる。

たたんでいた敷布団をその横に敷き、どうぞ、と一言言ってあげると、彼女は素直にそこに横になっていた。

「これは……」  
「うん？……ああ、それは私が使っている資料だ。悪い、整理していた最中なものでな」

寝転がったそばにあった私の資料に手を伸ばした彼女は、その内の一枚を手を取った。  
その紙に記されているのは、彼女と同じ灰色の妖獣。

「その妖獣はもう長いこと姿を見せていない。もしかすると、もう死んでしまったのかもしれないな」  
「……………」

私がそう言っていると、彼女は紙をゆっくりと元の場所に戻し、ゴロンと寝返りを打って天井を見上げた。  
だんだんと細くなっていく眼は、しかし完全に閉じることが無い。  
まるで天井の向こう側、空を見通しているかのよう。

「慧音。いるか？」

ガラガラ、と玄関が開く音。それに反応してそちらを見ると、そこには白髪赤眼の女性の姿。

「妹紅。どうした？」

言いながら視線を戻す。彼女は既に目を閉じ、規則正しい呼吸を繰り返していた。

随分とまあ……警戒心が無いと言うか。

「！慧音、そいつは!？」

「ど、どうしたいきなり。彼女のことなら私も知らない。ついさっき出会ったばかりだ」

「……そうか。慧音もだったな。いや、何でもない」

彼女を見た瞬間に慌ただしくなった妹紅だが、驚きながらも返した私の言葉を聞くと急におとなしくなっていた。

私はそんな妹紅に疑問を覚えながらも口には出さず、妹紅と共に眠っている彼女を見つめた。

「……………」

「礼ならいい。とにかく気をつけてな」

しばらく眠り続けた彼女は、夕方に目覚めるや否やふらふらと立ち上がり、私にぺこりと一礼した。

一応妹紅がついていくと言って共に出ていったが、果たして大丈夫なのだろうか。

部屋に一人残された私は、なんだか複雑な気分で残った仕事に向かう。

纏めた資料の一番上、灰色の妖獣がこちらを見ているように見えた。

58：「時を経た幻想郷 守護者の疑問」(後書き)

しばらく、こんな感じで進んでいきます。

面白みに欠けるかもしれませんが……

59：「時を経た幻想郷 蓬莱人と月の頭脳」

とある竹林。

進めど進めど景色が変わらず、かと思えば次の日には全く違う景色へ変わる。

迷った人間は数知れず。竹林に入ったきり帰らない者が多発するこの場所は、何時しか人々からこう呼ばれるようになった。

『迷いの竹林』

そんな危険極まりない場所を、平然と歩く女が二人。

灰色の妖獣を引き連れて歩く白髪赤眼の人間 藤原妹紅は、代わり映えの無い道をただ歩き続けていた。

「なあ」

「？」

私が話し掛けると、少女は首を傾げて反応した。立ち止まった私から数歩先の場所、規則正しく鳴っていた着物の金具がチリンと鳴ったきり音を止める。

「私の事を、知っているか？」

「……………」

「別に答えたくないならそれでもいい。ただ、私はそれ以上聞く気も無いから」

黙る彼女を追い越し、私は少し湿った土を先程までと同じように踏み締める。

向かっている場所まではあと少し。とっとうと行ってしまおう。

「……………」

私の足音より少しテンポが早い音が後ろからついてくる。

私はそのまま、何も言わない彼女を引き連れて進んでいった。

ザワザワとさざめく竹林を見上げ、空を、遠くを眺める為に顔を上げた。

不覚にも、涙が零れそうだったから。

私には、ミコトさんの記憶がある。妖怪賢者に選択肢を与えられた私は、記憶を残す選択肢を選んだ。その時のことは、今でも鮮明に覚えている。

「……話はわかった。でも、何故それを私に話した。記憶を消すなら、話しても話さなくても変わらないだろう」

「私もそう考えていたわ。けれど、全ての妖怪、人間から彼の記憶を一時的にでも封印してしまったら、彼の存在そのものが危うくなってしまう。だから私を含め、何人かは彼の事を覚えていなくてはいけないの。……彼が消滅する、なんて可能性、かけらでも残してはおけないもの」

「結界が消えてしまうから？」

「建前はそうさせてちょうだい」

一瞬悲愴感を感じさせる表情が見え、しかしすぐにそれは消え去る。彼女とて、辛いのだろう。

私は、しばらく考えた後に記憶を残す道を選んだ。

選択肢を出された時点で、私の答えは決まっていたように思えた。

「……………うん？終わったのか」

トントン、と背中を小突かれ振り返る。そこには、別段変わらない表情の少女がいて、私を見上げていた。そして、ぺこりと頭を下げると、地面を蹴って竹林の中へと消えていった。その姿は、さながら灰色の風のように。

「……………帰るとするか」

永遠亭に背を向けて、少女が消えた方向とは逆方向に足を向ける。

何が起きているのかはわからない。

彼女が何者なのかも、確信は得られない。

けれど、私の中の何かが告げているから。

『その時』が来るまで、涙はしまっておこう。



「これは……薬？私が作ったものみたいね」  
「……………」

少女が私に渡してきたものは、灰色の小さな箱だった。中には、これまた灰色の丸薬がぎっしりと詰まっている。

「変ね……。これは貴女にじゃなく、彼に作ったものなのだけれど……。あら、彼とは、誰だったかしら……」

箱を閉じ、疑問を覚えながらも目の前の少女を見つめた。  
そういえば、彼女の姿にもどことなく見覚えがあるが……気のせいだろうか。

考えていると、少女はぺこりと頭を下げ、妹紅にも頭を下げると信じられない速さで竹林へと消えていってしまった。

「おかしいわね……」

あれだけ特徴のある妖怪なら、忘れるはずはないのだが……。

モヤモヤした気持ちはなかなか消えず、私は腕を組んだまま部屋へ

と戻った。

59：「時を経た幻想郷 蓬莱人と月の頭脳」(後書き)

短い上に、現在物語は膠着状態。

『早く物語進めろや!』なんて声が聞こえてきそうな今日この頃。

60：「時を経た幻想郷 鬼が二人に散りかけの花。そして目覚める『私』と」

サブタイトルの長さ。

しかし変えるつもりはさらさらない。

「近頃は暇だねえ……。アンタがいないだけで、アタシは本当につまんないよ」

森の中、とある鬼がそう呟いた。

薄い桃色の髪を無造作に振り乱し、しかし艶やかな髪はすぐに纏まりを見せる。頭にある一本角を触りながら歩く彼女は、手頃な岩を見つけるとそこに腰掛けた。

彼女の名は魅王桃鬼。

万の時を生きる最強の鬼にして、最初に鬼神を名乗った最古の妖怪。そんな彼女は、心底つまらなそうに欠伸を連発していた。

が、

「おやあ……。どこかで見た灰色だ。しかし、アイツでは無いねえ」

桃鬼は言いながら岩から飛び降り、遠目に見えた灰色に向かって歩き始めた。

「ふむ。確かにこれはアイツの着物だ」

「……………」

「にしても……。アンタは何者だい？この着物を着ている妖怪といやあ、アタシの記憶が正しければ一人しかいないはずなんだが」

テコテコと歩いていた灰色に追いついたアタシは、特に何も考えずにそいつの前に出た。

驚いているそいつの脇に手を入れ、無造作に抱え上げる。手足がわたわたしているが、そんなのは気にしない。

「アイツが消えて早百年……。いつかは帰ってくるとは思っていたが、なんだかややこしいことになってるみたいだねえ。アンタ、アタシを知っているだろう？アタシだけじゃなく、志妖のことだって覚えてるはずさ」

「……………」

わたわたしていた手足が動きを止め、キョトンとした瞳で見つめてくる。

黙り込むことでやり過ぎそうとしているのか、もしくは……………。

「まあいいさ。言いたくないならそれもよし」

少女を降ろし、改めて抱き上げる。特に抵抗しないあたり、やっぱりコイツはアタシを知っている。

「どうせ次は志妖だろう？アレはアンタ……………いや、ややこしいからいいか。とにかく行くこうか」

腕の中で小さく頷く妖獣を見て、私は飛んだ。向かうは妖怪の山、アタシの洞窟だ。

「志妖、いるかい？」

「桃鬼様。どうされましたか……その、妖獣は？」

「なんの変哲も無い化け猫さ。アンタに会いたかったらしい」

私が洞窟の中でくつろいでいると、存外早く桃鬼様が帰ってきた。

立ち上がってそちらを見れば、見知らぬ灰色の妖獣の姿。思わず言葉に詰まるが、私は冷静に聞く。

返ってきた答えは微妙なものだったが、桃鬼様が言うなら危険は無いのだろう。

「私に会いたかった……？」

確かめる為に私は自分で言い直すと、灰色の少女はコクリと頷いて私に近寄ってきた。

そして、私の全身をまじまじと見つめること数十秒。

その間、私は言いようのない感覚に襲われていた。この少女の灰色の瞳に見つめられるこの感覚、私はどこかで経験している。

……はずなのだが、最近はもちろん、遥か昔を思い返しても、そんな記憶は存在しなかった。

「あ……」

貴女は何者か、と聞こうとした瞬間、少女はぺこりと頭を下げると、

地面を蹴ってその場から消えた。その瞬間に発された妖気は凄まじく、思わず尻餅をついてしまう。

「ふむ……。まだまだ本調子じゃあないみたいだねえ。今は、身体を慣らしてるってところか」

何故だかとても楽しそうに呟く桃鬼様の言葉。  
私には意味がわからなかった。

妖怪、風見幽香は向日葵畑で溜め息をついていた。  
なぜだかこの数十年、自分の身体にぽっかり穴が開いたような感覚によく襲われる。現在もその真つ最中である。

「何かしらね、この喪失感は……」

らしくないとは分かっていつつ、日傘を傾けて空を仰ぐ。

昔の自分は、もっと充実していたように思う。

そう……。数十年前までは、確かに充実していたのだ。  
だが、何故充実していたのかが全く分からない。

生活自体は変わっていないはずだ。大好きな花に囲まれて、自由気ままに過ごす。それは、何時だろうと変わらないし、これからだってそう過ごしていくだろう。



だというのに、今の生活には何かが足りなかった。

「参ったわ……。私らしくもないけれど、今は何もする気が起きない」

私は今日も元気な向日葵の花をピンと弾き、喪失感を感じながら家へと向かうことにした。

そんな姿を遠くから見つめていた灰色の妖獣は、尻尾をふらりと揺らすとその場を後にした。

今度はただ歩き、ゆっくりと移動する。

長い間封印されていた身体は、『彼』の知り合いを見て回るついでに慣らしていった為に大分動いてきた。

妖力はこの百年で既に全盛期と遜色ない程まで回復。後は何が足りないかと考えれば、『彼』自身が持つ能力のみだろう。

最も、この妖力も『彼』が生きていく中で得ていったものなのだけれど。私自身の妖力は、『彼』と同化したその時に失われているのだから。

「……………そろそろ、かな」

大結界は私がここに現れた時、既に安定している。故に『彼』が目覚めるのもそう遅くない。

大丈夫、もういつ『彼』が戻ってきてても、何の問題も無いのだから。

私が全てを託した『彼』。

ただの猫として一生を終えようとしていた私を、その達観した瞳で

真つすぐに見てくれた『彼』。  
なぜだかは分からないが、『彼』になら全てを託しても良いと思っ  
た。そして、その選択は間違いではなかった。

「……………」

木の枝に跳び移り、腰掛ける。

この行動も慣れたもの。『彼』と同化してからも、『その前』から  
も、私はこうして眠るのが好きだった。

私は、『彼』と同化する前、つまり『私』が何万年も昔から生きる、  
俗に言う大妖怪という存在だった頃。

歳経た猫が『私』という人格を持ち、当然ながら妖怪として生きて  
いた。

特に意味もなく人を襲い、何となく生き、気まぐれで人を助けたり  
して。

そのすばしこさから私を捕まえられる人間は存在せず、気が付けば  
万を生きる大妖怪として君臨していた。

しかし、時は流れ、人間は次第に妖怪を忘れていった。

力を失っていく妖怪は、当然ながら人間達によって淘汰され、凄ま  
じい勢いで数を減らしていった。

その中でもなんとか生きていた私だったが、最早妖怪として生きて  
いくには時代が違う。残された道は、単なる猫を演じて生きるだけ  
の、無気力な生活だった。

野良猫としてただ無気力に生きていく。大妖怪の名も完全に廃れた  
私。

そんな時に出逢ったのが、『彼』だった。

ただでさえ弱い人間の中で、更に弱り切っている脆弱な青年。  
本来なら気にも止めずに進んでいたはずが、私は見てしまったのだ。  
『彼』の瞳を。

目が合つて数秒、不覚にも動きを止めていた私に、『彼』は震える  
腕で頭を撫でてくれていた。

この時すでに、私は『彼』を気に入っていたんだと思う。  
無気力な生活をしていた私に、少しだけ活力が芽生えた瞬間だった。

『彼』と出逢つて約二十日。『彼』に逢うことに楽しみすら覚えて  
いた私は、『彼』の様子がおかしいことにすぐ気付いた。

死期が、近い。

腐つても大妖怪、それぐらいのことはすぐに分かる。

『彼』もそれは悟っているのか、いつもより深く、優しく、私の身  
体を撫でてくれた。

そして、目を細めて、私に言ったのだ。

連れて行ってよ。

それきり、彼の腕は動きが鈍くなった。

私は思った。『彼』を救いたいと。もっと『彼』と一緒にいたいと。  
……もっと、『彼』に生きていて欲しい、と。

そして、思い出した。

私の能力、『命を分け与える程度の能力』、そして、『時を越える

程度の能力』の存在を。

迷っている暇も、理由も無かった。  
能力を同時に発動。私の命を彼に分け与え、残された命を使い、過  
去へと飛んだ。

「……………」

こうして、『私』と『彼』は一緒になった。

私はもちろん後悔していないし、『彼』も感謝してくれている。  
私個人に残された能力は『命を分け与える程度の能力』だけだが、  
それも気にはしていない。もう時を越える必要もないからだ。

「……………早く起きてくれないかな。表に出てるのも疲れてきた……………」

元々無口な私だが（口下手とも言つ）、独り言なら普通に言つ。『  
彼』の影響もあるのだろうか……………。

「……………？」

木から飛び降り、辺りを見渡す。

一瞬だけ、強大な妖気が感じられた。

「……これは？」

「吸血鬼よ」

「!？」

いきなり現れた空間の裂け目。その中から現れた女性　八雲紫だ  
ったか　が、これまたいきなり私を裂け目に引っぱりこんだ。

「はじめまして、が正しいかしらね。いきなりだけど、悠長に話  
てる場合じゃないから説明はしないわ」

「……？」

「本当に間が悪い……！よりによって、こんな時に目覚めるなんて  
焦った様子で言う八雲紫は、その口元を隠しもせずに歯を食いしば  
る。

そして、私を見ずにこう言った。

「こうなったら記憶が残っている全員を集めて、真正面から叩き潰  
すしか無いわね……」

「っ痛う……！っは……？」

結界から吐き出された僕は、派手に地面と激突して顔をしかめた。腰をさすりながら立ち上がり、尻尾が無いことに気付く。

「……あれ、これは……」

「動くな」

「!?!」

瞬間、喉元に突き付けられたナイフ。

目の前には、『先程までいなかったはず』の女性の姿。

「たった一人の人間がお嬢様の邪魔をしようなんて……。身の程知らずね」

そう僕に告げた彼女の背後には、真っ赤な館が鎮座していた。

……これは、ピンチかな？

60：「時を経た幻想郷 鬼が二人に散りかけの花。そして目覚める『私』と」

おしやく……

61：「舞い戻る灰色の風」

「っ！！」

喉に突き付けられたナイフを、怪我覚悟で右手でたたき落とす。右足を振り上げてメイドの肩に踵を落とし、衝撃に顔をしかめた彼女から僕は全力で距離を取った。五メートル程離れた場所で振り返り、

「死になさい」

次の瞬間、僕の周りに大量のナイフが出現。

「なっ……！！」

目の前に広がる銀色の凶器。それら全ての切っ先が僕の身体へと向いている。隙間など皆無。頭に過ぎるのは、大量のナイフにより構成される悪趣味なオブジェの姿。

「くそっ！！」

瞬間、僕は両腕をクロスしてジャンプ。膝を抱える形でナイフの雨に向かって飛び込んだ。皮なんてもんじゃない、腕と足の肉が綺麗に裂かれ、僕の身体に真っ赤な花を咲かしていく。

「……っ、随分切れ味の良いナイフなこと」



「どうもありがとう。あの場所でじつとしていれば楽に死ねたのに」  
言いながら彼女は胸元まで手を上げた。何も持っていないかつたはず  
のその手には、大量のナイフが現れる。

「能力か……」

「ええ。私に勝てたら教えてあげてもいいわよ？」

「くっ！」

瞬間、僕は右手を彼女へと翳した。

相手も能力持ち。しかもお互いにどんな能力かもわからないのなら、  
一か八か感情を操ってやる。グツと握り締めた拳。

メイド姿の彼女から伸びる見えない糸を引くように、思い切り右へ  
振り払う。

「……………なにをした」

「さあね。いつかはわかるだろうさー！」

怪訝そうに睨みつけてくる相手に向かい、地面を蹴り突進。

逃げたところで捕まるのは目に見えているから。

悲しくなるほど遅く感じる僕のスピード。それでも赤い悲鳴を上げ  
る足を無視して懐に飛び込む。

「ふんっ！」

「あっっ！」

勢いそのまま、腹に一撃。吹き飛んだ彼女に追い討ちをかけるべく、  
さらに足を前に出す。

二歩で倒れた彼女に並び、全体重を乗せた肘を落とすべく腕をたた  
み

「調子に乗るなっ！」

反射的に反らした顔の頬を掠めていく銀色。

恐ろしい、あの体勢から確実に急所を狙ってくるとは……！

視線を落とせば、すでにそこには彼女はいない。

彼女は僕の背後で、ナイフを手に持ったまま肩で息をしていた。

その姿を横目で見ていた僕は、あえてゆっくりと振り返った。だらりと下げた両手から滴る血が地面を潤す。

「……貴方、何者なの？」

「知りたいなら、僕に勝ってみろ。そうしたら教えてあげるよ！」

わざと相手を挑発し、自らを奮い立たせる。

この身体で出来ることなどたかが知れているが、敗北が死と直結する以上、簡単には諦められない。

「はあああああああ！！」

僕は咆哮と共に、彼女へと殴りかかった。

何なんだ、この男は。

メイド服を着た女　十六夜咲夜は、自分に突進してくる人間を睨みつけながらそう思っていた。

ただの人間なら、最初の一撃で終わっていたはず。今頃はナイフのオブジェを眺めて溜め息をついていたはずなのに。

「……………！」

顔面に迫る拳を鼻先で避け、右手に持ったナイフを男の胸へと突き出す。が、男はそれを赤く染まった腕で叩き落とした。

「っ」

怪我を負っても気にしないのか、この人間は……………！

男の血が目に入り、私は思わず後退した。

追い縋ろうとする男をナイフで牽制し、血を拭き取って向き直る。

「ぐ、う……………！」

苦しい男の声が耳に留まり、傷だらけの相手を眺める。

本当に何者なのだろう、この男は。

ただの人間ならすでに動けはしない程の傷を負いながら、それでも戦おうとする強い精神。

死ぬのが嫌で躍起になっているのかもしれないが、それでは説明できないこともある。

ひとつは、男の動き。

私のナイフを避ける身のこなし。先程の不意打ちなどは、あらかじめ予測しておかなければ到底避けられるものではない。

そしてもうひとつ。これはおそらくあの男の能力のせいだろうか…

「どうした、攻めてこないのか」

「……………」

震え出しそうな右腕を抱え、ナイフを握り締める。

理由はわからない。

理屈もわからない。

ただ、今。私は確かに

「ありえない……………!!」

この男に、恐怖している。

避けられたはずの男の拳。

腹部にジンジンと残る痛みが、更にその感情を大きくさせる。

同時に思う。

この男は、今ここで確実に殺さないと、後で必ずこちらが痛い目に遭う、と。

そう。

確実に、だ。

「よく頑張ったけれど、もう終わりよ。貴方は次の一撃で死ぬ」

男の周りにナイフを展開。

私は、銀色に囲まれた彼の表情を見て、思わず目を細める。

「誰が、死ぬって!？」

地面を蹴り、赤い色を撒き散らす彼。

ギリギリ一人抜け出せるぐらいの隙間から、『私がわざと作り出した隙間』からナイフの雨を脱出し、

「貴方ですよ」

次の瞬間、男の身体は無慈悲な一撃で吹き飛んでいた。我が館の門番、紅美鈴の拳によって。

「……残念ね。貴方とは、もっと違う形で会いたかった」

震えが収まった身体で、私は彼が吹き飛んでいったその方向に背中を向けた。

ただの人間が美鈴の、妖怪の拳を食らって生き残れるはずがない。

「戻るわよ、美鈴」

私は背を向けたまま言って歩き出す。

が、四歩程歩いたところで違和感を覚えた。

彼は確かに吹き飛んだ。あの勢いならば、後ろにあった森の木々を薙ぎ倒すぐらいは普通にするだろう。

だが、彼が吹き飛び、私が背を向けてから。

なぜ、物音一つしないのか？

「また派手にやられたものね」

「全くだねえ。そんなに血を流して……もう少しで死ぬところだ」

「また無理ばかりして……心配するこっちの身にもなれよ、本当に」

「……………！！？」

聞こえた声に、思わずナイフを構えて振り返る。

そこには、傷だらけの人間を支える、四体の妖怪の姿があった。

奇妙な空間の裂け目から身体を出し。

頭の角を掻きながら、恐ろしい妖力を纏い。

人間の姿をしているのにも関わらず、人間離れした容姿を持って。

「な……………！」

次の瞬間、私は自分の目を本気で疑った。

「紫……………桃鬼……………妹紅まで……………」

背後から聞こえた声に、僕は不謹慎ながら本当に嬉しさを感じていた。

視界が歪み、霞んでいるせいで姿はわからないけれど。

三人の雰囲気は、びっくりするぐらい変わってなくて。

ただ本当に、僕の心は安らいでいた。

そして、目の前にいる、灰色の『彼女』の姿。

「……………」

僕よりも小さな身長で、下から見上げる灰色の瞳が僕を見つめる。

『やっときてくれた』

「……………ああ」

『待ってたよ?』

「それは……………ごめんよ」

『早速だけど、貴方の中に戻っていいかな』

「……………」

『私は、貴方をここに連れてきた。今度は、貴方が私を連れていつて』

「……何処へ？」

『未来へ』

「……いいよ。約束する。僕が、君を未来へ連れていく」

彼女の手が僕に触れる。優しく握られた手。強く握り返す。  
流れ込んでくる、彼女の思い。

『私達は』

「一人でも」

『一匹でもない』

「君といるからこそ」

『貴方と一緒にだから』

「僕は僕でいられる」

『私は私でいられた』

思いが、重なる。

ふたつが、ひとつに交じり合っていく。



「だからこそ」

『だからこそ』

「もう一度一緒に」

『もう一度一緒に』

「僕と君が合わさって」

『私と貴方が交じり合い』

たったひとつの、命〔ミコト〕になるっ

「な……………!!」

目を開けば、もうそこに彼女はいなかった。代わりに、僕の中に確かに彼女の鼓動を感じられる。腕や足の傷は、完全に閉じていた。

僕の姿を見て、驚愕の表情でナイフを落とす相手。それもそうだと

う。ただの人間だと思っていた相手が、いきなりこんな姿になったのだから。

僕は彼女に近付いて、そのナイフを拾い上げた。

長い髪を後ろ手で纏め、一息でザクリと切断。一メートル強の灰色が、風に吹かれて飛んでいく。

「これで、元通り」

呟いてから、いつの間にか膝をついていた彼女に目を向ける。

同じように膝をつき、顎に指をあてて顔を上げさせ、僕は言った。

「僕が恐い？」

「……………!!」

ガタガタと震え出す彼女の身体。

僕はそれを見て、彼女の額に手を当て、

「つと」

同時に地面を蹴り、顔面に迫る蹴りを鼻先で避けてから更に後退。

「咲夜さんに近付くな!!」

軸足で地面をえぐったチャイナドレスの女は、鋭い眼光で僕を睨みつける。

見た目は人間だが、彼女は生粋の妖怪みだった。

尻尾をふらりと揺らし、僕は彼女に一言。

「ただ寝てもらおうと思っただけさ。あれだけやられて何も思わな

いわけじゃあないけど……」

切れた腕や足は、この身体になった瞬間に完治したし。そんなことを考えていると、今まで黙っていた紫が軽やかにスキマから降りていた。

いつもの（と言ったら違和感があるが）胡散臭い笑みはどこにも存在せず、そこには相手を射抜く厳しい視線しか存在しない。

「本当なら、ここらでミコトを連れて帰りたところなのだけれど……。そうもいかないみたいね。ねえ？ 吸血鬼のメイドさん」

「……お嬢様の邪魔は許さない……！」

「そう。なら、こちらは力づくでいだけだわ。千でも万でも好きナだけかかってきなさいな。片っ端から片付けてあげるから」

パチンと扇子を閉じ、スキマへとそれを放り入れる紫。

「紫。何の話？」

「細かく説明している暇はないけれど……。外界からやってきた妖怪が勝手に勢力を拡げて、この幻想郷を支配しようとしているのよ」

「で、そのリーダーがここの、その吸血鬼だと」

「話が早くて助かるわ。なら、とっとと終わらせて帰りましょう」

ザッ、と一歩踏み出した紫。

その瞬間、どこからともなく現れる大量の小妖怪達。

が、その妖怪達は五秒とまたず、に全て切り裂かれた。

「う……ん。こんなもんか」

右手の爪をギシギシと軋ませながら、灰猫は驚いている様子の相手に爪を向ける。

「改めて、自己紹介を……」

灰色の尻尾をふらりと揺らし、強大な妖力をその身体に充満させながら。

「僕はミコト。猫又だ」

伝説の妖獣が、幻想郷という舞台に舞い戻った。

61：「舞い戻る灰色の風」（後書き）

かなり遅くなってしまって申し訳ありません……。

単純に忙しかったのと、文章に満足がなかったのが合わさって  
しまい苦悩していました。

軽くなった頭に若干ながら違和感を感じ、首を回して身体を伸ばす。

「さて、紫。僕は何をすればいいのかな」

「目覚めたばかりの貴方に働かせるのも何なのだけれど……。貴方にはこの館の持ち主、レミア・スカーレットと話を付けてきてほしいわ。状況次第では実力行使もありえるから、気をつけて」

「それならアタシが行った方がいいんじゃないかい？ミコトはまだ目覚めたばかり。今見た限りじゃあ心配なさそうだが、カンが鈍っているかもだしねえ」

「私もそう思う」

僕の右で桃鬼が、左で妹紅が言う。

確かに戦闘のカンが鈍っていないとは言いきれないが……。

「いや、僕が行くよ。なに、心配はいらない」

「……悪いわね」

「なあにを紫らしくない。じゃ、とっとと終わらせてのんびりするとうとうか」

再度大きく伸びをして、妖力を足へと集中。

顔を上げ、どこから館に入ろうか考える。窓が極端に少ない造りをしているから、やはり入るとしたら玄関から。

考えが纏まり、さあ行こうと走り出す。が、

「行かせはしない！」

先程の二人が、僕の行く手を遮るように立ち塞がった。

思わず立ち止まるも、すぐに地面を蹴って二人の頭上を越えていく。

「待て！」

「おっと。アンタ達の相手はアタシだよ」

投擲されたナイフが空中でグシャツと潰れ、十六夜咲夜は声がした方へと振り向いた。

そこには、握りこぶしを空に掲げた鬼がいた。

「アタシが中で暴れたら、あの建物が壊れかねないからねえ……。なに、コイツラ相手、二対一なんてハンデにもならないから安心しな」

「……任せた！ミコトさん！」

「私も行くわ」

鬼に気を取られている二人の横を通り抜け、僕の傍へと飛んでくる紫と妹紅。

「……いや、気を取られているんじゃない。桃鬼から目を離すことができないのか。」

「桃鬼！」

「あいよ」

「落ち着いたら、一杯やろっ」

僕の言葉を聞いた桃鬼は、嬉しそうに表情を綻ばせ、

「約束だよ」

振り上げた拳を、地面にたたき付けた。地面にひびが入り、粉塵が舞い上がる。

「ハハハハッ！！さあ、かかってくるがいい！！」

強大な妖力が辺りを覆った瞬間、僕達は館の中へと飛び込んだ。

「くっ！お嬢様……！！」

「咲夜さん……！！ここは私に」

「よそ見とは余裕じゃないかい？」

「！！！！」

驚いた二人に、鬼神の一撃が襲い掛かった。



「また随分と広いな……。外見と中身が一致してないのは気のせい  
か？」

中に入った僕達を出迎えたのは、予想外に広い館内と、大量の妖精  
さんだった。

剣やら槍やら弓矢やら。たまにスプーンやフォークなどといったナ  
メた装備で襲い掛かってくるメイド姿の妖精さん達。

僕はそれを能力を纏わせた弾幕で撃ち落としながら、しらみつぶし  
に館内を走り回っていく。

「一体どこにいるんだ、そのレミリアとやらは」

スピードを出し過ぎたのか、ついて来ていたはずの紫と妹紅の姿は  
消えていた、

まあ、あの二人ならやられることもあるまい。

僕はある扉の前で立ち止まり、ドアノブに手をかける。

「ここか……！」

「ひゃあ！ゴメンナサイゴメンナサイ！……って、あれ？」  
「……………」

そこにいたのは、背中から黒い羽を生やした少女だった。よく見れ  
ば頭にもそれはあり、頭に羽とはまた変わっているな、などと場違  
いな感想が頭を過ぎる。

この部屋は厨房らしく、少女の前には半分に切られたケーキ。妖精  
さんが二体ほどもくもくと幸せそうに食べている。

見れば、羽を生やした少女の口には、白いクリームがついていた。

「……………では」

何も見なかったことにして、ゆっくりと扉を閉める。

さて、レミリアとやらは一体どこに……「待ってくださいあい！」えい、なぜ見て見ぬ振りをしたのに出てきた！

「このことは、このことはどうか誰にも……………！」

涙目で懇願してくる少女。別に誰にも言う気はないのだから、早く解放してほしい。彼女の突撃に耐え切れずに倒れてしまい、僕の上に覆い被さるようにして彼女は懇願しているのだ。

「あ」

と、ここで僕は思いついた。

「ねえ。君ってここに住んでるんだよね」

「へ？ああ、まあ……………」

「じゃあさ……………」

身体を起こし、キョロキョロと辺りを見回す。

誰もいないことを確認した僕は、彼女の口元のクリームを指で拭い。

「誰にも言わないからさ、この主人に会わせてくれないかな？」

そのクリームを彼女の口に入れながら、僕は耳元で囁いた。

「んむう！？……………む、うん……………」

「ああ、ごめんよ」

ちゅぱつ、と音を立て、彼女の口から指を抜いた。もちろん爪はしまっている。

「で、どうするの？」

再度聞くと、彼女は顔を真っ赤にしてコクコクと頷いた。あれ、感情を操った覚えはないが……。

「こあ。何をしているの？」

「「!!」」

廊下の端、暗がりから聞こえた声。瞬間、少女は僕の上から飛び降りた。

「お茶を入れに行くと言って帰ってこないから来てみれば……。貴方ね、外で騒々しくしてたのは」

パタパタと羽ばたきながら少女が向かった先にいたのは、本を片手に持った、紫の長い髪をした少女。

彼女の命を感じ、僕は違和感を覚えた。

この命は、人間でも妖怪でも、ましてや神とも違う。いや、どちらかと言えば妖怪なのだろうか……。

「君は？」

「パチユリー・ノーレッジ。魔法使いよ」

「魔法使い……通りで」

ははあと納得している僕は、その体勢のまま首を横に曲げた。

ジリジリと焦げた髪の毛を触り、今まさに火玉を飛ばしてきたパチユリーを見る。

彼女の隣にいる少女も、驚いたように彼女を見ていた。

「大方、レミイの邪魔をしにきたんでしょうけど。そんなことやめて帰った方がいいわ。彼女は吸血鬼。貴方のようなただの妖怪が勝てる相手じゃない」

「……嫌だと言ったら？」

「その時は、面倒だけど私が殺してあげる。それがせめてもの情けよ」

そう言った彼女の頭上に、高密度の火玉が浮かび上がった。先程の火玉の約三倍程の大きさ。それでいて密度は更に高密度。パチュリーとは数メートル離れているというのに、その熱気がこちらにまで伝わってくる。

「へえ。私の炎とどっちが強いかね」

と、背後からも強い熱気が。

振り返ればそこには、勇ましく燃える火玉を浮かべた妹紅の姿。

「ミコトさん。ここは私に任せて、先に」

「大丈夫か？」

「誰に鍛えられたと思ってるんだか。心配は無用だよ」

「……なら、任せた」

熱気が支配する廊下。僕は黒い羽の少女の横を通り抜け、

突き当たりの廊下、右の階段

「……………!？」

少女の眩きを聞き取った僕は、走りながら振り向いた。  
少女は、少しだけこちらを振り向き、またすぐに前を向いていた。  
すぐに突き当たりに到達し、右の階段を降りる。しばらく進んだそ  
の先には、一際豪華な扉があった。  
僕は考えることをせず、ただその扉を押し開ける。

そこには。

「ようこそ。我が紅魔館へ」

大きな椅子に座った、小さな少女の姿があった。

「君が……」

「ええ。吸血鬼にしてこの館の主人、レミリア・スカーレットよ」  
「君が……」

「僕はミコト。猫又だ。早速だけど、本題に入っても？」  
「構わないけれど。私は誰の言うことも聞く気はないわよ」

「……なら、これから僕が取る行動もわかるかな」

しまっていた爪をジャキリと伸ばし、身体に妖力を充満させて睨み  
つける。

しかし、彼女は依然としてその高慢な態度を崩さない。完全にこち  
らを見下している。

「……少しばかり、痛い目に遭わないとわからないみたいだな」

「貴様ごときに言われる筋合いはないわ」

「ほざけ！」

瞬間、僕は地面を蹴った。

一直線にレミリアへと突き進み、

「お嬢様ア！！」

「咲夜ツ！？」

いつの間にか僕の背後に現れていたあのメイドが、大量のナイフを僕に向かって一直線に投げ付けていた。

僕の身体はすでに空中、このタイミングでは弾幕も間に合わない。

「くっ……！！」

背後に迫る銀色の凶器。避ける術も、防ぐ術も持たない僕に、そのナイフは見事に突き刺さり。

「……………な……………」

突き刺さりは、しなかった。

地面に着地した僕は、呆然としているレミリアを無視して、全力で走った。

そして、ナイフが全身に突き刺さった彼女を、八雲紫を、抱き上げた。

「……フフ、馬鹿、みたい。なんで、こんなことしたのかしら」

「……！」

「大丈夫よ……。死にはしないわ」

ナイフが僕に当たる寸前、トン、と誰かに背中を押された。

その正体は、紫だったのだ。

けど、一体なぜ。

いつもの紫なら、こんな大怪我を負わずとももっと上手く立ち回っていたはず。

「なんて、顔、してるのかしら」

紫の身体から全てのナイフを抜き取った僕の顔に、紫の手が当てられる。

「……馬鹿」

「自分でも、そう思うわ。けど、あの時は、この方法が一番良いと……」

「わかったから。……わかったから」

紫を地面に寝かし、僕は彼女の身体に手を当てた。目を閉じて、能力を発動。

『命を分け与える程度の能力』

「傷が……」

聞こえた声は、レミリアのもの。

目を開けば、そこにはすやすやと眠る、傷ひとつない紫の姿。よかった、上手くいった。

「やっ」

紫を部屋の隅へと寝かし、僕は一人の人間を睨みつけた。

「……………!!」

身構える彼女。だが、もうその場所に僕はいない。背後から頭をわしづかみ、片手で持ち上げる。

「やってくれたな」

「あ……ぐ、ぎ……!!」

必死に抵抗する相手。僕はそれを見て、思い切り床にたたき付けた。



今の僕の表情はとても冷たいんだろうな、と自分でも思う。  
転がっていった彼女に近づいていく。が、三歩目でその歩みは止まった。

「それ以上咲夜に近付くな。殺すぞ」

「……誰が、誰を？」

巨大な槍を僕に突き付けているレミリア。  
彼女の感情が、僕に流れ込んでくる。

「そっか……同じ、だもんな」

ブンブンと頭を振り、レミリアの背後で倒れている彼女を見る。  
彼女は、レミリアを守るためにあの行動をとったのだ。

そして紫は、僕を守るためにあの行動をとった。  
どちらも何かを守るためにとった行動。結果はどうあれ、そこに害意や悪意は無かった。

なら、ここで僕が感情的になるのは、あまりにも愚かしい。

「……すまない。少し、取り乱した。彼女にはもう何もしないよ」

「……本当に？」

ふっ、とレミリアの表情が緩んだ。その表情はとても幼く、見た目相応なもの。

「彼女の身体を治そう。その代わりに、レミリアのしよつとして  
ことをやめてくれないかな。正直、僕はもう戦う気分じゃないんで  
ね」

「……わかったわ。貴方の言う通りにしましょう。だから、咲夜を」

そう言うレミリアの表情は、とても不安げなものだった。

62：「紅魔館」(後書き)

だれかミコトやら桃鬼やらのイラスト書いてくれないかなあと思  
う今日この頃。

どなたかの作品とコラボってもみたい今日この頃。

連絡は、メッセージか感想で(笑)

63：「一息ついてまた一難」

メイド もとい、十六夜咲夜を別の部屋のベッドに寝かせた僕は、爪をしまった左手を彼女の身体に当てた。

レミリアが見守る（睨みつけて、とも言つ）中、僕は能力を発動。自らの『命』を分け与えていく。

本当なら妖力を生命力に変換して分け与えることも出来るのだが、この能力を使いこなす自信はまだない為にそれは止めておく。それに、僕の中には二つの『命』があるので多少使っても問題は無い。眠れば回復もするし。

「これでよし……。さ、今度はそっちが約束を守る番だ」

「ええ、すでに小妖怪やメイド達に命令は出してあるわ。あとは……」

口に手を当てながら言うレミリア。  
と、その瞬間。

「うわっ!!」

「きゃあっ!!」

ズガン!!、と部屋の壁がいきなり破壊された。吹き飛んできた壁の一部をたたき落とし、ついでにベッドの周りに結界を張る。何事かと破壊された壁から外を見れば、そこには……。

「どうした？それで終わりなんて言わないで欲しいんだがねえ」  
「ぐっ……!!」

とても楽しげな鬼神と、満身創痍といった感じのチャイナ服の女性

の姿があつた。

僕は思わず頭を抱え、日陰に身体を移したレミリアは驚愕の表情を浮かべていた。

「レミリア様っ！ご無事でしたか！」

「え？え、ええ」

「やあミコト。決着はついたのかい？」

「へ？いや、その」

僕とレミリアは顔を見合わせる。困ったような表情をしているレミリアだが、多分僕も同じような表情をしているんだと思う。

決死の覚悟で鬼神に突っ込んでいくチャイナ服の背中を見送り、さてこれはどうすれば、と考える。

が、

「キヤアッ！！」

「え？つと……」

今度は廊下側が凄まじい勢いで燃え上がり、無警戒だったのだろう、レミリアがこちらに吹き飛んできた。反射的に抱き留めた僕は境界を張って炎から身を守る。

「ケホッ……レミィ、無事かしら？」

「ミコトさん、大丈夫か！？」

今度は紫色の魔女と白色の人間が、先程と同じような言葉をかけてきた。

またも僕とレミリアは顔を見合わせ、さてこれはどうしようかと思わず呟く。

と、後ろから叫びにも似た会話が聞こえてきた。

「いいかげん諦めたらどうだい。どうせアンタの主人はミコトには勝てないよ」

「ふざけるなッ！レミリア様は負けなんてしない！」

今度は前から。

「ミコトさんが簡単に負けるなんてありえない！」

「どうかしら？私にはレミイが負けを認めることの方がありえないと思うけど」

そんな会話を聞いた後、僕等は同時に溜め息をついていた。この状況じゃあ、何を言っても双方聞きやしないだろう。

そう思った僕は、レミリアの耳元でコソコソと話し掛ける。それを聞いたレミリアは、少し呆れた顔で辺りを見回し、頷いた。瞬間、結界を解き、

「面倒だから両成敗」

「気絶して落ち着きなさい」

全く同時に、戦っていた四人が地面に崩れ落ちた。

で、現在。

「ふう……ようやく落ち着けた」

咲夜が入れてくれた紅茶を飲みながら、僕はようやく一息ついていた。

あれから二時間程経つただろうか、外はすでに暗く、星が煌めき始めている。

ちなみに桃鬼と妹紅は目が覚めると帰っていった。僕に絶対会いに来るように、と念を押して去っていく後ろ姿は、少し寂しげだったのを覚えている。

で、紫はさつさとスキマに入ってどこかに行ってしまった。どうやら僕の記憶に対する封印を解きに向かったらしい。何十年と封じる程の封印が簡単に解けるのか心配だが、今考えても仕方がないので止めておく。

「で、貴方は何者なのかしら。簡単に咲夜を殺そうとした辺り、こちらの妖怪とは到底思えないんだけど」

「うん？ああ、僕のことか。何者かと聞かれても……まあ、長生きなだけの妖怪としか」

「長生きって、どれくらい？」

「一万と………忘れた。でも一万は越えてるよ」

確か一万と六千は生きているはずだが、ここまでくると数えるのも面倒くさくなってくる。しかしまた思いつくのも面倒なので、約一万六千歳ということにしておこう。なんだかねでふざけた存在だな自分。

もしかしたら千年や二千年のズレはあるかもしれない。遙か昔の大戦争。あの子の数千年が平和過ぎて記憶が曖昧なのだ。

「その割には強く見えないわね」  
「抑えてますから」

新しく注がれた紅茶を口に含み、若干動きが固い咲夜をチラ見する。よほど僕が怖かったのだろうか、それとなく距離をとられるのは少し悲しい。

「咲夜」

「なんでしょっ」

客人モードの口調の咲夜に右手を向ける。ビクッと身体を震わせる彼女だが、気にせず握った手を左にゆっくりと引いた。首を傾げ、胸に手を当てる咲夜を見てから僕は立ち上がる。

「じゃ、そろそろ行かせてもらっよ。また来ても？」

「歓迎するわ。いつでもいらっしやい」

そう言ってくれたレミリアに微笑みを返し、僕はテラスから飛び降りた。

「紫、いるなら出てきて」

「あら。気付いてたの」



「当たり前」

着地した僕は、スキマから出て来た紫に違和感を覚えた。扇子で口元を隠している為に表情からは読み取れないが、生憎僕にはそんなの関係無い。

「……何か隠してるね」

「やっぱりわかるかしら。隠してる、と言うよりは……いえ、行っただ方が早いかしらね」

行きましょう、とスキマが拡がり、僕はその中に足を踏み入れる。どうにもトラブルが続きそうな、そんな予感がしてならない僕だった。

妙に久しぶりな感じがするスキマの空間。

僕が封印されてからどれくらいかの年月が経ったのかはわからない。もしかしたら何十年も何百年も経っているのかもしれないので、そう感じるのも仕方ないと思う。

しかし、僕の記憶は封印された瞬間から進んでいない為に少し複雑な気分。

つい昨日見た。けど凄く久しぶり。

そんな感じである。

「で？いつまでこうしてるのさ」

「……………」

僕の問い掛けに無言で返す紫。

スキマに入ってからもう十分程。本来なら入って開けばもう到着、といった具合なのだが、紫はそうはしなかった。

一体何を考えているやら、と尻尾を揺らしてただ待ち続ける。

と、紫は溜め息をついてこちらを向いた。

「……………やっぱり、これしかないわね」

「なにが」

「先に謝っておくわ。ごめんなさい」

「いや、なにが」

いきなり頭を下げて謝罪してきた紫に首を傾げる僕。一体なんだと言っのか。

「結論から言わせてもらおうとね……………。その、貴方の記憶に対する封

印が解けないのよ」

「はえ？」

「いえ……正しく言えば封印は解いたの。けれど、どういうわけか貴方の記憶が戻らないのよ。多分、直に会えば何か変化が現れると思うのだけれど」

ばつが悪そうに言う紫。

僕は紫の言葉を頭の中で反芻し、その意味を確認する。

「なんでまたそんなことに……」

「それがわからないから困っているんじゃないの」

逆ギレですか。

とにもかくにも、紫と桃鬼、妹紅以外の全員の記憶は戻っていないことを理解。

問題なのは、これからどうすればいいのか、ということだ。

そんな思いを込めて紫を見つめていると、彼女はどこからともなく取り出した扇子で口元を隠していた。

まいった。嫌な予感しかない。

「先ずは行動。論より証拠、よ」

「うん。微妙に使い方違うしなんかデジャヴユ」

全てを言い切る前に開いた出口に落ちていく僕。予想してたから驚きはしなかったものの、それが逆に悲しいのは気のせいだろうか。だが。

「とう」

「え？あ、ちょっと!?!?」

落ちる寸前に手を伸ばし、紫の腕をキャッチ。  
ただで落ちると思うなよ。

「旅は道連れ、ってね」

抵抗する紫をがっしりと捕まえて落ちていく。今の僕の表情はさぞ意地悪なものであろう。

しかしそんな表情とは裏腹に、紫の身体の感触に懐かしさを感じながら、僕は目を閉じて落下に身を任せた。

「っと」

二十秒程の落下の後、紫を抱き寄せたまま軽やかに着地。まだ少し違和感はあるけど、この身体はやはりいいものだ。

「……最悪ね、貴方」

「それはどうも。で、ここは？」

僕から離れた紫は、背中を向けて扇子を開いた。どれだけ表情を隠したいのかは知らないが、いきなり大空に落としたのは君だと言いたい。

気持ちを切り替え、キョロキョロと辺りを見渡してみる。どこか見

覚えはあれど、その記憶は所詮封印以前のもの。何年経ったか知らないがそれなりに幻想郷も変わっていることだろう。

「私の家から少し離れた場所ね。もうすぐ藍が帰ってくる頃……この場所を必ず通るからここに来たの」

「藍か」

僕は咳きながら、懐から二枚の羽を取り出した。黒と白の羽を見つめながら、反対の手で耳の輪を触る。

気が付けば外れていて、いつの間にか懐に羽が入っていたのだ。

「……また、付け直してもらわなきゃな」

羽をしまい、顔を上げる。

いつしかこちらを見つめていた紫にどうすればいいのか聞こうとして、

「……………」

「紫？」

「……………え？ああ、どうかしたかしら？」

なんだかぼうつとしていた紫は、僕の声でハッとしてこちらを向いた。

どうかしているのはそっちだと言おうとして、止めた。

どうやら、そんな話をしている暇は無いらしい。

僕の右、霧に包まれた森の中から、昔より随分強くなった妖気が感じられる。

紫もそれを感じたらしく、髪を耳にかけながらそちらを向いた。

「来たわね」

「ん。で、どうすればいいの？」

「まずは藍の反応を見るわ。私は姿を消すから、それとなく話し掛けてみて頂戴。記憶が戻ればそれでよし、戻らなければ……まあ、その時はその時ね」

「わかった。やるだけやってみよう」

気配がだんだんと近くなってきた。

紫がスキマに姿を消し、残ったのは僕一人。

あのペースなら後一分もせずには藍はここまでくるだろう。

「とは言ったものの……一体どんな顔で接すればいいのか」

藍が全く僕を覚えていない場合、そのままスルーしていくことも有り得るだろう。あれで藍は温厚な性格、無駄な争いは好まない。見ただけで襲い掛かってくるようなことは無いはず。

だが、スルーされた場合はどう声をかければいいのか。いきなり声をかけたら嫌でも警戒される。かといって声をかけなければそのまま通り過ぎて終わりである。

「……考えても無駄か」

頭を振り、思考をリセットする。

どうせ成るようにしか成らないと開き直り、すぐそこにあつた岩に腰掛けて藍を待つことにした。

感じられる命はひとつだけ。ということ、橙と行動していたわけでは無いらしい。

二人一緒の方が楽だったかもな、と頬杖をついて唇を尖らせてみる。

と、そこにガサガサと音が聞こえてきた。  
来たか。

「……………貴方は」

大きな二股の帽子を被り、九本の大きな尻尾を持った女性が僕を見て歩みを止める。

しばらく見つめ合った後、女性　藍は、さくりところらに足を踏み出し、

「あう……………!？」

「?」

急に胸の辺りを抑え、苦しげな呼吸と共に膝をついていた。あえて駆け寄ることはせず、ただじつと藍の様子を伺う。

片手を地面につき、もう片方の手で胸元を抑えて荒い呼吸を繰り返している。

苦しげな藍をただ眺めているのは少し心苦しいが、しょうがない。

「うつ……………あ、う……………?」

下を向いていた藍の顔が上がり、未だ頬杖をついている僕を見た。瞬間、藍の感情が僕に流れ込んでくる。

様々な感情が入り混じるも、その中で一番大きな感情は

「え……………」

思わず目を見開いた。

少し信じられなかったが、感情は嘘をつかないから信じざるを得ない。

「……………なるほどね。どうりで記憶が戻らなかったわけだわ」

「紫」

フワリと背後に降り立った紫は、少し悲しげに、しかし淡々と喋り出す。

「貴方の存在が、藍の中で大きすぎた……。無意識に、貴方の記憶を遠ざけるほどに」

「……………」

僕はただ、紫の言葉に耳を傾ける。

こうしている今も、僕には藍の感情が流れ込んできている。

思い出したくないという、『拒否』の感情が。

「私は、貴方がいなくなっても違和感が無いように記憶を封印した。それはつまり、貴方がいなくなることで生まれる『悲しみ』も封印したことになるわ。貴方の記憶が戻ることをすなわち、その悲しみもそこで感じることになる」

やけにスラスラと話す紫には、大体の予測がついていたんだろう。そうでなければここまで具体的に言えるはずがない。

「……………悲しみは、貴方の存在が大きければ大きい程、それに比例して大きくなる。多分、藍はそれを拒否しているのね。いえ、藍の心、と言っべきかしら」

「……………僕は、どうすればいい？」

身体を震わせ、ただただ潤んだ瞳で僕を見つめてくる藍。時折苦しげに歯を食いしばり俯くその姿は、僕の心を激しく掻き乱していた。



「まだ何もする必要は無いわ。今は、藍が自分と戦っている最中。藍が自分に勝てば、貴方の記憶を取り戻すでしょう」

「……もし、負ければ？」

背後からきぬ擦れの音。

僕に背中を向けた紫は、扇子を閉じてこう言った。

「……おそらくは、記憶を戻そうとする原因を消しにかかるでしょうね」

僕は思わず俯いた。

記憶を戻そうとする原因。当然、それは僕の存在そのものだろう。

もし藍が自分の『拒否』の感情に染まってしまえば、藍は僕に襲い掛かってくるかもしれない。

そうなってしまうたら、僕はどうすればいいのだろう。

「ひとつだけ言うておくわ」

「……？」

藍を見ていた僕の前に回り込み、紫は少し冷たい手で僕の顔を挟んだ。

僕を射抜く、真つすぐな眼光。

「もし藍と戦うことになっても、真正面から立ち向かってあげて。わかっていると受けかねど、あの娘だって辛い。その辛さを生み出したのは、他でも無い私と　貴方よ」

「！」

「だからお願い。逃げたりなんかしないで。藍の思いをその身体で受け止めてあげて。……そうすれば、きっと上手くいくわ」

感情が流れ込んでくる。

紫の、確固たる決意と、その想いが。

紫の言葉を心の中で繰り返す。

そつだ。これは、僕が責任をとらなければいけないこと。

藍が僕のことを想って苦しんでくれている。

僕はそれに真正面から立ち向かって、藍の全てを受け止めてあげなければ。

あげる、なんて言ったら少し偉そうだけれど、そう思うんだから仕方ない。

「……………ミコト？」

紫が心配そうにこちらを見つめてきていたので、僕はそれに笑顔を返した。

「ありがとう。おかげで僕も決意が固まった」

紫の両手を顔から外し、それを僕の手で包み込む。

「いろいろと苦労かけた。……………これからは、僕が頑張らなきゃね」

立ち上がり、紫の向こう側から感じられる巨大な妖気に目を向ける。

「ゴメンね、藍。考えが足りなかったかもしれない。僕がいなくなることで周りに迷惑をかけることはわかってたつもりんだけど…」

「…」

「止め……………私に、近付いたら……………逃げて……………!!」

「断る。僕には君を受け止める責任があるから」

まあ、そんなのは建前でしかないのだけれど。

責任とか義務とか、そんな言葉で表すようなものじゃなくて。ただ、そうすることが正しいと、僕の心が思っているから。

「来なよ。その感情、僕がまとめて受け止める」

「う……あああああああ……!!!!」

瞬間、藍の妖気が爆発的に立ち上り、九尾の狐が空に浮かびあがる。剥き出しにした歯がギリギリと鳴り、見開かれた目から放たれる眼光が僕を射抜いていた。

64：〔拒否〕（後書き）

バトルパート。

## 65：「抱きしめたこの身体」

「シッ！」

一秒前にいた場所にズドドドドッ！ と地面に減り込んでいく石つぶて。

右足で地面を削りながら顔を上げれば、そこには無数の石つぶてが宙に舞っている。即座に左足で地面を蹴って後ろに跳べば、目の前には石製の絨毯が出来上がっていた。

土煙を右手で払いながら、脚へと力を込めていく。

「うう……、あああああっ！」

「！」

空にいる藍の咆哮と同時に、今度は目の前の空間がぐにゃりと歪んだ。

すぐさま感情を操り幻術を打ち破ると、今度は目の前に地面が迫る。

二重幻術……！

「ぐっ………！」

まるで地面が起き上がってきたかのような感覚。

倒れた僕は無理矢理に身体を起こし、揺れる視界から逃れる為に目をつぶった。

流石に最高位の妖獣、こと幻術に関しては僕を凌ぐかもしれない。

藍の動作ひとつひとつが幻術に直結しているのか、もしくは永続的な幻術を使っているのか……どちらにせよ、生半可なものなら同じ幻術を扱う僕には通用しない。にも関わらず、僕は藍の幻術に振り

回されていた。

幻術が切れれば直接攻撃。

合間を縫って接近すれば化かされて近付けない。

一進一退どころの話ではない、完全に藍のペースに巻き込まれてしまっている。

「くそ……どこだ」

目をつぶったまま能力を行使。いくら化かそうとも、『命』まではごまかせないはず。

「……見付けたっ！」

瞬間、跳躍。

妖気の糸を絡ませて玉を造りだし、それに乗って感じとった命に向かって直進。

この手が届きさえすれば……！

すぎる思いで藍に向かって手を伸ばし。

「っ!？」

大量の何かが僕に直撃。

思わず目を開けば、空間の歪みは消えていて、変わりにそこにあつたのは大小様々な弾幕の嵐。

ほとんど反射で結界を張るも、弾幕の隙間から現れた藍の一撃で結界ごと地面にたたき付けられる。

背中から落ちた僕は、歯を食いしばって跳ね上がった身体を翻しそ

の場から離脱。

距離を取った僕を藍は追い掛けてはこず、ただ空中で頭を抱えてフラフラと漂っていた。

頭を振り、這い出してきた血を吐き出す。

「くそ……どうにか、どうにかして身体に触れられれば……」

幻術もそうだが、身体能力も凄まじい。暴走して限界を超えているともとれるが、それにしただってこの強さは予想外だ。伊達に九尾を名乗っているわけでは無い。

こぼれ出た血を袖で拭い、藍を見上げる。

先程からずっと流れ込んできている彼女の様々な『拒否』の感情に、俯きたくなってしまうが、それは許されない。

嫌だ。

戦いたくない。

傷付けたくない。

思い出したく、ない。

「……………」

ギリ、と歯ぎしりの音が頭に響く。同時に頬を叩き、気持ちを引き締める。

考えてはいけない。考える前に、行動するんだ。

リズムを取り、小さく右に左に跳び跳ねる。

小さく、小さく。

それを徐々に大きくして、しかしリズムは同じまま。

たん、たん、たん、たん。

刻むリズムは同じまま、しかし跳ぶ距離は少しずつ大きくなっていく。

リズムに乗れ。

考えるな。

無駄な感情は排除しろ。

「嫌だ……！来ない、来ない、でえ……！！！」

耳に入る藍の声。

駄目だ、考えるな。

考え、るな！

「来ないでえええええ！！！！！」

「ああああああ！！！！！」

気が付けば、叫んでいた。

同時にトップスピードで藍に突撃、身体に当たる石つぶても弾幕も無視して、ただ勢いだけで突き進む。

そして、幻術で視界が歪む頃には。

「……………捕まえ、た」

この腕に、彼女を捕まえていた。

よかった。ようやく、触れられた。

「離せ、離せっ！離してよおっ！！！」

「ぐっ……………」



背中に走る鋭い痛み。

藍の爪が、容赦無く僕の背中を引っ掻き回す。

けれど僕は離さない。いくら視界が歪んだって、いくら背中が傷だらけになっただって、絶対にこの身体は離さない。

「嫌だ……嫌だあ……」

ぼろぼろと落ちる涙。

血に染まった腕がダラリと落ちて、僕の視界は物の輪郭を取り戻した。

一度抱きしめていた腕を解き、降ろされた腕ごともう一度抱きしめる。

「辛いのはわかってる。残酷なことかもしれないのもわかってる。

だけど」

「うっ……うっ……」

思い出して、ほしいんだ。

「……っ……!？」

僕の『思い』を、藍に直接流し込む。

ビクリと彼女の身体が震え、宙に浮かんでいた身体がゆっくりと地面へと落ちていった。

地面に足がついた僕は、額を離し、一、二、三步後ずさりするように藍から離れた。

「………藍？」

小さく、彼女の名前を呼んでみる。

乱れる息を抑えながら、願いを込めて、ゆっくりと。

藍は、そんな僕に向かって静かに近付いてきた。俯いたままのその表情は、一体どんなものなのか……怖くて流し込む感情を遮断してしまう僕がいる。

「……………」

手が届く範囲まで近付いてきた藍は、それでも歩みを止めることは無い。

ゆっくり、じっくり、一步一步がじれったい程に遅く、その足元も定まらず。

けれど、確実に僕との距離は近くなっていく。

そして、その足がピタリと止まった。

血濡れの両手がフラリと揺らぎ、震えながら僕に向かって伸びてくる。

僕はそこまで見て目をつぶった。感情も遮断している。これで何をされても、この近距離では避ける手段は無くなった。

ここで、彼女から伸ばされた両手が僕を貫いたとしても、僕はその事実を喜んで受け止めよう。

あれで記憶が戻らないなら、僕の想いが弱かったということ。

ただ、それだけ。

僕にその程度の想いしか無かったとしたら、たとえ記憶が戻ったとしても会わせる顔が無い。そんなことを考えながら、僕はただ、藍の行動を待ち続けて

「……ミコト……ちゃん……？」

静かに僕の名前が呼ばれ、冷たいものが僕の顔に触れていた。溜まっていた息が吐き出され、はやる気持ちを抑えてゆっくりと目を開く。

「藍……？」

「ミコト、さん。……ミコトさん……ミコトさん……」

「あぁ……そうだよ。ミコトだ」

僕を見つめ、何度も何度も確かめるように僕を呼ぶ藍。

僕は、藍の手に自分の手を重ねて、それを肩と挟むように擦りつく。

「ミコトさん、ミコトさん、ミコトさん、ミコトさん、ミコトさん………」  
「さっ……」

藍の目から涙が零れ落ちる前に、ギュツとその身体を抱き寄せる。震える身体から流れ込んでくる感情に目をつぶり、唇を噛み締めた。

「藍……！」

涙が流れそうになって、ただそれを噛み殺して。さらにギュウツと、彼女の身体を抱きしめる。

「ゴメン……」

僕が封印された時、藍は何を思っていたのか。

その時の藍の悲しみが、辛さが、突き刺さるように僕に流れ込んでくる。

こんな辛い感情を、僕は彼女に、皆に、与えてしまっていたんだ。今更か、と皆は呆れるかもしれない。

けれど、こうして実際に感情に触れた今、ようやくその辛さを理解した。

ああ、本当に今更。僕は、どうしようもない馬鹿野郎だ。

「……………」

けれど、泣くわけにはいかない。

辛かったのは誰だったのかを考えれば、僕は泣いてなんていられない。

今はただ、彼女の辛さをこの全身で受け止めて。

「あああああ……………」

流れ出した感情の結晶が、僕の着物を濡らし続けた。

「ハイ。できましたよ」

「ん。……おお、やっぱり良い感じだ。ありがとう、藍」  
「ふふ……どういたしまして」

耳飾りに羽が二枚復活。

僕はそれを触りながら、付けてくれた藍に向き直る。

藍は、笑顔でポロポロと涙を零していた。

「藍？」

「すみません。ただ、本当に嬉しくてしょうがなくて……。また、

貴方と共に過ごせることが……」  
「……そっか」

立ち上がった僕は、ぽふぽふと藍の頭を叩いて撫でた。  
嬉しそうに細められた目から、また一粒涙が落ちた。

「……紫は？」

「外に」

「ん……ちょっと行ってくるよ。待ってて」

ハイ、と返事をした藍に背を向けて外に向かう。

紫は、出てすぐの場所にいた。

「紫」

「あら。もういいの？」

「よくはないけど……ここにも、ほっとけない奴がいるから」

「へえ……誰かしらね」

「さあ、誰だろっね」

言いながら、背中を向けている紫に歩み寄る。  
そしてそのまま、後ろから腕を絡めた。

「なんのつもり？」

「さあ」

突き放すような言葉とは裏腹に、紫の手は僕の腕を掴んで離さない。  
僕はそのまま、紫の肩に顎を乗せた。

紫から流れ込んでくる感情。

言葉では決して言わないが、感情が言っている。

『寂しい』と。

直接的な悲しみは感じられなかった。僕が復活してからずっと一緒に行動しているから、それはわかる。

けれど、僕は気付いた。

藍のように記憶を封印されていたメンバーは、記憶が戻ったその時に何かしらの感情が溢れ出す。

じゃあ、記憶を封印しなかったメンバーはどうなのか。

僕が復活するまでの間、何も感じずに過ごしてこれたのか。

答は、ノーだ。

「……………」

何も言わない紫を、ただ黙って抱きしめる。

紫は何も言わない。今まで気付かなかった僕を責めたりもしない。だから僕は、謝らない代わりに抱きしめ続けた。

今日は、皆で寝ましようか。

誰かが言ったその言葉に、残りの二人が頷いた。

65：「抱きしめたこの身体」(後書き)

試行錯誤して書き上げた。

上手く描けただろうか……。



66：「スキマ妖怪にしてやられ」

「兄様~~~~!!」

「つと……よしよし」

場所はマヨヒガ。

布団から飛び付いてきた橙を受け止め、ピコピコ動く耳ごと頭をわしわしと撫でる。

橙は藍とは違い、会っただけで僕を思い出したらしい。ただ、いきなり記憶が蘇った反動か、会っていきなり倒れたのにはさすがに驚かされたが。

「橙は大丈夫だったの？」

「？ 何がですか？」

僕の質問の意味がわからないのか、橙は僕にしがみつきながら首を傾げた。

……むう、どういうことだ？

「橙は、ミコトさんが封印されたことを知りませんでしたから」

「藍」

コトリ、と僕の前に湯呑みを置く藍。橙を挟むようにして僕の向かいに座る。

「私はミコトさんが封印された事実を知った状態で記憶を封じましたが、橙は何も知らないまま記憶を封じましたからね。私はあの時の、その……悲しみというか、感情まで思い出してしまいました、橙は」

「何の話ですか？」  
「いや、なんでもないよ」

藍の言葉を聞いて不思議そうにしている橙。その頭を撫でながら「まかしを入れ、藍と橙の顔を交互に眺めてみる。」

藍は僕が封印されたことを知っていた。

橙は何も知らないまま記憶を封印された。

「……………ふむ」

なるほど、橙には記憶が戻っても藍のように『拒否』を起こす程大きな悲しみが存在しなかった、ということか。

『僕が封印された』という記憶が元から無いのだから、悲しむ理由が存在しないのだ。

それなら記憶が戻っても『確かに今までいなかったよな』ぐらいの矛盾と疑問しか感じない。たとえその疑問の答えがわかったとしても、僕は今こうして存在しているのだから悲しむ道理も無いだろう。

と、いうことは。

「藍はある意味特別だった、ってことかな？」

「まあ、確かにそう言えるかもしれませんがね。封印関連でその真実を知っているのは、記憶を封印しなかった者を除いて私しかいませんから」

「そうか……………なら」  
「ですが」

藍の表情が引き締まった。

僕はそれを見て撫でる手を止める。

「橙は何もありませんでしたが、他の方々が全員橙と同じように行くとも思えません。それなら、紫様が封印を解いた時に記憶が戻って当然ですから」

「……わかったよ。気は抜かない」

「はい。そうしてください。ミコトさんはただでさえ自分を蔑ろにしがちですから」  
「……………」

困ったような笑顔で言う藍に、僕は苦笑いで返した。

反論出来ないなあ、とか思いながらふと視線を落とせば、そこには。

「フニヤウ……………」

「あら……………フフッ」

幸せそうに眠る橙の姿があった。

「さてと」

「行くの？」

「ん。どうせなら早く終わらせたいから」

翌日。

外で思い切り身体を伸ばして準備運動しながら、隣に立っている紫とそんなやり取りをしていた。

「そう……。油断はしないでね」

「紫が心配か。よっぽど僕は信用されていないらしい」

笑いながら僕はもう一度身体を伸ばす。

妖力は万全、身体もいつも通り。能力も問題ない。

「ミコト」

「さて行くか……って、どうかしたの……」

さあ行こうと膝を曲げたところで紫の手が肩に乗せられ、タイミン  
グを外した僕はその場で固まった。

それというのも、僕の頬に現在進行形で柔らかい感触が伝わってきているからで……。

「……フフツ。早く終わらせてきなさいな。待ってるから」

その感触が離れると同時に、僕の足元にスキマが開いていた。

やられた。

スキマに身体が落ちていく。

その刹那、うつかりすれば見逃してしまいそうな程ほんのりと頬を紅くした紫の顔が見えた。

「……感情、操られた……」

そんなことを呟いてから、僕は自由落下に身を任せたのだった。

66：「スキマ妖怪にしてやられ」(後書き)

期間が開いた上に短い……。

頑張らなければ！

67：「百年振りの初対面」

「っと」

スキマから吐き出されるようにして着地。

数秒程頬に手を当てていた僕は、ぶるぶると顔を振って頭を切り替えた。

……紫め、帰ったらどうしてやるつか。

そんなことを考えながら周りを見渡す。薄暗いこの場所は、いつかきた迷いの竹林。

「ふむ……。どうせだ、妹紅にでも会っていこうか」

「私がどうかしたか？」

「わお」

いきなり背後から声をかけられ、ビクリと尻尾が逆立ってしまった。振り返ればそこには当然彼女の姿があつて。

「なんだ、ニコトさんじゃないですか。どうしたんですこんなところ」

僕はその問いに、鼻の頭を掻きながら苦笑いを返すのだった。

「へえ……そんなことが」

所変わって妹紅の家。いつか口にした筍の煮物をかじりながら、僕は妹紅を見ながら頷いた。

妹紅は僕の説明を黙ってじっと聞いてくれて、すんなりと理解してくれていた。本当に頭の良い子である。

「で、次は誰に？」

「それがまだ決まってるないんだ。どこそのスキマ妖怪に落とされただけで、本当はここに来るつもりも無かったんだけど」

「む……」

「？　どうかした？」

「なんでもないです」

ぷいっ、といった感じで視線を逸らす妹紅。

なんだい、そんなに紫と居たことが気に入らないのか？

そう聞こうとしたが燃やされそうなので止めた。

「なら、慧音のところに行ってみませんか？　ちょうど私も人里に用があるので」

「慧音が……」

「はい。本当はさつき人里に向かっていた途中だったんですが」

「いきなり僕が現れたってわけね。それは悪いことをした」



軽い口調で言った僕は、ガタリと椅子から立ち上がった。次いで妹紅も立ち上がる。

「慧音なら、多分そんなに大変なことは起きないでしょうし」

「む……。それについては賛同しかねる」

初対面では僕の話を全く聞かなかったし。記憶が戻っていないならあの繰り返しは充分有り得るというものだ。まあしかし、人里の様子も見てみたいところだし。

しかし……。そういえば。

「ちなみにさ」

「？」

「僕が封印されてから何年経ったの？」

「ああ……。ざっと、百年ぐらいですかね」

……。三桁とな。

「へえ、案外賑わってるんだ」

「人里では妖怪は人間を襲いませんからね。安全なんです」

人里についた僕と妹紅は、すれ違う人々を見ながらそんな言葉を交わした。

僕らが向かう先は無論、寺子屋である。

僕が封印される前、つまり百年前よりも家や店らしき建物が増えて  
いる。というより、人里自体大きくなっているようだ。

「寺子屋はどこらへんなの？」

「前あつた場所と変わってません。もうすぐですよ」

てくてくと歩いていく僕と妹紅。

ちなみに今は耳も尻尾も隠していない。本来なら人里がパニックに  
陥ってもおかしくはないのだが、そんな様子は少しも見当たらない。  
先程の妹紅の言葉がよくわかる。

だが、もしここで僕が暴れたりしたら一体どうなるのだろう。紫で  
もやってくるのだろうか？ いや、もしかしたら藍かも知れない。

紫なら面倒臭がつてこないことも充分有り得る。

そんなことを考えながら曲がり角を曲がる。

と、そこには。

「慧音」

「なんだ、妹紅じゃないか」

野菜が入った籠を手を持つ、上白沢慧音の姿があつた。

僕の記憶と同じ、長くて綺麗な色の髪。そういえば、初めて会った  
時は僕も髪が長かつたんだよな。

「とじろで……」

僕の前で妹紅と話していた慧音が、ちらりとこちらを見た。その視線は僕の足元から首までをじつくりと歩き回り、最後に顔で立ち止まる。まるで珍しいものを初めてみたような、そんな感じである。これは、もしかして？

「妹紅、この方は？」

「やっぱり……」

「？」

ガクリとうなだれる僕を見て、慧音は不思議そうに首を傾げていた。

「……すまない。全く覚えていない」

「全くっ……」

「慧音さん、もう少し柔らかい言い方を……」

慧音の家、ズバツと切られて悶絶する僕を見て、慧音の隣に座っている少女が小さな声で言った。

彼女の名は稗田阿求。人里に住む真正正銘の人間である。慧音の授業は彼女の一族が纏めた資料を元に行われているらしく、ちょうど彼女が慧音を訪ねた時に僕らが帰ってきて今に至る。

驚いたことに彼女は能力持ちらしい。それを利用して情報を纏めているとか。

「ま、まあそんなに落ち込むなよミコトさん。ほら、自分のことを教えてやれば思い出すかも知れないし」

「……別に落ち込んだんじゃないけどさ」

カツコイイ言葉遣いの妹紅にそう返し、僕は慧音（と阿求）に向き直る。

……だがしかし、どこから語ればいいのか。「長生きなただの妖怪です」なんて言っても説明にならないし、かといって他の話をしようにもそれは最低でも百年前の昔話になってしまう。

「今……ミコト、とおっしゃられましたか？」

「え？あ、あぁ」

僕がうつんうつん唸っていると、阿求が信じられないといった面持ちで妹紅に視線を向けていた。

なんだ、と驚く妹紅を余所に、阿求は慌ただしく手元の資料らしきものをめくっていく。そしてその手が止まり、ペしん、とそのペーヂを机にたたき付けた。

「で、では、これは貴方ですか！？」

「うつん？」

どれどれ、と僕と妹紅が机に身を乗り出す。  
その資料には、若干違つところはあつたものの、僕の姿が、描かれていた。  
妹紅はその墨で描かれた僕と隣にいる僕を交互に見て、納得したように頷く。

「『命 幻想からもかき消えた伝説の妖獣』……ね」

「どうなんです!？」

「落ち着いて……。まあ確かに、これは僕のことだね」

『鬼を打ち倒し、天狗を置き去りにすることが出来た……』なんて書かれてたりする資料を眺めながら、僕は苦笑いでそう返した。確かに事実だが、こう文章に表されるとむず痒いものがある。  
以前も思ったが、僕も大概ふざけた存在だ。

「ははあ……。最近はいろんなことが起きますね。先日吸血鬼の館が現れましたし、しかも妖怪率いて何かを企んでいたらしいです」

「あ、それ止めたの僕」

「……資料に偽り無し、ですか」

私は見たことが無かつたから半信半疑でしたけど、と半ば呆れた様子で呟く阿求。

その隣では、慧音が僕の資料を見つめながら難しい顔をしていた。

「どうした? 慧音」

「いや……。どうにかして思い出そうとしているんだがな」

そんなことを言いながら資料の僕を見続ける慧音。端から見たら敵

でも睨みつけているかのようだ。

「ま、そう無理に思い出そうとしなくていいよ。こっちでどうにかするからさ」

ずっと睨まれ続けるのもなんなので、僕は軽い調子でそう言った。多分本人の努力云々じゃどうしたって思い出せないだろうし、そこまで真剣に受け止められたらそれはそれで恐縮してしまう。

「……そうか？」

「そ。まあでも、頭の隅っこぐらいには置いといてよ。ところで…

…阿求さん」

「さんはいりませんよ」

「じゃあ阿求ちゃん」

「むしろ止めて下さい。なんですか？」

「ちよつと人里を案内してくれない？様子を見てみたいんだ」

そついいながら僕は猫の姿に変化。ピョンと跳んで阿求の肩に飛び乗った。

「あ……!!」

「妹紅、慧音に用があるんだろ？僕達が出掛けてる間に済ませちゃいな」

「ああ、そつさせてもらおう」

慧音が立ち上がりそうになったのを見て、僕は妹紅にアイコンタクト。

妹紅は言葉と共に頷いて慧音を床に座らせる。その間に、阿求は玄関の戸を開けて外に出るのだった。

「軽いんですね」  
「猫ですから」

気持ちゆつくりと歩く阿求の肩に乗り、そう返す。  
昼時だからか外を歩く人は少なめで、代わりに飯屋らしき場所が賑わっていた。

「随分と賑やかになったもんだ。やっぱり妖怪に襲われないのが大きいのかね」

「そうですね。ですが、逆にそのせいで妖怪側の力が落ちてきているのも事実です」

「……………」

「貴方が解決した吸血鬼騒動も、原因はそれです。力が落ちていた妖怪達を一気に従えた吸血鬼が、幻想郷を飲み込もうと企んだ」

「そこを僕が止めた、と」

「そうなりますね」

止めた、というよりかは和解した、という感じだったけれど。暴走しかけた僕を止めたのは向こうさんだったし、メンバーがメンバー

なだけに一步間違えればあの館が吹き飛んでいたかもしれない。恐ろしい。

「というか、なんでいきなりそんな話を？」

「どうせなら人里だけじゃなく、他の様子も知りたいかと思いで。えと……」

「ミコトでいいよ」

「ミコトさん。貴方はこの百年の間のことが知りたくて、私を連れ出したんでしょう？」

「……ばれてましたか」

思わず苦笑い。ここ最近は苦笑いをする機会が多いな。

僕は阿求の肩から飛び降りて、着地の瞬間に人型に変化。周りの人間が驚いているが気にしない。

「ということ。阿求は僕がこの百年、どうなっていたか知ってるんだ」

「ええ。しっかりと」

「そっか……。なら話は早い。ざっとでいいから話してくれない？僕がいなかった間のこと」

「はい。喜んで」

笑顔で言った阿求。僕はその隣を、いつもよりゆっくりと歩いていくのだった。



「あ、ミコトさん！」

「妹紅。慧音は？」

「明日の授業の準備があるって」

「なら、私はその手伝いをしていきます」

「ああ、ありがとう阿求。大分タメになったよ。何かあったら呼んでくれ。喜んで手伝うから」

「覚えておきます。では」

寺子屋の前、阿求と別れて妹紅と合流。

並んで歩きだした僕等は、少し朱く染まり始めた空を見上げる。

と、妹紅が視線を空から僕へと変えて口を開いた。

「阿求と何を話していたんですか？」

「ん？ああ、この百年の様子をざっと話してもらったんだ。有意義だったよ」

「……私に聞いてくれてもよかったですじゃないですか……」

「え？」

「な、なんでもありません。それにしても残念でしたね。慧音の記憶が戻らなくて」

「いや……むしろ戻らないだけで済んで良かったよ。暴れられたり

しないだけね」

今回も戦わないで済めばいいな、と続けておく。  
僕を思い出させる為に相手を傷付けるなんて真っ平だ。

「でも、どうしよう。暴走しなかったとはいえ、どうしたら記憶が戻るのか……」

「シヨック療法は」

「妹紅で試す？」

「冗談です。でも気になったことならひとつだけ」

人里から出た辺りで妹紅が立ち止まる。数歩進んだ場所で僕も止まり、振り返った。

「ミコトさん、慧音の前で猫の姿になりましたよね」

「ああ。阿求の肩に乗った」

「それはいいとして。猫の姿のミコトさんを見た慧音、変な反応したの覚えてます？」

妹紅の言葉に、僕は頭に手を当てた。

そういえば……外に行こうとする僕と阿求を見て立ち上がるうとはしていた。その表情は……。

「言われてみれば……変に驚いたような表情してたかな」

「でしょう？もしかしたら、です。ミコトさん、以前慧音に猫の姿で何かしたんじゃないやありません？」

「いや、以前も何も慧音とは昔一回しか……」

いや、待てよ？

確か、慧音との初対面は……。

「……ミコトさん？」  
「妹紅。お手柄かも」

妹紅に歩み寄ってその頭をぽふぽふと叩く。  
驚いて避けようとする妹紅の頭をそれでも撫でつつける。

「妹紅、満月まで妹紅の家に泊まっていたいい？」

「はへ！？ な、なんですかいきなり！」

「駄目ならいいけど。永琳とこまで案内して」

「だ、駄目なんて言っていない！ むしろ満月までなんて言わないで  
ずっとでも……」

「ありがと。久々に一緒に寝ようか」

「な、な、なあ！？」

「昔は良く寝てたじゃん。まあ、嫌なら」

「嫌なんて言つてなあいい！！」

急に騒がしくなった妹紅を隣に歩き出す。

満月までは後何日あるだろうか。

まあ、この考えが正しければ次の満月が勝負の日になる。  
できれば『あの通り』に行かないで欲しいものだが……。

「顔真つ赤だけど大丈夫？」

「~~~~っ！」

まあ、満月の日が来るまでは楽しく過ごしても良いだろう。

67：「百年振りの初対面」(後書き)

阿求登場。

大分賢いキャラになったけど良いよね！

68：「命の異変」

「……………うん……………」

小さな声が耳元で聞こえ、薄く目を開いた。ぼやけた視界にあるものは、白。

「……………?」

ポリポリと頭を搔いて、半開きの目を軽く擦る。ぼやけた視界がいくばくかマシになり、僕に擦り寄るような形で未だ眠っている妹紅の顔が見えた。白色は妹紅の髪だった様子。

起き上がる前に、しっかりと僕の着物を握り締めている妹紅の手の指を解いていく。

「ん……………うん」

「おっと……………」

少し強くし過ぎたのか、妹紅の表情が少し歪んで、その身体をさらに擦り寄せてきた。しかも、三本目まで外していた指が元通りがっしり着物を捕まえ直した。

それを見た僕は、

「ごめんよ」

そう一人で呟いて、少し起こしていた身体をもう一度寝かした。

妹紅の頭の下に腕を入れて抱き寄せる。

今日でこんな機会もしばらく無くなってしまふ。そう考えると少し思うものもあるが、致し方ない。

妹紅の額に自らの額を合わせ、彼女の中にある『悲哀』の感情を抜き取り、代わりに『安堵』の感情を流し込む。

これで、一人になっても大丈夫だろう。緩んだ手をなるべく優しく身体から離し、妹紅の髪を撫でてから立ち上がる。

「また、ね」

小さく呟いてから、僕は妹紅の家を後にした。

「……………また、かあ」

自分以外に誰もいない家の中、妹紅は小さく呟いた。

寝返りを打って、ミコトが寝ていた場所に俯せになる。枕に顔を埋めながら、まだ暖かい布団の中でまどろむ妹紅。

もっと、一緒に居たかったなあ……………。

細い視界の中、そんなことを考える。

しかし追いかけても無駄なことが分かっている彼女は、せめてこの温もりと匂いを少しでも感じていよう、と長い間布団から出ようともしなかった。

さて。

「よっと」

背の高い木から人里に向かって跳躍。頂点に達したところで猫の姿に変化して、そのまま人里の通りへと着地する。

太陽を見るに今は正午辺りだろう。寺子屋は昼休みへと入っている頃だろうか。

通りは人が歩いていて、下手をすれば踏まれそうなので屋根の上へと飛び乗った。このまま屋根伝いに進むことにしよう。

変わらない賑わいを見せる人里の様子を横目に、寺子屋はどこだったかと考えながらのんびりと歩く。

と、そこで聞き覚えのある声が僕の耳に入ってきた。

「みんなー！ 勉強を始めるぞー！」

その声の少し後、散らばって遊んでいたらしい子供達が一斉に建物の中に入っていく。

前もこんな感じだったかな。



そこはかたなくデジャヴュを感じながら、僕はその建物　寺子屋  
へと向かうのだった。

前と同じ場所の窓に飛び乗り、授業の様子を静観する僕。  
一本隠している尻尾をフラフラと揺らしながら、しばらく慧音の声  
を聞き流していた。

と、五分程経って慧音がこちらに気が付いた。僕を見て動きを止め  
た彼女は、なんだお前かと言わんばかりの表情を僕へと向けてくる。  
まあ、ここで何もしなければ何も起きないわけなんだけれど。

それじゃあ意味が無いんだよねえ……。

「なっ……!!?」

姿勢そのまま、妖力を『悪意』と共に少しだけ放出。子供達に害は  
無い程度の量だが、慧音は驚きと共に結界を張っていた。  
なぜ、と訴えかけてくる姿勢を無視し、僕はスルリと寺子屋の屋根  
上に移動。すぐさま隠業を使って姿もろとも気配を消す。  
すぐ下では警戒している慧音のピリピリした気配が伝わってくるが、  
それもすぐに収まっていた。

さて……種は撒いたし、夜に芽が出るのを待ちましようかね、と。

「そろそろ、かな？」

ぼつりと呟いた僕は、首を傾げて空を見る。雲ひとつ無い晴天だった空は、今は数多の星がきらびやかに輝いている。

そして、それらを代表するかのように光を放つのは、真円と化した白い月。

それを眺めながら、僕は隠業を解いて変化も解いた。あぐらの体勢で月を眺め続け、少し冷え込んだ空気を吸い込み、吐いて。

「覚えてないだろうけどさ。初めてこの姿で会ったのも、今日と同じ満月だったんだよ」

もう少し暖かかった気はするけどね、と続け、そこで僕は姿勢を落とす。

そこには。

「……………」

髪の色が薄い緑色へと変わり、その頭から二本の角を生やした女性の姿があった。

言わずもがな、獣人状態の慧音である。

「そうそう。あの時もそんな風に睨みつけられてたっけ」

クツクツと笑う僕。慧音の視線がさらに鋭くなる。

「……なぜ、その時の私はお前を睨んでいた？」

「さてねえ。何か気に入らないことでもあったんじゃない？」

立ち上がり、満月を一瞥する。

「と、言うのは冗談で……」

ジャキリ、と音を立てて伸びた爪を舐め、口の端を吊り上げて。

「今回は、前にさらいそびれた子供をさらい直そうかな、とね」

そう言った瞬間、慧音の拳が僕の鼻を掠めていた。

反らした上半身を勢い良く起こし、慧音の耳元で囁く。

「どの子供にしようか、迷ってはいるんだけどね」

「……………!!」

振り払うような一撃を屈んで避け、宙返りして地面に着地。追うように慧音も屋根から降りてきた。

そして、半身の姿勢を取った彼女は言う。

「その時の私も同じようなことを言ったと思うが……」

「？」

「さらえるものなら、さらってみるがいいさっ！」

瞬間、僕の視界を覆ったのは、大量の弾幕。

面くらいなながらも結界を張り、凌ぎきった時にはすでに人里は姿を消していた。

ふうと一息ついた僕は結界を解き、

「？」

慧音の背後、握っていた左手を開く。

「いつまでそっち見てるの？」

「なっ!？」

慌てて振り返った慧音は、僕の手からパラパラと舞う薄緑色の髪を呆然と眺めていた。

しばらく経ってようやく状況を理解したらしい慧音は、姿勢を低くする。

「……お前、何者だ」

「思い出すまで教えない」

ニヤリと笑った僕に、慧音は真つ正面から突撃してくる。

前よりも幾分鋭くなっている一撃を、避け、いなし、払い、止め。知らず知らずの内に、僕は尖った歯を剥き出しにして笑っていた。

「はっ……はっ……」

「もう終わり?」

目の前で息を乱している慧音を見て、僕は軽い口調でそう言った。もういいか、と思いながら一歩踏み出し、「おっと」「おそらく最後の足掻きであるうー撃をパシンと手で止めた。最初の威力はどこへやら。

空いている手で慧音の首を掴み、そのまま持ち上げる。

「まだ思い出しそうに無い？」

「くっ……！ やめ、ろ……！」

「いやあ、思い出してくれたら離すけど」

ギリギリと力を込めていく。

まだ思い出してくれないのだろうか。早く思い出してくれないと、このままでは殺してしまふ。

こんなことまでする気は無かったのに、全く………ん？

こんなことまでする気は無かった………無かつ、た？

こんなことって、なんだ？

目の前には、僕に首を掴まれて苦しんでいる慧音の姿。

なんだ、僕は何をやっている！？

「カハッ………」

「っ！」

慌てて慧音の首を掴んでいる手を離す。

ドサリと音を立てて倒れた慧音と、先程まで首を掴んでいた手を交互に見た。

なんだ、何が起きている。なんで僕は、慧音と戦っていた？

僕はただ、最初会った時と同じシチュエーションを作って感情を流し込もうと、そうすれば思い出してくれるだろうと考えていただけなのに。

「……………」

頭を抱え、自分を問い詰める。

自分のしたことが信じられない。理解出来ない。許せない。感情が暴走している。

疑惑、困惑、混乱、頭の中がぐちゃぐちゃになって何を考えているのかすらわからなくなってくる。

「ケホツ……………ぐ……………。ミ、コト……………?」

「！ 慧音!？」

自分の名を呼ばれ、反射的に反応する。

慧音の姿を見た僕は、それまでの混乱をほおってその手を握った。

「……………ようやく、というのかな。思い出したよ。それにしても、少し方法が荒っぽくな」

「大丈夫か？ どこか痛いところは？ ああゴメン、なんであんなことしたんだろう。とにかく手当しなきゃ」

「ちよつ、大丈夫だ。私はそこまで弱い身体では」

「まず慧音の家に……………そういえば人里が無い！ 慧音早くもとに戻してっというかその慧音が今は怪我しててああもうどうすればいい」

「……………ミコト」

トン、と肩に手を置かれ、パニックのまま振り返った僕は、

「落ち着け」

ガスッ！ と強烈な頭突きを食らっていた。

「落ち着いたか？」

「オーケー。バツチリ」

「なら良い。ほら、行こう」

ぐいっと手を引つ張られ、地面に座っていた僕は立ち上がった。握られた手をじっと見つめ、その後、慧音の身体を眺める。目立つような怪我は無いみたいだが……。

「どうした？」

「いや……本当に大丈夫か、と」

「心配性だな。そもそもお前から何かしてきたのは最後だけじゃないか」

「……そうだった？」

「……覚えてないのか？」

「いや、なんというか……その」

「……まあいい。とにかく帰ろう。話はそれからだ」

頭を抱えた僕を見て、慧音は再度僕の手を引いて歩きだす。引かれるがままに歩く僕は、妙な違和感を感じつつ、その正体がわからない、得体のしれない気味の悪さを感じていた。



68：「命の異変」(後書き)

最近じっくりとというか、さらさらと文章が出てこないなあ……。

書き続けていたら元に戻るんだろうか。

69：「正体不明感情」

「……………」

「そんなに心配しなくとも……人間ならまだしも、私は半獣だぞ？」

軽く言う慧音。僕はそれを聞いて本日何度目かの溜め息をついた。満月の夜は過ぎ去り、今は翌日の昼。都合良く寺子屋が休みだったこともあり邪魔させて頂いてるのだが、どうにも慧音の身体が心配で何回も同じことを聞いている。

くどいのは自分でもわかっているし、見た目大丈夫そうなのもわかる。だが、僕が心配しているのは見た目のことではなく……。

「……………」

「！」

ふらついた慧音の身体を支え、その表情を覗き込む。

どことなく青白いその肌を見て、やっぱりかと唇を噛み締めた。

「おかしいな……。しっかりと睡眠はとったんだが」

「睡眠云々じゃないよ。……これは、僕のせいだ」

「？ どういうことだ」

「それは……。ううん、後で説明するから、慧音はまだ寝ていなよ」

そのまま抱き上げて、布団が敷いたままの場所に慧音を降ろす。上から掛け布団を掛けて、

「失礼」

額同士を付けて感情を流し込む。

驚いた表情を見せた慧音は、しかしすぐに目をつぶって寝息を立てはじめた。

「ふう」

トスン、と布団の脇に座り込み、慧音の髪を手で梳いた。

多分慧音は、このまま夜まで目覚めはしないだろう。

その理由、というか原因は、当然ながら僕にあった。

あの時の僕　慧音と戦っていた時の僕は、直接的な攻撃こそしなかったものの、なにか禍禍しい感情を振り撒いていた。それがなんだったのかは……正直よくわからないのだが。

慧音はそれを受けながら戦っていたのだから、影響を受けるのも当然だった。見えない毒を吸いながら戦っているようなものなのだから。

今の慧音からはその感情は感じられない。このまま寝ていれば大丈夫だろう。

「ふう……」

問題は慧音ではなく、僕の方だ。

なぜかは全くわからないが、あの時の僕は間違いなくおかしかった。平然と慧音の首を締め上げた僕は、それが当然のことだと感じていたのだ。違和感も無く、むしろそれが正しいことのように考えていた。

なにかの拍子で違和感を感じなければ、あのまま慧音を殺していたかもしれない。

なまじありえない話ではないだけに、自然と身体が震えていた。

「どうしちゃったんだ、僕は……」

感情が暴走していたわけでは無い。暴走したのは正気に戻ってからだ。

……だが、『感情を操る』僕が、自分の感情を制御しきれなかった時点ですでおかしい。

なんにせよ、なにかしらの異変が僕に起きているのは間違いないみたいだった。

「……参った。どうしたらいいんだ」

すやすやと眠る慧音の寝顔を眺めながら、僕は小さく呟いた。

「……………ん」

「あ、起きた？ 身体の調子はどう？」

「……ふむ。まあ大丈夫だろう。やはり眠り足りなかったのかな。

……というかミコト、何か言ってなかったか？ 私を寝かす前に」

「え？ なんのことさ」

「……？ おかしいな、確かに何か言ってたような気がするのだが」

思い出せない、と布団の上で首を傾げる慧音。僕はその姿を見て、もう大丈夫だろうと安心して目を逸らした。

「？ どうした」

が、少しあからさま過ぎたか、慧音が膝立ちで僕に向き直る。その動きに少しだけ目を向けて、僕はまたすぐ視線を落とす。

それが気に入らないのか、慧音はムツとしてズリズリと僕に近付いてきた。

「何故目を逸らす？」

「いや……だって」

だんだんと近付いてくる慧音をチラチラと見ながら、僕は言葉を詰まらせた。あれえ、気付いてないのか？

「なんだ、そんなに私を見たくないか」

「いや、見たくないというか、どちらかと言えば見たいんですけど

……」

「？ どういう意味だ？」

「いや、その……服が、というか、む、胸元が」

「胸元？」

視界の端にいる慧音が、キョトンとした顔で視線を落とす。

瞬間、ボツとその顔が赤くなっていた。

「な、な、な……!!」

「見てませんよ？　なんとか我慢しましたよ？」

体育座りの体勢で膝と身体の隙間に顔を埋めながら言う僕。

まあ、今の慧音の格好を簡単に言えば、『服がはだけている』の一言。胸元のリボンが解け、その下の肌が危うい感じにあらわになっている。

それでも普通にしていればなんでもなくらいのレベルだったのに、慧音は膝立ちの四つん這いの姿勢になってしまった。そうすれば当然、いろいろなものが重力というものを受けてしまうわけで……。

「……見たか？」

「ギリギリです」

「ギリギリまでは見たんだな？」

「言い訳はしませんか逃亡していいですか？」

「……別に逃げなくてもいい。そのかわりに私の感情を操れ」  
「へ？」

リボンを縛り、いつも通りの服装になった慧音。

顔を上げながら返事をした僕は、未だに顔が赤い彼女の顔を見ながら首を傾げた。

「なんで感情を？」

「いいから。平常心に戻すくらいは出来るだろう」

「まあ……。じゃあ、失礼して」

言いながら僕は慧音に近付き、彼女の額に自分の額を近付けていく。  
が、

「……なんで避けるの」  
「い、いや」

触れる寸前で慧音はサツと僕を避けていた。空振った僕はその姿勢のまま慧音を見る。今度は慧音が視線を逸らしていた。え、僕の着物だけがはだけてるわけじゃないよね？

「ひ、額じゃないと駄目なのか？」

「え？ ああいや、ただ額が一番効率が良いというか、場所的にイメージが掴みやすいから」

別に額じゃなくても出来ることは出来るのだが、ただほんの少しやりづらいというだけ。さらには身体同士を触れさせればこちらの感情を流すだけで済むので、相手の感情を取り込んでそれを基準にして、という作業を省けるのだ。

ちなみに一番効率が良い場所は他にあるが。

「嫌なら別にいいけどさ」

「え？いや……」

何か言いたげだったがもう遅い。

慧音から離れ、振り返って右手を翳す。ぐっと握って左にくいつと引けばそれで終わりだ。

顔の赤みが引いていく慧音を見て、ひとつ息をつく。

なんだか微妙な視線が向けられているが、何か不満でもあるのだろうか？

ま、いいか。

「じゃあ僕は行くね。あんまりのんびりもしてられなくなった」

主に僕の都合で、だが。

「もう大丈夫だとは思いつけど、あまり無理はしないこと。気分が悪くなったりしたら、念じてくれれば跳んで行くから」

「お、おい。こんな夜中に出ていかずとも」

「妖怪は夜の方が調子が良いの。じゃあね」

会話を半ば無理矢理に終了させ、僕は窓から飛び出した。

また僕に何か起きる前に、とっとと終わらせてしまわなければ。

「全く、自分の撒いた種とはいえ……」

唇を噛みながら地面を蹴る。

ふと空を見上げると、ほんの少しだけ欠けた月が僕を照らしていた。



70：「灰色小箱」

迷いの竹林を駆け抜ける。

命の気配を頼りに、竹から竹へひたすら移動。ガサガサと音がうるさいが、そんなことを気にしている場合ではない。

「残るは永琳に幽香、それに文と椀……志妖か」

いつおかしくなるかわからないこの状況で、この五人の記憶を無事に戻すことが出来るのか。正直不安だらけだが、やるしかないのが現状だった。

何をそんなに神経質に、と見た人は言うかもしれない。実際僕もそう思う。

だが、万が一また僕がおかしくなって、取り返しのつかないことになったら……。考えるのも嫌になる。

「もう少しか……」

全力全開で移動しながら呟く。踏み台にしている竹が縦に割れる程に蹴り足に力を含め僕は跳び続け、やがて代わり映えのしない景色に変化が見え始めた。

最後に思い切り跳び、竹林から飛び出す。

永遠亭に到着、だ。

「永琳は……」

「呼んだかしら？」

呟いた僕に間髪いれずに返ってきた声。確かめるまでもなく、永琳のものだ。

声が出た方向に顔を向けると、縁側に腰掛けていた永琳の姿があった。

永琳は僕をまじまじと見つめると、膝の上に開かれている本へと視線を落とす。

興味なさ気なその仕草にどう声をかけようか迷い、

「どうかしたかしら？ ミコト」

何気なく、永琳が僕の名前を読んでいた。

思わず身体が固まり、永琳の姿に釘付けになる。

「……………ミコト？」

「あ、え？ なんて……………」

「……………『なんで覚えているのか』かしら」

クスリと笑う永琳。

僕が頷くと、彼女は本をパタリと閉じて立ち上がる。

「別に覚えていたわけじゃないわ。現に、貴方のことを思い出したのはついさっき。貴方を見た瞬間からなんだから」

「……………」

「腑に落ちない顔してるわね」

「そりゃあ、まあ……………。そんなにあっさり思い出してくれるとは思ってなかったから」

「その口ぶりからすると、他の方々はすんなりといかなかったみたいね。まあ、封印された記憶を思い出すことは簡単ではないでしょうから当たり前か」

スタスタと歩いて近付いてくる永琳。

咄嗟に感情を読み取るも、彼女は平常心そのものだった。

「何難しい顔しているの。私はただ『思い出した』から『受け入れた』だけ。ああ忘れてたんだ、思い出せて良かった。ただそれだけの話よ」

簡単に言ってくれる。今までの人（妖怪）はそれが出来なかったというのに。

例外として橙はすぐ思い出してくれたが、それでもその反動で気を失ってしまったのだ。それを永琳は、全てを理解した上で全てを平然と受け止めている。やはりということか、永琳はいろいろと別格である。

「いつ封印から解放されたの？」

「……それも知ってるのか」

「スキマ妖怪さんに教えてもらったから」

「そ」

もう驚くだけ無駄なことがわかった。

「へえ……そんなことが」

僕の隣で興味深そうに呟く永琳。

予想外に永琳がさらっと思い出してくれたので、ものついでに僕の異常について相談してみたのだが。

「情報が少な過ぎるわね……。残念だけど、どうにもできそうにないわ」

「だろうね。予想してた」

特に気落ちもしなかった僕は、軽い調子でそう返した。前の妖力不足みたいな、どうすればいいのかハッキリしたものならともかく、今回は原因もわからなければ異常の内容もハッキリしていない。

僕が永琳に相談したのは、治してくれるのを期待していたのではない。ただ話して楽になりたかったただけだ。

「ごめんなさいね。力になれなくて」

「いやいや。こっちこそいきなり悪かった」

縁側に座っていた僕は立ち上がり、思い切り身体を伸ばす。

次は幽香辺りにでも、と考えていると、永琳がおもむろに懐から小さな箱を取り出した。

「それは？」

「昔貴方に作った薬よ。覚えてない？」

「ああ。あの丸薬ね」

僕の妖力を一時的に全開にしてくれる、確か初めて使ったのは幽香の時だった。

これがなければ、あの時僕は立ち上がることは無かっただろう。というか、永琳に返した記憶が無いのだが……。まあ細かいことは気にしないことにする。

「それがどうかした？」

「ええ。この薬、貴方の妖力を無理矢理増大させる結構強力な精力剤なのだけれど……」

「精力剤だったのか」

衝撃の事実。

「今の貴方がこれを飲めば、おそらく身体が急激な妖力増大にシヨツクを受けて、よければ全身麻痺、悪くて気絶してしまうでしょう。けれど、逆に言えばこれを飲みさえすれば貴方は何も出来なくなる。……やりたいこともやりたくないことも、関係なく、ね」

「……………」  
「もし貴方がその異常でおかしくなって、自分でそれに気が付いたらこれを飲めば、貴方の考える『最悪の状況』は避けられるでしょう」

差し出される小さな灰色の箱。

僕はそれを見つめ、考える。前の薬ですら連続服用は危険だと言われていた。なら、今回は？

「一応聞いとく。もし」

「もし連続服用してしまつたら」

僕の声に被せられる永琳の声。思わず黙ってしまう僕を、永琳の真っ直ぐな視線が貫く。

「……………もし、連続で服用してしまつたら、貴方の身体は膨れ上がった妖力に耐え切れずに　死滅する」

「……………」  
「だから、覚えておいて。『それ』を使うのは最終手段。抗う術も

無くなって、どうしようもなくなった時にだけそれを使いなさい。

……まあ、使う意思があれば、の話だけれど」

「……肝に命じておくよ」

箱を受け取り、懐へとしまう。

永琳の言葉は、重く、深く身体に減り込むようだった。

僕は、永琳と一度視線を合わすとクルリと背を向ける。

そして、少しだけ振り返って。

「また来るよ」

笑顔で言っ、竹林に飛び込んだ。

竹林を来た時と同じように駆け抜け、次の目的地を決める。

向かうは、あの向日葵の花畑だ。

「最初に薬を使ったのも幽香……。今回はどうなるものか」

少し白み始めた空を見上げ、またすぐに前を向く。

急がなければ。

70：〔灰色小箱〕（後書き）

やはり連続投稿は短くなりがち。  
次はあのフラワーマスターと再会。

71：「黒く染まりし」

森から飛び出し、草を根本から刈り取りながら停止。

少しだけ乱れた息を整えながら、ここからは歩いて移動。

というのも、向日葵の花畑はもう目と鼻の先にあるわけで。あのままのスピードでいったら、止まる時に向日葵をへし折ることも有り得ると思ったからである。

着物についた葉を払い、小高い丘を見つけたのでそこに腰を下ろす。向日葵の顔はまだ下を向いており、前のように背後に気配を感じることも無い。

と、花畑の向こう側にぼつんとある家の扉が開くのが見えた。あそこに住んでいるのは、一匹の花の妖怪。風見幽香である。

「まだ大丈夫」

そう自分に言い聞かせ、大きく深呼吸。大丈夫、まだ僕は僕のままだ。

そんなことをしていると、ワサワサと音を立てて向日葵が動き始めた。幽香の家から僕がいる丘まで、ひとつの道を作るように花畑が割れていく。

「こんな朝日も昇り切らない内から、何の用かしら？」

閉じた日傘を片手に、スタスタと優雅に近付いてくる幽香。

僕は座ったまま姿勢を変えず、ただその姿を見つめ続ける。

何も反応しない僕に、幽香は怪訝そうに僕を見返してきた。と、そこでピタッと立ち止まる。

「……貴方」



「？」

ぽつりと呟いた幽香は、立ち止まったまま口に手を当てて何か考え始めた。

まさか思い出してくれたのか、と期待したが、すぐにその考えを捨てた。そう上手くいったら苦労は無い。

皆、永琳みたいにいくわけないのだから。

「なにかしら……貴方を見ていると、身体が疼くような……。もしかして、貴方なら」

そこで、僕と幽香の視線が交わる。

幽香はそれで何かを感じたらしく、その口元が妖しく歪んでいく。

そして、彼女の表情が裂けたような笑みになった瞬間。

「っ……！」

僕がいた丘が、レーザーらしきもので消し飛んでいた。

冷や汗をかきながら四ツ足で着地。

おいおい……前はあんなの使ってこなかったぞ？

「避けた……避けられた。ウフ、ウフフフフ！ 避けてくれた！」

「……？」

「そうよ！ 私が待っていたのは貴方！ このどうしようもない穴を埋めてくれる、貴方を待っていたのよ！」

「なっ」

ゴウツ、と身体が押されるような威圧感。

凄まじい妖力が幽香から発せられ、思わずこちらも妖力を解放して

しまつ。

元から強いとは思っていたが、この百年で更に進化しているようだ。

「今までの相手は全員駄目だった！　どんな強者も私の穴を埋めることは出来なかった！　でも、貴方なら……そう、他でも無い貴方ならっ！　アハハハハハッ！！！！」

ギリ、と歯を食いしばる。

体勢を低くして幽香を見上げ、いつでも動けるように準備。

幽香の言う『穴』がなんなのかはわからない。

記憶も、戻っているかと聞かれれば十中八九戻ってはいないだろう。今わかっているのは、たったひとつ。

「……ああ、僕が埋めてやろうじゃないか。その『穴』とやらをね」

突き刺すような妖気を弾き返し、こちらも全力で妖気を解放。

ふわりと幽香の身体が浮き上がり、それにつられるように周りの向日葵も背を伸ばしていく。

こうなってしまうえば、戦いたくないなんて甘いこと言ってられない。

一瞬でも気を抜けば待っているのは天国……いや、地獄への扉。

覚悟を決めて、戦うしかない。

「さあやりましょう？　殺し合いましょう！？　アハハハハハッ

！！」

幽香の笑い声が辺りに響き渡る。

次の瞬間には、幾多の向日葵が僕へ襲い掛かってきていた。

「チッ」

舌打ちを鳴らしながら、右へ左へ跳びはねる。

後ろから迫る向日葵を振り向き様に一闪し、わざと転んで幽香の傘の一撃を避けた。

跳ね起きの要領でその傘へ蹴りを入れてそのまま飛び起き、低い姿勢で腹に一撃を入れる。怯んだ幽香を見た僕は、彼女の肩を踏み台にして空へと跳んだ。

「食らえっ!」

両手を勢い良く広げ、大量の弾幕を作りだす。間髪入れずにそれを幽香に叩き込んで。

「ぬるいわ。これぐらいはしてきなさいっ!」  
「!?!」

僕の弾幕全てを飲み込み、例のレーザーが空中の僕へと襲い掛かった。

瞬間、僕は身体をよじってそれを回避するも。

「避けると思ってた」

そう呟いた幽香は、いつの間にか空中の僕に接近している。

エビ反りになっていた僕の身体に、容赦無く傘を振り下ろした。

「あぐつ!! っはあ……………!!」

その一撃でくの字になった僕の身体は、まるで人形のように地面にたたき付けられた。

二度、三度バウンドし、肺の空気が吐き出される。食いしばった歯の隙間から血が流れ出し、それを拭おうと口元に手を近付け、

「ぐっ……………!!」

這い出してきた血に耐え切れず、思い切り赤色を吐き出してしまった。

ビチャビチャと音を立てて地面に落ちる、唾液混じりの血液。

身体が震え、反対の手で口を拭いながら立ち上がる。

地面が柔らかい土でよかった、もし踏み固められた固い場所だったら、立てたかどうか微妙なところだ。

「ぐ……………う? っ、フッフ。まだ、まだ終わっちゃいやよ。まだ、

私の穴は埋まりきってない」

額に汗を滲ませながら、それでも幽香は笑いながら言う。

僕の攻撃が少なからず効いているのだろう。彼女の感情に、少しずつ『苦痛』が生まれてきている。

……………これなら、なんとかいけるか?

幽香に向けて右腕を上げ、ぐっとその手を握り締める。先程よりも強く、幽香の感情を取り込み

「ううっ!?!」

強烈な頭痛が、僕に襲い掛かってきた。

まるで頭が内側から裂けてきそうな強烈な痛みにも、思わずまた膝をつく。

その衝撃で再度吐血。目の前が歪んで、身体に力が入らない。

「ぐ……う、はあっ……」

目を回した時のように、世界が回転しているかのような感覚。あまりの苦痛と、それゆえの脱力感に、思わず目を閉じてしまいたくなり。

「が、あ、あ、あは、アハハハハハッ!!」

幽香の狂ったかのような笑い声を聞き、まずいと思ったその時。

僕は、突撃してきていた幽香を殴り飛ばしていた。

ドドッ、と数メートル先に倒れた幽香は、頬を抑えながら起き上がる。

その目は、何か信じられないものを見たように見開かれています。

「あぐっ!?!」

次の瞬間には、僕の手によって首を締め上げられていた。

片手で持ち上げた幽香の身体に、もう片方の手で攻撃を加える。

一発目で声が漏れ。

二発目で涎が飛び。

三発目で血を吐いて。

四発目を入れるかどうか迷い、少し考えて頭から地面にたたき付ける。

「ぐふっ……！ あ、貴方、その姿は……！？」

「……………」

幽香の音が、頭に入らずにそのまま通り過ぎていく。

右手を掲げ、爪を伸ばして妖力を籠めて、ちらりと幽香の姿を一瞥。逃げられないように足の骨を踏み砕く。絶叫すら気にならない。

そして、僕は弓を引くように右腕を引いた。後はこの腕を突き出すだけ。

「気になってついてきたら……悪いけれど、しばらく眠ってもらおうわよ」

と、そこで僕の脇腹に数回の衝撃が。

見てみれば、そこには五、六本の矢が突き刺さっていた。

途端に目の前が暗くなり、身体から力が抜けていく。

「……………髪が、黒く？ どういうことかしら……………」

弓矢を片手に歩いてくる彼女の言葉。

それを最後に、僕は前のめりに倒れていった。

71：「黒く染まりし」（後書き）

わざと言葉を少なめにしてみた。  
展開が早くなった。

72：「リターン・ザ・永遠亭」(前書き)

胃炎から復活。



72：「リターン・ザ・永遠亭」

「ん……………」

「あ、目が覚めましたか」

目を開き、かけられた声にしばらく反応出来ずにいると、頭上からピコツと白い耳が現れた。

なんだこれは、と無意識に手を伸ばす。

耳なのはわかるが、少し長すぎやしないか、これは。

「……………兔の耳？」

「ふあっ……………ちょ、いきなり何を！」

「痛っ」

パシンと僕の手が叩かれ、思わず手を縮こめる。

叩かれた痛みで目が見開かれ、そこでようやく僕は今まで寝ていたことに気が付いた。

「おかしいな、僕は確か……………、っ！」

「ああっ、駄目ですよ。貴方の身体は、貴方が思っている以上にポロポロなんです。それに、まだ毒も残っているでしょうし……………」

「毒？」

「毒です。神経毒」

「……………またなんで」

そんなものが、と言いかけて口を閉じる。心当たりがあったから。とりあえず身体を寝かし、首だけを動かして周りを見る。どうやら、ここは永遠亭の一室のようだ。

「気分はどうですか？」

「うん？ …… ああ、まあ最悪かな」

「そうですか、最悪……え？」

「別に身体の具合が悪いわけじゃないよ。こっちの話」

ごろりと寝返りを打ち、枕に顔の半分を埋める。身体が痛むのはもはや気にしない。というか、どうでもいい。

それというのも、僕は、僕が幽香にしたことをハッキリと覚えてしまっているわけで。

あれだけ気にかけていたのに、結局はあんな結果になってしまった、してしまった自分に呆れてしまう。

「あの…… なにかあったんですか？」

「……………」

「あ…… すいません」

「いや…… ただ、しばらく一人にしてくれたらありがたい。身体なら大丈夫だから」

「…………… ですが」

「お願い」

自分でも嫌になるぐらい小さな声しか出ない。

だが、兎の耳を頭から生やした彼女はスツと立ち上がり、音を立てずに襖を開けて部屋から出ていった。

が、出てすぐの場所で彼女は立ち止まっている。姿は見えないが、命を感じる僕にはわかる。

おそらく永琳に僕を見ているように言われたんだろう。少し悪いことをしたかもしれない。

だが、それでも。

「…………… ふう」

僕にだって、一人になりたい時がある。  
この際だ、三十分程落ち込んで、その後に復活しよう。  
いつまでも落ち込んでいるわけにはいかないが、落ち込まずにいら  
れるほど僕は強くないから。

「ミコト？ 起きてる？」

「ああ。起きてるよ」

あれから一時間程経っただろうか。  
声の主は、僕の返事から少し遅れて部屋の中へと入ってきていた。  
彼女の手には、幾つかの種類の薬が入った籠。もう片方の手には水  
が持たれている。

「気分はどう？ 身体の方はまだしばらくかかると思っけれど」

「大丈夫。確かに身体は痛むけど……ま、慣れたものさ」

砕けた口調で言う僕。

……呆れた顔で見られた。

当然か。重傷に慣れる、なんて言う患者はそう多くあるまい。  
永琳は盛大に溜め息をつく、籠の中から幾つかの薬を取り出す。  
僕はそれを水と共に受け取り、特に躊躇いもなく喉へ流し込んだ。

粉薬特有の感触が口に残り、それを消すためにもう一度水を口に含む。

「っ……はあ。何の薬？」

「飲んだ後に聞くかしら、普通」

「毒じゃないのはわかってるから」

「……解毒薬と鎮痛薬よ。少しすれば眠気が来るはずだから、無理しないで寝てなさい」

身体を起こしていた僕は永琳に肩を押され、ポスンと枕に頭を乗せた。

身体に力が入らないのはダメージか、それとも薬がもう効いてきたのか。神経毒がまだ残っているのも有り得る。

まあ、どれが原因であれ考えても意味はないか。

「どうかした？」

考えながらも永琳の視線を感じていた僕は、何気ない風を装ってそう聞いた。

いつもは冷静な永琳がどことなくそわそわしているのは、多分気のせいではないだろう。

「聞いてもいいかしら。……貴方に、今何が起きているのか」

「……………」

やっぱりか。当然の疑問だ。

僕は首を動かして永琳に視線を向ける。特に動揺している様子も見られないので、ただ単に気になっただけだろう。けど、何が起きているかと聞かれても……。

「前にも言ったけど、僕も何がなんだかわからないんだ。ただ……」  
「ただ？」

目をつぶり、あの瞬間を思い返す。

あれからどれ程の時間が経ったか知らないが、スムーズにあの瞬間が脳裏に蘇る。

幽香からの一撃をまともに喰らい、それでも彼女の感情を操ろうと能力をおうとして。

「うっ……」

「……ミコト？　あまり無理は」

「いや、大丈夫」

心配してくれる永琳にそう返し、僕はさらに記憶を探っていく。

そう、幽香の感情を操ろうと、彼女のそれを深く取り込んだ瞬間からだ。

そこから僕の身体……というか、『僕自身』に異変が起きた。

まずは強烈な不快感。

僕の意志を無視するかのようになり、身体が動かなくなり、世界が回転を始め、

「……あれは、まるで」

無防備な状態で幽香の一撃を喰らう寸前に、世界はちょうど一回転してピタッと止まって。

「……糸」

眼前に迫った幽香の一撃。

それがまるで止まったように見える程の速さで、僕は彼女を殴り飛

ばしていた。

「……切れちゃいけない何かの糸が、ぷつぷり切れちゃったみたいだった」

目をつぶり、胸に手を当ててみる。

怒りが振り切れてしまったわけではない。

しかし、なにかが『切れて』しまった、という表現は正しいように思う。それ以外にうまい表現が見付からない、というのもあるが。

「糸、ね」

「うん。……というか永琳、なんであの場所に？」

「貴方のことが気になってね。ただそれだけ」

嘘だ。永琳が気になったという理由だけで僕を付けてくるはずが無い。

しかも弓矢という完全な武器まで持ってきていたのだから、僕の心配、というよりは僕が犯す行動の方が心配だったのかもしれない。でなければ、あそこまで迷いなく弓は引かないだろう。

「あと、幽香は」

「あの花の妖怪ね。私が貴方を回収しようとしたら『私の家で休ませる』って言って聞かなかったわ」

「……記憶が戻ったのか」

「おそらくね。もっとも、あちらさんもボロボロで動けないみたいだったから無視して戻ってきたけれど」

永琳の言葉に、思わず少し笑ってしまう。

いくら記憶が戻ったとはいえ、寸前まで殺されかけていた相手を引き留めようとする幽香にもそうだが、それを平然と無視して帰る永

琳も永琳だ。いや、平然としていたかどうかは知らないが、その場面を想像するとそんな永琳の姿が思い浮かぶのだからしょうがない。

「そっか……。でも、謝りに、いかないと……な……」

「そうね。でもその前に身体を治しなさい」

だんだんと眠くなってきた。

永琳が僕に布団をかけてくれる。心地好い重みが全身にかかり、さらに眠気が強くなる。

僕は永琳をちらりと見て、変わらない様子でいることを確認すると目を閉じた。

永琳はミコトが目を閉じた後も、しばらくその姿を見つめ続けた。

やがて規則正しい呼吸音が静かな部屋に聞こえるようになり、彼女はふう、とひとつ息をつく。

そして、息を大きく吸い直し、手を伸ばして彼の髪に指を通した。

その色は 灰色。

「あの時は、確かに……」

髪から手を離し、ぽつりと呟く。

永琳は確かに覚えている。

ミコトが風見幽香を、傍目に見れば殺しにかかっていた時は、確かに髪は黒く染まっていた。

着物がもとの髪の色と同じ灰色だっただけに、その変化は顕著だった。光を反射しないその黒は、触れたもの全てを黒く染めてしまいくらいな程に……深かった。

不思議なことに、気を失ってしばらく立つと黒は毛先から引いていき、今はいつも通りの地味な灰色。

一体、彼の身に何が起きているのか。

永琳は、表情を変えずに深く考え込んでいたのだった。



72：〔リターン・ザ・永遠亭〕（後書き）

外がとんでもない吹雪。

開けた窓が吹っ飛ぶかと思った。

そんなどうでもいい余談。

73：「狂気の瞳」

「うにゅう……」

猫紛いの声を漏らしながら寝返りを打つ。

寝起きか寝ぼけ状態の時はいつもこう。別に意識しているわけでもないのにこんな声が出てしまう。

昔桃鬼にからかわれて直そうと足掻いた時期もあったが、今では開き直りこんな有様。

「じゃ……」

再度、ゴロリ。

そういえば、橙も僕と同じ癖があったなあ。二人（二匹）して同じ布団でじゃあにゃあ鳴いている場所を藍に目撃されちょっとした騒ぎにもなった。もしかしたら化け猫は皆似たような癖があるのかもしれない。

そんなことを考えていたらだんだんと目が覚めてきた。パチパチと二回ほど瞬きをしてから目をこすり、ムクリと身体を起こす……

「あ……」

「……！」

額辺りにさらりとした感触。しかしそれは一瞬で、

「うわっ！」

開いて光を受け入れていたはずの僕の目は、一瞬で暗闇しか映さなくなってしまう。その刹那に見えたのは、長い髪に白い耳。

暗闇は完全なものではなく、ほんの少しだけ細い光の形が見える。そしてほんのり感じるこの温もりは……。

「え、と……」

現在進行系で僕の両目を包んでいる暗闇　誰かの両手を掴んでみるが、それは一向に離れる気配を見せない。少し汗ばんでいるのは気のせいだろうか？

おそらくは背後から僕の目を覆っているのだろう。耳にかかる吐息が妙にこそばゆい。

むやみに引きはがすのも何か違う気がして何も出来ず、その体勢のまままで時間が流れていく。僕も相手も何も喋らない。と、そこで。

「具合はどうかしら、ミコト……」

すうつと襖が開かれる音がして、そんな声が聞こえてきた。永琳のものだと判断した僕は、声の方向に首を傾ける。が、当然何も見えはしない。

次に聞こえてきたのは、永琳の小さな溜め息の音だった。

「うごんげ」

「は、はい……」

「面倒だし何も聞かないわ。だから、早くその手を離してあげなさい」  
「……………」

ゆつくりと僕の顔から手が離れていく。途端視界に入り込む光に僕は目を細め、それでも僕は永琳と後ろにいる彼女の姿を交互に見る。

僕の視界を封じていた彼女のウサミミは、心なしかシユンとして  
いるように見えた。

「ついでだから紹介するわね。……といっても、もうすでに何回か  
会っているはずだけど。彼女は鈴仙・優曇華院・イナバ。私の弟子  
よ」

「弟子？ 永琳の？」

「私が弟子を持っているのはおかしいかしら？」

「いや、全く。でも……ふうん」

彼女 鈴仙の姿を眺めてみる。

見た限りでは僕と同じ妖獣の類だろう。

しかし、なんだろう。彼女の『命』は、妖獣のそれとはどこか違  
う。

この『命』……。どこかで、僕は知っている。

「いや、でも……」

頭を抱え、再度彼女を見つめる。

やはり、違う。

彼女の『命』は、妖獣のものとは、どこかが違う。

これは、どちらかと言えば永琳やあの『かぐや姫』のような月人  
のものに近い。

と、いうことは、彼女もまた月の……。

「……いや、面倒くさい」

彼女に聞きもせず一人で悶々としていても仕方ない。そもそも、

彼女が月の住人だったとして何があるというのか。

「ミコト?」

「なんでもない。えっと……鈴仙、さん?」

「……鈴仙・優曇華院・イナバです。好きに呼んでもらってかまいません」

どことなく冷たい反応。僕と目を合わせようとしない鈴仙は、僕の視線に耐え兼ねたのか、すっと立ち上がって部屋を出ていってしまった。しかしながら永琳に一礼を忘れないところを見ると、どうやら師弟関係は本当みたいだ。

「ごめんなさいね。あの娘は割と人付き合いが苦手なの。まあ、すぐに慣れるわよ」

「どっちが?」

「さあ? 貴方があの娘の対応に慣れるか、あの娘が貴方に心を開くか……それだけの違いよ」

ふうん、と適当な返事を返し、僕は彼女が出ていった部屋の入口を眺める。

少しばかり感情を読み取らせてもらったが……。

昔僕の隣にも似たような奴がいたことを思い出す。よく僕の着物を掴んで動かなかった彼女は、今では立派に一人で生きている。なら、彼女もまた……。

「永琳。彼女の能力教えてくれる?」

「能力? またなんで」

「いや、どうやら自分の能力に振り回されているみたいだなあ、と。もうしばらくここにお世話になりそうだし、ちょっとお節介をば」

僕がそう言うと、永琳はしばらく僕の目を見つめてその視線を動かさなかった。当然、僕も永琳から目を逸らさない。

しばらくそうして見つめ合い、目が乾いてきたなあとかくだらないことを思った時、ようやく永琳はその口を開いた。

「『狂気を操る程度の能力』よ。まあ、ほどほどにしておきなさい」  
「ありがとう。で、僕の着物は？」

「血が染み付いていたから洗濯したわ」

「さいですか」

派手な色合いの着物の袖を掴み、ひとつ息をついて立ち上がる。

「無理は駄目よ。今の貴方はつぎはぎだらけの人形と同じ。いくら動けるからといって油断したら、中の綿が飛び出しかねないから」  
「……了解」

さすがに自分のはらわたは見たくない。僕は包帯が巻かれた脇腹を軽くさすり、その感触に目を細めながら部屋を出た。

……でも、そんな大袈裟な怪我したかなあ……？

「いたいた」

気配を頼りに永遠亭を練り歩くこと数分。案外簡単に鈴仙の姿を発見。縁側に腰掛けている彼女は、曲がり角にいる僕に気が付いていない様子。

どうせだ、少しばかり驚かせてみよう。

妖力を抑え、隠行発動。僕はなんの躊躇いも無く鈴仙へと近づいていき、

「いい天気だねえ」

「ひゃっ!？」

彼女の隣に座ったところで、隠行を解除した。いきなり現れた僕に鈴仙は飛びのき、ソックスのまま土の上へ逃げ出した。予想通りの反応に思わず笑ってしまう。

「……やめてください、心臓に悪い」

「いや、悪かった。驚いたところが見たかったもので」

言いながら僕は彼女の顔を見る。が、彼女は僕の顔を見てはいなかった。そんなに目を合わせたくないのか。

だが、永琳には普通に接してるはず。仮にも師匠、目を逸らしながら話すことはしないだろう。

彼女の能力は『狂気を操る程度の能力』。彼女が執拗に目を逸らすのは、目を合わすことで能力が発動してしまうのが嫌だからだと仮定して……（多分やろうと思えば目を合わせなくても操れるんだろうけど）。

と、すると……。

「ねえ」

「なんですか」

「綺麗な目してるね。もっと良く見せてよ」

「……なんですか」

「いやあ、僕の目ってほら、灰色だからさ。君のその紅い瞳、綺麗ななあって」

言いながら立ち上がる。鈴仙は背を向けている。気付かれることはあるまい。

「……『狂気を操る程度の能力』だっけ？」

「……！」

彼女の目が驚きで大きく見開いた。それもそうだ、いきなり目の前に僕が現れて、自分の顔を抑まえられるのだから。

彼女の紅い瞳には、僕の姿がしっかりと映っている。

「駄目です！ 早く目を逸らして！」

「なんで？」

「なんでって……え？」

パチパチと瞬きをする鈴仙。僕はそれを見てニヤリと笑い、彼女の顔を抑まえていた両手を離れた。

「僕の能力は『感情を操る程度の能力』。君の操る狂気だって感情のひとつだ。僕には効かないよ。……それに」

「……？」

「仮にも万を生きた妖怪だ。そう簡単に狂ってられないよ」

言いながら、半分程妖力を解放。風が吹き荒れ、竹林がうるさくざわめきはじめる。



鈴仙は、ぺたりと尻餅をついてしまっていた。息を吐いてから鈴仙に手を差し延べる。

「まさか、師匠がよく話していた化け猫って……」

「あや、永琳が僕のことを？ うん。話の内容はわからないけど、それは多分僕のことだ」

永琳がどんなふうにも僕のことを話していたのかは少し知りたいが、それは後。

呆然としている彼女の手を掴み、少し強引に立ち上がらせる。

「よつと……。服汚しちゃったな、ゴメンよ」

「いえ……。ですが、なんで……」

「うん？」

首を傾げて尋ねると、鈴仙は気まずそうにまた目を逸らした。もう癖になってしまっているのだろう。

ただまあ、何を聞きたいのかはわかっている。

「勿体ない、って思ったからね」

「？」

鈴仙の後ろに周り、背中に付いた土埃を払う。ついでに髪も手で掬い、土を指で梳き取っていく。

「せっかく綺麗な顔してるんだ。笑わなきゃ損ってもんだらう？」

「なっ……!!」

びくりと身体が震える。振り返った鈴仙の顔は、真っ赤だった。

「うん、驚いた表情もまた良し。そうやって感情を表に出しなよ。少なくとも、そんな君の方が僕は好きだ」

「な、なにを……」

小さく呟いた彼女の手を引き、縁側に座らせる。

長い髪を一掴みずつ、丁寧に梳いて土を取っていきながら、僕は口を開いた。

「よし。今日から練習しよか」

「……？ なにを、ですか？」

「能力を上手く使う練習。永琳とかには普通に接することが出来るんでしよう？ なら、能力を何とかすれば普通の人にも同じように接することが出来るじゃん」

実際はそう上手くいきはしないだろうが、なにせよ能力を上手く使えて損は無い。

どうせ僕の怪我も完治までは後数日かかる。何もせず経過すりかは、こうして彼女の為に動くのも悪くあるまい。

「……まあ、鈴仙が良ければの話だけどね。どうする？」

大方の土を取り終え、ポンと肩を叩いて振り向かせる。

鈴仙は、先程よりはましな、しかしまだ赤いままの顔をこちらに向けて。

「なら……お願いします」

その真紅の瞳を、しっかりとこちらに向けてそう言った。

73：「狂気の瞳」（後書き）

この頃のうどんげは能力が制御しきれない為に、彼女の目を見てしまうと相手は狂気に刈られてしまう。

ある程度の霊力、妖力、精神力その他があれば大丈夫。

なんて事故設定。

つぎはぎだらけな設定かもしれない。

74：「灰 黒」？」

大きく息を吐き、そして吸い。

それを何度か繰り返し、息を止めた僕はぐつと地面を踏み締める。そして、膝を思い切り曲げてしゃがみ込み

「やっ!!」

真上に、跳んだ。

竹林を遥か下に見下ろし、なおも上昇を続ける僕の身体。脚を蹴り上げ、その反動で空中で仰向けになる。そのまま思い切り伸びをした僕は、ぽつりと呟いた

「完全復活、ってところかね」

もう一度蹴り上げる動作をして、今度はくるりと半回転。俯せの姿勢で重力に捕まり、自然落下に身を任せた。

「もう大丈夫そうね」

「おかげさまですっかり治ったよ。ありがとう」

着地した僕を出迎えたのは永琳だった。

口元に優しい笑みを浮かべている永琳は、トスンと縁側に腰掛ける。

「いつ出るの？」

「今日の夜には」

「そう……。寂しくなるわ」

「半分嘘？」

「六割本音」

四割嘘か、と笑いながら僕も隣に座る。

しかしまあ、一週間程度とはいえ、客人の無い永遠亭ではこんな僕でもたまの良い刺激にはなるのだろう。そう考えれば、悪いものではない。

「鈴仙は？」

「今は自分の部屋にいるんじゃないかしら。貴方を待ってたりして」  
「からかうのはよしてよ。ただ挨拶しにいくだけさ」

靴を脱ぎ、ギシリと廊下を踏み締める。どこからともなく現れたウサギさんを肩に乗せて、鈴仙の部屋に向かうことにする。

「あ、永琳」

「？」

音を鳴らしながら、何となくゆっくりと歩く。

思い返すのは鈴仙のこと。

予想外に怪我の治りが早かったので（果たしてそれが僕の自然治癒力の高さなのか永琳の薬のおかげなのかはわからないが）、鈴仙

の能力練習は三日程しかできなかったが、それでも僕相手には普通に接してくれるようになった。時折見せる笑顔はとても綺麗で、思わずこちらも笑顔になってしまうほど。最近気付いたのだが、どうやら僕は普段無表情な人の笑顔が大好物なようだ。鈴仙の笑顔にも例外無く惹かれていくわけである。

「うーん……。これも一種の狂気だろうか」

自分の言葉に少しだけ笑いながら、擦り寄ってくるウサギに目を細める。

狂気と言えば、彼女の能力の練習相手をしていてわかったことがある。まだ確信出来てはいないのでなんとも言えないが……まあ、それも今日中に確かめてみよう。丁度鈴仙の部屋に着いたことだし。

「鈴仙？ 入っていい？」

「あ、ハイ。どうぞ」

返事の後に襖に手をかける。特に躊躇いも無く開け放つと、そこには鈴仙が正座して机に向かっていている姿があった。薬の勉強でもしていたのだろうか。

「あ、邪魔したかな」

「いえいえ、丁度終わったところです。そろそろ来る頃かなあと思っています」

振り返って笑顔を見せる鈴仙。待ち侘びていたかのようなその台詞に、若干の嬉しさを感じながら扉を閉める。ウサギさんはいつさつきどこかへ行ってしまった。

「さて、今日も練習をするわけなんだけど」

「？」

首を傾げる鈴仙。長い耳がふらりと傾いた。

「僕は今日の夜ここを出ることにしたから、これが最後の練習になる。だから、今回は少し趣向を変えて……」

「ち、ちよっと待って。今日の夜、ですか？」

「うん。怪我も完治したし、あんまりのんびりもしてもらえないからね」

「……そう、ですか……」

あからさまに落胆する鈴仙。別に永遠の別れになるわけでもなし、そんなに落ち込まなくともいいだろうに。

「まあ、今日の夜まではいるからさ。どうせならそれまで付き合っても構わないし。だからちよっと頭を切り替えて話を聞いて」

「……わかりました」

ぱつと表情が切り替える鈴仙。耳がへたりとしているのは見ないことにしよう。

「よし。で、今回の練習なんだけど……まあ、難しいことはしないから安心して」

「はあ。なにをするんですか？」

「今までは僕が鈴仙の感情を操って、無理矢理能力を使用出来ないようにしていた。そうすることで、能力を使っていない時の感覚を覚えてもらおうとしていたんだけど……。今回は、それとはある意味真逆のことをしてもらおう」

言って、僕は鈴仙の真正面に跳んで着地。至近距離でその瞳を見

据え、僕は口を開いた。

「僕を、全力で狂わせてもらっ」

「……………へ？」

「ほ、本当にいいんですか？」

「くだい。やるって言ったらやるの。それとも何、逆に狂わせて欲しいの？」

「う……………。わかりました、では」

場所は変わって永遠亭の外。少し開けた場所で、僕と鈴仙は向かい合う。

僕の言葉で鈴仙は目を一度閉じ、しばらく突っ立ったまま動かない。

対して僕は臨戦体勢程度に妖力を解放し、ただ鈴仙の閉じられた瞳を見つめている。能力は使わない。これは、彼女の能力をこの身に受けてこそ意味があるのだ。

……………実を言えば、それは鈴仙の為ではなく、僕の為のだけだ。

「いきます」

「いつでも」



ぼつりと放たれた言葉に、同じくらいの声で返す。  
そして鈴仙の目が開かれ、その紅い瞳を直視した瞬間

「っ」

ドクン、と心臓が跳ね上がった。

思わず歯を食いしばり、頭を抱えるも視線は逸らさない。半ば睨みつけるように鈴仙の瞳を見続ける。

「ぐっ……あ……！」

食いしばった歯の隙間から息が漏れ、しまっていたはずの爪が飛び出した。

心臓の鼓動が全身に響き、いつしか身体全体が心臓で出来ているかのような感覚に陥っていた。

視界がぐにやりと揺らぐ。竹林の竹が信じられないしなやかさを見せている。

どつと汗が溢れ出す。次の瞬間世界がガクリと揺れ動き、それは自分が膝をついた衝撃のせいだと鈍る頭で理解した。

「ミコトさん!?!」

「止めるな……続けるッ！」

「っ!?!」

僕の怒声にビクリと身体を震わせる鈴仙。

もう少し、もう少しで、僕になんらかの『変化』が起きるはずなんだ。

「ハッ、ハアッ……」

グラグラと揺れ動く視界の中、ひとつだけ揺らがない物体が存在する。

それは、鈴仙の姿。僕を直視する紅い瞳がある顔は、何かを我慢しているように見える。

「ッー！」

心臓が跳ね上がる。送られた血液が沸騰している。脳が締め付けられ、骨が軋んで悲鳴を上げている。

××セ。

「があっ……」

頭を地面に擦り付ける。視線を外しても、この苦しみは和らぐことは無い。

□××。

頭の中から響く声。

その声が響く度に頭蓋骨にひびが入るような痛みが走る。

×□セ。

「……る……せ……？」

□×セ。

「1J……□'せ……」

□□セ。

「1JN'せ……□□せ……」

□ □ せ 。

「コロセ……コロ、セ。殺せ、殺す……！」

「ミコトさんっ！……！」

「っ……！」

声が聞こえた瞬間、僕は地面を思い切り殴りつけた。即座に感情を操り、暴れ出した感情を上から塗り潰していく。理性を一瞬で取り戻し、僕はパタリと後ろに倒れこんだ。脱力感が尋常じゃない。しばらく動けそうにないな、これは。

「ミコトさんっ！ 大丈夫ですか！？」

「ん……まあ、なんとか」

駆け寄ってきた鈴仙に抱き抱えられ、僕は軽い調子でそう答えた。さて、自分ではわからないから鈴仙に聞いてみようか。

「鈴仙。僕の身体、どこか変わってない？ 色が変わってる、とか  
な」

「色、ですか？ ……あつ、髪の毛先が、少しですが黒く……」  
「……なるほど」

やはり、僕の考えはあながち外れてはいないみたいだな。

幽香との戦いの時、僕が気絶する寸前の永琳の言葉を頼りにしてみただが……しかし、あれだけの狂気で毛先だけ、か。一体どれだけの……まあ、今はいいか。

「鈴仙、部屋まで連れてって」

「え？ キヤツ！」

何の前触れも無く猫の姿に変化した僕を、鈴仙は驚いて投げ捨てた。

「ニヤツ！」

「あ、す、すいません！ 思わず……」

慌てて僕を抱き上げる鈴仙。先程よりも優しく胸に抱いてくれる鈴仙の感情を操り、『罪悪感』を消しておく。

ちらりと永遠亭な方を見ると、永琳の部屋の襖がパタリと閉まるところが見えた。

万が一僕が暴走したら止めてくれ、と頼んでおいたのだが、それは杞憂に終わった。正直なところかなり危かったが、土壇場で流れ込んできた鈴仙の感情に助けられた。感謝せねば。

「どうかしました？」

「……なんでもないよ」

……恥ずかしいので言わないけど、ね。

「寝ちゃった、か」

僕の膝の上、少し赤い顔で眠っている鈴仙の頭を撫でる。規則正しい呼吸のリズムが膝に伝わり、僕はそれを見て目を細めた。

「出るなら今のうち、かなあ」

「私に聞いてどうするの。貴方が決めることじゃなくて？」

「いや、そうなんだけど」

開かれた襖から外を見る。丁度日付が変わった辺りだろうか、確かに僕的にはベストなタイミングではある。鈴仙も寝てるし。

「ただ……」

膝上で「ううん……」とか言いながら顔を擦り寄せてくる鈴仙を見てみると、もう少しこうしていたい気もしてくる。

いやでも、僕にはやるべきことがあるからなあ。ここは我慢して行くべきか。

「……………行くか」

鈴仙の頭をなるべく優しく抱え、可愛いウサギさんのクッションを下に置く。かなりひらべったいウサギさんのクッションだが、果たしてこれは使われすぎて煎餅化した結果なのだろうか。

……………どうでもいいことを考えるくらいなら、とっとう行った方がいいな。気持ちがぶれる前に。

「じゃあ行くよ。いろいろとありがとう」  
「また来なさい。歓迎するわ」

永琳の声を背に、僕は膝を曲げる。

振り向きたくなるのを我慢して、僕は竹林の闇へ飛び込んでいった。

「いったわよ」

「……………」  
「貴方も健気ね。『いかないで』と一言言えば、彼は出発を延ばしていたでしょうに」

「……………私には、できません」

「何故？」

「わかりません」

静かになった永遠亭の一室。

一人の少女が、ひらべったいウサギに顔を埋めていた。  
彼女は今どんなことを思い、どんな表情をしているのか。  
感情でも読めない限り、それはわかりはしないだろう。

ぽふっ、と。

叩かれたウサギが埃を立てて鳴いていた。



74：「灰 黒<sup>II</sup>？」（後書き）

うどんげかわいいようどんげ。

75：「感染」

「卑怯者！　そこから出てこい！」

「誰が出ていくかつーの……！」

思わず舌打ちをして悪態をつく。荒れる息を整えながら、背を預けている木から少しだけ顔を出して空を見上げた。白み始めた東の空に浮かぶのは、黒い翼をはためかせている鴉天狗。

感情を読み取るまでもない。なぜなら、彼女の表情は完全に憤怒で歪んでいるからだ。

「どうしてこうなっちゃうのかなあ……」

「そこかつ！」

「うわぁっ！」

強烈な突風。体重の軽い僕は簡単に吹き飛ばされて空へと身を踊らせる。反射的に特製妖力弾を造ってそれに飛び乗り、目の前に迫っていた鴉天狗の突撃を皮一枚でかわした。

「ええいすばしっこい！　まともに戦ったらどうだ！」

「すばしっこいってお前に言われてもなあ……」

はあ、と溜め息をついて頭を抱える。

さて、どうして僕がこんな状況に陥っているのかというと……。

時は、数時間前まで遡る。

僕は永遠亭を出た後、幽香のところへ行くか妖怪の山へ行くかで散々悩み、結局は記憶云々の問題を優先して妖怪の山へ向かっていった。

なぜ妖怪の山かと聞かれれば、記憶が戻っていない（確認がとれていない）残りのメンバーは、椋、文、志妖の三人のみ。その誰もが妖怪の山に住んでいるからである。

残り三人……戦わずに済むことを願うばかりだ。色々な意味で。そうこうしている内に目的地が見えてきたので、僕は更にスピードを上げて妖怪の山へと向かう。見えてしまえば後は数分もかからない。一度思考を切ってただ跳び続ける。

すぐに山の麓についた僕は、勢いそのままに山へと飛び込んだ。志妖のいる洞窟であれ、天狗の屋敷であれ、とにかく早く行きたかったからである。

が、これがいけなかった。

スピードに乗りに乗った僕の身体はそう簡単には止まらない。いきなり止まるならば、脚に妖力を籠めていないと脚がオシャヤリになる程である。さらに、僕は普段跳んで移動している為に、移動中はほとんど地面と接していない。

空を飛んでいるわけではないので空中では当然止まることは出来ず

「何奴！」

「なっ!?!」

その瞬間、いきなり目の前に何かが現れたとしても。

「えっ?」

空中にいる僕は、避けようにも身動きが取れないわけで。

「キヤアアアアア!」

「うわあああああ!」

結局、僕は彼女と顔をぶつけ合ってしまったのだった。

「って、よく見れば椀じゃないか」

夜の暗闇の中、頭をさすりながらしゃがみ込む。

僕と激突した椀は軽く数メートル吹っ飛んでいき、そのまま起き上がることはなかった。死んだわけではない、気絶しているだけである。

参ったな、と彼女を抱き抱える。

最初に出会うのは椀だと思ってはいたが、まさかこんな再会の仕方とは思わなかった。さすがに出会って一秒未満では記憶も確認出来るわけもなし、さてどうしたものか。

なんて考えていると、先程まで全く吹いていなかった風が僕の髪を揺らした。同時に覚えのある命の気配、これは……。

「うわっ！」

いきなり吹いてきた強烈な突風。思わず目をつぶってしまう。顔をかばい、足に力を込めて吹き飛ばされないように踏ん張った。体重が軽い僕は、人間ならなんてことはない風でも簡単に吹き飛んでしまうからだ。

と、ここで違和感。思わず右手で顔をかばっている僕だったが、僕は先程まで椀を抱き抱えていたはずだ。

なぜ、右手が使えている？

「どこの小妖怪かは知りませんが、手を出す相手を間違えましたね」  
「？」

風が止み、代わりに聞こえてきた声に顔を上げる。

そこには、先程まで僕が抱えていたはずの椀をその腕に抱いた天狗の姿。

「よくもまあ、椀を……」

ギリギリこちらに聞こえる程度の声で、黒い翼の彼女は言う。その身体に妖気を纏わせ、空からこちらを見下している彼女は言った。

「椀の敵、取らせていただきます」

とまあ、再度木の陰に隠れて思い返していたわけだが。

「やっぱり、おかしいよなあ」

いくら文が椀と親しいとはいえ、あの状況を見ただけで『敵討ち』などといって襲い掛かってくるだろうか？ 僕の知っている文は、多少のはやとちりをするにはあれ、ここまで過激な行動を起こす性格ではなかったはずだが……。

「またか……！ ええい、ここの木ごと薙ぎ倒してやろうか」

しかも僕が戦わずに逃げ回っているのが気に入らないのか、彼女の感情は怒り一色。本当に薙ぎ倒されては困るので軽く跳躍、文の視界に身を曝す。

僕を見付けた文は、憎らしげにこちらを睨みつけてきた。

やはり、おかしい。

「僕が暴走してた時もこんなになってたのかねえ……ん？」

文の一撃をいなして、乗っていた弾から後ろに跳躍。新たな弾に飛び降りて頭に手を当てる。思い返すは、先程発した自らの言葉。

「まてよ……もしかして」

これまでのことを思い出す。

僕が最初に暴走したのは、確か慧音と戦った時。次に幽香との戦いでも暴走を起こした。どちらも暴走は戦いの中。

慧音は僕との戦いの後、僕の振り撒いていた『得体の知れない感情』に当てられて体調を崩していた。

今考えれば、幽香の様子も普通ではなかった。

そして、今現在戦っている文も。

この三人の共通点は、いずれも僕と戦っているということだけ。だがしかし、もしそれが皆の様子がおかしくなっている原因だったとしたら。

「っ」

顔面に迫る文の突撃。羽が頬に掠り、そこから流れる血が口に入ってくる。

もし、僕の暴走の原因と、向こうの原因が同じもの、同じ『感情』だったとしたら。

「……………!!」

唇を噛み締める。この考えが正しければ、全ての原因は僕にあることになる。

もしかすると、慧音も、幽香とも、戦わずに済んでいたのかもしれない。

「食らえっ!!」

何十とかわしてきた文の突進。

ああそうだ。おかしいじゃないが、こんな短絡的な攻撃ばかりな

んで。

「参った、これからどうすればいいのか考えなければいけないというのに。」

「僕の頭は、考えることを放棄しているみたいだった。」

「……ごめんね」

「突っ込んできた文の身体がくの字に折れ曲がる。」

「顔面しか狙ってこない拳を左手で受け止めると同時に、僕の右拳が文の腹部に減り込んだ。」

「気を失っている文を抱えてゆっくりと下降していく。」

「気を失ったままの椀の隣に文を寝かせ、僕は後ろを振り返った。」

「ずいぶん苦労してるみたいだねえ」

「……」

「その先にいた妖怪は、僕の姿を見るやいなやそう言った。一体どこを見てそう判断したのかは知らないが、事実なので否定はしない。」

「何に悩んでるんだい？」

「……なんでそう思う？」



聞き返した僕に、妖怪　桃鬼はクツクツと笑い、僕の尻尾を指さす。

二本の尾が、捻れるように互いに絡み付いていた。

「何年の付き合いだと思ってる。アンタの癖ぐらい知り尽くしてるよ」

ザクザクと落ち葉を踏みながら近付いてくる彼女。傍らに倒れている二人の天狗を一瞥し、額の角を触る。

「何があったか話してごらん。アンタの相談役になってあげるからさ」

75：「感染」（後書き）

スランプとはこのことか……思うように文章が紡げない。

不自然になっていたりしたらご報告下さい、確認して修正します。

76：「桃の鬼は何を思う」

朝日が差し込んできている洞窟の中、僕はその光が届かない場所に腰掛けていた。今はどうにも、光に当たる気分にはなれない。

桃鬼はそんな僕には付き合わず、光の当たる場所に座って僕を見つめていた。

「……志妖は？」

「出掛けてるよ。だからここに連れてきたんじゃないか」

「……ってことは」

「ああ。アンタのことはまだ思い出しじゃない……いや、今はあの娘は関係無いよ。さ、とつとと話して楽になりな」

招くように手を動かす桃鬼。昔から変わらない桃鬼の姿は、光に照らされてやけに輝いて見えた。

僕はとりあえず、あの吸血姫 レミリアとの一件から後の出来事を彼女に伝えた。桃鬼は、主に僕の異変について深く聞いているみたいだった。

あらかた話し終え、ふう、と一息ついたのは僕の方。

桃鬼は、そんな僕を見てポリポリと頭を掻いた。

「……で？ もう原因の目星はついてるんだろう？」

「……うん」

洞窟の壁に背を預けていた僕は、膝を抱えて身体と膝の隙間に顔を埋めた。

僕の暴走。それは僕の中にある、とある感情が引き起こしていたもの。

確信に近いものが持てたのは、鈴仙との練習のおかげだった。彼女が操る感情は、暴走を引き起こしている感情のひとつだったからだ。今思えば、髪の毛の毛先しか黒く染まらなかったのも理解できる。あれは、『狂気』が足りなかったわけではなく、『狂気』だけではあれが限界の変化だったんだ、ということが。

「ミコト？」

「……僕は感情を操る時、相手の感情を受け入れなきゃならない」

そう。感情を『流し込む』のならともかく、感情そのものを『操る』には、その相手の感情を受け入れ、取り入れ、理解して、その感情を基点としなければ操ることができない。

「受け入れた感情は、僕の中で記憶として残される。忘れようとしても忘れられない。……消したくても、消すことができない。たとえそれが泣き叫ぶ瞬間の感情であっても、断末魔の瞬間の感情であったとしても」

現に、僕の中のどこかには、それが混沌と渦巻いている場所がある。それはわかっていて。わかっている上で、能力で抑えていた……抑えている、つもりだった。

「だけど……限界、なのかもしれない」

「……限界？」

「僕は抑えてるつもりなんだ。つもりだったんだ。……けど……」

慧音に向けていた感情は、歪んだ『愉悦』。暴力的な凌辱を楽しんでいる僕がいた。

鈴仙に揺り起こされたのは、過剰な『否定』。自分以外の生命が

許せない、存在が赦せない僕がいた。

幽香に突き刺した感情は、純粹な『殺意』。何も思わず、何も感じず、ただ彼女を殺しにかかった僕がいた。

文が侵されたのは、強烈な『憤怒』。おそらくは、僕が抑えてい  
るつもりだった感情に当てられたのだろう。そうとしか思えないほ  
どに、彼女の感情は怒りに染まっていた。

「桃鬼だつて感じてるだろう？ 僕が発してる『負の感情』を、さ  
……………ああ。確かにアンタからは、嫌な感じがするよ」

少し間を開けて答えたのは、僕に気を使ってくれたのだろうか。  
表情を変えない桃鬼は、身じろぎせず僕を見続ける。

おそらく、最初はほんの微量だったのだろう。それが、たった二  
回の戦闘で文に害を及ぼすまでに漏れ出して……………そして、文との戦  
闘を終えた今では、桃鬼すら距離を置いてしまうほどに酷くなって  
しまった。

「……………でき、僕、感じてるんだ」

顔を上げ、桃鬼を見る。震える腕で頭を抱え、僕は確信に近い考  
えを彼女に告げる。

「僕……………このままじゃ、桃鬼と志妖を殺しにかかるかもしれない」  
……………！」

桃鬼の表情が変わる。口は開かずとも、僕は彼女が何を聞きたい  
のかがわかっていた。

「……なんで、だい？」

たっぷり間を開けて、桃鬼は僕の予想と同じ言葉を僕へ放った。桃鬼の声を聴いて、腕の震えが増すのを感じた。

「だって……」

ギリ、と歯を噛み締める。頭を抱えていた手の指先から爪が飛び出した。

「だって……」

身体の震えが止まった。あ、ヤバい、かも。

「だって……」

ザリ、と音がした。桃鬼がただならぬ面持ちで立ち上がっていた。

そうだ、そのまま、逃げてくれ。

「だって、この感情」

あれだけ言うことを聞かなかった身体が、スムーズに動いた。否、動いてしまった。

逃げてくれ、桃鬼。この感情、僕が暴走を起こしていたこの感情は。

「僕等を壊滅に追いやった、あの『人間』のモノなんだからさあつー!!」

「ツー!!」

瞬間、桃鬼の頬を掠めていく僕の爪。

僕は勢いそのまま洞窟から飛び出し、地面を勢いよく削って立ち止まった。桃鬼は避けていない。すんでのところで僕が『外せた』のだ。

洞窟から歩いて出てくる桃鬼を、荒い息遣いで睨みつけてしまう。嫌だ、殺したくない。戦いたくなんてないのに、

殺すことが正しいんだと、感情が、本能が告げている。

「……なるほど。あの『人間』が原因の原因だったか。そんなに黒く染まつちゃって」

「っ……」

「アタシも覚えてる。というか、忘れられやしないねえ、あの時のことは。……そうだ、アイツラも今のアンタみたいな目エしてたよ」  
角を触りながら喋り続ける桃鬼。今にも飛び掛かりそうな僕を視界に入れながらも、いつもの自然体を崩しはしない。

「駄目だ……お願いだから逃げて……！ このままじゃあ、本当に」

ザワザワと全身の毛が逆立っていく感覚。嫌なのに、身体が戦闘体勢に移行していく。なのに頭は妙に冷めていて、殺すべき『敵』を冷静に見据えていた。

「逃げる？ フン、冗談じゃないよ。アンタもそう思うだろ？」

「……………！？」

唾を吐くように言い捨てた桃鬼。彼女の言葉に答えるように、背後からザクザクと歩く音が近付いてくる。

それは、僕が振り向くよりも先に僕の横を通り過ぎ、桃鬼の隣に

並んだ。それはもう、不機嫌そうな表情で。

「面白くない冗談は、嫌いです」

「全くさね。アタシらが逃げたら、誰がアンタを助ける？ 誰もいないじゃないかい」

「なっ……」

呆れたように言う目の前の鬼 志妖は、百年前よりも遙に強い妖力を纏いながら僕を睨みつけた。

出掛けていたんじゃないのか、いやそれよりも記憶が戻っていなかったのでは？ 一瞬、そんな考えが頭を過ぎるも、それはすぐ上から黒で塗り潰されていく。

「だいたい、誰がアタシを殺すって？ ハ、やれるもんならやつてごらんよ。この魅王桃鬼、寝ぼけた妖獣に負けるほど平和ボケしちゃいないよ」

「死ぬつもりはカケラもありません」

挑発じみた桃鬼の言葉と、それに続く志妖の否定の言葉。

「思えばアンタとは二勝二敗。決着つけるのもいいかもねえ。今ならアンタも本気で来てくれそうだし。……けどまあ、志妖がいるから無効かもね」

何を呑気な事を、といつももの僕なら言っていたらろう。

ちらり、と自分の身体を見る。灰色の着物が黒く染まり、伸びた爪が少しずつ黒ずんでいく。

先程までとはまた少し違う、抵抗感が薄れた彼女達への敵意。まるで本当にそうすることが正しいかのような……。抗うのが無駄に感じてきているのは、自分に対しての諦めか、彼女達に向けての諦



めなのか。

「……本当に、いいの？」

気が付けば、そう口走っていた。最早僕には、どちらが正しいのかわからない。本当に僕は暴走しているのかすら、わからない。

「ひとつ聞こうか」

「……？」

「アタシらを殺したいのは、『ミコト』か？ それともあの『人間』か？」

「………」

「わからないかい？」

参った、と言うように頭を掻く桃鬼。

次の瞬間、彼女の妖気が山を揺るがした。

「じゃあ、こっちもアンタを殺す気でいかせてもらっよ。死ぬ気で足掻きな」

「二対一は好ましくありませんが………」

一体何が『じゃあ』なのか。少し考えてみるが、どうでもいいのですぐに止めた。今は、彼女達を殺すことしか考えられない。

爪の先まで真っ黒に染まり、同時に僕は妖力を解放した。

「なんて厄厄しい妖気だ……。気をつけな志妖、気を張ってないとすぐに持ってかれるよ」

「承知しました」

規格外の妖気が大地を揺るがす。

次の瞬間、地面を蹴ったのは僕だった。一瞬で桃鬼の懐に入りこみ、彼女の心臓を一突き。

した、はずだったのだが。

「アタシの能力、忘れたのかい？ 速い『だけ』の攻撃じゃあ、アタシには通用しないよ」

耳元で囁かれた直後、僕の身体は強い衝撃によって吹き飛ばされていた。山の斜面を削って立ち止まり、『敵』を睨みつける。

『敵』は、右の拳を握って、開いて。その表情は好戦的なものになり、歯を剥き出しにして笑っていた。

「簡単に終わってもらっちゃあつまらないよ？ さあ、存分に殺し合おうじゃないか!!」

76：「桃の鬼は何を思っ」(後書き)

とにかく書き進めることにした。

77：「断ち切れない鎖」(前書き)

今回少しとあるキャラがぶっ飛びます。

→注意。

77：「断ち切れない鎖」

吹き飛ばされたかのように空中へ跳躍する。首を軽く回し、両手の爪に妖力を籠めた僕は、眼下にいる鬼を眺めた。

頭から流れる血を軽く拭い、考える。

今現在、僕は『普段の僕』からすれば間違っただことをしているのだろう。それはわかっている。だが、止められない。今の僕は、何も間違っただことはしていないのだから。本当に、そう思っているのだから。

冷めた頭は、これからどうやって彼女達を殺すのかを考えている。さながら冷徹な殺人鬼。こんな感覚、初めてだ。

「シッ！」

下から放られた桃鬼の髪針を爪で弾く。弾き損ねた一本の針が顔面に迫り、しかしそれを噛んで受け止める。

同時にひとつ弾を造りだし、それを踏み台にして地面に急降下しようとして、

「ッ！！！」

志妖の咆哮が僕の真上を通り過ぎる。危なかった、あと一瞬反応が遅れていたら粉も残らないところだった。

跳ぶ方向をずらした為に、鬼二人がいる場所とは全く違う見当違いの方向へ落下していく。三秒とかわからずに山の斜面に着地した僕を出迎えたのは、桃鬼の拳だった。

「ハアッ！！！」

「ッ」

振り落とされる鉄槌を皮一枚でかわし、足を払って桃鬼の身体に五発程入れる。起き上がり様の蹴りを鼻先で避けて真上に跳ぶと、置き土産の弾幕が桃鬼に直撃していた。

「……ま、この程度で終わるぐらいなら苦労はしない」

「愚問だねえ。アタシを殺したいなら、あの百倍は持つてきな」

かなりの量をぶちあてたはずなのに、と溜息。着地した僕を、遅れてきた志妖と、立ち上がった桃鬼が挟み撃ちの状況に持ち込んだ。

「ミコトさん……」

横から聞こえてくる志妖の声。残念だが、今の僕には感じるどころが何も無い。

隙あらば、といった感じの志妖を視線で牽制しながら、僕は更に爪を『伸ばした』。その長さ、一メートル弱といったところ。今まで一度もやったことが無いというのに、やればできるものかと軽く笑う。

『命を分け与える程度の能力』。

命を爪に『分け与えた』。こんなことも出来るんだなあ、と他人事のように思いながら、伸ばした爪に妖力を籠めていく。簡単にへし折られてはたまらない。真っ黒な爪に力が満ちていくのを見た志妖は、眉間にしわを寄せていた。

「ふうん、面白いことをする。だが、簡単に折れたりしても知らないよ……」

視線が志妖にいったのを見てか、桃鬼が両手を握りながら突撃を仕掛けてきた。その拳は、真つすぐに僕の伸びた爪へと向かい。

「なっ……」

ガギーン！ と、およそ『拳』と『爪』が放つものでは無い音が辺りに響いていた。

へし折る自信があったのか、桃鬼は驚きの表情でその動きを止めていた。珍しい姿だ。

そんなことを思いながら、僕は多少動かしづらくなった右手で彼女の腕を掴んだ。

「揺らいだな？」

「！ しまっ……」

ハツとする桃鬼。しかし遅い、一度揺らいだその感情の隙間、僕を何度も相手にしてきた桃鬼ならば、いかに致命的なものがわかつているだろうに。

「チツ、志妖！」

「ハイ！」

と、そこで僕はひとつ考えが抜けていたことを知った。一対一ならいざしれず、今は二対一。

しまった、と思った時はすでに遅い。振り返った僕の目には、足を高く振り上げた志妖の姿が映り、

「ハッ！」

その足が地面にたたき付けられた瞬間、文字通り地面が揺れた。

「震脚……！」

思わず呟く。志妖によって引き起こされた地面の揺れ、地震によってバランスを崩した僕は、解放された桃鬼の一撃で真横に吹き飛んでいた。

盛大に木に身体をぶつけ、その木も見事に根本からめきめきと倒れる。身体の中から這い出してきた血を、吐き出すことはせずに無理矢理に飲み込んだ。鉄の匂いが口内に広がり、なんともいえない不快感に眉をしかめる。

「……土砂崩れでも起こしたらどうするんだ、全く」

「その時はその時だねえ」

「……………」

無言で桃鬼の隣に並ぶ志妖。その表情は決して明るいものではない。

それを見た桃鬼は、立ち上がる僕と志妖を交互に眺め、それから志妖に耳打ちをし始める。

今の内に襲い掛かろうとも思ったが、足が前に出なかった。さすがにあの桃鬼の一撃、ダメージが大きい。

「……………え、でも、桃鬼様だけで……………！？」

「さつきは助けられたけど、今のアンタじゃあいてもいなくても変わらないよ。ほら、早く行った！」

「……………くっ！」

ようやく足が前に一歩出た所で、志妖が走り出した。僕に向かって、ではなく、山を下る方向にだ。



「なんのつもり？」

「なに、たいしたことじゃあないよ」

髪を振り乱しながら言う桃鬼。その表情には笑みは無く、あるのはこちらを貫く鋭い視線。

「今からが本番……って？」

「アタシは最初から本気だよ？　ただ、戦い方を変えるだけ」

言いながら桃鬼は、今の今までその身体から放っていた妖気を消した……いや、違う。

「……圧縮、した？」

消えた訳じゃない、桃鬼の身体の周りには、今も確かに妖気が漂っている。ただ、その密度が段違いに増していた。

「今までは、アンタになるべく近付かないように戦ってた。迂闊に近付いて『それ』を流し込まれたら厄介だからねえ」

確かに、と軽く顎を引く。桃鬼に接近されたのは先程が初めてのこと。それまでは髪針を中心とした遠距離のやりとりだった。こちらから接近することはあれ、すぐに離れていく、言うなれば、『らしくない』戦法。

「けど止めた。疲れるし、なにより面倒臭い。アタシはアタシの戦い方でアンタを負かす。昔から、そうだったしねえ」

「まあ、ね」

桃鬼がこちらに向かって一歩踏み出す。瞬間、辺り一面に見えな

い重圧が上から降ってきた。

この圧倒的なプレッシャー。紛れも無く最強の鬼、魅王桃鬼が僕に歩み寄る。

「細かいことは無しだ。互いが本気な以上、そこに野暮な理由はいらない。アタシはアタシのすべてを出そう。アンタも、その腹の底に溜まつてる真っ黒なモノ、全力でぶつけてきな」

「……桃鬼らしい」

堪えきれず、僕は素直に笑った。つられて笑う桃鬼。

互いに一瞬で懐に入れる位置まできて、彼女は立ち止まった。まるで僕の言葉を待っているかのように、止まったまま動かない。

僕はそれを見て、伸ばした爪を自分で根本からへし折った。深爪の一步手前、命を分けていつもの長さに戻す。自分で伸ばしておいてなんだが、『全力』で動くには邪魔なだけだから。

「何千何万という負の感情……。解放すれば、どうなるかわからない。それでも、いいの？」

「質問の意味がわからないねえ。アタシが嫌だと言えばやめるのかい？ だったら残念、アタシはその逆をお望みだからね」

「……そっか」

僕はそう呟いて、地面に膝をついた。目を閉じて、身体の奥に泥のように溜まつているモノに触れる。

ドクン、と身体が跳ねて、反動で地面に両手をついた。

「ッ……ハア、うつ……」

強烈な鼓動が身体を揺らす。爪が地面をえぐり出し、漏れだす息が音を立てはじめた。

脳裏に蘇る地獄絵図。あの『人間』達の感情が、僕を真っ黒に塗り潰していく。

そんな中、僕は桃鬼に顔を向けて、自然と呟いていた。

なんと言ったのか、自分でもわからない。

しかも、もうそんなことを考える時間も、余裕も、意思も、感情も、真っ黒に

「あ、ヴア、アアア、アアアア、アアア、アアア、ア！！！！！」

アタシの目の前で、ミコトは今までに無い声で叫んでいた。

まさに暴走と言つに相応しいその発狂は、アタシですらも腰が引ける。許されるのなら逃げ出したいくらいに。

だけど、そんなことはしない。許されたって逃げたりしない。

だって、アイツは言ったんだ。

真っ黒に染まったその瞳で、震えた、そよ風にすら掻き消されそ

うな小さな声で。

怖いよ、と。

「……………」

何千年も前に終わりを告げたあの戦いが、今になってミコトを苦しめている。あの忌まわしき戦いの記憶に、いつまでアタシらは縛られていなきやならないのか。

「もう、うんざりだよ……………」

平和だった、あの日常。

仲間を失い、なによりも大切な彼を 彼までも失いかけたあの戦いは、アタシの心だって縛り付けている。志妖だって、同じはずだ。

流れそうになった涙を堪え、アタシは思い切り叫んだ。

「いい加減ッ！ アタシらを解放しておくれよッ！！」

次の瞬間、妖怪の山の一部が轟音と共に崩れ落ちた。

77：「断ち切れない鎖」(後書き)

ぶっ飛びました。

手が付けられないくらいだ。

まあ彼女達がなんとかしてくれる……はず。

78：「黒い瞳は揺らがない」

妖怪の山から轟音が響き、志妖は思わず足を止め、来た道を振り返った。

「……………！」

「急いの方が良さそうですね。いきますよ、椀！」  
「ハイッ！」

「くっ……………」

崩れ落ちた山肌。それを引き起こした片方である桃鬼は、その場から背を向けて逃げ出していた。あの場所で戦うには分が悪いと踏んだ為だ。元より速さはあちらが遙か上。足場が悪い場所で戦えば、なぶり殺しになるのは目に見えている。

「そろそろアイツらは山を下りた頃かねえ」

そう言いながら振り返り、ミコトがまだ来ていないことを確認して息を吐く。が、すぐに彼女は木の影にその身を隠した。

今は目の前に見えずとも、一秒後には懐にいるかもしれない。

緊張と恐怖、それに若干の楽しさを感じながら、桃鬼は額の角を触る。

「隠れるなんざガラじゃあないが……。今は少しでも時間を稼ぎたいところだ」

言っで、彼女は震えている身体を自分で抱きしめた。果たしてその震えは、なにかから来ているものなのか。

次の瞬間、彼女は思い切りしゃがみ込んでいた。こめかみを貫いていたであろう真っ黒な爪が、なびいた髪を数本散らす。彼女が反射的に放った反撃は、灰色では無く、その向こうにあった木を粉碎した。

「ガアッ!!」

「ハハハハッ! さあ、存分に殺り合おうじゃないかっ!!」

震える身体をごまかすように、桃鬼は思い切り両手を伸ばした。

「……事情はわかったわ」

志妖と射命丸文、そして犬走椋を前に、声の主はマイペースな調子でそう言った。肩で息をしている三匹の妖怪、しかも鬼と天狗と



いう力のある妖怪を前にしても、彼女は自分のペースを崩さない。膝に置いていた湯呑みを、妖怪達が現れた時と同じようにゆっくりと口へと運んでいく。

その様子を、待ちきれないといった様子で、しかし眺めることしかできない妖怪達。

湯呑みから口を離し、それを縁側、自分の隣に置く。

「で、私にどうして欲しいのかしら？」

今更それを聞くか、と志妖は唇を噛んだ。それもそうだろう、志妖が先程まで説明していた内容は、聞けば何を求めているか簡単にわかるものだ。

握り締められた拳をみた椀は、思わず縁側に腰掛けている人間に詰め寄った。

「貴様、わかっているくせに何を！」

「椀！」

「っ!？」

肩を掴まれ、同時に発せられた声にビクリと身体を震わせる椀。肩を掴んだ妖怪、射命丸文はぐいと椀を下がらせる。

文の怒声にも、人間の少女は全く反応を示さなかった。それどころか、目の前にいる妖怪を無視して再度お茶を啜っている。

かと思えば、今度は盛大に溜息をついて、

「いるのはわかってるのよ。出てきなさい、紫」

「あら、ばれてた？」

突如現れた空間の裂け目、そこから身体を半分出した女性に顔を向けていた。

いきなりの来訪者に怒りを削がれ、代わりに驚きの表情を見せている妖怪達を置いて彼女達は会話を続ける。

「いつからいたの？」

「わかつてるくせに。行ってあげたらいいじゃない」

「……………」

「なあに？ そんなにじっくり見つめちゃって」

「……………何か企んでるのかと思って」

「人聞きが悪いわねえ」

「アンタは妖怪でしょうに…………。わかったわ、あまりはぐらかすのも何だしね」

スツ、と立ち上がる少女。そのまますたすたと歩いてひとつの部屋に入ったかと思えば、またすぐにすたすたと戻ってきた。その手にはお被い棒が握られている。

「行くわよ。妖怪の山だったわね」

「あ……………え？」

「なによ。行かないの？」

怪訝そうに尋ねてくる少女に、鬼と天狗は慌てて首を横に振った。何がなんだかわからないが、来てくれるというのだからいいだろう。そう彼女達は気持ち切り替える。

フワリと空に浮かんだ少女は、すぐ隣にいるスキマ妖怪を見て溜息をついた。

「本当は嫌な予感があるから止めようと思ってたんだけどね……………」

「あら、私は何も強制してないわよ？」

「もついいわ。ちょうど試したいこともあるし、今回はアンタの思惑に乗っかってあげる。そのかわり、アンタも来るのよ」

「はいはい」

「ほらアンタ達も！ 急いでるんなら早く！ 置いてくわよ！」

先程までとは打って変わってやる気になった少女に多少困惑しながらも、一同は飛んだ。

「っ、うあぁっ！」

腹部に強烈な一撃を受けた桃鬼は、その口から赤色を零しながらもミコトを捕まえる。そしてそのまま思い切り振り回して投げ飛ばした。

バキバキと音を鳴らしながら倒れていく木々。それを見ながら、

桃鬼は肩で息をする。

「参ったねえ……。もう足が満足に動かない」

大概、戦闘の最中常に笑みを浮かべている彼女だが、今はさすがに苦悶の表情を浮かべていた。

身体のいたるところに付けられた切り傷。

ミコトの驚異的な速度から生み出される打撃による痣。

「チツ……………」

震える足に悪態をつき、大きく息を吐いて顔を上げる。

折れた木々の向こう側に、真っ黒な影がうごめくのが見えている。

(……………行くしか、ないか)

歯を食いしばり、言うことを聞かない足を前に出そうとする。が、

「あつっ」

先にあつた木の根に躓き、桃鬼はドサリと倒れてしまっていた。

しまった、と思ったところで後の祭。痛み、疲れきった桃鬼の身体は衝撃を和らげることもできず、俯せに倒れてしまっていた。身体に走る痛みが、彼女の顔を歪ませる。

だが、今に限っては痛みなど大したことではなかった。

問題は、倒れた時に出た、普段ならさして気にもならないような物音の方だ。

それは、狩る側にとっては絶好の目印。

それは、狩られる側にとってはあまりに致命的なミス。

桃鬼は、倒れてから数秒でその目を閉じて抵抗を放棄していた。

相手との距離はさほど近くはない。並の敵ならば、起き上がって迎撃するのは容易だったろう。しかし、今回ばかりは相手が相手。あの程度の距離、アイツなら瞬きする間に詰めてくる、と桃鬼は諦めていたのだ。

実際、その考えは正しかった。

ミコトは、桃鬼が目をつぶったその瞬間に、彼女のそばに立っていたのだから。

「うっ……！」

ぐい、と桃鬼の身体が持ち上がり、やがてその足が地面から離れていく。

首を締め上げられる苦しみから逃れようと、桃鬼は最早ボロボロになった手でミコトの腕を掴む。が、それも無駄であるうことを、彼女は知っていた。

そんな彼女の姿を見つめる、どこまでも真つ黒な瞳。

なんの感情も読み取れないその瞳で桃鬼を見つめながら、ギリギリと首を締め上げていく。

「く、くく……アハハッ……」

しかし、桃鬼の口から漏れたのは、苦しげな呼吸ではなく、笑いだった。

首を絞められ、ただでさえ呼吸がし辛いというのに。

「可笑的い、ねえ。ああ……本当に、可笑的い」

口の端を吊り上げ、苦痛で歪んだ笑顔をミコトに向ける。

それが気に入らなかったのか、ミコトはさらに首を絞める力を強めた。

ブチリ、と食い込んだ爪が首の皮膚を突き破る。赤色がミコトの手から、腕に、ゆっくりと、線を歩かせて行く。

それでもなお笑うのを止めない桃鬼の口から、赤く濁った唾液が零れ落ちた。

「なんで、かねえ？ アンタに、今から殺されるって、いうのにさあ……。それが、なんだか笑えて、しょうがない」

途切れ途切れの言葉は、枯れて聞き取るのが難しくなっている。もしかしたら、いやもしかしなくても、ミコトには届いていないのかもしれない。けれど、と桃鬼は口を動かし続ける。

「でもねえ……。？ アタシ、アンタになら、いいよ」

ミコトの腕を掴んでいた桃鬼の手には、すでに力は残っていないかった。気休め程度に指が引っ掛かっているだけ。

その手が、ミコトの腕を伝うように、静かに下りていく。

ここで、桃鬼の身体が一度ビクリと震えた。苦しみによるものではない。

「ゴメンよ……。？」

ぼたりと、ミコトの手首の辺りに透明な液体が滴った。それは一度ではなく、何度も、何度も、際限なく滴ってくる。

桃鬼は、泣いていた。

先程までの無理矢理な笑みが解け、歯を食いしばり。しかし泣き叫ぶわけではなく、ただ、泣いていた。

身体を震わせながら、桃鬼はミコトの顔に手を当てた。左手で愛しげに髪を触り、右手で優しく頬を撫でる。その際に、おそらくは首から伝って桃鬼の手にも付いていた血が、薄く、しかし赤く、ミ

コトの頬に伸びた。

「アタシじゃあ、アンタを救えなかった……」

そこで、桃鬼の両手から完全に力が抜けた。  
ずるずるとミコトの肩からずり落ちていく桃鬼の手。

「遅かった……?」

声が聞こえ、ミコトはそこで首を絞める手を離した。桃鬼の身体は、まるで落とされた人形のように、呆気なく地面に落ちた。

「そんな……そんなっ!」

黒い瞳は全く揺らがないまま、ミコトは声のする方向に首を向ける。

そこには、かつての戦争を生き残った三匹の妖怪の内の、一匹が立っていた。

78・・・「黒い瞳は揺らがない」(後書き)

本当は一気に一話で終わらせてしまおうかとも思ったけど、データ飛び+「じゃあどうすっか」のコンボで長くなってしまった。



79：「オワリ」

「桃鬼様、桃鬼様アツ！」

「なっ、椀ッ！」

「ハイッ！」

崩れ落ちた桃鬼の姿を目の当たりにして、志妖は一瞬にしてパニックに陥った。

桃鬼に向かって一目散に駆け寄ろうとする志妖を、文と椀は全力で押し止める。

「落ち着いて下さい、志妖さん！」

「イヤッ、止めないで！ 桃鬼様がつ！」

「心配なのはわかります！ ですが、今飛び込んだところで……！」

飛び込んだら、どうなるのだろう。

二人がかりで必死に志妖を抑える文は、全身に力を籠めながらそう思った。

今のミコトは、何をするのか本当にわからない。ここに来て、ほんの数秒ミコトの姿を見ただけなのに、文は既に戦意を喪失していた。桃鬼の首を締め上げていたミコトの姿は、形容できない不気味さがあつたのだ。

「初めて見るわね。最近ここにきたのかしら」

「いいえ。霊夢は知らなくて当然かもね。でも、意外とあなたに近いところに彼はいたのよ？」

「どづいづこと？」

紫に顔を向けないまま、ミコトを真つすぐに見据えて霊夢は聞い

た。が、紫は返事をしない。扇子で口元を隠したまま、こちらも真つすぐにミコトを見据えている。

「紫？」

「……後で話すわ。それより、来るわよ」

ぱちん、と扇子が閉じる音と同時、その場にいたミコト以外の全員は空へ飛び立った。霊夢は木に囲まれた場所で戦うのを嫌い、紫、文、そして椛はミコトの戦闘スタイルを考えた上での判断。志妖は文と椛に抱えられたまま空へと移動する。

「霊夢。ミコトの攻撃は速いわよ」

「ミコト？ ああ、あの化け猫の名前ね」

あまり興味なさそうに呟く霊夢の前に、黒い妖力弾に乗ったミコトが現れる。

その姿を見て目を見開く霊夢だったが、すぐにいつもの表情に戻って札を構えた。その後ろで紫が厳しい面持ちで腕を組んでいる。

紫がここまで警戒するなんて、と視線を動かさないまま思つ霊夢。

「あっちがどれだけ速いか知らないけど……」

霊夢がそう言った瞬間、ミコトの姿がぶれた。再度、霊夢の目が見開かれる。反射的に札を放とうとするも、寸前で腕を止めた。すでに相手は姿を消している。

「霊夢、上よ！」

その声が聞こえた瞬間、霊夢は予備動作無しで後ろに移動した。霊夢の前髪がパラパラと舞い散る。

「くっ」

速い。ただの妖獣にしては速過ぎる。思わず声を漏らした霊夢に、秒も置かずにミコトの爪が襲い掛かる。が、その爪は霊夢には届かなかった。

「空中戦の速さなら、負けませんよ！」

翼をはためかせながら叫ぶ文は、ミコトの腕を脇に挟む形で止めていた。そのまま猛スピードで急上昇していく。

ある程度まで空を駆け上がると、文は不意にミコトの腕を離れた。当然、支えを無くしたミコトの身体は自然落下を始める。空を飛ぶ術を持たないミコトは、新しく弾を造らなければどうしようもできない。

その、ミコトが持つ数少ない弱点を、文は狙った。

「幻想郷の空は、私の独壇場です！」

再度叫び、文は無防備なミコトの身体に猛スピードで体当たりを仕掛ける。一撃では終わらない。急旋回と急加速を繰り返し、右から左からミコトの身体を傷つけていく。

しかし、それも無限に続くわけではない。それを知っている文は自分の体力を考え、次の一撃もしっかりと考えている。そのために必要な相手が。

「椀、今です！」

「ハイッ！ ハアアアア！」

白狼天狗、犬走椀だ。

文は叫ぶと同時に、角度を変えて真上からミコトに体当たりを仕掛けた。落下速度を速めたミコトを視界に収め、椀は両手で剣を握りしめて急上昇。一直線にミコト目掛けて飛び上がる。

タイミングは申し分ない。角度も完璧。これで決まってくれば。椀は、そう思いながら震える手で剣を握り締めていた。

一撃ならミコトさんは死なないだろう。だから大丈夫だ。狙いさえ外さなければ、動きさえ止められれば。

そんな思いで、椀は剣を握り続ける。

と、そこで椀は不意に違和感を感じた。

何故、こんなに時間が流れるのが遅いのだろうか。あのタイミングなら、とつくに剣が届いていてもおかしくないのに、と

(これじゃあ、まるで)

次の瞬間、突き出した剣が空を切った。

椀が見たのは、真っ青な視界いっぱい広がる空と。

(死ぬ寸前の、あの感覚みたいじゃ)

真っ黒な、一筋の線。

次の瞬間、椀の身体には、腕一本が通る程の大きな穴が空いていた。

「椀いつ!」

叫んだのは、文。しかしその叫びも虚しく、椀の身体は力無く落下していく。

「キ、サマアツ!」

疲労も忘れ、文は返り血を拭っているミコトに直滑降で突撃した。互いの距離は二十メートル弱。風を味方につけた文の身体は、あっという間にミコトに接近していき

「……………あ」

文の身体に、ミコトの腕が突き抜けた。

グチツ、と嫌な音を立てて腕が抜け、風穴から噴き出す血が文の服を赤く濡らす。

「あ……………あ」

かろうじて空に浮かんでいた文だったが、ゴブリと血を吐くと力尽きたように山へと落ちていく。それを見たミコトは、なおも振り上げていた右腕をゆっくりと降ろした。足元にはすでに新しい弾が存在している。

ミコトは、爪についた真っ赤な血をぺろりと舐めると、小さな笑みを浮かべながら視線を落とした。その先には当然、

「……………参ったわね」

「……………」

溜め息をつく霊夢と、依然として厳しい表情の紫の姿があった。戦いの場を空に移してまだ一分も経っていない。だというのに、早くも二名が戦闘離脱。まるで予想外の状況に、霊夢は再度溜め息をつく。

「いろいろと予想外だわ。まさかあれ程だなんて」

「これからどうするつもり？　ひとつ間違えれば、私達もああなる

わよ」

特に表情を崩さないまま、紫は椀と文が落ちた先を眺めながら言う。

それに対し、霊夢は札を一まとめにして左手に持ち、空いた右手で懐からあるものを取り出した。

「聞いた話だと、あの妖怪は『負の感情』とやらで暴走してる。なら、それを取り除けば解決ってわけでしょ？」

「まあ、ね」

「なら……………」

「？」

霊夢は、ちらりとミコトを流し見ると紫に耳打ちする。その間も、紫はミコトから視線を外さない。

「……………わかったわ。やるだけやってみましょう」

「失敗したら他の方法考えるわよ。あと何秒持つ？」

「もう破れるわ」

「そ」

次の瞬間、今の今までミコトの動きを縛っていた紫の結界が破れた。無表情だった紫の顔が、一転苦しげなものに変わる。

自由を得たミコトは、一目散に霊夢に突撃を仕掛ける。が、霊夢は別に身構えるわけでもなく、先程取り出したもの一枚のカードをミコトに向けて掲げる。

「試させてもらっわ。夢符『二重結界』！」

「ッ！？」

霊夢が高々とそのカードの名前を宣言した瞬間、ミコトの爪は突如現れた結界に阻まれて霊夢には届かなかった。

ミコトの爪を目と鼻の先に置きながら、霊夢は少しだけ眉を潜める。

「結界のバランスが悪い……これじゃ十秒も持たないわ。頼んだわよ、紫！」

霊夢が紫の名を呼ぶ。同時にいつからから霊夢の隣から姿を消していた紫が、ミコトの背後に踊り出た。その手には、霊夢の札が張り付いた真っ白なカードが。

「いい加減に、落ち着きなさいなっ！」

右手のそれを、声と共にミコトの背中に張り付ける。瞬間、ミコトの身体がビクリと跳ねた。

同時に霊夢の結界が消滅、霊夢は突き出されたままの爪を通り過ぎ、一枚の札を手にミコトの横に移動する。

「この札はね、妖力を吸い取って外に逃がす効果があるの。並の妖怪なら消滅、大妖怪……そうね、アンタとか紫みたいな妖怪でも、剥がさずにそのままにしておいたらしばらくは動けなくなるぐらいの効果はある」

でも、と霊夢は続ける。

「その『負の感情』とやらに真っ黒に染められたアンタの妖力をそのまま外に逃がしたら、何かしら悪影響があってもおかしくない。だから、アンタのその妖力は封じさせてもらっわ。……この『スぺルカード』にね」

淡々と自分が行った内容を告げていく霊夢。視線は自らが持つ札に向けられていて、ミコトが聞いていなくても関係無いという素振りである。

ミコトの身体を包んでいた真っ黒な妖力が、次々と霊夢の札に、そしてスperlカードへと吸い込まれていく。真っ白な無地のスperlカードが半分程黒く染まったのを見て、霊夢はミコトへと視線を向けた。

「このままでも大丈夫だとは思っけれど……。念には念を。受け取りなさい！」

そして、駄目押しとばかりに手の札がミコトの背の札に重ね張りされた。

掌打とも取れるその一撃は、辛うじてミコトの身体を支えていた弾を粉碎した。当然、支えを無くしたミコトの身体は山へと真っ逆さまに落ちていく。落ちる、といっても霊夢達がいた場所は地面から十メートル程度の所。さほど時間はかからずにミコトは地面に到達、辛うじて着地したミコトは、しかし自らの妖力を吸い取られる苦しみに悶え、顔を地面に擦りつけていた。

獣のうめき声を上げながら、ざりざりと音を立てて地面にはいつくばる姿を、地面に降り立った霊夢と紫はただ眺めていた。しばらくそのまま時間が過ぎていく。

「……………?」

今だ苦しみ続けるミコトの姿を見ながら、霊夢は疑問を覚えた。ミコトの妖力を封印するスperlカード。あれは試作品の中でも桁外れに容量が大きい特別なもの。志妖や文の話の聞き、ならばと考えて霊夢が持ってきたものだ。



先程見た時にはすでにその半分が埋まっていた。更には吸収を速めるために札を重ね張りしている。故に、もう一杯になってもおかしくないはず。

「……冗談でしょ」

思わず呟いたのは、霊夢。視線の先には、少なくともなったものの、未だその真つ黒な妖力を身に纏わせたミコトの姿。

ミコトの背中から、真つ黒に染まったスペルカードと、ポロポロに焼け落ちた札がパサリと地に落ちる。

ゆらりと立ち上がるミコトに、思わず構えを取る霊夢。全力で思考を展開してこの窮地を突破する術を考えるも、

「ウゝアアアアゝアアア！！！！」

如何せん、時間が足りな過ぎた。

咆哮を轟かせて地面を蹴るミコトは、風を置き去りにして二人に襲い掛かる。その漆黒の爪が狙ったのは、紫。

自分が狙われたことを理解した瞬間、紫は両腕で顔を庇った。それが無意味なことは彼女も知っているが、ミコトの速さの前にはそれしか出来なかった。

「ッ……………」

しかし、咆哮の次に訪れたのは、沈黙だった。

紫に向けられた爪は中途半端な位置で止められていて、ミコトの身体は、まるで『誰か』に止められているかのように静止している。

「ハアッ！！！」

「がッ!?!」

次の瞬間、ミコトの身体は思い切り地面にぶつけられていた。

「！　あなた……」

驚いた紫が、ミコトの身体を地面に叩き伏せた妖怪に目を奪われる。

ミコトの頭を地面に押し付けている妖怪　志妖は、なんとも言えない表情で、しかし力は緩めずに地面を睨みつける。

まるで、早く次の手を打ってくれと言わんばかりに。

その姿を見て、改めてどうするかを考え始める霊夢。

掠れ果てた悲しい厄は、この手の上で遊ばせて

「……何？」

どこからか聴こえる言葉。同時に、ミコトの周りに漂っていた妖気が揺らめきはじめる。

忘れられた哀しい厄は、この身の周りで踊らせて

「」の声は……！」

志妖が顔を上げる。

ミコトの身体から黒色が抜けていき、黒い霧となって声の主の元へと寄っていく。

全ての厄は夜明けと共に咲かせましょう。残すのは綺麗な花  
びらだけで充分なのだから

声の主は、クルクルと回りながら歌うように呟いていた。その身体  
の周りに、同じように黒い霧を纏わせながら。

一同が言葉を失い、その姿に視線を集める。すると、その人物はゆっくりと回転を止めて一同に向き直った。そして、とある妖獣を指差し、一言。

「彼の厄は私が受け持たせてもらったわ。ついでに、あなたたちの厄もね」

もう大丈夫。そう言ってまたクルクルと回りはじめた彼女は、黒い霧を連れて森の奥へと消えていってしまった。

またしても言葉を失う一同。  
が、その沈黙はすぐに破られる。

「う、うう……」

「！ ミコトさん！」

一番最初に気が付いたのは、彼の上に乗っかっていた志妖。すぐに下りると、一転真っ白になった彼を抱き上げて声をかける。

「紫」

「わかってるわ」

とりあえずは落ち着いた、とばかりに溜め息をついた霊夢の隣でスキマに両手を突っ込む紫。引きずり出すように引っ張り出したのは、重症を負った天狗二名と、鬼、一名。

「ミコトさん！」

「……………志妖。皆、は」

「そこに、そこに、います……………」

「……………そっか」

血まみれの文と椀、そして、ただ眠っているようにも見える桃鬼の姿を見て、ミコトは身体を起こした。

「ゴメンね……けど、大丈夫……三人共、死なせは……」  
「……………」

ぼつぼつと咳きながら、ミコトは四つん這いで桃鬼らの元へと向かう。それを止めるものはいない。

「妖力が、足りない……」

そう言って、ミコトは真っ白な着物の懐から灰色の小箱を取り出した。その中から『二粒』、丸薬を取り出した。

「一瞬で、いい……。僕の、『命』を……」

震える腕で、丸薬を口に入れるミコト。

次の瞬間元の、元以上の妖力が彼の身体に溢れ出した。

それを見た紫は、目を見開いて彼に駆け寄る。しかしそれよりも早く、ミコトは叫んでいた。

「うああああああ！……！！！」

妖力が生命力に変換され、その神々しいまでの光が文と椀、そして桃鬼を包み込んでいく。

実際にその光が見えたのはほんの数秒。しかし、その行為は紫にはとてつもなく長い間行われていたかのように思えて。

「……」  
「……」  
「……」

紫がその名を叫ぶのと同様、ミコトの身体は力無く崩れ落ちた。

79：「オワリ」（後書き）

クルクル回る方の語りは完全オリジナルだったり。

80：「ただいま」

「ん……………」

身体が、重たい。

寝返りを打とうとしてそう感じ、僕はそれを諦めてゆっくりと目を開いた。

少しずつ開けていく視界。まず最初に目に入ったのは、ゴツゴツとした岩の壁。いや、天井というべきか。見覚えがある濃い灰色に、僕は軽く息を吐く。と、その時、視界の端から二ヨキツと二本の角が生えてきた。右から左から、こちらも見覚えがある。

少し驚き、パチパチと瞬きを繰り返す。ぼやけていた視界がクリアになり、僕は微妙なけだるさを感じながら上半身を起こした。

「おはようさん。白ミコト」

「……………」

僕の右側、桃鬼がくれた口調で笑いかけてくる。

「桃鬼……………」

彼女の名を呼び、僕は震える手を彼女に伸ばした。

おそろおそろ触れた首筋。そこには傷一つ、ない。

強く締め上げたせいについていた圧迫痕も、爪が食い込み、皮が破れた傷痕すらも、ない。

くすぐったそうに僕の手を顎を擦り寄せる桃鬼は、僕が彼女にしているのと同じように、僕の首筋に手を当ててきた。

「アタシは生きてるよ」



「……………！」

その言葉を聞いた瞬間、僕の心臓が跳ね上がった。  
蘇る、桃鬼の首を締め上げているあの感触。  
震えはじめた手を引き戻し、頭を抱える。

「……………僕は、また……………取り返しのつかないことを……………」

次々と蘇る記憶。寝ぼけることすら許されず、僕は自分がしてしまったことをひとつひとつ、ゆっくりと。半ば強制的に確認していた。

……………気が付けば、身体の震えが、止まらなくなっている。

そうだ……………僕はこの手で、今頭を抱えているこの手で、桃鬼を、文を、椀を、皆が命懸けで止めてくれていなかったら、もっともつと沢山の人を……………！」

「ミコト……………」

小さく聴こえた桃鬼の声。

今は彼女の声を聞くだけでも、胸に熱いものが込み上げてくる。  
熱すぎて、痛すぎて、本当に、胸が引き裂かれそう。

「桃鬼……………。僕は……………僕は……………」

抱えた頭に爪を立て、ぐしゃっと髪を握り締める。

苦しくてどうにかなくなってしまいたい。今にもこの伸びた爪で、ぐしゃぐしゃに頭を掻きむしってしまいたい。

けれど、そうしたところで何が解決するわけでもない。そう思っ  
て、頭から胸に手を移動させた。

「……ミコトさん」

固く目をつぶっていた僕に、志妖が声をかけてきた。僕が反応するよりも先に、志妖は続ける。

「ミコトさんが後悔するのはわかります。自分の意思でなかったとはいえ、桃鬼様や、天狗の皆さんをその手にかけてしまったんですから。いくら皆様が生きていても、ミコトさんの罪は消えませんが……」

淡々と語る志妖。当たっているだけに、返事をしようとも思わない。

そう。いくら皆が生きていたとしても、僕が皆を殺しかけた事実が消えやしない。逆に言えば、僕が死んだとしても、その罪は消えないのだから。

「それに……私自身、何も思っていないわけじゃありません。当たり前でしょう？ 目の前で『大切な方』が殺されかけて、何も思わないわけがない。……一瞬、貴方に殺意すら湧いたのを覚えている」

瞬間、身体に感じる圧迫感。ぞわりと背中を走る嫌悪感。吐息を漏らす口の端を、いきなり現れた汗が通り過ぎる。

身体が強張る。無理に口を閉じようとして、唇を噛み切ってしまった。

……認めよう。今、僕は志妖に怯えている。

固く閉じていた目はもう開いている。

志妖から発せられる妖気に、僕の身体は危険だと告げて今にも逃げ出せる体勢を作りだしていた。

だが、僕は顔を下げたまま動くことをしなかった。暴走の反動か、

はたまた今まで眠っていたせいか、身体が思うように動かないこともある。けれど、たとえ身体が万全だったとしても、僕はこうしていただろう。

……今逃げ出したりしたら、僕は完全に自分を見失ってしまうだろうから。

「……………」

と、そこで不意に圧迫感が消えていた。力無く顔を上げれば、そこには困ったように笑う志妖の姿。

「殺意が湧いたのは一瞬だけで、すぐに消えて失くなりました。当然です。私にとっては、ミコトさんも『大切な方』なんですから」

言いながら、僕の手を握る志妖。先程強く握り締めていたせいで血が滲んでいたが、彼女は全く気にせず、ただ優しく両手で包み込む。

「私は、桃鬼様が生きることと同じくらい貴方が……ミコトさんが生きてるのが嬉しい。だから、そんなに自分を責めないで下さい」

「でも……………」

手を握られたまま、僕はまたしても俯いてしまった。情けないとは思うが、今はどうしてもこうなってしまう。

「僕は……自分が許せない。皆、必死になって僕を止めてくれた。助けようとしてくれた。なのに、僕は、そんな君達を殺そうとしてたんだ。本気で、全力で、殺したかったんだ」

「ミコト、それは」

「わかってる……わかってるけどさ……。僕は、何が原因であれ、君達を『殺したい』なんて思ってしまった自分が、それを行動に移してしまった自分が……許せないんだ……」

僕が暴走してしまった原因　何百何千という人間の負の感情。それを抱え込んだのも自分なら、抱え込み切れなかったのも自分。全ては、僕が弱いせい。

負の感情に飲み込まれるような弱い自分も、飲み込まれて暴走していた自分も、僕は等しく憎い。

許せない。許すことなんて、出来るはずもない。

「憎い……。弱い自分が、許せないよ……。嫌だ、迷惑かけて、そのくせただ生き残るなん……て……。……。？」

「ミコト？」

「……あ、れ……。？」

「ミコトさん？　しっかりしてください！」

ぐらりと世界が揺らぎ、代わりと言わんばかりに脳裏に浮かぶ、真っ白な空間。

誰も訪れることのない、規則的な電子音だけが部屋を彩る閉鎖空間。

そこで僕は、生きていた。

そして、死にたかった。

「ミコト、しっかりしろ！　意識を保つんだよ！」

「くっ……。ミコトさん！」

視界が滲んでいく。誰かが僕を揺さぶって、僕の名前を呼んでいる。

誰だっけ。

医者……だっけ。

『違うよ』

「！」

気が付けば、目の前には一人の少女が立っていた。

周りは真っ白な空間。病室ではない、ただ本当に、境目すら消えた真っ白な空間だ。

「君は……」

『……』

僕がそう言うと、彼女は少し悲しそうに微笑んだ。灰色の瞳が僕を映している。

『辛い……記憶だね』

「え……？」

『でも、仕方がないの。あの記憶は、貴方が貴方である証。私と貴方が混じり合う中、それでも貴方が貴方でいられるための記憶』

「え……っ」と

僕が困惑していると、彼女はトコトコとこちらに近寄ってきた。

『貴方は少し、不安定なのね』

「……………」

『あの能力も、そんな自分を守るために生まれたのかもしれない…』

…。けどね、いつまでもそれに頼っていても、駄目』

「……………」

『逃げては駄目。けど、たった独りで立ち向かうのも、駄目』

「……………」じゃあ、どうすれば？」

『私も独り……一匹じゃ、何も出来なかった。けど、今の私には貴方がいる。それと同じように、貴方にだって……フフッ』

うらやましい。そんなに想われてる貴方って。

「ミロトッー！」

「っー！」

身体を大きく揺さ振られ、僕は目を覚ました。いや、『戻ってきた』の方が正しいかもしれない。

目の前には、心配そうに僕を見つめる二人の鬼の姿。

「……………そっか……………」

「……………？」

頭を抑え、いつの間にか荒れていた息を整える。

切れた唇から血が滴り、決して軽くは無い痛みを感じながら、僕は二人に顔を向けた。

「僕は……………独りじゃないんだね……………。わかってるつもりだったけど、全然、わかってなかったみたいだ」

今、僕はどんな顔をしているのだろうか。もしかしたら、とても情けない顔をしているのかもしれない。だって、わけもわからずに零れそうな涙を堪えるのに大変なのだから。

「今更かもしれないけど……………ごめんよ。いろいろと迷惑かけた……………あと」

手を伸ばし、二人を肩に抱き寄せる。抵抗はなかった。

「……………ありがとう」

で、時は流れて。

「ほら、志妖も飲みなよこんなときぐらい」

「い、いえ……私お酒はちよつと……」

「鬼なのに酒が苦手……ですか。ふんふん、これは興味深いですね」

「文さん……酔ってるくせに取材根性出さないで下さい……ああ、字がのたうちまわって」

すっかり暗くなってしまった妖怪の山、桃鬼の洞窟ではプチ宴会が開かれていた。ちなみに今の状況は、すっかり出来上がった萃香が志妖に酒を勧めていたり、鬼なのに酒を飲まない志妖に興味津津な文を楳がそれとなく抑えていたり、まだ平和と言えば平和な状況である。

と、いつても。僕は洞窟の中にはいないのだが。

「こんなところにいたか」

「……桃鬼」

ガサガサと木の葉が擦れる音がして、直後に桃鬼が僕の隣に現れた。

僕が今いるのは、割と大きめな木の枝の上。二人乗ったら折れるんじゃないかと一瞬考えたが、よくよく考えれば重量的には女性一



人に猫一匹の重さである。大丈夫だろう。

「まだ考えてたのかい？」

「そりゃあ、ね。簡単には切り替えれないというか」

「でも、あの天狗娘達もいって言ってくれたんだろう？ なら、ウダウダ悩むこともないだろう」

「……まあ、ね」

確かに、文と椀はすぐに許してくれた。

向こうからしてみれば謝られたことが予想外らしく、後半からはどちらが謝っていたのかわからなくなってしまった程だ。

「紫も結局見つからなかったし……」

「ま、あの妖怪なら文字通りひよっこり現れるだろうさ。捜すだけ無駄だ」

「……」

「……ええい、調子が狂う。ホラッ、元気出しな！ 空元気で何でもいいからさ！ 過ぎたこと考えたって仕方ないじゃないか、アタシラが許すって言ってんだからいいんだ、それで不満ならこれからどうするかを考えな！」

「グフッ」

背中に容赦無い一撃を食らい、危うく枝から落ちそうになる。が、そこは桃鬼が支えてくれていた。落ちても着地する自信はあったが、咳き込みながら、僕は改めて枝に腰を下ろした。月を眺めて、桃鬼の言葉を口に出してみる。

「過ぎたこと考えたって仕方ない、か……」

「ああ」

「……そだな。そうする。じゃあ早速行ってくるわ」

「そうそう……って、え？」

「ちよつとばかり気になつてることがあつたんだ。大丈夫、星が見えてるうちには帰ってくるさ。じゃ」

「え、ちよつとミコト!? アタシとしてはもう少しここで……」

桃鬼が全てを言い終える前に木から飛び降り、着地と同時に駆け出す。

向かうは、迷いの竹林。そして 永遠亭だ。

「到着……と」

若干ふらつく身体で永遠亭に到着。どうにも身体の調子が優れないが……まあ、大丈夫だろう。僕はそう判断して、ここにいるであろう人物の姿を捜す。

「永琳は……」

「ここよ」

「わお」

いきなり声をかけられ、僕は抑揚のない声を上げた。何となく予想出来てたしね。

「あら……貴方その髪」

「ああ、うん。抜けたみたい」

これだけ聞くと髪が抜けたようにしか聞こえないが、別にハゲたわけではない。抜けたのは、色である。

あの灰色……あの時は黒だったか。あの霊夢という人物、僕の負の感情を封印してくれたらしいのだが、どうやらそのショックで髪の色素まで抜けてしまったらしい。今では僕は完全に白髪である。

「どうしたの？ こんな夜に外なんかに出て」

「たまにはゆつくり空を眺めたくなるのよ。特に意味はないわ。貴方こそ、こんな夜にどうしたの」

「ん……。いや、少し聞きたいことがあって、ね」

言いながら僕は着物の内側をまさぐる。少しして僕が取り出したのは、あの灰色の小箱。まだ中身はみっしり詰まっっていて、振ればザラザラと中の丸薬の音がする。

それを見た永琳は、別段驚くこともなく口を開く。

「ソレ、使ったの？」

その質問に、頷くことで答えを返す。

「使うには使った。けど」

「二粒飲んだのに死ななかった、かしら？」

「……………うん」

言おうとしていたことを先に言われ、僕は少し罰が悪くなる。永琳がやっぱりね、と言わんばかりに溜め息をついた。

僕に歩み寄り、小箱を掴みとった彼女はおもむろにそれを開け、

中の丸薬を一粒つまんで取り出す。

「やっぱり、少し改良しておいて正解だったわね。それでも生き残れるかどうかはほとんど賭けではあったんだけど」

「……………」

永琳の言葉の意味がわからず、僕は首を傾げていた。

小箱を閉じ、そんな僕に向き直る永琳。

「何となく、だったんだけど。貴方ならどれだけ警告しても二粒飲みかねない、と思ってるね。隙を見て改良しておいたの。作用はそのまま、副作用はなるべく抑えられるようにね」

「……………はは、僕ならって……………」

永琳にもそんな風に思われていたらしい。事実当たっているのだから笑うしかない。

それにしても、隙を見て……………？

「いつそんなことを？ 僕、その薬手放した覚えがないんだけど……………」

「貴方が前にここに来た時よ。眠っている貴方から着物を脱がした時に出てきたから、これは丁度いいと思ってるね。ほら、一日だけあの着物着てなかったでしょう？」

言われてみれば、と思い返す。あの日は……………そう、確か鈴仙の能力の練習が始まった日だ。あの日だけ、僕は灰色ではなく派手な色合いの着物を着ていた気がする。

あの一日で改良したのか。じゃあ、あの日が無ければ僕は今頃……………。

「死んでいたでしょうね」

「……………何で考えてることがわかった？」

「途中から口に出ていたわよ、気をつけなさい」

クスリと笑って僕に背を向ける永琳。編まれた長い髪が大きく揺れて、一瞬だけそれに目を奪われていると。

「この薬、返してもらおうわよ」

後ろ手で見せられた灰色の小箱。

返事を待つこと無く、永琳はすたすたと歩いていく。

「……………ありがとう。助かったよ」

「どづいたしまして」

そんな軽いやり取りを最後に、僕は竹林の闇へ、永琳は永遠亭の中へと消えた。

本当に、永琳には世話になる。知らず知らずのうちに助けられているものだ。

「さて……………戻るか。皆潰れてなきやいいけど……………」

未だ覚束ない足元。一度二度、強く地面を踏み締めた僕は、顔を上げて地面を蹴った。

「あれ、早かったね」

「大した用じゃなかったから」

十分程かかって洞窟に帰還。焚火に照らされている面々は未だ酒を飲み続けていた。

僕は萃香の隣に座り、全員の顔を伺う。

萃香は常日頃から酔ってるようなものなのでまあいい。

志妖は相変わらず素面。どうやら萃香の猛攻を凌ぎきったみたいだ。若干息が乱れている辺り、その攻防はつい先程まで続いていた模様。

文は……笑っている。笑い上戸か、関わらないでおこう。

その隣にいる栲は、酒を片手に俯いている。文の相手をして疲れたと見える。

桃鬼は……。

「あれ、桃鬼は？」

「桃鬼ならあそこ。ふらつと洞窟に戻ってきてからあの調子さ。ずいぶんいじけてるみたいだけど、何かあったのかね？」

萃香の視線を辿ると、壁に寄り掛かって何かぶつぶつ言っている桃鬼を発見。事あるごとに酒を煽っているのを見るに、酔っ払っているのは明白だった。

というか、もしかしていじけてるのは僕のせいだったりするのだろうか。なぜか能力が使えないのでその心中はわからないが……。

「桃鬼？」

「……だって……しい」

「？」

「……」

桃鬼に近付いて耳を澄ましてみるも、眩きが小さ過ぎてよく聞こえなかった。それどころか、桃鬼はいきなり、キツ、とこちらを睨みつけるように見てきた。思わずびくりと後ずさり。

「と、桃鬼？」

「アタシだってねえ……」

「ちよ、落ち着い……」

「アタシだって、寂しいときは寂しいんだよあ！ それなのに、アタシは、アタシわあ……！」

「ぐあっ！ ……く……桃鬼、絞まって……」

「うるさいうるさい！ 今日はこのままがいいんだ！ アタシを一人にした罰だ！」

「ちよ……」

ガシヤアアアン！！

（な、なんだ！？）

首が七割方絞まっている僕は心の中でそう叫ぶ。

桃鬼の腕を何とか外し（場所が首から胴体に変わっただけ）、焚火がある方向に顔を向けた。

見れば、椀が立ち上がってこちらに歩いてきているところだった。焚火の脇にはキラキラした破片、つまり酒瓶だったものが落ちてい

る。

「も、椀？」

「……………」

椀は無表情のまま、僕の目の前で立ち止まった。桃鬼は僕の身体にくっついたまま離れない。

ヤバい。なんか知らんが、ヤバい。

本能でそう感じ取った僕は、地面を蹴ってエスケープしようと思ったが、謀ったかのように桃鬼がその身体を押し付けてきた。当然ながらバランスを崩した僕は、後ろに倒れて盛大に後頭部をぶつけてしまう。

痛いと思ったその時には、椀がその顔を近付けてきていて。

（ほ、他の奴らは！？）

助けを求めようと首だけを動かして他のメンバーを見てみるも、文はいつの間にか酔い潰れている、萃香はニヤニヤと楽しそうにこちらを見つめるだけ、志妖に関してはまず姿すら見付からない。

助かる術が見付からず、焦って顔を戻してみるも、すでに椀の顔は寸前まで近付いてきていて。

「んむっ……………！」

「あむ……………むう……………」

僕の唇は、容赦無く椀に奪われていた。

しかしそれだけでは終わらない、触れた唇の間から這い出してきた椀の舌が、強引にこちらの口内に侵入してくる。と、同時に流れ



込んでくる、唾液が混ざったとある液体。それが酒であることはすぐに理解できたが……。

（なんで口移し！？ え、椀って酔ったらこうなるの！？）

半ばパニック。

零れた酒が僕の口周りを濡らし、口を離れた椀はそれを綺麗に舐めとっていく。

こそばゆい感触に思わず顔を逸らしたが、椀の両手が僕の顔をがっしりホールド、力の入らない手で椀の肩を掴むも、抵抗叶わず再度僕の口内は彼女の舌で弄ばれる。

「いやいや、発情期の犬ころは情熱的だこと」

あくまでも傍観姿勢の萃香の声が聞こえてくる。

酒を飲んでしまったせいかわ、たださえ鈍い身体の動きが更にきこちなくなり、ぶんぶんとうるまに揺れる尻尾を映していた視界も次第にぼやけていく。

もしかしたら、ダメージが抜けきっていないのかもしれない。もしくは、薬の副作用が残っているのか。どちらにしろ、抵抗できる程の力は僕には無い。

ああ、僕はこのまま椀に弄ばれてしまうのか……。酔っ払い椀、恐るべし。これからは気を付けよう。

「う……頭が……って、何をしていますか……！ ミコトさん、離れて下さい！」

と、そこで救世主の志妖登場。

あっという間に椀を、若干時間をかけて桃鬼を僕から引っぺがす。助かった。志妖の言い方じゃあまるで僕がやっていたかのようだ

けど、もつとつでもいい。

「……も、ムリ……」

「え？ ミコトさん、ちょっと……」

志妖が僕を揺さぶる。が、逆にそれが僕の意識を闇に落としていく。

目を閉じると、あっさりと僕は眠りに落ちた。

「ん……む……？」

「あ、やっと起きた」

目を開き、頭を掻きながら身体を起こす。声が出た方に顔を向けると、そこには布団から顔だけを出した橙の姿。

……ん？ 橙？

「おかしいな……僕は確か山にいたはずなんだけど……」

「紫様が連れてきたんですよ」  
「藍」

いきなり現れた藍が、水を差し出しながらそう言った。  
とりあえず、かけられていた布団から這い出してそれを受け取る。  
躊躇い無く喉に流し込んだ水はキンキンに冷えていて、ぼんやりとした思考に覚醒を促した。

「……ふう。紫が？　というか、今何時さ」

「今は昼前といったところでしょうか。紫様が気を失っているミコトさんを連れて来たのは夜更けでした」

「……そっか。紫が、ねえ」

僕が気を失っている時に来るとは……予想外だった。紫にだつて礼を言わなければならないのに。

「はい、これでお顔を」

「ありがとうございます」

次いで差し出されたタオルで顔を拭く。口周りが、なんとなくかピカピカになっていたのでものすごくありがたい。なんでこうなってしまったのかは深く考えないでおこう。

「ん……………」

立ち上がり、思い切り身体を伸ばす。パキパキと鳴る音がそれとなく心地好い。

身体の調子も悪く無い。能力も……。

「橙、ちよつと」

「はい、なんですか？」

「よいつ」

「え、わひゃあっ！」

予告無しに橙をお姫様抱っこ。最初に驚き、後に照れたような感情が橙から感じ取れる。うん、能力も大丈夫だ。これなら問題あるまい。

「い、いきなりなんですか！？」

「なに、橙と初めて会った時のこと思い出してさ」

あの時もこうしてたよね、と言いながら橙を降ろす。

「さて、藍。紫がどこにいるかわかるかな」

「紫様、ですか？ 多分ですけど、神社の方にいらっしやるんじゃないかと……」

「残念、たった今帰ってきたわ」

いきなり上からぶら下がるように現れた紫に、藍はずざつと後ずさった。気持ちはわかる。いきなり自分の主人がぶら下がってきたら嫌でも驚く。

「起きたのね、ミコト」

「おかげさまでね」

紫は僕のリアクションが薄いのを見て、諦めたように着地した。僕はそんな紫を見つめ、口を開く。

「紫。その……さ。いろいろと迷惑かけて……」

「その前に、ちょっとしゃがみなさいな」

「え？ いや」

「いいから、膝立ち。それと目もつぶりなさい」

こちらの言葉にことごとく被せてくる紫。僕はしょうがなく言われた通りに膝立ちになる。

一体何をさせようというのか、目をつぶったまま内心緊張している僕。

そんな状態で待ち続けること数秒。たった数秒で僕は気が気じゃなくなり、我慢できずに目を開こうとして。

「ちょ、紫様!？」

「わ、わ、わ」

いつかのように、僕の額に柔らかな感触がしていた。

目を開けばすでに紫は後ろを向いていて、僕に見えるのは紫の後ろ姿と驚いている式二人の姿だけ。

「無事で帰ってきてくれただけで、私は充分よ。……おかえりなさい」

そしてそんなことを言われたものだから、僕はそれ以上何も言えなくて。

紫が家の奥に消えそうになる前に、僕はなんとか返事を返すことができた。

ただいま、と。



80：「ただいま」（後書き）

まずすみません。次にすみません。そしてすみません。

ですがなんとか上げることができました！

これから更新のペースを上げていきますので御勘弁を……。

81：「百年の……」

「……うん、いいかな……。ハイ、全部終わったよ」

目の前の金色を指で何度か梳いてみて、引っ掛かりが無いことを確かめる。そのなんとも言えない感触に目を細めていると、その持ち主が首だけで振り返って僕を見た。

「ありがとうございます。自分では先の方まで手が届かなくて……」

「いやいや、役得役得」

「ひゃんっ！……もう、ミコトさんは……」

可愛らしい声を出しながらも、藍は尻尾に抱き着いている僕を突き飛ばしはしなかった。それをいいことに、思う存分そのモフモフ感を楽しむ僕。

やはりブラッシングした後の藍の尻尾は格別だ。橙が飛び付きたくなるのもわかる。

「しかし、やはりミコトさんは上手いですね。思わず眠ってしまっそうでした」

「うん？ ああ、そういえば僕が戻ってきてからはしてあげてなかったか。それまでは日課みたいなもんだったのにね」

「ええ……。橙と、貴方と三人で……。いや、三匹で、ですかね。とても、幸せでした」

「……………」

確かに、と心の中で返事しておく。

封印から解放されてからは問題事の連続で、ゆっくりしている暇がなかったものだから、なおさらあの頃が綺麗なものに思えた。



でもまあ、今のところは少なくとも平和なのだし。

「えい」

「わっ、ミコトさん、なにを……？」

尻尾から離れ、藍の帽子を強奪。文句を言われる前に、彼女の髪を櫛に通した。……当たり前だが、ブラッシング用と髪用は別である。

僕のいきなりの行動に、藍は身体を固まらせていた。髪を触られているのでむやみに動けないのだろう。

そんな彼女を余所に、僕は一つまみずつ丁寧に髪を梳いていく。

「嫌？」

「い、いえ……そういうわけでは……」

「なら、このまま」

それつきり藍は喋らなくなったが、僕は変わらず髪を梳き続けた。

こんな、何でもない日常生活。その中に自分がいられることが、ありがたかった。

「ぞ、て」

藍と談笑を楽しむこと数時間。そろそろいい頃合いだろう。  
僕は立ち上がり、藍にこれから出掛けることを告げた。

「どこへいくんですか？」

「ちよつとね。本当ならもっと早く行く予定だったんだけど……。」

「一応、身体が万全になるまで休んでたんだ」

「はあ……。」

僕がここに帰ってきてから一週間。あのプチ宴会の翌日から身体の調子は戻っていたが、それでも万全かと聞かれれば微妙なところでもあった。なので、しばらくはここ、マヨヒガでおとなしくのんびりと暮らしていたのである。

で、なぜ僕が自分の身体が万全になるまで待っていたのかというと……。

「太陽の畑、かあ。今日は晴れてるから、また一段と綺麗なんだろうな」

「……太陽の畑ですって？ まさか、ミコトさん」

「そのまさかさ。じゃ、行ってくるよ」

「あ、ミコトさん！ まっ……。」

待ちません。

僕は一瞬で家から飛び出して、藍を尻目に地面を蹴るのだった。

「つと。……到着」

風が気持ち良かったので思わず空に跳び上がったが、とりあえず太陽の畑に到着した。というか、何故僕は普通に空を飛べないのか。藍に教えてもらってもさっぱりだったし、こればかりは諦めるしかないのだろうか。しかし、皆飛べて自分だけ飛べないというのもなかなか悲しいものである。

「……まあいいや。とにかく幽香を捜そう」

どうしても飛びたくなったら椀辺りの肩に乗つかれば良い。椀なら快く承諾してくれそうだし。

そんなことを考えながら向日葵の畑に足を踏み入れる。

向日葵は皆一様に空を仰いでおり、つられて空を仰ぐと太陽の光が僕の目を直撃した。自分で言うのもなんだが、馬鹿である。

「くうっ……。いい天気だ。でも、少しくらい曇ってるくらいが丁度いいんだけど……」

目を擦りながら呟いてみる。いくら擦ったところで視力が早く戻るわけでもないのだが……。

尚も目を擦りながら向日葵畑を歩き続けること数分。少し開けた小高い丘に一軒の家を発見。言わずもがなこの太陽の畑の住人、フラワーマスターこと風見幽香の家である。

が、家の中からは幽香の気配が感じられない。どこにいったのだろうか、と額に手を当てて真剣に気配を探ってみる。

「少し集中して幽香の『命』を……!？」

その瞬間、全身の毛が逆立つような感覚に襲われた。

そのすぐ後に、日陰が僕の身体を覆う。遮られた熱気と、現れた妖気。どうせなら逆が良かったなあ、なんて思いながら、僕はゆっくりと振り返った。

「久しぶりね」

「……まあね。ごめんよ、すぐにこられなくて」

「あら、わかってるじゃない」

ちらりと足場を確かめてから、僕は幽香と視線を合わせた。幽香はそんな僕に手を伸ばし、依然として白いままの僕の髪に触れる。怪訝そうな表情に、僕は少し身体を強張らせた。

「……どうしたの、コレ」

「いろいろとあってね。色が抜けちゃったのさ」

多分髪が伸びればまた灰色に戻るのだろうか。

「ふうん……」

興味なさ気に返事をする幽香。その割には髪から手を離さず、ワサワと撫でるように触り続ける。

それが少しくすぐったくて、思わず幽香の手に顔を擦り付けてしまったのは、猫の本能ということにしておこう。そんな本能ありはしないが。

「……まあ、いいわ。それより貴方、身体の方は大丈夫なの？」

「ん？ ああ、大丈夫。全力で幽香と戦っても平気なぐらいには…

…ね  
「へえ」

ニヤリ、と僕の言葉に幽香が笑う。つられて笑う僕も、彼女と同じような好戦的な笑顔になっているのだろう。

「最初からそのつもりだったのかしら」

「じゃなきゃ、もっと早くここに来てる」

「……フツ。やっぱり貴方、良いわ。そうよ、貴方がいない日々はとてもつまらなかった。もう私は、貴方無しでは生きられない」

吊り上がっていく口の端。途端に彼女の身体から沸き上がる、膨大な妖力。

ザワザワと向日葵達が僕等を避けていく。

「百年以上私を放置していたぶん……これからたっぷり、相手してもらおうわ。フフ、今日とはびっきり激しくいきましよう？ 拒否権は無しよ」

僕の耳元で妖艶に囁いた幽香は、踵を返して僕から離れていく。そして数メートル離れたその場所で、日傘を閉じてその先端を僕へと向けた。そこに急速に溜まっていくエネルギー！

「……？」

その光を見て、僕は首を傾げた。おそらくは、あの馬鹿げた威力のレーザーを放つつもりなのだろうが……なぜ、距離をとった？

自慢じゃないが、そんなあからさまな攻撃は簡単に避けられる。

零距离砲ならともかく。

疑問を覚えたが、例え罫であろうとここには直撃を食らってしまう。元より打たれ弱い僕があれを食らえば動けなくなるのは確実。とにかくこの場所から移動しなければ……。そう思い、足を後ろに踏み出そうとする。が。

「って、あれ」

ガクン、と足が何かに突っ掛かり転びそうになってしまった。

まさかと思い足元を見れば、地面から生えた根や草、そして茎が僕の足をがんじがらめに固定している。

「さあ、どう逃げる？」

目の前には狡猾な笑みを浮かべる幽香の姿。

さて、どうする。どう考えてもこれはピンチだ。

僕に向けられた傘の先端の光が、一瞬脈打ったかのように膨れ上がる。避ける時間は残されていない。

「参ったな」

そんな本音を呟いた瞬間、まばゆい光が僕に襲い掛かっていた。

「……あら？」

幽香は攻撃を放った直後、間の抜けたような声を出していた。この程度の不意打ち、彼ならば簡単に避けるだろうと考えていたからだ。その証拠に、彼女は即座に追撃を仕掛けようと飛び掛かる準備をしていた。

が、目の前の光景は、彼女が思い描いていたものとは全く違うものになっている。

思わず上下左右、彼がどこから飛び掛かってくるのでは、と警戒するも、そんな気配は全く感じられない。当たり前だ。本人は今、彼女が放ったレーザーの真っ只中にいるのだから。

まさか、とありえない考えが彼女の頭を過ぎる。

だがしかし、彼女が知る彼は、この攻撃を防御しきれ程耐久力には優れていない。

ならばやはり、この一撃で終わってしまったのでは？

そんなことを考えている内に、彼女の攻撃は終わっていた。

傘を一度優雅に振るい、草がえぐれて土が吹き飛んだ一筋の道を細い目で見つめる。

「……ウフフ、そうよね。あれで終わりなんて、ありえないわ」

その先に立っていた彼の姿を見て、彼女は先ほどの考えを喜びで塗り潰すのだった。

「ふむ」

攻撃が止んだのを確認して、僕は足を地面に縛り付けている茎諸々を爪で切り裂いた。

土煙の向こう、嬉しそうに笑っている幽香の姿を見て、軽く肩をすくませてみる。

「随分と強い結界ね」

「うん。僕もここまで上手くいくとは思わなかった」

現在進行形で僕を包んでいる結界は、以前のそれよりも遥かに強力な力を帯びている。幽香のアレを防げた時点で、これは使えると確信した。

まあ、これを思い付いたのはレーザーが来る数秒前で、上手くいくかどうかは完全に運任せではあったのだが。

「ぶつつけ本番にしては、なかなかかな。」

『命を分け与えた』結界を解き、足元に警戒しながら幽香に向き直る。もうあんな不意打ちを受けるわけにはいかない。

「まさかアレを真正面から受け止めるなんて……。興奮しちゃっわあ」



小指を甘噛みしながらウツトリと呟く幽香。ゾクリときたのはきつと気のせいだろう。

「まだやるの？ 僕としては」

「愚問ね」

「ッ!？」

一瞬で目の前に迫った傘による突きを頬に掠らせ、僕はその傘を反射的に掴みとる。

ギンギシと傘の骨組みが鳴いている中、近距離で顔を突き合わせる僕等。

「こんなに身体が熱くなったのは久しぶりなのよ……！ 責任取ってくれるわよねえ……」

「百年越しの高ぶりかい……っ！ 僕に受け止め切れるかなっ」

「違うわ。貴方でなきゃ、駄目なのよっ……」

「!?!? うわあっ……!!」

言葉と共に僕の両足が地面から離れるのを感じる。しまった、と思った瞬間、僕の身体は凄まじい勢いで傘もろともぶん投げられていた。

驚きながらも体勢を整え、振りかぶられた幽香の一撃を彼女の傘で受け止める。が、空中で支えが無い僕の身体は、傘ごと垂直にたたき落とされた。

「くっ……!!」

傘で防いだぶん勢いはいくらかは軽減出来たのだろう、なんとか四ツ足で着地する。ミシミシと、今度は僕の骨組みが泣いていた。

思わず表情が歪ませながらも、追撃を防ぐか避けるかするため

顔を上げる。

そこには、大小様々な弾幕が広がっていた。

「アハハハハッ！！」

「くうっ……！」

今の幽香に遠慮という二文字は存在しないらしい。着地直後に降り注いできた弾幕に、手元の傘を迷わずに広げる。幽香の拳を喰らっても壊れなかったのだ、弾幕で壊れることはあるまい。

ドドドドッ！ と手に伝わる振動。身を縮こまらせて傘に全身を隠しながら、溜まった息を大きく吐き出す。

戦いになるだろうとは思っていたが、ここまで激しいのは想定外。こうなったらこちらも本気でいくしかないだろう。そうしなければ、こちらの身が危ないというものだ。

いろいろと謝りにきたはずだったんだが……。まあ、仕方あるまい。

「……まずは幽香の熱を冷まさなきゃ、ね！」

「そうこなくちゃ！ アハハッ、さあ、思う存分踊りましょう！？」

「はぁっ、はぁっ」

「ふう、はっ、満足、した？」

「はあ、っ、私を疲れさせるなんて、貴方ぐらいのものよ、はあっ……」

二人で地面に寝転がりながら、そんな会話を交わす。太陽はすでに空から退場していて、今は月明かりだけが僕等を照らしていた。

首だけを動かして幽香を見る。ところどころ土汚れがついているが、大した傷は見当たらない。当然だ、そんな攻撃を当てた覚えは無い。

気が付けば幽香もこちらを見つめていて、彼女は困ったような笑顔で口を開いた。

「ボロボロに見えて、そうでもないのね。当たり前か、そこまで攻撃を当てた記憶がないもの」

「着物はボロボロだけどね……」

あちらも同じことを考えていた様子。

ちなみに今の僕の状態は、幽香と同じようにところどころ土汚れがついているだけ。着物がボロボロなのを除けば、大したダメージは負っていない。

「よっ……っ」

息が整ったところで身体を起こし、未だ寝転がったままの幽香の隣に移動する。

幽香に見上げられながら、僕は当初の目的を遂行することにした。

「こんな状況で何なんだけど……ゴメン」

「？ 何の話よ」

「いや、僕が暴走してた時にさ、ひどい怪我させちゃったな、と。」

それだけじゃないとは思うけど……」  
「なんだそんなこと。いいわよ、許して……」

幽香の言葉が不自然に途切れて、僕は自然と幽香の顔を見てしまった。そして、何となくだが、後悔した。

「貴方今、『それだけじゃないとは思うんだけど』って言ったわよね」

それというのも、寝転がったままの彼女は、蠱惑的な笑顔でこちらを見上げていたわけであって。

「……言っただけど……」

「前言撤回よ。やっぱり許してあげない」

「へ？」

「百年も私を放置していた罪は、簡単に許すわけにはいかないわ。と、い・う・こ・と・で……」

「え、何、何!？」

僕の両手両足が向日葵の茎で縛られていく。いきなりのに、なす術も無く身柄を確保されていく僕。

「一名様、ごあんな〜い」

「ちよつと、え？ 何するつもりなのさ!」

「別に何もしないわよ？ ただ、ほんの少し貴方の温もりを感じただけ。嫌ならいいわよ、貴方のことは一生許さないから」

「う……」

「いい子ねえ……。ほら、拘束は解いてあげるから自分で歩きなさい。まずは身体を洗わなきゃ」

「……まさか」

「そのままかよ」

妖艶に笑う幽香。

僕はこれから何が起きるのかを考えては止めを繰り返しながら、彼女の隣を歩くのだった。

なんでこうなったのかなあ……。

81：「百年の……」（後書き）

後日談的なものをまだ続けるか、それとも切り替えて次に進むか迷  
い中……。

## 82：「カメラ争奪戦」

自作の干物をかじりながら、若干整備された山道を登っていく。

「やっぱり川魚だと小さくなるよなあ……………」

微妙な愚痴を漏らしながらも歩き続ける僕。と、脇道に丁度よく腰掛けれそうな枝を持った木を発見。こいつはいいやと干物を一度口から手へと持ち替えて跳び移り、改めて干物を口にくわえる。

「にしても、昨日はなかなか刺激的な夜だったな……………主に僕が精神が」

干物をくわえたまま笑ってみる。ああ、本当に昨日は刺激的な日だった。

明らかに強くなっている幽香と疲れ果てるまで戦い、その後は水から逃げる僕を強引に捕まえて一緒に身体を……………いや、ここは止めておこう。ただ、恥ずかしげもなく曝していた幽香を若干尊敬しかけたことは言っておく。

で、問題はその後である。

わっしわっしと頭を拭かれた僕は、そのまま捕縛されてシングルベッドの上へ。若干頬が上気して赤くなっている幽香に色っぽさを感じつつ、気が付けば僕の身体は幽香の身体に密着していた。これから幽香が起こすであろう行為に正直ドキドキしていると、フツと部屋の明かりが消え、窓から入る月明かりが淡く僕等を照らしはじめる。

その時に交わした会話を、まだ僕ははっきりと覚えている。

本当なら、このまま最後までいつてしまいたいけど、ね。

……幽香？

私、実は無理矢理つてそこまで好きじゃないの。だから、今はこれで我慢してあげるわ。

「してあげる、ねえ」

少し前まで干物をくわえていた唇に手を当てる。そういえば、僕の初めても幽香に奪われたんだっけか。

「……少し、勿体なかったかな？」



据え膳食わぬはなんとやら。けれど、僕も幽香も、あの時はあ  
して寝ているだけで幸せだったから良しとしよう。根性無し？ 強  
く否定は出来ません。

「……そろそろ行くか」

木から飛び降り、先程までのようにのんびりと山を登っていく。  
向かうは天狗の屋敷。目的は……天魔に挨拶、それに暇つぶしで  
ある。

「久方振りだな、ミコトよ」

「どうも。この間はすまなかった」

「白狼と鴉の娘のことか。本人達が良いと言っているのだ、儂から  
は何も言つまい」

「そういつてくれると」

下げていた頭を上げ、昔とかけらも変わっていない天魔の姿を見  
る。見た目は爺さんだが、感じる妖気は衰えず。実は戦えばかなり  
強いんじゃないかと踏んでいる。強くなきゃ天魔は務まらないだろ  
うし。

「おや？ その黒い羽は……」

「ああ、文のだよ。先の鴉天狗の」

「おお、そうだったか。ホッホ、まだまだ年若い羽根だな。僕の羽根より一回りも二回りも小さい」

「八八、性別の違いもあるだろうさ。僕としては、天魔の羽根の方が不思議でならない。何年経っても昔のままこの形を保ってる」

「何を言う。僕からすればお主の存在の方がよっぽど不思議だ。妖獣の身にしてその妖気。それにその耳飾りとて、随分と変わり種ではないか。妖が鍛えた鍛鉄に、九尾の金毛で括り付けられた天狗の羽根。もはやただの飾りではあるまい」

「かっかっか、と快活に笑う天魔。妖が鍛えた鍛鉄？ 藍はそんなものを僕にくれたのか。道理で軽い割には壊れないわけだ。封印の際にはこれを利用したらしいし、妖気だって少なからず籠っている。なるほど、確かにただの飾りとは言い難い。」

「さて、用は終わりか？ もう少し話をしたいところだが、今は存外仕事を立て込んでおつてな」

「ああ、邪魔してすまない」

「よい。どうせ暇つぶしも兼ねておつたのだろうか？ ホッホ、屋敷でも見て回るがいい」

「ありがたきお言葉。では、失礼させていただきます」

「敬語が似合わんの」

「ほっとけ」

笑いながら天魔の部屋を後にする。

さて、天魔のお言葉に甘えて屋敷を見て回りたいところだけど…。

さっきまで僕を見ていたのは、誰だ？

屋敷に入ってからずっと感じていた視線。それも、一箇所から見られているような感じではなく、全方向、纏わり付くような視線。

「敵意があるような感じじゃあないんだけど……」

「あや？ ミコトさんじゃありませんか！」

「ん？」

背後からかけられた声に振り返る。と、

「うわっ」

カシャッ！ と、まばゆい光が僕の目を襲っていた。

何だと思いつつ、そこにいた文の手元を見てみれば、そこには。

「えへへ、ミコトさんの写真、バッチリ撮らせていただきますよ  
おっ！」

「ちよっ、なにが！？」

「またとないシャッターチャンス！ を逃すわけにはいきません  
！ あなたの写真を欲しがっている奴がいるんですよ！」

カシャシャシャシャ！ と連続するフラッシュ音。

そう、文がその手に持っているのは、紛れも無く『カメラ』そのものである。しかもご丁寧にフラッシュ機能付き。なまじ扱うのがすばしい文なだけに、どこその有名人がインタビューラッシュを受けているかのようなフラッシュの数々が僕を襲う。

いろいろと突っ込みたいところではあるが、まずはこの馬鹿を止めなければ。

「写真なら後で好きなだけ撮らせてやるから、まずは止まれ」

すでに三十枚近く撮ってはいるだろうがな。

「ふむ、それならいいでしょう」

「何様だお前は」

「あいたっ」

コツンと文の頭を叩き、リアクションの際にカメラを手に取る。僕の知っているカメラよりは大分旧式だが、問題無く動いているみたいだ。なぜ、こんなものがこの幻想郷に？

「ふふーん、いいでしょう。これはですね、外の世界から流れ込んできた掘り出し物なんですよ！ なんと！ これを使えば！ 風景を切り取ったかのように紙に残せるのです！」

「へえすごい」

「もっと大きく反応して下さいよー!!」

ガクンガクンと肩を掴まれ揺さぶられながら、先程の文の言葉を考える。ふと気になった、ひとつの単語。

外の世界。

封印から解放されてから考えることは無かったが、よくよく考えてみれば幻想郷は切り離されたひとつの『世界』なのだ。こちらを内の世界とするならば、確かにあちらは外の世界と表現するのは正しかろう。

僕が外の世界にいたのはいつ頃だったろうか。

僕がいなくなった外の世界は、どうなっているのだろうか。

僕がいなくなったことで、父さんや母さんは……。

「……ミコトさん？」

「……いや、なんでもない。いいカメラだな」

「でしょう！？ すごくですよねコレ！ もう何がすごいって……」

思考を打ち切って、はしゃぐ文の隣を歩く。

今更考えることではない。僕は、あちらの世界を捨てて逃げ出したようなものだから。

あの頃の僕はもういない。

今の僕は、ここ、幻想郷に生きる、ミコトという一匹の妖怪なのだから。

「ミコトさん聞いてます？ このカメラの何が素晴らしいかって……」

「はいはい」

未だ興奮して僕にカメラの素晴らしさを語る文。残念ながらその演説は右耳から左耳に抜けていったが、その笑顔だけは目に焼き付くように。

それこそ、カメラに撮っておきたいくらいだった。

「椛なら、今は部屋にいるんじゃないでしょうか。今日は非番だったはずですし、にとりも今日は忙しいって言ってましたし」

「にとり？」

「友人です。河童の」

「河童なんているの？」

「ええ。滝の裏に家を構えていますよ。何を隠そうこのカメラだって、にとりが改造したものですからね」

ふうん、と軽く返事を返し、椛の部屋へと繋がる廊下を歩く。文のカメラ自慢はつい先程終わったばかりである。

しかし、河童までいるのか。さすが幻想の郷、幻想郷。そのまんなまか。

「今度会いに行ってみようかな……」

「その時は案内しますよ」

「仕事は？」

「新聞作りが私の仕事なので」

えっへん、と胸を張る文。無視して進む僕。

果たして胸を張れるだけの新聞を作れているのか、甚だ疑問である。

と、そんな僕の思いを読んだのか、文がトトトツと小走りで並んで口を開く。

「私の新聞は結構有名なんですよ！ 最近は部数だって増えてきているんですから」

「前は」

「前は！ 前は……鳴かず飛ばずでしたが……最近はずごいで

すよ！ 特にここ一週間！」

「ほお。その最たる要因は」

「それはやっぱりミコトさんのおかげ……あ」

ピタリと文の足が止まる。

ヤバッ、これは言っちゃまずいんだっただ……。。

心なしか、そんな言葉が聞こえてきそうな文の表情。感情を読み取るまでもなく、彼女は勝手に焦っている。

僕はそんな文を見て、ジト目で先程から気になっていたことを口にした。

「というか、さっきからすれ違う天狗から凄まじい殺気をぶつけられるんだけど……しかも男から」

「ギクッ」

……ギクッて……。

「正直に言え。僕をネタに使ったな？」

「……でもでも、ミコトさん自身をネタにしたわけじゃなくて、その」

「……………」

ジト目、レベルアップ。

胸の前で指をくるくるさせている文は普通に可愛いのだが、今はそんな場合ではない。ごまかされると思うなよ。

「……………まあいい。椀の部屋についたし」

「ギクギクッ」

「……………」

あからさまに反応する文を数秒レベルアップしたジト目で眺めるも、彼女は何も言わずに視線を右往左往させている。

仕方なしに文から視線を外し、椀の部屋に上がることにする。

「椀？ ミコトだけど」

「……………」

あれ、反応が無い。確かに椀はこの部屋の中にいるはずだけど…

…。

「入るよー？」

軽くノックしてみるも、やはり返事は返ってこない。仕方ないのでゆっくりと襖を開いていくと、そこには確かに椀の姿があった。が。

「……………」

「……………」

見えたのは椀の背中。

両肘を机について、両手に持った紙　　どうやら新聞みたいだが

を、じっと見つめている様子。

大分熱中しているようで、すぐ後ろに来ても椀は僕に気が付かない。

一体何の新聞なのか、と屈んで椀と同じように新聞を見上げてみると、その新聞の右角に、『文々。新聞』の文字が。

「……………」



「あっ」

早くも復活したジト目で新聞をピツとつまみ取る。桜はそこでようやく僕の存在に気が付くも、瞬間顔を真っ赤にして固まってしまっていた。

その姿を視界の端で捉えながら、僕は新聞に目を通す。

そこに書いてあったのは。

やはりあの噂は真実だった!? 犬走 桜の知られざる

交際相手!

長らく文々。新聞が追ってきた哨戒天狗、犬走 桜氏の交際相手だったが、先日ついにその相手方を確認することが出来た。これがその証拠写真である。

この殿方はとある有名な妖獣であり、過去にあの鬼を打ち倒したことで有名である。写真を見て頂ければわかるが、あのガードが固いことで有名な桜氏が、何と自ら相手の背中に腕を回していることが確認できる。表情からもわかる通り、嫌がる素振りにはかけらも見せていない。

このことから我が文々。新聞では……。

「この写真は……そうか、あの宴会の……」

「あわあわあわ」  
「あちゃちゃちゃ」

天狗娘達はそれぞれ慌てている。  
片や首まで真っ赤に染めて。  
片や目に見えて真っ青になっていて。  
どちらがどちらとは言つまい、いや、言つまでもない。

「……………文」

「は、はいいい！！」

ニコッ！

ビュウウン！

ガシッ。

ズルズル…………。

「地上で僕から逃げようなんざ千年遅い」  
「うづう……………」

ちなみに今起きたことを説明すると。  
僕、文に笑顔を向ける 文、逃げ出す 僕、一瞬で文を捕まえる  
連行。

謝罪もせずいきなり逃げ出すとは、これは何かしらの罰が必要  
なようだ。

「で？ 何か言うことは？」

「すいませんでした……………」

「その言葉の使用期限はつい先程切れてしまいました」

「うう……。部数を増やしたかったんですう！　ちよつとした出来心なんですよ！」

「ふざけんな！　写真まで載せてからに、しかも何だよこの明らかに狙ってる写真！」

ビシイ！　と先程床にたたき付けた新聞を指差す。そこに載っている写真には、おそらく潰れてしまったのであるう僕と椀がくんずほぐれつな姿で眠っている。右下に何か尖んがったものが写っているのは気にしない。多分アイツの角。

「椀も何か言つてやれ！　なあ、もみ……」  
「ふえ！？」

僕の後ろに座っている椀に振ると、椀は新聞にそろそろと手を伸ばしているところだった。

え？　まさかお気に入りに入り？

「……とにかく、世に出てしまったものはしょうがないとして……」

椀の応援は当てにならないことを悟った僕は、おもむろに文の力メラを手にとって首から下げる。

力無く手を伸ばしかけた文だったが、やがてすすことその手を下ろした。

どうせ没収された、とか思っているんだろうが、ちよつと違う。僕はもとよりここには暇潰しできているのだ。なので、お仕置きにしても楽しめるものにすることにする。

「鬼(おに)っ！」

「……はい？」

若干涙声になりながら文が返事をする。椋はすでに新聞に夢中である。

「僕からカメラを奪えたら、このカメラは返してあげる。タイムリミットは夕方まで。攻撃は禁止で、純粹にカメラの奪い合いね」

「え？ え？」

「じゃ、スタート！」

言うが早いか、僕はカメラ片手に屋敷の外に飛び出した。カメラの形に合わせて結界を纏わせる。これで壊れることはあるまい。

「来たな……？」

数秒遅れて、屋敷から飛び出してくる命を感じ取った。凄まじい速さでこちらに近付いてくる。

僕はあえて木々から飛び出して身をさらし、カメラを片手に挑発。

「ほらほら。カメラはここにあるよ？」

「……………！」

「おっと」

勢いに任せて突進してくる文。それを半身でかわし、身体を揺らしながらカメラを守る。

「っ、返して下さいっ！」

「だから奪えって言ってるじゃんか」

地面を蹴り、木の枝に跳び乗る。右手でカメラを弄びながら、更に挑発。

「どうした、幻想郷最速。その程度かい？」  
「……アツタマきました！ もうどっちが悪いとか関係ありません  
！！ 手加減しろって言っても遅いですからねえ！！」  
「ククツ、そこなくちゃ」

挑発成功。あまりへこまれたままだとこちらも面白くない。  
思惑通りにいった僕は笑いながらその場から離脱、後ろを気にし  
ながら移動を開始する。

地上ならば負ける気はしないが、油断は禁物。一旦距離を取らせ  
てもらおう……

「文さん！ 右に真っ直ぐです！」

「了解ッ！」

「なっ、椀の声。二対一かつ！？」

参った、椀が敵になると距離を取る意味が無くなる。どこにいて  
もすぐに見付かってしまうからだ。

「参ったな、接近戦覚悟か」

「すきありっ」

「なあっ！？」

瞬間、僕を襲う強烈な突風。カメラが天高く舞い上がる。しまっ  
た！

「攻撃は無しって言った！！」

「攻撃じゃありませんよ！？ ただカメラを吹き飛ばしただけです  
からね！ 奪い合いって言ったのはミコトさんですよ！？」

「くそっ、確かに……」

言われれば僕に対する攻撃ではないのでルール違反ではない。  
その手があったか、と舌打ちする間に文が上空のカメラをキャッチする。

「ふふん。私の勝ちですね、ミコトさ……」

「甘いっ」

「ああっ！ 奪い返すなんてアリですかあっ!?!」

「アリだ!? 僕に言った言葉、もう一度言ってみる!」

「え? えーつと…… 『カメラを吹き飛ばしただけですよ、奪い合  
いって言ったのは……』」

「そう! これは『奪い合い』だ! 夕方までにカメラを持ってい  
た方の勝ちってわけさ!」

「そ、そうか……! くっ、盲点でした……!」

「わかったならもう一度奪い返してみなよ! さっきみたいな不意  
打ちはもう食らわないけどね!」

「上等です! 何回でも奪い返してみせます!」

文の言葉に、笑みを零しながら空を見る。

太陽は、まだ空高くから僕等を見下ろしていた。

「ふう、さすがに二対一はしんどいな」

木の枝の上、乱れた着物（新着）を整えながらぽつりと漏らす。こつして無駄な眩きを漏らせる時間もすぐに終わるだろう。全く山限定とはいえ、突き放しても突き放してもすぐに追い付いてくるものだから、油断も隙も……。

「……ありやしないね、本当に」

背後から迫る気配。タイミングを計り、何が来ても対応できるように身構える。

「はあっ！」

気合いの声と共に、僕の乗っていた枝が一閃、根本から切り落とされた。だが残念、それは予測済みだ！

「残念だったね文！ その手は予想して……」

跳び上がりながら振り返り、勝ち誇りながら言う僕は、その瞬間自分の目を疑った。

僕の背後を取り、枝を切り落としたのは、文では、ない。

「文さん！」

切り落とされた枝が地に落ちるよりも先に、剣を持った椋が叫ぶ。そして気が付けば、空中で身動きが取れない僕の目の前には、先程の僕のように勝ち誇った顔の文がいて。

「もらったあ！」

余波の風で僕を吹き飛ばした文は、歓喜の声を上げたのだ。た。

「あゝあ、負けた負けた。まさかあそこで椋が来るとは……………」

「ミ、ミコトさん！ 何故そこまでボロボロに……………！」

「お前が巻き起こした風に巻き込まれたんだ馬鹿」

「あうっ」

文の頭を小突き、カメラを守っていた结界を解く。

大きく息を吐きながら空を見れば、一日の仕事を終えた太陽が、名残惜しそうに空を赤く染めている。

タイムリミットギリギリ、言い訳も思い付かない完璧な負けである。

……………まあ、最初からカメラを没収するつもりは無かったのだが。



それでも文は不安だったろう、それだけで罰としては充分だ。

「……ま、これからは勝手な記事を書かないこと。次やったら能力フル活用して地獄見せてあげるから」

「……………。ええ、ミコトさんの記事を書く時はちゃんと了承を取りますとも」

僕限定か。そして今の間は一体。

「じゃ、僕は帰るとしよう。天魔によろしく言っというて」

「はい。それにしてもミコトさん、髪……………」

「ん？ ああ。桜とお揃い」

「え！？ そ、そうですね、確かに……………」

僕の言葉に、もじもじと下を向いてしまう桜。なんとも微笑ましい。

「じゃあ、また来るよ」

言いながら跳躍。紫は帰ってきているだろうか。たまには、式として手を貸してやるのかな……………。

「椀、椀ったら」

「あ、は、ハイ。なんでしよう」

「ミコトさんの写真はいつ渡せばいいの？ アンタ、それが望みで手伝ってくれたんでしょ？」

「………そうでした。私から取りに行きます」

「ふふん、たくさん撮ったから、よりどりみどりよ？」

82：「カメラ争奪戦」(後書き)

ちよつと勢いで書き上げたからおかしな場所があるやも……

感想、指摘、よろしくお願いします。

### 83：「オモイ」

「ウソ……だろ……？」

「残念ですが真実です。……ミコトさん、気持ちはわかりますが、現実を……」

「いや、だ。いやだいやだ！ 僕は信じない！ だっておかしいじゃないか！ こんな、こんな真つ黒な世界、二度と見たくなんか……！」

「ミコトさん……」

藍の音が耳に残る。わなわなと震える身体は、目の前にある真実を認めようとしない。

固くつぶつた目を再度開くも、そこにある風景は変わりはない。

これも黒。

あれも黒。

それだって、黒。

「少しくらい、白があったっていいじゃないか……。なんだって、こんな……！」

やがて現実を受け入れはじめた僕は、強張っていた身体から力を抜いた。耳がパタリと倒れ、耳飾りが揺れる。

そんな僕を見た藍は、その真つ黒な世界をしばらく見つめ。

「そろそろ諦めてください。これでパーフェクト何回目だと思ってるんです」

カチカチと、一個ずつ重ねて片付けはじめた。

真つ黒な世界　つまるところ、石が全て黒に置かれているオセロ板が、みるみるうちに片付けられていく。

「……十七回」

「十回減らさないで下さい。二十七回です。パーフェクトを抜かせばミコトさんは三十回以上負けています」

淡々と語る藍。ぐったりしている僕を尻目に、きつちり片付けられたオセロ板をしまい奥の部屋へと消えていく。

あまりにも暇だったからといって藍に勝負を仕掛けたのが失敗だった。負けが負けを呼んで僕のプライドは粉みじん。暇と同時に自信も潰れてしまった。

「……家出してやるー!!!」

「晩御飯には帰ってきて下さいね」

くそ、流された。

声だけ出して実際には全く動いていなかった僕は、ため息をついてから猫の姿に変化。少し開かれた窓からのろのろと外に出るのだった。

「さて。ノリで出てきたはいいけど」

ぺたぺたと猫の姿のまま人里に繋がる道を歩いていく。別に人里に用があるわけでは無いが、先程呟いた通りノリで出てきただけなので、ただ何となく人里に向かっているだけである。

「それにしても……負けるとは思ってたけど、あそこまで強いとは……」

藍の頭が良いのは昔から知っていた。が、さすがにパーフェクト二十七回はやられすぎである。こちらの頭が悪いとかではない、ただ単にあちらが化け物なだけだろう。そう信じたい。

「しかし……藍であればなら、紫はどうなるんだ……？ 今度やらせてみようかな……」

少し歩くペースを落とし、真面目な顔でオセロで勝負する二人を想像して苦笑する僕だった。

途中、妖力を抑えていた僕に襲い掛かってくる小妖怪を蹴散らしながらも人里に到着。人里は今日も賑わっている。

依然として猫の姿のままの僕は、道行く子供達に耳やら尻尾やら耳飾りやら弄られながら進んでいた。

「で、なんで私の肩に？」

「いいじゃんいいじゃん」

で、今は偶然出会った阿求の肩にぶら下がっていたりする。なんでも寺子屋に用があるとかで、なら僕も、ということ肩に引っかけたのだ。着物に傷が付かないように爪はしまっているけれど。

「それにしても……」

「？」

阿求が歩きながらチラリとこちらの姿を見る。不思議そうな視線に、なんとなく居心地が悪くなって肩から飛び降りた。

阿求の前に踊り出た僕に、彼女は屈んで手を伸ばしてくる。

「貴方の身体……灰色でしたよね？」

「あー……。そうか、この姿だと……」

何故あんなに小妖怪に絡まれたのか、その原因がわかった。

今の姿は猫。しかし、前のように全身灰色の姿では無い。それどころか。

「見れば見る程……真っ白ですね」

「……………」

原因は単純に、色が違って僕だと判断されなかっただけだったのだ。

迂闊だった、人型の時は着物が灰色だったので目立つのは髪の毛

だけで済んでいたが、その実真っ白に染まっていたのは髪の毛だけでは無いのだ。深くは語らないが、そりゃあ猫になれば真っ白にもなる。

「あ、すいません。気に障りましたか……?」

「ああ、いや、そういう訳じゃないよ」

言いながら人型に戻り、立ち上がった阿求の頭に手を置く。

「ちょっと訳有りだね。しばらくすれば元に戻るさ」

実は戻ろうと思えば、今すぐにも元に戻れるのだが。

僕が真っ白になった原因。つい最近までは、負の感情を封印する時のシヨックで色が抜けたのだろうと考えていたのだが、どうやらそうでもなかったらしい。

僕が黒く染まる原因は、負の感情が僕の許容範囲を越えることにある、と紫が言っていた。

ならば、逆に負の感情が少なすぎればどうなるのか？ 答は、今の僕の姿である。

簡単に言ってしまうえば汚れのようなものだ。汚れが溜まった水が黒く染まるような……とは、紫の例えだが。

今の僕は完全に濾過された綺麗過ぎる水のようなもの。それが灰色に染まるには、余所から汚れを持つてくればいい。つまり、人間やら妖怪から負の感情をもらってしまえば、僕の姿　人型の時は髪　が、灰色に戻る。

今はそうする必要もないのでそんなことはしないが、戦いになればなにかしら負の感情は受け取ることになる。例えそれが手合わせのようなものであっても、だ。

そう考えると、焦らずとも近い内に灰色に戻ることはできる。なので、今は白髪を楽しんでいるだけの話だ。



あと、これはおそろくだが……灰色に戻る事ができれば、擬似的に黒く染まることもできるだろう。僕の能力は、どちらかと言えば外（他人）より内（自分）に強力に作用する。それを考えれば、決して不可能ではない。

「……ミコトさん？ いつまでこうしているんですか？」

「……ん？ ああ、ゴメン。あまりにサラサラなもので

「ミコトさんに言われても……」

「どっぴい意味だよ」

阿求の頭から手を離し、少しふくれた彼女と先に進むことにする。

このことは、僕の髪が白いうちは考えるのは止めておこう。

いずれ把握しておく必要があるが、確認のしようがないことを考えても仕方がないのだから。

「こんにちは」

「ああ、きたか……おや？ 隣にいるのは……」

「ただの野良猫です」

「お前みたいな野良猫がそこらにいてたまるか」

結構辛辣な言葉を浴びながら、阿求と共に慧首宅にお邪魔する。

見覚えのある靴が目に入ったが……まあ、その人物は別にここにいってもおかしくはないのでスルーしておく。

「で、お前は何の用で来たんだ？」

「いや、単なる暇潰しなんだけども……」

「なんだ、そうなのか。なら、家にはもう一人お前と同じ理由で来た奴がいるから、そいつの相手をしておいてくれ。私はこれから阿求と用事があるからな」

「ん。了解」

慧音と阿求がとある部屋に入っていくのを見送った僕は、その僕と同じ暇人がいるであろう居間へと向かうことにする。向かうとは言っても、ほんの二、三步歩けばたどり着いてしまうのだが。

「や、妹紅」

「!?!? ……ミ、ミコトさんでしたか。びっくりした」

何故か胸を撫で下ろしている妹紅の隣に座り、目の前にある机に乗っている紙を手取る。

「なにをそんなに驚いているんだか……。考え事でもしてたのかい？」

「え、ええ、まあ」

「ふうん」

自分で聞いておいてなんだが、素っ気ない返事を返しておく。妹紅から文句が飛んでくるかとも思ったが、黙ったまま何も言っていないので、先程手に取った紙に意識を向けた。

「『幻想郷縁起』ねえ」

サラサラと流し書きされた文字。これから纏める資料か何かだろうか、どちらにしろ、この紙はメモ用紙の様なものだろう。これかななにをどういつぶつに纏めるかが、紙一面にびっしりと書かれていた。

「ん？ 『要調査。魅王桃鬼、志妖』……なにしたんだ、あいつら」

そんなことを呟きながら、あらかた紙に目を通した僕は、息を吐いて紙を置いた。

そして何の気無しに隣にいる妹紅を見る、と、こちらを見ていたらしい妹紅とバッチリ目が合ってしまった。瞬間、沈黙。

「……………」

「……………？」

「……………」

「……………」

「……………あ、あのっ」

「うん？」

「……………その、あの……………」

沈黙の末に声をかけてきたはいいが、結局尻窄みに小さくなっていく声と共に俯いていく妹紅。

気になって感情を読んでみれば、そこにあったのは若干の羞恥だった。

なにを恥ずかしがっているんだか。

「なに？」

「いえ……………なんでも、ないです……………」

「なんだそれ」

結局言わないのか。よほどのことでなければ聞いてあげるんだけど。

まあいいか、と思いながら後ろに倒れ、ばたりと寝転がってみる。そしてふと思いついた。

「妹紅」

「……はい？」

「ほら、おいで」

伸ばした左腕を指差し、妹紅を手招き。さあ、どんな反応をするのか。

「い、いや、しかし」

「何言ってるの。昔はよくこうしてたじゃん」

「でも、ここは慧音の家だし」

「慧音ならしばらく来ないって」

「うう……」

僕の言葉に、次第にもじもじし始める妹紅。それを見てニヤニヤする僕。

再度手招きしてやると、妹紅は目を泳がせながら、しかし遠慮がちに僕の腕に頭を乗せた。しきりに慧音がいる部屋の方を見る辺りがなんともいえない。

「あ……」

「うん？」

「ミコトさんの、匂い……」

「そりゃあ僕だしね」

「いや、そういう意味じゃ……」

いいながら僕の腕に擦り寄る妹紅。

昔からこの場所は妹紅の特等席だった。今でも、左腕の腕枕は妹紅にしかしたことがない。橙は懐にすっぽり収まってしまっし、藍は僕が埋もれる側（どこに、とはあえて語るまい）だし、紫は猫の僕を抱き抱えるように眠るし、桃鬼は寝相悪いし、幽香は僕が埋もれる側（あえて語るまい）だし……。

「……結構寝てるもんだな」

「はい？」

「ああいや、こつちの話」

そうごまかしながら、僕は自分のことなのに苦笑してしまった。

実は僕、独りだとなかなか寝付くことができないのだ。寝れないことは無いのだが、誰かを抱きしめていたり、抱きしめられていたりした方が心地好い眠りに落ちることができる。遙か昔は独りが当たり前前の生活をしていくせに、今となってはこの様である。

果たしてこれは悲しむべきなのか、喜ぶべきなのか……。

「なんか、眠くなってきたな……」

言いながら、僕は目を閉じた。

ゆったりとした時間が過ぎていくのを感じつつ。

隣にいる妹紅の呼吸を聞きながら、不意に現れた睡魔に身を委ねる。

「……ミコトさん。ミコトさん？ あれ、本当に寝ちゃったんですか？」

腕にあつた重みが無くなり、そんな声が聞こえてきた。まだ起きているが、あえて反応はしないでおく。

「ミコトさん、……ミコトさん……？」

その声はだんだんと小さくなっていき、本当は起こすつもりがないのではないかと思えてくる。いや、実際起こすつもりは無いのだろう。本当に起こしたいのなら身体を揺するなり腹に一撃入れるなり火で髪を炙るなりしているはずだ。実際に過去にやられたことがある。その日の修行は普段の五倍にしてやったが。

そんな懐かしい思い出を振り返っていると、不意に顔面に圧迫感を感じた。同時に頬の辺りにサラリとした感触が現れる。これは……？

「寝てるん、だよな」

そして、明らかに先程よりも近い場所から聴こえる妹紅の声。僕が眠っていると確信したのか、言葉遣いも変わっている。

「こ、これは……チャンス、なのか……」

待て。ちょっと待て。何の話をしている。チャンスって何だ。

「よ、よし……」

何かしら決意したような声と共に、僕の頬の辺りにおそろくだが、手をそえられる。これは、もしかしなくても。

「っ……………」

なまじ静かなだけに、妹紅の喉が鳴る音が聞こえてしまった。唾を飲み込んだ生々しい音が耳に残り、思わずこちらまで息を呑んでしまう。

どうする僕。ここは目を開くべきなのか。それともこのまま身を委ねるべきなのか。というか最近流され過ぎな気がする。ならば逆転の発想でこちらから、いや違う。どちらからとかいう問題ではない。問題はそこではない。いやしかし、このままでは確実に妹紅が僕の。

「さて、一段落したし休憩を挟もうか。居間でお茶でも飲もう」

「ありがたくいただきます」

「っ!」

またしても奪われるのかと、変に覚悟したその瞬間に、そんな会話が聞こえてきていた。同時に、近くから聞こえるバタバタとした騒がしい音。

「さあ、適当に座っていて……どうした妹紅、正座なんかして」

「い、いやあアハハッ、何でもないぜ!? ほら、お茶くれよお茶!」

「……? 変な奴だな。ミコトは……なんだ、寝てしまったのか。仕方のない奴だ」

二人の会話を聞きながら、妹紅ごまかすの下手だなあとか考えていると、不意に僕の身体がふわりと浮いた。誰かに抱き抱えられたらしい。

「相変わらず軽いな。こんな身体でよくもまあ……」

「ああ、ミコトさんは猫の時と体重が変わらないらしいから。私達よりも遥かに軽い」

「……それはそれで腹立たしいな」

知らないところで理不尽な怒りを買いながら、僕はどこかへ運ばれていく。ちなみに今はお姫様抱っこの体勢である。女性にされる少し傷付くものがあるが、今更なので気にしない。

「さて……。新しい布団を出すのも少し面倒だな。私のでいいか」

僕を優しく降ろした慧音は、そう言いながら畳んであった布団を広げはじめた。薄目を開いて見ている僕には全く気が付かずに、綺麗に布団を準備してくれている慧音。最早、本当は起きていました、なんて言えなくなってしまった。

「……よし、こんなものか。……しかし、本当に軽い。なんだか本当に腹立たしくなってきたな、コイツめ」

ピン、と額を軽く弾かれる。僕は何も悪くないはずだが……。そうこうしているうちに僕の身体は布団の中へ。なんとというか、こう……。いい香りがする。

「初めて会った時は、逆の立場だったかな。私が寝ていて、お前が起きていて……。フッフ、案外コイツも、あの時の私の様に起きていたりして」

ギクツ。

「……こんなに白い髪になって。博霊の巫女から大体話は聞いていたが……。苦労は買ってでもしろとは言うが、お前は少し買い過ぎだ」



ふわりと、頬を撫でられる。顔にかかっていた髪が耳に優しくかけられた。

「……やめると言っても、どうせ意味はないんだろうが……けどな？ お前が傷付くところなんて、私はあまり見たくはないんだぞ？ ……聞いているのか、この寝ぼすけ」

またしても額を弾かれる。しかし、不謹慎だが、悪い気はしない。心配してくれていることが、今はこんなにも嬉しいのだから。

「幸せそうな顔して……これくらいにしておくか。夢くらいは、幸せなものを見て欲しいし、な」

その言葉を最後に、きぬ擦れの音がして。スー、カタン、と襖が閉まる音。

僕はそこで目を開いて、自分の顔に手を当てる。

「そんな顔してたかなあ……」

思わず顔に出ていたのかもなあ、と、未だにやける顔を手で隠しながら、僕は眠ることにした。たまには、昼寝も悪くない。

「いけないいけない、ちょっと寝過ぎちゃった。もう真っ暗だよ」

どうせだからもう少し寝てよう、を何回も繰り返し、いざ起きてみれば外は真っ暗になっていた。

慧音に怒られるかと思ったがそんなことはなく、それでも謝罪してから家を出たのだが……。

「藍、怒ってるかなあ」

そう。僕が心配しているのはそこである。

そもそも家を出てきた理由が『オセロで惨敗したから』なんていうくだらないものである。そのくせこんな真夜中に帰ってくる僕に、藍はさぞご立腹であろう。晩御飯までに帰ってこい、なんてことも言われた気がする。

「いやでも、よくよく考えたら怒られる程のことでもないよなあ……」

人間の子供でもあるまいし、真夜中に帰ってきて怒られるような歳は一万と数千年前に通り過ぎてしまった。

だがどうも、僕が封印から解放されてから、藍は過保護になってきている気がする。最初の頃なんて僕がマヨヒガから出ることをすら渋っていたくらいなのだから。

「……けど、それも心配してくれているから、なんだよな。きっと」

……だんだん申し訳無くなってきた僕は、少しスピードを上げるのだった。

「ただいま」

「兄様、兄様！ 大変です！ 藍様が！」

「え、何？ 藍がどうかしたの？」

帰るや否や、橙がドタバタしながら僕に詰め寄ってきた。

どうやら藍に何か起きたらしいが、一体何が起きたのか。表面上は冷静を保っている僕だが、先程から藍のことを考えていたせいか心臓が跳ね上がるのを感じていた。

鼓動を抑えつけながら、屈んで橙に視線を合わす。そして、橙の口から放たれた言葉は。

「藍様が、部屋の隅っここから動こうとしないんです！！」

……………ん？

「この部屋の中で？」

「ハイ……。何を話しかけても、どんどん隅っこに寄っていくばかり

りで……」  
「どれどれ……」

すっかり心臓も落ち着いた僕は、橙が指差す部屋の襖をほんの少しだけ、ゆっくりと開ける。その部屋の隅っこ、確かに藍の姿があった。というか、隅に寄りすぎてこちらからは尻尾しか見えない。むしろ尻尾がいる。

「ちなみに、最初はどこらへんに？」

「真ん中です。ですが、時間が経つ度に隅っこに吸い寄せられるように移動して……」

なんだそれは、と頭を搔く。いや、おそらく僕のせいではあるの  
だろうが。

「で、紫？ 藍は何か言ってた？」

「私だって知らないわよ。気が付いたらじっとオセロ板見つめてぶつぶつ言ってたのよ？ さすがに近寄り難くて」

「オセロ？ …… ああ、なるほど」

再度、少しだけ開かれた隙間から藍の姿を見る。そして、後ろにいる二人に目配せをしてから、僕は襖を開いて中に入ってしまった。びくりと震える藍。いや、尻尾。

「藍。何してんの」

「ミコトさん……」

おそろおそろ、といった感じでこちらを向く藍。構わず近付いて上から見下ろしてみると、藍と壁の隙間にはオセロ板があった。まだ見てたのかお前。

「あ、の」

「家出したと思った？」

「……！」

一瞬驚いたかと思えば、彼女はゆっくりと頷いて、尻尾が力無く揺れはじめた。

「なかなか帰ってこないから、だんだん不安になったんだ。で、僕の言葉を思い出して」

「………はい」

「バーカ」

「ふえっ」

もにつ、と藍の顔を両手で挟む。いきなりすることに驚いたのか、その瞳に貯まっていた涙が零れて僕の手を濡らした。

「家出なんかするわけないでしょ。そりゃあ確かに、あんなこと言った僕も悪いけど……帰りが遅いくらいでそこまで心配しなくとも」「ですが………」「ですが？」

藍の顔から両手を離し、彼女の正面に腰を下ろす。藍の話を書く為。

「……怖いんです」

「怖い？」

「はい……」。封印から解放されて帰ってこられた時、私は本当に嬉しかった。また貴方と一緒に暮らせるんだと思うと、嬉しくてしょうがなかったんです」

「なら……」

「ですが……いえ、だからこそ、私は、貴方が居ない生活には、もう二度と戻りたくない。貴方を失いたくない。目に見える場所にてほしい。もし、私の見ていないところで何かあったりしたら。知らないところで消えてしまったりしたら……そんなことばかり、考えてしまう」

藍の瞳からぼろぼろと零れ、落ちていく涙。

それを見ると、胸から何かが込み上げてくるのを感じる。

同時に、少し恥ずかしいと思った。藍の気持ちも知らずに、僕は彼女に心配をかけていたのだから。

「本当ならここから出ていくことも……いえ、私の傍からも離れてほしくはないんです。気が付けばどこかに行ってしまうような貴方を、出来ることなら私に縛り付けておきたい……」

「藍……」

「わかってます。そんなことは出来やしない。貴方を束縛する権利なんて、私にはありません……。けれど、ミコトさん……？　ひとつだけ、私のわがママを聞いてくれませんか……？」

「……何？　言うてごらん」

なるべく優しい声色で、僕は言った。

藍の腕が僕の首に絡み、ぎゅっと、身体が寄せられる。

耳元で発せられた藍の声は、か細く、震えていて。

「傍に、居させて下さい。せめて、貴方がここにいる間だけでも……。私は何も求めません。私だけを見てくれなんて、言いません。ただ、貴方の、傍に……」

震える彼女の身体が、更に強く僕の身体を抱きすくめる。

こんなにも、僕を求めてくれる人がいる。

それは、すごく幸せで。

ほんの少しだけ、悲しかった。

#### 84：「スペルカードと黒」

「ミコト」

「ん？」

昼間からマヨヒガでまったりしていると、不意に現れた紫が声をかけてきた。

身体を起こし、立っている紫に目を向ける。と、その隣に予想外の人物が。

「志妖。何でここに？」

僕の言葉に、ペこりと頭を下げる志妖。僕は志妖と紫を交互に見て首を傾げた。何が何だかさっぱりである。

「彼女は私が連れてきたの。これからする話には、彼女が必要不可欠だったから」

「志妖が必要不可欠？ 尚更よくわからないな……」

とりあえず立ち上がり、思い切り伸びをする。身体の節々がパキパキと小気味よい音をたてた。

「で？ なんの話っ」

中途半端なところで言葉が途切れる。なぜかと聞かれれば、そうせざるをえなかったと言っべきか。

早い話、いつもと同じ様にスキマに落とされただけなのだが。

「話は別の場所でするわ。あと一人必要な人物がいるから……って、



どうしたの、ミロト」  
「いや……」

歯切れの悪い返答に首を傾げる紫。僕は涙目で紫を見て、たった今起きた事件を口にする。

「舌、嚙んじやった……」  
「……………」

僕の言葉に、紫は呆れたように息を吐くのだった。

「……」

スキマから飛び降り、辺りを軽く見回してみる。目に留まったのは、どこか見覚えのある神社の姿だった。

「覚えているかしら」  
「うん。ここは……」

ここは、僕が結界に組み込まれた場所。つまり、百年前の僕が最後に訪れた場所だ。

「ここに何が？」

「行けばわかるわ。さあ、行きましょう」

歩き出した紫に数歩遅れ、小走りで紫に並ぶ。同じように僕の隣に並んだ志妖と三人で進んでいく中、僕はしきりに視線を動かしていた。特に珍しいものなど見当たらないのだが……なぜだか、ここは落ち着かない。ここにある『なにか』が、僕を警戒させている。それが何だかわからないまま、神社の入口へとたどり着いた。時間にすれば一分も経っていないはずなのに、もっと長く歩き続けていたような感じがする。

目の前にある神社を見上げると、腰の辺りからゾワゾワと何かはい上がるような感覚が僕を襲った。

やはり、『なにか』ある

僕がそう確信し、本能からくる警戒を更に強めて

「なあに、おさい銭でも入れてくれるの？」

「ッー!!」

背後から聞こえた声に、僕の身体は襲い掛かっていた。

「……………」

「……………!!」

気が付けば、僕の爪は一人の少女の首に突き立てられていた。彼女の首、触れるか触れないかの位置にある僕の爪は、しかしそれ以上突き出されることは無い。

「いきなり私に襲い掛かってくるなんて……。紫、私何かしたかし

ら

ギリギリと軋む身体。突き進もうとする僕の身体は、凄まじい力でその場に抑え付けられていた。

目の前の少女は僕を一瞥して、しかしかけらも動じることはなかった。いつ喉元の爪が突き出されてもおかしくない状況でも、まるで僕が見えていないかのように平然と振る舞っている。

「ミコトさん……！ 爪を収めて……！」

「っ！」

耳元で志妖の声がして、僕はようやく身体の力を抜くことができた。

突き立てていた爪をしまい、突き出していた腕をだらりと下げる。そこで僕は、自分が尋常じゃない量の汗をかいていることに気が付いた。

「彼は……そういつごと」

少女は小さく呟くと、僕と志妖の隣を通り過ぎていく。

同時に、志妖の身体からも力が抜け、支えが無くなった僕は無様にも膝をついてしまっていた。石で造られた道に、ぱたぱたと汗が滴り落ちる。

大丈夫なの？

ええ。彼なら乗り越えるでしょう。

そんな会話が聞こえてきたが、文字通り右から左へと流れていつてしまい、僕の頭に残ることはなかった。

「すみませんでした」

「別にいいわ。何が原因かはわかってるし」

神社の中、とある部屋の中で少女 博麗 霊夢 は、お茶を

飲みながらそう答えた。

一風変わった紅白の服は巫女服らしく、いろいろとツツコみたくはなつたが、あんなことをした手前そんなことは言えない。

「もう大丈夫？」

「うん。大丈夫」

紫に聞かれ、言いながら頷く。実は能力を使って強引に沈静しているだけなのだが。現に、今もあのえもいえぬ感覚は消えてはいない。

それを踏まえた上で大丈夫だと思ってくれたのだろう。紫は小さく頷くと、今度は向かいにいる志妖に視線を向けた。

「じゃあ、始めましょう。ミコトは聞いているだけで構わないわ」

そう言われたのでしばらく黙っていることにする。ついでに猫の姿に変化。この姿の方が何かと楽だからだ。

「では……」

それを見た志妖が口を開く。どうやら、志妖が話を進めていくようだった。

「ふうん……」

紫の膝の上、机が邪魔な僕は、声だけに聞き耳を立てていた。

志妖が話した内容は、大まかに纏めれば次のようなもの。

まず、妖怪の弱体化が問題だということ。大結界が出来てからは簡単に人間を襲えなくなり、食料も提供式と受け身のもので、妖怪はだらけていく一方。そこに突如現れた吸血鬼がつけ込む形で騒動を起こし出すといった異変にも発展してしまったとのこと。

この時は丁度僕が封印から解放されたこともあり、桃鬼らと半ば強引に異変を収束させることができた。

が、今のままでは力のある妖怪が幻想郷に来る度に同じことが繰り返される可能性がある。それを回避するには、妖怪の力を保たなければならぬ。ならばどうすればいいのか。

そこで志妖が提案したのは至極単純。戦いましょうの一言だった。

「で、私と志妖、それに紫で考え出したのがコレ」

不意にかけられた声に反応し、僕は机に前脚を乗つけて机の上を覗き見た。

そこにあっただのは、一枚の四角い紙。トランプのようなカードのような、そんなものだ。

「これは……？」

「『スペルカード』よ。これを使った決闘で、今回の問題を解決出来るんじゃないかって」

霊夢はそう言うと、僕にも見えるようにカード……スペルカードを起こした。絵柄は無く、無地の真っ白なカードである。

「実は前々から話は出ていてね。今回改めて話したのは貴方の為に、確認の為なの」

「ふうん……でも、これどうやって使うの？」

見た限りじゃ戦いに使えそうには思えない。妖力込めて投げるとか？

そんなことを考えていると、不意に向かいからぼんやりとした明かりが。何かと思えば、志妖が手の平に弾幕のひとつを浮かべていた。

「弾幕？」

「はい。これをそのスペルカードに込めて、発動すればその通りの弾幕が出るといった感じに」

「ルールとしては、その弾幕に一発でも当たれば負け。たとえ余力が残っていてもね」

志妖に続き、紫が僕の頭の上で説明してくれる。

その後も説明してくれたが、どうやら重要なのは、この『スペルカードルール』とやらは、擬似的に命を賭けた決闘となっており、本当に命掛けの戦いではないとのこと。まあ、不慮の事故は仕方がないとのことらしいが。

他にも不意打ちは駄目だとか、決闘前には枚数を提示しなければいけないだとか細かいルールもあるが、そうでもしなければ妖怪と人間が同等に戦うことは出来ないだろうから納得した。

ただ、弾幕のみの決闘になるらしく、肉弾戦を得意とする妖怪にとってはネックになるだろう。僕も含めて。

「スペルカードルールの話はこれでおしまい。次は、ミコト。貴方に直接関係のある話よ」

「僕に？」

紫はそう言うと、小さく開かれたスキマから、これまた小さな箱を取り出した。

そして唐突に理解する。『コレ』だ、と。

「察したみたいね。そう、貴方がここに来てから感じている不快感はこれのせい」

紫の膝から降り、人型に戻っていた僕は、机に置かれたその箱から目が離せなかった。

何十にも結界が掛けられているおかげで、僕以外の皆は大丈夫のようだったが……。

「薄々気付いてはいるでしょうけど……。この中には、貴方の負を封印したスペルカードが入っているわ。そこにあるカードと違って、

桁外れの容量を持つカードなのだけれど」

「ああ、箱の上からでも見えるよ……どす黒い感情が渦巻いてる」

あれが自分の中にあつたと言うのだから、心底恐ろしい。暴走するも当たり前だ。

「貴方には、これを自らの手で保管しておいて欲しいの。何十と掛けた封印もそろそろ限界がきている……これを封印無しで持つていられるのは、貴方しかない」

「確かに……そうだろうね」

結界も封印も無しにこれを持つとすれば、常人ならば一分と持たずに発狂するだろう。なにせ一万年以上前から積み重ねてきた、何千何万という数の負の感情が、ここにひとつとなつて渦巻いているのである。全くはた迷惑な団結だ。

「これ以上これをここに置いておけば、博麗の巫女である霊夢、そして博麗大結界そのものに悪影響を及ぼすかもしれない。貴方一人に任せるのも酷だけれど……」

「いや、いいよ。元は自分のものだしね」

僕はそう言つて、軽い手つきで箱に手を触れた。瞬間、封印がばきんと音を立てて消え去つたあたり、本当に限界だつたのだろう。

上箱に手を掛け、開ける前に周りにしっかり気を持つておくように伝える。念のため、と他の三人は一カ所に固まり、霊夢と紫が結界を自分達に掛けていた。あれなら心配あるまい。

「じゃあ……いくよ」

息をゆっくりと吸つて、吐いて、もう一度吸つて。



息を止めると同時に、箱を開け放つ。

瞬間、手の平に収まるような小さな箱から、真っ黒な負の感情が龍のごとく飛び出した。

一瞬にして僕等がいた部屋は暗黒に包まれ、嵐のような風が僕を襲う。

「……………！！」

僕はその、質量を持ったような暗闇の中、その根源へと手を伸ばした。

箱の中にある、スペルカード。感覚のみで取り上げて、身の毛がよだつ感覚に陥りながらも、僕は能力を行使する。

イメージは、竜巻。荒れ狂う闇の嵐を、自分の周りに円を描くように走らせる。

そうして出来た竜巻は、少しずつ僕の中へと流れ込んできた。ありとあらゆる箇所から入り込んでくる負の感情。喉の奥が燃えるように熱くなり、はち切れそうな固まりが胸の中で暴れはじめた。

やがて、全てが僕の中へと吸い込まれて消えていく。

喉は干上がり、カラカラになっている。

部屋から黒は消えたのに、僕の視界は真っ黒なまま。

行き場を無くした感情が、静かに僕の身体を内側から叩いていた。

「……………うくっ」

やがてそれは、僕から這い出そうと喉へとその食指を伸ばす。強烈な吐き気が僕を襲い、思わず口に手を当てた。

だが、それは吐き気を我慢しようとしての行為ではない。  
むしろ僕は、これから思い切り吐こうとしている。ただ少しばかり吐くものが普段と違うだけの話。

そんなことを考えながら、僕は手元のスペルカードを再度見つめ

「ぐっ……くっくっくっ！!?」

喉元まで迫っていた吐き気と共に、その真っ黒な負の感情を吐き出した。

出てきた時と同じ様に、黒い龍となってスペルカードに吸い込まれていく負の感情。

何十秒かかけてたつぷりと吐き出した僕は、最後に頼りない息を吐き出して倒れ込んだ。手元には、見た目的には最初と何ら代わりがない、真っ黒な姿のスペルカードが。

「ミコトさん!?」

僕が倒れてから少しして、呆然としていた志妖が駆け寄ってきた。霊夢はやれやれと言った感じで立ち上がり、紫は胸を撫で下ろしている。

そんな中、僕はスペルカードと部屋の床を何度か交互に見て、いらないものまで吐き出さなくて良かった、と変に安心していた。

「成功したみたいね」

「……うん。けど、僕以外は触らない方がいいよ。外に漏れださないようにはなってるけど、直接触れたらどうなるかは保証しない」

志妖に支えられながら身体を起こす。表も裏も真っ黒に染まった

スperlカードを懐にしまい、未だクラクラしている頭に手を当てる。

「あれ……？ ミコトさん、髪の色……」

「色？ ……ああ、少しばかり残したからね。色が戻ったんだろうさ」

全ては戻さずに、三分の一程度受け入れることにした。それでもしないと、カード本体が持ちそうになかったからだ。

それにしても、凄まじい量の感情だった。よりカードを安定させる為に一度抜き出したは良かったものの、危うくいろいろ吐き出してしまつところだった。

「全く……大方、『一度身体を通した方がより安定させられる』とか思ったんでしょうけど……。嫌な汗かかせないで頂戴」

どうやら紫にはいろいろと見破られていたらしい。正にその通りである。どうにも、自分から離れた感情、しかもあれだけの量の負の感情を操作するには自信が無かった。

最悪僕が暴走状態に陥ることも考えられたが、成功したのでよしとする。

「ところで、紫？」

「何？」

「寝るから」

「随分といきなり……。いいわ、私がきちんと連れて帰るから」

ゆっくりとおやすみなさいな、と続ける紫。

割と限界がきていた僕は、それを聞くとあっさり眠りに落ちていた。

84：「スペルカードと黒」(後書き)

おかしなところがあれば、指摘をお願いします。

## 幻想郷縁起

大胆不敵な桃の鬼

魅王 桃鬼      T o u k i M i o u

能力

：硬度を操る程度の能力

：掴み取る程度の能力

危険度

：高

人間友好度

：高

主な活動場所

：妖怪の山

幻想郷から鬼が去っていく中、幻想郷に残る鬼も存在した。その内の一人が彼女、魅王桃鬼である。

桃色の髪を腰まで伸ばし、奇妙な感觸の服を着ている（1）。鋭く尖った一本角には、細かい傷がびっしりと付いている。

本人はあまり語らないが、一万年以上前から生きる大妖怪である。

基本的に陽気で、普段は妖怪の山にある洞窟で志妖（後述）とのんびりと暮らしている。

あまり自分から動くことはなく、身の回りのことを志妖に任せて自分だけまったりしていることが多い。

〔能力〕

物の硬さを操る力を持つ。彼女の前ではものの硬い軟いは意味を無くし、鉄は粘土のように軟く、逆に土は鉄塊のように硬くなるという。

〔この妖怪に纏わる逸話〕

・天狗の館半壊事件

天狗の間で密かに語り継がれている事件である。

大の戦闘好きである彼女は、なんにもない平和な日常に餓えを感じていた。そしていつからか、彼女は見かけた天狗に片っ端から喧嘩を売って打ち倒すという暴挙に出始めたのである。

そしてついには天狗の館にまで乗り込んで暴れ始めたが、そこにいた一匹の妖獣が彼女を抑えて無事解決。

その際に館が半壊にまで追いやられたらしいが、今では噂が噂を呼んで詳しい被害まではわからない(2)。

〔目撃報告例〕

・酒を買いにやってきた。びくびくしていると笑いながら背中を叩いて帰っていった。

(酒屋)

彼女は種族云々をほぼ気にしない。よっぽどのがなければ怒

ったりはしない。むしろこちらから話しかければ喜んで話し出すだろう。

・人里で灰色の猫とじゃれついていた。猫好きなのだろうか。

(匿名)

その猫は恐らく妖獣だと思われる。本当にじゃれついているだけだろうが、彼女の力は見た目から想像出来ない程強い。巻き込まれると死にかねないので離れて見守ろう(3)。

・妖怪に襲われているところを助けられた。礼も言わずに逃げ帰ってきてしまった。

(匿名)

おそらく単なる気まぐれなので、気に病む必要は無いと思われる。

〔対策〕

彼女が人を襲ったという記録は無いが、それでも危険度は高い。大体のことは笑って見過ごす彼女ではあるが、万が一も有り得るので態度と発言には気をつけよう。

そしてその万が一が起き、彼女に敵意を向けられてしまった場合は、もうどうしようもない。怒らせないことを第一に考えよう。

1 とても柔らかく、すぐに破れてしまいそうだが、生半可な刃物では切断出来ない。

2 言うことを聞かない天狗の子供も、彼女の名前を聞くとピタリと泣き止んだと言う。

3 本当に。

無垢で無口な鬼娘

志妖      S i y o u

能力

：波動を生み出す程度の能力（生み出した波動を操る程度の能力）  
危険度

：高

人間友好度

：普通

主な活動場所

：妖怪の山

魅王桃鬼と共に幻想郷に残った鬼の一人。

身体はかなり細く、また額から伸びる一本角も細い。



魅王桃鬼と共に妖怪の山の洞窟に住んでおり、普段は彼女の身の回りの世話をしながら暮らしている。

基本的に無口だが口下手なわけではなく、その場に応じた的確な言葉を放つ。それゆえに冷たいイメージを持たれがちだが、本人はいたって温厚である。

酒を全く飲まない、戦闘も好まない、とあまり鬼らしくない（1）。

〔能力〕

波動を操る力を持つ。

だが、この能力にはまだまだ不可解な点が多く、またどこまでのことが出来るのか本人もわかっていない。が、声で物を破壊する、地面を踏み付けて地震を起こす、など使い様によっては危険な能力である。

〔この妖怪に纏わる逸話〕

：大爆発生存者

詳しくはわからないが、一万年以上昔に、想像を絶する大爆発がある地で起きたらしい。

その規模は大きく、幻想郷など簡単に消し飛んでしまう程のもの

であつたという。

彼女は、その大爆発に真正面からぶつかり、なおかつ生き残った猛者であるらしい。

一体どうやってそんな災害に打ち勝つたのか。真実を知るであろう者達はなぜかそのことを詳しく語ろうとしない（2）。

#### 〔目撃報告例〕

・この間、獣達と一緒にになって森の中で居眠りしてたよ。動物には好かれるんだねえ。

（魅王桃鬼）

彼女は鬼だが戦いを好まない。温厚な性格が動物にも伝わっているのかもしれない。

・話し掛けたら無言で睨まれた。怖くて逃げ出した。

（匿名）

単にどう返そうか迷っていただけだと思われる。

逃げても追つてはこないが、出来れば逃げずに踏み止まろう。安易に逃げ出すと彼女は傷付く（3）。

・最近良くくつついてくる。どうしたものか。

（灰色の妖獣）

知りません。

〔対策〕

身体が細く非力に見えるが、当然鬼なので力はある。更に能力も相まって非常に強力な妖怪なので、敵に回すのは止めておいた方がいい。

あと、案外傷付きやすい妖怪なので、接する時は良く考えて行動しよう。彼女の悲しげな顔はいろいろと危険である（4）。

1 少し失礼かもしれないが。

2 気になってもこの質問をするのは止めておいた方がいい。相手の機嫌を損ねる可能性がある。

3 心が。

4 主にこちらの心が。

能力

・感情を操る程度の能力

・命を分け与える程度の能力（命を感じ取る程度の能力）

危険度

・低

人間友好度

・高

主な活動場所

・何処でも

一万年以上生き続け、最早伝説と化している妖獣が彼、ミコトである。

一時期はこの幻想郷から姿を消していたが（1）、最近になってからまた姿を見せるようになった。尚、彼が姿を消していた理由は全くの不明で、本人に聞いても語ろうとはしない。しかし、彼が姿を消した時期と同じ時期に博麗大結界が張られていることから、この二つにはどこか関係があるのではないか（2）。

普段は自由気ままに行動しているらしく、基本的にどこにでも現れる（3）。が、どこに住んでいるかは全くの不明である。

友好関係は非常に広く、誰とても気軽に話す（4）。人里に自然に溶け込む、ある意味異質な妖怪である。

〔能力〕

感情を自在に操る能力を持つ。

これを使われると、相手はまず正常な思考ではいられなくなり、その気になれば相手の身体に触れずにその命を奪えると言う。まず相手にしたくない能力だ。

〔この妖怪に纏わる逸話〕

・黒猫異変

公表されていない異変で、吸血鬼異変のすぐ後に起きたとされている。

灰色であるはずの髪や瞳、果ては身につけている着物までが真っ暗に染まり、彼は何人かの妖怪を巻き込んで暴れ回った。

最後は博麗の巫女が場を収めて大事には至らなかったらしいが、下手をすれば幻想郷そのものが危なくなっていた、とのこと（5）。

〔目撃報告例〕

・店先にあるマタタビを大量に買っていくのを見たよ。猫ってマタタビに弱いんじゃないの？

（寺子屋の生徒）

彼ほど長く生きるとなるとか我慢出来るのかもしれない。もしくは、能力を使っているのだろう。

・怪我をしてうずくまっていたら、不思議な力で治してくれた。嬉しかったけど不思議だった。

(匿名)

彼の能力のひとつである。自らの命を分け与えているらしいが…

・花の妖精を眺めて微笑んでいた。でも、どこか哀しそうだった。

(花屋の娘)

なにか妖精の存在に思うところがあるのかもしれない。そっとしておこう。

〔対策〕

一般的な妖獣は本能的な行動をすることが多いが、彼は違う。何かこちら側からしてしまっただとしても、謝ればだいたいは許してくれるし、そうでなくとも危害を加えてくることはまずない(6)。

普段から仲良くしておけば、危険に陥った際に助けられるかもしれない。

だが、強さだけを見れば幻想郷でも屈指の実力者だ。そこは忘れないでおきたい。

- 1 その事実が伝説化に拍車をかけている。
- 2 そう聞くとはぐらかされた。それ以上は聞かなかったが、もしかしたら私の考えは間違っていないのかも。
- 3 この時点で伝説とは言えない。
- 4 私はよくからかわれるが。
- 5 彼が見境無く暴れれば、幻想郷はバランスが崩れて崩壊していたかもしれない。
- 6 よく人を驚かしたり、たまに切り付けたりするが、その後に謝りながら傷を治してくれる。

幻想郷縁起（後書き）

後に続々追加。



85：「紅霧／＼普通の白黒、しがない灰色」

ふと目が覚めると、世界が赤く染まっていた。

「…………いや。いやいやいや」

さすがにそれは無い。きつと夕々に外で寝たから寝ぼけているんだ。参った参った、風が気持ちいいからつてむやみに外で寝るものじゃないな。いくら慣れ親しんだ木の上とは言え、こんな強烈な寝ぼけを起こすとは…………。

そんなことを考えながら、ゴシゴシと目を擦る。ついでにひとつ欠伸をしてから、何の躊躇いもなく再度目を開く。

「…………いや、まあ…………予想はしてたけどさ」

思わず溜め息をついて肩を落とす。薄々感づいてはいたが、一体何がどうなればこんな現象が起きるのか。

灰色に戻った髪をくしゃくしゃと掻き乱し、眠っていた木から一度飛び降りる。何が起きているのかを確認するなら、まずは幻想郷全体を見るのが手っ取り早い。そう思った僕は、今いるこの場所妖怪の山の中腹辺りから、思い切り跳躍した。

そうして見た景色は、まあ、なんとというか。

とりあえず、ろくな状況ではないな、と確信できる程度には異常なものだった。なぜなら

「一寸先は闇…………いや、紅って感じかな」

幻想郷は、真っ赤な霧に余すところなく包まれていたのだか

「と、いうわけなんだけど」

「十中八九吸血鬼の仕業ね。範囲といい、色といい」

「吸血鬼……レミリア、っていったっけ。また凄いことやらかすなあ……」

「けれどまあ、そう心配することもないでしょう。きっと今頃霊夢が異変解決に動いてるはず」

珍しく朝から起きていた紫に赤い霧のことを伝えると、これまた呑気な答えが返ってきた。どれくらい呑気かと言えば、少なくとものんびりお茶を飲んでいくくらいには。

ちなみに藍は朝食の準備、橙はあの悪く言えば毒々しい色に酔っでぐったりとしている。それというのも、あの時偶然橙も妖怪の山にいて、フラフラしているところを僕が連れてきたわけなのだが。

「霊夢かあ……一人で大丈夫なのかな。あの館結構くせ者多いけど」「気になるなら行ってくればいいじゃない。スペルカードはあるんだから」

尚もお茶を飲みながらまったりと喋る紫。

確かに、スペルカードは霊夢から束で貰って何枚かは造ってある。実践で使えそうなのは、黒札（例の真つ黒なスペルカード）を含め

て五枚程。だが、黒札は霊夢や紫から使用を禁止されているので除外。もつとも、あんな危なかつしいスペルカードを使うつもりなどかけらもないのだが。桃鬼と志妖が見守る中、一度だけ使用してはみたが……事後の記憶が全く無く、満身創痍の二人からも絶対に使うなと釘をさされもしたし。

「……………じゃあ、暇潰しにでも」

「止めはしないわ。貴方も少し他のスペルカードに慣れた方がいいだろうし」

「紫のスペルカードに慣れてもいないのに……………」

僕の言葉に優越感たつぷりの笑みを見せる紫。くそ、いつか絶対弾幕で勝ってやる。

「その前にまともに飛べるようになることね」

「どうせまだ飛べませんよーだ」

我ながら子供っぽい捨て台詞を残し、紫の傍らに開かれたスキマに飛び込んだ。

「ふっふ」

予想通り空中に吐き出された僕は、瞬時に特製の妖力弾を造り出してそれに着地した。昔妹紅にバランスを崩すことは無いのか、と聞かれたことがあったが、もちろんバランスは崩れる。飛行方としては欠陥だらけ。役には立つがどうにも不便。それが僕の感想というか、実情である。

「それにしても……静かだな」

赤い霧に包まれた幻想郷は、不気味なまでに静まり返っている。辛うじて見える人里にも、人の姿は皆無。皆家の中に閉じこもっているのだろう。

「当然といえば当然か。普通の人間はこんな日に出歩きはしないだろうし」

「じゃあ、私はどうなるんだろうな」

「？」

突然かけられた声に、別段驚きもせず振り返る。そこにいたのは、箒に乗った一人の少女だった。

白と黒の二色で構成されたエプロンドレスに、随分と大きな黒帽子。そんな服を着た少女が、空飛ぶ箒に腰掛けている。僕の脳裏にはひとつの言葉が思い浮かんだ。

「魔法使い？」

「おお、よくわかったな。普通の魔法使い、霧雨魔理沙とは私のことだぜ。そういうアンタは化け猫とみた」

「その通り。長生きなだけのしがない妖獣さ。名前はミコトだ」

「……ククッ」

「……フッフ」

全く同時に含み笑いを零す僕等。なぜだろう、彼女とは気が合いそうな気がする。

「ところで、普通の魔法使いさん」

「魔理沙でいいぜ」

「次からそう呼ぶ。こんな良い日にどこへ行くつもりだったんだ？」

「冗談キツイぜ。どこをどう見ればこれが『良い日』になるんだ」

「言葉のあやさ。少なくとも、これを引き起こした本人にとっては最高の天気なんだろうさ」

呆れる魔理沙に、両手を上げて少し大袈裟に語ってみる。すると魔理沙は一瞬ポカンとして、すぐにクスクスと笑いを零した。帽子を目深に被って笑う姿は、赤い霧と相まってどこかミステリアスに見えた。

「道化だな、お前」

「これはひどい。結構真面目だったんだけど」

おどけて言つてやると、魔理沙は更に笑った。つられて僕も笑ってみれば、静かな空間に笑い声だけが響いて、なおさら不気味になつていく。

「ところで、ミコト」

「うん？」

「スペルカードは持ってるか？」

「ああ……一応ね」

「よし、なら話は決まった」

帽子を跳ね上げ、魔理沙は少し僕から距離を取る。今更だが、空飛ぶ箒って便利そうである。

「スペルカードは三枚でいいか？」

「いつの間に戦いに話が流れていた」

「私ははなからそのつもりだぜ。お前みたいな奴と戦ってみたかったんだ。悪いが、逃がすつもりはないぜ」

「随分気に入られたみたいで恐縮しちゃうよ。スペルカードは三枚で構わない」

「よし。フフツ、後悔させてやるよ」

「吹っかけてきたのはそっちだけだね」

言いながら、僕は背後に弾幕を展開。通常弾幕はスピード重視。先ずは、向こうのお手並み拝見と行こう。

「いくよ」

「痛そうな形してるぜ」

瞬間、僕の背後から風を切り裂いて弾幕が走る。

刹那、魔理沙が笑うのを僕は見た。ぞわりと背中に走る嫌な予感。気が付けば僕は空高く跳躍していて、

恋符「マスタースパーク」

その判断が間違いじゃなかったと、目の前の光景に思わず苦笑いしてしまった。

僕の直線的な弾幕を全て飲み込んだ巨大なレーザー。反射的に跳んでいなければ、開始二秒で僕は負けていただろう。まるで幽香のあのレーザー。死にはしないだろうが、当たりたくはない一撃である。

「避けると思つてたぜ！」  
「！！ つとお！」

背後から聞こえた声に反応して身をよじる。脇腹を掠っていく魔理沙の細い弾幕。

が、一度身をよじってしまったえば、空中で身動きができない僕は格好的になるわけであつて。

「チエックメイト、だぜ！」

高らかに叫んだ魔理沙は、手に持った小さな箱のようなものから、弾幕を打ち出すのだった。

が、しかし。

「あ、れ？」

「そう簡単に終わつてもつままないでしょうに」  
「うえ！？ い、いつの間に！」

僕はのんびりとした口調で、魔理沙の肩に乗つかったまま呟いた。別にルール上変化禁止とはなっていない。緊急回避として使えるのは紫との弾幕決闘で確認済みである。

なにせ体積が十何分の一にまで縮まるのだ。下手をすれば相手からは消えたようにも見えらるだろう。その隙に筭になんとか引つ掛かり、勝利を確信した魔理沙の肩に乗つかったわけである。まあ、筭に前脚が届かなければ、哀れ灰猫はひっそりと落ちていつていたわ

けなのだが。

「よっと」

ずっと肩に乗っている訳にもいかないので早々に離脱。先ほどのマスタースパークとやらで掻き消された妖力弾を新たに生み出し、人型に変化しそれに乗った。

同時に懐から一枚のスペルカードを取り出し、僕は紫との戦いで最早常套手段となった一枚を宣言する。

速符「灰色の風」

自らの通り名を模したスペルカード。

元から速い通常弾幕の密度を減らし、代わりに速度を馬鹿みたいに上げた超特化型弾幕。

縦三列、横三列に配置された一塊の弾幕が、放った本人も恐ろしいくらいの速さで飛んでいくのだ。

簡単に言えば大砲を猛スピードで放っているようなものだが、発動中ずっと全力で動いていれば当たることはない。当てることよりは、そのプレッシャーで相手を疲れさせることが目的と言える。

「……………っ！」

そして目論み通り、発動時間が終わる頃には、魔理沙の顔には若干の疲れが見えていた。そりゃあ次から次へと大砲地味な弾幕が猛スピードで飛んでくれば疲れもする。実は威力は底辺なんだけどね。

「さすがにちょっとばかり面食らったぜ……！　だが、まだまだ！」

魔符「スターダストレヴァリエ」



二枚目のスペルカード。

僕は一度前髪を思い切り掻き上げて体勢を整えた。霧のせいかはわからないが、髪が顔に張り付いて非常にうざったいのだ。

「これを避けられるか？」

不敵に笑う魔理沙を中心に、小さな星の形をした弾幕が現れた。弧を描くように並んだそれは、一列避けきっても間髪入れずにまた次の列が飛んでくる。

地上ならともかく、空中では間違っただたつてしまうことも充分有り得る。そう思った僕は、二枚目のカードを取り出した。

感符「喜怒哀楽四重奏」

僕を囲むように四つの球が現れる。それぞれ色は黄、赤、青、緑。寸前まで迫っていた星の弾幕は、赤色の球から吐き出される暴力的な弾幕で破壊された。

「さっきの言葉、そのまま返すよ」

ニヤリと笑った僕の周りで、四つの球が高速回転を始めた。

風切音がうるさい程に鳴り響き、湿った髪が風圧で舞い上がる。

そこで、魔理沙のスペルカードの効果が切れた。遠目からもわかる程度に悪態を付き、急いで三枚目のスペルカードを取り出す魔理沙だったが、それを待つほどお人よしでもない。

「チエックメイトだ」

既に魔理沙の四方を囲んでいた四色の弾幕が、一斉に彼女に襲い

掛かった。

「負けちゃった……」

「そんなに落ち込まなくても」

ボロボロになつた魔理沙を抱き抱えながら、落ちていった箒を歩いて捜す。

僕の弾幕に滅多打ちにされた魔理沙は、ぐったりした様子で呟いていた。

本当なら魔法で箒を呼ぶくらいは出来るらしいのだが、負けたシヨックとダメージでやる気が起きないんだそう。まさかそこの妖獣に負けるとは思ってなかったらしい。

「お前何者なんだよ。戦つてる最中は気付かなかつたけど、反則だぜそんな妖力」

「うーん……。空中で全力出しても無駄なだけだから」

隠しているつもりでは無かったのだが。こうして身体が触れた状態だと、僕の妖力が分かってしまうらしい。

「だいたい……ミコト、なんて妖獣見たことも聞いたこともない……」

「どうかした？」

「灰色の妖獣……ミコト……？ え、まさか……」

僕の腕の中で何やらぶつぶつと呟いている魔理沙。何やら思うところがあるらしい。

と、そこで。

「あ、あれじゃない？ 魔理沙の箒」  
「え？」

魔理沙を抱き抱えたまま跳躍。木の枝に引つ掛かっている箒を尻尾で掴み、なるべく優しく着地する。

「さて、立てる？」

「あ、ああ。めんどくさいから歩かなかっただけだぜ」

「……まあいいや。それなら大丈夫だろ。僕はもう行くよ」

「ま、待てー！」

「？」

妖力弾を造り出し、それに飛び乗ったところで呼び止められる。

「まさかとは思っけど……お前、もしかして！」

……どうやら僕の正体が今頃わかったらしい。まあ、百年程いなかっただ奴がいきなり目の前に現れたのだから、いくら資料が何かで知っていたとしても、気付くのは難しいだろう。

クスリと笑い、僕は最初と同じようにこう言った。

「なに、単なる長生きなだけの妖獣さ。普通の魔法使いさん」

呆気にとられている魔理沙を余所に、僕は空に向かって飛び上がるのだった。

85：「紅霧」普通の白黒、しがない灰色」（後書き）

原作通りには進みません。

86：「紅霧く解放された闇」

魔理沙と別れ、相も変わらず妖力弾に乗って移動を続ける僕。密かに空を飛ぶ特訓でも始めようかと考えながら、代わり映えのしない赤い霧を見て目を細めた。

どうにも気分がよろしくないが、多分この赤色のせいだろう。灰色が何を言つかと言われそうだが、全身真っ赤と全身灰色、どちらか選べと言われたら迷わずに後者を選ぶ。

「ん……動いたな」

小さく呟いて、更に目を細める。

元は霊夢のことが気になって出てきていた僕だったが、霊夢らしき命の気配はすでに見付けてある。

今の今まで一箇所に留まって飛び回っていたのだが……。

「参ったな……これじゃあ置いてかれる」

一箇所に留まっていたのは、おそらく弾幕決闘を行っていたせいだろう。先に進み始めたということは、霊夢が勝ったということだ。弾幕決闘の間に追い付いて、あわよくば霊夢に付いていく（肩にでも乗って）予定だったのだが……。

空を飛ぶスピードはあちらの方が格段に上、先に行かれてはどう考えても追い付けない。

「……走るか」

言いながら弾から飛び降り、落下の最中に脚に妖力を込めておく。別に飛んでいかなければならない理由は無し、走りならば余裕を持

って霊夢にも追い付ける。

そう考えているうちに地上に到達。膝を思い切り曲げて着地した僕は、歯を食いしばって思い切り前に跳んだ。

爆発音にも似た音が後ろで響き、凄まじい加速が僕の身体を圧迫、思い切り跳んだ故の爽快感を感じ、笑みを零しながら赤い霧の中を突き進む。

と、そこで。

「ん……？」

違和感を覚えたのと、その違和感が姿を現したのはほぼ同時。地面を削りながら着地した僕は、改めて辺りを見回した。

「何も見えない……」

そう。

あのうっとうしい赤い霧も、辛うじて見通せるような幻想郷の景色も、いきなり、真っ暗な闇に包まれていた。声は出さず、渴いた唇を舐めて目を閉じる。

過去に一度だけ、僕は同じような体験をしたことがあった。

そう考えた僕は、広く展開していた能力をこの近辺に集中すると同時に、すぐ背後に現れた気配に向けて爪を突き出した。

「キヤッ……！」

か細い声がして、辺りを覆っていた闇が霧散していく。途端に現れた赤い霧に顔をしかめながら振り返ると、そこには予想通りの妖怪の姿があった。

黒い服に赤いリボン、更には赤い瞳に黄色い髪。その姿に溜め息をつき、彼女の名を呼ぶ。

「ルーミア……いきなり何をするんだ」

闇を操る妖怪、ルーミア。

一度人間に化けていた時、本当に人間だと勘違いして襲い掛かってきたのが彼女との初対面だった。

その時に軽く捻ってやってからは、僕に襲い掛かってくることはなかったのだが。

もしかして早くもそのことを忘れたのだろうか、と思いながら、へたりこんで何も言わない彼女を眺めてみる。

ルーミアは、頭につけていた赤いリボン　おそらく僕の一撃で破れ、外れてしまったのだろう　を、その手に持ってじいっと見つめていた。

大事なものだったのだろうか。しかし、いきなり襲い掛かってくるお前も悪い。そう言おうとして彼女に歩み寄る。

「……………?」

が、一歩目を踏み出したところで違和感を感じた。

得体の知れない感覚に思わず辺りを見回すも、例の霧以外には何もおかしいところはない。ならば、この違和感は一体……?

足を踏み出したまま考え込む僕を余所に、ルーミアはリボンを投げ捨て、そしてゆっくりと立ち上がった。しばらく不気味に揺らいでいた身体だったが、不意にピタリと動きが止まり。



うなだれていた顔が上がった瞬間、僕は、全身の毛が逆立つような感覚に襲われていた。

「外してくれたのは、貴方ね」  
「……なるほど」

ルーミアから大量の妖力が溢れ出す。いつの間にか額に滲んでいた汗が、つうつと頬を伝わった。

違和感の正体。それは、他でもないルーミアから感じ取っていたことを理解する。

頭を掻きながら踏み出していた足を戻し、気圧されないように妖力を解放した。

赤い霧の中、ルーミアの瞳は更に赤い光を放っていた。笑みを見せる口元から覗く歯が、嫌に目につく。

「何が何だかわからないってところかしら」

「いや……大体は予想がついてるよ。大方、そこにあるリボンが封印になつていたのかな」

僕の言葉に大人びた笑いを零すルーミア。大妖怪独特の余裕を滲ませながら、彼女は僕を下から舐めるように見上げていた。

何かを観察するような視線に嫌悪感を感じながら、いつでも飛びのけるように少しだけ膝を曲げておく。

少しだけ感情を読み取ってみたが、正直あまり覗きたくないような心をしていた。波打つことのない真つ黒な水面下に、あまりに妖怪らしい感情が渦巻いている。まるでその真つ黒な水に足を突っ込んだかのようで、すぐに僕は読み取るのを止めていた。

「逃げないの？」

「理由が無いもので」  
「そう……なら」

至近距離で僕を見上げていたルーミアは、途中で言葉を切つてその身体に闇を纏い始めた。闇はルーミアをたやすく飲み込み、少しだけ膨張する。そして一度、生き物のように大きく鼓動を打つて

「ッ!!」

瞬間、闇から飛び出してきた『何か』が、僕の顔面に襲い掛かっていった。

間一髪、思い切り顔を横に振つてかわした僕は、頬に熱いものを感じながら飛びのいた。

綺麗に裂かれた頬から、思い出したかのように鮮血が吹き出す。

「あら、避けたの」

「なっ……!!」

異物が飛び出してきた闇から声がして、闇が溶けるように消えていく。そこから現れた人物の姿に思わず声を上げてしまう。

「ルーミア、か？」

「ええ。これが真の私。先代の博麗の巫女に封印されてああなたになっていただけ」

「いや、にしても……」

違いすぎるだろう、と続けようとして、頬の痛みから口を閉じた。今のルーミアの姿は、僕の知っているルーミアとはこれまた掛け離れている。身長が伸び、髪も腰まで下りていて、あのごか無邪

気な顔立ちはどこへやら、妖艶さすら感じさせる大人の顔立ち。  
……まあ、言ってしまうえば子供から大人になっただけの話なの  
が。

それにしても、先代の博麗……？

「先代に封印された？ でも、またなんで」

「別に？ 暇潰しに幻想郷を闇に落としてやっただけよ」

「どれくらいの間？」

「季節が一回りするくらい」

「……………」

「勘違いしないで。別に四六時中闇に落としてたわけじゃないわ。  
人間が死んだら困るもの、精々一日の半分くらいのもの」

「充分すぎるよ。そりゃ封印されるわ」

「そうかしら？」

駄目だ、子供ルーミアもそうだが、大人ルーミアもまた違う方向  
で話を通じない。一年間も定期的に光を奪ったらどうなるかわかる  
だろうに、全く悪びれる様子もなく話しているあたり質が悪い。

ルーミアは、片手に持った剣を軽く振るった。闇から突き出した  
のはあれだろう。妖力を解放している僕の肌をここまで綺麗に裂い  
てきた辺り、ただの剣ではなさそうだ。ちなみに普通の剣ならどん  
なに切られようとかすり傷程度で済む。無傷じゃ済まない辺りが僕  
らしい。

「で？ なんでいきなり襲い掛かってきたんだ？」

「そうね。久しぶりに解放されたから思い切り暴れ回りたいの……  
…。多分貴方を放っておいたらろくなことがなさそうだし、消して  
おこうかと思って」

「自分勝手な理由なこと。どっちにしろ僕は消されるわけだ」

「わかってるじゃない。……けど、貴方強そうだし、ルールを決め

ましようか」

「ルール？」

「ええ。私が勝ったら、貴方の存在諸々、私の自由にさせてもらうわ。逆に貴方が勝ったら、消滅させる以外なら、私の存在を好きにしてもいい。封印を再度かけるもよし、僕にするのもよし……もしそうなったら、貴方の言うことには従いましょう」

「……ちなみに僕が負けたとして、僕の扱いはどうなるんだ？」

「さあ？　もしかしたら、食べちゃうかもしれないわよ？」

ぺろりと赤い舌を覗かせるルーミア。

食べられるなど冗談ではないが、ここで僕が逃げてしまえばどうなるかわからない。最悪、この異変に紛れてさらなる混乱に幻想郷を陥れるかもしれない。そう考えると、僕が選べる道はひとつしか見当たらないわけだ。

「仕方ない……いいよ、その戦い、乗った」

「ウフフ、お手柔らかにね？　ああ、想像するだけで涎が出ちゃう。どうしましよう？」

「知るか」

吐き捨てるように言い、展開させた弾幕をルーミアに向けて射出。同時に地面を蹴って距離を取った。あまりルーミアの近くにいと、例の闇に捕まってしまうかもしれない。接近戦はむやみにしかけるべきではないだろう。幸い、ルーミアの闇はそこまで範囲が広くない。気をつけていれば、闇に吞まれることは。

「って、おいおいおい……！」

顔が引き攣っているのが自分でもわかる。

ルーミアとの距離は目算で三十メートルと言ったところ。本来な

らルーミアの闇は、本人を中心に広がって三メートルあるかないか……。

だがどうだ。目の前にあるこの巨大なドームは、僕を飲み込もうと凄まじい勢いでその勢力を拡げているではないか。

「そっいや、幻想郷を闇に落とした、なんて言ってたか……」

今更になって思い出す彼女の言葉。この状況は、予想しようと思えば予想できたではないか。ただ、たとえ予想できていたとしても、結果としてどうしようもできないのが悲しいところではあるのだが。なんて考えているうちに、僕の身体は闇に飲み込まれていた。が、特に焦りはしない。たとえ視界が奪われようと、僕にはルーミアの位置が手に取るようにわかるのだから。

「でも……そうだな……」

ルーミアには僕の能力を教えていない。ここからいきなり襲い掛かってやれば、それなりに驚かせることはできるだろうが……『それなり』じゃあ、つまらない。

ふと思いついた策にニヤリと笑った僕は、尻尾を揺らしながらルーミアの攻撃を待つことにした。

弾幕を軽く避けたルーミアは、あつという間に距離を取った相手を見て妖艶な笑みを浮かべていた。

妖獣にしては強力過ぎるまでの力もそうだが、何よりもあの『心の闇』が心地好い。

ぱつと見ではわからない、今のルーミアだからこそ感じ取れるその闇。闇を操るルーミアにはそれがとても心地好く、彼女の心を必要以上に逸らせる。

抑え切れない笑みを零しながら、彼女は自らを包む闇を勢い良く拡げていく。あつという間に辺り一面が闇に飲み込まれ、その中にミコトも含まれたと理解した瞬間に、彼女は得も言えぬ快感を覚えた。

闇の中は彼女のテリトリー。自らの体内と言ったら言い過ぎかもしれないが、闇の中に入ったものは既に手に入れたも同然。封印から解放された彼女は、闇の中でも視界を失うことはない。

今すぐ殺すのはもつたいたい。どうせなら、あの『心の闇』を心行くまで愛でてみたい。それからゆっくりと、舐めるように、少しずつ、私のモノにしてやろう。間違っただけ食べてしまつかもしれないが、それはそれで構わない。

ルーミアはそんなことを考えながら、期待に震える身体を抱きしめた。

闇に浮かぶ灰色。トロンとした瞳でその姿を眺め、溢れ出しそうな生唾をぐくりと飲み込む。すっかり欲情しきった身体が大きく跳ね上がり、一直線に灰色に向かっていった。

灰色は動かない。逃げる素振りも全く見せない。

当たり前だ、彼に私の姿は見えていないのだから。

彼女は彼の目の前で急停止した。

そして至近距離でその脚を、身体を、首を、顔をねっとり眺め、ゆっくりと彼の周りを一周する。ユラユラ揺れている尻尾が、彼女には不安げに揺れているように見えていた。

きつと必死に私の気配を探っているんだろう。私はこんなに近くにいるというのに。

ある種の優越感が、彼女の欲情をさらに深めていく。

彼女はおもむろに彼の肩に片手をかけて、チロリと出した舌で首筋をなぞった。ビクリと震える身体に彼女の目は光り、片手に持った剣を彼の腹に突き立てる。

「大丈夫……私が可愛がつてあげるから……」

言いながら、ズブズブと彼の身体に沈んでいく黒い刃。肉を裂き、骨をたやすく断つ感覚が彼女の手伝わる。

刃が根本まで沈み込むのに、さして時間はかからなかった。身体の向こう側に、血を滴らせている刃が見えている。

これだけでは不十分だと感じたのか、彼女はそこから思い切り刀を回転させた。横を向いていた刃が、グチグチと嫌な音を立てて回る。そしてそこから思い切り引き抜くと、その刃にはねっとり何かが付いてきた。

それを指で搦み取り、甘美の表情を浮かべながらその指をしゃぶるルーミア。

が、次の瞬間、ルーミアは信じられないものを見た。

「僕の身体……そんなに美味しいの？」

目の前の灰色が、とびっきりの笑顔でそんなことを言っていた。

これにはルーミアも驚いた。どてっ腹に剣を突き刺され、内臓をえぐられたというのに、彼は痛がる素振りをかけらも見せていない。ルーミアは自らの唾液にまみれた指を服に拭い、スツと横に動いた。彼には私が見えていない、視線が合ったのは真正面にいたからだ、と。

ミコトは真正面を向いたまま動かない。なんだ、焦らせないでちようだい。そう言おうとしたルーミアは、彼の目を見て凍り付いた。

彼の目が、しっかりとこちらを向いている

身体はおろか、首も動かしてはいない。だが目だけはしっかりとルーミアの姿を捉えている。

普通に見られるより数倍不気味に感じる視線に、ルーミアは迷わず剣を突き出した。一度目とは違う箇所につき刺さる剣を見て、これならと再度ミコトの顔を見る。

「！」

その表情を見て、ルーミアは心底ゾツとした。

苦痛に歪む表情が見れると思っていた。

ただのやせ我慢だと思っていた。



だがしかし、ルーミアのそんな願望にも似た考えは外れていて。

「それで終わり？」

無邪気な笑みが、ルーミアを見下ろしていた。

「う……あ……」

剣の柄を握っていた手から、少しずつ力が抜けていく。

ルーミアに、ひとつの。しかし強大な感情が込み上げてきていた。

「ねえ」

「うあっ、うわああああああ！！！！」

ミコトの声を皮切りに、ルーミアは狂ったように剣を振るい始めた。

妖怪の力で振るわれる剣は、瞬くまにミコトの身体を切り刻んでいく。次々に咲く真っ赤な花は、ミコトの身体はもちろん、ルーミアの身体にもその花びらを散らしていった。

しかし、どれだけ切ろうとミコトの笑みは揺らがない。

指が無くなり。

肩から先が落とされ。

片足が飛び。

胸が貫かれようと。

その笑みは、終わらない。

「うあああッ！！！！」

完全に恐怖に魅入られたルーミアは、その笑みをなんとか消そうとついに顔面に向けて刃を振り抜いた。

恐るべき速度で振り抜かれた刃は、ミコトの顔面、鼻の頭から上を消し飛ばした。

これならさすがに……。

今までに何度も浮かんだこの言葉。

だが、その期待は浮かんだ回数だけ裏切られてきた。

そして、それは今回も例外では無く。

「満足した？」

「……ア、ハ、……ハハ……」

もはや苦笑いしか出てこないルーミア。

ミコトは、顔が口だけになっても、笑いを止めなかったのだ。

ぺたりと、初めの時と同じように座り込むルーミア。

巨大な闇のドームが、瞬くまに消えていく。

そして、辺りがまた赤い霧に包まれ、闇が完全に消え去った時。

「やれやれ。少しばかり堪えたな」

そこには、まるで『無傷』の妖獣が立っていた。

「やれやれ。少しばかり堪えたな」

目の前で自分の身体解体ショーを見せられた僕は、少し枯れた声でそう言った。一度咳ばらいをして喉の調子を戻しておく。

目の前でへたりこんでいるルーミアを見て、多少やり過ぎたかとも思ったが……まあ、壊れてはいないようなのでよしとする。

「ルーミア、ルーミア？」

「アハ、ハ、ハ……」

「目を覚ませこら」

「痛っ！ ……あ、あれ？ 貴方！？」

無傷の僕を見て、途端に慌てだすルーミア。無理もない、先程まで目茶苦茶にしていた相手が無傷で出て来たら驚きもする。

動転している大人ルーミアの姿に苦笑しながら、僕は種明かしをすることにした。

「どう？ 化かされた気分は」

「化かされた……？ まさか、あれが幻だったって言うの……？」

「そう。お前はずっと、僕の幻を切り刻んでたってわけ」

「で、でも！ ……信じられないわ、確かにあれは……」

僕の言葉を信じたくないのか、少し必死に訴えてくるルーミア。

「お前が信じられなくても真実なの。僕の幻術を見破れなかったお前が悪い」

実際、したことと言えば闇に飲み込まれた後に接近してきたルーミアに結界幻術をかけ、僕もその中に入って自分の幻影を創り出したくらいのこと。まあ、ルーミアが僕の幻影だと気付かないように幻影に命を分け与えてはおいたが。

後は、少し離れた場所で幻影を操ってルーミアの様子を眺めていたくらいだ。ただし誤算だったのが、命を分け与えた幻影が予想外にリアルだったこと。おかげで二度と見たくない解体ショーを見る嵌めになってしまった。

「さて。まだやるかい？」

「……いいえ、止めておくわ。約束通り、私は貴方の言うことを聞きましょう」

割とあっさり引き下がったルーミアに拍子抜けする。そんなに怖かったかと思っただが、仕掛けた本人が言う言葉ではない。

「そう。じゃあ……とりあえずこの異変が終わるまで何もせず身を隠しておくこと。異変が終わったら、封印するかしないかを考えることにする」

「え？ 今すぐに封印しないの？」

「今すぐって言ったって、僕は封印云々の術はさっぱりなんだ。それに、別に封印しなくてもいいかな、くらいの考えだし」

「いいの？ 私が約束を破ってしまうことだって、あるかもしれないのに？」

「その時はその時だね。ただ考えることがどんなお仕置きにしようかに変わるだけだし。ルーミアだって、さっきみたいなこと何度も味わいたくはないでしょう？」

「う……二度とゴメンよ、あんな思い」

苦い表情で呟くルーミア。それを見て、僕は苦笑いした。

「とにかく。約束の内容は、勝った方が負けた方の存在を自由にする、ってものだったよね」

「わかったわよ。しばらくおとなしくしてるわ」

「ん、それでいい。もし何か面倒事起こしたら」

「だからわかってるわよって」

僕のしつこい確認に、ルーミアはそっぽを向いて闇を纏い始めた。少ししつこかったかな、と再度苦笑する。

「異変が終わったらまた来るから」

「ええ………待ってるわ」

その会話を最後に、ルーミアを包んだ闇はどこかへ言ってしまった。

とりあえずあれだけ言っておけば何もするまい。普段のルーミアならともかく、今のルーミアはそれなりに理性的である。

「にしても………」

一人になり、徐に首筋に手を当ててみる。ぬるりとした感触に身体を震わせ、慌てて着物でそれを拭いた。

「危なかったなあ………」

色々な意味で、だが。

86：「紅霧」解放された闇（後書き）

EXルーミアの設定はオリジナル。  
矛盾があれば、ご指摘ください。

87：「紅霧」こんなにも月が紅いから」

ルーミアの処遇をどうしようか考えながら進んでいると、赤い霧の向こうにさらに紅い館の姿が見えてきた。ちなみに霊夢の気配はすでにあそこの中。途中から「霊夢なら大丈夫だろ」と思ったので、今は割とのんびりと歩いている。

時折妖精やら何やらが飛ばしてくる弾幕をそれとなく避けながら、館に向けて歩を進めていく。空ならともかく、地上ならば当たる気はしない。

「おや……？ あれは……」

数分そうして歩いていると、やがて館の門にたどり着いていた。そこにいた一人の妖怪の姿に首を傾げ、歩みを止めずに近付いていく。

「ずいぶんとポロポロだね」

「おや、貴方は……」

壁に寄り掛かるようにして立っていた彼女は、僕を見るやいなやその姿勢を正した。武人特有の隙の無い立ち姿勢に少し感動しながら、彼女の前で立ち止まる。

「その様子だと、負けたみたいだね」

「アハハ、それはもう簡単に。新しい決闘は私には向いていないのかも知れません」

ところどころほつれたり破れたりしているチャイナ服をつまみながら笑う彼女　紅　美鈴。

武術に精通している彼女にとって、遠距離が主体となる弾幕決闘はネックとなる。強さそのものはかなりのもののだが、弾幕決闘ではその強さも半減してしまうのだろう。かくいう僕も、弾幕決闘は得意な方ではない。空飛べないし。

「その気持ちはわかるけど……美鈴、空飛べるよね」

「ええ、飛べますよ？　というか、ここでは飛べない妖怪の方が珍しいんじゃない」

「確かにね。飛べないと色々不便だし……」

「ですよねえ。でも飛ぶのって割と簡単ですし、そんなことで悩み必要もないでしょう」

その『割と簡単』が出来ない僕って一体何なんだろう。

そう思ったが、考えたら負けな気がしたので止めておく。空なんか飛べなくなつて……！

「あ、え？　まさか、ミコトさん……」

「……………」

顔に出ていたのか、美鈴に悟られてしまった。いいんだ、慰めなんて聞き飽きたからさ。

「ま、それはおいといて」

これ以上この話題を続かせるときすがにへこみそうになったので、無理矢理に話を変えることにした。だからその申し訳なさそうな顔を止めてくれ美鈴。

そんなことを考えながら、美鈴の後ろに立つ真つ赤な館を視界にいれる。どこと無く不穏な気配がするのは気のせいだろうか。



「霊夢は？」

「館の中ですが……、貴方もレミリア様に用が？」

「いや……」

歯切れの悪い答えを返し、再度館を眺める。

やはり、どうも嫌な予感がする。

どうしてかはわからない。だが、どうにも居心地が悪い。この赤い霧のせいかとも思ったが、それとはまた違う何かな気がしてならない。

「美鈴。館に住んでるのって何人？ 妖精メイド抜きで」

「紅魔館の住人、ですか？ そうですね……。主であるレミリア様に、メイド長である咲夜さん。それに魔法使いのパチュリー様と、その付き人の小悪魔が一人……後は、妹様ぐらいでしょうか」

「妹様？」

「ええ。レミリア様の妹、フランドール・スカーレット様。ある事情から滅多にその姿を見せることはありませんが」

しきりに揺れている僕の尻尾をチラ見しながら、美鈴はサラサラと答えた。その中の最後、妹様なる存在を頭に残しながら館に能力を集中させる。

その妹様以外には全員会ったことがあるので、気配だけでも誰かはわかる。

もし、僕の知らない強力な命の気配があれば、それは間違いなくその妹様であろう。レミリアの妹ならば吸血鬼であることは間違いない。吸血鬼程の強力な命を見逃す程、僕的能力は錆びれちゃいない。

そんなことを考えながら館の中を探っていくと。

「……見付けた」

「ハイツ!？」

「……………」

目を開くと、美鈴が伸ばしていた手を凄まじい勢いで引き戻していた。尻尾でも触ろうとしていたのだろう。

僕は別に怒るわけでもなく、不自然な笑い方をしている美鈴に質問する。

「美鈴。その妹様だけど……なんで、滅多に姿を見せないのか教えてくれないかな」

「……………なにか、知らなければならぬ理由でも？」

僕の質問に、途端に真面目な表情になる美鈴。

本来ならこんなことを聞くことはしない。美鈴がわざと言葉をばかしたのは、少なくとも簡単に人に話すような話ではないのだろう。

「……………質問を変えるよ。その妹様は、普段館の中を歩き回ったりしているかい？」

「……………いえ。館にあるひとつの部屋にいることがほとんどです」

「そうか……………なら美鈴。悪いけど館に入らせてもらおう」

言うが早いか、僕は門の壁を飛び越えた。僕の着地にひとつ遅れ、美鈴が隣に着地する。

「何。止めたつて無駄だよ」

「止めはしません。ですが、理由は聞かせて頂きます」

「……………嫌な予感がするんだよ。その妹様とやらは、ひとつの部屋から出たりしないんだろう? ならなんで、今この瞬間に『館の中を

歩き回って『いるんだ』

「……妹様が、部屋の外に？」

「そうさ。しかもその妹様、言っちゃあなただけどかなり危ない。あんな狂気を孕んだ感情……何をしでかすかわかったもんじゃありません」

僕はそう言うと、一息で館の入口まで跳んだ。ピリピリとした感覚が耳に走り、これはまずいなと扉を開け放つ。

もう妹様の存在から意識を外すことが出来なくなっている。

「文句なら後で聞く！ だから今は見逃してくれ！」

最後にそう美鈴に向けて叫ぶと、僕はレミリアの気配に向かって走り始めた。

「さて。じゃあ私はもう帰るわ。早くあのうざったい霧なんとかしなさいよ」

「わかってるわよ」

霊夢はそう言うと、開かれたテラスから飛び立っていった。

残されたレミリアは、咲夜が入れた紅茶を軽く口に含み、フウ、とひとつ息を吐く。

「大丈夫ですか、お嬢様」

「ええ、どうってことないわ。それより……」

紅茶のカップをカチャリと置いて、レミリアはテラスから空を見上げた。赤い霧は徐々にその色を失いつつあり、霧自体も少しずつ風に流されていつている。夜明けまでには、綺麗さっぱりと紅霧はその姿を消しているだろう。

「今日はこんなにも月が紅い……」

ポツリと呟くレミリアに、咲夜もつられて空を見上げた。そこには、霧など意にも介さずに、『紅く』輝く月の姿が。

「逃れられないこの運命さために、貴方はどう抗うのかしら」

月を見上げながら、レミリアは無表情でその翼を軽くはためかす。そして最後に、とある妖獣の名を小さく呟くと、彼女はテラスを後にした。

夜は、まだ始まったばかり



館に飛び込んだ僕を出迎えたのは、大量の妖精メイド達だった。なにやら非常に興奮しているようで、僕の姿を見て叫ぶわ逃げるわ弾幕撃つわ、とにかく大パニックである。

若干顔を引き攣らせながらも、身を屈めて弾幕をかい潜り、妖精メイド達の隙間を通り抜けていく。

「突撃したのはいいけど……なんで僕ここに来ただっけ……？」

最初は霊夢の事が気になり、様子見程度の気持ちでマヨヒガを出て来たはずなのだが……何をどこで間違ったのか、今では大パニックの館を走り回るはめになっている。

しかしここまで来たからには途中で帰るのも気に入らない。とにかくまずはレミリアのところまで行かなくては。

「じゅめんよっ」

トントントツ、とメイド達の肩を踏み台にして弾幕の嵐を乗り越えていく。しかし、一体何人のメイドを雇っているのか。見た限りじや正直数え切れない程の数がある。しかもそのほぼ全員が興奮状態、いろいろとうるさいので耳はパタリと倒している。

妖精が騒いでいる場所には何かと厄介事が多い。ということとはやはり、この館でも何かしらの騒ぎが起きているのだらう。普段から妖精メイドがこんな調子だったらやってられん。いらっしやいの意味で弾幕撃たれても嬉しくも何ともない。

「ええい面倒くさい、一旦隠れるか……」

どこからともなく沸いて来る妖精メイド達にだんだんと嫌気が差してきた僕は前後に弾幕を放ち、妖精達がキヤーキヤー騒いでいる隙にひとつの扉に手をかけた。勢いそのまま開け放ち、体を反転させて即座に扉を閉める。とりあえずは大丈夫か、と息を吐き、

「あら、珍しい客」

「っ！」

後ろから聞こえた声に、反射的に振り向いた。

そこには、慌てていた僕とは対照的に、落ち着いた様子で本を読んでいる一人の女性の姿があった。椅子に腰掛けて机に向かっている彼女は、視線を本に固定したままぴくりとも動かない。かと思えば、いきなり数回か細い咳をして、少し苦しげに息を吐いている。

長い紫色の髪が座っているせいで地面に触れている。それを見て、あれじゃあ毛先が傷むんじゃないか、なんていらぬ心配をしていたり。

「……………」

「……………」

そして訪れた沈黙。

僕は身構えた姿勢のまま彼女を見つめ続け、彼女も本から目を離さずに黙り込んでいる。

別に警戒しているわけではないのだけれど、動くタイミングを見失ってしまった為にこんな状況になってしまった。はて、どう反応するべきか。

「パチユリー様。この魔導書はどこに置けばいいんですか？」

「そのこの棚の三段目に隙間があるでしょう。そこに置いておいて」

「あ、そこですね。わかりました」

とりあえずこの体勢をやめてリラックスしようか。そんなことを考えていると、見覚えのある黒い羽を羽ばたかせながら一人の女性がやってきた。数冊の本を抱えたまま会話を交わすと、こちらもまた僕には目もくれずに指定された棚へと本を置きにいった。

そこでふと辺りを見回してみると、この部屋が予想外に大きい空間であることに気が付いた。大量の巨大本棚が並んでいる景色は壮観で、言うなれば巨大図書館といったところである。どう考えても館の外観からは想像できない規模の部屋だが、今は気にしないことにする。

二人の会話で若干場の空気が緩んだ気がしたので、僕は低く身構えていた姿勢を止めて普通に立った。同時に溜まっていた息が一気に吐き出され、途端に身体から力が抜ける。

そんな僕を、空中からじっと見つめている者が一人。

「……………?」

彼女は背中の中の羽を羽ばたかせながら、ゆっくりと小動物のように首を傾げた。その可愛らしい仕種につられ、こちらも同じように首を傾げてしまう。

それを見た彼女はパタパタとこちらに飛んできて、ふわりと床に降り立った。

「……………えっと」

「……………」

こちらが反応に困っている最中、彼女はじいっと僕の顔を見つめている。少し見上げてみたり、ちよつと横から見てみたり、時折耳を触ってみたり。

と、そこで。



「あつ」  
「？」

彼女の興味が右耳から左耳へとシフトした時に、不意に頭に過ぎるあるシーン。僕は前にも、彼女とこうして至近距離で顔を突き合わせたことがある。

そう、あれは確か。

「厨房でケーキつまみ食いしてた……」  
「!!!!!!」

僕がそう言った瞬間、左耳にあった彼女の手が勢いよく僕の口に当てられた。若干のけ反る程の威力を持った彼女の手は、僕の口を完全に抑えている。

「な、な、なぜそれを……ハッ！！　まさか、貴方はあの時の……」

ムグムグ言いながらとりあえず頷いておく。なんだ、やはり彼女も忘れかけていたみたいだ。

確かあの時は、僕が交渉を持ち掛けたすぐ後にあの魔法使いパチュリーがやってきて、後からやってきた妹紅と戦闘に入ったのだ。

そこまで思い出して、僕は彼女の手を口から引っぺがした。そういえば、彼女には礼を言う必要があるのだった。耳元に口を寄せ、小さな声で囁いておく。

「あの時はありがとう。おかげで迷わずにすんだよ」

「あ……」

ポン、と肩を軽く叩き、相変わらず本を読み耽っているパチュリーに視線を向ける。すると彼女はチラリとこちらを見ると、また数回咳をして本をパタリと閉じた。どうでもいいが、咳がむきゅんむきゅんと可愛らしい音をしている。本人は苦しいのだろうし、そう思うのは少し失礼な気もするが。

「こあ。これを右奥の棚の七段目に置いてきてちょうだい」

「……………」

「こあ」

「……………あ、はい。わかりました」

パチュリーの言葉に、ワンテンポ遅れて返事をする彼女。どこかふわふわした雰囲気のパチュリーから本を受け取り、上の空といった様子で本棚の陰へと消えていく。それを見たパチュリーは深く溜め息をついて、

「人のものを誘惑するのはやめてちょうだい」

「いや、そんなつもりは」

「だとしたらもっと質が悪いわね。一体何の用かしら」

小声ながら早口な口調で聞いてくる彼女に、僕はとりあえず今までの事情を話すことにした。まあ、事情と言う程のものではないと自分でも思っけれど。

「……………あの巫女ならとっくに帰ってるはずよ。レミイも負けを認め  
ていたみたいだし」

「うん。それはわかってる」

霊夢の気配が少し前にこの館から離れていったのは確認済みである。結局僕の心配は杞憂に終わったということだ。

「ただ、そうね……」

パチュリーは一度むきゅんと咳をすると、何か考え込みように黙り込んでしまった。どうやら、妹様の方はパチュリーもよくわかっていない様子。どうして今日になって部屋から出て館の中を歩き回っているのか。そもそも僕には、なぜその妹様が普段ひとつの部屋から出ようとしないのかわからないのだが。

「……そうね。貴方をレミイの場所まで送りましょう。仮にも姉妹なのだから、何か知っているでしょう」

「いいの？ でも一体どうやって……」

部屋の外に出れば、おそらく先程の二の舞になることつけあいである。正直、見た目病弱なパチュリーがああ嵐を乗り越えられるとは思えない。

「じつとしてなさい」

「あ、はい」

パチュリーに言われ、若干身体を固くする。するとパチュリーは普段よりも更に小声で更に早口に何かを唱え始める。正直何を言っているか全くわからないが、あれが呪文と言うものなのだろう。

「……………ん？」

と、そので。

僕の耳がピクリと動くのと、パチュリーの口がピタリと止まったのは全くの同時。

次の瞬間、見覚えのある一筋の光線が僕のすぐ背後を貫き。

「ようパチュリー。来てやったぜ」

「……来てほしいと言った覚えはないのだけれど」

これまた見覚えのある白黒の魔法使いが、部屋に新しい入口を作って飛び込んできた。

部屋に風穴を空けられたパチュリーはもちろん、その破天荒な登場の仕方に僕までも大きな溜め息をついた。危うく吹き飛ばところだった、と背中にピタリとくっつけた尻尾をフリリと揺らす。

魔理沙は瓦礫の上に着地すると、エプロンドレスを翻しながら僕の目の前にぴよんと移動する。

「なんだ、ミコトじゃないか。お前も本を借りにきたのか？」

「生憎僕は普通の妖獣。魔法の本は読めないよ」

そりゃそうか、と笑う魔理沙。いや、笑う前にパチュリーに謝ろうよ。

そう言おうとして、魔理沙の身体を見て口を閉じた。何やら細かい糸のようなものが何十にも重なり、魔理沙の周りをクルクルと回っている。と、気が付けば僕の周りにも同じものが。

「ちょ、パチュリー！ どこに送るつもりだ！」

「悪いけどあなたの相手をしている暇は無いの。そこの彼と仲良く話でもしてなさい」

舞い上がった埃に明らかな嫌悪感を見せながら、パチュリーは魔理沙を睨みつけた。その不機嫌オーラに、魔理沙は思わず身を引い

てしまう。

「わ、悪かったって。今度からもう少し威力下げるか」

「ら」

「へえ、これが転位魔法ってやつか」

凄まじく不自然な一音を発している魔理沙を無視し、素直な感想を口にした。まるで映画のシーンが切り替わったかのように視界が変わったのだ。その不思議な感覚に息を吐くと、いつの間にか目の前にあるナイフを、そしてそれを持っている人物に目を向けた。

「手荒い歓迎どうも」

「……………」

僕の言葉に、無言のままナイフを突き付けてくる咲夜。少し警戒されすぎな気がするが、やはり吸血鬼異変のアレが原因なのだろうか。

そんなことを考えていると、不意に魔理沙が僕の耳に口を寄せて、

「こいつクールな顔して猫苦手なんだ。特にお前みたいな灰色の猫」

「……………」

ピクリと咲夜の身体が動く。耳元で話してはいるが、魔理沙の声は普通に大きなもので、わざと咲夜に聞こえるように話しているみたいだ。

「この間なんか、人里に来た時に」

「黙りなさい」

トン、と魔理沙の足元にナイフが突き刺さる。それを見た魔理沙はべつと舌を出すですぐに口を閉じ、後で話してやるぜと耳元で小さく囁いてきた。

床に刺さっていたナイフが一瞬で咲夜の手に戻り、今度は両手に数本のナイフが現れる。

「なあミニスカメイド長」

「何よ」

「やるならやるで構わんが、お前の主は大してやる気なさそうだぜ？」

いいのかよ？ と魔理沙が言うと、咲夜の後ろにいたレミリアが立ち上がるのが見えた。身の丈に合わない大きな羽を動かしながら歩みを進め、咲夜の隣で立ち止まる。そこでようやく、彼女の口が開く。

「咲夜。やめなさい」

「ですが」

「二度は言わないわ」

「……………わかりました」

少ないやり取りであっさり咲夜を抑えると、レミリアは僕をまじ

まじと見つめはじめた。深紅の瞳が僕の灰色の瞳を捉え、しばらくの間見つめ合う。

誰も口を開かず、無音の空間が僕の心を圧迫する。一体どういうつもりなのか。こちらが質問する側のはずなのに、僕の口は動かない。

それだけ、レミリアの発するプレッシャーは大きかった。

「……貴方は、運命って信じるかしら？」  
「え？」

急にレミリアの口から放たれた質問。  
いきなりなんだと思いつつも、とりあえず答えることにする。

「運命か……。半々、つてところかな。運命の存在を否定はしないけど、信じるかと聞かれれば微妙なところ」

実際、これは運命かと思う出来事もあれば、こんな運命あつてたまるかと思うこともある。信じたい時もあれば信じたくない時もある。そんな僕は、言ってしまうえば自分勝手なのかもしれない。

僕の答にレミリアは、そう、と頷くとふらりと首を傾けた。

口元には微かな笑みを浮かべていて、それ故にどこか不穏な気配を放っていた。

そして、彼女が次に放った言葉は。

「なら……貴方がこれから死ぬ運命たのみだとしたら……貴方はどうするのかしら？」

「……何が言いたい」

一瞬時が止まったような感覚に陥るも、なんとか持ち直してそれだけ言う。レミリアはそんな僕を見てさらに笑みを深め、

「言葉の通りよ。……何故貴方はこの館に来たのかしら？ 異変があったから？ ただ単に暇だったから？ それとも気まぐれに訪れてみただけ？ 何であれ、結果として貴方はここにいる。途中で帰ることも出来たでしょうに、今、貴方は、私の目の前にいる」  
「……………」

「もしこれが、ひとつの定められた『運命』だとしたら？ 避けることができないう運命』だとしたら？ ……それと同じように、これから死ぬ『運命』が、貴方にあるとしたら？」

レミリアの言葉は止まらない。その小さな口から、次々と『運命』という単語が飛び出してくる。その単語を聞く度に、僕の心臓は早く、強く、高ぶっていく。

「どうしてここに来たの？ どうして引き返さなかったの？ どう



して帰らなかったの？ どうして、私の前に現れたの？」

「……………さあ、どうし」

「それが、運命だったから。館に来たのも、引き返さなかったのも、帰らなかったのも私の前に現れたのも全て運命だったから。そして、これから死ぬのも、運命として貴方に定められている」

抑揚の消えた変わらない口調で、僕を追い詰めるようにレミリアは喋り続ける。

なぜここに来たのか？

……………霊夢のことが気になったから。

なぜ引き返さなかったのか？

……………異変が終わっていないなかったから。

なぜ帰ろうとしなかったのか？

……………。

なぜ、何故、なぜ。レミリアの言葉が頭の中を走り回り、その他の思考を停止させる。

「お、おい」

僕の横にいた魔理沙が、トントンと肩を叩いてくる。レミリアの瞳から目を離せずにいる僕は、そこでようやく何かから解放されていた。

いつの間にか止まっていた息を整えながら、魔理沙の方を見る。

すると、魔理沙は引き攣った表情で後ろを指差してい

「お姉様？ 新しい遊び相手ってまだ来てないの？」

瞬間、僕は固まった。

この気配。僕が館に飛び込んだ理由のひとつ。  
レミリアは固まった僕を見て、更に深い笑みを浮かべると

「ここにいるわ。沢山遊んでもらいなさい、フラン」

そう言って、咲夜と共にその場から消えていった。

「もう、捜したんだから。さっ、私と一緒に遊びましょ？」

88：「紅月」『運命』(後書き)

最近少し不調気味……。

どこか違和感があればお教え下さい。

一体僕が何をしたというのか。

これまでに僕が起こした行動全てが、本当に『運命』とやらに定められていたとして。

その『運命』が、僕の死を絶対のものと決定付けていたとして。だとしたら『運命』よ。ここで僕が死ぬことに、何の意味があるのか。

ここで死ぬことが僕のサダメだと言うのなら、どうして僕は今の今まで生きている。ここで死ぬ為に今まで生きてきたと言うのなら、ここで死ぬ為に生きていたと言うのなら。

「冗談じゃない……」

そんな、馬鹿げた話があつてたまるか。

何の理由も無く、何の意図も無く、ただそういつ『運命』だから。だから貴方は死ぬべきなのよ、なんて。

そんなことを言われてハイそうですかと言える程、僕は人ができちゃあいない。

ならばどうする。

「……決まってる」  
「？」

自分の問いに自分で返し、そんな僕を怪訝そうに横目で見ている

魔理沙に身体を向けた。いきなり視線を向けられた魔理沙は、ビク  
リと身体を震わせて驚いている。

「決めた。運命が僕を殺そうとしてるなら、それに真っ正面からぶ  
つかってやる」

開き直りにも似た僕の言葉に、魔理沙は一瞬キョトンとして、し  
かしすぐにククツと笑った。最初に会った時のように帽子を深く被  
り、小さな声で一言、付き合ってやるぜ、とだけ呟く。

それを聞き取った僕は彼女と同じように笑い、律儀にも待つてく  
れていた妹様に声をかけた。

「さあ、待たせたね」

「あら、もういいの？」

僕の言葉に、その可愛らしい口元を裂けたように横に開いていく  
妹様。そこから覗く鋭い歯が鈍く光り、強烈で、なおかつどこか異  
質な妖気が僕等を包み込む。

「お前といると退屈しないぜ」

「褒め言葉として受けとっておこう」

目の前でその数を増やしていくカラフルな弾幕。背景が赤なだけ  
に無駄にその色が映え、逆に赤い弾は驚く程に見えにくい。

この分では正規の弾幕決闘のルールは通じないだろう。どちらか  
が動けなくなるまでこの戦いは続けられる。

つまるところ、昔のような殺し合いだ。

「魔理沙」

「そっくりそのままお返しするぜ」

死ぬなよ、と月並みのセリフを言う前に返されてしまう。これでは会話が成立しないではないか。

そんなことを考えていると、どうやら完成したらしい弾幕を背後に携えた妹様が口を開いた。同時に身構える魔理沙と僕。

「……簡単に壊れないでね？」

その真つ赤な舌で自らの指をチロリと舐めた彼女は、楽しみを押し殺したような声でそう言った。背中の特異な羽がゆっくりと動き、その身体がフワリと浮かび上がる。

そして、数メートル程浮かび上がったところで、ゾワリと全身を何かが走った。

「アハハハハハハハハハハ！！！！」

「散れ！！」

「おう！！」

突然の発狂じみた笑いと共に、背後の弾幕が四方八方に飛び散っていた。

魔理沙とは逆方向に跳んだ僕は、壁に着地すると同時に妖力を解放した。迫りくる弾幕を皮一枚で避け、更に壁を駆け上がったいくちらりと見えた白黒の影は、凄まじく細かい動きで弾幕を避けていた。筈を操っているとは思えない程の複雑な動きに感心していると、いつの間にか弾幕に周りを囲まれていることに気付く。

「くそっ」

瞬時に結界を張るも、一発で粉々に砕け散る結界に舌打ちする。咄嗟に張っただけの結界とはいえ、なんだこの馬鹿げた威力は。

なんて悪態をついている内にまたもや弾幕に囲まれる。

さすがに危険だと感じた僕は、猫の姿に変化して床へと降りた。体積が縮まったことで回避ルートが広まり、その中をぐぐり抜けて魔理沙の元へと向かう。

この姿だと弾幕が非常に大きく見えてぶつちやけ怖い。何とか魔理沙の元へと辿り着いた僕は、猫の姿のまま叫んだ。

「魔理沙！ 正直避けきれん、助けてくれ！」

「はあ！？ お前私のスペカ普通に避けてたじゃんか！」

「普通に避けたのは初っ端のレーザーだけ！ 頼む！」

「~~~~っ！ 手のかかる猫だぜ全く！」

言いながら地面スレスレの飛行に切り替えた魔理沙は、それでも軽やかに弾幕を避けながら僕を拾って肩に乗せた。しっかり捕まってるよ！ と力強く言ってくれた魔理沙がものすごく頼もしい。

「アハハッ！ すごいすごい！」

笑いながら更に弾幕を放つ妹様。僕はそんな中、ふととあることを思い付いた。

「魔理沙。ちょっと」

「ん！？ なんだ！」

激しくなった弾幕を避けながら、魔理沙は気持ち僕に顔を寄せて僕の言葉に耳を傾けた。

僕が言葉を言い終えると、魔理沙の表情が少し楽しげなものに変わる。

「いいぜ。やってみろ」

「それじゃあ失礼して」

普通の猫より長い二本の尻尾を下げ、箒の柄に巻き付ける。そしてそこから。

「おお！？」

瞬間、魔理沙の声が幾分高くなり、箒のスピードが上がるのを感じた。どうやら成功したみたいだ。

「どっ？」

「すごいぜ、スピード出しても余裕でコントロール出来る！ これならいくらだって避けられるぜ！」

魔理沙の楽しそうな声を聞き、上手くいったかとほくそ笑む。

命を分け与える程度の能力。



この能力は、読んで字の如く自らの命　生命力を分け与えることが出来る能力である。

元は僕の能力ではなく、僕の中にいる『彼女』の能力。それゆえにイマイチ使い方が分からず、少し前までは宝の持ち腐れになっていたのだが、今は違う。

他者に命を分け与えて傷を癒したり、妖力と同じ要領で爪に生命力を流し込み、成長を促して限界以上に長くしたり。最近では結界にも応用出来ることもわかった。

そしてこの能力。実は生物以外にも命を分け与えることが出来る。細かいことはよく分からないが、無機物等の、所謂『生きていないもの』にも、この能力は使用出来るのだ。

今行ったのは正にそれ。魔理沙の筈に命を分け与え、その機動性を強化したというわけだ。

「へえ……」

危なげなく弾幕を避けていく魔理沙に、フランドールは更にその笑みを強くした。子供のような無垢な笑顔のはずなのに……いや、それゆえに、僕と魔理沙は彼女に対して更に警戒を強めていた。

一言で表すならば、『危ない』。本能レベルでそう思わせるなにかが、彼女にはある。長期戦は望ましくない。

「シッ！」

「あっ、おい！」

弾幕の嵐の中、直線でフランドールへと繋がるルートを見た僕は、瞬時に人化して魔理沙の肩から跳んだ。同時に懐から一枚のカードを取り出し、その名を宣言する。



その灼熱の刃が、一直線に突き進む僕の身体を飲み込んだ。

「言わんこつちやないぜ……」

呆れたように呟いた魔理沙だったが、その表情は苦いものだった。魔理沙とミコトは今日出会ったばかりだが、少なくとも悪い奴ではないと、多分だが、仲良くなれる気がすると彼女は考えていたのだ。

そう思っていた相手が、今、目の前で炎の剣に飲み込まれた。良い気分ではられないはずがない。

「なんだ、もう壊れちゃった」

「……………！」

炎に包まれた何かが、無惨にもぼつぼつと音を立てて落ちていく。

間もなくどしやりと音がして、そこでも魔理沙は顔をしかめていた。

「次はアナタ？」

燃えて壊れた玩具にはもう興味が無いのか、フランドールは次の玩具に視線を向ける。

その、良くも悪くも純粋な視線に、魔理沙は少したじろいだ。が、帽子の陰、強い瞳で睨み返す。

今は揺らいでいる場合じゃない。油断したら、やられる。

弾幕決闘とは違う命懸けの戦い。魔法使いとはいえ、ただの人間である魔理沙が吸血鬼の一撃を食らえば、それだけで命に関わる大惨事になるだろう。

しかし魔理沙は逃げ出さない。自分が置かれている状況を理解してなお、彼女は戦おうと意思を固める。

普段の彼女なら、とっくに戦線離脱していてもおかしくはない。なぜなら、意味が無いから。ここでフランドールと戦っても、リスクばかりで魔理沙にはひとつも得が無い。ハイリスク『ノー』リタインの選択肢があったとして、誰がそれを選ぶと言うのか。

「わっかんないなあ」

なおも楽しげに笑うフランドールに、魔理沙は口元に笑みを浮かべながら右手を掲げた。その手には、魔理沙が愛用している小さな火炉が。

その体勢で、少しだけ魔理沙は下を見るようにうなだれる。その延長線上には、今なお炎に包まれている誰かさんの姿。

「なんでこんなこと、してるんだらうなあ」

ギリツ、と。

笑みを浮かべていた口元から、鈍い音が響く。  
同時に、右手に集まっていたいく光の粒子。紅い館には似合わない、  
きらびやかな光が火炉の周りに陣を敷いていく。

「なんでか知らんが……」

魔理沙の目の前に現れる、一枚のカードの姿。

彼女はそれを握り潰す勢いで掴み取り、左手で空へと掲げ、そして叫んだ。

「腹が立ってしょうがないんだぜ！！ 吸血鬼さんよあ！！！！」

恋符「マスタースパーク」

完全に笑みが消えた魔理沙の右手から、巨大なレーザーが放たれた。

89：「紅月〜フランドール・スカーレット」(後書き)

久々の更新になってしまいました。

社会人って大変です。

ですが、頑張って更新していきますので応援よろしくお願いします！

ちなみに、そろそろ300万PVと5000ポイントを越えそうなので、お礼の意味も込めてまた番外を書こうと思っています。

このオリキャラの話が見たい！なんて意見があればどうぞ。沢山の意見があれば多数決で決めたいと思っていますので。

では。

## 90：「紅月〜ユメマボロシ」

「ちっ……せつかくの服が台なしだぜ」

「すごいすごい！ 今のを避け切るなんて！」

擦れてボロボロになったスカートをつまみながら荒い息をしている魔理沙に、フランドールは楽しげに手を叩いていた。

先程まで地獄のような嵐を死に物狂いで避けていた魔理沙にとって、その笑顔は決して良いものには映らない。笑っている内はまだまだお遊び、それがわかっている魔理沙は、悔しげに歯を噛んで息を整えていく。

「しかし、箒に乗って息が乱れるのもおかしな話だな」

魔理沙はぽつりと呟き、箒の柄を気持ち握り締めた。

彼女は今の今まで、掠りはすれども一撃も弾幕に当たっていない。それは彼女の優れた反射神経と動態視力、そして強化されたこの箒があるからこそその結果。もし箒がミコトによって強化されていなかったら……。魔理沙の頭にそんな考えが過ぎり、しかし頭を振ってそれを振り払う。

今そんなことを考えて何になると言うのか。幸い箒の機動力は落ちていない。今のままなら、勝つことは出来ずとも、勝負を長引かせることぐらいなら出来る。

「勝ちを捨てた戦いか……。全く、私らしくないにも程があるぜ。でも……」

魔理沙は帽子を目深に被り、身体から煙を立てながら、しかしび

くりとも動かない彼の姿を視界に入れた。

炎に飲み込まれ、燃え盛りながら地面に落ちていく姿を見た時。

魔理沙は一瞬、けれど本気で最悪の結果を想像していた。実際、今になっても彼はぴくりとも動かない。

だが。

「今度はこっちから行かせてもらっぜー!!」

普段より数段上のスピードで、魔理沙はフランドールに接近していく。

迎え撃つように放たれた真つ赤な弾幕を、箒の先を少し傾げるだけで容易にかわす魔理沙。後ろ脚で軽く柄を蹴ると、箒の先端がカクンと真下を向いた。そのまま地面へと直下していく魔理沙。

魔理沙は考える。

本当にミコトがあの一撃でやられていたとして。

動けないほどの、あるいは意識を失うほどのダメージを負っていたとして。

何故、この箒は機動力を失わない？

「背中がお留守だぜ」

「えっ？」

地面に向かっていたはずの魔理沙は、フランドールの背後で火炉



を構えていた。フランドールが振り向くと同時に放たれる弾幕が、フランドールの髪を数本散らす。

ミコトがもし、その命を失っていたならば、箒の機動力は当然ながら落ちているはず。それと同じように、指一本動かせないようなダメージの中、これだけの補助を続けることが出来るのか。

故に魔理沙は、勝ちを捨てても希望は捨てない。

箒の補助が切れていないから、ミコトはまだ生きているんだ。彼女はそう思って、そう信じて、戦いを止めないのだ。

「……………痛い」

頬に現れた一筋の傷。フランドールはそれに手を当ててそう呟いていた。

その呟きを聞いて、魔理沙は箒の先を少し引いて動きを止める。

「痛い……………これが、痛い……………そう、痛いって、これのこと……………」  
「……………?」

打って変わって抑揚を無くしたフランドールの声。まるで何かを確かめているかのように、頬から流れる血を撫でている。

その様子を、魔理沙は警戒しながらもただ眺めていた。先程までとはまた違った異様さに、動きを止めてしまっている。

と、次の瞬間。

「ッ!?!?!?」

ビシッ！と、まるで空気にヒビが入ったかのような音。

それを聞いた魔理沙は、反射的にその場から離脱していた。その行動を起こさせたのは、理性や判断の良さなどではなく、ただ純粹な『恐怖』。

館の少ない窓を突き破り、ガラスで肌に傷をつけながら、しかし魔理沙はただひたすらにフランドルの傍から逃げ出した。

そして響いた轟音に、正気を取り戻した魔理沙は振り返る。

「な……………」

その光景は、まさに地獄。微かに見えていた希望を掻き消すような、無慈悲な弾幕の嵐。一発一発が凄まじい威力の弾が、真紅の壁となって魔理沙に襲いかかる。

「くっ……………」

それを見て、魔理沙は筭を握っていた手から力を抜いた。

この状況で、どこの誰が希望を抱いたままでいられるというのか。普通の人間ならば、絶望すら感じないまま死に追いやられてしまうだろう。

だが。

恋符「マスタースパーク」

真紅の壁を貫く、光の一線。くるくると、白黒の帽子が回転しながら落ちていく。

本日三発目となるマスタースパークを放った魔理沙は、その金色の髪を振り乱して大きく息を吸い込んだ。

「普通の人間なら、とっくの昔に諦めてるかもしれないがな」

壁の先にいた、強大な敵を睨みつける。

「生憎私は、普通の人間なんかじゃない」

そして、叫んだ。

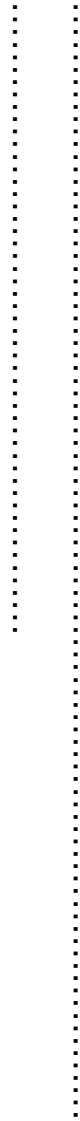
「私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙だ！ 諦めの悪さは筋金入りだぜ！...」

彼女の希望は、絶望などでは消えやしない。

朱。

紅。

赤。



それしか、視界に入らない。

おかしいな。

私は、戦ってたんじゃないか。

身体が、動かない。

いつ、私は倒れた。いつから、私は倒れている。

わからない。

わからない。

何もかも、わからない。

「  
」

？

真っ赤な視界の隅に移る、何か。

「これくらいでいいかなあ」

満足げに呟いたのは、私と戦っていたはずの吸血鬼。

おかしいな。私は、紛いなりにも戦い続けていたはずなんだが。

なのに、なぜ。

「気分はどお？ アハハツ、人間って壊したらこうなるんだねっ」

なぜ、私はコイツに×××××されている。

おかしいじゃないか。私は確かに、先程までコイツと戦っていたじゃないか。

それとも、夢だった？ 余りにも力が違い過ぎて、開始早々ぶっ飛ばされて。

それを受け入れなくなかった私は、あんな夢を見てしまっていたと？

「……へえ、こんなにグチャグチャしてても動けるんだ」

声が出ない。

聞こえるのに、出せない。

なんだよ、コレ。

なんなんだよ、コレ。

「うん？ なあに？」

腹に手を突っ込まれながら、私は手を伸ばした。

赤を通り越して黒くすらなってきた視界の中、夢から覚めた私は力の限り手を伸ばす。

喉からは細くなった息しか出ない。

自分が何でこうなったのかもわからない。

自分が何で手を伸ばしているのかもわからない。

ただ、なんとなく。

この手を伸ばせば、誰かが掴んでくれるんじゃないかと思っただけで。

「  
」

あれ？

「  
」

ハハ、とうとうおかしくなったみたいだぜ。

アイツは、それこそ最初に炎に包まれていたはずだ。

だから、こんなことはありえない。



「……………」

アイツが、こんなに悲しそうな顔で、けれど私の手をしっかりと掴んでくれながら。

「魔理沙……………」

私の名前を、呼んでいるなんてことは。

でも、こんな夢なら、悪くない。

ああでも。

どうせならコイツが私の怪我を完璧に治してくれて、しかも吸血鬼に勝っちゃうような夢も見たい。

夢なんだから、それくらいは許されるだろうしな。

「これだけの傷を癒すとなると……あの方法しかないか」

なんだ、本当に治してくれるのか。サービスいいな、この夢。

「…………死ぬよりはマシだと思って欲しいな。だから、怒らないでね」

何を言っているんだか。

こんな、腹に穴を開けられて、中の具がグチャグチャに掻き混ぜられた状況から生き残れるなら。

感謝はするが、怒りなんてしない。

「……そっか。わかった」

そして重なる、私とアイツの唇。

流し込まれる、なんだかわからないけどとっても熱くて甘いモノ………って！

「い、いきなり何を……」  
「あぐっ……」

いきなり突き飛ばされ、尻餅をついて顔をしかめる。  
目の前には、顔を真っ赤にして自分を抱きしめている魔理沙の姿。

「た、確かに生き残れるならって思ったけど！ 怒らないって思ったけど！」

「……………うん。まあ、その……………」

パニックに陥っている魔理沙。致し方ない反応だとは思う。

だが、あれだけの傷を癒すには、ただ能力を使うだけではどうにも無理があった。

しかし、分け与える方法として身体の一部を触れさせる方法があり、その中でも最も効率が良く、より深く命を送り込める部分がある。

それが、口。いわゆるマウストゥーマウスというやつである。

「あ、れ……………私……………」

魔理沙も、自分が回復していることに気が付いてパニックから脱出していた。このぶんなら、もう心配あるまい。

あとは……………。

「ッ！！」

「わあっ！！」

瞬間、部屋に響き渡る甲高い音。

魔理沙に襲い掛かっていた爪を、同じく爪で受け止めた僕は、魔理沙を抱き抱えてフランドールを蹴り上げた。

「問題は、コイツだな」

「ちよっ、ニコト！？ 何が何だかさっぱりだぜ！？」

「ああ、後で説明するから」

言いながら魔理沙を地面に降ろし、即座に結界を彼女の周りに張る。命を分け与えた特別版だ、簡単には壊れたりしまい。

「さっき、殺したはずなのに」

「残念。生きてるからここにいます」

フランドールの言葉に軽く返し、僕は妖力を解放した。遠慮無し  
の全力解放、館がギンギシと鳴いている。

それを見たフランドールは、一瞬驚いたように目を見開き

「……………くふふっ」

悪魔のように、笑うのだった。

90：「紅月〜ユメマボロシ」（後書き）

はい、作者ワールド全開な話でした。

ですが、次回も作者ワールドは続きます。

苦情は受けませんので、あしからず（笑）。

91：「紅月く狂気に埋もれた感情」

さて、魔理沙を前線から離すことが出来たのはいいんだけど……。

「あなたみたいな人初めてかも……。ね、もつと遊ぼうよ」

目の前で不敵な笑みを浮かべている妹様。流れ込んで来る感情はどうにも楽しげであり好戦的で、いまいち戦う理由が無いこちらとしては、少し困りものである。

確かに先程はこちらからも攻撃を仕掛けたが、考えてみれば僕が戦うと決めた相手は妹様ではなく、レミリアが言う『運命』なわけだ。

「参ったなあ……」

「なにが？」

「いや、君のお姉さんがさ？　僕が死ぬ『運命』にある、なんて言うもんだから」

「お姉様が？　ふうん……お姉様は『運命を操る程度の能力』を持つてるから……」

「なにそれ反則じゃん」

「そう？　でもお姉様自身上手く使えてないみたいだけど。……まあ、私はよく知らないんだけどね」

唇に人差し指を当て、僕から視線を外しながら喋るフランドール。その際に少しだけ揺らいた感情が気になった僕は、余計なお世話かと思いつつも聞いてみることにする。

「よく知らない？　姉妹なのにな？」

「うん。だって私ずうっと地下室にいたし、こうして館の中を出歩

くのもスツゴく久しぶりなんだもの」  
「地下室？ またなんで」

日の光に弱いとされる吸血鬼とはいえ、窓の少ないこの館なら地下に潜らなくとも大丈夫なはず。

そう思っただけで何気なく質問すると、彼女は口から指を離して首を傾げていた。

「わかんないけど閉じ込められてたの。私なんにも悪いことしてないのに」

唇を尖らせて言う彼女。

なぜ自分が閉じ込められていたのか本当にわかっていない様子だったが、僕には何となくだがその理由がわかっていた。

おそらくだが、彼女は随分と情緒が不安定なのだ。さらには魔理沙に対して行っていた行為からもわかるが、ああも残酷なことを『遊び』と称して平気で出来る辺り、言っちゃあ何だが気がふれている。僕が言えた義理ではないが。

「ねえねえ、猫さんは名前、何て言うの？ 私はフランドール。フランドールだよ」

微妙な気分で彼女の事を考察していると、いつの間にか近づいてきていたフランドール……フランが、赤い瞳で見上げながらそう聞いてきた。そういえば、名乗ってはいなかったか。

「僕はミコト。まあ猫でも猫さんでも好きに呼ぶがいいさ。で、フラン。ひとつだけ聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ なあに？」

背中羽らしきものをパタパタと動かしながら、フランは首を傾



げていた。見た目は可愛らしい子供そのものなのに。

「フランは、何で僕らと遊ぼうと思ったの？」

「え？ あなた達が遊びにきてくれたんじゃないの？ 『新しい遊び相手が来るから、たくさん遊んでもらいなさい』ってお姉様が言っただよ？」

やはりここでもお姉様。どうにも、今日はお姉様の手の上で踊らされている感が否めない。

違うの？ と聞いてくるフランの頭に手を置いて、目線を合わせる為にしゃがみ込んだ。

「フラン。ちょっと君のお姉様に用事が出来たから行ってくるけど、いい？」

「遊ばないの？」

「今はちよつとね。けど後で必ず……」

そこまで言っつて、なにかがゾワリと全身を駆け巡っていた。

何が何だかわからず、しかし本能が危険を訴えている。頭の中でけたたましくなる警報。

後ろで魔理沙が何かを叫んだのと同時に、全力で後ろに跳び

「ッ！？ くあっ！？」

瞬間、右手に何かがぶつかったような感覚。ワントンポ遅れてきた激痛に顔をしかめ、右手を見た僕は自分の目を疑った。

右手が、無い。

「後でなんて嫌。今、遊ぶの」  
「……………!？」

抑揚を無くした声に、歯を食いしばりながら視線を向ける。

瞬間全身の毛が逆立つのを感じた僕は、更に後退して魔理沙の横へと着地した。

「ミコト！ 大丈夫か！」

「ちよつと右手がトンだけ。それより……………」

「なあっ!? それよりじゃないだろ、完璧重傷だぜその右手！」

隣でバンバンと結界を叩きながら叫ぶ魔理沙を横に、僕は汗を垂らしながら息を整えていた。

流れ込んでくる感情に戦慄を覚えながら、しかし予想していた状況に唇を舐める。

「ねえ、遊んでくれるよね？ 四百年以上地下に閉じ込められていたんだもの…………… 退屈でしょうがなかったんだから」

「フラン。これは遊びなんかじゃない。ただの殺し合いだ」

「何が違うの？ 殺し合いって、遊びのひとつなんじゃないの？」

「っ…………… 口で言っただってわからないか」

覚悟してなかったと言えば嘘にはなるが、できれば真正面からぶつかるような戦い方はしたくなかった。最初こそ片腕を落とそうなんて考えていたが、それは彼女が狂気に刈られているからだ、そ

うでもしないと彼女は止まらないだろうと考えていたからだ。

だが、先程の感情の揺らぎを見ると……。

「くそっ……魔理沙、絶対にそこから動かないでよ」

動けないだろうけど。幽香のあのレーザーすら耐えた結界だ、魔理沙の力ではどうにも出来やしないだろう。

相変わらず結界を叩き続けている魔理沙を尻目に、僕は妖力を脚に込めて跳び回り始めた。

それを見てニヤリと笑ったのはフランの方。その小さな身体をフワリと浮かび上がらせると、いつの間にかその手に持っていた一枚のカードを掲げた。

禁忌「クランベリートラップ」

「スペルカード……！」

弾幕決闘以外でのスペルカード。

スペルカードというものは、基本非殺傷の弾幕決闘のルールの中では、その威力はあまり発揮されてはいない。一発当てれば勝ちなのだから、威力を求める必要が無いからだ。勿論、スペルカードを造る時点でそれなりの威力制限はかけられることになるのだが。

しかし、スペルカードは本人の意思次第でその威力を元の威力に戻すことが出来る。元々当てることのみを考えられている弾幕に、威力が追加される。考えるだけで恐ろしい事態だが、今はそれが目の前で起きているのだから笑えない。

「ちっ」

跳び回るのを止め、列を成して飛んでくる赤の弾幕の延長線上から脱出する。

一撃食らっても負けにはならないが、それで動きが止まってしまえば二撃三撃と続けて食らってしまうことも有り得る。どちらにしろ一撃も当たってはいけないのだ。

固定弾幕である赤の弾の中から、追尾弾らしき青の弾幕から身をかわしていく。考えて避けていかなければ、固定弾と追尾弾に挟み撃ちにされてしまいそうなスペルカードだ。

「……………っ」

ふらつく足元を気にしながら、これからどう戦っていくかを考える。

正直な話、正攻法で戦ったんじゃ万が一にも勝ち目は無いだろう。それはそうだが、『一度炎に包まれ』て、『能力で無理矢理動かしている』ような身体では、何をどうしたって勝てはしない。顔や手など、あらわになっっている部分こそ多少の火傷で済んではいるが、着物の下は自分でも見たく無いほどの大火傷。皮が焦げて剥がれ落ち、下から現れた肉が化膿して着物に張り付いて引き攣っている。加えて利き腕である右手が吹き飛んでいたんじゃ、勝ち負けどころの話ではない。

「どうしたの？ 最初みたいにそっちからも攻撃しなよ！」

フランの声が部屋の中に響く。同時にスペルカードの効力が切れて、僕とフランは同時に新たなスペルカードを宣言した。

禁忌「レーヴァンティン」

爪符「地味な業物両手に十本」

左手に伸びる五本の爪。右手が無いために五本足りないが、無いよりはマシというもの。

炎剣を片手に空中に浮かぶフランに、五本の業物で勝負を仕掛ける。最初はあの炎剣にやられてしまったが、二度も同じ鉄は踏まない。後手必殺、一度フランに空振りさせ、その隙をつかせてもらう。そう考えながら、僕は地面から跳ぶ為に少しだけしゃがみ込んで

禁忌「フォーオブアインド」

「な………！」

しゃがみ込んだまま、目の前の光景に固まってしまふ。

そこには、炎剣を片手に笑みを浮かべるフランが、  
『四人』、  
存在していた。

固まっていた僕は、しかしすぐにその場から離脱。軋む身体に顔をしかめながら、次々と放たれる『レーヴァンティン』を避けていく。

さすがにこれは予想外過ぎる。四人が増えた事もそうだが、あの炎剣が弾幕のように飛んでくるなんて。悪い夢なら一刻も早く覚めてほしい。

「ぐうっ!!」

ジユウツ、と肌が焦げる音。冗談じゃない、このままじゃ本当に死んでしまう。

そう思った僕は左手の爪をフランに投擲。同時にその手をぐつと握りしめ、思い切り手前に引き抜く。

「あ、う？ なに、これ」

同時にクラリと頭を揺らした四人のフラン。そのうちの三人がスツと消え失せ、残ったフランからも炎剣が失われる。

一応の危険は過ぎ去ったものの、強烈な頭痛と、全身の強烈な痛みに膝をつく。

「やっぱり……っ、無理があつたか……？」

感情を引き抜いたはずが、フランは多少頭を振るだけで倒れてはいない。本来なら感情の一切を引き抜き、相手を行動不能にさせる『引き抜き』。しかし、身体が満身創痍なのと、それを能力で無理に動かしているこの状態では、完全に感情を引き抜くことが出来なかったようだった。それどころか、無理に感情を引き抜いたせいで強烈な頭痛を引き起こし、自分に使っていた能力が緩んで無視していた痛みが振り返すていたらしく。今日はやることなすこと全てが裏目に出ている気すらしてくる。

しかし、引き抜いただけで受け入れてはいないのが不幸中の幸い。今こんな状況でフランの『狂気』を受け入れてしまったら……想像するのモイヤになる。

「うう……ふ、ふ？ 不思議な能力持つてるのね。じゃあ、私も能力使っちゃおうかな」

フラフラと空中を漂いながら、しかし口の端を釣り上げながら言うフラン。その言葉に、僕は思わず呻き声を漏らしていた。

おそらく、僕の右手を吹き飛ばしたのは彼女の能力だろう。大した予備動作も無く、妖力を纏った身体の一部を楽に吹き飛ばすような能力。そんなものを今使われてしまったては……。

「じゃあ、まずは残ってる左手を」

依然として続いている頭痛の中、死の宣告にも似た眩きを聞く。数秒後には、頭を抱えているこの左手も吹き飛んでいるのだろう。そうなってしまうばもう終わり。抗う術も逃げる術も生き残る術も無くし、後はただなぶり殺しにされるだけ。

「……これが、『運命』だって言うの……?」

レミリアが言っていたのは、こういうことだったのか。本当に、『運命』とやらには抗うことすら出来ないと言うのか。

「冗談じゃない。」

ギリツ、と歯を食いしばる。頭が割れるような頭痛が、更にその猛威を振るう。

諦めるな。頭痛がなんだ。火傷がなんだ。死ぬほど痛くとも、動けない程ではない。右手はもう無い。左手ももう無くなる。だが、右足がある。左足がある。上半身と下半身も繋がっている。口だつて動く。声も出せる。目だつて見える。開く。

そつだ。諦めるには、まだ早過ぎる！

「あれ、まだ立つんだ」

「……運命とやらに、負けたくは無いんでね。それに、本当にそれが絶対のものなら、僕はとっくの昔に死んでるはずだから」

そつ。僕は、抗いようの無い『絶対の死』と言つものを、既に知つている。

何をしても、何をしても、ただ漠然と死に近付いていくあの感覚。

『生きている』のでは無く、ただ『死んでいく』だけの真つ白な空間。

あの時は、これが『運命』なんだと。『運命』は絶対のものなんだと、諦めていた。

けど違った。絶対なんかじゃなかった。『運命』は、『奇跡』で打ち破ることができると、『彼女』が教えてくれた。

そして、その『奇跡』は自分で起こすものだとも、『彼女』は教えてくれたんだ。

だから僕は諦めない。

自分の為にも、『彼女』の為にも。そして。

「……フラン」

目の前にいる、彼女の為にも。

引き抜いた感情、混沌とした『狂気』の中に微かに感じ取れた、一抹の感情。

それが何なのかわかった今、僕は負ける訳にはいかなかった。



「ここまで遊べたの、お姉様と咲夜以外にはあなたが初めてだわ。楽しかったよ。……けど」

「……………」

「私、もらった玩具すぐに壊しちゃうの……きっと、あなたも……」

気がつけば、フランの手には小さな髑髏が握られていた。僕にはそれが、自らの心臓のようにも感じられる。もしかしたら、本当にそうなのかもしれないが。

フランはその髑髏を胸元に寄せ、なんとも言えない表情で首を傾げていた。

「なんだかおかしいな。今までずっと、ずっととこうしてきたのに。……今はなんだか、変な気分なの。あなたを壊したいけど、壊したくない。ねえ……壊すって、どういうことなのかな」

「……言葉の通りさ。壊れたものは、元には戻らない。直すことが出来るものもあるけれど……フラン。君の手の中にある僕の命は、一度壊れたら二度と元には戻らない」

霞んできた視界の中、けれどしっかりと言い放つ。

フランの感情が揺らいでいる。おそらく、フランの感情の大部分を僕が持っている為に、その深層の部分が顔を出しているのだろう。

「元には、戻らない……それって」

「死ぬってことさ」

「……」

「本当はわかってるんだろう？　ただ、わからない振りをしてきただけで」

彼女とて妖怪だ。たとえ地下室にいたとしても、沢山の命をその

手で刈り取ってきたのだろう。彼女の口ぶりからしても、それは間違いない。

ただ、彼女はその力故に、壊したくないものまで壊してきてしまったのではないのだろうか。せつかく貰った大切なモノも、力加減がわからずに壊してしまう。その度に悲しんで、けれど加減がわからないから、教えてくれる人もいないから何回も同じことを繰り返す。

きっと彼女は、もう悲しみたくなかったのだろう。壊したくなかったのだろう。けれど、どうやっても壊してしまうから。だから、間違った方法で悲しみを封じてしまったのだ。

例えば、壊すこと自体に楽しみを覚えれば、悲しむことは無くなるだろう。

例えば、壊すことが何なのか、それがわからなくなってしまえば悲しみは現れないだろう。

例えば、大切になる前にそれを壊してしまえば、悲しむ必要も無くなってしまっただろう。

彼女はそうして、それを何年も、何十年も、何百年も積み重ねてきたのだ。それが気が付けば『狂気』となり、それがまた彼女を間違った方向へと進ませている。

心の底に追いやられた『悲哀』の感情を見ずに済むようにと、それが更に大きな悲しみを生み出していることも知らずに、彼女は…  
…フランは、今まで生きてきたのだ。

「フラ……ぐ、ウツ！」

「？」

フランの名を呼ぼうとして、頭痛が更に酷くなるのを感じた。元々、引き抜いた感情はそうそう長く持つていられるものではない。『狂気』のような負の感情なら尚更というもの。

この頭痛は所謂警告。早く手放さないと、頭の回路がパンクすると訴えかけてきているのだ。

だが、今感情を手放してしまったら、この『狂気』がフランの元へと戻っていつてしまう。

「ぐう……あああ!!?」

しかし、このままでは先に僕の方が駄目になってしまう。そう考えた僕は、やむなくフランの感情を手放すことにした。

途端に頭痛が消え、霞んでいた視界もその輪郭を取り戻す。

だが。

「ッ!？」

「フランッ!」

底が見えて不安定になっていたフランの心。そこにあの感情が入り込むと言っことは。

「あ、ああ、ああああ」

手にもっていた髑髏が掻き消え、その手が頭を抱え始めた。

震えているような、小さくなったり大きくなったり、そんな声が、フランの口から漏れている。

思わず呟いた一言。

最悪だ。

「あう、あ、あは、アハハハハハハハハハハ！？ みんな、みんな  
壊れちゃえ、コワレチャエエ！！」

狂ったように笑うフランの周りに、おびだたしい数の弾幕が現れる。

狙いなどあって無いようなものだろう。アレが放たれば、間違  
いなくこの館は崩壊する。

考えろ、どうすればフランを止められる。能力はもう使えな  
い。身体も満足に動かない。弾幕を張れるだけの精神力も残ってい  
ない。ならばどうする、一体どうすれば……！

「あらあら。大丈夫かしら、御主人様？」

「!？」

瞬間、目の前が真っ暗になる。

なんだ、と思った瞬間に、何者かが僕の身体を抱き抱えていた。その人物は、僕の耳元に口を寄せ、小さく、しかし妖艶に囁いていた。

「心地好い闇に惹かれて来てみれば。随分とボロボロね、御主人様」

「……ルーミアか？」

「ええ。私は貴方の忠実な下僕。ご安心なさい、あの吸血鬼の娘は、私がなんとかしてあげる」

僕を抱き抱えたまま、闇の女王は暗闇の中で小さく小さく微笑んだ。

91：「紅月く狂気に埋もれた感情」(後書き)

再投稿させていただきました。

さすがに前のは短すぎたしなあ……。

ルーミアに抱き抱えられた僕は、ここらが潮時だと感じて自らに使っていた能力を解除することにした。いくら身体が傷付こうと、『痛くない』と自らの心に思い込ませるといふ強引な方法。半ば催眠術のようなものではあるが、それでも一応効果はあったのでよしとする。

「ぐうっ……痛ウ……」

「大丈夫……では無いわね」

右手無くなってるし、と何でもないとこのように言うルーミア。そこで不意に闇が晴れ、ルーミアの金髪が僕の顔を撫でる。

ルーミアは僕を抱えたまま、特に焦る様子も無くのんびりと歩き始めた。

「ルーミア、僕はいいから、フランを」

「フラン？ ああ、あの吸血鬼のこと。大丈夫よ、あの娘ならまだ闇の中だから」

言いながら微かに笑みを浮かべるルーミア。

その言葉を聞いた僕は、左手でルーミアの肩を掴んで少しだけ身体を起こした。そして、肩に顔を乗せて見た風景に息を呑む。

「これは……！」

「言ったでしょう？ まだ闇の中だって」

そう言って、立ち止まったルーミアは僕を降ろした。隣には結界を叩く魔理沙がいて、しかし僕は目の前の光景から目を離すことが

出来ない。

確かに、おかしいとは思っていた。ルーミアが現れたその瞬間、狂気に吞まれたフランの叫びが全く聞こえなくなったのだから。

いくら予想外の人物が現れたといえ、あの状態のフランが驚きで動きを止めるとは思えない。それに、ルーミアが現れる寸前には、大量の弾幕だつて存在していたのだ。あの今にも無差別破壊が始まりそうな状況が、ルーミアの登場だけでここまで落ち着くなんて考えられない。

そう。ルーミアがただ『登場』しただけだつたら、だ。

「何を驚いているのかしら。封印時ならいざしらず、今の私ならこの程度造作もないのだけれど……」

クスクスと笑うルーミア。

ルーミアは、ただ『登場』しただけでは無かった。彼女の『攻撃』は、既に始まっていたのだ。

目の前には、まるでそこから先が消滅したかのように真っ黒に染まった空間が鎮座していた。

「御主人様はその人間とゆっくりしてらして？ 私に全てを任せてね」

「……別に君の主人になつたつもりはないけどね」

言いながら、僕は結界を一度解除して魔理沙へと寄り掛かる。そして再度結界をかけ直すと、無くなった右手を虚空に眺めながら身体力を抜いた。慌てた魔理沙が僕を抱き留める。



「でもまあ、少し休ませてもらおうかな……。無理はしないでね」  
「お前が言っても説得力が無いぜ……」

呆れ果てた魔理沙の言葉に、僕は力無く、ルーミアは静かに笑う。本当なら今すぐにも猫の姿に戻って治癒に専念したいところではあるが、今そうするとしばらく人型に戻れなくなる可能性がある。いつかの時に、右足が消し炭になった時ですら数時間人型に戻れなかったのだ。全身大火傷に右手を無くした今の状態では、果たして何日かかるものか。これからのことを考えると、紛いなりにも能力をさせる今の状態の方が好ましい。例え激痛で意識が飛んでいきそうであっても、だ。

「くそつ、何だよこの身体……！ 平気な顔してたから大丈夫なのかと思つてたけどさ……くそ……」

「魔理沙だつて僕の為に戦ってくれたんでしょ？ ……だったら、僕だつて魔理沙の為に戦つてもいいじゃん」

「だからつてそんな身体で！ 右手だつて……！」

はだけた着物から覗く僕の身体、そして手首から先が家出している右腕を見て苦い顔をする魔理沙。こんなもの見ない方がいいのにそう考えて、はだけた着物を直し、右腕を胸元に差し入れる。たつたそれだけの行動で絶叫ものの激痛が身体に走るが、そこは我慢した。

と、そこで魔理沙の服 腹の辺りが破れ、白のシャツが赤く染まっている が目に入り、今度は僕が苦い表情をしていた。

僕が不覚にも動けなくなっている間に、魔理沙は間違いなく死に至るであろう怪我を負ってしまった。すぐには動けなかった僕が出来たことと言えば、結界幻術で夢を見せてあげることぐらいのもの。そうすることで、腹を掻き混ぜられるという、本来なら悶絶し絶叫

する程の苦痛から目を逸らさせてあげただけ。

何とか身体を騙し抜いて魔理沙を救い出しはしたが、彼女が僕のせいで死にかけたのまた事実。それを考えると、過ぎたことと言えど後悔の念が沸き上がる。

「……ごめんよ」

情けないことに、今はこうして謝ることしか出来ない。文字通り燃え尽きた僕の身体は言うことを聞かず、頭を下げようにも抱き抱えられた状態では見上げることしか出来やしない。

しかし、魔理沙はそんな僕の心中など関係無いかのように、僕の頬を撫でる。

「馬鹿野郎……お前に謝られたら、私はどうすればいいんだよ……。私だってお前に謝りたいのに、先に言われたら何も言えないじゃないか……」

今にも零れ落ちそうな涙。僕はそれを左手でスツと拭くと、出来る限りの笑顔を魔理沙に向けた。同時に涙を拭った左手を軽く握り、クイツと左に動かす。

僕の為に泣いてくれる。それはとても、とても嬉しいことだけど、でもやっぱり、人が悲しくて泣いているところなんて、出来るだけ見たくないから。

「あ、れ……涙が」

魔理沙がぐしぐしと目を擦り、一度身体を震わせる。手が離れたその瞳から、新しい雫が零れることはなかった。

引いた左手を彼女の頬に戻し、魔理沙の体温をその手に感じる。

ああ、とても、暖かい。

「なんだよ、くすぐつたいぜ」

「ダメ？」

「……いいや」

少し首を傾げて聞いてみると、魔理沙は少し微笑んで僕の左手にその小さな手を重ねてきた。柔らかな温もりに挟まれ、激痛は続いているのに表情は緩んでしまう。そんな僕を見て、また少し笑みを深くする魔理沙。

「ふうん……」

「？」

ふと聞こえてきた声に首を曲げると、そこには何やらいやらしい微笑むを浮かべているルーミアの姿が。どうやら僕と魔理沙のやり取りをずっと眺めていたらしく、口元を手で隠しながらニヤニヤと笑っている。

しかしこちらの視線に気が付くと、ルーミアはクルリと背中を向けてしまった。何なんだコイツは、と思ったのはほんの一瞬。静かにルーミアの身体から溢れ出した妖力と闇を見て、僕の表情も自然と引き締まった。

と、次の瞬間。

「キャハハハハハハ！！」

ルーミアの闇が爆風と共に霧散する。同時にフランドールの強烈な妖気が部屋に充満し、ルーミアは右手に十字の黒剣を握りしめる。

「お転婆な娘だこと。少しは落ち着いてみたらどう？」

「何の話？ 私はとつても落ち着いてるよ？ ただちよつと面白いなあってだけ！！」

「皆そう言うのよね……。いいわ。肩慣らし程度に遊んであげる」

完全に狂気に犯されたフランに、口調や振る舞いこそ優雅だが、口が裂けたような笑みは隠し切れていないルーミア。

現時点での妖気はほぼ互角。しかし、どちらかといえば不気味なのはルーミアの方だ。封印時のギャップもさることながら、今のルーミアからは余裕を通り越して自信すら感じられる。あれだけの狂気を目の当たりにしながら、それに気圧されもしなければ表情を歪めもしない。果たして、ルーミアは今何を思いながらフランと向き合っているのか。

「動いた！」

思わず、といった様子で魔理沙が声を出す。その言葉通り、向かい合っていた二人はほぼ同時に動き出していた。瞬間、僕等を守る結界が軋む。

ほんの一撃。フランの炎剣とルーミアの黒剣が真正面からぶつかり合い、それが凄まじい衝撃を生んで部屋中に響き渡る。

「アハハッ」

「フフッ」

互いに笑い声を漏らしながら、もう一撃。再度暴風にも似た衝撃波が生まれ、今度は互いに弾かれるように距離を取る。

フランは炎剣を一度振るい、ルーミアは黒剣をクルリと回す。その剣の軌跡に現れる、赤と黒の弾幕。ほぼ同時に射出されたそれは、しかしどちらも標的に当たることは無かった。

「ただの小娘つてわけでもなさそうね」

フランの弾幕を闇に包み込んだルーミアは、剣を持った右手を思い切り引いた。まるで弓を引いたかのように突っ張った右腕は、凄まじい勢いで闇に包まれていく。まるで闇に自らを食わせているかのような光景に、僕は静かに息を呑んだ。

対するフランは、空中でフラフラ浮いたまま動かない。時折クスクスと笑う彼女の瞳は紅く光っていて、地上からでもその不気味さはよくわかる。

その姿を見たルーミアは、その突っ張った右腕を　　思い切り、前に突き出した。

ルーミアの右手から放たれるそれはまるで龍。触れるもの全てを闇に食らいそうな、純粹過ぎるまでの闇の力。

その龍は、凄まじい勢いでフランへと向かい、僕は直撃を確信して目を閉じた。

が。

「キュツとして」

バァン！！　と。何か巨大な風船を思い切り踏み付けたかのような、そんな強烈な炸裂音が部屋に響き渡り、驚いた僕は反射的に目を開いていた。

抱かれる腕に少しだけ力が籠ったのを感じながら、何が起ったのかを確かめるべく身体を起こす。

痛みに顔をしかめながら、しかし高くなった視線の先にあった光景に、思わず息を呑んだ。

「真つ黒蛇さん碎けて散つた」

「……『闇』を壊すなんて。目茶苦茶じゃない」

およそ数秒前までは想像すらしていなかった、この状況。

右肩から先を吹き飛ばされたルーミアは苦しげに傷口を抑え、フランは変わらず楽しげにその身体を揺らしている。

「またあの能力か……」

「……ミコト？」

あの得体のしれない能力。あれで僕は右手を失った。相変わらずどんな能力なのかはわからないが、とにかくにも危険なことだけはわかる。あの能力を連続的に使われれば、いかにルーミアと言えど……。

そこまで考えた時、クスリと小さな笑い声が僕の耳に留まった。フランのものではなく、ましてやすくそばにいる魔理沙のものでもない。ならば、この声は。

「フ、フフ……アハハハハ!!」

「ッ!!」

突如として吹き荒れる闇の嵐。片腕を失ったはずのルーミアは、しかし声を高くして笑い声を上げている。

これにはさすがのフランも一瞬顔をしかめ、怪訝そうにルーミアの顔を睨みつけた。

「なにがそんなに面白いの？」

「ハハ……いいえ？ ただ、ちょっと苦しそうにただけでそんなに油断してくれるなんて思ってたから」

「油断？ そんなの」

してるわけじゃない。

多分、フランはそう言いたかったのだろう。実際そういう感じで口がパクパクと動いていた。

彼女も、動かした口から声が出ていないことに気が付いたらしい。ずっと見上げていた目がスウツと下に下がり、そして勢いよく見開かれる。それはそうだ。『自分の胸から剣が突き出ている』の見たら、誰だつてそんな反応をするだろう。普通の人間なら反応する前に死んでいるかもしれないが。

しかしそこは吸血鬼。ギギギ、と古い人形のように首が動き、未だ笑い続けているルーミアに視線を向ける。それに気付いたルーミアは、笑いを含み笑いに変えて口を開いた。

「何で、つて顔ね。別に不思議なことでは無いわよ？ 私は闇の妖怪……例え腕が飛ばうと脚が飛ばうと、そこに闇があればいくらだつて替えが利く。逆に言えば、身体を切り離して闇にすることだつて出来るのよ。そこにある、私の腕みたいだね」

左手で指差すルーミア。確かに、フランの背後には剣をしっかりと握り締めたルーミアの右腕が存在している。

「惜しかったわ。けど……少し頭の回転が足りなかったみたいね」

ザアツとルーミアの身体が闇に溶けていく。生まれた闇は少しずつフランへと吸い寄せられていき、足の先から少しずつ、ゆっくりとフランの身体が闇に包まれていく。

すでに闇と化したルーミアは、最後にポツリと呟いた。

「私の勝ちよ」



92:「闇と紅」(後書き)

何とか週一更新。

最近(というか最近ずっと)スランプ気味ですが、懲りもせず番外を画作中。

今のところ大雑把に二択に絞って、

- ・ i f 恋愛系(もしミコトが〇〇と恋愛関係にあつたら)
- ・ ほのぼの家族愛系(八雲家 or 桃鬼、志妖 or 妹紅 e t c ……)

のどちらかにしようかなと。

ぶっちゃけどっちも書いてみたいけど、時間の都合から一つに絞ります。

という事で意見求めます。

どっちみたい？

### 93：「灰に包まれた紅」

「ルーミア。フランを連れて来てくれ」

「仰せのままに……」

空中に漂う闇が僕の言葉に応え、立ち上がった僕にゆっくりと近付いてくる。

少女を象った闇が差し出した両腕の上に乗り、僕が彼女を抱えて気持ち抱き寄せると、彼女を包んでいた闇が勢いよく霧散していた。

「うう……」

僕の腕の中で苦しげに唸るフラン。外傷こそ見当たらないものの、圧倒的な自然治癒能力を誇る吸血鬼は多少の傷など分を待たずに治癒してしまう。そういう意味では、ルーミアが放った攻撃はどれも通じてはいなかったのだろう。まあ、最後の一撃を除いては、の話だが。

果たして闇に包まれたフランは、その中で何を体験していたのか。狂気に吞まれた吸血鬼をここまで衰弱させる……本当に恐ろしいのは、目の前で笑顔を絶やさずにいる彼女なのかもしれない。

「さて……」

腕に抱いたフランを床に降ろし、僕は右手　が無かったので、左手で着物の内側を探り、一枚のスペルカードを取り出した。スペルカードといってもブランクカード　まだ何も表面に描かれていない、真っ白なもの　で、弾幕決闘には使えない。

いきなりそんなものを取り出したものだから、隣にいる魔理沙は怪訝そうに僕の顔を覗き込んでいた。かといって、それに応える程

余裕も無いのであえて反応は示さず、手に持ったスペルカードをフランの額に乗せた。滑り落ちるよりも早く、それを挟み込むように額を合わせる。

「ふう……………」

目をつぶり、身体の痛みを吐き出すように息を吐く。

僕の息がフランにかかり、それに反応するように彼女の身体が少しだけ動いた。もしかすると不快だったのかもしれないが、仕方がない。これからすることを考えると、例え僕が無傷で万全な状態だったとしても同じように息を吐いていただろうから。

吐き出した息を吸いながら、ゆっくりと能力を使用する。

彼女の中に未だ蠢いている狂気を、息を吸うのと同じように、少しずつ吸い出していく。

これが僕に直接流れ込んできていたならば、僕は十秒と持たずに意識を投げ出していただろう。ただでさえ死に損ないのような身体だというのに、精神まで犯されてしまえば本当に死にかねない。

まあ、だからこうして、スペルカードという『別の入れ物』を使っているのだけれど。

「ふう、ん」

至近距離でフランの声が聞こえる。苦しいのだろうか。けれど、もう少しだけ我慢して欲しい。

奥の奥、底辺に凝り固まっているものも全て吸い出そうとして、少し強めに額を押し当てる。

多少の目眩がして、けれど歯を食いしばって能力を使い続ける。いくら直接取り込んでいなくとも、感情を操っていることには変わりなく。

コンディションで言えば間違いなく最悪だと言い切れる今の状態

では、気絶していないのが不思議なくらいで。

その割に頭の中は冷静なものだな、と自分を嘲笑してしまう。

と、不意にそこで、顔に冷たい何かが触れた。何だ、と目を開けば、そこには。

「……………猫、さん？」

キョトンとした瞳で、僕を見つめているフランの顔があった。

離れた額から『紅い』スペルカードが滑り落ち、僕はそれを左手で拾い上げる。よかった、上手くいった。

「わた、し」

「気分はどう？」

「え？」

何が何だかわからないのか、フランは起き上がるなり辺りをキョロキョロと見回した。狂気に吞まれてからの記憶がないのか、本当に不思議そうにしている姿を見て思わず笑ってしまう。

後ろでは、緊張の糸が切れたのか、魔理沙がペタンと座り込んでいた。その隣ではルーミアが薄ら笑いを浮かべている。気味が悪いから止めてほしい。

「あっ……………」

「？」

不意に声を上げたフラン。それに反応して彼女を見ると、ぐいつと右腕を引つ張られていた。思わず顔をしかめてしまうが、それを見たフランの悲しげな表情を見て、すぐに表情を引き締める。今更

我慢しても全く意味は無いのだけれど。

「……あの」

「何？」

何でも無いように聞き返して上げると、フランは何か言おうとして、しかし口をつぐんで俯いてしまった。けれど、僕は彼女が何を思っているのかがわかるので。

「いいよ。気が付けたのなら、それで」

「っ！？」

僕の言葉に驚き、顔を上げたフラン。ただ、その顔を僕は見なかった。なぜなら、彼女の顔は僕の肩の上にあつたから。

彼女も、謝罪するよりも先に許されて、さらには抱きしめられるとは思っていなかったのだらう。顔を見なくとも驚いていることが簡単にわかってしまう。

正直彼女に抵抗されたら、例え万全な体調であろうと捕まえてはおけないので。彼女が驚いて固まっている内に、本日最後の能力行使。

僕のありつたけの力を使って、彼女にとある感情を流し込む。

「……あ………」

その感情はとても暖かいもので。

だからきつと、狂気の下で凍え、冷え切っていた彼女の心も、優しく包んで暖めてくれるはず。

かつて、僕が絶望のどん底にいた時に、力強く引つ張り上げてくれたように。

あつたかい……。

小さく聞こえた声は、とても、とても幼いもの。僕の腕の中で眠りに落ちた彼女は、しかし僕の身体をしっかりと捕まえて逃がさない。

まるで大切な人形を抱いたまま眠る子供のように。僕は左手でポンポンと背中を叩いてやると、息を吐いて身体の力を抜いていた。

「ミコト？」

僕の異変に気が付いたのか、立ち上がっていた魔理沙が僕の横に座り込んだ。今回は軽く目を合わす程度の反応を示し、無意味にニヤリと笑ってみる。

もうそろそろいいだろう。身体は痛いし、頭の回線もショート寸前。こんな状況じゃ気絶するのも当然。だから、今ここでいきなり動かなくなつたとしても、驚きはすれど納得してくれるはず。

どうせなら、柔らかいベッドの上で、いつものように目を細めながら目覚めたいな、なんて。

そんなことを考えながら、僕は必死に掴んでいた意識から、ふっと手を離すのだった。

「ミコト……？ ミコト!？」

「あら、気絶しちゃったみたいね。多分死にはしないだろうから、身体を揺さ振るのは止めてあげて頂戴？」

不意にガクリと首を垂れたミコトを見て、魔理沙は慌てて彼の肩を揺さ振った。ミコトの顔を覗き込んだルーミアは、魔理沙を諭すように言いながら彼女を羽交い締めにする。

「……あら？」

と、そこで。

ルーミアの視界に現れる、小さな違和感。

それが何かを確かめる為に、ルーミアはミコトの姿を注意深く観察する。やがて違和感の正体にたどり着いたルーミアは、暴れる魔理沙の耳元で小さく囁いた。ピタッと魔理沙の動きが止まり、ルーミアと共に、とある箇所に目を向ける。

それはミコトの身体の一部だった。灰色の髪から突き出した、柔らかな三角形を描く、耳。

しかし、違和感を発しているのは耳ではなく。そこから垂れた、灰色の彼には派手にも見える金色の耳飾りだった。

それは小刻みに揺れていて、しかしミコトの身体は目立って動いてはいない。首を垂れた時の反動なのかもしれないが、それにしては振り幅が一定、いや、むしろ大きくなっているようにも見える。

それをしばらく見詰めていた魔理沙は、やがてそれに向かって手を伸ばしていた。まるで幻に手を伸ばしているかの如く、存在を確かめるようにゆっくりとその手が近付いていく。

「あっ」

だが、魔理沙の手が耳飾りに触れることは無かった。触れる寸前で、耳飾りが音を立てて床に落ちていたのだ。

ミコトの耳を貫通していたそれは、輪の一部が消失したかのようになり、綺麗に途切れている。

魔理沙は啞然としていたが、少しすると伸ばしていたままの腕を下ろし、そのまま耳飾りに再度触れようとした。

と、その瞬間。

決して明るいとは言えないこの空間の中、金色が小さく輝いたかと思えば

「わあっ!?!?」

「っ!?!?」



先程よりも幾分大きな声で、今度は凄まじい勢いで手を引き戻しながら魔理沙はその場から飛びのいていた。

涼しい表情だったルーミアも、いきなりのことに驚いて目を見開いている。魔理沙とルーミア、その二人の視線の先には

「……ふう」

灰色の着物を着た、一人の少女の姿があった。

自分を見る二人を一瞥すると、少女は仕方ないかと言わんばかりに溜め息をつく。

頭の上にはミコトと同じ灰色の耳。背中の方には割と長めの二股の尻尾。

少女はひとしきり辺りを見回してもう一度溜め息をつく、ミコトの傍に膝をついた。魔理沙とルーミアには、あまり興味が無いかのよう。

右腕を両腕で抱え、胸に抱くようにする。血塗れのそれを見た彼女は表情を苦くして、しかし愛しげに手首の辺りに舌を這わせた。

本来その先にあるはずの手は、存在しない。

切り落とされただけならば、まだ希望はあっただろう。しかし、彼の右手は文字通り吹き飛んだのだ。もう、どこにも存在しない。

目の前の光景を眺めながらそう考えていた魔理沙は、思わず目を逸らしていた。痛々しすぎるまでの惨状に、直視することが出来なかった。

が。

「……………え……………？」

目を逸らしても意味が無い。そう考えて再度目を開いた魔理沙は、一瞬自分の目を疑った。軽く目を擦り、眉間に指を当てて深呼吸。今見たのは何なのか。いやもう一度見ればわかるだろう。そう結論付けて、もう一度目開く。

そうして見た光景は、先程よりももっと鮮烈なものだった。

そこにいたのは、輝かしいまでの光を纏った少女の姿。光は小さな珠となり、ミコトの身体へと少しずつ移っていく。

時間にしてほんの十数秒。たったそれだけの短い時間だったのに、魔理沙はその光景に心を奪われていた。

ルーミアは対照的に、少し苦い顔をしてその光景を眺めていた。闇の妖怪には、少し眩しかったのだろう。頬を一筋の汗が伝っていた。

「……………ふう」

現れた時と同じような溜め息をつくとき、少女は不意に立ち上がった。

その際にミコトの右腕がパタリと膝の上から落ちて、手首から先が存在しているのを確認した魔理沙は、先程の光景が見間違いでは無かったことを理解する。

青ざめていたミコトの顔は、随分と血色が良くなっていた。

「出て来るがよい。私を欺けると思うな」

「欺こうなんて考えてないわ」

「……………」

いきなり口を開いた少女。それに応えるように現れる二人の人影に、魔理沙とルーミアは身構えた。予想外に高圧的な少女の物言いに、薄ら笑いを消して表情を引き締めるルーミア。

吸血鬼とその従者は、少女を見下ろすように空に浮かんでいる。それを、その幼い顔立ちからは想像もつかない鋭い視線で睨みつける少女。

「そう睨まなくとも、私からはもう何もしないわよ。咲夜、彼とフランを空いている部屋に運んで頂戴」

「わかりました」

咲夜は主人の言葉に応えると、フランと共々ミコトを抱き抱えて屋敷の奥へと消えていった。それを見送ると、吸血鬼　レミアは、羽をはためかせながら床に降り立つ。

その様を、少女は先程から変わらない目つきで睨み続けている。

背丈こそレミアと比べて頭ひとつ高い程度のもので、彼女の風貌はやはり少女と呼べるものでしかない。しかし、本来ならば違和感を覚えてもおかしくない程の高圧的な言動や、およそ少女には似つかない堂々とした立ち振る舞いは、恐ろしい程に堂に入っていた。『何万年と生きてきた大妖怪』を思わせる少女の気配に、フランを圧倒したルーミアにさえ、畏怖の念を感じさせる。背中に寒気を感じた魔理沙が小さく振り返ると、妖気と共に多少の闇を身体に纏うルーミアがいた。

「何をそこまで怒っているのかしら？　特に怒らせるようなことをした覚えはないのだけれど」

「黙るがいい。たかだか五百生きた程度の小娘が」

「……！　随分な態度ね」

見下ろす視線と、真上からのしかかるようなプレッシャーを感じてか、レミリアは多少顔をしかめながら言葉を返していた。

本来の彼女ならば、このようなことを言われれば黙ってはいないだろう。逆にその強大な妖力でプレッシャーを与え、相手を跪づかせているはずだ。

しかし、今はそれが出来ない。出来るはずがない。プライドの高い彼女が、表情には出さないものの、どこかでそう考えてしまっている。いや、プライドが高いからこそ表面に出さずにいられるのだろう。これが並の存在ならば、少女の前に簡単に膝をついているだろうから。

「ふん……膝を付かないだけの芯は褒めてやろう」

少女の言葉に、レミリアの眼光が鋭くなる。それを真正面から迎え撃つ少女の灰の瞳からは、ただ圧倒的なまでの重圧が放たれていた。

「別に私は貴様をどうこうしようとは思っていない。ただ、『彼』は妖怪にしては甘い所があるから……。『彼』の代わりに、少し言いたいことがあるだけだ」

二股の尾をフラリと揺らし、少女は一度目を閉じた。しかし、レミリアはその瞼の向こうの瞳から目を逸らさない。吸血鬼としての誇りが、辛うじて彼女を踏み止まらせているようだった。

対する少女は目をつぶったまま動かない。妖気を出しているわけでも、威嚇しているわけでもない。だというのに、これだけの威圧感を放っている。

圧倒的な存在感。彼女が威圧を込めて命じれば、誰もが言われるがままに従ってしまいそうだった。

少女が、ゆっくりと口を開く。瞬間、重力が倍加したような感覚

が、その場にいた全員に襲い掛かった。

「……………ッ！」

「貴様が何を考えて『彼』を戦わせたのかは知らない。ただ、貴様が原因で『彼』が死にかけたのは事実。簡単に利用された『彼』に非が無いとは思わないが……………」

「……………」

「いいか。もし貴様が再度、私欲の為に彼を利用し、あまつさえ死に近付けるようなことをしたならば……………その瞬間から、貴様の未来は無いと思え」

少女は目を開かないまま、一気に言葉を吐き出していた。一言も聞き漏らすことは許さない。そんな感じの声色は、レミリアの頭に痛む程刻み付けられる。もし、あの閉じられていた瞳が開かれていたならば……………レミリアは否応なしに、その場に跪づくことになっただろう。

「忘れるな。『彼』の中には、常に私がいることをな。……………言いたいことはそれだけだ」

少女の言葉が終わりを告げる。瞬間、フツと彼女の姿が消えて、カラアン、と甲高い音が部屋に響き渡っていた。

「くっ……………」

同時に膝をついたのはレミリア。額には玉のような汗を浮かべ、少女を睨みつけていた眼光は目に見えて弱々しいものに代わっていた。

「後悔なんかしてないわ……………。あの子の為なら、このくらいなんて

「ことないんだから……！」

自らに言い聞かせるように呟いたレミリアは、額の汗を拭いもせず、小さく妹の名前を口にしました。

93：「灰に包まれた紅」（後書き）

ちよつとばかり仕事が忙しく更新できませんでした。  
でも失踪する気はさらさらないのでご安心を（何を

番外の投票はまだ受付中です。どんどん意見をお寄せ下さい！

ぼんやりとした視界。それが単なる寝ぼけ眼からくるものだと理解するのにさほど時間はかからず、けれどもゆっくり目を開いていく。

半分程開いたところで瞼を落とし、右手で軽く目を擦り

……ん？ 『右手』？

「あらまあ」

我ながら間の抜けた声を上げながら、僕は『無いはずの右手』で顔を覆っていた。そういえば、全身大火傷を負っているはずなのに、身体を動かしてもそれらしき痛みを感じられない。

さてこれはどういうことなのか。どれだけ寝ていたかは知らないが、死に損ないが健康体になるには一日二日じゃ当然無理というもの。それに、妖怪の身は治りが早いとはいえ、跡形も無く吹き飛んだ右手が時間経過のみで治るものなのか。考えてもわかりはしない。……けどまあ、治っていることを素直に喜んでも別に構わないだろう。

そう思いながら、不意に現れた気配に視線を向ける。

「目が覚めましたか」

「おかげさまで。運んでくれたのは君かい？ 重くなかったかな」

「お気になさらず。腹立たしい程に貴方の体は軽かった」

仏頂面で言う咲夜は、二枚のタオルを机に置き、僕の身体に手をかけた。突然現れたことには驚くだけ無駄ではあるのだが、僕の身体に触れたその手の冷たさに身体が震える。



「何を？」

「身体をお拭きします。そのままでは具合が悪いので、上半身だけでも身体を起こして下さい」

「それくらい自分で……」

自分で出来る。そう言おうとして、身体が思うように動かないことに気が付いた。力が抜けて、身体を起こすことすらままならない。どうも、健康体なのは表面上だけらしい。仕方が無いので咲夜に身体を任せることにする。

「油断させてブスリとかやめてね」

「……………」

背中とベッドの間に手を差し込んでいた咲夜が、僕の言葉にムツとする。「冗談冗談、と苦笑いを返すと、溜め息について身体を密着させてきた。

慣れた様子で僕の上半身を持ち上げる咲夜。瞼を落として身を任せる最中、女性特有の柔らかな感触が僕の身体に当たり、ふわりとした香りが鼻をくすぐった。彼女の銀髪が首をさらりと撫でる。

「ところで」

「？」

別段、身体が密着しても特別な反応を見せない彼女に声をかける。至急距離で僕の顔を見た彼女は、何かに驚いたように目を見開いていた。

「どうかした？」

「……いえ」

ぶいっとそつぽを向く彼女。僕の顔に何かついていたりするのだろうか。もしかすると見るに堪えない傷が顔面に残っていたり……。

「……………」

「何を？」

「いや、不安になった」

僕の言葉に怪訝そうな表情を見せる咲夜。これ以上至近距離で見つめ合うのもあれなので、何でもないと返しておく。彼女は無意識かもしれないが、異性に見つめられては照れてしまう。

「……………では、身体をお拭きします」

「はいはい」

スルスルと着物が肩から落ちていく。不愉快な感触が肌を撫で、着物の内側に自らの皮がこびりついているのに気が付いた。

そう簡単には落ちないだろうなあ、と溜め息をついていると、咲夜が濡れタオルで僕の身体を拭きはじめた。少し熱いくらいのタオルが背中を撫で、何とも言えない気持ち良さに目を細める。

毎日しっかり身体は洗っているものの、あの戦いの後では汗やら血やらで汚れていて当然。他人に身体を拭いてもらうのは少し恥ずかしいような気もするけれど、自分の身体が綺麗になっていくのは気持ち良かった。

と、そこでふとある方法を思い付く。

「思ったんだけど」

「？」

「こっちの方が楽じゃない？」

「!?!?」

ぼんっ、という感じで僕の身体が猫の姿へと切り替わる。この姿ならわざわざ全身を拭かずとも、洗面台程度のスペースとお湯があれば事足りる。

いきなりのことに目を見開いた咲夜だったが、すぐに無表情に戻って赤く染まったタオルを畳み、僕の着物を手に取った。

ちなみにこの着物、どういうわけか身につけた状態で変化を行えば共に消え、逆に脱いだ状態で変化すればそのまま残る。一応意識して変化を行えば、身につけている状態でもその場に残すことは出来るのだけど。今は半裸の状態だったので、変化には巻き込まれずにそのまま残ったみたいだった。

そんなこんなで今の僕は着物の上に乗った猫。咲夜は、着物を僕に巻くようにして抱き上げていた。さながら生まれたばかりの赤子のように、僕は顔と前足だけを出して咲夜の腕に抱えられている。

「……………」

僕を抱き抱えた咲夜は、なぜかどことなくおっかなびっくりとした様子で歩き出していた。どうかしたのか、と聞こうとして、ふと魔理沙の言葉が頭を過ぎる。

『こいつクールな顔して猫苦手なんだ。特にお前みたいな灰色の猫』

「……………」

静かに、しかし決して遅くはない速さで歩いていく咲夜。平静を装ってはいるものの、感情までは装い切れないもの。緊張して張り

詰めたこの感情は、恐らく僕が原因だろう。

だが、僕が原因だったところで何か出来るわけでもなし。きっとこの手の感情は、一時的に取り除けたところで再発するだろう。

参ったなあ、なんて思いながら、けれど咲夜の感情を少しばかり操っておいたりして。僕が傍にいる間はそれを続けるつもりでもあったりして。

「あ」

「何か？」

「……スペルカード」

「パチユリー様がお持ちになっているかと」

なんだ、と固まった身体から力が抜け、ぐだつと咲夜の腕に顎を乗せる。瞬間、微かに震えた咲夜に苦笑いしながら、スペルカードの場所が確認出来たことに安心する。もし『黒札』や『紅札』の行方がしれなくなっていたら、今頃僕は文字通り死に物狂いで幻想郷を探し回っていただろう。

そうならず済んでよかった。そう思いながら、僕はけだるい身体に逆らわずに目を閉じるのだった。

「わしゃわしゃわしゃ……と。気持ちいいですかあ？」

で。どこでどう間違えたのか、僕は小悪魔の手によって全身を弄ばれていた。いや別にいいのだけれど。

僕を湯舟に放り込んだ咲夜は一瞬のうちに姿を消し、代わりにパタパタと飛んできた小悪魔の手にはタオルケットと石鹸らしき何か。何故か嬉々とした面持ちの小悪魔はあっという間に白い泡をその手に纏わせ、文字通りわしゃわしゃと僕の身体を洗っているのである。

「……咲夜はどこに？」

「お洗濯です！」

僕の右前足をフニフニしながら元気に言い切った小悪魔の頭では、羽がせわしなく動いている。あれって動くんだなあ、と至極どうでもいいことを頭の中で考える。

「次はお腹を　あれ？」

若干息が荒い小悪魔が僕の身体を抱き上げ、不意に怪訝そうな顔付きになる。どうかしたのかと小悪魔の視線を辿れば、そこは。

「……ミコトさんって、メス……なんですか？」

「ジロジロ見るな馬鹿」

言いながら尻尾で小悪魔の顔をペチリと叩く。こあっと小さく鳴いた彼女は、おとなしく僕をお湯の中に戻した。身体が半分浸かる程度のお湯はすでに泡だらけ。けれどその泡も少し赤みがかっており、僕の身体がどれだけ血に塗れていたかがわかる。ちなみに、身体を洗うのは今ので三回目である。

「あ、え？　ミコトさんって、お、お」

何やら狼狽している小悪魔を尻目に、僕は前脚で顔を擦る。

まあ、小悪魔の反応も当たり前前といえば当たり前。今まで男だと思っていた相手が、女（猫ではあるが）の姿をしているのだ。

けれどこれには理由がある。別に変化を使ってメスの姿をしているわけでもない。猫の時はこれが純粹な姿。多分、『彼女』の姿がそのまま現れているんじゃないかと僕は考えている。

「面倒だから説明はしないけど、姿がどうであれ僕が男なのには変わらないよ。だから、変に気にしないでいい」

「は、はあ……イマイチ釈然としませんが……」

「しなくていいの。どうせ言ったってわからないんだから」

そうですか……と歯切れの悪い返事を返し、小悪魔はまた僕の身体を洗い始めた。

「では、私はこれで」

「うん。ありがとう」

ベッドに横たわる僕に一礼し、小悪魔は部屋から出ていった。

咲夜が能力を使って洗濯したと思われる着物からは、不思議な香りが漂っていた。石鹸の香りには幾分重く、しかし、これはこ

れで心地好い。

そんなことを考えながら紅い天井を眺めていると、コンコンとノックの音が聞こえてきていた。どうぞ、と一声かけてあげると、ノックの主はゆっくりと扉を開ける。隙間から見えた宝石のような羽を見て、なんだフランかと笑みが零れた。

「……………」

「どうしたの。入っただい」

壁にもたれ掛かるようにして身体を起こし、顔を覗かせているフランに笑いかける。そんな僕を見たフランは、なぜかキョロキョロと辺りを見回してから部屋へと入ってくる。そして、どこかおどおどした様子でベッドへと近寄ってきた。

「あ、あの……………」

「？」

伏し目がちに口を開くフランからは、申し訳なさそうなオーラがひしひしと伝わってくる。どうやら、先の戦いで僕をぼろくそにした事を気にしているようだった。

まあ、確かに燃やされたり手を吹っ飛ばされたりしたが、こうして治っているのだから問題無い。そう伝えてやると、フランは小さく頷いて静かにベッドに腰掛けていた。

僕と顔を合わせようとしない辺り、どう見ても落ち込んでいる。気にするなと言われても無理な話なのはわかるけれども……………これでは、どうにも息苦しい。

そう思った僕はしばらく考えて。

「フランは、ずっと独りだったんだよね」

「……………？ うん」

「実はね、フランとはちょっと違うんだけど……君と同じように、たった独りで過ごしていた奴がいたんだ」

「……私と、同じ?」

「うん。といつても、周りから見れば彼は独りじゃなかったんだけどね。彼に会いに来る人がいなかったわけではないから」

僕が話しはじめると、フランはこの話に興味を持ったのか、軽く身を乗り出した。それを見た僕は、少し笑って話を続ける。

「彼がいたところは、真っ白な四角い部屋だ。その部屋の片隅、綺麗な、それでいて眩しいくらいに真っ白なベッドが、彼の居場所だった」

「白……」

「そう、白。そこで彼は、ただずうっと窓の外を眺めていた」

「……ずつと? 何で?」

「他にすることがなかったからさ。……いや、それ以外のことが、出来なかったから、かな」

怪訝そうに首を傾げるフランにそう返し、僕は軽く天を仰いだ。

そう。この紅い部屋とはまるで違う、白過ぎて目をつぶりたくなるようなあの部屋では、窓から見える外の様子だけが暇つぶしになりえた。切り取られた、ほんの一部分の街の風景。たったそれだけの狭い世界ではあったのだが、それでも、あの部屋の中を眺めているよりかはマシだった。

「なんで、その人はそこにいるの?」

「そこにしかいれなかったのさ。吸血鬼が昼間、外に出られないように……彼もまた、その部屋から出ることが出来なかった。……別に、日の光に当たれないわけじゃあないんだけどね」



そう言って笑った僕の声は、軽く自嘲が混ざっていたようにも思う。

それに気が付く様子も無いフランは、そのまあるい目をぱちりと開いて、僕が再度語り出すのを待っていた。待たすのも悪いので、続きを語るとしよう。

「彼はね、病気だったんだ。胸の中、大事な大事な身体の一部に穴が空いていた。それでも歩くことぐらいは出来たんだろうけど、彼は無力感からベッドを降りなかった。どうせ何をしたって無駄なのだから。そんなことを考えている内に、歩くことすらも億劫になっただろう」

「……なんで？　なんでその人は、そんなことを思っただの？」  
「死ぬからさ」

間髪入れずに答えてやる。フランは瞬きを二、三度繰り返して、その後によろやく僕の言葉を受け入れたようだった。

「彼の身体に空いた穴は、直接命にかかわるような、致命的なものだった。ほおつておいても治りはしないし、治す方法も……まあ、いろいろあつてそれも実行には移せない。彼に残されたのは、ただゆっくりと死んでいくだけの、怠惰な時間だけ」

と、思い込んでいた。本当なら、もつと何か出来ることもあつたのかもしれないが、あの時の荒んだ心では何をしても手にはつかなかっただろう。

「すっかり荒んだ彼を見て、彼の周りの人達はどうかして彼を元気にしようとした。真っ白で飾り気の無い病室に花を置いてみたり、陽気で明るい音楽をかけてみたり。当然、彼の病気を治すためにも動いてくれていた。……フラン。今の君なら、どう思う？」

いきなり質問されたからか、フランは少し驚いたように目を開く。それから、少しだけ悩んで、

「……嬉しい、かな。前までの私だったら、邪魔くさいと思ってたかもけど」

その答えを聞いて、安心する。狂気に犯されさえしなければ、彼女は素直でいい子なんだ。

そう思いながらも僕は、じゃあ、と続ける。

「そんな周りの行動に、彼はどうしたと思う？」  
「……………」

質問の意味がわからない、といった風に首を傾げるフラン。さっき答えた通りじゃないの？ 彼も、多分嬉しかったんじゃないかな。なんて。自信なさ気に呟く彼女の頭に手を乗せる。本当にそうだったなら、どれだけ良かったんだろう。

「……彼はね。それら全てを、拒否したんだ。馬鹿だろう？ 何かに入らなかつたのか、花瓶は割るわ物は投げるわ、止めようとした友人ですら殴るていたらくさ。本当に救えない」

「……………」  
「ただね、僕はそれをものすごく後悔した。自分は何をしているんだ、せつかく元気付けようとしてくれていたのに、ってね。そりゃあ落ち込んだよ？ 後から聞いたけど、本当に今にも死ぬんじゃないかってぐらい暗かったらしい」

「……………え？」

「結局、謝って許してもらったんだけどね。向こうは最初から怒っていなかつたみたい。ただ、それはそれで思うところもあったけ

ど。どれだけ謝ったって、どれだけ、いいよ、なんて言ってくれたって、あんなことをした自分は簡単には許せなかったし」

ちらりとフランを見ると、身を乗り出していたフランは少し俯いていた。どうやら、僕が言いたいことをわかってくれたらしい。

「でもね。結局、落ち込んだままじゃいいことなんてないんだよね。許してくれてるんだから素直になればいいのに、そこで落ち込んだままだったら意味がない。それどころか、無駄な心配までかけることになる」

「……でも、私は」

「『でも』なんて聞きたくない。過ぎたことは気にしない！ ね？」

多少強引な気もするが、勢いに任せてフランに笑いかける。  
そんな僕に、フランは。

「……ん」

小さく、けれどとても嬉しそうに笑ってくれた。

彼女を救った、なんて言うつもりはないけれど、それでも。

「……ありがとう」

この笑顔を見られただけでも、僕が行ったことに意味があると思えるのだから。

95：「主と従者。同じキズ」

「よっ……と」

様々な角度から迫るナイフを、地面を蹴って避けていく。顔面と右足に迫るナイフをそれぞれかわして、

「ッ！」

右手と左足に現れた鋭い痛み、僕は思わず顔をしかめていた。

『そこには無かった』はずのナイフが僕に当たるのは、これで五度目。右頬に一回、あとは四肢に一回ずつだ。

「ナイフ捌きもさることながら、反則だろその能力」

「避けられない訳じゃあないでしょう？ 現に、あの巫女は避けていたわ」

「あんな才能の塊と一緒にしないでほしいな」

片手に五本ずつナイフを携えながら、自然体で宙に浮かぶ相手

十六夜咲夜。

彼女を見上げながら、僕は右手の甲の傷口をぺろりと舐めた。痺れるような痛みが、直に頭を麻痺させる。全身の毛が逆立ち、痛みが僕から逃げ出した。

「……貴方だって人のことは言えないじゃない」

吐き捨てるように言った咲夜は、僕が動き出すよりも早く両手のナイフを投擲。瞬間、僕の周りに現れたナイフのカーテンは、一見脱出不可能のように見えた。

が。

「こんな穴だらけのカーテン、誰も買っちゃあくれないよ」

「!? ぐっ!!」

右手で咲夜の首元をわしづかんだ僕は、そのまま床へとたたき付ける勢いで急降下。僕の右手にナイフを突き刺した咲夜は、決死の表情で僕を睨みつける。

その痛みに顔をしかめながらも、僕はその手を放しはせずに、咲夜の後頭部を地面に叩きつ

「ッ!」

「わあびっくりした」

いきなり飛び起きた咲夜に、とりあえず言葉だけでも驚いておいた。肩で息をしている咲夜に濡れタオルを渡し、座っていた椅子に更に深く腰掛ける。流れる汗をため息と共に拭いた咲夜は、僕を見てからもう一度ため息をついた。

「もう止めた方がいいんじゃない？ 何度も言ったけど、『トラウマ』なんて一日二日で克服出来るものじゃない。もし克服出来たとしたら、それは『トラウマ』とは言わないよ」

言いながら、咲夜に向けていた結界幻術を解除する。同時に彼女の感情を手繰りよせ、『恐怖』へと堕ちていきそうなそれを平時へと繋ぎ止めた。

「……けど、貴方と出会う度にこの調子じゃあ、仕事に支障が出るかもしれないじゃない」

「だからこうして繋いでおけばいいじゃん。出会ってすぐにどうにかなるわけでもな」

「なるから言っているの」  
「……………」

間髪どころか被されて返され、言葉につまる。確かに、あの一件以来彼女の僕に対する反応は過敏なものがある。

どれくらいかと聞かれれば、姿を見れば身体を強張らせ、近付けば息が荒くなり、話し掛ければ過呼吸発症、触るものなら気絶確定……とまあ、完全に彼女にとって僕の存在は害となっているわけである。

戦闘時等、気を張っている時ならばそこまでの反応は見せないが、四六時中緊張しているというのも人間の彼女には無理な話。能力も相まって全体的にハイスペックな咲夜ではあるが、どこまでいこうと人間は人間、そんな生活を続けていれば確実に異常をきたす。

「でもさあ、やっぱりこんなことしなくてもいいんじゃない？ ほんら、僕が紅魔館にいなければいいだけの話だし、能力使えば君の居場所は把握できるわけだし」

「貴方の能力だって、時が止まった状態で移動している私は把握出来ない。もし、貴方がいる場所に用事があつたとしても、貴方がいる限り近付けないんじゃないよ」

「ごもつともである。」

僕の『命を感じ取る程度の能力』は、意識しなくても館全体をぼんやりと把握することが出来る。

しかし、さすがに時間軸の違う世界での命までは感じ切れはしない。二日前に咲夜の命があつた場所は　とか、明日の今頃咲夜の命がある場所は　なんてことは、当たり前だが僕的能力ではわかりはしないのだから。

「でもね……僕の結界幻術の中じゃ、対象のイメージがそのまま世界を形作るんだ。確かに、夢の中で君が僕のイメージを殺すことが出来れば、君のトラウマは解消出来るだろうさ。でも、それはほとんど不可能に近い。君が『勝てない』と思っっている限り、夢の中の僕は君の強さを上回る。逆に言えば、君が『勝てる』と思い込んでいれば、どんな相手にも君は負けやしないだろう。言うなれば、過程がどうであれ、たどり着く結果が既に決まっている世界……結界幻術が創り出す夢の中は、そんな世界なんだ」

夢の中で咲夜が僕に勝つには、僕に対する苦手意識を無くすことが大前提に上げられる。だから、咲夜がやるうとしていたことは完全な外方、つまり裏技である。といつても、先程言ったように成功率は極端に低い。

「まだ止めないわ。まだ十回目じゃない」

「……いいけど、今日はこれでおしまい。夢の中とは言え、一日に二回も三回も死を体験するのはよくない」

本当ならこの方法自体奨められるようなものではないのだけれど。幻術を行使する僕ですら思い付かなかった方法。パンが無いならケーキを食べればいいじゃない（ちょっと違うか）的なこの方法を提案してきたのは咲夜の方からで、その理由は、僕が紅魔館を最初に訪れた時の騒ぎが原因で生まれた『トラウマ』を解消するため。

「……やり過ぎたとは思ってるけどさ。まさかトラウマになるなんて……」

思わず漏れた呟きに、咲夜から微妙に殺気が放たれる。悪かったよ、とパタツとベッドに尻尾を置いてやると、彼女はふいつとそっぽを向きながらも僕の尻尾に手を伸ばす。

咲夜の弱点は、いろんな意味で僕となっている。

「……トラウマが無ければもっと触れるのに」

「急に子供っぽくなったね」

「……私だって常に完璧ではられないの。息抜きしたい時に邪魔があるのは、誰だって嫌でしょう？」

思わぬ角度からこぼれ落ちる、彼女の弱音。

普段は完璧と言わざるを得ない立ち振る舞いを見せる彼女ではあるが、僕と二人きりになると、たまにこうしてポロリと弱音のよなものを吐くことがある。それが僕に気を許してくれているのか、はたまたトラウマのせいなのかはわからない。

ただ、弱音を吐くことが全てにおいてマイナスになるわけではな



い。むしろ、彼女のような人間にとってはプラスに働くことの方が  
多いように感じられる。

そんなわけで、僕は尻尾を触られながら、咲夜の言葉をぽつりぽ  
つりと受け止めているのだった。

「寝ちゃった、か」

静かになったとおもいきや、聞こえてきたのは規則正しい寝息の  
音だった。

ちらりと横目で見て見れば、そこには安らかな表情で眠る咲夜の  
姿。

実は、こうして彼女が眠っている姿というのは極めて貴重なシー  
ンだったりする。

本来時間を止めた中で睡眠を取る彼女は、端から見れば不眠不休  
で働いているようにしか見えない。睡眠どころか休憩していること  
すら滅多に見られないのだから、無防備に眠っている彼女なんて  
ものはレア中のレアである。カメラがあればとりあえず一枚撮って  
いるところ。

閑話休題。

さて、そんな彼女が何故こんなにも無防備に眠っているのか。それは一重に、僕の存在が原因である。

「咲夜？ ……あら、いたの」

「どうも。たった今眠ったところ」

「……そう。早く立ち直って貰わないとね。そのための休暇なのだから」

ふう、と小さく溜息をついたのは、この館の主であるレミリアだった。眠っている咲夜を一瞥した彼女は、ふわりと椅子に座り込む。

「それにしても……咲夜がこんな風になるなんて」

「緊張してる時は割と大丈夫らしいんだけどね。心の準備が出来てなきゃ、前みたいになるみたい」

「……あの時は本当に驚いたわ。あんな咲夜、初めて見たもの」

レミリアの言葉に、僕は頭を掻きながら苦笑する。

異変収束後、初めて目覚めた日の翌日。僕は何気なくレミリアの元を訪れていた。

当然、従者としてその場にいた咲夜だったが、僕の姿を見た途端に彼女の様子がおかしくなりだした。

どうかしたの、と声をかければ彼女は怯えるように頭を抱え、隣にいるレミリアの声も右から左。完全に我を失っている咲夜に、僕は小さく首を傾げていた。

多少の感情の揺らぎこそあれ、昨日の彼女は普通に僕と接してい

た。それが何故、今日になってここまで酷く感情が乱れているのか。そう思いながらも、とりあえずは落ち着かせようと感情を流し込もうと彼女の身体に触れた瞬間、糸が切れたかのようにパタリと倒れてしまった、というわけである。

一部始終を見ていたレミリアは、その後しばらく僕に疑いの目を向けていた。まあ、目が覚めた咲夜から事情を聞いた後からは、またこうして普通に話すようになったのだけだ。

「もう一週間も経つのに……貴方の能力で何とか出来ないの？」

「僕が咲夜の感情を操っている内は大丈夫。けれど、根本からとなると、ね」

未だ僕の尻尾を握って離さない咲夜の手に、もう片方の尻尾をクルクルと巻き付けながら言う。

「僕的能力だって、感情ならなんだって完璧に操れるわけじゃあないんだ。しかも、今回は原因が他にもない僕にあるから……治そうにも、咲夜の方が無意識に僕を拒否してしまう」

普通のトラウマなら、もしかしたら治すことは可能かもしれない。だがそれでも『もしかしたら』の話だ。

咲夜のトラウマの原因は僕。行き過ぎなまでに刷り込まれた『恐怖』の感情は、感情を操る僕ですら持て余す程の激情。無責任かもしれないが、こればかりは本人が何とかするしかない。

「……まあいいわ。これから貴方がここに来る時は、先に連絡をよこしなさい。その日、もしくはそこから何日か……咲夜には仕事を休ませるから」

「そうしてくれると助かるよ。本人が望んでるとは言え、それで身体を壊したら元も子も無いから」

タン、と椅子から降りたレミリアは、眠り姫と化している従者へと視線を向ける。しかし、それも長くは続かず、やがて背を向けて部屋から出ていこうとして。

「そういえば、貴方」

後ろ髪を引かれたように立ち止まるレミリア。

背中の羽が小さく動く。咲夜に能力を集中させているために、背を向けているレミリアの感情は全くと言っていいほどにわからない。返事をせずに、続く言葉を待ち続ける僕。少しだけ長い沈黙に、何かしたかと不安になりかけ、

「……いいえ、何でもないわ。咲夜をよろしくね」

そう言った彼女は、ドアノブに手をかけて、今度こそ部屋から出ていった。

「……？」

残された僕は、そんなレミリアに対して小さく首を傾げてみる。聞きたいことがあるなら聞けばいいのに。

そんなことを考えながら、しばらく目を覚ましそうにない咲夜の頭を軽く撫でてみる。とりあえずは、彼女が目覚めるまでここにいることにしよう。尻尾掴まれてるし。

「レミイ」

「パチエ。珍しいわね」

「彼に用があつて。こゝに頼もうかとも思ったけど……？　どうかしたの？」

仏頂面な魔法使いが、すこしだけ表情を変えてそう聞いてくる。

そんなに、今の私は変なのだろうか。

……いいや。

「……パチエ。彼は、何者なのかしら」

異変後から抱いていた疑問を、ここで初めて打ち明ける。

初対面の時からおかしいとは思っていた。

ただの妖獣にしては強大過ぎる妖気はまだいい。

やけに人間くさく、妖怪にしてはどこか抜けているような印象も

ある。それもいい。

だが。

「……初めてみたわ。『運命が二つ、同時に並んでいる』生き物なんて」

「……！」

一瞬、パチエの瞳が見開かれる。紫色の瞳がこちらを貫くように見据え、それは真かと聞いてくる。

私だって信じられない。

普通、『運命』というものはひとつしか存在しない。

いずれ辿り着く結末。それに至る道を『運命』と呼べば、結末そのものを『運命』と呼びもする。

しかして、どの『運命』を通ろうと、いかなる『運命』を突き進もうと、辿り着く『運命』はただひとつ。

だが、『運命』はたったひとつだけのものではない。

辿り着く結末は、そこに辿り着くまでの道筋で幾重にも枝分かれしていく。

あそこでこうしていれば。

ここでやめておけば。

そんな、過去を省みる言葉の数だけ、選ばれなかった結末としての『運命』が存在する。

結果として辿り着ける『運命』はひとつだけ。しかし、選ばれなかった『運命』も、光を見なかっただけで星の数程存在する。

「ただ、それらは並んで存在することは出来ない」

例えば、道が二つあったとする。

右か、左か。

右の道を進む『運命』の道に行くか、左という『運命』の道に行くか。

どちらかを選んでしまえば、どちらかの『運命』は、選ばれなかった『運命』として闇へと落ちる。

「右を行ってから、戻って左へ行ったらどうなるのかしら。それは、二つの『運命』を選択したと言えない？」

「そうになると、また新しい『運命』の選択肢が現れるだけよ。『右を進み、しかし戻って左を進む運命』というふうだね。どう行動しても『右を進む運命』と、『左を進む運命』とは、並んで存在は出来ないでしょう？ 私が言いたいのは、そういうこと。もっと簡単に、もっと究極的に言うなら……」

右の道に行く『運命』が選ばれたとしよう。その先に待っていたのは、『死』という『運命』だった。

「ここで問題。右の道を行き、死の運命を選び取った存在。ここから彼が生き残るにはどうすればいいかしら？」

「……………」

パチエが黙り込む。仕方ない話だ。私がした質問は、矛盾を通り越して呆れてしまうようなものなのだから。

「生と死は対極。生きながら死ぬことは出来ないように、『生の運命』と『死の運命』は同時には存在出来ない。そして、この関係は全ての『運命』にも言える……だと、いうのに」

そう。だというのに。

「彼は……ミコトは、並び立つはずの無い『運命』を、二つ抱えている。『右を行きながら』『左を行き』『生きながら』『死んでいる』『……見てるこっちが混乱しそうなくらい、二つの運命が同時

に存在しているのよ」

そしてその原因はおそらく、異変の最後に現れたあの女。力こそあまり感じられず、直接手を下せば簡単に捻り潰せたであろう、あの女。

だが。

「レミイ。顔色が悪いわ」

「……そうかしら。色々あって、疲れてるのかもね」

軽く頭を振って、甦りかけた屈辱から逃げ出した。

これ以上彼を詮索するのは、やめておいた方がいいのかもしれない。

考えれば考える程に得体が知れず、本人には記憶が無いのかそんな素振りもみせやしない。

……これでは、私が勝手に振り回されているようなものではないか。

「少し休むわ。彼に用があるなら、この部屋の中だから」

返事は聞かず、ふらつきそうになりながらその場を後にする。

なんとなく、咲夜の気持ちがわかるわ。これが、トラウマってやつなのかも、ね。





96：「背中合わせの敵対心」

「ほら。次はあそこ」

「はいはい」

「返事は一回」

「はい」

後ろからの声に急かされながら、綺麗な骨董品を不慣れな手つきで拭いていく。

最後のひとつ、小さな花瓶的な容器を拭き終えたところで振り返ると、そこには満足げに頷く咲夜の姿があった。

「不思議なものね。普段とはまるで違う服なのに、案外様になってるわ」

「そうかなあ……。見た目の割には動き易いのは認めるけど」

「貴方は元々細身だからね。……それでも、私のサイズでも大丈夫とは恐れ入るわ」

ペタペタとウエストの辺りを触りながら言う咲夜。

僕はそれに苦笑しながら、白い手袋を履いた手で、肩についた埃を払う。ついでに少し乱れた衿を直し、シワひとつない『執事服』を自分で眺める。

念のためもう一度。『執事服』である。ちなみに眼鏡はかけていない。

「でもなんで執事服を？ 咲夜ってメイドじゃあ」

「……お嬢様の意向よ」

「ああ、もういいや。深くは聞かない」

「そうして頂戴」

遠い目をして顔を背ける彼女を見て、僕は早々に話を切り上げた。彼女とて根は人間。吸血鬼のお嬢様を相手取るにはそれなりの苦勞もあるろう。

「でも……」

不意にしゃがみ込み、今度は僕のウエストをペタペタと触る咲夜。

「いくらなんでも細すぎじゃあないかしら」

「それは遠回しに自分の身体をアピールしているを見た」

「この執事服……ラインを見せるためにウエストは少し詰めてあった気がするんだけど……」

「まあ胸は余裕あるけどね」

「セクハラね」

「そこは反応するのか」

しゃがみ込んだままジト目で見上げてくる咲夜。だって本当のことだからしょうがないじゃないか。

「身長もあまり変わらないし……」

立ち上がり、クルリと回り込んで背中を合わせてくる。確かに、咲夜の身長は女性にしては高い。僕より数センチ低い程度のものだ。

「見た目だけなら充分、執事の雰囲気出てるわね」

「耳と尻尾隠してるしね」

チリン、と無意味に耳飾りを鳴らしてみる。別に変化と共に消す

ことも出来なくは無いが、身嗜みとして残しておいてあるのだ。普段とは違う位置にある為に、多少違和感はあるけれど。

「にしても。レミリ……いいや、お嬢様も、なかなか思い切った事を思い付くものだ」

「確かにね。私も最初は驚いたわ」

歩き出した僕に、足音無く横に並ぶ咲夜。

昨日までは思いもなかった状況に一人苦笑しながら、こうなったいきさつを思い返す。

それはつい昨日の話。

咲夜からの強い要望で、連日紅魔館を訪れていた僕と、その咲夜を呼び出したお嬢様は、まるでその場で思い付いたかのようにポンと手を叩き

「貴方、ここで働きなさい」

そう言った。

僕と咲夜がポカンとしているのを知ってか知らずか、いいや、先ず目に入っていないなかったのだろう。そうじゃなきゃ、あんなに自信

満々に振る舞えはしない。

「いちいちここに来るのも面倒でしょうし、咲夜も彼と常に一緒に行動していればいつか慣れるかもしれない。一石二鳥じゃない」

「え？ ミイここで働くの？」

どや顔を全面に押し出してくるレミリアの横で、目を見開いて聞いてくるフラン。ちなみにミイとは僕のことである。

「どうかしら？ 悪い話ではないでしょう？」

「そうしなよ！ でもお姉様には咲夜がいるんだから、ミイは私のね？」

「いいわよ？ せっかく出歩けるようになったんだもの。フランにも従者の一人くらい付けてあげなきゃね」

当事者であるはずの僕と咲夜の頭が回転し始めた頃には時既に遅し。

楽しそうに話す目の前の姉妹に、今更口を挟むことなんて出来るはずも無く。

「かくして、紅魔館に一匹の猫執事が追加されましたぞ」

「いきなりどうしたのよ」

「咲夜と過ごすのも悪くは無いかなあって」

軽口を叩き、少しだけ歩く速度を落とす。

普通なら、横に並んでいたはずの咲夜が前に出るはずだが、不意にその姿が見えなくなった。つまり、咲夜は僕の背後で立ち止まっている。

振り返りはせずに、両手をポケットに突っ込んで立ち止まる。

「どうしたのかな。そんな怖い顔したりして」

返事は無い。ただ、ピリピリとした彼女特有の殺気が、背中をチクチクと刺してくる。

そのチクチクの中に、ひとつだけ『本物』が混じっている辺り、なんとも言えない気分になる。

「先に言っておくわ」

服を貫かない程度に押し付けられたナイフ。そのまま突き出せば心臓を貫くであろう腕を、ピクリとも動かさずに淡々と彼女は告げた。

「私は、貴方を信頼しているわけじゃない。むしろ、今ここでこの腕を突き出しても、私はなんら構わないし、その後には気にもしない」

それは、事実上の敵対。

確かに、相対した覚えはあれど、和解した覚えはない。

爪とナイフが互いを削り合うことが当たり前。隣り合い、並んで歩くことなどありえない。

だからこそ、こちらでも静かに妖気を漂わせながら。

「どうぞ、好きなようにしてくださいな」

背中を向けたまま、糸を摘むようにしてクイツと手首を返す。

「ツ！？」

「……『今の』君を突き落とすのは簡単なんだから」

突き刺してくるような殺気が消え、ナイフが音を立てて床に落ちたところで振り返る。

膝をつき、辛うじて正気を保つ咲夜を、わざと意識して見下ろした。当然、彼女は憎らしげに睨み返してくる。

それを見た僕は、軽く息を吐いて踵を返した。

「ま、思ったよりは良くなってらんじゃない？　そんだけ睨めりや上等だ」

ぱっ、と。

咲夜に見えるように手を開く。

「別に僕は、君にどう思われようが気にしないよ。むしろ、隙あらば殺しにくるくらいの意気の方がいいかもね。逆にトラウマを植え付けてやる、みたいなさ」

「……別に、そこまでは」

「なんにしろ、しばらくは一緒に行動するんだ。これをチャンスと捉えるか、苦痛と捉えるかは君次第」

てくてくと。

見た目無警戒にも見えるように歩いていく。

腰が抜けているのか、もしくは僕の言葉の意味を考えているのか、咲夜は座り込んだまま追いかけてはこなかった。

そんな彼女に、僕は手を振りながら、

「君と過ごすのも、悪くは無いと思ってるけどね、僕は」

まるで無警戒な後ろ姿に、張り詰めていた心がしなりとよれた。どうしてこう、彼は人のペースを乱すのが上手いのだろう。

そんなことを思いながら落ちたナイフを拾い上げ、スカートの下、太股のホルダーにしまい込む。

もう、彼の後ろ姿は大分小さくなっていった。

「冗談なんかじゃ、なかったのに」

あの時、この左手を突き出させていれば。

確かに憎らしいと感じている彼を、この手で仕留めることが出来たかもしれないのに。

彼は抵抗していない。ただ、ほんの僅かに妖気を漂わせ、思わせぶりに口を開いただけ。

あの程度の妖気で萎縮する程、やわな心は持ち合わせていない。へし折られるようなプライドも、遙か昔の紅い月に根こそぎ奪い取られてしまっている。



なら、何故？

口は動いた。

けれど、唇は震えていた。

ナイフを突き付けた。

けれど、腕はそこで固まってしまった。

……膝を、ついていた。

何も、出来はしなかった。

「……悔しい」

何が、とは言えない。

ただ、とりあえず悔しい。

「……見てなさい」

立ち上がり、汗の滲んだ手を乾かすようにしてスカートを叩く。ホコリなんてついていかなかったが、まあ、気分というやつだ。時を止め、なぜかこちらを向いていた彼の目の前に移動する。

「きたきた。さ、次は何をするのかな」

先の出来事など、もう忘れたかのような笑顔を見せる彼。それに  
少なからず驚いてしまっている私に、彼は意地の悪そうな、ニヤリ  
とした笑いを私に見せて　私の感情を読み取ったのだろう　こ  
う、言うのだった。

「言っただろう？　君と過ごす時間も悪くない、ってさ」

97：「猫執事の日がな一日：1」

「咲夜って買い出しもするんだ」

「ええ。当たり前じゃない」

片手に藁の籠を持ちながら、適当な野菜やらを選んでそれをほり込む。八百屋のおじさんの反応からして、咲夜は割と頻繁に人里に顔を出していることが予想出来た。

今まで出会わなかったのが少し不思議だとは思ったが……よくよく考えて見れば、僕自身、あまり人里をうろつくことが少ない。普段行動する範囲が広すぎて、ひとつの場所にゆっくりすることは割と稀なのだ。

「そういえば、咲夜だって普通の人間だもんね。普通の食料だって必要か」

「ええ。でも、お嬢様の気まぐれで急な宴が開かれることもあるから……その時は皆嗜む程度には食べるわよ」

「そりゃまあ妖怪でも物は食べるからねえ」

ひん曲がった胡瓜をしげしげと見つめている咲夜に苦笑しながら返す。

そういえば、料理には困らないのだろうか。吸血鬼はもともと日本の幻想ではない。と、すれば、日本の料理には不慣れなのではないだろうか。

そう思って聞いて見ると、咲夜はクスリと横目で笑い、

「何言ってるの。日本料理ならここに来てすぐに大体は覚えたわよ？ お嬢様に関しては納豆だって大好きなんだから」

「……なんかいろいろとびっくり」

さすがハイスペック従者。咲夜にもびっくりだがその主にもまたびっくりである。というか、吸血鬼は豆も苦手だったのでは……。腐ってるから関係ないのか。

「おや、ミコト……だよ、な？」

「慧音。真正正銘、僕の名前はミコトですが」

「そう、だな。うん、いつもと格好が違うから戸惑ったが……その、なんだ。灰色以外の服も着るんだな」

「……別に灰色しか身につけられないわけじゃ」

後ろから声をかけられ振り向いてみれば、そこには若干訝しげな顔の慧音の姿。まあ、確かにいつもの僕の格好を知っている人から見れば、今の僕の姿は異様かもしれない。万年着物だった奴がいきなり服を変えて現れたのだから、妥当な反応か。

「おや、後ろにいるのは……」

「？ 咲夜を知ってるの？」

「別段親しい訳でもないがな。一応、顔は知っている」

そう言う慧音は、どこか気を張っているように見える。里を守る立場として、まだ咲夜を含めた紅魔館組に気を許してはいないのだろう。

現に二度異変の立役者となっているし、一度は目的の副産物的なものとはいえ、紅い霧によって人里に住む人間に被害を与えるところだったのだ。慧音の気持ちも、わからないこともない。

けれど……と、思ったところで、不意に慧音の表情が緩んだ。クスリと口元を隠し、逆の手でトンと僕の胸を叩く。

「何を難しい顔をしている。……大丈夫さ、わかっているよ」

言いながら僕の目を真っ直ぐに見つめてくる慧音。  
なんだか気恥ずかしくなって顔を背けると、丁度咲夜が野菜を選  
び終わったところだった。

「ほら、何してるの？ 次いくわよ」

「うん。じゃあ慧音、また」

「ああ、身体には気をつけてな」

手を振ってくれた慧音に背を向けて、先を歩いている咲夜に小走  
りで並ぶ。

そこで何気なく咲夜の顔に目を向けると、彼女も丁度こちらを向  
いていた。当然、目が合うことになる。

少しだけ歩くスピードが遅くなり、しかし視線はそのままぶつか  
り合っている。何か言いたいことがあるのだろうか、と思ったとこ  
ろで、ようやく彼女の口が開いていた。

「貴方は、ここによくくるのかしら」

「ここって、人里にかい？」

よく来るといふ程ではないけれど……と、僕が答えに詰まってい  
ると、ファイと咲夜は顔を背けていた。

すぐに答えなければいけなかったのか、それとも、途中で興味を  
無くしてしまったのか。彼女は普段通りの早足に戻り、少しずつ僕  
を置いていこうとする。

「何さ、何が聞きたかったの」

「別になんでもないわ。忘れてくれて結構」

「そう言われてもねえ……」

トン、と地面を一度蹴り、スタンと咲夜の隣に着地。咲夜の表情は気持ち硬くなっていて、それと同じく感情も硬化している。何か、気に入らないことでもあったのだろうか。そう聞こうかとも思ったが、焼け石に水かもしれないので止めておくことにする。本当に聞きたいことなら、いずれもう一度聞いてくるんだろっし。そんなふう楽観的に考えながら、僕は咲夜の買い物に付き合っただった。

……ちなみに僕の役目は当然、荷物持ちだった。

「お帰りなさい、咲夜さん、ミコトさん」  
「お疲れ様、美鈴。後でお茶でも持っていくよ」  
「お気になさらず……と言いたいところですが、喜んで頂きます」  
「……………」

美鈴の言葉に小さく溜め息をつく咲夜。あまり甘やかさないで、と視線で訴えかけてくるが、わざとらしく空を仰いで気付かない振

りをしておいた。一日中外にいるんだし、それくらいはいいじゃないかと思っただけどねえ。

「じゃあ、また後でね」

あまりくどいと咲夜をかわすのも難しくなってくるので、今はこれだけ。美鈴もそんな僕の考えを悟ったのか、返事はせずに頭だけを下げてる。

小さなケーキくらいは持って行ってあげようか……なんて、隣の厳しいメイド長に気取られないように考える僕だった。

「……まさか、本当に来るとは思いませんでした」

「嘘だと思ってた？」

「いいえ。でも、咲夜さんが許さないだろうなあと」

「……美鈴、結構大変なんだね」

しばらくしてから、紅茶とケーキを持って美鈴の元へと顔を出す。門に寄り掛かって目をつぶっていた美鈴だったが、僕の気配に気が付くとおもむろに顔を上げていた。

まだこの館の上下関係は把握しきれしていないけれど、今の会話でとりあえず美鈴の立ち位置は何と無く理解した気分。

「美鈴も大変だね。門番という役柄上、仕方ないとはいえ……一日中外で立つてなきゃいけないなんて」

「まあ、私に出来ることといったら、これぐらいしかありませんから。それに、身体の頑丈さには自信ありますし」

えへへ、と小さく笑う美鈴。僕はそんな美鈴に密かに感動した。僕も大概妖怪らしくないが、彼女も全く負けてないじゃないか。

「暖かい……。ありがたいですねえ」

湯気が立つカップを傾けながら、シミジミと呟く彼女。そんな彼女を、ただ隣にいて眺める僕。

美鈴はそんな僕を見て、不思議そうに首を傾げる。きっと、手に持ったまま紅茶に口を付けないことに疑問を覚えたのだろう。素直に猫舌だからと伝えると、彼女はクスリと笑っていた。

「じゃあ、その紅茶が飲める位になるまで、お話でもしましょうか」「話、かい？」

「はい。お茶を持ってきてくれたお礼……と言ってはなんですけど。聞きたいことがあれば、どうぞ。答えられる範囲でお答えします」

ニッコリと笑う美鈴。意地が悪いのか、それともただ何と無くきっかけにただけなのか。この冷えた空気の中じゃあ、

「ひとつしか答える気、ないでしょ？」

「……ばれました？」



あちゃあ、と舌を出す美鈴。やっぱり、意地悪の方だったのか。

「これでも雇われの身ですからね。話せないことも当然あります」  
「雇われの身、ねえ」

「ハイ。もし、私の一言でお嬢様や館の皆さんに迷惑がかかったら、大変ですから」

「ふうん……。じゃあ、館に迷惑がかからない質問なら、いいわけだ」

「え？ え、ええ。まあ」

僕の言葉に、予想外だと言わんばかりの反応をする美鈴。その反応を見て、してやったりと舌を出したのは僕の方。

「なら、美鈴の事を知りたいな」

「はえ？ ……わ、私のこと、ですか？」

「うん。ダメ？」

「いや、ダメなんかじゃないです、けど」

急に挙動不審になる美鈴。なんでもいいけど、あんまり動くと紅茶が零れると思う。

でも、何となく反応が面白いので。

「あ、そっか」

「？」

紅茶を零さないように気をつけながら、美鈴の足元に跪く。

「え、え？」

意識的に下から見上げ、困惑する彼女の手を優しく手の平に乗せ

た。そして、その冷たさに少しだけ驚きながらも、指先に息を吹き掛けながら、

「お嬢様のことを知りたいと思う……そのことに、理由はありますか？」

「あ、え、その」

おお、戸惑ってる戸惑ってる。

「無理だと言っのなら諦めます。ただ、ほんの少しだけでもいい。貴女のことを知り、少しでも近付いて。……少しでも、貴女の為に尽くしたい」

「こ、困りますよう……」

「この身は貴女に仕える為だけにある……困らせて申し訳ありません……しかし」

「……随分と楽しそうなことをしてるじゃない」

「この想いは偽ることができ危なっ!？」

「あ痛あっ!？」

殺気を感じ、体勢そのまま瞬間的に顔をのけ反らせる。目の前を通り過ぎていった銀色は、数本灰色を散らしていった。

「なかなか戻ってこないと思ったら……貴方は何をしているの」

「酷いなあ。従順な執事の練習をしてただけなのに」

「いろいろと突っ込みどころはあるけれど、とりあえず仕える相手が違っただけは言っておくわ。ほら、早く来なさい。妹様が待ってるわよ」

「あや、フランが?」

それはまずいと立ち上がり、すっかり冷めた紅茶を煽り飲み。ナイフを避けながらも紅茶だけは零さないという無駄な努力に自己満足し、咲夜について門をくぐる。

「また来るよ、美鈴。身体壊さないようにね」

「は、はあ……」

呆気にとられている美鈴に手を振り、小走りで館の中へと入る。

……美鈴の額に刺さっていたナイフが気になって仕方なかったが、あれもここの日常かと無理矢理納得することにした。

97・・・「猫執事の日がな一日」・・・「後書き」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1221n/>

---

東方灰猫円舞曲

2011年12月1日23時55分発行